

無限ルーパー

泥人形

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ループ物ですきやつほい。

※にわか知識故注意※

マシユマロ狂人様よりイラストをいただきました。

主人公の癖してイケメンですね……！

笹子様よりイラストをいただきました。

主人公サーヴァント三人娘！ 可愛い……可愛いすぎるな……

笹子様よりイラストもう一枚いただきました。

三人娘に加えて上に主人公がいる……！

※表紙絵を柴猫侍様よりいただきましたので設定しました。

読了報告とか適当なところにリンク貼るとかしたら見れるかもかもしれません。

# 目次

冬木@無限ループ	1
竜と贗作@無限ループ	35
偉大なるローマ@無限ループ	69
海を渡る海賊@無限ループ	105
魔霧に沈んだ街@無限ループ	142
狂ったアメリカ&ケルト@無限ループ	180
別つ円卓@無限ループ	245
眠らない魔獣戦線@無限ループ	328
神々との訣別@無限ループ	399
旅の終わり／始まり@無限ループ	556
無限ループ@最終ループ	706
After Story@たった一夜の恩返し	794

## 冬木@無限ループ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
い、一体何が……

意味が分からなすぎるが、黙っていることもできず、一先ず適当に歩き出してみた。

瓦礫を崩しながら進み続ければ、遠くに人影が見える。

思わずやったあ人だあ！ と勇みよく駆けだした瞬間、視界は真っ赤な空を映した。

下には首のない人の身体。

い、一体なにが——？

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

……何？ さすがに急展開すぎるだろ。

どうやらリススタートらしい、意味わかんねえ。

けどまあ、こうなった以上進むしかなさそうだし……

今度は背後に注意しながら進むか……とノソノソ姿勢を低くしながら歩けば不意に耳朶を打つたのは足音だった。

パッと振り向くと同時に振り下ろされたのは少々煤けた、しかし白の何か——いや、恐らくは、剣。

そしてそれを持つのはやたら肉も皮もなにもない何か、学校の理科室とかで見たことのある、模型のような何か。

というか動く骨だった。

は？ 動く骨って何？

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

骸骨が動くとか安いホラー映画かよ。普通に怖いわ。

でもあの人影は気になるし……

仕方ないので警戒しながらコソコソ歩き始めればすぐに人影は見ええた。

ここで骨え！ とジャンプし振り向けば勢いよく剣を振る骨の姿。完璧すぎるタイミングだ。思わず自画自賛しながらフツと笑い着地。

同時に鋭い痛みが胸を貫いた。

気が付いたら人氣の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

二匹目は卑怯だと思っただけですけど！

さつきと同じタイミングでジャンプ、そして流れるように横に回転。

シュバツ！ と剣を突き出す骨を見ながらフツと笑う。

二度も同じ方法で俺がやられるとでも……？

バーカ！ と煽つたは良いが倒す方法が無いのに気付いた。

ど、どうすれば……

迷っている間に首は飛んだ。

気が付いたら人氣の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

今思い出したんだけど俺って魔術師じゃん。

最近とか魔法撃ち出せるようになったしこれで倒せるんじゃない？

気合入れて魔力的な何かをめっちゃ撃つ。

骨は無傷だった。ざけんな、死ね。

気が付いたら人氣の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

やっぱ人間、最終的には物理に頼るのが正解なのだと思う。

てなわけで手頃な木材と石ころを発見。片手に木材、ポツケに石と  
いう雑装備。

だがこれで勝つ。

骨の鋭い一撃を避けて頭を叩けば。鈍い音と共に木材と骨の頭が  
砕けた。

半ばから折れていく木材を投げ捨て、懐に潜ませていた石をすぐさま  
投擲するがしかし全て明後日の方向へ飛んで行った。

うーん、ビックリするくらいのノーコン。

骨は無慈悲に頭を貫いた。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。実績のある木材くんで倒していきましようねくと木材を二つ拾う。何とか乗り越えた。

連続で頭を砕いて見せた俺が流石すぎる。

原始時代に還った気分だった。

取りあえずさつきから気になっていた人影へと助けを求めようと駆けだした。

瓦礫を乗り越えやつとのことで辿り着いたそこにいたのは、紫の長髪に金の瞳を持つ美しい女性だった。

あ、あのー……と、声をかけることは、しかし叶わない。は？ 何か石になっていくんですけど——!?

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

まさかの石化ルート。あんなん卑怯じゃん……

ただああいうのは目を見るとアウトなんだって相場は決まってるのだ。

手早く骨を潰して先手必勝、全力で投石してからグツと姿勢を下げて潜り込む。

万が一にでも目をつむって一気に近づいてえ……!?

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

槍つぽいのでグサツと一撃であった。

正直目瞑ってたから得物が何だったのかははっきりとしないが、まあ槍的なサムシングだった。

流石に目を閉じたまま勝てる相手ではなかったか……

今度は目を合わせずに戦ってみようか。

骨を砕いて石をシューーとッ！ そのまま目は合わせず退治すれば女性は怪訝そうに人の子……？ と呟いたが、何でも良いか、と頭を振るう。

どちらにせよ殺すのだ——これからお前を殺す相手の名くらいは、覚えていくとよい。

我が名はメドウーサ！　さらばだ生き残った人の子よ！  
掛け声と共に鎖が飛び出しあちこちに突き刺さる。

それはさながら決闘場、あるいは牢獄にすら見える。

つーかどっから出てきてんだよそれ……

文句を吐き棄てながらオラアツと木材を振るうも槍でサクツ、俺の身体もサクツであった。無念。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

どう足掻いてもあれは無理じゃない？　スペックに差がありすぎるだろ。

だけど、ううん、メドウーサか……

まあ聞いたことくらいはある、別に特段詳しいという訳でもないが、それでも多少くらいは知っている。

あれでしょ？　鏡の盾で石化光線反射されて石になったやつ。

……ちよつと試してみるか。

慣れた手つきで骨を砕き、その人へるぶみーと叫びながらスマホの内カメラを起動しながら画面を前に押し出した。

瞬間、想定通り黄金の目が閃き——俺の腕ごと石化してスマホは死んだ。

す、スマホおおおおお！

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

スマホのカメラでは鏡の代用にはならないようだ。

でも俺、鏡なんて持ってないよお……

自分の女子力の無さを恨んだ瞬間であった。

いや仮に鏡があったとしてもどうにかできるという確証はないのだが。

まあ今度は画面を真っ暗にしてそれを見せてみよう。

カメラよりは幾らか鏡的性質があるだろう。

素早く骨を砕き、焼き増しのようにならぬ人へルプミーと叫びながら画面を押し出した。

予定調和のように黄金の目は怪しく光りながら俺を見て——そして。

数秒の沈黙が訪れた。

恐る恐る顔を上げればそこにいたのは石化した先ほどの女性。

——ふ、ふふふふ、はーはっはっはっはっは！　ざまあみやがれ——え

？

瞬間鋭い痛みが胸を貫いた。

骨エ……

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

骨エ……マジ骨エ……

取りあえず調子に乗ったら死ぬということだけは良く分かった。

次は慢心せずにいくぜ！

骨を砕き、声を懸けながらスマホどん！　横目で石と化した女——

メドゥーサを見ながら両手で木材を振るう。

伝わってくるのは硬質な何かを弾き砕く感触。

か、完璧……！　流石俺……ッ！

バクバクと鳴る心臓を落ち着かせるように自画自賛して、それからもう一度歩き出す。

にしてもやたら瓦礫が多いし、あちこち燃えてるのは何なんだ？

と火を避けながら暫く進めば複数の人影が目に入った。

ひ、人——！　助けて——！　と叫びたいところだったがグツと我慢。

もう騙されねえぜと木材を振りかぶりながら先制決めようとしたら大盾で防がれそのままゴシヤツ！　とされた。

驚いた様に俺の名前を叫ぶ声を聴きながら俺の頭は砕けた。

……マシユ？

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。



敵だと思ったら完全に味方だった件について。

人を疑いすぎるのは良くない、はっかり分かんかね

それにしても破廉恥な格好をしていましたねえ……大丈夫？ 防御力低すぎない？

お兄さんは心配ですよ。

まあでもそれはそれとして知り合いに遭えたのはラッキーだ、とテンションを上げながらスキップして行ったら骨に殺された。

完全に忘れてました……。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

段々骨が可愛く見えてきた。君たちもろすぎい！

というか明らか俺の力が最初に比べて強くなっている気がする。

もしかしたら倒せば倒す程経験値的な何かがたまっているのではなからうか。

レベルが上がっているような気分だ。

気分はドラゴンなクエストの勇者パーティーである。

メラ！ ヒヤド！ バギ！ イオ！

出せる魔法（魔術？）はそれ以下ですけどね……

現代的にスマホを活用して石化眼光反射である。

もう完全に攻略法を掴んでしまった…… すまんな紫モブよ……

ヘイ！ マシユー！ と叫びながらジャンピング。

瞬間視界がブラックアウトした。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

いや……これあれですね。

無駄に飛び跳ねて大きな声を出した結果遠くにいた狙撃手（恐らく骨）に射抜かれましたね。

頭にグサツとなったに違いない。

人の命とはかくも儚きものよ……と骨を砕きながら呟く。

いやー一対一なら負けないのだけは助かりますね！

メドゥーサもスマホで完封できるし現代科学様様って感じ。

さて、と。派手に行くとか殺られちゃうし、今度はこっそりと慎重に……!?

コソコソと近づいたら警戒レベルMaxのマシユに殴られました  
^^  
遺憾の死である。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

実はマシユが一番の鬼門なのではないかと思えてきた。

あいつのキルスコアかなり高い、骨に肉薄しつつあるレベル。

知り合いに殺されるとか悲しすぎるだろ……。

ひねりも何も無く、普通に近づけば何事もなく合流できた。

要するにマシユのキルスコアは俺が稼いでたって言っても過言ではないってこと。

へへっ……っら……。

今更だがマシユの傍にはもう一人男性がいた。

マシユはやらんぞ！ と勇みよく言ったら礼儀正しく挨拶された。

やだ……超いい子……

彼はマシユのマスターらしい。

え？ マシユってサーヴァントだったんですか？

素直に疑問を吐き出せば、マシユは軽く笑ってどうやらデミサーヴァントというやつになったと言った、なるほどよくわからん。

マシユの必死の解説虚しく俺の頭は早々と限界を迎えた。

俺が一番悲しかったの言うまでもない。

これからどうするのかと聞けば霊脈とやらに向かうらしい。

そこなら物資も補給できるとかなんとか。

合流したことだし、もう死ぬこともないだろう。

ああ安心した。

ほっと息を吐きながら歩き出した瞬間俺の身体は砕け散った。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

((謎の死))

流石の俺にも意味が分からない。

砕けるって何？ ガラス製品じゃねーんだぞ。

取り合えずさくつと合流し、今度は後ろを歩きながら周りを警戒する。

瞬間黒い巨人がマシユを吹き飛ばした。

青年——藤丸立香くんの叫び声が虚しく消える。

真っ赤に染まった視界の中で、俺の身体が千切れていくのが見えた

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

あの巨人強すぎないか？

最大戦力のマシユが一撃でやられた時点で勝ち目は限りなく薄い——というか無い。

俺とかどうあがいても一般人レベルの力しかないし、藤丸くんもそうだろう。

どうにかして奴を倒す算段を立てようとするが何も思い浮かばない。

けれども誰も死なせる訳にはいかない。

どうしてか知らないが死んでもやり直せる力が俺にあるのだ。

なら犠牲になるべきなのも俺しかありえない。

あー……嫌だなあ……。

さすがにこえーわ、という感想を押し込み静かに深呼吸をする。

出来るだけ準備を万端にして戦いは始まった——。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

巨人さん強すぎい！

マシユを下がらせてまでして被害をなくしてからスタートしたにも関わらず全滅である。

たくさん兵隊が出てくるのは卑怯だろうがよ……！

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

斧が強すぎる。加減しろ馬鹿！

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
傷がついてくれない、お前の皮膚、鋼かなんかでできてる感じ？

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
骨が邪魔すぎる。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
この光景にも見飽き始めた。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

魔術↑カス

肉弾戦↑カス

武器↑カス

……無理やん（＾ω＾）

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
眼を潰すのは良い発想だったが同時に斧が体を引き裂いた。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
ものは試しと魔法（魔術？）を放つ。

当たり前のように無傷であった。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
もう何度、もう何回繰り返し返しただろうか。

一向に勝てるビジョンが見えない。  
ふらつきながら骨を砕き紫へ——つてああああああ……

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
スマホを取り出し忘れて石化した。

ちよつと疲れているのかもしれない、流れ作業じゃダメなのだ。  
ゲームじゃないんだから。

気を入れなおしてから歩き出す——が、あれ？  
な、なんか道違くない？

いつの間にか辺りは森である。

方向音痴!!!

まあでも、ここまで来たからには遠目に見える城を目指そうじゃあ  
ないか。

……あの巨人、もう見たくないし……。

意気揚々と歩き出した俺の身体は瞬時に木っ端と化した。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

どおして!?

原因の分からない死に方が多くて困る、呪われでもしてんのか？

気になってもう一度行きたくない↓死ぬ

無限ループの始まりである。

五回目で気づいたが黒とは違う巨人が俺にアタックかましてきて  
いるようだった。

ここ巨人多すぎませんかねえ……心臓捧げちやおうか？

今日も元気に汚い花火である。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

駆逐したいけどできないのでまた違う方向へ。

道行く骨を砕いて進む。

グシャツ

心臓 が 潰れて しまった !!

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

謎の死パート3だ。

パターンが豊富すぎるだろ、何考えてんだ。

原因究明の為に俺は今日も走る……! !

グシヤツ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
抵抗どころか何が起こったかすらも分からないのは怖すぎる。

ちよつと意外性を出して四つん這いになりながら張つて進んでみた。

グサツ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

骨えええええつえええええー!!!!

いつもいつも絶妙なタイミングで邪魔な骨である。

全力疾走で駆け抜けてみた。

サクツ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

頭に何かが刺さつて即死したつぽい。

骨の使う矢は結構ボロくて死ぬまでちよつとかかるから多分別物だ。

一先ずベルトで頭に平らな石を縛り全力疾走してみた。

途中でカアアン！ という音が響いて身体よろめく、だが死んではない。

マジ？ こんなんで防げていいの？ と疑問は出たが今は無視。

瓦礫の陰から出てきたのは奇妙な右腕を持ち仮面をつけた黒装束の人だった。

何かしやべっているがそんなん知らん。

先手必勝は大体の場合において有利なのはもう身に染みて知っている。

全力で踏み込み木材を振り上げ——グシヤツ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

ハートキヤツチ（物理）されてしまった。

流石にえぐすぎませんかね……

手が入ってくる感覚マジで最悪すぎる。

石越しに響く音を聞きながら木材を横殴りに振るうが期待していたような感触は伝わらない。

グサツ

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

多分首にナイフか何かを一撃だったと思うのだが、特に痛みなく殺してくれるのに関してはマジで助かる。

めっちゃ不快な悪夢見た程度で済むからな。

いい加減ナイフの軌道も読めてきたし、石を外して走り出す。

タイミングよく横に跳ねれば足元に鋭く黒いナイフが突き立った。

そつと見上げればそこには右手の長い奇妙なやつが一人。

視界に入れた瞬間脊髄反射で魔法（魔術？）を放つ。目隠し程度になれば良い、そう思ったのだが。

聞こえてきたのは苦しげな声だった。

……あいつ骨より弱いな!?

こいつはいける、更に撃ち込み続けようと気合を入れた。

瞬間鋭い痛みが俺の胸を貫いた。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

骨ええええええええええ!!!

人の真剣勝負に茶々を入れやがって……!

許さんぞ骨野郎。

怒りを力に変えるように走り出した。

魔術を放ち苦し気な声を聴きながら木材を振るった。

木材が砕け散るのを見ながらふと思う。

木材、魔術で強化できるやん……

初撃は良いものの、長く続く接近戦では為すすべ無しでそのまま俺の心臓がごみくずと化した。

気が付いたら人氣の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。  
くらえ強化木材！

魔術で怯む右腕野郎の頭を強化木材で殴り飛ばす。  
骨とは違う感触が腕に伝わってくる。

——骨を殴った時とは感覚が違う、衝撃を逃がされた？

まあどちらにせよ倒せてはいない、ここで仕留めなければ俺の未来もない。

そう思つて更に一步踏み込みもう一撃。

今度はかわされカウンター気味にナイフが肩に突き刺さる。

ただこの程度ならまだ余裕というものだ。

死ぬのに比べれば痛くもかゆくもない。

死ななければこの程度は誤差の範囲内だ。

強化した木材を勢いよく振りぬけば、今度は骨を殴った時に近い、手に馴染んだ衝撃が腕に響いた。

あー……。

倒した、倒せた。終わった、終わらせた。

良かったあく……。

そんなことを呟き先に進む。

瞬間首が千切れて落ちた。

気が付いたら人氣の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた。

油断しました☆

あそこまでされて生きてるとか……ドン引きです……

ていうか人が誇つて良い耐久力と生命力じゃないだろ。

じ、人外さんなのか……？

まあどつちでも良いんだけど、と木材（強）で殴り飛ばす。

先ほどと同じ動きを完璧に再現しながら頭に振りぬいた。

硬いものが碎ける感触が手に伝わってくる。

地面に倒れ伏す右腕野郎の頭を蹴り飛ばし、念入りに、叩き潰すように木材を垂直に突き刺した。

勢いよく血——のような何かが飛び散り次の瞬間その全身は霞と



消えた。

あつ、やつぱり人じゃないんだ……。

こ、こわく……。

やつぱここホラー映画の中だろ。

若干の満足感とおつきな疑問をを胸に何となく先に進むと段々人の石像があちこちに現れ始めた。

こ、こいつら動き出さないよね……？

あまりのリアルさにビビりながら横を通っていけば大きな河原に出た。

——見覚えがある、というか。

ここメドウーサがいるところじゃね……？

ということはこの石は……

ほとんど反射でスマホを握る。

瞬間ジャラジャラと音を立てた大きな鎖が俺を囲んだ。

——来たか。

激しく耳を打つ鼓動を無視しながら大きく息を吐いて吸う。

メドウーサは槍を構えてこちらをねめつけていた。

直接戦闘になったら勝てるわけないんだけどな、と冷や汗を流しながら木材を片手に間合いを取る。

まったく、何でこんなことになってるんだか。

ツイてない、と思えば幾らかは楽になった気がした。

木材と槍がぶつかり金属同士がぶつかったような音が空気を揺らす。

だが拮抗は続かない、あまりの力強さに押し飛ばされた。

女性とは思えない力に目を見開いた。

あの細腕から出して良い膂力じゃねーだろ……！

碎けなかった木材に驚きつつも喜び走りだす。

跳躍して一振り。

当然のように槍に弾かれ、そのまま勢いよく首を掴まれた。

徐々に視界がぼやけ全身から力が抜けていく。

嘲笑うように口を開いてやつは空いてる手で自身の眼を指さした。

さあ見ろ、と言わんばかりに。

黄金の眼光が、鋭く光り——時に片手に潜ませていたスマホを上へと放り投げた。

頭上へと放られたのであれば、次に来るのは当然落下。

真つ暗に落とされた画面は、その眼を弾くようにメドゥーサに向けられて落ちてきて——やつの身体は、石と化した。

ふー、やっぱ俺、ツイてるかも。

ほくそ笑もうとして盛大に咳き込んだ。

あいつ握力どんだけだよ……

慢心して眼を使おうとしなかったら今頃首の折れた死体がここに転がっていたかもしれない。

あるいは首の折れた石造か。

想像したくもねえな、と独り言ちてその場に座り込む。

そういえばこの先にマシユ達がいるのだろうか？

いや、まず黒い巨人は倒せたのだろうか？

一瞬、見捨ててしまったという思考が過る。

その罪悪感に軽い吐き気を払うように空を見上げれば、ぬつと黒い

影が俺を囲った。

噂をすれば陰。

黒い巨人様の登場だった。

お、おわた……

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人佇んでいた——と思っただどこか今までと何かが違う。

ここ……河原？ ということはメドゥーサと戦ったところか……

？

すぐ足元を見れば石となった女性が一人。よく見なくともそれが彼女であることは分かった。

なるほど、どうやらセーブポイントはここのようならしい。

それが良いことなのか、悪いことなのかは分からないが、まあ良いのだろう。

てかそんなことよりさっさと逃げなきゃいけないんだわ。

巨人様が来る前に撤退である。

ふらつく足に鞭を打ち、取り敢えず近場の建物へと身を隠した。

屋根も何もなく、かろうじて壁が残っている程度だから、建物の残骸と言った方が正しいかもしれないが。

それでも無いよりマシだ、と自分に言い聞かせれば轟音が響いた。

間一髪だな……と息を吐く。

黒い巨人は流石に鬼すぎる。

純粹に強すぎて無理だ。

さっさとどこかに行つてくれないだろうか……

そう思っていたらまたも轟音が鳴り響いた。

いや、轟音と言うにはあまりにも鈍い——何かが何かを強烈に叩いたような音。

——誰か戦闘しているのか？

だとすれば十中八九マシユ達だろうとこつそりと覗けば、そこにいたのはマシユと立香くん。それからフードを被った謎のイケメンがいた。

いや誰——!? と生きてた良かったー！ という気持ちで織り交ざる。

しかしあのイケメン。めっちゃくちゃ強いな。

一応マシユとイケメンで戦っているがほとんどイケメンが巨人をさばっている。

すげえ仲間を見つけたな……

これなら倒せるかもしれない、そう思つて木材を強化した。

今なら、後ろから殴ることくらいはできる、ダメージにはならなくとも多少の気が引ければこっちのものだ。

そう思つて地を蹴り、全力で後頭部へと振り落とす。

瞬間巨人は業火に飲み込まれ、そのまま霞と消えた。

お、俺に炎属性の力が備わってしまった……

という訳でもなくあのイケメンが炎を飛ばしてきていただけだった。

イケメンはクーフリーンというらしい。

今の巨人と同じサーヴァントだとか何とか。

というか今更ではあるのだが、所長もいた。

オルガマリー・アニメスフィア、我らカルデア率いる若き所長だ。

何んでか分からんがやたら怒られた。

り、理不尽……！

もうちよつとこう……優しい言葉くらい……！　と思つてたら小

さく生きててよかつた……と所長は呟いた。

なるほど、ツンデレね。最高。

違うわよ！　と頭をはたかれたところで、ようやく説明タイムが始まった。

何十回リセマラしただろうか……

長い道のりだった。

所長曰くどうやらここは何年か前に聖杯戦争とかいう戦いが起きた場所らしい。

そうして今、現在進行形でその聖杯戦争つてやつが行われているとのことだ。

タイムスリップみたいなものをした、と考えて良い。

ちなみに聖杯とは万能の願望器だとか何とか。超すごいドラゴンボールだと思つておけばいいか。

何で聖杯も聖杯戦争も知らないのよ！　講習で説明したでしょ!?　と言われたけど寝てたし知らないに決まつてるよね。

いや好きで寝ていた訳でもないのだけれども……。

そしてまあ、その聖杯戦争にイレギュラーが起こりやばいことになつてしまった、みたいな感じらしい。

最優のサーヴァントのセイバーつてのがボスでクーフリーン（キャスター）以外のサーヴァントも皆敵になつたとか何とか。

なるほど……?　とか言つておいて納得した風を出しておく。

少し前まで一般人やつてた人間にはレベルが高すぎた……

いや多少は分かるんだよ、本当に。

サーヴァント↑やばい

聖杯↑やばい

聖杯戦争↑やばい

現状↑超やばい

こんな感じだろ？

ああ、そういえば、サーヴァントたとえば俺二人くらい多分倒したよ。  
腕長いやつと紫……メドゥーサ。

見栄なんて張らなくて良いんだぞ、と暖かい眼で慰められた。解せぬ。

説明兼休憩も済んだことだし先に進むことに。

正直もつと休みたいくらい疲労しているのだがさつさで行かないと骨に集られるし、仕方ないのだ。

キャスター曰くいくら来ようが倒せるがなるべく体力は温存したいらしい。

まあそういうことならさつさと行こうぜ！と先頭を走りだす。

ん？ 何かこつちに飛んでき——

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人——「おい、大丈夫か坊主？」

うっひよおおおおおおあああ！

気が付いたら目の前にキャスターがいたンゴ……

ビビりすぎて思わず叫んでしまった、恥ずかしい。

しかしまた復活地点が更新されたようだ。

心臓に悪い地点だがラツキーではあるだろう。

さつきは味方と合流したことで完全に油断してたし……。

飛んできたのはドリルみたいな剣だった。は？ ドリルみたいな剣ってそれはもうドリルじゃん。

きっと俺の頭は跡形も残らなかったことだろう。

また現れたのであろう新敵に辟易しながら俺は何でもないと進み  
だした（マシユの盾に隠れつつ）。

いやここ本当に安全なんだって——と言いつ事を始めた瞬間音が

響いた。

金属同士が奏でる硬質な高音。

マシユの盾がドリルソードを弾きとばしたのだ。

それを見越していたのかどうかは知らないが、それでもすぐに第二射目が降りかかる。

これはキャスターが炎を連続で飛ばし撃ち落として見せた。か、かつけえ……!!

薄々気づいてはいたのだがもしかしてキャスター、恐ろしく強い上に超かつこよいのではなからうか。

今度からキャスターの兄貴と呼ばせてくださいませ!

次々と振ってくる剣を完璧に撃ち落としてくキャスニキ（キャスターの兄貴）。

おおすげえ、と思いつながら木材片手に走り出した。

キャスニキに攻撃を相殺されてる今が一番付け込める隙があるのではと考えた結果だ。

そんな俺を守るようにマシユが隣を走ってくれる。

立花くんはキャスニキの後ろ……ん？立香くん……ちゃん……？

見慣れないオレンジの髪を持つ少女が視線の先にいた。

性……転……換……？

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街——「おい、大丈夫か坊主？」

立香くんはちゃんではなくくんに戻っていた。黒髪青年である。

さつきのは幻覚とでも思っておこうか……

火の粉と鉄の欠片が降りしきる空の下、キャスニキが落とさなかった敵の剣を拾い駆け抜けた。

木材より重いはその重みが逆にしっかりとした安心感を与えてくれる。

これが人を、何かを倒す為、殺す為の武器なのであると実感させてくれる。

次々に現れる骨どもを滑らかに切断していく。木材とはえらい違いだ。

キヤスニキ曰く、マシユの盾がセイバーを倒す鍵だそうなのだ。ならばこそこんな雑兵どもの相手でもマシユを消耗させる訳にはいかない。

より体に力を込めて、前へと進む。

赤い外套に白髪で褐色の肌の男——あれが敵か。

強化を走らせた剣を振るう。

一閃二閃。

全力で振るったそれは、しかし白と黒の双剣に難なく弾かれた。

流石、というべきか。

マシユと俺のコンビネーションを捌きながらキヤスニキの炎も上手く躲している。

中々決定打を決められない。

ぶつかり合っては弾き合い、そしてまた切りかかる。

そんな中、見透かしたようにその男は口を開いた。

マシユでもなく、キヤスニキでもなく、俺に向かって。

見たところ戦いなれているという訳でもないだろう、良く人に向かって剣を振るえるものだな、と。

いや、そりやお前……死にたくねえからだよくそつたれが。

ばっかじゃねえの？ と両手で柄を握りしめて勢いよく振り落とす。

瞬間、剣は霞と消えた。

同時に俺の視界は剣でいっばいに染まり——

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人——「おい、大丈夫か坊主？」

ああ問題ない。早く先に行こう。

視界が軽く歪む。

立ちくらみだろうか。今まで無かったことなので少しばかりビビった。

ちよつと疲れてるのかもしれないが、弱音を吐いてられる場合でもないだろう。

それにしてもやつを攻略するにはどうするべきだろうか。  
無尽蔵（多分）に剣を作り出せるとか半端ないよう……  
巨人さん並みに攻略の糸口がつかめない。  
剣は途中まで使わせては貰うがやつ相手には使えない。  
剣を使う以上木材なんて持つていられない、中々どうして剣は重いのだ。

何てったって剣って鉄の塊だからね？

全身に強化をかけてやつと振り回せるくらいなのだ。

自分のあまりのスペックの低さに涙目である。

戦闘系ゲームの主人公がうらやましい。

あいつらほしいかい剣とか銃とか扱いやがるからな……

あ、でも俺もある意味主人公なのではなからうか。

セーブして死んだらやり直せるとか超主人公。

でもそのセーブは自分でできない、みたいな

やだ……俺ってば超欠陥品……

そんなことを考えていたら時間がきた。

地に突き立つ剣を手に取り走り出す。

作業的に骨を貫き斬り飛ばして白髪の前に向かう。

消される前に剣を投げつける。

何ともないようにはじき返されるがそれは想定内だ。

全身に強化を回し、石ころを握りしめてぶん殴る。

一発二発三発。

ジョブジョブストレート！　と言わんばかりに放つが見向きされることなく防がれた。

まあ当然だな。まだ想定内だ。

こっちが戦闘とはほぼ皆無だった一般人であることに對して相手は名のある英雄（多分）なのだ。

だったらもう、ダメもとで挑もうじゃあねえか。

やれそうなことは全部やる、それくらいで良い。

狂ったように拳を撃ち放つ。

最初は驚いたように対応していた白髪も慣れてきたようで俺の未



熟な拳を軽々とはじき返しそのまま首元に剣をねじ込んだ。

気が付いたら人気の無い上燃え盛る街に一人——「おい、大丈夫か坊主？」

ああ、大丈夫だ。

それより、残った敵はセイバー以外で誰がいるんだ？

何？ 俺の話が本当ならばあとは警戒するのはアーチャーだけ？

バーサーカーは森にいるから放っておけば良い？ なるほど。

アーチャーはどう倒せば良いとかあるの？

え、いや特に無いってちよつと……キヤスニキが相手する？

そんなことしたらセイバー倒すの難くなるじゃないですかやだー！

こうなったらマシユを主軸に戦うのが最善っぽいな。

そう思つて剣を片手に走り出した。

マシユを戦わせないよう骨の相手を進んで引き受けていく。

骨の相手だけならば慣れたものだ。

よつし、見つけたぞ白髪頭あ！

炎の雨が降りしきる中、剣がぶつかり合つて俺の持つ剣のみが姿を消した。

だがそれは想定内。

今までと違い接近して戦っているのは俺だけではないのだ。

マシユの大盾が猛威を振るう。

俺を何度も殺したのだからかなりの威力を内包しているのは間違いない。

拾った棒切れを強化しマシユに隠れるようにヒットアンドアウェイだ。

俺程度の強化ではぶつかり合う度に一瞬の拮抗しか生み出せず、結局綺麗にスライスされてしまうがそれで構わない。

身体に無数の切り傷が出来上がっていくがもう俺はその程度では気にすらしらない。

気にしてはいけない、死ぬこと以外は怖くない。

そう信じる、そう思い込む。

そこらに転がっている石を強化し蹴り飛ばして足を止めさせて、一瞬だけ息を休めた。

マシユの盾が強すぎるな、と思った。

強さ、というよりは堅牢さ、というべきか。

白髪の攻撃は早く鋭いが威力が若干足りていない。

大盾を主武装とするマシユを抜けないのだ。

そして戦闘面に関しての未熟さは俺がちよいちよい邪魔すること  
でしばらくは拮抗を保たせられる。

そうして、不安定ながらもその均衡を保てば、やがてそれは来た。

キヤスニキ渾身の一撃、巨人すら焼き尽くした灼熱の業火。

それは瞬く間に白髪を包み込み、巨大なダメージと隙を作り上げる。

——ここだ。

そう思うと同時にマシユと目が合って軽く頷いて踏み込む。

瞬間、マシユの盾が白髪の剣を弾き上げ、滑り込むように入った俺  
が頭をカチ割った。

キヤスニキが軽い調子で白髪に謝罪をしていた。

知り合いだったのだろうか。

まあ知ったことではない、さっさとセイバーの元に行こうじゃない  
か——と言いたいが、その前に休憩タイムである。

俺もマシユも結構傷だらけなのだ。

俺はともかく、マシユは全快になってもらわないと困る。

戦闘では欠片も役に立たなかった所長唯一の見せ場である。

手を当てられたり何か唱えられたりすればたちまち怪我は塞がり  
体力は戻った。

完全復活 活 ってやつだ。

血が足りないのか、それとも疲れたのか、若干フラフラとするがま  
あ問題はなさそうだ。

サクツとセイバーを倒してゆっくりカルデアで休みたいです

……

そういえばカルデアってどうなったのん？

あ、壊滅的ですかそうですか……

寝床は大丈夫？ あ、大丈夫。なら良かったぜ。

何にもよくないわよ！ とかいう言葉はスルーしておく。

や、言い合いになるのはちよつと、な。

それじゃあそろそろ行こうか、という立香くんの言葉で皆が歩を進め始めた。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

近づいていくだけで身体にかかる重圧で潰れそうになる。

呼吸をするのすら一苦労だ。

全身を強化して何とかコンディションを全快に近づける。

これでは立香くんは苦しいだろうと振り向けば普通にピンピンしていた。

俺がくそ雑魚すぎる可能性が出てきちゃったな。

悲しみに溺れながら感動の対面である。

ああ、会いたかつたぜセイバー、初対面だけど、本当に会いたかつた——終わらせたかつた。帰りたいかつた。

カルデアにいるナビゲーター——ロマニ・アーキマン。通称ドクターロマンがあればアーサー王だと冷静に皆に伝えた。

有名なアーサー王が女性なのは驚くものがあつたが特に気にすることでもない。

男性だろうが女性だろうが、やることは変わらないのだから。

だから——まあ、さつさと死んでくれ。

拾っていた鉄パイプを強化し上段から振り落とし——

気づいた時には俺の首は滑らかに滑り落ちていった。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

ちよつとセイバー強すぎないだろうか。

回避しようとか考える間もなく斬り飛ばされるとか……

巨人さんより強い気がするぜ……！

今度は遠くから強化石ころ投げの作戦に切り替えてみた。  
セイバー、それ即ち剣士という意味だ。

遠距離攻撃はもってないだろ——ま、魔力が飛んでくる——!?

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

遠近万能とか最強にしか見えない件について。

俺の強化石とかジュツと蒸発してたからね。

格の差がありすぎるといレベルの話ではない。

流石に飛んでくる魔力は防ぎようがないので強化したパイプで殴りかかる。

拮抗することもなく俺の身体ごと切り捨てられた。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

ですよね！ といった結果である。

くそっ！ 魔術師の本気を見てみやがれえ！

魔術をガンガン撃ち放つ。

当然のように意味はなかった。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

まあ、やけくそになったのは良くなかったかもしれない。

そもそも骨にすら通らないのにセイバーに通るわけがなかった。

今度はいきなり襲い掛からず話させてみた、人類は言葉によるコミュニケーションつてもものがあるからな。

仲良く和解とは言わないが何かしら友好的な……

え、エクスカリバー——？

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

突然の宝具である。やたら黒い極光に視界をいっぱいいっぱいにされた。

ここでマシユが重要になってくるという訳かあ、と一人納得する。  
素早く後ろに隠れた瞬間セイバーが剣を振るった。

闇をそのまま凝縮したような真っ黒な破壊光線をマシユの盾の宝具が防ぎ、立香君がマシユを支える。

マスターなんだから、自分のサーヴァントを支えるくらいしないと、と彼はあの極光を前に歩を進めたのだ。

凄まじい破壊音が辺りを散らし、展開されている宝具以外の場所が全てを消し飛ばされていく。

控えめにいっても絶大な魔力量だ。

キヤスニキ曰くセイバーは聖杯と直接リンクしておりそれにより無限ともいえる魔力を得ているとかなんとか。

ち、チーターじゃん……BANされても文句言えないぞ!?

しかし文句を言ったところでどうにもならない。現実には厳しいものだ。

魔力が散ると同時にマシユとセイバーは地を蹴った。

黒の聖剣と大盾がぶつかり、マシユが一瞬で吹き飛んだ。

セイバーの細腕からは考えられないような膂力だ。

驚く間もなく切りかかってくるセイバーの一撃を鉄パイプで受け流し、一瞬でごみと化したそれ投げ捨てると同時に拳を振るう。

気づいた時には宙を舞っていた。

い、一体何が――

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

60kgオーバーの俺を片手で投げ飛ばすとか……

身動き取れない中でバターののように滑らかに切断されてしまった。

あの膂力も魔力によるもののだろうか。

取りあえず真正面から戦っても勝ち目がないことだけはよく理解した。

何か他に手は……と、あちこち見回しながら先に進めば不意にそれは目についた。

ああー、これは使えるかもしれない。

キヤスニキにも「悪くはねえな」というお墨付きをもらって俺は皆から離れてそれのもとに残った。

心地の悪い振動を聞きながら時を待つ。

まだかまだかと罅割れた空を見上げていれば、唐突に真つ黒な光の柱が天に昇って行った。

衝撃と豪風が遅れて吹きすさぶ。

——来た！

その瞬間俺は廃車寸前の車を発進させた。

一本道に入ると同時にクラッチを踏み込みギアを上げてアクセルを踏み込む。

エンジンが勢いよく音を立ててスピードが馬鹿みたいに上がった。狙うはセイバーただ一人。

マシユが勢い良く吹き飛ぶと同時に車はセイバーの真横に突進した。

同時に轟音、衝撃。

片手で車を止めた……だと……？

か、完全に予想——内だ。

一瞬で車をバラすセイバーを先に脱出しておくことでその車の後ろから眺めていた俺は車が爆発した瞬間鉄パイプを突き出した。

グチャリと嫌な感触が手に伝わってくる。

——決まった、致命傷でなくとも一撃は入った！

興奮をそぎ落としながらすかさず手を離して回し蹴り。

同時に不自然に煙が消し飛んだ。

その風圧によるけながら前を見れば——血を流しながら笑うセイバーが、そこにいた。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

まーた片手でぶん投げられた。

建物にぶつかってぐちゃっである。マジで痛いやつだからやめてほしい。

中々即死できないからかなり苦しいんだよあれ。

大体キヤスニキの援護射撃の炎が降る中あんなに動けるとかおかしすぎるだろ。

見えていない所からの攻撃からは一瞬反応が遅れるがだから何？  
つてくらい意味をなさない。

反射神経抜群というレベルではない、見えてんだろアレ。  
マシユだけでは技量不足。

キヤスニキがいても決め手に欠ける。

俺はただのカス。

あれ、これどうしようもなくなる……？

真っ黒な魔力が俺を呑み込んだ。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

もう……何か消し飛ばされるのも慣れて来た感がある。

最早消し飛ばされるプロとか名乗れちゃうレベル。

何それ超不名誉……

取りあえず一対一だと数秒も稼げないということが良く分かった  
ので魔術師らしくかつこよさげに後ろで佇んでみた。

マシユの宝具がセイバーの宝具を防ぎきれば爆炎と共にキヤスニ  
キが動き出した。

今まで通り炎の雨が降り注ぐが物怖じすることなくセイバーはそ  
れをかわしていく。

立香くんがこちらに吹き飛ばされるのと同時にマシユがセイバー  
とぶつかり合った。

当然のように弾き飛ばされたマシユが建物に叩き付けられるのを  
横目にキヤスニキが走り出した。

あ、あれ、めつちやスムーズ……なるほどこれが正規ルート……！

何事も先行せずに後ろからゆったり見ているのが一番よろしかつ  
たようですね。

キヤスニキとセイバーがぶつかり合う。

一見すれば互角だ。

キヤスニキが上手くセイバーを捌いている。

キヤスターだけあつて魔術を上手く使いセイバーの魔力も上手く

いなしているのだ。

かつちよええ……

そう思うが、しかしジリ貧だ。

元々立香くんと仮契約している状態にあるので、彼の魔力にも当然底がある。

立香くんの代わりに俺が援護をしていたりするがそれもあまりを意味をなさない。

どす黒い、巨大な魔力が全てを呑み込んだ――

濃厚な死の匂いが立ち込めていた

長期戦になると死ぬのが良く分かった。

でも短期決着とか無理ゲーすぎるんだよな。

ど、どうしたら……

キヤスニキに宝具はないのかと聞くが、セイバーの宝具と真つ向でぶつけ合わせられるような宝具ではないらしい。

どんな感じなのかと聞けば巨大な燃える藁人形だとかなんとか。

よ、弱そう……

そいつの手だけ地面から出したり結構便利らしい。

よ、弱そう……（二回目）

失礼か！ と頭をはたかれた、いやごめんて。

ただクリティカルヒットすれば倒せるそうだ。

もちろん全身に纏っている魔力を消せば、らしいが。

これは……！ 無理ですね……

どうしようかなーと考えている内にマシユが吹き飛んでいった。

今度は戻って来ていない立香……ちゃんの襟を引っ張り後ろに投げ飛ばす。

視界は黒に染まっていた。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

どうにも立香ちゃんだと逃げきれないみたいですね……

ふと横を見たら今度も立香ちゃんだった。



一体どういうことだつてばよ！

頭を抱えている内にセイバーの宝具が放たれた。

気づいたんだが宝具を撃つてから少しの間は纏ってる魔力は消えるっぽい。

ただキヤスニキが魔力を練り上げてもらおうにもそんな隙は易々とくれないだろう。

マシユも数瞬で吹き飛ばされるし俺は一瞬も持たせられない。

何てつたつて武器のスペックが違いすぎるのだ。

いや技術とか力も全てにおいてあっちの方が上なんだけどね？

あ……キヤスニキに強化してもらえばよくね……？

視界が斜めにずれていく中そう思った。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

中二チックな文字を鉄パイプと身体に刻んでもらった。

ルーン文字つてやつらしい、北欧とかのやつだっけ？

まあそんなことより体がくそ軽い！

極稀に道端で見るやたらテンションの高い変人になっているやつがいた。

というか俺であった。

いやでもこれ、マジですごいのだ。

今までが錘でもつけていたんじゃないかってくらい身体が軽い。

目が良く見える、手足が理想通りに動く。

これなら多少は戦える。

二つの宝具が消えると同時に駆けだした。

中二パイプと剣がぶつかり弾き合う。

いつの間にか、見えなかった剣速が目で追えるようになっていた。

やっぱりキヤスニキの強化のおかげか、はたまた経験値的なあれがたまっているのか。

まあどっちでもいい——けど、セイバーが驚いたように目を見開くのは少しだけ愉快だった。

左下からの一閃。回転してきて右からの一撃。

あからさまに魔力が迸っている時だけ全力で回避しそれ以外はギリギリで反応して弾き合う。

全部反応しきれているように見せかけて三回に一回くらいしかもともに防げていないが、それでも今までに比べれば怖ろしいほどの成長だ。

だがそれも長くは続かない、俺より先に中二パイプが悲鳴を上げ始めた。

それを無視して上から振り落とす。返すように下から一閃。

音もなく中二パイプは真つ二つに切断された。

だが、それでもまだ戦える。

間合いが短くなっただけだ、切り落とされた方も持って二刀流。

これで更に近づけば良い——と、思った。

それが間違いだと気づくのは少しだけ遅かった。

右斜めから振り上げ。流れるように左下からの振り上げ。

それだけで、二つのパイプは粉々になり、同時に衝撃で足が止まった。

それを見逃してくれるわけがない。

風を穿つような突き。神速の一撃だったそれは腹を貫いて、真つ赤な血が溢れかえった。

ゴボリ、と血が喉元を通って吐き出される。

憐れむように俺を見る金の瞳が酷く愉快だった。

セイバーが薄く口を開いて何かを呟いた。

お前は本当に人か？ と問いを投げかけられた。

いや、あるいはそれは、ただのつぶやきだったかもしれないが。

どちらにせよ失礼なやつだな……

だがまあ、それよりも、だ。

引き抜こうとする腕を引っ張り両手で身体をがっしりとホールドした。

意地でも離さない、そう思った瞬間彼女はその身に纏う魔力を爆発させた。

同時に燃え盛る、巨大な藁の手がセイバーを掴んだ。

セイバーが驚愕に目を見開いた。

貴様、まさかこの為にその身を——!? と悲鳴にも近い声でそう言った。

いや、そりやそうだろう、と言葉にしようとして血を吐き出した。

か、かつこつかねえ……でも流石キヤスニキだ、完璧に決めてくれた。

地面からズゴゴゴと出てきた藁人形はその手に掴んだセイバーを己の腹に収め、大きく燃え盛ったまま轟音を立ててその身ごと地面に叩き付けた。

それが消えた時、セイバーは血みどろでそこに立っていた。

その身は既に限界なようで、金色の粉に解けていつている。

——見事だ。

その一言だけ言ったセイバーは、それから『グランドオーダー』という謎の単語を残してその姿消した。

グランドオーダーって何だろうか。狼狽える所長を横目に頭を捻らせれば、突然声が響いた。

それは酷く、不愉快な笑い声。

まだ終わんねえの!? とか言ってる暇も余裕もない。

まあでも? こっちには? 最強のキヤスニキがいるし? よ

ゆーよゆー。

とか思っていたらキヤスニキが消えた。

めっちゃ悔しそうに消えていくもんだから文句も言えない。

セイバーが死んで聖杯戦争が終わったかららしい。強制退去というやつだ。

ま、マジかよ……と思いつながら笑い声のもとへと視線を向ける。

大して良くはない眼をこすって見たらそこには緑色のいかにもキマっちゃってる目をした人が——レフ!!

所長が泣き叫ぶように目がイカれてる感じの男の名前を呼んだ。

ていうか俺も知ってる人だった。

いささか優しさが抜け落ちたような不気味な目をしているが、それでもあれはレフ教授だった。

超知ってたし超お世話になってたわ……

そんな教授に所長が希望を見つけた！　と言わんばかりの笑顔で駆けよっていった。

え？　行っちゃうの？　絶対ダメでしょ、と嫌な予感がして掴もうとしたが、しかし手は空を切る。

すると予感が当たったのか。

ここの空間とカルデアが繋がり、カルデアスと呼ばれる機械に所長が放り込まれた。

いや一言で言つて良いようなことではないのだが、しかし。事実そうだった、彼は——レフ教授はなんの感慨深さもなく。

感情はなく、言葉もほとんどなく。所長を投げ捨てるように放り込んだのだ。

泣き叫び続けていた彼女の声が掠れていき、やがて消えていく。

カルデアスの中は人が生きながらえられる場所ではない——どこの話ではない、と彼は言う。

太陽やブラックホール何かと同一視されるものである、と。

ただ死ぬだけでなく永遠に死に続ける、そういったある種の地獄。

それを嬉しそうに、高笑いしながらレフ教授が話し続ける。

所長はとつくに死んでいたのだよ、とレフ教授は言った。

レイシフト適性の無かった彼女は、精神のみでここに存在していた、と。

まあ、その辺の話は正直、100%理解できなかった。

だけどカルデアが半壊なもの、俺たちがこんな思いをしているのも、人理がやばいのも全てやつおのせいなのは良く分かった。

あー……そうだったんだ。マジかよ。

じゃあ死ねよ。

俺を一瞥した教授は何ちやつかりお前生き残つてんだよ、と憤っていたが怒りたいのは俺の方だった。

しかし何かする前にレフは消えてしまった。

抗えるものなら抗うと良い——とはいえ、もう世界の運命は決まってしまったのだがね、と言ひ残して。

世界が揺れる――

反射的にマシユと立香くんを抱え込むように引き寄せた。

世界が崩れゆく――

徐々に自分という存在が消えていくような感覚を覚えた。

必死に抱き寄せ二人という存在を通して自分はあるということ  
を再確認する。

マシユと立香くんが必死にドクターを急かすように叫ぶ。

ドクターの焦ったような声が耳朶を叩く。

瞬間、嫌な浮遊感が俺を――俺たちを襲った。

それでもグツと二人を掴んで離さない。

少しずつ視界が歪んでぼやけていく。

またやり直しか。

視界はぐるりと暗転した。

何やかんや助かったっぽい。

若干涙目のロマン含め職員たちが視界に入ったことで確信した。

流れるようにベッドに回収されてポイツとされる。

暖かな毛布の存在が何よりの癒しに思えた。

ああ、長い一日だった。

本当に、本当に長かった。

それ以上何か考えようとはしたが、しかしどうすることもできず沈  
むように意識は途絶えた。

## 竜と贗作@無限ループ

俺がベッドで横たわっていたりそこそこ魔術について勉強したりしてる間にカルデアは立て直すことに成功していた。

いやまあ見た目は相も変わらずボロクソなのだが、性能的には最低限取り戻したってことだ。

それもこれも全ては現カルデアトップ：ロマニ・アーキマン——ドクターロマンとカルデアが召還することに成功していた世紀の大天才、レオナルドダヴィンチ——通称ダヴィンチちゃん——の尽力によるものだ。

この英霊——ダヴィンチといえればあれだ、モナリザ描いたやつ。

おっさんか……むさ苦しいなと思うかもしれないが、こいつ女なのである……

そう、女（体のみ）。

いや体のみって何？ となるのだが事実そうとしか言いようがなく、一言で言えば性転換しやがったのである。

見た目は美女だが中身はくそじじい、みたいな最悪な存在ができてしまった。

ちなみにこれを本人に言うとは愉快に笑いながら折檻されるからお勧めしない。

この日は上記のトップ二人に呼び出しを食らっていた。

もちろん、他の二人でもある。

ドクターロマンとダヴィンチちゃん、俺にマシユに立香くん。

今現在のカルデアではこの五人が最高幹部的な立ち位置なのだ。

他のお偉いさんは全滅した、無論あの日の爆発で。

医療トップのロマンが一番偉い役職って時点でどんくらいやばいのかは伝わると思う。

現実は無情なのだ。

ついでに言うなら地球も爆発四散寸前らしいから超やばい。

具体的に言うならカルデア以外は全部炎上、炭と化した、みたいな。

このままではカルデアが無くなるとか無くならないとか最早そん

なレベルではない事態なのだ。

それを未然に防ぐ。世界は滅びなかつた人理は焼却されなかつたという結果に塗り替えるために過去に行く——レイシフトして変えられた過去を元に戻さなければならぬらしい。

しかしここでトラブル発生！

レイシフトできるかつマスター、つまりマシユやダヴィンチちゃんみたいな英霊を使役できる素質のある人間はもうこの世にたった二人しかいなかった。

まあ俺と立香くんである。

他の人たちはレイシフト適性がない上にマスターにもなれないとかなんとか。

困ったもんだぜ。

何が困ったって立香くんが即答でやります！ とかほざいてる辺り最高に困った。

期待の眼差しで他の四人が俺を見るのだ。

いや、四人だけではない。

他の生き残りもだ。

実質、この世に残った全人類から期待されているのだ。

断れる、わけないだろう。

断ってくれてもいいと、それを肯定したところで俺の立場はどうなる？

きつとどちらを選んでも果ては地獄なのだ。

俺は満面の笑みを浮かべてもちろんだと宣言した。

きつとこの選択は、間違っていない。

やれやれ、吐いちゃいそうだぜ。

カルデアに仲間が増えた。

英霊召喚ってやつである。

ダヴィンチちゃんみたいなのを味方につける儀式だ。

いや違う、見た目だけの女を召喚するとかじゃない。分かれ馬鹿野

郎。

立香くんが持つてる虹色のモヤットボールみたいなのが触媒になるとかなんとか。

カルデアの超技術ってやつだな。科学の力ってすげー！ いや、元は魔術らしいのだが。

何はともあれ立香くんが気合を入れて儀式を始めた。

虹色の光がバチバチと辺りを駆け巡り、一際大きくフラッシュが起きると同時に人影は現われた。

西洋剣を携えた金髪の少女、蒼のドレスに身を包んだその彼女は、どこかのお姫様のようにどこか見覚えがある。

どこか神秘的な雰囲気を持つ彼女はその名をアルトリア・ペンドラゴン……かの有名なアーサー王と名乗った。

完全にパチモンじゃん……俺黒い方しか知らないよ？

何だかオルタだとか反転だとか色々説明されたが俺には理解が難しいということしかわからなかった。魔術フクザツネー。

さーて次は俺の出番だぜと前が出る。

四つ放り投げて南無南無と。

光の先から現れたのは果たして——  
ゴロンツ。

え、何これ……黒鍵？ 武器型のサーヴァント的な？ は？ 礼装？ 何これただの闇ガチャじゃん……

まあ元氣出せよとダヴィンチちゃんアイテムと飴ちゃんをくれた、そんなんで俺の機嫌が直るとも……

つーか飴ちゃんて、何歳だと思ってるの？

まあまあと宥められながら俺は作戦室へと連れ込まれていった……

——百年戦争。

フランスの王位を巡り、チンタラチンタラ戦い続けていたことで有名な戦争である。



カルデア情報ではこの辺の歴史が改変されつつあるとか何とか。どう改変されているのだろうか。

イギリスがフランスを圧倒しちやってるのか？

はたまたかの有名なジャンヌ・ダルクが現れなかったとか？

とか色々考えるがまあ十中八九ジャンヌダルクかピエールコーシヨン辺りの絡みだろう。

英霊って有名人がなれるらしいし、この時代で行けば100%こいつら絡みだ。

そしてジャンヌ・ダルクが来れば必然的にジル・ド・レエが着いてくるのは必定とも言える。

青髭ことジル・ド・レエ。ジャンヌ・ダルクが処刑された後に狂ってしまったとされる一人の騎士。

出来ればジャンヌ・ダルクが処刑された後だったら良いなあ。

そんなことを思いながら俺は過去へと跳んだ。

そこは竜が飛び交い戦士達の亡骸が転がる地獄だった。

どうにも俺はレイシフト用の装置に嫌われているようで、周りに立香くんとその仲間達は見当たらない。

ドクター曰くレイシフト中に謎の妨害が入り俺だけはぐれてしまったらしい。

しかもレイシフトはしてしまったら直すまで戻れない仕様。

やはり世界が俺を殺しに来てる……

ただの兵士に殺される気はしないが、さつきからクルクル空を舞ってるドラゴン様には敵いそうにないのでこっそりと身を潜めた。

資料では令呪は万能なチートアイテムとあったのだが俺の手の甲にある紋様は令呪（笑）みたいな欠陥品で、英霊の強化しかできないとのことだ。

ちよつとゴミ過ぎんだろ……という感想を押し込めて空を見る。

しかし、このままじつとしていたら良い感じに焼かれて美味しく頂かれそうなのでドクターに一番近い街を教えて貰い歩き始めた。

あちよ、ドラゴンさん落ち着いて、おち……おちつ、落ち着けえ！

そこは竜が飛び交い戦士達の亡骸が転がる地獄だった。

ミディアムとか通り越して余裕で炭でした本当にありがたいとごぎいます。

何か一歩踏み出した瞬間から炎上（物理）だったんですけど……。

ドラゴン様が鬼畜すぎる。

歩くより走った方が良いかもしれない。

強く力を込めて駆け出した。

あつ、無理ですこれ――

そこは竜が飛び交い戦士達の亡骸が転がる地獄だった。

走り出した瞬間俺の真横にドラゴン様。

パクリとやられましたね。

抵抗する余地なく瞬殺でした。

ドクターの話聞いてる風に無視して指針を決める。

歩く↓炭

走る↓餌

なら今度は匍匐前進だな。

これなら見つかるまい。

ノツソノツソノツソノツソ。

ジュワツ

そこは竜が飛び交い戦士達の亡骸が転がる地獄だった。

真っ白なカルデアの制服は所々焼け焦げた草原では良く映えたら

しい……

一瞬で燃え尽きました、本当にいい加減にしてください。

いやマジでこれもう大分詰みに入ってる気がしてならないんです

けど……

逃げたら死ぬ気がしてならない、というか逃げたら死ぬ感じが感じない。

となればこれはもうやるしかないっしょ。

地に降りたと同時に魔力回路を開く。

やられる前に……殺るっ！

死体の握る剣を奪い取り、強化した後に勢い良く投擲。

空に浮かぶ謎の光輪が放つ光を反射しながら、剣は竜の鱗を縫うように飛んでいき——カキョーン。

弾 かれた。

ですよねー!?!

カルデアの制服に備え付けられた三つの汎用魔術(超万能)の一つを起動。

緊急回避——！

勝手に動く身体が見た目軽やかに竜の振るう尾の一撃をかわす。

あ、ちよ、そつちに身体は曲がらないが!?

強制的に動かされたせいで走る鈍い痛み顔に顔をしかめながら駆けだした。

途中で落ちてる兵士達の装備を強化し、少しでも動きを阻害する為に投げつける。

当然のように意味はなさない。

こ、こつち来んな——！

ジュワアツ

そこは竜が飛び交い戦士達の亡骸が転がる地獄だった。

いや……もう、ないわー。

初っぱなからこれとか流石にテンションだだ下がり。

やる気皆無なんですけど……

ドクターの声を無視して俺はふて寝した。

おやすみマイライフ………

目を覚ましたら現代では考えられないくらい綺麗な夜空が映りこんできた。

ついでに飛び交う竜の姿はとうに消えていた。

爆睡だったためか死体だと思われたっばい。

……ま、計算通りってやつ!?

け、計算通りだし、ほ、本当だし……

自分の計算高さに身を震わせつつ既に荒らされつくされたような街へと踏み込んだ。

鉄と腐ったような臭いが立ち込めていた。

目に入る建物は全て廃墟と化していて、人っこ一人いないようだ。まあ控えめに言っても最悪な光景である。

人のいた痕跡が良く残っているだけ不快感が冬木の比じゃない。

あそこは廃墟さえあったもののほとんどが燃やし尽くされていた。生々しさが段違いだ。

喉元まで這い上がってくる吐き気を押し込み歩を進める。

そこまで大きな町だった訳でもなく、数十分で歩き回れてしまった。

町、というよりは村といった方が適切なのかな。

まあやはりというか、生物はいなかった。代わりに死体なら散々転がっていたけれど。

獣か何かに食い荒らされていたものもあれば、真っ黒に焼き焦げていたものもいた。

思わず顔を顰めたその時、甲高い笑い声が響き渡った。

——っ、はは、マジ前途多難。

さて、今回は何回死ねばいいのかな。

叫びながらカード状になっている礼装を具現化させて黒鍵を投げ放つ。

同時に緑色の光が衝撃を伴って体をぶち抜いた。

これは魔術……? てことはクラスはキャスター?

酷く訴えかけてくる痛みを無視して頭を働かせる。

連続で飛んでくる魔術弾をほぼ勘で躲していけばそれはバーサークアサシンと名乗った。

キャスターではなくアサシンだった。

アサシン要素が迷子過ぎないだろうか。

それもバーサークアサシンとかいうハイブリッド。  
車かなんかかよ。

男の血はあんまり……とか言ってるから吸血鬼か何かだと思う。

でも俺は吸血鬼といえれば某金髪幼女くらいしか知らないんだよな

……

十字架とか銀の銃弾とか持つてないし詰んだよこれ。

正直黒鍵はゴミだし令呪は意味をなさないし俺の死が明確に見えた。

ていうかそもそも人が英霊に勝てる訳ないよネツ！

ドクターからの退避の勧告を聞き流して応急手当をかけて走り出す。

逃げられるならとつくに逃げていることを察してほしい。

背中でも向けようものなら風穴が空くのは確定なのだ。

………まあ向けなくても空くのは目に見えているのだが。

一気に走り抜けて途中で緊急回避を発動すれば、不自然に身体が動いて全てを躲す。

血に濡れながら懐に潜り込んだ瞬間、貫っていた特別製の手榴弾がキラリと輝いた。

轟音、爆炎。

手足が千切れ吹き飛んだ。不思議なことに痛みは感じない。

最後に目に映ったのは血に塗れた彼女の姿だった。

鉄と腐ったような臭いが立ち込めていた。

さて、逃げるか。

妙にふらつく身体に鞭打ち走り出した。

脇目も振らずに駆けていく。

誰とだつて戦いたくはないけれど、特に英霊とは戦いたくない。

だつて死にたくないし、理由はそれだけで充分じゃないか？

町を北の方から抜けて近くの木に身を隠す。

珍しくすぐに逃げられた。

俺の運も捨てたもんじゃねえな。

不覚にもにやけながらドクターとの通信を繋げる。

さっさと合流しなければ。

ん？ 高魔力反応？

あつ

鉄と腐ったような臭いが立ち込めていた。

まさかスナイプされるとは思わなかった……

魔力弾便利過ぎるだろ。頭が一瞬で弾け飛んでしまったみたいだ。痛みを伴うことすらなかったのが唯一の救いってところがマジで救われない。

どうしたら良いものか。

経験上倒さないと俺@無限ループが始まる気配をビンビンに感じるんだけど……

単純に遠距離攻撃してくるのが何よりもえぐい。

緊急回避を使えるのは一回。一度使ったらしばらくは使えないとっておきだ。

あれだけ連射してくるのに一回しか避けられないとか役に立たなすぎる……

自暴自棄にならず、生存するのを前提として動くなら自爆特攻も使えない。

使える武器が無さすぎるんだよな……黒鍵と手榴弾でどうしろと。何をやるにしても何もかもが足りない。

無駄に有り余っているのは命だけだ……

取りあえず情報を集める他ないか。

最初に出会った時の場所のすぐそばに身を潜める。

手には黒鍵。もう片手にはメイドイン・ダヴィンチの手榴弾を。

一刺ししてから一気に爆破だ。

ぶつちやけこれで行かなくなるとは露とも思っていないが、今はこれくらいしか思いつかないし仕方あるまい。

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

敵の攻撃は一発でも当たればそれだけでもう死だと思って良い。

早くなる動悸を抑えて魔力を全身に流し込む。  
身体が万能感に満ちていく。

長期戦になったら勝ち目がないのは百も承知。  
短期決着。それ以外に生存はない。

黒鍵を取り出す。普段なら持てるはずもないくらい重たいが今は  
ちよつと重いくらいだ。

そしてそんな力も英霊の前ではほぼほぼ意味を為さないってんだ  
からドン引きものだ。

瓦礫と瓦礫の間を縫うように這いずり回り彼女の後ろを取る。  
眼を離さずじりじりと後退したところで勢い良く黒鍵を投げ放つ  
た。

高い金属音が響き渡る。それが戦闘開始のゴングだった。

緑の魔弾が煌々とギリギリを掠めていく。

馬鹿みたいに張る弾幕の隙間に飛び込むように躲していく。

不快なくらい高く笑う彼女の顔目掛けて黒鍵を一本投げ込んだ。

同時に素早く跳躍したが、着地地点が激しく爆発した。

読まれていた——？

爆風に煽られ転がる俺で遊ぶように魔弾が追ってくる。

一際大きく浮かせられたところで片手を支えに一気に踏み込んだ。

目の前に広がる緑の光。反射的に動いた手からピンツと独特の音

が耳に嫌に残った。

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

戦わずに話し合う方向でいけばどうだろうか。

誰もが争いを好むわけではないだろう……！

へい、そのレディー。お茶でもいかがか——

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

何か……ごみを見るような目で見られました本当にありがとうございます  
ございません。

俺のナンパスキルが低すぎたか……

カルデアの制服を棒に巻き付けて旗のようにする。

私、戦い、好まな——い。

白旗は真つ赤に染まった。

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

この世には既に降伏してる人を撃ち殺す悪魔がいるらしい……

やはり戦う方向で行くしかないようだ。

意思とは真逆にやる気に満ちる身体に任せて突き進む。

熱いような冷たいような、そんな鈍い感触が腹を貫いた。

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

動悸が激しい、自身が焦っているのが良くわかる。

呼吸が浅い、必死に頭を回すが打開策が見当たらない。

落ち着け、冷静になれ、と己に語り掛けるが焦燥は高まるばかりだ。

小さな瓦礫を両手に抱いて駆けだした。

魔術で強化してひたすらにぶん投げれば魔弾と石はぶつかりあう。

——だが、当然のように拮抗はせず、魔弾は石を消し飛ばした。

緑の光が眼前に広がって、直後に強烈な衝撃が体を穿つ。

それでも致命傷には至らない……なるほど。

俺のわか魔術でもそこそこ役に立つらしい。

まあそれでも全弾当たったせいで身体が痺れて動けないんだけど

ネツ。

身体から大量に血が抜けてく様を見るってのは思っている以上に

怖いものだな。

銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。

強化した石を魔弾とぶつけ合わせる。

あの魔弾は強化石ころでそれなりに威力を減衰させられるらしい。

光の粒子と石の欠片が辺りに散る中に踏み込んで、一本だけ握った

黒鍵を鋭く突き出した。

吸血鬼の持つ、丁寧な細工のされた杖とぶつかり合って甲高い音が

響いた。

たった一撃だけの打ち合い、それだけで腕が痺れる。

嘘やん……いつぞやの赤弓野郎と同じくらい重たい——

骨が砕ける音が頭蓋に響いた。



銀髪の美しい吸血鬼は探るようにあちらこちらを歩き回る。  
「そーいや俺魔術出せんじゃん！ 英霊どもに鍛えられたし結構イ  
ケるんじゃない?」

何時かの二の舞な気がしてならないが振り切り魔力を貯める。

瞬間強化からのおお喰らえガンドオオオオ!

黒の様な赤の様な魔弾が飛び込み華奢とも言える無防備な背中に  
ぶち当たる。

硬直した——!

ここだと言わんばかりに走り出す。

黒鍵に魔力をブチ流して斬りかかる。

狙うは首筋ただ一点——!

「馬鹿ね」

錫杖のような武器が脇腹に食い込んだ。

激しい痛みと同時に視界が暗く歪む。

周りの音が遠くなるのに自分の心臓の音が嫌にうるさい。

次に来るのはお得意の魔弾だろう。

——でも俺の勝ちだ。

肉を切らせて骨を断つって、聞いたことくらいはあんだろ?

握り込んだそれをそつと落とす。落とすと同時に吹き飛ばされる。

それと同時に爆音が盛大に、全てを蹴散らした。

頬にポツリと赤い水滴が落ちてきた。

咳込みながら立ち上がれば、真つ赤に濡れた彼女は憎々し気にこち  
らをねめつけていた。

掠れた声で何かを話している。

錫杖を支えに立っているのがやっとなのが目に見えて分かるとい  
うのにその存在感はやけに強い。

だがこれで終わりだ。お前はもう何もできない。

黒鍵を勢いよく振り切った。

掠れ声は止み、光の粒子が空へと溶けた。

気が抜ける——足からも手からも力が抜ける。  
それでも早く身を隠さなければ、と己を急かした。

何故かって言えばその答えは経験則から言わせてもらおう。

不幸は連鎖する！

嘗めるなよ、俺は学習するのだ。

ただ一つ誤算を言わせてもらえば完全に脱力しきって足が動かないってことくらいかな、

ふう……さらば。

俺はやってくるドラゴンを笑顔で迎えた。

気が抜ける——足からも手からも力が抜ける。

……いやいやいやいや完全に詰み入った所にセーブポイント来  
ちやつたよ!?

おま、どうすんだよこれ……

必死に手を伸ばす。上手く力が入らないがそれでも瓦礫を掴んで  
ズルズルと。転げ落ちるように這いずり回る。

あー来てる来てる来てる。

うーくん、無理！

ガブツ

気が抜ける——足からも手からも力が抜ける。

さては俺は何味だったんだろうか……

きつと最高に不味かったことだろう。

むしろ生肉でいけるとかドラゴンさんはどんな胃してんねん……

畜生胃の中で大暴れしてやる！

一言だけ言うなら竜の胃液は人のそれとは次元が違ったってこと  
くらいだ。

気が抜ける——足からも手からも力が抜ける。

流石に俺が馬鹿すぎた……ちよっと思回路がショートしてまし  
たね。

いかんいかん、切り替えないと。少し冷静になろう。  
武器はない、満足には動けない、魔力は上手く流せない。  
おっとこれは詰んだな。

迫る炎を見て思う、炎以外なら緊急回避いけるんじゃないやね？ と。  
ジユワアツ

気が抜ける——足からも手からも力が抜ける。  
よっしやドラゴンかかってこいやあ！

迫りくる巨大な尾——緊急回避！  
身に纏う制服がキラリと光り、体が不自然に動き出す。  
力の入らない身体が悲鳴を上げた。

そして俺は思うのだ——“一撃だけ避けても意味なくない？”と  
——。

迫りくる牙が妙に遅い——。  
良く漫画とかであるやつかな？ 幾度も死んでる割には初めてだ  
な。

のんきにそんなことを考えながらやつの牙の本数を数える。  
あ、一本抜けてる……

と思ったら上の歯が三本生えた。上顎から。更に言えば血をまき  
散らしながら。

随分エキサイティングな生やし方だな……ってんな訳ねーだろ！  
何事だし！

轟音と共にドラゴンさんが落ちてきた。——ついでに角の生えた  
赤髪の少女も。  
いや何者だし。

角の生えた赤髪の少女は竜のような尾を振り、尖がった八重歯を見  
せつけるように語り掛けてきた。

アイ……ドル？ いや、プロデュース？  
馬鹿ちやうのお前？

アイドル要素迷子過ぎない？

ん？ 歌が得意だ？ おう聞かせてみろや。

きやああああああ

角の生えた赤髪の少女は竜のような尾を振り、尖がった八重歯を見せつけるように語り掛けてきた。

いや歌声で死ぬとかお前……！ お前……！

歌唱力がマイナスに振り切ってんじゃねーか！ つーか若干魔力籠ってたし……

死に体の俺にあの仕打ち……悪魔か……

悪いけど君がアイドルはちよつと無理があると思うぜっ

イエス、ムリ。ノー、アイドル。

いや待て落ち着けそのマイクスタンドにも似た槍を振りかぶるのはヤメロオオオオ！

角の生えた赤髪の少女は竜のような尾を振り、尖がった八重歯を見せつけるように語り掛けてきた。

何かアイドル路線に進もうとするのを否定したらデッドエンドらしい。

何だこの選択肢を間違えたら即死亡みたいなギャルゲー感は……

取りあえず褒め称えてみる。俺は死にたくねえんだ！

え？ 何？ そんなに聞きたいなら披露してあげる？

ばっかやめろ違う謙遜とか遠慮ではないやめ、やめろおおお！

きやああああああ

角の生えた赤髪の少女は竜のような尾を振り、尖がった八重歯を見せつけるように語り掛けてきた。

いい加減魔力を込めて歌うのはやめるんだ。微量でも瀕死の俺には効果は抜群なんだぞ。

ついでに言えば鼓膜も悲鳴をあげてしまうから本当にやめるんだ。だが途中まではいい感じなんだよな。人の話も割と聞いてくれるし。

煽てつつも褒め過ぎないように、だ。

何とか目論見は成功した、大成功とも言えるだろう。

また歌うと言われた時の俺の機転が良すぎる。流石だぜ……ちよろい子で良かった……。

パスを繋ぐ。初サーヴァント。初サーヴァントであります。まあ、仮契約なのだが。

動けないので担がれて移動する。おっと、ドクターにも連絡を入れておくべきか。

空を舞う竜を落とす地を駆ける兵士を殺した。

エリザベート・バートリーと名乗った少女は可愛らしい見た目に反し、その本質はとても惨いものだった。

俺としては頼もしいことこの上ないのだが薄ら寒いものを感じたのもまた事実だ。

まあ取りあえず死ぬことが無くなったのはいいことである。くくく……ドラゴンどもよ、貴様らの快進撃もここまでよ……。

そういえばドクター曰く今まで竜やドラゴンと呼称していた存在はワイバーンってやつらしい。

なるほど違いが分からん……

曰く、ドラゴンはもつとやばいらしい。あれよりやばいとかそれ本当に生物なのん……？

ようやく辿り着いた街で傷を癒す。いや、街とは言えないか。

つい最近——ほんの二、三日前に襲われたであろう廃墟の多い街の民家に隠れ、包帯やら何やらと勝手に拝借して体を休める。

脱力しきっていた手足も既にほとんど感覚を取り戻していた。強化魔術を全身に張り巡らせる。これである程度は満足に動けるだろう。

やっと自分の足で歩ける喜びを噛み締めながら街を出て、森へと入る。

所々燃え焦げていた平原や街とは違い、森は鬱蒼と緑に生い茂っていた。

何故森に入ったのか、と言われれば理由はいくつかある。

俺は気づいたのだ、空から良く見える平原なんかを歩いているからすぐに襲われるのだと。

ついでに言えばこの道がはぐれた奴等と合流する最短ルートなのだ。

良いこと尽くめだな！ と鼻歌でも歌いそうになった瞬間金属音が響いた。

エリザベートと人……じゃない狼……でもない……狼人間？ がそれぞれの武器をかち合わせていた。

そのままくると槍を振り回し危なげなくエリザベートは狼人間を串刺しにする。

流石だぜ……！ 賞賛を送ろうとした瞬間酷く鈍い音が頭を貫いた。

所々燃え焦っていた平原や街とは違い、森は鬱蒼と緑に生い茂っていた。

うっそだろお前何体でも出てくるんかい……！  
殺されるプロの俺に言わせてもらえば獲物はメイスか何かですね

！  
つまりエリザベートが戦っていた狼人間とみた。

ただ背後からの襲撃は予想できなかった……っていうよりサーヴァントを得たことで緩み切っていたというのが正しいだろうか。

自分がもう戦わなくてもいい、何て錯覚してしまった。そんな訳ないというのに。

いつだって最後に自分の身を守れるのは自分しかないのだ。

黒鍵を手に持ち歩を進める。

瞬間金属音。血が噴き出る音を聞きながら振り向きざまに黒鍵を横なぎに振るった。

メイスと黒鍵が弾き合う。同時に片手に握っていた砂を投げかける。

出来た隙を逃さず首筋に黒鍵をねじ込み掻っ切れば、苦悶の声を上げて狼人間は倒れた。

狼人間も心臓をぶち抜くか首を取れば死ぬらしい。

一対一でやる分には脅威ではないのを確認して先へと進む。

幾度も殺した。幾度も血を浴びた。人の形をしていながらあまりにも獣臭い。

赤い毛皮を更に深い赤で塗りつぶす、最早そのくらい単純な作業と化していた。

エリザベートと背中合わせにすれば十中八九死ぬことはない。

彼女は他人を守ることが得意ではない、だがその殲滅能力は目を見はるものがあった。

故に、俺がやつらを倒せなくともとりあえず、彼女が自分の敵を倒すまでに生き残れば良いだけの話であった。

だからと言ってそれが簡単という訳でもなく、黒鍵は既にボロボロだし先ほどから腕がビリビリと痙攣していた。

魔術で強化している上でこれだ。先が思いやられるな。

そんな俺をエリザベートは気遣うように声をかけてくる。

頭のねじが幾つもすつとんとでるとこ差し引けば結構良いやつなんだよあ……あと音痴じゃなければ。

まあ気遣いはシンプルに嬉しい。

大丈夫と答えて歩を進めていった。

激しい金属音が響き散る。

金属が削れる音が、肉が引き裂かれる音が、血が散る音が混じる。

誘いこまれていた——森に潜み、森に生きていた彼らを嘗めきつていた。

俺とエリザベートはやつらの巣におびき寄せられていたのだ。

あまりの数の多さに辟易する。

エリザベートは危なげなく倒すが数に圧倒されてこちらのフォローには回れない。

俺は紙一重で致命傷を避けていく。この際身体のあちこちに当たっていくのは無視だ。

クリーンヒットさえしなければどうとでもなる。

残り三本しかない黒鍵の一本を目に突き立てると同時に制服の上

着をぐるぐるに巻いた片腕を口に突っ込んでやる。

抵抗をねじ伏せ無理やり噛ませてからこちらに引き寄せ他のやつらからの盾にした。

幾本ものメイスがバキバキと盾にした狼人間の背中中の骨を砕く。

その口から力が抜けるのと同時に身体を蹴り飛ばして死体から奪い取ったメイスで頭を砕く。

崩れ落ちる体を飛び越えメイスを躲す。

振り向きざまに一閃。

不愉快な感触が手に伝わる。同時に左肩がぐちゃりと潰れた。

激痛で視界が明滅した。メイスを手放し右腕を支えに方向変換。

鼻先スレスレでメイスが交差する。

かち合わせて怯んだ狼人間の顎を殴り上げ、奪ったメイスで両方の頭を砕く。

骨を砕き続けた俺の頭破壊スキルを嘗めるなよ……！

不意に腹に鈍痛が走り、視界が空転する。

既に左肩の感覚はない、視界は敵で埋まっていた。

幾度も殺した。幾度も血を浴びた。人の形をしていながらあまりにも獣臭い。

流石に多勢に無勢でござる……

完全にリンチからの肉達摩化であった。

人間って実はこんな生き汚いんだな……て思うくらい耐えてしまった。

トラウマが一つ増えた瞬間である……

ノットメイス……イエスソード……

せめてサクツと殺せよな。

ふらふらと進まず最短ルート突き進む。

あつこらつ、狼さんに付いて行っちゃいけません！ちよ、エ、エリザベーオオオオオオ！

幾度も殺した。幾度も血を浴びた。人の形をしていながらあまりにも獣臭い。

エリザベートのちよろさが半端ない件について……



知らない人に付いて行っちゃいけませんって教わったでしょ。

ほいほい付いて行っちゃうんだから……

お陰でリンチルートだったぞ畜生が。

なるべく前に出てルートから外れないよう確実に仕留め、逃げていくやつは放置するようお願いする。

あまりにも必死な形相だった為か若干引かれたが、それでも渋々承諾してくれた。

深追いはせず、手の届く分だけ狼人間を殺していく。

そんなこんなで森を抜けた先にはまだ人のいそうな街があり、更に言えば戦火が飛び散っていた。

再会した立香くんたちはまたもや仲間を増やし、更にはどす黒い巨大なドラゴンと相対していた。

黒々としたまるで現実とは思えないような色の炎が辺りを舐め尽すように焼き払っていく。

エリザベートと一瞬視線を合わせて頷き合う。

同時に俺は死体から剣を剥ぎ取り強化しエリザベートは元気に尾を振り走り出した。

跳躍して振りかぶった彼女の槍が、鱗の間を縫うように突き刺さる。

剣は傷一つ付けられずに弾かれた。

……(・ω・)

めげずに石ころを強化し投げ続ける。

ちよつとでもダメージが通ってくれば……！

あふんっ

再会した立香くんたちはまたもや仲間を増やし、更にはどす黒い巨大なドラゴンと相対していた。

ちよつとあの巨大な尾は躲せなかったですね……

こう……グルンツ！ と来たし身体もバツキバキの粉々であった。

もう少し手心つてやつをですね……加えるべきですよね……ええ、はい……

エリザベートの槍が突き立つ、それと同時に駆けだした。  
一目散に味方の元へ。

しばらくした後にさっきの場所が尾で薙ぎ払われた。  
風圧だけで身体が煽られる。

これだけ離れて風が来るとかやばくね？

急いでマシユの後ろへ隠れて息を整える。

その場にはレイシフトしてきた組以外にも金髪の女性。

茶髪ロングの剣士と白髪の弱っている剣士がいた

——舞い降りし最強の魔龍……うつ、なんか変な電波受信したな。

突然の頭痛を無視して真名を聞く。

ふあっ!? ゲオルギウス!? 竜殺しで有名な聖ジョージ!

んんっ!? そっちはジャンヌ・ダルク!? 聖人いすぎやん……?

そしてそんなビッグネームいるなら勝ち確じゃん?

ん? ジークフリート? 聞いたことないですね……

尚何故聖ジョージを知っているのかと言えば俺の14歳時代の記憶がきらめいたとだけ言っておこう。

因みにあのドラゴンはファブニールってやつらしい。

史実で行けばこのジークフリートがファブニールの天敵とのことだ。

つーか龍殺しとか、創作じゃなくてガチだったのかよ……

ドン引きというか夢が広がるというか、何にせよ微妙な気分である。

ジークフリートの宝具が当たれば倒せるらしいのだが中々隙を作るのに四苦八苦している、というのが現状らしい。

なるほど? 分かりやすい打開策があるのは精神衛生上とてもよろしい。

槍を拾い上げ強化する。

取りあえずこちらに注意を向けさせれば良いのだろうか?

俺とエリザベートで作ろうではないか。

何、問題ない。安心して魔力を貯めて隙を窺うと良い。ついでに傷を癒やせ。俺よりぼろっちいぞ。

ん？ 何？ ジャンヌさんも来るの？ オーケー、頼むぜ。  
勢いよく槍を投擲。素早く飛ぶ槍は——しかして弾かれずに鮮血  
を飛び散らせた。

えっ……んんっ、馬鹿にするなよ……目ん玉と口ん中は固くはでき  
ねえだろッ。

がはは馬鹿め！ 新しく槍を持ち駆けていく。

エリザベートは既に満身創痕に近かった。

流石に彼女一人で抑えるのは無理だったか……

令呪を切つて霊基を再生させる。残りは二画だ。

事情をサラッとだけ説明して武器を構える。

さあ逝くぞ。

黒い魔龍は雄々しい尾を振り回し、鋭利な牙を見せつけるように炎  
を吐き出した。

瞬間身体が虹色に包まれる。その上から浴びる炎はシャワーより  
も生ぬるい。

どころか何も感じない。

“無敵化”これこそがかの聖女——ジャンヌダルクの宝具らしい。

最高の宝具だ……下手な攻撃宝具より数段有用。死ななくなると  
か超最高かよ。

ざっと強化した武器を投げ続ける。

同時にエリザベートへの指示。といつてもそんな大それたことは  
できないのだが。

空を舞う龍に槍を投げ、剣を投げ、兜を投げる。

そのほとんどがダメージとしては全く意味をなさないが、やつとし  
てはウザイことこの上なかつたらしい。

鋭く牙を剥いて迫り来る。

ぐははっ、馬鹿めっ俺は無敵だといつてい——

黒い魔龍は雄々しい尾を振り回し、鋭利な牙を見せつけるように炎  
を吐き出した。

無敵化——無敵って永続じゃないんだね……

一時的な物とか最初に言えし……

そこを考慮し投げるのは控えめに、攻めるのは二人に任せて指示に徹する。

黒い炎が迫りくる——ちよ、躲す手段ないんだってえええ……

黒い魔龍は雄々しい尾を振り回し、鋭利な牙を見せつけるように炎を吐き出した。

無敵でやり過ぎた後に槍を投擲。

口を開いた瞬間二人に強制的に閉じさせる。

何度も同じ過ち死に方をする俺じゃあないんだ——ぜツ

がははと笑う……こともなく前を見据える。

調子に乗ったら死ぬのは既に知っているんだぜ……！！

経験豊富感をアピールしながら指示を出す。

瞬間散った炎が服に燃え移った。

まあまあまあ、この程度脱げば良いだけですし？

あ、これすぐ燃えうつ、あ、消えな、これ……

ジユツ

黒い魔龍は雄々しい尾を振り回し、鋭利な牙を見せつけるように炎を吐き出した。

良い湯加減のシャワーだな。

炎を全力警戒して指示を出す。

火の粉一片でも当たってたまるかよ！

いざという時の為に上着を脱いで火の粉から身を守る。

当然これ以上吐かせはしないが閉じさせた際に溜めてた火が外に漏れ散るのだ。

だが大部分は体内で爆発する。

これが中々……というか一番ダメージが大きく見える。

後はチクチク身体をつつくだけで注意の大部分を引き付けることができた。

徐々にマシユ達の方へ寄せ付ける。

さあ決めろ——！

青緑の光が空を穿ち竜を食い破る。

力強くはためいていた翼は穴が空き、全身から血を流しついにファブニールは失墜した。

派手に鳴り響く轟音と共に戦闘は終わりを告げた――。

瞬間強烈な痛みが走る。

後を追うように血が全身から流れゆく。

終わり告げとけよ……

青緑の光が空を穿ち竜を食い破る。

忘れてもらっちゃ困るぜ☆　と言わんばかりにワイバーンの餌と化しましたねえはい……

落ち行くファブニールを横目にサーヴァントの元へ駆けよる。

同時に緑の竜が剣に引き裂かれて姿を消していく。

助かった……ほつと息を吐きながら全員と合流する。

ジークフリートは力を使い果たしたとかで空に溶けて消えていった。

超ありがとう……！　お前のお陰で生き残れたぜ……！

別れを惜しみながら街へと戻る、少しは休まねば――

瞬間槍が頭を貫いた。

別れを惜しみながら街へと戻る、少しは休まねば――

ふあっ!?　ふざけんなど悪態をつきながら頭を屈める。

同時に槍が後ろの壁に突き刺さった。

え、いや何事だし!?

街の中央に進めば敵の兵士や狼が街を荒らしつくしていた。

ファブニールと狼軍団の二手から敵は来ていた訳だ。

ふらつく身体に鞭を打つ。

全員に逃げるように叫ぶ。

この量だ、今まともに打ち合ったら全滅なのは見えきっていた。

剣を強化し頭を切り飛ばす。

しかしと食い下がる立香くんは怒号を飛ばす。

死にてえのか馬鹿者め。

エリザベートも残るし俺は大丈夫に決まってるだろうが。

早く行け、と叫ぶべば申し訳なきようにマシユ達は走り去っていつ

た。

やれやれ、まったく困ったやつらだ……

見栄を張らなきやよかつたと後悔しながら剣を振るい、傷だらけのエリザベートをフォローする。

すると近くで剣戟の音が響いた。

「誰……つてえ、聖ジョージ!？」

見捨てて置けないとかかつこよすぎかよ……

まあ多分俺だけでは抑えきれないのもこの人には分かっていたの  
だろう。

きつとジャンヌも。

そこでまあ何かしらのやり取りをして聖ジョージが来てくれたつ  
て訳だな。

テンション爆上げである。

一撃一殺。頭か心臓だけを狙って剣を振るう。

脳髓と血が走り、地を暗く塗りつぶす。

首を断つ、頭を割る、胸に突き刺す。

強化した体と武器に身を任せる。

瞬間、鈍い衝撃が腹に走った。

血やら何やらを吐き出させられる。

うーん、無理^^

一撃一殺。頭か心臓を狙って剣を振るう。

ちよつと数が多すぎますかねえ……

こつちくんなああああ！ と力任せに武器を振り回す。

剣を剣で切り裂き敵を討つ。

人だろうが、獣だろうが、関係なしに命を奪う。

やらなければやられるのだ、そんな免罪符を掲げて俺は殺した。

致命傷だけは避けて後は攻撃に全振りだ。

足が払われる。腹に剣が刺さる。頭を切り飛ばす。メイスで叩き

のめされる。

視界が真っ赤に染まった。

いや無理じゃね？

一撃一殺。頭か心臓を狙って剣を振るう。

つーかマイサーヴァント何でそんな遠くで戦ってたよ馬鹿ちゃうん？

でも近くで戦われると被害が尋常じゃないのでやっぱ遠慮しときますね……

あ、つーか宝具で吹っ飛ばせば良くねえ……？  
ずれる視界でそう思った。

一撃一殺。頭か心臓を狙って剣を振るう。  
令呪をきつてエリザベートに魔力を注ぐ。

宝具、開帳——！

凄まじい爆音、暴声。空気が揺らぐどころか空間が悲鳴を上げていた。

ついでに俺の鼓膜が悲鳴上げていた。死んじやう……

音が止んだ時には周りの物の怪共は地に伏し生命活動を終わらせた。

宝具つてすごいね……

この勝負、我々の勝利だ！なんて思ったその時、俺は大きな影に覆われた。

ん？ なだけ

一撃一殺。頭か心臓を狙って剣を振るう。

んんんん！！ ワイバアアアアアン！！ おま、お前空気読めよおおお！！

パクリといかれたわくそつたれ……

お前の血は何色だああと叫びながら宝具を発動させる。

ヴオエエエエエエエ！ と聞くに堪えない声が場を支配し尽くす。

その後によつてきたのはやはりワイバーン……の炎だった。

ふあつきゅー

ジュアツ

一撃一殺。頭か心臓を狙って剣を振るう。

だからファイアーは避けられないって言ってるんだろいい加減にし

ろ！

いやマジやめてくださいお願いします……

兵士や獣、化け物共はその命を散らせた。

瞬時に天を仰ぐ。

すつと腕を伸ばしきつて礼装に仕込まれてる魔術を発動させる。

瞬間強化——同時に魔力弾を撃ち放った。

火を吐く寸前の、大きく開いた口に魔力弾が飛び込み爆裂する。

ワイバーンが驚いたように身悶えし、溜められていた炎が行き場を

無くして爆発を起こし墜落した。

あつ、ふーん、へえ、ら、ラッキー……ゲフゲフン。

これが効率的なワイバーンの倒し方ってやつよ！

調子に乗った所でやってきた緑と赤のワイバーン軍団に目が死ん

だのと言うまでもない。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

本当ならばあのワイバーン軍団と戦うところだったのだが生アスカロンが炸裂してからは聖ジョージの独壇場だったとだけ言うておこう。

ドラゴンスレイヤー、マジばねえ。

上階で戦闘音が鳴り響いている。

扉から入らず気を銜う様に迂回して窓から蹴破り入った。

驚き目を見開いた黒い女性は反射的に真っ黒い炎を生み出した。

ジャン、又……？

ジュワツ

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

もう黒い炎がトラウマになっちゃいそうなんだけど……

こつちに來てから焼かれ過ぎだと思っただけですけど？

ていうか炎操ってたのが真っ黒いジャンヌだったんですけど……

何？ 俺のいなかった短時間で闇堕ちでもしちゃったのん？

2コマもびつくりの早落ちである。

扉を強く開け放つ。



ジャンヌは——二人いた。

意味不明過ぎますね^^

旗付きの槍で裂かれて焼かれた。

熱い熱い熱い。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

ちよつち厳しいですねえ……

二人いることに動揺してたところをグサツジュワツである。

全く、どういうことだつてばよ？

扉を蹴り破つて突入する。

そそくさとエリザベートの後ろに隠れる。

黒いジャンヌは良く見れば俺の知っているジャンヌとの違いが多

く見られた。

俺の知つてるジャンヌが整えられた金の長髪に比べ、黒の方はぎつ

くりと乱雑に斬られたような白銀の短髪だ。

また、常に慈愛を湛えていた瞳は憎悪に満ち溢れている。

そして全体的に黒い。黒っぽい、語彙が無くて申し訳ない。

しかも炎出すつてのが最高のマイナスポイントだよー。

あからさまにテンションを下げながら右へ左へダイビングしながら

ら炎を避ける。

身体に強化をかけようとしたがいい加減魔力が限界だった。

サーヴァント一人、仮契約しただけでこれとか俺が雑魚過ぎてわら

けてくる。

右手の甲で光る最後の一面をチラリと目に入れすぐに離す。

炎があちらこちらを焼き回っていた。

正直水をかけたところで消えそうにないって辺りが最高にどうか

してるよね。

グラグラと揺れる視界を安定させるように顔を抑える。

槍を振り回し、炎を揺らめかせる黒ジャンヌをアルトリア、マシユ、

ジャンヌ、エリザベートの四人がかりで抗戦する。

まあ四人もいれば徐々に徐々に押し切りは始めるのは当然のこと

だった。

今回も結構死んだけど何とかなつたなあ、なんて思いながらそこそこのほほんと戦闘を眺める。

瞬間立香くんが叫んだ。そんな血走った眼でどうしたし——  
ごっ、と鈍い衝撃が脳天からつま先まで突き抜けた。

一体なんだ——と、言う必要はなかった。

視界に映ったのは、いつぞやの腕長野郎と同じ色をした性別の分からない英霊？ だった。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

いや何あれ？ いつぞやのハートキャッチマンみたいなやついたんだけど？

マジでどういうことだし……

謎が謎を呼び最早謎しかないみたいなカオスになってきた。

ただ、取りあえずやつを殺さないと戻れないっただけは良く分かっていた。

魔力切れなのにどうしよう☆

何かないのか何かないのかとポケットを漁るところりと飴が転がった。

ダ・ヴィンチちゃんがくれたやつだ、ちよっとお腹減ったしいただくか。

包み紙をポケットに押し込み飴ちゃんを口に放る。

お、ブドウ味。

俺の好みを把握するとはなかなかやるじゃあないか、

何だか心なし魔力が回復してきた気がする——いや、これ回復してるな？

先程までくそだるかった身体が妙に元気になっていく感覚だ。

これならいける、城内で倒した狼人間から奪った槍を得意げに回して扉をあけ放った。

どこまでも真っ黒な武器と強化し微妙に発光した槍が鏝迫り合いを起す。

重い一撃、しかして腕が軽く痺れる程度に収まる。

魔術の恩恵って素晴らしいね……！

振り下ろされる真つ黒い槍を受け流し、くるりと回した槍を左手でつかんで突き放つ。

重く鈍い感触が武器を通して伝わってくる。

抉るように槍を回すと同時に強烈な蹴りが腹へと突き刺さった。

ゴボリと血液が喉を駆けのぼり吐き出される。

すぐに応急手当をかけて槍を掴みなおして――

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

二体目

ふざけんなである。一体でも限界なのに二体目とかちよつと洒落になつてない。

思わず目を死なせながら俺は扉の先へと赴いた。

黒い槍を防ぎ、躲す。

そろそろか、と振り向けば――黒い巨人がいた。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

黒い巨人は無理やん？俺のトラウマそのものだからね？

振るわれる斧を払われる槍を涙目でかわす。

息が荒い、前に見た時より動きが遅くはあるのだが、それ以上に恐

怖が俺を支配していた。

槍が折られる。腕が飛ぶ。

あまりの痛みで視界が歪む。

ああ、無理。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける。

黒い巨人は二振りの斧を乱雑に振り回す。

空を斬るもその風圧だけで身体が煽られる。

やばいやばいやばい。

斧を警戒し過ぎたか、横合いから出された槍が左胸を抉りぬいた。

如何にもな怪しげな雰囲気の放つ城の階段を駆け抜ける

いや無理無理。

ガクブルしすぎて上手く身体は動かなかつたし頭も回らない。

早くなつていく鼓動を抑えるように胸に手を当てる。

大丈夫、大丈夫。飴玉を放り込んで扉を開けた。

二振りの斧が牙を剥く。  
床に刺さるたびに激しい炸裂音が響き欠片を振りまいた。  
避けた先には鋭い槍。  
それすら潜り抜けた先は炎が揺らめいている。  
ぶつちやけ絶体絶命☆とかなんとか言ってる場合ではない。  
良く見ろ、良く見ろ。  
マジモンのサーヴァントよりか動きはとろい。  
いけるいける。

己を鼓舞して足を踏み出す。  
槍が肌を掠めて通り抜けていく。  
それを握って思いつき引つ張ると同時に手を離す。

子供のときとか良くやったよね、引つ張ってから離すと相手がよろめくやつ。

少しばかり得意げに——なる暇もなく斧が迫りくる。  
強化槍で下に受け流し、大きく跳んで目玉に指を突っ込んだ。  
グジュリと生々しい感触が手をつたる。

不快感に鳥肌を立たせながらその巨体を上りあがってすぐに飛び降りる。

真つ黒な槍が巨体を貫いた。数瞬遅れて斧が槍野郎を殴り飛ばす。  
やっぱり冬木で見た時より“弱い”と確信する。

あらゆる面で普通のサーヴァントより劣っている。  
まあそうでもなきや二対一でこんな上手く立ち回れる訳ないんだが。

唇を舐めて焦燥感を消す。  
されど巨人の動きは鈍ることはなかった。

身体から血のような何かを漏らしながらも最初と変わらぬ速さで斧を振るう。

全く困ったもんだ。槍も躲さないといけないのに。

ただそれでも、全身から黒い粒子に溶けて行っている巨人は後少しで消えるのは察せれた。

早く消えろ早く消えろ。

そう念じながら槍と斧を捌く。

いや、捌くつてのは少し語弊があるか。

実際斧は俺の身体のぎりぎりを掠めるせいで欠片が肌に刺さるし、槍は浅くはあっても確実に俺の身体を裂いてるし穿っていた。

俺の根気が尽きるか巨人が消えるか、それが勝負の分かれ目と見た。

槍とタイマンならぎりぎりいける。

斧を受けてからあからさまに動きがおかしいのが見て取れるから。少しづつ、少しづつ巨人の凶暴さが失われていく。

あと少し、あと少しだ。

体力の尽きかけふらついた瞬間槍が腹を貫いた。

もう見慣れた赤い液体がどろりと零れ、同時に巨人が姿を消した。槍をがっしりと掴んで引き寄せる。

全力で突き出した槍がガードした腕を貫き顔を穿つ。

カウンター気味に胸に入った拳によるめきながら槍を引き抜いた。主人の後を追うように武器もまた姿を消した。

達成感に満たされながらジャンヌ達を見たら丁度決着がついたところだった。

黒いジャンヌの体を白いジャンヌが剣をもって刺し貫いていた。

室内を焼き焦がしていた炎はいつの間にか消え、煙だけが燻っていた。

何故、どうして、私が負けるはずがない、と子供が駄々をこねるようにわめく黒ジャンヌ。

いやさ、お前の負けだよ。負けたんだから、さっさと死んで俺を帰してくれ。

しかし彼女を宥める人物が一人だけいた。

生前——いやこの時代においてもジャンヌ・ダルクを信じ、付き従った騎士。

その堕ちた存在。ジル・ド・レエ。

禍々しい書を片手に持ち、飛び出てしまいそうなほどに大きな目を血走らせていた。

ジル・ド・レエは黒ジャンヌを今はゆつくり休め、と信じられない程穏やかな笑顔で見送った。

そして姿を露わにしたのは——探し求めていた聖杯だった。つまり黒ジャンヌはその存在そのものが聖杯であり、ジル・ド・レエの願望そのものだったということだ。

簡潔に言うなら黒ジャンヌはジル・ド・レエが作った”僕の考えたさいきょうのさーぐあん”だったって訳だ。

大分キマっちゃってんな……

エリザベートはもうこの場に留まるのすら限界な様であった。

仮とは言え主従そろってこれとは笑えちゃうね。

盛大な最後っ屁かましてこーぜ。

最後の一面を使い、魔力がエリザベートに注がれていく。

さあ、最高の歌声聞かせてやれよ。

バートリ・エルジエーベト  
鮮血魔嬢 おおおお!!!

暴力的な音の嵐が吹き荒れる。

ジル・ド・レエの生み出す海魔というヒトデみたいな触手の多いキモ生物が一瞬で消し飛んでいく。

声が止むとほぼ同時にエリザベートが消えていった。

またの機会があったら今度はしっかりとプロデュースしてやんよ。

そんな軽口を叩きながら別れを済ませた。

勝負は既に着いたも同然だった。

溢れん限りに蠢いていた海魔たちはエリザベートの宝具で消え去り、ジル・ド・レエ本体もセイバーとジャンヌ、マシユにより袋叩きにあつていたからだ。

彼は最後の力を振り絞り、室内を破壊し巨大な、それも城をも飲み込むくらい大きな海魔を生み出した。

されど侮るなかれ、俺とエリザベートは切り札を使い切ったが立香くんとセイバーは違った。

いつぞや見た光とは真逆の、全てを浄化するような極光が海魔ごとジル・ド・レエを呑み込んだ——。

聖杯がころりと地に転がったのを回収する。

同時に地が、空が、空間が激しく振動を始めた。

ドクターからの連絡が入る。

この特異点の時代の修正は終わり、元々の形に戻ろうとしているとのことだ。

俺たちとジャンヌは別れを惜しむ暇もなく別れをすることになった。

といってもまあ俺はほぼほぼ単独行動だったから接点はほとんどなかったのだが。

別れ際に見透かしたような、憐れむような瞳で頭を撫でられた時は不覚にも泣きそうになったのは秘密だ。

どうにも捨て置けないとかなんとか。

まあきつと立香君がその内召喚するっしょ。そんなことを言いながら俺たちは現代へと帰還した。

カルデア司令部を見た瞬間気が抜けた俺が気を失ったのは言うまでもないだろう

— Order Complete —

## 偉大なるローマ@無限ループ

主人公とは得てして困難にぶち当たり、またそれを乗り越える存在だ。

常に奇跡を起こし、努力を重ねて自らの壁を打ち崩す。

その様を見せることで周りにあらゆる感情を与える、人々の理想ともいえる。

ここ、カルデアで言えば立香くん（ちゃん？）がそれにあたると言えるだろう。

カルデアに集ったマスターの中で唯一偶然助かり、成り行きでデミサーヴァントと化した後輩と契約するとか羨ましいくらいに主人公ではないか。

ましてやその後、流れるように二つの聖杯を回収するなんて尚更だ。

しかし——いや、だからこそと言うべきか、立香くんは大きな壁の前で右往左往していた。

それは凡人だから故の苦惱、天才とは言えない彼だからこそ思い詰めてしまった、悩むことのできたからこそ当たった大きな壁だった。

一言でまとめるとしたらそれは“恐怖”

己が傷つくことへの恐怖、仲間が倒れることへの恐怖、敵対する者への恐怖、これから何が降りかかるのかわからないことへの恐怖。

ありとあらゆることへの恐怖が彼の行く先を阻み、また彼の心を縛っていた。

きっとそれは第一特異点により生まれた物だろう。

冬木の時と違い、冷静に物事を判断できる状態で臨み、そして目にした光景が焼きついたのだ。

多くの死体を見ただろう、多くの死にゆく様を見ただろう、多くの敵を見ただろう。

その一つ一つが彼を蝕んだのだ。

まあ、つまるところ彼は——部屋に引きこもった。



いやまあ、正確にはしばらく一人にしてくれと言われただけなのだが。

異様なまでにマッシュが心配しているしドクターも必死こいてケアを毎日行っている。

まあ当然のように門前払いなのだが。

結果的に今、カルデアは次の特異点探しと立香くんのメンタルケアの二つの難題を抱えていた。

ぶっちゃけ立香くんに関しちや放置しかないと思うんだけど、どうなんだろうか。

なーんて考えていたらその立香くんからお呼びがかかった。なぜゆえ……

内容としては俺の考えていたことで概ね正解だった。

立香くんは明らかに怯えていたし、恐れていた。

それも当然だ。聞いた話、立香くんは適性があるってだけでスカウトからの半強制連行だったそうではないか。

いや俺も同じ流れなんだけれども。そこは先に来てたことによる経験が活きているっていうかね？

彼の場合こっちに来た瞬間アレだったし。

話を戻そう。彼は恐怖だけに苛まれていた訳ではなかった。

プレッシャーだ。周囲からの期待に押しつぶされそうになっていた。

人類を救わなければならない、そんな身の丈知らずな願いに縛られていた。

正直なところ、俺にできることも何もなくあった。

それは彼自身の問題だし、本当に申し訳ないのだが俺も俺で自分のことで手いっぱいなのだ。

だけれども涙を流して訴えかけてくる彼に俺は何もいう訳にもいかず共感を示しつつ一緒に頑張ろうな！　みたいなそんな感じのことを言い含めて彼の部屋から立ち去った。

全く、泣くまでため込んだりするなよな。

いや、それも仕方ないと言えば仕方ないのだから、少しでも支えになりたいとは思わせられたのだった。

歴史や魔術の勉強したりして一週間を過ごした後、彼はややきりつとした面持ちで部屋を出た。

サーヴァントたちやドクターたちの努力のお蔭だろうか。

まあ覚悟が決まったのなら文句はない。

取りあえず戦力を増やそうか、というドクターの一言により俺たちは召喚サークルへと足を向けた。

石を投げるのは立香くん——ではなく俺だった。

またはぐれたときにサーヴァントいないとかやばくね？ いややばいでしょ、という話し合いの結果によるものだ。

超有難いが俺の手持ちはほんの12個。いざとなったら立香くんのを頂く方針だができればそうはしたくないものだ。

コロコロと四つ投げるとサークルが青く輝く。

爆発するようなフラッシュの後に現れたのは——

「……物好きな人ですね。生贄がお望みでしたらどうぞ自由に扱ってください」

高身長、腰まで伸ばした綺麗な紫髪。両目を隠したとても妖艶な女性だった。

つーか冬木で見たやつとくりそつなんですかとおおお!?

ただこっちの方がイカレてる感を感じられない。

多分武器なのであろう鎖のついた大きめの釘(?)が鈍い光を放っていた。

ま、まあ何はともあれ俺はついに自分のサーヴァントを手に入れたのであった、やったね!

ふふふん、と上機嫌のまま残りの石を投げ放つ。

二体目が来てくれても良いんだぜ!!

ゴロゴロオンツ。

玩具の魔法のステッキと色とりどりの石が落ちていた。何歳用の

玩具じやボケが！

ペコペコ光るそれを俺は無機質な目でカード状にして懐へと差し込み立香くんと場所を交代した。

立香くんは超幸運の持ち主だった——という訳でもなく、しかし俺より良いのは当然至極でサーヴァントがまた一人増えていた。

金属の巨大な十字架を持った痴女（聖女）である。

思わずポロツと口に出した瞬間笑顔で顔面を掴まれ訂正するよう“お願い”されたがそれはそれ。

彼女はマルタと名乗った。

因みに立香くんたちは彼女のことを知っているらしい。俺がいないうちに戦ったとかなんとか。

まあ過ぎたことは大して興味もないのだが。

取りあえず戦力が強化されるのはとても良いことだ。

紫の女性はクラスをライダー。名をメドゥーサと言った。

んんんっ！ マジで冬木の紫じゃねえか！

だがまあ冬木で会ったモ時に比べれば若干……いや結構ネガティブだ。

自虐多すぎい！

そんな自分のこと怪物とか言うなし……いや確かに冬木の方は超モンスターしてたけどライダーさんそうでもないじゃん……

まあそんなこんなで新しい仲間を加えたカルデアは更に活気を見せて活動を始めた。

目下のところサーヴァントたちの強化である。所謂霊基ってやつ  
の強化（再生？）だ。

何故そんなことをとえばカルデアの召還方法ってのは完全完璧なものとは程遠いものらしいかららしい。

簡単に言うならいっぱい召喚できるけどどんなに強いやつでもレベル1スタートだよ！ って感じ。

それを元の力に戻すのに種火とか言われる特殊な素材が必要なの

だ。

因みにこの種火、一定の敵からしか採取できない。そこら辺に落ちてるわけではないのだ。

人の腕を模したような敵からしか取れないのだ。これが結構気持ち悪かったりする。

レイシフト装置で腕の良く集まるところへ出張しては種火を持ち帰る日々だ。

朝も夜も死んだ目で周回する様は割と気持ち悪かったに違いないかっただろうとだけ言っておこう。

ライダーさんの 絆が 深まった！（と思いたい）。

絆と言えば気のせいかもしれないが立香くんの距離が近い気がする。

一世紀ローマ。

今でこそ暴君と知られる皇帝ネロが国を治めていた時代であり、その中でも何か特筆するような戦いがあったような時代ではないらしいのだが、しかし今回のレイシフト先はそこらしい。

何があったとかちよつと想像つきませんね……

無機質な女性の声を聞き流しながら俺は光に包まれた——ライダーさんの手を握りながら（チキン）。

仕方ないだろ！ またはぐれたら眼も当てられないだろおおお!?

光に包まれ落ちた先は——もろ戦争地帯だった。

あつせ、あつせい、ほうようううう！ とか叫んでる変態筋肉野郎が走り回る地獄だった。

な、なんだここは……

隣にいるライダーさんですら若干引いてるレベル。

ていうか今回もはぐれたな。これでライダーさんもいなくなったらマジで終わってた。

正しく不幸中の幸いと言うやつだった。

俺とライダーさんは顔を合わせ同時に頷いた。

この場ですべきこと、それ即ち——闘争。ではなく逃走。

キヤツホイニツゲロオと言わんばかりに駆け出し途中で抱えられて風を切った。

むしろ風になったまでである。

ぶつちやけ宝具ぶっぱも考えたが奇声を上げて駆けまわっている変態、あれ多分サーヴァントだしスルーが一番賢いと見たのだ。

現状じゃ人々を蹴散らしまくるゴリマツチヨ。その強さはどこまでなのか測れない。すぐさま離れなくてはと危険を察知しまくっていた。

兵士たちがゴミのように宙を舞ってく中走り抜け、声が大分遠くなったところで安心感を得る

周りに兵士たちはいたがライダーさんがいる以上大した脅威ではない。

それでもなるべく刺激しないよう通り抜けていく——つもりだったのだがやはり現実はそう甘くない。

赤髪のえつちなお姉さんに声を掛けられてしまった。

サーヴァントの痴女率高すぎないか？

赤髪の女性はブルーデিকাと名乗った。

瞬間俺は令呪を切った。ライダーさんが困惑しながらも宝具を発動する。

鮮血から生まれる白き天馬。それにライダーさんが乗り空を駆ける。

太陽の如き白光を放つそれは一筋の光となって全て焼き尽くした。

ブルーデিকা。勝利の女王ブルーデিকা。

アーサー王伝説より前のブリテンにて女王の座についた悲劇の女王。

かつてローマ帝国——それこそ今いる時代の皇帝”ネロ・クラウディウス”に恥辱の限りを尽くされた後に殺された女性だ。

当然ながら史実しか知らないが個人的には結構好きな人物だった。

だがまあ私情は持ち込むのはタブーだ。故に俺は彼女を敵と判断した。

何故なら先程まで通信していた立香くんたちが——噂のネロ皇帝を助け、味方につけたと聞いたから。

史実でいけばきつと彼女は敵対するであろう。いや、むしろ絶対と言ってもいいかもしれない。

決めつけもいとこだが障害は早めに消しておきたかった。

だけど、だけど少しだけ——罪悪感が胸に残った。

まあ取りあえずはライダーさんを労おう。驚きながらも令呪すら切った意味を察して宝具の発動をかましてくれた彼女には感謝しかない。

天馬が消えたところでこちらを振り向いたライダーさんの元へ駆けよる。

ライダーさんが悲鳴を上げて逃げてと叫んだ。

ばつと後ろを向いたそこには——マツスルがいた。

あつせい！

赤髪の女性はブーデイカと名乗った。

めっちゃ抱きしめられた……汝に抱擁を！ とか……言われて男

(ましてやマツスル!)に抱きしめられる趣味はねえ……

多分あいつバーサーカーだし音と衝撃に引き寄せられたな。

つまり宝具は使えない、しかし白兵戦だと周りの兵士が邪魔すぎる。

ここは逃げるしか……? しかし逃げれば確実に背中を狙われる

……

もしかして地味にやばい?

と思つたところで降ってきたものは意外にも武器ではなく言葉であつた。

更によえば思いつきり予想外な言葉だつた。

“あなたたちもはぐれサーヴァント? それなら私たちと一緒に戦わない?”

すまないが事情説明プリーズ……

時代は二つのローマで割れていた。

即ち、ネロの収めるローマ帝国と歴代ローマ皇帝のサーヴァントたち率いるローマ連合。

まあ間違いなくこれが今回の特異点たる由来だろう。

立香くんたちとの情報のすり合わせもした結果この話は本当かどうかのも確信した。

それにしても味方だったとか……申し訳ないの極み……

あっせい！ あい！ ほうよおおお！ とか叫ぶ変態はやはりバーサーカーだった。

その名をスパルタクス。

……教科書に載ってるレベルで実は有名な人物だ。

しかしまあ、なるべく近寄りたくはないよね。

しかも何となく言ってることが分かる辺り最高に近寄りがたい。

今回は序盤から一回しか死んでもいないし味方もすぐについたしかなり出だしは好調だ。

招かれたキャンプ内でブーディカに戦況や事情についてより詳しく話し合いをする。

状況は割と深刻だった。

兵士の半分ほどは敵さんに取られ、また敵サーヴァントの方が数が多いとかなんとか。

ここガリアもまた苦戦地帯だった。というか現状一番の激戦区らしい。

正直暴走するスパルタクスの手綱を取りつつ上手く兵士たちに命令を出すのが難しいってことだ。

ブーディカも攻撃タイプではないし相手の猛攻を耐えしのぐのが精一杯だった。

まあでも、お陰で当面の目標は決まった。

ガリアの戦線を押し上げる。

激戦区であるらしいここにはどちらにせよ立香くんたちは来ることになるだろうし、ここでの協力体制を強化しておいて悪いことないを見た。

余談だが彼女たちはあくまでネロの味方になったつもりはないら

しい。

敵の敵は味方的な？ そんな感じ。

激しい金属音が、戦士たちの怒号と悲鳴が重なり微かに耳へと届く。

そう、微かにだ。

何故かと言えば俺は今回戦いに——参加していないからだ。

いやもちろん俺は参加する気満々……だったという訳でもないが行く気ではあった。

しかしそこでライダーさんに怒られたのだ。

曰く——“てめえすぐ死に行くんだから後ろにすっこんでろ”

そ、それでも指示出しか……と粘ってみたが、乱戦になる中雑魚を守りながら戦う方が難しいとのことだ。

いやまあ当然なんだよな。

むしろ今まで最前線で戦ってた俺の感覚がおかしかったのだと思

い知らされた瞬間であった。

マジで開いた口がふさがらなかったぜ……。

てことで俺は野営のキャンプで十数人の兵士たちとぼけつと周りの警戒をしていた。

まあ特に何も無いだろうしちよろいもんだよねー。

ほわあと大きくあくびをしようとしたら息の代わりに血が吐き出

された。

はい？

激しい金属音が、戦士たちの怒号と悲鳴が重なり微かに耳へと届

く。

何故かお腹から剣が生えてくる案件勃発。

いや意味が分からないんですけど？

敵の暗殺者がこっそり近づいてきてたとか……？

いやあり得ないんだけどそれしか考えられない。

背後に警戒を寄せつつ支給された剣の柄を力強く握りしめた。



不安と焦りから汗がダラダラと流れる。

足音が聞こえた瞬間剣を抜き放つて後ろを向いた——つて味方かーい。

休憩しようぜと飲み物を渡してくれる超好青年だった。最高かよ……

両手で受け取りちびちびと飲み始める——つてなんだこれ何か美味しくな……景色が歪む……？

全身が弛緩して力が入らない。

あ、これもしかして毒——

激しい金属音が、戦士たちの怒号と悲鳴が重なり微かに耳へと届く。

これ裏切り者がいますね……

あの好青年、笑顔で毒飲ませてくるとか中々やるじゃあねえか……背後から近づいてくる足音を聞きながら剣を軋ませる。

音が止まった瞬間剣を振り切った。

真っ赤な血が広がり短剣を手に持つ男が驚きに顔を染めて力なくその場に倒れた。

さっきの好青年じゃねえ……二人組だったってことか……？

最悪だ、と愚痴を吐いて好青年の割り当てられた場所へと赴いた。

よう、と肩に手を置き振り向いた瞬間首へと剣をねじ込む。

もうすっかり慣れた感触に不快感を感じることもなく死体を投げ捨てた。

さーてこれ、どう説明しよつかなあ。

頭を悩ませながら元の場所へと向かって——剣を跳ねるように振りぬく。

甲高い音と共に短剣が宙を舞った。

もう一人——!?

うっそだろど畜生が。

離れていた距離を一気に縮める。魔術師なめんなよ。

首筋をかつさばいてスルリと納刀。

マジで慣れたもんだな、と薄く笑った。

こりや他の奴らとか大丈夫なのだろうか、そう思い待機場所であるキャンプを覗いたそこは――血の海に沈んでいた。

なん、だこれ。

俺が殺したのが三人、ここにいるやつらが九。残りは二人。

果たして残りは敵か味方か……音もたてずに九人殺したのだ、敵と見た方がいいな。

裏切り者多すぎだろ……最悪だ。

ドクターに連絡しようとしても何だかうまく繋がらないし。

いや繋がるには繋がるんだがくっそ回線の悪いテレビ電話みたいな……ばっつばっつで何喋ってんのかわからないレベルだしモニターはノイズ塗れで何も伝わらない。

状況が悪すぎるだろ。フラフラとした足取りで出ようとした瞬間足元が吹き飛んだ。

はあ？

激しい金属音が、戦士たちの怒号と悲鳴が重なり微かに耳へと届く。

今度はスープを持ってきた好青年の首をすつとばしてすぐさまキャンプへと駆ける。

じゃっ、と勢いよく布を開くとやはりそこは血の海と化していた。すぐさま飛び退き短剣を持った男の腹をかつさばいてから、悠々と見張りをしているおっさんの頭をかち割る。

残すは2人。柄を握る力が強まる、慎重に動かなければ。

足音を立てることなく周りを探るが人影は見当たらない……

てつきり俺を排除しに来ると思ってたんだがそんな様子も見られない。

逃げられたか？ だとしたら割と最悪だ。

ただでさえギリギリの拮抗を保っていた状況が完全に瓦解してしまふ。

いて欲しくはないがいてくれよと頼みながら食糧庫へと足を向けた。

——いた。

剣を血で濡らした男が二人。

片方はここをブーデイカに任された隊長である。

世も末だなあ、と思いつながら俺は魔術を発動した。

いつぞやの吸血鬼を彷彿とさせる光弾が宙を駆る。

激しい衝撃音と共に血が飛び散った。

片方が警戒すると同時に剣を胸元に滑り込ませた。

強張っていた身体から力が抜け切り地に落ちる。

これで全部かあ、とやり切った感を味わいながら野営の中心に戻ろうとして勢いよく飛びのいた。

三……人……目……？

いやおかしいだろおおおと叫びながら互いの得物を打ち合わせた。

今までに比べてあまりに軽い手ごたえ。

まあいくら兵士と言えど人だし。この時代の人と言えど魔術で強化した体には敵わんよねー。

当然当然、と打ち合うが攻めきれない。

何か上手くね……？　と思つたが現役兵士が剣の扱いに長けてるのは当たり前のことであることに遅まきながら気づく。

当然、俺にはそれに適うだけの技量はない。ただそれなら力で押し込んでやる、と更に魔力を強めて叩き割った。

いやーびびりましたね！　と身包みを漁る。

これ……うちのこの兵じゃな——！？

瞬間矢が目の前に突き立つ。

俺は察した。超察した。

これ敵さんの方が何枚も上手だ——！

挟撃だ。気づかれない内に回り込まれていた。くそつったれが。

令呪を切った。遠くにいるライダーさんに莫大な魔力量を流し込む。

これが別れる際に決めた取り決めだ。

俺一人ではどうにもならない事態になった時に送る緊急信号。敏捷の高い彼女なら十分かからず来られる故に決めたことだ。早く来てくれと願いながら俺は剣を握りしめた。

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

首をかつきりそいつの身体を矢からの盾にする。

同時に二本の剣が体を貫いた。

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

いやこれ戦うと死しか見えませんねえ…

逃げちゃえ逃げちゃえと走り出すが背中を向けた瞬間あほみたい矢が突き刺さった。

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

いや無理ぽ（^q^）

どうすれば良いのかなあ、と身体を強化し武器ごと敵を切り倒す。

降りかかる矢は先ほどと同じように対処し力の抜けた身体を両手で投げ飛ばした。

鈍い音と一緒に何人かが怯んだ。

同時にその倍じや利かない数が押し寄せる。

槍が剣が視界を占領した。

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

ふざけんな。

どうすんのこれ？ どうしろってんの？

盾代わりに死体を背負って逃げ出したが重すぎて追いつかれた、無念。

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

俺は気づいた。鎧剥ぎ取って逃げりやいいんだよ！

剥ぎ取る暇はありませんでした——

甲高い音と共に血液が大地を濡らした。

詰んだ……

どうにもならなくねえかこれ？

ここで終わりのない終わりを迎えてしまう未来（今？）しか見えな

い。

どうにかしなければ、焦燥感に駆られて叫びをあげた。  
しかしそれは虚しく消える。

……  
ところで気づいたんだけど俺ってば礼装ゲットしたんだったな

甲高い音共に血液が大地を濡らした。

いや増えたって言っても少女が欲しがるとような魔法少女☆みたいな玩具なんですけどおおお!?

しかしまあ仮にも礼装。カードから具現化させて片手に握る。

瞬間俺は光に包まれた——

キラキラと光る真つ赤な衣装を身に纏い、魔法☆なステッキを握った男がそこにいた。

ていうか俺。超俺。絶賛死にたい。

早く、早く俺を殺せ!! 俺のメンタルがどうなっても知らんぞ!?

ああ無理きつい……

人としての尊厳が著しく失われて行ってる気がする……

一周回って段々テンションが上がってきた俺はステッキをぶんすか振り回した。

瞬間およそ魔術とは言えない純粹な魔力が放射状に閃いた。

それに触れたやつらがさくさくと切り裂かれていく。

……?

俺は思考を停止させてステッキを二度三度と振り回した。

やはり魔力が色々な形となって敵を叩きのめしていく。

最高かよ……

何が起こったのかちよつと良く分からないが魔術の質まで高められているようで、接近戦でも先ほどよりぐつと楽に戦えている。

バカスカと魔力を撃ち放っているにも関わらず自分の魔力を使っている感じはしないのが少し不安だが、それよりも高揚感が打ち勝っていた。

まだまだ行くぜーと大きく振りかぶると同時に視界が揺れる、鈍器で殴られた——?

自動的に発動された障壁がそれを防いだが衝撃を逃がし切れずに思わず後ずさった。

その隙を縫うように多くの剣や槍が押し寄せてくる。

ステツキで弾くが如何せん数が多すぎる。

今までとは比べ物にならない程の速さで対処はするがそれでも尚足りない。

ピシリとステツキに罫が入った。

同時に礼装としての効力を失ったように光を失い俺の姿も元に戻る。

ちよつちまずいですねえ……

どう動くべきかと思いを巡らせた瞬間切っ先が眼前を支配した。

あつ無理でーす。

まあ次は上手くやるさ。

諦めると同時にドドオン！ と鈍い音が響いた。

瞬間ぐいつと何かに引っ張られる感覚。

咄嗟に抵抗しようとしてその手がライダーさんのものだと気が付いた。

な、ナイスタイミング……！！

残った敵兵もライダーさんの手によりみるみると姿を消していく。

それを見ながらようやく助かったことを実感して膝をついた。

やがて戦いを終えてきたブーデイカ達と俺は傷を癒しながら事情を説明し合った。

まずあちらの結果は上々……これまでにない程の快勝だったとのことだ。

サーヴァント一人で戦力が大幅に違ってくるというのを如実に現わしている。

また、次辺りで相手のサーヴァントも出てきそうとも言っていた。だがまあそんな朗報ばかりともいかない現実だ。

良いニュースには大体悪いニュースがつきもので、当然ん悪いニュースはこちらのことだった。

俺以外の兵は裏切りにしろだまし討ちにされたにしろ全員戦死。  
更には敵さんの部隊が襲い掛かってきたせいで設備も無事とは言  
い難かった。

あれだけ暴れたし当然ともいえるだろう。

その点についてはすまなかつたが仕方なかつたと許してほしいね  
！

テヘペロと謝り事なきことを得た。いやペロってはいないけれど  
も。

ところで今戻ってきた兵士どもに裏切り者とかいない？ 俺もう  
そこら辺超疑心暗鬼なんだけど……

何だか色々と話してくれたが要約すれば正直信じるしかないよ  
ねーといったものだった。

いやまあ確かにそうなんだけれども。

今後はライダーさんから離れられねえなど確信したのであった。

ついでに今回の反省も踏まえてライダーさんとは極力離れないと  
いうことで話は固まったのであった、まる。

そういえば通信は復活していた。いやおそい……

小さな小競り合いを繰り返し数日を過ぎた後にやってきた立香  
くんたちと合流し、更に勢いをつけた俺たちはガリアの敵本陣へと攻  
め込むことと相成った。

いやーさくさくと進みますねえ……

敵兵をちぎっては投げちぎっては投げを繰り返すように進撃して  
いく。

合計で四人ものサーヴァントがいるのだからそれも当然のことで  
はあるのだが。

そこにダメ押しのようにブーティカとスパルタクス達がほとんど  
を引き付けているのだから、楽なことこの上なかつた。

むしろ俺とかマジで何もしてないレベル。

精々あつちから敵来てるぜ！ とかほざいてるだけなまである。  
だつて言わなくてもどうにかしちやうもんだから仕方ないよね！

そんな風に調子に乗っていたらドクターが回線を開いた。魔力反応ありとのことだ。それはつまり人以外の敵がいるということ。

サーヴァントかあ……やだなあ……とため息を漏らしながら走れば現れたのは岩で出来た歪な人形だった。しかもでかい。

初見だし何してくるか分らんけど取りあえず先手必勝、何かする前に殺しや良いつしよという脳筋的発想を元に俺は光弾を打ち込んだ。パアツと弾けて表面を削る……あつ、これ俺単体だとダメなやつです。

ライダーさんの鎖付きの短剣（釘じゃなかった）が突き刺さる。

鎖で雁字搦めにした後に持ち前の怪力で破壊しつくした。

粉々ですよ粉々。

流石だぜっ！ と褒め称えるのも束の間。

次々と湧き出てくるそいつらに俺は目を死なせた。

岩の人形——ゴーレムは脆くはあるがその分一撃が苛烈かつ強大だった。

受けたら俺は当然死ぬとしてもサーヴァントまで軽くはないダメージを受け怯んでしまうだろう。

ことでつまりはやられる前にやれ、というシンプルかつ簡単ではない攻略法が確立されてしまった。

攻略方法とは一体……と思うが現状これが一番なのだ。

まあ戦うのはサーヴァントたちなのだが。

俺と立香くんはちよい離れて指示とか援護である。

正直俺必要なくね……？ となりそうになるがそれはそれ。

こんな俺にでもできることがあるはず……！ なんてかつこつけながらピュンピュンと魔術を飛ばしてみる。

全く効いてる気配がないので顔を狙っているが、はたして役に立っているかと問われれば即答せざるを得ないだろう。役には立っていない！

でもなんかしたいじゃん……

そんな無駄なことをしている内に戦闘は次々と進み、いつの間にか



ら本陣へと踏み込んでいた。

そういえば地味にネロ皇帝ってサーヴァントじゃないらしいんだけどめっちゃ強いな。化け物やん。

自らを皇帝と名乗る赤いデブがいた。あれでセイバーらしい。つ、強くなさそう……

そんな嘗め腐ったことを思いながら戦闘は始まった。

見た目に反してふくよかな腹をした男は恐ろしい強さを持っていた。

完成された剣技、計算されつくされた戦略。

うーん攻めがたい。

これが赤デブを全員で叩くならまだしも、当然のように護衛としていた兵やゴーレムがうざすぎる。

単純に数が多いのだ。

今度ばかりは周りに大きく戦力を裂く訳にもいかないし、自然と俺たちを守るのがマシユちゃんやんで立香くんサーヴァントが赤デブを相手にし、ライダーさんが周りの殲滅を基本とするように戦い始めた。

熾烈な戦いだった。

上手いこと赤デブと戦えない。周りの兵たちを動かすのがうますぎる。

つーかゴーレムとかいつの間にか増えてんだけど、どっから出てきてんだよ。

ある程度自衛のできる自分より立香くんを中心に守ってもらい、代わりにドクターのナビをこちらに回してもらおう。

マシユの盾により気絶に追いやられた兵の剣と兜を奪い強化をかけて前を見据える。

といっても積極的に攻め入ることはせずに精々近寄ってきたアホどもを蹴散らすくらいだ。

立香くんへの影響を考えて殺しはしない。

いやもう既にたくさん見てるかもしれないが、あまり見るべきもの

でもないのも事実だ。

鞘にしまったままの剣で頭を狙って振りかぶる。

俺はなるべく対人だ。

ゴーレムなんてマシユたち任せである。

岩の欠片が飛び散りその上に人の身体が力なく崩れ落ちていく。

あの赤デブの護衛だけあつて一人一人の練度が高くて困る。

相手の技術を魔術ありきの力押しでねじ倒す。

さあ次々と振り返った瞬間に岩の拳が突き刺さった。

何故唐突に現われたし……

岩の欠片が飛び散りその上に人の身体が力なく崩れ落ちていく。

何か……地面から生えてきたんですけど……

え？ なに？ 自然発生的なあれなの？

マジかよドン引きです……

これ実はライダーさんの近くにいた方が安全なんじゃね？

そう考えた俺はライダーさんにひしつと引つ付き援護をしていた。

俺がいけないことでマシユは立香くんを守ることに集中できるし、意

外と良い案だとは思うのだが。

人ならざるものを新礼装——ルーンストーンで破壊していく。

戦う手段がないよお……と思つてたらライダーさんに礼装使えよ

と言われてハツとしたのは言うまでもない。

にしてもこの石めっちゃ便利だな……

いつぞやのキャスニキを彷彿とさせるような炎とか出ちやうし最

高かよ……

しかも普通に強化するよりずっと強力な力を得られるしちよつと

これは流れが来てますね。

スルリとほぼ抵抗なしに岩を切り裂きライダーさんが砕いていく。

ただやはり拳だけはまともに打ち合ったら腕がイカれるのでパス

の方向で……

粗方片づけた。

兵は地に伏しゴーレムはただの瓦礫と姿を化していた。

残った赤デブもそろそろ満身創痍といったところだった。

ところで赤デブの名前はユリウス・カエサルらしいんだけどそんな事実認めたくなかったのは俺だけではないと思う。

あのカエサルがあんなにピザとコーラが似合いそうな体型とかマジ……

だがそんな彼もやはりサーヴァント。その剣の腕前は並み以上なのは確かだった。

といっても戦力に差がありすぎる。良く抵抗した方だと言うべきだろう。

カエサルは黒幕の存在を匂わせる発言をしながら美女に倒されるのは悪くない、と姿を消した。

これまだ敵がいっぱいいるってことですよねえ……思わず白目をむいた。

ついでにネロは目を見開いていた。か、カエサルだとう……!? 的な。

翌日。俺は何故かエキサイティングな船の上で顔を真っ青にしていた。

いやマジこれ無理吐きます……

口から虹を吐き出しながら俺はネロ公を恨んだ。

何故なら今船を動かしているのはネロなのだから。

何か帰り道の最中農夫に神様でるだべ！ とか言われたから詳しく

聞いたところ、海を挟んだ島に神様が出るらしいのだ。

右へ左へ何で横転しねえんだと疑問を投げかけたくなるような挙動をする船は、しかし見事に噂の地へとたどり着いた。

因みに現実的に考えて神様はちよつとあり得ないらしい。

ドクターが小難しいことを並べて否定していた。

——のだが現実には小説より奇なり、という言葉は本当なんだなつて。

神はいた。ロリっぽい神が。

紫の髪を二つにまとめた妖艶とも言えるような美少女(神)がそこ

にいた。

いわゆる神霊ってやつなのだとか。英霊より格上と考えていいの  
だろうか。

ところでさっきからライダーさんが震えているのは何でだろうか  
？

お姉さま？ ん？ 誰がかな？

え、その神様がお姉ちゃんなの？ ということはつまりライダー  
さんは神だった……？

ステンノと名乗った神はライダーさんの真名——メドゥーサ——  
を呼び思わず総毛だつような笑みを浮かべた。

ちよつとフルフルしながらライダーさんは彼女の元へと行こうと  
したので腕をひつつかんだ。

いやうちのサーヴァント誘惑するのやめてくれます？

キリツとした感じで言ったらめっちゃ睨まれた漏らしそう助けて  
くれ。

た、助けてえええと立香くんたちの後ろに隠れようとしたがぶつ  
ちやけ怖くて足が動かなかった。

そのまま話を聞いていたら何か洞窟にお宝を取りに行く話になっ  
てしまった。

本当ならライダーさんを睨きたいけど何か変なのいるし今回は諦  
めるぜ！ 何てことを言っていた。

洞窟はじめじめとして更にはモンスターが蠢いていた。

何か……囲まれてね？

うきやああああと叫びながら戦闘を始めた。

周り暗すぎわろえない……

おっふ。

洞窟はじめじめとして更にはモンスターが蠢いていた。

暗闇って意外とやばいのな。

マジ何も見えないから、いやほんとほんと。

戦闘の際の火花とか、魔術が散る光とか、そんなんしか光ないから。

サーヴァントのやばさを改めて実感することになったといえるだろう。

ていうかガード重視で前に出てなかったはずなのに狙われるとか俺の集敵率高すぎやんな？

もう少し控えめに、俺が立香くんを守りそんな俺をマッシュが守るという奇妙な陣形で戦いが始まった。

俺の人氣がやばすぎる。物量にマッシュが押されてる。

ついでに言うなら俺も押されてる。

ライダーさんたちは意外と余裕そうなのでライダーさんに助けてもらった。

上姉様に喧嘩を売るから……とか言われても売った覚えはないんですけど：

何度かヒヤツとしながらも奥まで辿り着いたら何か……尻尾が蛇で牡牛なライオンが出てきた。

何あいつ絶対ヤバイやつ……と後ろに下がったら超高速で光弾が追いかけてきた。

洞窟はじめじめとしていて更にはモンスターが蠢いていた。

いやどつから光弾だしたお前ええ!?

流石に予想だにしないんですけど……

完全に身体を盾に隠して先へと進む。

俺の使う光弾の百倍はありそうな光弾がマッシュの盾にぶつかり音が大きく反響した。

最初は恐ろしく抵抗をされていたが、尻尾が一本千切れ飛んでからは勢いは終息していき、やがて首が宙を舞った。

あっさりと言ってるが地味に疲弊してるし何ならサーヴァントたちも血を流していたりする。

応急回復で誤魔化してはいるが今までの戦鬪の傷もありぶつちやけかなりきつい。

さっさと戻ろうと洞窟を抜け出した。

すっかり日は暮れていて、ステンはニヤニヤと意地の悪い笑みを

浮かべていた。

超疲れたわーとか言ったらナチュラルに自称アイドルと猫耳生やした犬がいた。いややっぱり猫？

当然のように戦闘が始まった。

いや話し合いしようよ……とも思ったが少なくとも片方は頭がぱっぱらぱーだったな、すまない。

それどうということよおおお！ と叫ばれ戦闘が激化した。

真実は時として人を傷つける。つまりはそういうことなんだなつて。

何やかんやでエリザベートの戦闘パターンは読めるのだが、猫耳生やした方が大分やばい。

言動が狂ってるのが二人もいると頭のおかしさが二倍どころか二乗で話を聞いてるだけで頭があぼーんとなりそうだった。

ただまあ本気で殺しにかかって来ていたわけでもないのか、宝具も使わないのでぎりぎりの状態でもなんとか抑えることに成功した。

いやそれでもセイバーとかめっちゃ息切らしてるけどね。それが弱いからって訳ではないが。

何故なら立香くんサーヴァントたちのメインアタッカーはセイバーでマルタはそのサポート、マシユは守りに徹しているからだ。

まあぐだぐだ並べたが一番は種火が足りなかったのが一番の要因だろう。

てことでセイバーに消えてもらっても困るので後ろに下がってもらうことになった。

ついでに犬猫とエリザベートと仮契約を結ぶ。頭はおかしくても実力はあるからな。

何で俺かと言えばぶっちゃけ立香くんの体力が限界を迎えていたからである。

この前まで普通に学生していた子がこの強制行軍を余裕でこなせる訳がなかったのだ。

俺より魔術を使いこなせていないし当然だ。

しばらくは休んでようか等と今後について話していたら、奇声を上

げながら敵さんがすつとんできた。

要約すればネロだいしゆき！ 可愛いいいいい！ とか言ってる。控えめにいつて恐いじゃん？

戦闘が始まった。

ばんちがいたいっ

しばらくは休んでようか等と今後について話していたら、奇声を上げながら敵さんがすつ飛んできた。

何だあいつの拳剣を貫通したぞ……

しかもがっちり強化してたのに……

交代するように犬猫——タマモキヤットを前衛に押し上げた。

奇天烈な動きで創る隙にエリザベートの槍とかネロの剣が身体に突き立つ。

ダメージが通らないな……

いや感覚がイカレでもしてるのかクリティカルヒットでもしないと怯みすらしない。

狂い過ぎい！ と周りを警戒しながらも魔術を使ったりと色々援護をする。

まあこのままボコればいけるっしょ、なんて思っていたら敵の加勢。

音に寄ってきた野生のモンスターが集まり始めていた。

暴力聖女による雑魚殲滅時間の開始である。

肉を断つ感触が剣を通して良く感じられる。

血が舞い肉と骨がごとごとと地面に落ちた。

俺にかかればざつとこんなですよ！ どやつ！

調子に乗った瞬間死ぬ。

ここまできて俺はそれを忘れていたとだけ言っておこう。

肉を断つ感触が剣を通して良く感じられる。

剣を引き抜き——？

身体が動かない、魔力がすつからかん……？

肉を断つ感触が剣を通して良く感じられる。

((謎の死))

しかし過ぎたことだと断じ、一切の油断なく骨を穿ち狼人間を引き裂いた。

やけにどろっとした血が肌にごびりつく。

汚いなあ……としか感じられないくらいにはもうそれに慣れ切っていた。

少し離れたところでは杖で物理的に殴打している女がいた。

十字架をなんだと思っっているんだあいつは……

叔父上と呼ばれた変態は既にダウン寸前もいいところだった。

明らかに息苦しそうに血を吐いている。

余裕だな！ と不敵に笑みをこぼしてみた瞬間強烈な声音が響いて全身が硬直した。

目の前には骨が。

おわた^^

肉を断つ感触が剣を通して良く感じられる。

あれ絶対宝具じゃん……

使われる前に殺せし……とか思うけど皆そうしようとは思っていないのだろう。

そういう日もあるさ、次行こ次。

聖女は十字架を捨てて敵を殴り飛ばしていた。何をやっているんだ……

頭をスライスして振り向きざまに柄で頭を砕く。

同時に令呪を切った。

音には音を。

暴力的な声には壊滅的な声を。

ぶつかり合って空間が完全にカオスに飲まれた。

選択ミスったかも（^p^）

でも生きてた自分に驚きを隠せない。

周りのモンスター軍団は全滅してたし叔父上バーサーカー——カリギユラは、最後にネロに何かを言い残して消えていった。

やっと死んだかあ、とサーヴァントたちに労いの言葉をかけてたら、ステンノが敵さんの首都を教えてくれた。



戦力は増えた、し敵の本拠地も教えてくれるとか実は本気で幸運の女神なんじゃね？　とも思ったが獲物を見る目で睨まれたことを俺は忘れない。

凱旋。凱旋である。栄光あるローマへの帰還である。

俺は初めてなのでちよつとばかし興奮したのは確かだ。

多くの人にキラキラとした瞳で戦功を称えられるのは少しばかりくすぐったかった。

久しぶりに自分が何の為に戦っているのかを感じさせられた気がした。

翌朝。いつもならもう昼食を済ませてるような時間に目を覚ました俺は、取り合えずネロの元へと向かった。

荘厳な装飾のされた扉を何も考えずにドーンと開け放つたらそこには白い女と赤髪のゴリラがいた。

いつからここは動物園に……

思い返せばあまりにも失礼なことを言い放つた俺を立香くんが必死にフオローしていた。すまない……

何か増えてた二人は別行動をしていた味方だとかなんとか。

俺が寝てる間に、敵さんとドンパチしながら帰って来ていたところを助けにいつてそのまま事なき事を得たらしい。

本当なら俺もいくはずだったのだがビンタしようが何をしようが決して目を覚まさなかつたので置いて行かれたとのことだ。

叩かれても起きないとかどんだけ……

本当に済まない。

俺の睡眠への意地汚さが証明された瞬間だった。

ま、まあ疲れてたんだよ！　とか適当に言い訳して話をそらした俺が流石すぎると言えるだろう。流石！

我々は破竹の勢いで進撃していた。

サーヴァント計十人。負ける訳がない。圧倒的戦力差だ。

最早障害にすらなることなく蹴散らしていく。  
次々と敵は湧いてくるのだが滑稽でたまらないほどだ。  
いけいけえーと突き進むとサーヴァント反応が。

2 m越えの巨体。二振りの斧。真っ黒な肌。その眼はギラギラと光っていた。

お前どこにでも出てきやがるなおい……

何か寝てたら復活してた令呪を素早く切った。

ライダーさんの宝具が目の前を巨人を敵兵ごと焼き払う。

うーん、流石……！

煌々と燃ゆる大地を見て、ほつと息をついた瞬間明らかかな高魔力反応が現われた。

同時に多くの兵が現われる——宝具か。

今ので仕留めきれなかったのは驚愕だな……

焼き尽くした敵の代わりにサーヴァント染みた敵兵がわんさか出てきて白目ものである。

ラスト令呪切るべきかと悩んでいたら聖剣の光が全てを引き裂いた。

セイバーと立香くんかつこよすぎかよ……

見渡す限りの敵が塵も残さず消し飛ぶ様は爽快であった。

それにしても俺のトラウマがこんな一瞬で吹き飛ぶとか成長を実感してしまう。

ガチモンのサーヴァントですらこの有様ならもう今回余裕のよっちゃんだな。

奢りでもなくそう思ったその時、味方の兵より悲報がもたらされた。

サーヴァント：ブーデイカの拉致。

またバーサーカーである赤髪ゴリラとスパルタクスが敵に誘われ戦線を離脱してしまっただとか。

まあどう考えても敵さん——顕現してるサーヴァントは皇帝と呼称してるらしい——の策だろう。

さてどうするか。優しい立香くんのことだしきつと助けに行くと

か言い出すだろう。

だけれどもそれは時間のロスだし明らかに誘われてる。

よし、代わりに俺が助けに行こう。その間に敵の本拠地を一気に叩いてほしい。

では健闘を祈る。

やはりというかこちらはあまり敵の数は多くはなかった。

いや、単純な量という訳ではなく戦力が足りていない。

サーヴァント三人＋雑魚とはいえ魔術師一人。

百人二百人来ようが割とどうにかなっていた。

といっても囲まれたら本気で洒落にはならないので一点集中突破しかしていないのだが。

如何にも王子様みたいなオーラの放つ紅髪の少年。その隣に佇む社畜オーラを放つ男。

どちらもサーヴァントなのは明白だろう。

ただ、あの……ネロに来てほしかったのに……としょんぼりするのはやめていただけじゃないだろうか……

普通にやる気落ちるんですけど……

つつてもやる気ないからとかししょんぼりしてるとかが理由で戦闘が始まらない、なんてことはあり得ないのだ。

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

な、何か火とか岩とかが降り注いでくるうううう!?

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

キャスターって光弾しか出せないんだと思ってたけど違うんですね……

社畜キャスター（多分）が地味にうざい。

めちやくちや嫌なタイミングで攻撃が来る。

俺なりに支援するのだがレベルが段違いだ。

また敵の兵もいなくなったわけではない。

キヤットに抑えてもらっているがいつぱいいつぱいだった。

ちよーつと不味いかもしれない。  
さつさと押し切り切りたいのに中々攻めきれない。

——仕方がない、力づくで消し飛ばそう。  
合図と共に、キヤットが宝具を展開した。

巨大な猫の幻影が宙に浮く。

ニヤア〜と気の抜けた声が響いた瞬間周りが血に染まった。  
これで一気に叩ける。

そう考えたのと同時に黒と赤の柱が八本、地に降り立った。

身体が動かない——？

反射的に令呪を切った。

ライダーさああああん!!!

天駆ける白馬が太陽に染まり——そして恐ろしい程の威圧を放つ馬に乗り、バチリバチリと雷音を散らせた筋肉質な男がそれを受け止めた。

は、あ——？

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

こちらに宝具があるのだからあちらにも宝具がある。当たり前であることを失念していた。

もうちよつと使いどころを見極めなければならぬ。正直、宝具に頼り過ぎていた。

令呪は切れば魔力が爆発的に増えるが、数に限りがある。慎重に使用しなければ。

基本戦力はこちらが勝っているはずだ、だからもつと冷静に敵の動きを読まなるべきなのだ。

エリザベートの宝具を開く。壊滅的な音声が空間を轟かせ人々を眠らせた（物理）。

いや……マジでいつ聞いても凄まじいな、と遠い眼になりながら降りかかってくる岩を転がり避けた。

やっぱり英霊は一筋縄ではいかないか。

魔力を大きく消費したエリザベートを下がらせてキヤットを押し出す。

アレキササンダーと名乗った少年が雷を纏いながらライダーさんとキャットを捌く。

何か……時間を追うごとに筋肉質になってない？ あいつ……  
しかもそれと比例するように美少年からおっさんと化していつて  
いる気がする。

ついでに言えば戦力も増加されている。

もうそれだけでうざいのに社畜軍師もうざいしうざいの二乗だわ  
くそつたれが。

どっかから出てきたのか分からん八卦炉から放出されるビームを  
エリザベートが切り裂き飛ばす。

どんどんとアレキササンダーが力をつけていく。

まーた短期決戦だよ……

ライダーさんとキャットの二人がかりだというのに抑えられると  
か……

ちよつと洒落になっていない。

仕方ない、瞬間強化で一度態勢を立て直そう。

ライダーさんの身体の周りが燃ゆるように光りアレキササンダーを  
吹き飛ばした。

一気にたたみかけ——ようとして、八本の柱が落ちてくる。

だけどもあ、それは読んでいた。

即座に令呪を切ってキャットの自由を力づくで解き放つ。

同時に宝具だ、さあぶちかませ。

気の抜けるような猫の叫びと同時に、高速で動いたキャットの爪が  
ギリリと光り、雷がそれを防いだ。

早すぎだろ……

キャットが潰された今、自由の効かない俺たちに成すすが無かつ  
たのは言うまでもないだろう。

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

勝てる材料はある、けれども俺の采配が悪すぎるな。

取りあえず周りの雑魚を歌声で蹴散らしエリザベートを近くに置

く。

これからどうしようか。普通に戦ってたんじゃさつきと同じだ。令呪がもう一つあればごり押しでぶち抜けたかもしれないというのに……

柱が次々と現れる。

あつ、無理です。

頭が真っ白に燃え尽きた。

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

あの雷野郎をどうにかして止められれば……

一瞬で良い、ほんの少し止められればキャットの宝具でやれる……

しかしそれは妄想に過ぎない。

ライダーさんの宝具は凌ぎきられ雷音が耳朶を掠める。

反射的に瞬間強化で振るった剣がガツンと弾き合って打ち上げられた。

緊急回避を使う寸前首を握られる。

大きく吐き出した息を吸い込めない。

締め上げられる力が高まっていきどんどんと視界が霞んでいく。

あれ、これデジャヴ……

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

そうだよ石化だ。ライダーさんだ。

姿は違えど同じメドゥーサ。

ただしタイミングが重要だ。下手したら普通に外してできた隙でやられかねない。

アレキサンダー早すぎんだよ……

エリザベートとキャットの狂ってるコンビに任せてライダーさんと手短に言葉を交わす。

でも俺の言うことはいよいよ信じてくれるとかマジ天使だよね……

音が空間を揺らして悲鳴が上がる。

タイミングは俺が瞬間強化を使った瞬間だ。

そこで一撃で沈める。

雷をちらつかせてライダーさんと一際大きくぶつかり合う——瞬

間強化。

同時にライダーさんの眼——キュベレイの魔眼というらしい——がギラついた。

ガクンとその場に縫い付けられたように動きを止めたアレキサンダーの首元に短剣がねじ込まれた。

悲鳴を上げた軍師の腸をキャットがぶち抜いた。

勝った——張りつめていた空気が一気に弛緩する。

長く息を吐く。ああ、緊張した。

徐々に消えていく二人はそこそこ悔しそうだった——突然視界が黒に染まった。

馬……？

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。

肉も骨もごつちやのぐつちやとかマジやべえ…

あいつの宝具（多分）の馬がとんでもない速さで突進をかましてきた。

身体が薄れていたから最後っ屁つてやつだろう。

やっぱ気抜いちやダメなんだなって。

ライダーさんの魔眼が発動して動きを止め……られない……？

外した!? うっそだろ、畜生が、と叫ぶ。

さつきは上手くいったのに……!

現実には中々甘くないな。

宝具で目潰しと攻撃を同時に行う。

草葉が焼き焦げる匂いが鼻に付く。

当然のように柱が落ちてきた。

緊急回避いい!!

エリザベートを掴んだ瞬間ごうんっ! と凄まじい勢いでその場を離脱した。

宝具でも避けられるとか万能すぎ……

全くカルデアの技術力は最高だぜ!

地を滑るように転がった。

仮で繋いだパスが一本消える感覚が伝わる。

同時に令呪を切った。用途は純粋な魔力の増加。  
超高速でエリザベートがアレキサンダーとぶつかった。  
激しく鬨ぎあう二人の戦いは、しかし俺が火だるまになったことで  
終わりを迎えた。

仮にも戦争。短剣同士がぶつかり合って火花を上げた。  
魔眼を外したら打つ手がない件について。

これは何としても当てなくては……

社畜は相も変わらずマスターである俺を狙ってくる。

エリザベートは自分以外への攻撃に若干鈍い所があるので普通に  
全力警戒だ。

瞬間強化と同時に魔眼が発動する。

ビキリ、と動きを止めた彼の左胸に短剣が滑り込んだ。

柱が落ちてくる前に一気に仕留めよう。

キャットの魔力が勢いよく練り上げられ超高速で走る猫が全てを  
血に染めた。

かろうじて生きている軍師に槍が突き立つと同時に、宙に現れた八卦  
炉がエリザベートを貫いた。

重なり合って倒れた二人とアレキサンダーは霞の如く消え始めた。  
応急回復を使おうとするがもうそれでどうにかなる傷ではなかつ  
た。

完全に急所を射抜かれた。やり直そうと思った時エリザベートに  
声を掛けられた。

子犬呼びは未だに許せんが後は任せたと言われたら頑張るしかな  
いじゃん……

落ち着いた俺は縛られてる割にはすやすやと気持ちよさそうに眠  
るブーディカをパチパチ叩いて起こす。

ほわあ？ と寝ぼける彼女は可愛かったとだけ言っておこう。

立香く……ちゃんに追いついたと思ったたらげっすい顔したレフ教  
授がやば気なセイバー（多分）を召喚した瞬間そのセイバーにレフ教



授がレ／＼にされていた。

情報量が多い！

いやマジで状況把握できてないんだけど何なの？

そのまま戦闘となるかと思いきや、セイバーは窓をぶち破ってローマに向かって歩いて行ってしまった。

と、止めなければ！ と追いかけることになった。

だから状況説明をだな……

虹色に輝く剣が鞭のようになつて暴れまわる。

あまりにも力強いそれは盾ごとマシユを弾き上げた。

追い打ちをさせないように振り下ろしたネロの真つ赤な剣と、アルテラと名乗ったサーヴァントの剣が重なり合う。

あまりの打ち込みの強さにネロが大きく後退した。

そこに振り込まれる虹をアルトリアの聖剣が受け止め弾く。

ついさつき戦闘を終えたばかりだったのに余裕で動き回れるとか、マスターとしての質の差を感じちやうなおい。

ふらつくキャットを援護に回らせライダーさんを前に出す。

高速で動き回るライダーさんで隙を作ろうとするがそれに虹が迫りくる。

くそつつよいなマジで。

今まで戦った中でさいつよかもしれない。

いや絶望感はやセイバー・オルタの方が上だったけれども。

取りあえず魔眼で動きを——効かない!?

一瞬効いたかと思ったらパワーで押し破られた感がある。

止まったのはコンマ数秒だ。

えぐいなあ。

ライダーさんに蹴りが入り大きく吹き飛ぶのをキャッチする。

振り落ちてきた剣をライダーさんの短剣で受け止め、けれども弾けずそのまま地面にめり込んだ。

身体が軋んで吐血する。

骨が幾つかイッてそうだ。上手く力が入らない。

視界には二度目の剣が。  
無理です。

ガアン！ と眼前で火花が走った。  
キヤットの爪とブーデイカの剣が虹と拮抗して跳ね上げる。

ナイス過ぎる……

応急回復でライダーさんを回復させ、マルタと入れ替わりで前に出た。

防御を崩されたアルテラの小さな隙に、幾本の鎖付きの短剣が突き立ちその鎖で縛りあげる。

驚きに顔を歪ませたところを聖剣と真つ赤な剣が差し込まれ——  
弾かれた。

螺旋を描くように虹の光がアルテラを包んで邪魔なものを破り飛ばす。

虹の光が、地を滑ってやってきた。

ブーデイカとマシユが宝具を開く。美しい巨大な盾と幾つもの燃ゆる車輪が展開された。

激しい炸裂音が響いて辺り一帯が更地と化した。今の拮抗で二人は足元さえおぼつかない。

俺と繋がっていたパスは完全に切れていた。残りは仮契約のキヤットのみ。

立香ちや……君もマシユとマルタしかいなかった。ネロももう、いない。

世界が歪む。全員が全員摩耗しきっていた。勝ちの目はもうなくなっていた。

俺はこの時、初めて自らやり直しをした。

ガアン！ と眼前で火花が走った。

応急回復をかけてライダーさんを送り出す。  
鎖で縛りあげられたアルテラが顔を歪ませた。

同時に令呪を切った。

流星の如き光の天馬と全てを砕く虹の光が正面から鬨ぎあう。

あ……こりや勝てないな。

徐々に徐々に、しかしはつきりと分かるくらいにはライダーさんは削られていた。

ライダーさんに念話で一言謝ると、彼女は俺の考えを何も言わずとも理解したのか早くやりなさいと俺を急かした。

良い女過ぎませんかね……

立香くんに叫ぶ。

ライダーさんごと宝具を撃て、と。

動揺するもあまりに必死の俺の顔を数度見た後に令呪を切った。

爆発的に増えた魔力をそのまま解き放つように極大の光が虹と流星を飲み込んだ――

アルテラは少し嬉し気に頬を緩ませ空気に溶けた。

ころりと金の杯――聖杯が落ちる。

ネロが寂し気に別れを告げた。

ブーデイカが泣いても良いと言ってくれた。

でもまだ泣く訳にはいかないのだ。そんなことを言って涙を流したのは完全に黒歴史だ。

そんな束の間も本当に短く俺たちは元の時代へと帰還した。戻って最初に目に入ったのは、ライダーさんの笑顔だった。

俺はまた涙を流したのであった、まる。

— Order Complete —

## 海を渡る海賊@無限ループ

——貴方は少し、普通から離れた位置に存在しているように思えます。

そう、ライダーさんに言われたことがある。

いやライダーさんどころか、いつだったかのセイバー・オルタやカルデアにいるサーヴァントたち……要するに人では無いやつらには言葉は違えど似たようなことを必ず言われる。

曰く人では無い、曰く気持ち悪い、曰く不安定。曰く、曰く、曰く……

あれ？ 何か悪口混ざってた気が……気のせい？ ならよし。

まあ何はともあれ俺は現在のカルデアではかなりの変人として扱われているのだった。

良くサーヴァントたちに絡まれ、尚且つセイバーや立香くんに追っかけられるような真似をしているからだろうか、職員たちにすらあいつマジ変人（笑）みたいな目を向けられることに頭を悩ませている俺だが、実はサーヴァントが一人増えていた。

他には？ 鳥とかバイクとか弓とか猪とか剣とか剣とかカードだけの何か良く分かんないのが周りに転がってましたけど？

さーてお仕事の時間だぞ☆と上司に呼び出された早朝からレイシフトである。

瞼をほぼ完全に閉じきっている俺の後ろには二人のサーヴァントがいた。

一人はお馴染み、皆大好き大天使ライダーさん。

そしてもう一人は銀の髪を靡かせ怪しげな仮面で顔を隠す女性——血の伯爵夫人、カーミラ。

フランスにて討ち取った彼女は、しかし何の縁か俺の呼び出しに応えサーヴァントとなっていた。

いや普通に接しづら過ぎるだろ……そう思っていたのも束の間、彼女の正体があのアホアイドルの未来の姿だと知った瞬間、緊張が霞と消えめちやくちや気楽になってしまった。

というかアイドル目指さないの？　って聞いた瞬間怒るでもなくガチな感じでお願いだからやめて……って言うのがマジやめられなくいくらい面白可愛いのがいけないと思う。

レイシフトの準備をしながら呼びかける。

ほら、元アイドル早く来い。

だからそう呼ぶのやめなさいよおおおと情けない声を聴きながら過去に跳んだ。

ジャボンツという音と共に全身が重くなる。

え、なにこれ……海？

いや海中!!?

急いで海面へと飛び出したそこには——巨大な船があった。

ええ……何これ……

動揺したのはほんの一瞬。激しい戦闘音と同時にライダーさんと念話が繋がった。

ライダーさんとカーミラは船上で交戦中だったのだ。

三人とも同じところに転移したけど俺だけ海とか運が悪すぎるにもほどがある。

ふざけんな畜生、と怒りを力に変えて船に黒鍵を突き立て登りきつた俺の眼前をカーミラが吹き飛んでいった。

吹き飛んできた先には——荒く削りだしたような大剣を片手に持つ巨人がいた。

やべえ！　と緊急回避を発動する準備をすぐに整えれば同じタイミングで轟音が鳴り響く。

天馬を出したライダーさんがあの巨人を食い止めていた。

あの大剣を受け止めたりと天馬さん大活躍だなおい。

ただぱつと見で俺みたいなカスでも分かるのが、あの巨人は洒落にならない強さを持つてることだ。

今でこそギリギリ耐え忍んでいるが、ぶっちゃけこの船にまだ敵さん二人乗ってんだよな。

後ろで悠々と酒飲んでこちらを見てる金髪のぼっちゃんみてーな

やつと董色の魔女みたいなやつだ。

魔女はともかくあの金髪くそ腹立つ顔してやがるな……

どうにかしてぎやふんと言わせたいがこの巨人、マジで歯が立たない。

ただでさえカーミラが一撃クリティカルで入ってるんだ。

彼女と俺を庇う分ライダーさんの負担が大きい、大きすぎる。

全くいつつもいつつも運がねえ！

天馬がぶち抜かれてライダーさんが吹き飛ぶ。

斧剣は、力強く俺とカーミラを叩き切った。

俺の眼前をカーミラが吹き飛んでいく。

ここからか……

濡れた髪を片手で押し上げ概念礼装を展開した。

蒼の光で透けた針金で編まれた鳥が幾つも連なり勢いよく飛来していく。

目にも止まらぬ……という訳でもないが、それでもかなりの速さで飛びそれを巨人は鮮やかな剣技で叩きのめした。

くしやりと潰れて消えていくそこへライダーさんの短剣が突き立ち鎖がぐるりと身体を締め付け——それを筋力でぶち破られる。

よろめくライダーさんを守るようにカーミラの光弾が滑り込むが意味をなさない。

急いで緊急回避をライダーさんを守るために発動する。

ギョルリと回転したライダーさんが瞬間移動もかくやと言った速さで俺の隣まで回避する。

困ったなあおい……せめて真名が分かれば弱点とかが分かるかもしれないというのに……

そう思ったら金髪が腹の立つ声で「いけえー！　ヘラクレスウー！」と叫んだ。

……真名明かしちゃうんだ！　あいつ馬鹿だ！　ありがとう！

そう思うが逆にそれは絶望も生み出した。

だってヘラクレスだぞ？　ギリシャ神話における、半神半人の大英雄だ。

格が違うのが明らかすぎる……

ゴオン！ と風をぶち抜き振り下ろされる剣を全力で強化した脚力でぎりぎり避けきる。

いつもなら全身に回してる分を全て足に使っていてこれなのだから、その強さがわかるつてもものだ。

弾ける木っ端が肌を掠める。次に振られた剣がカーミラを捕えて断ち切った。

風圧で身体が揺らぐ。同時に令呪を切った。

一、二、三。

手の甲に刻まれた紋様は全て消えてなくなり、代わりにライダーさんの魔力が急激に跳ね上がった。

空に天馬の嘶きが響き渡る。

流星の如く駆ける天馬はヘラクレスに衝突し、そしてその半身を消し飛ばした。

やっぱ令呪って最高だわ。

仇は取ったし後はお前だけだと眼を向けた瞬間俺とライダーさんは吹き飛び木箱にぶち当たった。

身体が全く動かない。全身がバラバラになったかのようだ。

高笑い嫌に耳朶に残った。

俺の眼前をカーミラが吹き飛んでいく。

ヘラクレスさん死なない感じなの……？

針金で編まれた鳥——シュトルヒリッターが宙を駆け、地に叩き落とされる。

その間にライダーさんが天馬を呼び出し次撃を受け流した。

二度、三度と受け止め天馬とライダーさんは俺の隣へと降り立ったが既に傷だらけだ。

カーミラが息も絶え絶えに逃走を推奨するが状況的に逃げられない。い。

応急回復を掛けてカーミラを回復させると同時にヘラクレスが大きく飛び跳ねた。

両手で振りかぶられたそれは轟音と共に床を叩く。

あの力で叩かれて割れないこの船どうなってるんだろ？

純粹な疑問を抱きながら床を転がりまたも木っ端が頬を掠める。

しかし次々と振られる剣をよけきれない。

ライダーさんの腕が飛ぶ。カーミラの身体が崩れ落ちる。俺の足が吹き飛んだ。

俺の眼前をカーミラが吹き飛んでいく。

ここは地獄か……

令呪を切つてカーミラを急速回復する。

ライダーさんが空を駆けてやつの斧剣とぶつかり合う。

宝具による激しい爆発と共に俺の隣にライダーさんが降り立つ。

けどまだ終わりじゃない。

爆炎から姿を現したやつの身体に光弾とシュトルヒリッターが突き刺さるが無視して突き進んでくる。

いやマジかよ……

そう簡単に宝具も撃たせられないし困った。

乱雑に見えて的確に急所を狙ってくる剣をライダーさんに抱えられて躲していく。

一先ず距離を取りたいが確実に詰めてくる。

何とかカーミラの光弾が視界を奪っていくがジリ貧だ。

……仕方がないか。全概念礼装を使つてでもこの場を切り抜ける

！  
懐から取り出した礼装を解き放つ。ぶち抜けえええ！

カードから出てきた、金の牙を持った青と赤の猪が凄まじい速さで走り抜け、ヘラクレスの剣を受け止める。

ぶつかり合う度派手な火花が上がり、両者の力だけなら拮抗をす

る。  
しかし猪はすぐに胴を打ち上げられて海へと落ちていった。

嘘やん……あつけなすぎだろお前ええええ!!

期待した分反動が大きい。

すぐさま新しい礼装を使おうとして既に目の前に来ているのに気が付いた。



身体が引つ張られて耳元で轟音が響く。ライダーさん超ナイス……

続く二撃目で身体が宙に投げられた。

ガードをするも勢いよくライダーさんが吹き飛んでいきそれを天馬が回収する。

同時に離れた俺をすぐに追い詰め振りかぶる剣が腕を掠めた。

カーミラの光弾が軌道をずらしたのだ。

ナイス……！ だけど無意味だ。既に限界の速さで逃げる俺の倍近い速さで剣が迫る。

激しい痛みが一瞬だけ俺を襲った。

俺の眼前をカーミラが吹き飛んでいく。

もう使う礼装をすっかりと決めて次々出さないとだなこれ。

令呪でカーミラを回復させてライダーさんの宝具がヘラクレスの半身を消し飛ばした。

されども煙を肩で切るように出てきたヘラクレスにまたも猪を繰り出す。

いくつかの拮抗の末に猪は大きく空を舞った——それはさつきも見た。

カーミラが次々と光弾を撃ち姿を覆い、瞬間強化を受けたライダーさんの短剣が足を貫き固定する。

狙うは一点のみ——礼装から溢れた光が体を包み衣装を黒い袴へと変える。

きつく絞られた弓から鋭い一矢が放たれた。

矢は頭を傾け避けようとしたヘラクレスを追尾するように目玉を貫いた。

苦悶の叫びが上がった瞬間俺たちは天馬へと飛び乗った。

天馬がちよっとお前ら重たいよみたいな顔で見ってくるが非常事態なんだし許してほしい。

そんじゃあまったなあー！と空を滑空してたら光が身体を掠めていく。

あの魔女か——

どこまでも追尾してくるそれをカーミラが弾くが、速さのない今の俺たちは良い的で次々と降りかかってくる。

それを何とか凌いでフラフラと逃げるがゴオ！ と跳んできた大剣が天馬ごと俺達を勢いよく吹き飛ばした。

あまりの衝撃で視界がぐらつく。雨のように降りかかる魔術が俺の視界を埋め尽くす。

最後に見たのはカーミラの、血に塗れながらもしかし、綺麗な背中だった――

潮風が頬を撫でる。心地の良い揺れが身体に響く。

俺は……俺たちはまたしても船の上にいる――といってもあの船ではない。

何となく気の合いそうな変態のおっさんが船長と呼ばれている船に俺たちは乗っていた。

雨のように降る魔術を全て一人で受け止め相殺したカーミラは姿を消し、天馬とライダーさんは気を失った俺を引っ掴んで命からがら逃げ伸びたのだ。

やり直さないのでか、と問われればそれは既に試したと俺は答えよう。

いないことに気づいて俺はすぐに喉を搔つ切った。

だけれども気が付くとそこは穏やかな風の吹く船の上。

俺はまたロード場所を更新したって訳だ。

全くくそつたれな現実だ。

だが、まあ、くそほど気に入らないが、仕方ない。

これからの事態に備えて令呪を勿体ぶらなきや良かったとか、幾度も後悔するがそれも意味はない。

カーミラがいたから今生き残れてると前向きに考えなくては。

まずはドクターと連絡を取るか、そう思ったところで通信機器がダメになっていることに気づいた。

ちよつと洒落にならないんですけど……

通信部分だけが丸ごといかれてる感が……絶対に許さねえあのく

そ魔女……

これからどうしようかと考えを巡らせていたところで船長——黒ひげを見る。

そう、黒髭だ。真名：エドワード・ティーチ。恐らく世界で最も有名な海賊。

そんな化け物をまさかスマホで買収できるとは思わなんだ……俺の秘蔵の画像フォルダが火を吹きまくってしまったな……

そんなこんなでするっと馴染んでしまったがこれからどうするべきか。

通信系がおじやんになってしまった今、立香くんたちに行動先を合わせることもすらできない。

合流もできないしライダーさんの回復もしたいししばらくは黙って成り行きに身を任せるか。

船には黒髭以外にもモブな船員たちと四人のサーヴァントが乗っていた。

掴みどころのない飄々とした感じで質問に一切本音で答えることのない槍のおっさん。

ナイスバディなねーちゃんの海賊、アン・ボニー。

小柄なカトラス使いの海賊、メアリー・リード。

何か血を啜ってる斧をブンスカ振り回す狂人、エイリーク。

因みにアン・ボニーとメアリー・リードは二人で一人のサーヴァントだとかなんとか。

アン・ボニーの主武装はマスケット銃（一撃が馬鹿みたいに重い！）だしそのコンビネーションは目を見張るものがある。

正直敵対することにならなくて心底安堵している。

強さはもちろんだが単純に頭数が違う。戦闘どころかただの虐殺になってしまう。

といっても最後には殺し合うはめになるんだろうなあ、きつと。

まあでも今は一応の協力関係を結べてるし問題ないかなって。

未来のことは未来の俺に任せりゃいいんだよ。

ところでさつきから黒髭がエウリュアレたんはあはあ……とか  
言ってるんだけど普通に気持ち悪い。

因みにその名を聞いた瞬間ライダーさんが下姉様……!? とか  
言ってたし多分ステンノみたいなのやっつなんでしょう……

何か……地味に快適……。

飯は美味しいし何だかんだこの船の連中は面白いやつらばかりだし  
付き合いが良い。

端的に言うなら俺は馴染んでいた。

いやだって戦闘になっても味方多いから死なないし……サーヴァ  
ント多いから不意の攻撃も事前に潰してくれるし……

入ったばかりの俺とライダーさんともコンビネーション抜群だし  
……

ぶっちゃけ今までの特異点の中でもダントツで安全っていうか安  
心っていうか……

夜中とかバカ騒ぎしながら酒飲み大会とかやって笑い転げられ  
るし……

ただ槍のおっさんが何だか怪しい。いや怪しく見えているのは俺  
もなんだけどそこは置いといて、だ。

今いち掴みどころがなくて飄々としている辺り怪しさの塊でしか  
ないわけだ。

そんでもってその怪しさの塊がこの船には二人ほどいた。

それがおっさんと……黒髭だ。

何故黒髭かと言われればそりやお前全てにおいて胡散臭いからと  
しか言いようがない。

確かに彼の放つ言葉は全て本心だろう、だけれどもその本心だけで  
動くなんてのは馬鹿げてる。

もし黒髭がそんな男だったならばあんな大海賊にはならなかった  
だろう、そう思うからこそその疑惑だ。

と、まあそんな感じで船旅は進み俺たちはエウリュアレが逃げた先  
の船へと先制攻撃を仕掛けた。

って立香くうううん!?　じゃなくて立香ちゃあああんん!?

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

横づけした船にモブたちが雪崩れ込むように相手の船に乗り込み場は混戦と化した。

まあ今しかないよね。

協力関係即破棄だぜ!　と黒髭側のモブの頭を殴打した瞬間槍が俺の左胸を貫いた。

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

やっぱあからさま過ぎたかな……

槍のおっさん音も無く俺の急所を狙うとかこれ間違ひなく警戒されてたでしょ。

おっさんから離れて俺はモブへと紛れながら立香ちゃんと合流、後ろから援護として魔術を放った瞬間ピストルの弾が俺の頭を貫いた。

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

うっそだろあの距離で当てるとか黒髭化け物かよ……

全身を魔術で強化する。礼装はなるべく使いたくなかった。手札はあまり見せたくない。

そこらのモブよりずっと早く駆け抜けマシユの盾の後ろへと転がりこんだ瞬間、銃弾が目の前を撃ち抜いた。

あ、あつぶねえ……馬鹿かよ狙いが完璧すぎる。

ただ完全に合流した以上今回は生存ルート確定だぜ、そう思った瞬間マシユの盾が大きく跳ね上げられた。

そこには小柄な女性——メアリー・リード。

ライダーさんの短剣とカトラスがぶつかり合って甲高い音が響いた。

そんな中俺は素早く礼装を展開した。いやもう節約とか言ってるんじゃないよね!　白の道着、部活なんかで良く見そうな弓矢が現われる。

だってメアリーが来たってことは——展開された弓から矢を放つ。必中の呪いがかかったそれは音を超えて届いてきた強烈な銃弾とぶ

つかり合つて弾けた——アンが狙つてきてるってことだから。

道着なんて着慣れてないんだから少しは手加減しろよ！　なんて叫びながら矢を穿つ。

今更だけど矢で銃弾を相殺できる辺りやっぱ礼装つてすごいわ。ただこのままならダメっぽいなーと周りを見た瞬間銃弾が胸を貫いた。

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

モブの銃弾ですね……やっぱ混戦状態だと一対一（二対二？）はダメっぽいなこりや……

上手く撒かなくてはならない、しかしその方法が完全に迷子だ。

いやだつて無理でしょ……

どうすんだよこれ、常にライダーさんに引つ付いてるか？　いや、それも得策じゃない。メアリーが来るなら完全に邪魔になる。

ではマシユは？　アルトリアは？　マルタは？　ぶっちゃけ無理。エイリークと槍のおっさん、後は黒髭モブ海賊どもが倍以上いるのだ。

宝具を撃てばと言うがそんな簡単な話ではない。明らかにこちら側の船の耐久度が劣っている。船がもたない。

詰みじゃね……？　そう思いながらピストルの弾と矢をかち合わせた。

ライダーさんが俺を守るように前に出た瞬間メアリーとの戦闘が始まった。

同時に矢を放つ。高い金属音が鳴り響き視線が交差した。

一発、二発、三発。

さっきの焼き増しを見てるようだ。

相殺させることなく記憶を辿つて弾を避ける。

いつそ接近戦に持ち込んでやる——！

全魔力を足に回して跳躍、あちらこちらを駆けまわりながら黒鍵を展開して一気に肉薄した。

瞬間轟音。幾つもの銃弾が俺の身体を貫いていた。

うそやん……

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

接近戦でも勝てねえ！ 勝てるビジョンが映らず頭がおかしくなりそうだ。

畜生が。

マシユの後ろに隠れて銃弾をやりすごしてからすぐ離脱。

ライダーさんに先行してもらい、こちらに高スピードで迫って来ていたメアリーをカウンター気味に打ちのめす。

そこからライダーさんに宙を勢いよく投げてもらおう。

場所も分かっているし見えてんだよ。

素早く放った矢が鋭くアンの肩へと突き刺さり血が流れる。

しかし同時にマスケツト銃が俺の腹を撃ち抜いた。

腹と口から血が垂れ流しになる。

うん、無理。

着地もままならず落ちた俺を銃弾は容赦なく撃ち抜いた。

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

いやこれどうするべきなんだろうね？

取りあえず一周回ったおかげか冷静になれた。

サーヴァントと正々堂々ともいえる一騎打ちで勝てるわけがない。

アルトリアとかに押し付けるか……？ いやでもマシユもいたと

いうのに執拗に俺を狙ってきたことからそれは難しいだろう。

彼女らは彼女らで他と戦っている訳だし現実的ではない。

いやあ、本気で詰みですね……

ライダーさんと二人で天馬に跨り空から矢を放つ。

矢の雨を喰らいやがれえええ！

まあ当然目立ちますから、蜂の巣にされたっというか良いのだっ

たっというかね？

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

だめだろこれも……

アンとメアリーに狙われず槍のおっさんからも離れた所へ……

そんな場所を求めて走り抜けてたら血を啜られた、無念。

砲弾が幾つも敵船へと突き刺さり爆音を上げる。

よし、諦めよう。

今回ばかりは力でのごり押しもできないのだ、どうしようもない。俺は黒髭の船から降りず甲板で魔術を使う。

この距離なら繋がるはずだ。

軽くノイズ混じりだが立香くんと念話が繋がる。

こちらの状況とあちらの状況を軽く交換して今後の方針を決める。といってもまあ俺がこっちにいて立香君はあっちで動くからよろしく、程度なのだが。

ライダーさんにも話を通し、なるべく戦いには積極的に出ず、アンへの攻撃を弾いてる間に戦いは一旦の終了となった。

あちらが撤退していく。アンが船底に穴を空けたのだがそこを防ぐようにあちら側のサーヴァント……アステリオスと呼ばれていた巨人が船を持ち上げ逃げていったのだ。

理不尽なまでに早いそれに無理に追いつこうとせずに方角に当たりをつけ、黒髭はスピードを少しだけ落とした。

負傷者が多いのだ、数で勝つてはいたがあちらも英霊が多かった。だから少々の休憩時間を黒髭は設けた。

といっても本当に少々なのだが。

ところでエイリークがいつの間にかやられてたんだけどマジで何の活躍も見れなかったな……

黒髭の船——女王アンクイーン・アンズ・リベンジの復讐号は英霊が乗れば乗るほど船としてステータスが上がるものらしい。

船そのものから膨大な魔力を感じるが、やはりエイリークがいた時と比べ明らかに性能が落ちている。

さして気にするほどでもないがすぐにわかってしまう程度には、だ。

なるほどね、と今後の予定を立てようと俺は四苦八苦していた。出来ることなら俺はあっちの海賊の姐さんと黒髭には協力してほしいのだ。

そして俺が最初に会ったあいつ、あの腹立つ金髪をリンチしてほし



いのだが如何せん証拠がない。

ついでに槍のおっさん怪しすぎて迂闊に話せない。

あつちは立香くんが説明すりや何とかなるかもしれないが黒髭がなあ……欲望に忠実過ぎてなあ……

いや、欲に忠実なのは確かだがそれだけでもないか。

あの髭見かけや言動に反してあまりにも思慮深く、狡猾だ。

戦闘時だろうが平時だろうが常にピストルを手から放さないのを見ればそんなのは一目瞭然だ。明らかに俺と槍のおっさんを警戒している。

……まあ警戒されてるのは撃ち殺されてるし分かり切っているんだけどネツ。

そんなこんなで二回戦目スタートである。まだ考えまとまって無いんだけど……

しかも何か相手さんの船超ごつくなつて……何か見知った素材が船に大量に使われてませんかねえ……

あ、あれつてもしかしてワイバーンさんとドラゴンさんの鱗じゃ……

それ以上考えるのはよすんだ、と言わんばかりの衝撃が船体に響く。

ギリリと輝く竜角が船体に大きく傷をつけていた。

かなりの衝撃だけど、それじゃまだこちらを抑えるには——そう思うと同時に前方から桃色の矢が降りかかる。

同時に後方で激しい爆発音と熱風が吹き荒れた。

弾薬庫を爆破された——？

ふと足元を何が駆け抜けるの感じて目で追えば動く熊……の人形？

白い長髪の女性にキャッチされていた。

何者だよあいつ……呆然としている内に黒髭とドレイク(さつき名乗ってた)は大きく火花を散らし始めた。

桃色の矢が降り注ぐ。

当たったら何かやばそうだな、とギリギリで躲し、どうしようかと周りを見た瞬間剣が胸から顔を覗かせた。

は……？

桃色の矢が降り注ぐ。

まさか裏切る前に裏切られるとは……

あの矢が当たったら寝返るのか……？

当たっていくやつを観察しながらモブどもを海へと蹴落としていく。

あの矢——刺さったら寝返るといふか、エウリュアレの奴隷になるのか……

最悪だな、と思うも既に宝具は終わっていてこちらの戦力の三分の一は宝具の効果で魅了されていた。

うわめんどくさ……というか完全に相手のペースじゃね？

遠慮することなく二人のモブを海へと叩き込んだ瞬間一発の銃弾が頭を撃ちぬいた。

二人の男を海へと叩き落す——瞬間大袈裟に体を斜めへ倒しスライディングする。

銃弾が頬を掠める。つうつと血が垂れ落ちた。

銃を撃った男の顔を殴り飛ばして銃を奪い、そのまま全力の蹴りで海まで飛ばす。

ザボンと派手な音が立つと同時に銃を抜いた。

狙うはアン・ボニー……を狙うアホども。

鮮やかに足を撃ち抜き全員転がしていく。

英霊にパンピーが敵う訳ないんだから諦めやがれ。

ついでに好感度稼ぎにもなる。いや稼いだところで何ただけどまあ上げておいて損はないし？

いや上げて落とすとかしかねないんだけどまあ、それはそれ。

そんなアンと不意に目が合うとぱつと笑う。可愛いかな。

少し顔が赤くなるのは仕方ないと切り捨て、槍のおっさんの少し後ろを常に陣取り続ける。

因みにライダーさんは常に俺の隣である。というかむしろ担がれてるまであるね。

さて、どうしようかな。

ライダーさんに担がれたままモブを叩き落して思考を巡らせる。

黒髭に味方するかドレイクに味方するか。

個人的には和解でもしてくれた方がありがたいんだけどなく。

それでもつてあの金髪たちと戦ってくれたら最高なんだが、残念ながらそんな上手く事は運ばないのよね……

大体ドレイクはまだしも、黒髭とか冗談抜きにエウリユアレ狙ってるからね？ 止めようがない。

まあここは倫理観に基づいてドレイク……というか立香くんの味方かな。戦力も多いし。

そうと決まれば——と行動を起こそうとした瞬間銀の槍が体を掠めた。

おいおい……怖すぎだろおっさん……

警戒はしとくもんだねえとかへらへら笑いながら言ってるじゃねえ……よ！

ライダーさんの短剣と槍がぶつかり合って軽く押される。

武器の相性が悪いな。というか槍とか万能すぎない？

概念礼装を纏い、目を細めて狙いを定め、矢を放つ。

必中の呪いがかかったそれは風を穿ちおっさんへと迫り、そして弾かれる。

ライダーさんの攻撃もいなしている上で俺の連射も弾くとかマジで何者……

ただそれでもライダーさんが攻め込まれていないところを見るに、どうやら防御特化のサーヴァントのようだ。

それならまだやりようがある。何ならこのまま戦い続けて全体の終わりを待つてもいい。

少なくともこのおっさんの動きを拘束できている時点で価値があ

るのだ。

他のサーヴァントたちも各々の戦闘を始めてこちらに攻撃は飛んでこない故に死ぬことも無い。

モブくらいなら俺単体でも倒せるしな。

ギリリツと絞った矢を放つ。本来なら一撃必中、そういった礼装であるにも関わらず難なく落とされる光景も見慣れてきた。

果敢にライダーさんが駆け巡るも隙は生まれず千日手。

時折俺にも迫る槍を即座に展開した黒鍵で弾き傷をつける。

そんなぐだつた戦いは一際大きい銃声で終わりを迎えた。

煙が上がっていたのはドレイクの銃口。黒髭は胸を抑え、血を流して膝をついていた。

黒髭の負けか——ふとアンとメアリーの姿を探せば二人して捕縛されていた。

まあサーヴァントの数的にも負けてたしこんなところかな。

おっさんも降参の意を示すように両手を挙げていた

今回は選択をミスらなかった、そう心中でガッツポーズを決めた瞬間、強烈な音とともに槍が宙を駆けた。

行き先は——黒髭の頭ど真ん中。

身動きも取れず周りの隙をついたその一撃は誰にも阻まれることなく——しかして当たることはなかった。

黒髭があり得ない動き、速さで躲したのだ。しかしそれは彼の意志ではない。

施行されたのは魔術礼装・カルデア——三つ備わった礼装魔術の内の一つ、緊急回避。

誰がやったかっていえばまあ、俺だよな。

礼装にセットされてる魔術が自分の味方にしか掛けられないとか誰が言った訳？ って話よ。

いや思い付きでやったことだから正直俺が一番ビビってるんだけどね？ ほら、結果オーライって言うじゃん！

あまりの勢いで船の端っこに吹っ飛び体を打ち付けているがまあ

それはそれ。気にしないでほしい。

驚き目を見開いてこちらを見るおっさん。

満足げにどや顔をかました瞬間ライダーさんごと青紫の光に身を焼かれた。

黒髭があり得ない動きで槍を躲す。

おっさんが勢いよく俺へと振り向いた。

同時にライダーさんを蹴り飛ばして横へと飛び退いた。

轟音、衝撃、明滅。

青紫の光が辺りを散らした。

その先にはいつぞやの董色の魔女が杖に腰掛けふよふよ浮いていた。

どうして避けられたのか分からない、と言った風貌でこちらをねめつけたまま杖をふるう。

色とりどりの魔弾があらゆる角度から迫り、同時に背後から幾つもの銃声が響き渡った。

ドレイクだ。変則的な動きをする魔弾全てに当てるその技術は流石としか言えないだろう。

助かったぜ！　なんて叫びながら後ろに下がろうとした瞬間、嫌な声が、微かに聞こえた。

天を、地を震わせ、英雄さえも怯ませる暴虐の声。

まあ董色の魔女がいるってことは当然いますよねー。ため息が、自然とこぼれた。

轟音と共にモブ達の悲鳴が上がり船が激しく揺れ、軋む音が響いた。

そこにいたのは——大英雄ヘラクレス。

まあやはりというか何というかって感じだけどどちらにしる絶望感は変わらないっていうのが一番やばいよね。

ヘラクレスの姿を捉えた瞬間全員が息をのみ、己のマスターを守るべく動いた。

白い長髪の女性は動く熊の人形を抱きかかえ、ライダーさんは俺を

抱き寄せ、マルタが突き飛ばすように立香くんを後ろに隠し、その二人を守るようにマシユが盾を上げ、セイバー……アルトリアが剣を構え、そしてマシユが激しい勢いで吹き飛び壁へと体を打ち付けた。早すぎる——瞬間移動もかくやの速さでヘラクレスは立香くんの目の前へとたどり着いていた。無言で概念礼装を起動する。ヘラクレスの武骨な剣が振り上げられた。

マルタが十字の杖をぶん投げる。アルトリアが絶叫と共に加速する。

魔女が杖を振るう。ドレイクがその邪魔をした。

ズガアアアアアン！ と派手な音と木片が飛び散った。

転がるように立香くんが俺の隣へと飛び込んでくる。

緊急回避マジ万能……立香くんもよくあの状況で最適の判断が出来たな、と一言かけて礼装を展開しようとして体が吹き飛んだ。

芯まで衝撃が響いて息ができない。

遅れてきたように肉が抉れて骨が砕けていく。

そのまま意識が暗転した。

転がるように立香くんが俺の隣へと飛び込んでくる。

瞬間礼装を展開した。

その礼装は——幻想種。

二頭の青白い稲妻を纏った牛は見事ヘラクレスを押しとどめ、はじき返した。

三重の吠え声が響く。

剣が舞い、血が跳ねる。

幻想種の首が宙へと飛んだ。その隙を縫うようにアルトリアの剣が閃き——激しく弾かれた。

続けて二合三合と切り結び強く弾かれたアルトリアを守るようにマルタの杖が振りぬかれた。

その鋭い一撃は確実に下顎を打ち抜き、そしてヘラクレスは何事もなかったかのように拳をぶち込んだ。

規格外過ぎる。鈍く、派手な音と共に吹き飛ばすマルタを目で追いながら新しい礼装を展開する。

直後に飛来してきた光がライダーさんの手によって砕かれ視界が青紫に染められた。

あ、何か嫌な予感がする、とライダーさんの後ろに隠れた瞬間銀の槍が胸を貫いた。

真っ赤な血が口から漏れる。

お、当たったか？ラツキーなんて言ってるおっさんを最後に意識が落ちた。

吹き飛び全身を光の粒子に変えるマルタを目で追いながら礼装を用意する。

鮮やかな色の光に視界を覆われた瞬間礼装を展開。

——この円こそ不動の思想——

不意にどこからか不思議な声が聞こえ、ドーム状の光の盾が三重に展開された。

一枚、二枚と破られ三枚目、ギリギリで槍を防ぐ。

高鳴る鼓動を抑え、汗と血で濡れた手を開き口を開く。

令呪をもって命ずる——！

天馬の嘶きが、天へと届く。

光へと姿を変えた天馬とライダーさんはおっさんを巻き込みヘラクレスへと盛大に衝突した。

轟音、衝撃。

血飛沫が跳ね、上半身の消えた死体がどさり、と崩れ落ちる。

周りがわっ、と歓喜の声を上げるのを無視してライダーさんは鎖でそれを持ち上げ海へと投げ飛ばした。

これで多少の時間は稼げただろ、安堵の息を漏らした瞬間魔女がヘラクレスを持ち上げる。

困惑の聲が上がるのと俺が逃げろと叫ぶのは同時で、それを掻き消すように巨大な吠え声が空を揺らした。

あ、これマジやっべっぞ。

死んだ目を晒しながら早く船を出せと振り向いたそこには、黒髭か

ら金の盃を抜き取り小舟を盗んでいくおっさんが。

——聖杯!? 黒髭が持っていたのか？

奪い取っていた銃を放つも見事に外し、代わりに魔弾が降り注ぐ。掠っただけで身体がゴムボールみたいに跳ねて転げ行く。

ライダーさんが守ってくれようとするが間に合わない。

ああ、もう本当に、ツイてねえなあ。

外した銃弾の代わりに空から魔弾が降り注ぐ。

え、これどう躲せつて言うの？

概念礼装は既にネタ切れ寸前なんですけど……

華麗（主観）なステップを踏みながら躲すも一発掠り吹き飛ばされてからハチの巢に。

いや無理ですやん……

外した銃弾の代わりに空から魔弾が降り注ぐ。

黒鍵を両手に展開して防ぎ、受け流す。

一発防いで体が軋み、二発目で黒鍵が砕け散った。

続く三、四、五。

どれも不規則な軌道を描きながら俺の体へと吸い込まれるようにぶち当たった。

視界が明滅する——

外した銃弾の代わりに空から魔弾が降り注ぐ。

何だか視界が歪む。

足元が覚束なくて、すぐ眼前に迫るそれを避けることすらかなわな  
い。

鈍い音と共に腹へと当たり、踏ん張ることすらできずに宙を舞つ  
た。

またハチの巢だなー、と鈍痛を訴える頭でそう考え覚悟を決めるま  
でもなく魔弾は俺へと集まり、しかし寸での所で当たることはなかつ  
た。

代わりに俺の腹には鎖が結びついている。

なるほどこれが生存ルート……！

無駄に頑張らずに流れるままに身を任せるのが正解とかやばくね



……？

ジャラジャラと引きずられ素早くライダーさんの背中へと飛び乗る。

さて、次はどう来る？

青い顔で魔女を睨みつけたその先には豪華な船が一隻。

あつ、金髪のご登場ですよん。

よく見れば小舟を盗んだおっさんが乗り込んでいる。

やっぱり奴等の一味だったかあ……

まあ予想できたけどどうしようも無かったよね、と言い訳しながら今なら逃げられると判断する。

というか今までもにぶつかり合ったら確実に負ける。ただでさえ殺しあつたばかりで消耗している者しかいないんだ。

そんな中で無限復活（仮）のヘラクレスさんとやり合うとかマジむりぽ……

消えつつある黒髭の船から立香くん達の船へと駆け込み急速前進。

——しつこい。金髪がエウリュアレがどうのアークがどうのと喚き立て、躍起になってこちらを追ってくる。

相手の方が、少し早い。

ありつたけの砲弾を撃つが当たらない。当たっても意味を為さない。困ったな、おい。

ヘラクレスが力強く跳躍する。アステリオスがそれを迎え撃つ。

力だけなら拮抗、技の差でアステリオスが押されている。

武器が重なる度に場が揺れて、アステリオスが苦悶の声を漏らす。

どう手を出したものとライダーさんに指示を出そうとした瞬間、あちらの船が一瞬、光った。

衝撃と、生暖かい血液。

一本の槍がヘラクレスごとアステリオスを貫いていた。

派手に飛び散った血が辺りをぬらりと汚す。

エウリュアレが悲痛な叫び声を上げ、アステリオスが立香くんの名を必死に呼ぶ。

撤退してください——アステリオスを助ける選択をせずに立香くんはそう言った。

再生途中のヘラクレスにしがみつきながらアステリオスは何度も“ありがとう”と言いながら海へと落ちていった。

何とか逃げ切った俺たちは傷を癒しながらも金髪（ドクター曰くイアソンだとか）の喚いていたアークとやらを探すため片っ端から島を巡っていた。

身体を癒していたのはドレイク側だけでなく連れてきたアンやメアリー、黒髭もだが。

一応こちらが勝利したということになったので彼らは捕虜……の予定だったが、あれだけの強敵が相手故に『傘下』として戦うことになったのだ。

といっても上下関係がはつきりとされたわけでもなく、また同じ船故に割と気ままに過ごしてた。（ついでにすっかりと周りに溶け込んでいた）。

まあ、裏切り者——！ と三人にはほこすか嫌味を言われたりもしたが、そこまで根に持たれることもなく済んで正直助かった。

というか黒髭はスマホをちらつかせれば一瞬で手のひらクルクルでちよろかったとも言える。

因みに黒髭はこの時代の特異点の原因ではなかった。（少しほっとしたのは内緒だ）

それでもつてどうしてアークを探しているかと言えば、アークというのはぎっくり言えばパンドラの箱みたいなものらしい。

まあ要するにあまり良いものではない。

それを何に使うのか不明ではあるが、どうせ悪用されるのだからその前に先に見つけてしまおう、となったのだ。

まあ中身が災厄とか言ってる時点で個人的には関わりたくないんですけどね……

というか徐々に収まってきてはいるがそれでも先ほどループしてから眩暈や吐き気が酷いのだ。

だからメアリーよ、そうやって人の体をバシバシたたくのはやめなさい。

アンも人の体を揺するのはやめるんだ！

ヘルプミー、ライダーさん……とじやれていたら一本の矢が熊——オリオンというらしい、因みに白の長髪の人アルテミスだとか——の頭に突き刺さった。

それで「いてー！」で済むお前が羨ましいぜ……！

俺ならあれよ？ それを回避するルートにたどり着くまでに4〜5回は死ぬからね？

いやでも死なずに痛い思いをし続けるのはそれはそれで地獄か……？ 何て思っていたらこれ矢文だ！ とオリオンが叫ぶ

ガサゴソとして結局開けられず泣きそうな顔をしながら手渡しアルテミスが手紙を開く。

彼女曰くすぐその島に彼女の知り合いがいるらしい。

戦力が増え、情報も増えるなら行くしかないっしょ、と航路をそっちに向けるのであった。

鬱蒼とした森の中、木々の隙間から矢が飛び声が響く。

面倒くさい言い回しをしているがどうやらお前ら敵なの味方なのどっちなのサ！

みたいなニュアンスである。めんどくさっ。

取り合えずあの金髪野郎どもの敵ではある、と伝えると声の主は謝りながら出てきた。

手に弓を持って現れたのはすらりとした細い体つきをして緑と金の混じったような色の髪を持つても耳の女性だった。

……けも耳!?

受け止め切れない衝撃に動揺していたらアタランテさん！ と立香くんが嬉しそうに声を上げる。

どうも知り合いらしい。

流石立香くん……俺とは人脈のレベルが違った……

僕にも紹介しておくれやす、と妙に下手に出ながら言ってみたら何

こいつ……と蔑むような眼で見られたのは見なかったことにしてほしい。

立香くと彼女はどうかやらフランスで知り合ったらしい。

フランスでの思い出と言えば吸血鬼とワイバーン、後はアイドルくらいしか記憶にないのであまり思い出させないで頂きたいですね……

というかフランスでの思い出がこの三つってやばくね……？ 何してきたのか本気で意味わからないんだけど……

過去に思いを馳せて目を死なせてる横でアタランテはアルテミスのことを聞いて心に酷いダメージを負っていた。

事情は知らんがどんまい。その内いいことあるって。

そんな無駄なことを考えている内に話は終わっており、何故か緑髪の細い男が増えていた。

何だか口調も物腰も丁寧なのだが何故か——こいつクスだぞ——と俺の直感が囁いた。何故だ。

この男、ダビデというらしい。どつかで聞いたことあるな……そう思ったところで思い出す。

元羊飼いの古代イスラエルの王か。巨人を打倒したとかいう。

やっぱ逸話通り女好きなんだなあとマシユに言い寄る姿を見て思う。

ところで噂のアークはこいつが持っているらしい。というかこいつがいる所にこの箱あり、みたいな感じ？

まあつまるところ契約の箱とはダビデの宝具なのだ。

効果は触れたら死ぬ。正確に言うなら触れたものを世界への捧げものとして死を与える。

触れると死ぬとか何それやばすぎ……

じゃあさつさとダビデぶつ殺して消そうぜ、と提案したらドン引き気味に「僕が消えてもこれは残るから……」と言われた、残念。

しかも神<sup>エウリニアル</sup>霊がアークに捧げられるとこの時代が死ぬらしい。だからこそ奴らはこの二つを狙っているのだとか。

……もしかして黒髭はこのことを知っていた……もしくはこの時

代を守るためにエウリュアレを狙って……いや、保護しようとしていた……？

聖杯も持っていたし何らかに勘づいていたのでは……？

考えすぎかなあ、と黒髭を見ると元気そうにエウリュアレに熱烈な視線を送っていた。

間違いない。考えすぎだ。

はあ、とため息をこぼしてこれからどうするのかを聞く。

アークも見つけたことだしまあ、やることは一つしかないのだがこれが最大の難関なのだ。

魔女はいい、実際数で押せる。金髪も話を聞く限り雑魚らしい。おっさん——周り曰くヘクトール——もこの数なら押し切れる。

問題はヘラクレスだった。

全てにおいて規格外のやつは既にカーミラとマルタを一撃のみでリタイアさせているのだ。

正直言つて洒落になっていない。

俺みたいなちよつと戦えるだけの雑魚ならまだしもサーヴァントを二騎だ。

しかも少なくともあと10回は殺しても殺せないとかいう鬼畜設定。

うーん、無理じゃね？

アークに触れさせられればなあ、とダビデが言うがどう触れさせるのかが問題になってくる。

うーん、と皆が頭を悩ませる中ふと立香くんが閃いた！とその内容を口にした——

作戦の内容は荒唐無稽。アホか、と俺が真顔でなっただくらい発想がずば抜けていた。

作戦内容はずばり！ 敵をくそ挑発しまくってヘラクレスを誘き出す！

立香くんがエウリュアレを担いでヘラクレスをアークまで誘導する！

他のやつらは大体四か所に分かれて待機して立香くんが追い付か

れないように適度にヘラクレスの邪魔をする！

——これだけである。

やばくね？ 何がやばいってこの発想もそうだけどサーヴァントたちが一斉にいいね！ と賛成した辺りが最高にやばい。

しかもちやつかり俺もヘラクレスを邪魔する側に入れられてたのが最高にクレイジーだよね。

滅茶苦茶早口で捲し立てて何とか立香くんのフォローという立ち位置に落ち着いたがあいつら一般人の俺を何だと思っっているんだろ  
うな？

因みにライダーさんはもちろん俺の随伴である。

遠距離攻撃を主とするオリオン（アルテミス）、ダビデ、エウリュアレの宝具連続開放。

強力無比なその三射は島の近くまで迫っていたイアソンの船——  
アルゴ―船へと一斉に降り注いだ。

これで魔女やらヘクトールまで着いてきたら仕事量倍じやきかないぞ……！ と、どうかヘラクレスだけでお願いますと手を合わせ  
ていたら最早聞きなれた英雄の声が響き渡った。

あ、賭けには勝ちましたね。まあ死ぬ可能性もくそ高いんだけど。

島の縁に集まっていた俺たちの前に勢いよくヘラクレスが降り立つ。  
つ。

さーて逃げるぞおお!!

エウリュアレを担いだ立香くんを守るようにオリオン（アルテミス）とマシユがヘラクレスの前に立ちはだかった。そして全力で逆方向へと逃げていくダビデ。

背後で強烈な戦闘音が鳴り響く。

しばらく走り続け、森へと入ったところで金属音が聞こえなくなったな、と思つたら思っていたより近くにヘラクレスがいた。

振りかぶられていた剣をライダーさんが短剣で受け流した。

激しい摩擦音と共に流しきれなかったパワーが直にライダーさんへと伝わり勢いよく吹き飛んでいく。

もう振り切って追い付いてきたのか——!?

立香くんの背を押し既に展開していた概念礼装の木刀を身を守るように構える。

恐ろしい速さで振り切られた剣は木刀を押し折り俺の体を潰すように断ち切った。

激しい摩擦音と共にライダーさんが勢いよく吹き飛んでいく。

おいおいこつからかよ。

礼装魔術である瞬間強化を発動させ力強く地を蹴った。

躲しきれずに俺の左腕が血を吐き出しながら飛んでいく。

あまりの痛みに眩暈がする。

木刀を支えに何とか立ち上がった瞬間俺の意識は闇へと落ちた。

激しい摩擦音と共にライダーさんが勢いよく吹き飛んでいく。

絶体絶命☆

瞬間強化をかけながら木刀を鋭く投擲する。

ヘラクレスが煩わしそうにそれを引っ掴み握りつぶすと同時に素早くライダーさんを回収した。

応急手当はさつき使ったばかりですぐには使用できない。

ああ、もう本当にままならない。

振りぬかれる刃を目にしたのを最後に俺は意識を飛ばした。

激しい摩擦音と共にライダーさんが勢いよく吹き飛んでいく。

そういえば緊急回避があるじゃねえか！

そう思うと同時にせめて後三秒で良いから前に戻らねえかな……と切実に思う。

そしたらライダーさんを回避させられるというのに……

先ほどと同じように木刀を投げ、躲し、折られる。

ライダーさんを抱きかかえ追ってくるように振られる剣を緊急回避で無理やり避けた。

半ば強制的に動く身体は豪快かつ的確に振るわれた剣を避けきり、幹に当たることでの動きを止めた。

マジ欠陥魔術だよねこれ……いやすごいんだけどさ……  
まあこうなると次の一手が出せないよね、と俺は死を受け止めた。

激しい摩擦音と共にライダーさんが勢いよく吹き飛んでいく。

完全に同じ動きで強化をしようとして、ふと背中が猛烈に重いことに気づく。

一体何が——？ 疑問は発生した瞬間降りかかってきた言葉で解消される。

エウリユアレだ。何故か俺がエウリユアレを背負っていて彼女に先を急がされている。

おいおいおかしいだろ、完全に混乱しきった頭を整理させようと周りを見れば近くにいたのは橙の髪をした少女——立香ちゃん？

ははあなるほどね。  
確かに少女が小さいとは言え人一人担いで走り続けることは非現実極まりないわな。

強化をかけた体で迫る凶刃をギリギリ、運よく避けて急いで立香ちゃんを抱き上げて走りだす。

いざとなったら彼女の緊急回避で避けてもらうためだ。

全力で全身に魔力を流して走り抜く。  
振り落とされた剣を理不尽な動きで躲す。

つんのめるように前方に飛び、立香ちゃんを投げ出し肩にいたエウリユアレも投げ飛ばす。

木刀をフルパワーで投げ飛ばす。  
近接用とは言え必中のそれは乱回転しながらもヘラクレス目掛け

て飛んでいき、しかしあえなく叩き折られた。  
というか多分、突進気味に迫られてるせいで弾かれたただけだ、それ

だけで礼装は碎け折れた。  
当然、勢いを殺すことなく向かってくる彼は、しかし真横からの衝

撃に足を止めた。  
天馬——そしてライダーさんだ。

急いで俺のそばに来るライダーさんと天馬目掛けて振るわれる剣



を余裕を持って眺める。

何故なら時間稼ぎは十分だったから。

接近してくるヘラクレスの刃を暴風が受け止め黄金の剣を打ち払った。

設定していた第二ポイント。アークを置いた洞窟の手前にある森林。

ちょうどアタランテたちと出会ったその場所にいたのは現カルデアにて最強のサーヴァント、アルトリア・ペンドラゴン。

立香ちゃんが嬉しそうにアルトリア！ と呼ぶと彼女は早く先へ、と一言のみ。

マジかっこよすぎるんだけど……

彼女一人に任せるのは少しばかり不安だがカルデア内で一番の実力者だ、死ぬことはないだろう、と俺たちは必死に駆けた。

やっこの思いで森を抜け後は一直線に突き進むのみ。

エウリュアレを背負っているせいか極度の緊張のせいか息切れがだんだんと酷くなってくるのを魔術で誤魔化す。

ついでに立香ちゃんに強化の魔術をかけて後ろに目をやる。

——ヘラクレスだ。

想定よりも少し早い、だけれどもまあ、間に合うよね

一つの人影木から降り立ち剣を振るう。それに合わせるように続けて怒涛の如く銃声が鳴り響いた。

ドレイク、黒髭、アン、メアリーの海賊チーム！

一緒に戦うのはまだ数度目だというのに抜群のチームワークで上手くヘラクレスを相手取っている。

流石だなあ、と息を漏らして先に進んだところで一本の槍が俺の体を貫いた。

は、あ？

鋭く迫る人影と槍を想定よりずっと身軽に躲し、続く第二撃をライダーさんが弾き人影は後方にかなりの距離を開けて下がった。

なんでこんなに体が軽いんだ、と自分の状態を確認すれば肩にエウ

リユアレはおらずまた、隣には黒髪の青年が苦しそうに立っていた。  
立香くん――。

ああもう頭がおかしくなりそうだな、と頭を現状を整理しようと頭を回す。

作戦通りなら俺たちの現在位置は第四ポイント。

本当ならば最初の猛攻を防いでから上手く離脱したオリオン（アルテミス）とマシユが別ルートから一気に回り込み、元々待機していたアタランテと共にヘラクレスを足止めする予定だった。

しかし今俺たちの足元には身体を光に溶かしていくアタランテが倒れこんでおり、マシユとオリオン（アルテミス）は既に戦闘不能寸前まで追いやられていた。

――ヘクトール！ 思わず声を荒げてそう叫ぶ。

そう、ヘクトールだ。相も変わらずへらへらと笑いながらこの戦士は俺たちの前へと立ちはだかっていた。

作戦はバレていた……いや、予測されていた、か？

正確には『何かあるかもしれない』という推測に基づいて逆方面から乗り込んで来ていた、かもしれない。

立香くんに隙を見て先に行け、と伝えてライダーさんと目を合わせる。

こういう緊急時用の俺とライダーさんだ。

何だかんだヘクトールとは俺が決着つけたかったところもあるし丁度良い。

ノーモーションでライダーさんの魔眼が発動して動きを止める。

立香くんが駆けだすのをカバーするように礼装を発動した。

一本の木刀が形成されてヘクトールの槍とぶつかり合う。

勢いよく打ち合い更に来る連撃を木刀が勝手に反応して俺の腕を操るように打ち合わせた。

必中の礼装つてくそ便利だよな、と激しく腕が痛むの耐えながらそう思う。

マスターである俺がサーヴァントの攻撃を受け止められるとは思っていなかったのか、ヘクトールは動揺して少しの隙を作り出す。

それを見逃すほど立香くんは間抜けではない。エウリユアレと共に脇を抜けていく。

それでも追おうとするヘクトールを桃色の一本の矢が邪魔をした。軽く舌打ちをしたヘクトールが勢いよく振った槍を木刀でガードし、受けきれずに後ろに弾き返される。

ざざつと土を擦りながら礼装に施された魔術を開放。

——応急手当。

緑色の光がマシユとオリオン（アルテミス）を包んで回復させる。もう直ヘラクレスもここに来る頃合いだ。

混戦だけは避けたい。

二人にこちらから向かい撃ってもらい、なるべく時間を稼いでほしいと頼む。

こいつは俺とライダーさんでここから引き離す。

ヘクトールは一人、しかもさつきまで三人のサーヴァントと戦った後のこいつであれば、ライダーさんとならやれるはずだ。

立香くんには少しばかり足を止めても構わない、ゆっくり、確実にヘラクレスの視界に映り、上手く誘えるように移動してくれと伝えてもらう。

槍と短剣がかち合い火花が散る。

大きく円形に振り回されたそれを、限界まで姿勢を低くしたライダーさんが躲し、喉元へと短剣を突き出す。

ごっつ！ と鈍い音と共に一発の蹴りが腹にめり込みライダーさんが唸ると同時に短剣が首元を切り裂いた。

血に視界を覆われ困惑するヘクトールに一頭为天馬が突進し、そのまま空へと持ち上げた。

勢いよくこの場を離れさせられていくヘクトールが器用に槍を回して天馬へと突き立てる。

甲高い悲鳴が上がり、暴れながらもフラフラと落下してくる天馬に無理に跨り降りてくるヘクトールにルーンの刻まれた石を投げつける。

軽い爆音と光が混じり目を潰す。同時にライダーさんが高く跳躍した。

さっきのお返しとばかりに放たれた鋭い蹴りは頭を的確にとらえて打ちぬいた。

地に擦るように落ち、サーヴァントと同じように姿を消していく天馬に一言だけ謝った彼女は鋭い目線でヘクトールを見つめた。

対してあつちはいやあまいったなあ、と言葉を漏らしてこちらを睨みつけていた。

流星にしぶとい、というか今までの攻撃も全て急所をギリギリずらされている。

ふっ、とライダーさんが姿を消すように動いた。

気づいた時には既にヘクトールのすぐ目の前。だけれどもヘクトールは見事にそれに反応して見せた。

ほぼゼロ距離の二人の間で槍の柄と短剣が交差しせめぎ合う。

これはまた長引くかな、と思った瞬間ヘクトールの体が硬直した。

石化の魔眼――！

滑らかに動く短剣がヘクトールの首元へと吸い込まれていく。

短剣は音もなくヘクトールの命を刈り取り地に伏せさせた。

ヘクトールが天晴だ、とあの魔女――メディアに気をつけるよ、と言いつつ残して体を空に溶かして消えた。

さて、立香くんたちの後を追おうとすると同時に目の前にホログラムのウインドウが開かれる。

ドクターだ。一頻り俺とライダーさんの無事を確認した後に滅茶苦茶嬉しそうにピースサインをかましてきた。

作戦は成功したってことだ。つまりヘラクレスは死んだ！

やったぜ最高じゃねえか！ と三人で喜び合いながら合流するべく足を速めた。

島の近くにまで来ていたアルゴ号へと砲弾を放つ。

ヘラクレスとヘクトールが死んだと悟ったイアソンは慌てふため

き逃げ出した。

船が船だけにかかなりの速度だ。弾を撃ち、矢を放つがどれもがあまり意味をなさない。

——だけどもあ、それは予想通りだよね。

アルゴ―船の前を阻むかのように一隻の船が水平線の先から現れた。

女王アンクイーンアンズ・リベンジの復讐号。ドレイクとマシユ以外の全てのサーヴァントたちを乗せた最高の船の一撃がアルゴ―号へと突き刺さった。

激しい爆音と共に雨の如く矢が降り刺さっていく。

アルゴ―号の真ん中から一人の男の悲鳴が響いていく。

——こんな、こんなはずじゃなかった！ 今度こそ理想の！ 平和な国を作るはずだったのに！ 畜生！ 畜生！

錯乱したかのように叫び続ける彼をメディアがあなたを守ります、と優しく宥め、そして聖杯をねじ込んだ。

イアソンの体が捻じれ、醜い肉の柱へと姿を変えていく。

その姿を見ながらメディアが言霊を紡いでいく。

顕現せよ、七十二柱の魔神。序列三十——海魔フォルネウス。

醜悪かつ巨大な黒々とした肉の柱が船に根付くように現れた。

雲へと届くかと言わんばかりの巨体から質量の持ったガスのようなものがモブを取り込み爆裂する。

場に動揺が走り、ドクターがその名に混乱し始めた。

一瞬にして伝播した動揺はすぐさまパニックを呼んだ。

サーヴァントたちが戦闘準備するも慌てる船員たちが邪魔で上手く動けない。

不意に二丁の銃声が響いた。

黒髭とドレイクだ。

二人の偉大なる船長は声を高らかに上げた。

銃が当たるなら倒せるさ！

ここまでの分の借り、きつちり利子付きで返してやれ！ と。

一斉に落ち着きを取り戻すどころか、湧き立ち始めたモブを船室に

蹴り込みながら、ライダーさんが呼応して勢いよく短剣を叩きつけるように突き刺し鋭く引き裂く。

何だ、血もちゃんと赤いじゃないですか。何て言っちゃうライダーさん超クール……。でもその血をなめて嘔吐してるのは超かつこ悪い……

自分自身を囲むように爆発が起き真つ黒な色をした爆風が辺りに広がり、それを暴風が掻き消した。

続いて二刀のカトラスが柱の至る所に付いている目玉を潰すように叩き切り、守るために動き出したメディアをアンの銃弾とアルテミス（オリオン）の矢が同時に貫いた。

ま、ここまでサーヴァントが多ければどうにかなっちゃうもんだよね。

船に張り付くようにあつた根のようなものを各々が断ち切り、撃ちぬいていく。

無差別に起こる爆発や衝撃をマシユの大盾とその宝具が避ける。船から切り離された魔神柱に二隻の船の砲弾が降り注いだ――。

消えゆく間際、メディアが黒幕について言葉を漏らす。

魔術師として最高峰まで上り詰めた彼女をもつてさえ「勝てない」と言わしめ敗北を認めさせるほどの魔術師。

だからこそ星を集めなさい、とそして続けて俺を見てあまり『それに頼りすぎると戻れなくなりますよと、そう言った。

そして最後に彼女は狂った愛情をイアソンに向けながらあなただけを守りたかったと言ひ残して消えていった。

徐々に船員たちが姿を消していく。

終わりだ、この特異点は修正されたのだ。

ずっと張っていた緊張が緩んで思わずしりもちをついた。

ふと船首を見ればドレイクやエウリュアレ達と立香くんにもシユが別れを告げているしドクターはダビデと話し込んでいる。

相変わずどこの特異点でも深いコミュニテイ作るなあ、なんて思

いながら後ろに倒れて寝転がる。  
同時に人影が俺の頭を覆った。

——黒髭。

マジで今回は色々世話になったな、ありがとう。と述べたらぐつと手を引つ掴まれて起き上がらされる。

何だ、と上手く力が入らない足でプルプル立つとドンツと胸に拳を当てられ楽しかった、次もできるなら共に戦いてえな、と良い笑顔で言われる。

もちろんだ、と拳を当ててそう言いやりと笑う。

ついでに召喚された暁には存分に語り合おうでござる、なんて語尾に草を生やしながら彼はすうつと姿を消した。

あいつマジでどっからオタク知識仕入れてんだろ……疑問を抱えながら座りなおそうとしてまたも腕を引つ張られた。

何なんだよ座らせるよ……そう思って前を見たらそこにいたのはアン・ボニーとメアリー・リード。

次こそは財宝を手に入れるんだ、チャンスをくれるよね？

当然、手伝ってくれますよね？

有無を言わさない迫力でそう詰め寄る二人。財宝も手に入れられず、あまり活躍できなかったのが悔しいみたいだった。

勿論だ、と笑いながら腕をぶつけ合わせる。

期待している、そう言い残して二人は消えた。立香くんたちも別れを告げ終わったようだ。

涙ぐむ二人と俺を満面の笑みでドレイクは手を振りながら見送っていた。

——Order Complete——





## 魔霧に沈んだ街@無限ループ

目を覚ますと視界に映るのは既に見慣れた、無機質な色をした天井。

億劫さを投げ捨てる努力をしながら身体を起こし、うんと伸びをしてからいつものように手の甲をみる。

そこには当然のように三画からなる真っ赤な紋様——令呪が刻まれている。

それを一撫でして本物だと確かめてから、やはりこれは夢ではないのだ、と嘆息しながらベッドから降りる。

確認してからがっかりするのが習慣染みてきたな、と笑いながら真っ白な制服に腕を通した。

今日は久方ぶりのミーティングだ。朝早くから会議とかちよつと全力で遠慮したいが上司の命令なら仕方ないよね、とまたため息をつきながら俺は近未来的な扉をスライドさせた。

ごつめーん待ったあ？ とブリーフィングルームの扉を開けば既に俺以外の全員がそろっていた。

あ、マジで待たせちゃった感じ……？  
すまねえ、すまねえ……と席に座った。

そんな俺を苦笑いで見ながらドクターが良し、全員揃ったね！ と話を始める。

やはりというか何というか、話の内容は次の特異点を突き止めた、という内容だった。

彼曰く次の特異点はロンドン。それも今までのように何百年も前というわけではない。

19世紀。それでも100年以上は過去であるが今までと比べればかなり近代的といえた。

出発は明日、と伝えられてミーティングは終了となった。  
急だな、とも思うが既に前回の特異点修復から二か月も経っている

ことを思えば当然ともいえた。

俺たちにはもう半年ちよつとしか残されていないのだから。

レイシフト専用のコフィンに入り、機械的な女性の声を聴きながら目を閉じる。

相も変わらず俺の手には、ライダーさんの手が握られていた。

多分全部終わるまで特異点に行くときはこうしてるんだろうな、と思いつながら俺の体は過去へと溶けた。

——余談だが、ライダーさんは最近目にかけていた帯を外して露出が増えた。

お陰で目のやり場に困る今日この頃である。

そこは霧に閉じ込められた街だった。

周りを見渡して、いつものように立香くんがいないことを確認した。

どうしていつもはぐれるんだろうな？ 相も変わらず通信も上手くつながらない。

最早何かの陰謀なんじゃないだろうか、そう考えながらライダーさんへと駆け寄る。

今回はライダーさんしか連れてこなかった。

というより、連れてこれなかったといった方が正しいかもしれない。

現地で霊脈ってのを探してそこで物資を補給するだけでなく再召喚、という形をとったほうが魔力的、電力的に効率が良い。というより有限資材でやりくりしなければいけない以上かかり過ぎるコストは無くしたい、という訳だ。

また、何事も武力で解決できるという訳でもないいきなり大所帯で現れる、というのもメリットばかりではない、という訳である。

俺にしては珍しく反対意見で粘ってもみたが数少なくなつた職員たちの負担、カルデアとしての有限資材を考えると無理は通せなかった。

ま、うだうだ考えていても仕方ないか、とライダーさんの隣を歩い

ていく。

街はどこもかしこも深く、濃い霧に閉ざされていた。

魔術で道を照らしだし、しばらく歩いてみるも上手く先が見えない。  
い。

一寸先も闇ならぬ一寸先も霧、つて感じ。

うまいこと言えてねえな……ちよつと恥ずかしいじゃねえか……

赤くなった頬を隠し、妙に重くなったように感じる身体を引きずるように進んでいく。

……？

何で身体が重い……いや、これ全身から力が抜けていつている……

？

くそつたれが。

ふざけんな、と全身の魔術回路に魔力を流し込むが上手くいかない。  
い。

全力でその場にふんばるが無情にも俺の足は崩れ落ちた。

おいおい嘘だろ何なんだこれ。

ライダーさんが必死に俺に呼び掛けてくるが既に声はどんどんと遠くなつていつていた。

そこは霧に閉じ込められた街だった。

久しぶりに意味不明な死に方を……

原因として考えられるのはこの霧しかないよな。

ひとまず考え事くらいさせてほしいので家の中に入れさせて貰えないかとノックして回るがどこも無反応。

そりやそうか、誰も出たがらねえよな……

いやでもこんな物騒な霧の中ならどちらにしろ餓死か何かで住民は死んでいるのでは……？

どちらとも言えないな、この霧が出始めて日が浅い可能性もある。

いずれにしる情報が足りない。

全身に強化を回してライダーさんに運んでもらう。

取り合えずどこか合法的に入れるとこを……

徐々に薄れていく意識を引つ掴んで離さない。

最早意地だけで意識を保っていたら不意に機械音が耳朶を打った。降りると同時に黒鍵を投げ放つ。

しかしそれは届くことなく途中で情けなく落下した。

力が足りない――

ライダーさんの蹴りが決まるのを最後に意識を手放した。

そこは霧に閉じ込められた街だった。

今回は本格的に無理なんじゃないだろうか。

全身を強化してからライダーさんに抱きかかえられて駆け抜ける。

途中で現れた手の長い、白い人型の敵の脇を見向きもせずには抜けていく。

今そんなもんに関わっている暇はねえ。

限界まで強化に注げば一時間はどうにかなるはず。

それまでにどっか入らなければ。

もう民家のドアぶっ飛ばして良いんじゃないかねえの、と一瞬よぎった思考を投げ捨て目を凝らす。

不意に悲鳴が走った。

ライダーさんと目を合わせて頷いて、悲鳴のした方角に俺たちは駆けだした。

肉の裂ける音、聞こえなくなった悲鳴。

行き止まりとなった裏路地が真っ赤に濡れていた。

間に合わなかった、か……

こと切れてしまった女性に近寄ろうと踏み出した瞬間右腕が肩ごとずり落ちた。

は――？

焼けるような痛みを抑えるように左手で抑えて後ろに跳ぶ。

追うように迫るナイフをライダーさんが弾いた。

声を出すことが出来ない、約二か月ぶりに味わう痛みとそれによる死の感触に嫌な懐かしさを覚えた。

息を整えるのを諦めて礼装を展開しようとするが上手く集中できない。

今度からは勉強だけじゃなくて死ぬ寸前くらいまでの戦闘訓練も取り入れなきやいけないな、ぼやけた視界の中そう思う。

痛い、血が足りない、身体が怠い。只管に激昂するライダーさんの声がもうほとんど聞こえなかった。

肉の裂ける音、聞こえなくなった悲鳴。

行き止まりとなった裏路地が真っ赤に濡れていた。

即座に礼装を起動する。

すっかり手に馴染んだ木刀がしっかりと右手に握らさる。

最大限上空を警戒する。さつきと同じように降ってきた敵を振り

弾いて目を凝らす。

ナイフを振るっていたのは齡十程度の少女だった。

まあ今さら見た目で動揺する訳も無いが。

切り込みの入ってしまった木刀を握りなおした。

少女は薄く笑って何かを呟いて、またもや姿を消して、目の前で火

花が咲いた。

遅れて金属音が鋭く響く。

少女のナイフがライダーさんの鎖に防がれていた。

早い——目で追えないな。

後ろに下がると同時にナイフと鎖は離れ合い、数瞬遅れて木刀が閃いた。

追えない速さで降り降ろされたナイフを受け止め弾き、更に叩き込むように両手で振るわれたナイフをライダーさんが鎖でからめとる。

一瞬動きを止めた少女の片目に深々と木刀を放った。

ぐちゃり、と柔いものを潰す特有の感触。

強く響く悲鳴を掻き消すようにライダーさんの蹴りが胸へと入り、

勢いよく吹き飛んでいった。

距離感さえ潰せばあの速さもおさまるだろう、勝利を確信して踏み出す。

瞬間、ライダーさんが弾けた。文字通り、全身をバラバラにして散った。

酷い量の血飛沫がまとわりついてくる。

なん、だこれは。

動揺を覚えながら木刀を構え、同時に切り落とされた。

まずい――

新たな礼装を取り出そうとした左手が宙を舞った。

続いて酷い痛みと共に倒れこむ、片足が身体から離れていた。

必死に身体を反転させたその先では、片目の殺人鬼がナイフを振り上げていた――

肉の裂ける音、聞こえなくなった悲鳴。

行き止まりとなった裏路地が真っ赤に濡れていた。

宝具、だよな。それにしても魔力を感じなかった……感じ取れなかった、の間違いか？

まあいい、次は使わせない。

降ってくるタイミングでバックステップ、展開していた矢を放つて更に下がる。

何てこと無さそうに処理して少女は掻き消え、同時にライダーさんが俺を引つ張った。

ナイフが鼻先を掠めて振り抜かれて、こびりついた血が頬にはねる。

ライダーさんの短剣が閃き、何度も金属音が響いて霧に沈んだ道を明るく照らしました。

礼装を展開しなおして木刀を握りしめる、同時にライダーさんへと念話を送る。

走り出す、限界まで強化した身体で勢いよくスピードをつけて、ライダーさんの背中へ、その先へ向けて突き出した。

ライダーさんは背中に目が付いているだろうかと疑わせるくらい完璧なタイミングで上空へと飛び跳ねた。

空振りした少女に木刀が迫り、しかし貫くことはなかった。

紙一重で木刀は空を刺した。

やらかした――酷く歪んだ笑みを浮かべて少女はナイフを振り上げ、けれども振り下ろすことなく不自然に動きを止めた。

石化の魔眼――！

ライダーさんによって作り上げられた一瞬の間。

踏み出していた左足を軸に半回転、軸を右足に変えて素早くもう半回転しながら野球のバットののように、木刀を勢いよく振りぬいた。

重く、鈍い感覚が腕全体に広がっていく。

血を散らしながら後退した少女の腹にライダーさんのつま先がめり込んだ。

こほつ、と空気が吐き出されて更に吹き飛んでいく。

地面を跳ねて転がる少女を追い詰めるべく地を蹴り、そして沈むように倒れこんだ。

ライダーさんが驚愕を浮かべてこちらを見る。

だめだ、前を見てくれ――

そう思ったときは既に遅く、ライダーさんの胸を銀色に光るナイフが貫いていた。

吐き出される血塊。叫ぼうにも声が出ず、真っ赤に濡れたナイフはそのまま俺の頭を刺し貫いた。

肉の裂ける音、聞こえなくなった悲鳴。

行き止まりとなった裏路地が真っ赤に濡れていた。

先手必勝、必中の呪いのかかった弓矢を取り出し矢を絞る。

いい加減黙って死んでくれ。

そんな俺の思いを乗せて矢が空を裂く。

連射された矢を少女は降下しながらも当然のように切り裂いた。

だけどこれでいい。

着地のバランスを少しでも崩せればそれだけで隙ができる。

ライダーさんが素早く空を切った。

高速で放たれた蹴りをナイフで受け止め地を擦った少女に息をつかせぬ連撃。

けれども少女は決して当たることなく全て受け、躲していた。

これじゃさつきと変わらない。

俺にはあまり時間がない、もうもって10分がいい所だろうか。

ため息をついて新たに手に入れた礼装を取り出す。

勿体ぶってここで死に続けても仕方ねえな。

それに、いい加減先に進みたい。  
無駄に黄金色に輝く礼装を起動した。

——収斂こそ理想の証——

見知らぬ青年の声が頭に響く。

同時に不快感や気怠さが拭われていき、全身に炎のような熱さが、  
剣のような冷たさが広がっていく。

身体が己のものじゃないような全能感が馴染んでいくのを感じながら弓を静かに構えた。

ライダーさんと少女が瞬きすら惜しいほどの速さで切り結ぶ。

何度も火花が散って、金属音が高らかになっていた。

常時では追いきれないそれを眼に強化を回して静かに見据える。

いける、今なら追える。

木刀を形成して割り込むように振るった。

それを上手くかわして少女は薄く笑う。

きつと少女は俺が馬鹿なことをしてると思ったのだろう、当然だ、  
俺は人であってサーヴァントじゃない。戦力としては足手まとい。

でも今この一瞬だけは違う。限界を超える礼装。

これで今の俺はほんの少しの間、この数瞬のみ英霊にだって手が届く。

油断した少女のナイフを連続で叩き落として、更に頭へと振り落とす。

伝わる衝撃から上手くダメージを逃がされたことを悟った。

だけど、これで充分。

残念ながら俺は一人じゃないんだ。全部俺がやる必要はない。

木刀を戻して弓矢を展開しながら交代するように後ろに下がった。

動揺と驚愕に動きを鈍らせた少女の、左手首が宙を舞った。

驚きと苦しみに表情を歪めた少女に、放った矢が胸へと吸い込まれるように突き立った。

声にならない叫び声を上げた少女に、ライダーさんの渾身の蹴りがぶち込まれる。

身体をくの字に折り曲げその場に屈して膝を折る。



見た目が少女だろうがサーヴァント。  
慈悲などいるものか。

さつきは感じることもなかった、爆発的に高まる魔力に焦りを覚えながらも確実に、ライダーさんは少女の首を刈り取った。

ごとり、と地面に頭が転がった。

次いで、体と頭が光と化していく。

この選択は正しかったはずだ、間違つてはないはずだ。

ろくに話もしなかった少女のなれの果てを見ながらそう呟く。

礼装を解除して急に来た身体への反動に思わずうめき声を漏らした。

やばい、調子に乗りすぎた……

魔術で強化しても尚今の俺ではありえない動きをしたせいで身体が酷く悲鳴を上げる。

あれしか動いてないのにこのザマは情けなさすぎるだろ……

酷くふらつき始めた身体を支えられながら何とか女性の亡骸へと近づき状態を確かめる。

やせ細った体つき、こけた頬、目の下には濃く、大きな隈ができていて目は落ちくぼんでいた。

これ……しばらくしつかりとしたもの食ってないな……

素人の自分ですらはつきりとわかるくらい女性は若く、しかして貧相だった。

ということとはつまり彼女は“飢え”を恐れて屋内から出たわけだ。

そして腹を搔つ捌かれて命を落とした、てどころか。

——なるほどね。霧が出てから少なくとも一人が飢えに耐えられなくなるくらいには時間が経っているってわけだ。

だとしたら他の住民たちも似たり寄ったりなことになっている、と考えるのが普通、か？

一回試してみるか……

想像通りでありますように、と予想が当たりませんように、という矛盾する思いを同時に願いながらライダーさんに頼んで近場の扉を蹴り飛ばしてもらおう。

扉は一瞬の抵抗を見せたが呆気なくへこみ、金具ごと奥へと吹き飛んでいった。

抱えてもらって、一つずつ部屋の中を見て回る。家の中は外より断然空気が良く、多少なりとも体調を吹き返していく。

家の中には物言わなくなった人だったものが一つ台所に横たわっていた他には何もいなかった。

素直に喜べはしねえな、不快さと苛立ちを感じながら一際大きなベッドのある部屋に入り扉を閉める。

隙間から霧が漏れてこないように布を敷き詰め寝転がると途端に全身が疲労と気怠さに包まれて身動きが取れない。

ちやっかり頭を撫でるライダーさんの手をほどこすすらできなかった。

ちよつとばかり恥ずかしいが今はもう何もできないし、しばらくはこうしているか……

目を覚ますころには通信が回復していればいいな、もう随分と聞きなれたノイズに失望しながら瞼を閉じた。

激しい物音に目が覚めた。

いつの間にか顔にかけられていた布を剥ぎ、多少気怠さは残るものの痛みの引いた身体を起こして周りを見渡せばライダーさんがいない、それだけで大体の状況を把握した。

この物音——戦闘音とライダーさんの不在、この二つが合わされば馬鹿でもわかるだろう。

階下から響いてくる金属音に焦りを覚えながら窓からそろりと身体を出す。

思っていたよりずっと長く眠っていたようで、霧に覆われた街はその暗さをより深くしていた。

今何時だよ……浮かんできた疑問を振り払いながら音の響く真下を見て絶句した。

俺の身長よりもでかい機械がけたたましい駆動音立てて鎮座して  
るではないか。

え、何あの少年心を撥られるロボット……

漢のロマンヤン……と思わず見入っていたのを一際強い金属音で引き戻される。

おつとあぶねえまたアホを丸出ししていた……

自動で動く人形を相手取るライダーさんの位置を確認、予想しながら礼装を開放しつつ飛びあがる。

狙うはでかぶつ、あれだけでかければ避けられることもないだろう。一撃で仕留めて見せる。

九字兼定——真つ赤な鞘に納められた刀を抜き放ち、魔力で強化してから頭に当たる部分へ落下しながら刺しこんだ。

鋼鉄のボディは僅かな抵抗を見せたが仮にも概念礼装、その上で微力ながら強化している刀の前では障害にすらならず易々と鏑まで刺さり、動きを止めた。

ばかり、ばかりとショートしたような音が鳴り始めて火花が飛び散り始めた。

あ、ちよつとまずいやつですねこれ……

思いのほかあつさりと抜けない刀を力づくで引き抜き鞘にしまつてから足場を強く蹴った。

瞬間、爆音。

熱気が背中に達したと感じた瞬間景色が急速に流れた。

激しい風圧が身体にかかる。

耳元で金属が擦れる音が響いていた。

流石ライダーさん……助けに入るタイミングが完璧すぎる……

最近良く増えてきたライダーさんの小言を聞き流しながら次はどうするかを考える。

考えなしで出てきてしまったからどうしようもないんだよなあ、と若干焦りだした瞬間目の前にホログラムの映像が投射された。

映し出されたのは立香ちゃんとマッシュだった。

どうやら霊脈もきっちり見つけてカルデアとのパスも繋いで更には協力者まで見つけたらしい。

ちよつと優秀すぎない……？ 君たち現地の人と仲良くなるの早

すぎでしよ……これがリア充……

全力で爆睡をかましていたことに罪悪感をほんのり感じながらそちらに合流するとだけ伝えてドクターに座標を教えてもらう。

何だか気持ち薄くなった気のする霧の中をライダーさんに抱えてもらって突っ切った。

指定された座標にあったのはまあ、どこにでもありそうな感じのマンション。

そこから指示された部屋に入れば立香ちゃんがやつと来てくれた！　と言わんばかりの表情でこっちこっち、と俺の腕を引っ張り始めた。

随分と元気だな、と誘導されたそこには二人の女性——いや、アルトリアが二人……？

いやそんなまさか、と目を擦って良く見ればアルトリアとアルトリアに外見はよく似た、けれども全く違う女性がそこにいた。

アルトリアと比べてややきつい目つきに綺麗な金の髪、白と赤の二色で彩られた重厚な鎧を身にまといかっこよさげな剣をぶら下げている。

見た目からして性格きつそうだなあ、と思うが現在そんな彼女は非常にきまわずそうな、どうしたらいいのかわからないと言ったような曖昧な表情でうろたえていた。

何かあったのだろうか、いや、何かあったんだな、と確信を抱いてアルトリアを伺えば彼女は見るからに不機嫌、と言うか極端に鎧の彼女を視界に入れないようにしているのが見て取れた。

ええ、何なのこの状況は……いきなり意味がわからなすぎるんですけど……

俺にどうしろと言うのだ、と困惑していたら扉の奥から細身の男性がお茶菓子を持ってこちらに挨拶を飛ばしてきた。

にこやかにこちらに笑みを向けてるけど誰だお前は（真顔）

ヘンリー・ジキル、と彼は名乗った。

ジキル……ジキル？ え、ちよ、もしかしてジキル博士とハイド氏……？

思わず声に出すと彼は目を丸くして俺を見た。

ハイドを知ってるのか？ と聞かれても……いや、知ってるけど何？ 本当にジキル博士なの……？

にわかには信じがたいんだけど……というか信じたくねえ……

いや、これが神話や伝説、伝承のような現実かどうかが曖昧なものなら俺も「へえ、本当だったんだあ」くらいで済ませるのがジキル博士とハイド氏に関しては話が違う。

だってこれって確か1900年辺りに出版された小説だし何なら著者まで判明している。

考えられるとすればモデルとなった人物、とか……？ そんな話聞いたことないけどな……

……いや、待てよ？ 確かこの時代は19世紀後半……小説は既に出版されているはずだ。

ちよつと探してみるか……？ 一瞬そう考えてすぐに却下する。そんな暇俺にあるわけないだろう。

俺は考えることを諦め、他の人の自己紹介を頼んだ。

特にその目の泳ぎまくってる鎧の女の子気になりすぎるんだけど……

それもそうだ、と立香ちゃんが促せばその彼女は自分のことをモードレッドと名乗った。

……ああ、なるほど。通りで気まずそうな顔しちゃう訳だよ……なんてつたつてモードレッドはかのアーサー王伝説でも特に主要な人物。

円卓の騎士でありながらアーサー王に反旗を翻した叛逆の騎士——いや、叛逆の王とでも呼ぶべき存在。

何故なら彼——彼女はアーサー王に反抗の意志を持つもの全員を味方にしてその指揮をとったのだ、ある意味王ともいえるだろう。

それによりブリテンという国は崩壊し、相討ち気味とはいえアーサー王も亡くなった。

そしてそのアーサー王本人——アルトリアが今この場にいるのだから彼女にしてみればたまったものではないだろう。

まあ一番たまったものではないのはアルトリアだとは思うけど。

モードレッドに対しあまりにも塩対応なアルトリアに苦笑をこぼしてこれで協力者は全員か、と聞けばまだまだいるという。

どうせせいづらも英霊なのだろう、英霊は基本的にギャップが効きすぎたやつしかいないため残りの紹介は後にして取り合えず現状を教えてくれと問えば彼は笑顔で承諾した。

ついでに残りは部屋の奥で充電中だとか休息をとっているだとか何とか。

充電……？

意味わかんない単語が混じった気がするけど華麗にスルーして話を促した。

霧が出たのは三日前——ジキルはそれを口切りに彼の調べた情報を話し始めた。

いやちよつと待つて三日？ たった三日なのん？

俺がどや顔で決めたあの推理は一体……あの女性は霧とは全く無関係な理由で痩せ細っていたってことになっちゃうし不法侵入（本意）を決めたあの家にあつた死体は一体……

もしかしてあれは今回の件とは関係のない独立した殺人事件だったのでは……

何それこわつ、と身震いしながら話を聞けば目下どうにかしなければならぬことが三つあるという。

まず一つ目は当然この街を覆う謎の霧。

二つ目に来るのが外に出た人を殺して回っているという切り裂きジャック。

そして三つ目が大量にいるに関わらず一つ一つが面倒なくらいの戦闘力をもつ機械群——通称不明の怪機械

ふうん、へえ、ほおん……ジャック・ザ・リップパー、ねえ……

多分それあの少女……認めたくない……非常に認めたくはないが

恐らくはそう、だよな……英霊だったし女性切り殺してたし……切り殺されまくったし……

こつそりとライダーさんと目を合わせたら彼女もぎこちなさげに頷いて返す。

多分ジャック・ザ・リッパー俺たち倒したわ、と伝えれば驚きの声と共にどんな相手だったか問い詰められたので、ああ、うん幼女だったよ、とだけ伝えて今度はそつちで何があったか聞きたい、と無理矢理話題の変更をした。

こら、マシユとジキル博士、無駄に食いついてくるんじゃない、ドクターもうるさいぞ。

立香ちゃんたちは想像の倍以上の働きをしていた。

具体的に言うなら片手では数え切れないほどの味方を見つけ、サーヴァントを三騎ほど倒していた。

ちよつと有能すぎないだろうか……

薄々思っていたがもしかして俺って必要ないのでは……よぎった思考を払っていたら今度はヘルタースケルターや霧の正体のヒントがないか時計塔に行くと言うではないか。

時計塔——え？ 時計塔あるの？ あ、そつかここロンドン……

は？ でも魔術師は全員死んでる可能性が非常に高いとか冗談よせよ……たつた三日であの化け物の巣窟が落ちるか？

いや、落ちるか。知らんうちに人理を焼いた敵が相手だし……

まあ全滅しても書類等は残っているだろうから骨折り損にはならない、か。

どうやら明日の朝に出発とのことなので話はこの辺で切り上げ早々に休みとなった。

濃い霧の中を走り抜けていく。

そんな俺の口元にはマスクがつけられていた。

大した効果は望めないが、それでも無いより増し、ということずつけている。

因みに立香ちゃんは何故か霧の影響を全く受けないらしい、本当に

君一般人？

何か盾の英霊であるマシユと直接契約結んでるからその加護があるんじゃないかみたいな仮説を立てているらしいのだがどうにも曖昧らしい。

何にしろ羨ましすぎるな、と呟いた瞬間ライダーさんがしゅんとしてしまい、昨晚しれつと召喚していたカーミラが若干不機嫌になったためこれ以上は深く聞かないと心に誓った。

だからいい加減私じゃ不満だって言うのかしら？　みたいな視線を当ててくるのをやめるんだ元アイドル。

いい加減その呼び方はやめなさいよおお！　と叫びながらわらわらと集まり始めた自律して動くマネキンやホムンクルスを宙から呼び出した小型のアイアンメイデンに封じ込めたり長く伸ばした爪で切り裂いていく。

ナチュラルにアイアンメイデンを多用してる辺りこの女やばいわ、いやサーヴァントは皆やばかったな、と自己完結しながら進んでいけば案外あっさり時計塔の地下へとたどり着いていた。

案外じめつとしてるなあ、という感想を抱きながら手当たり次第に扉を開けていく。

中々お目当てのものがないなあ、とじれったさを感じながら本棚を漁ろうとした瞬間棚から飛び立った本が勢いよく火やら氷やらを飛ばしてきた。

は？

咄嗟に横にいた立香ちゃんを押し飛ばして自分も横に跳び跳ねた。炎が弾け、氷が足元を凍らせる。

少しだけ掠ったのかズボンの端が少しだけ焼けていた。

びっくりはしたがこの程度なら余裕だな、俺はもつと熱い火を知ってるぞ、と何時ぞやのフランスに想いを馳せながらカーミラの後ろへ回る。

こちらには複数のサーヴァントいるだけあって鎮圧はすぐに済んだ。



本が襲ってくるのかここは地獄かよ、と震えながら次々と本棚を漁っていたら突然ぐらり、と視界が揺れた。

やばい――

当然のようにやってきた吐き気に倒れこむ、ぐるぐると視界が回って既に焦点は定まらない。

カーミラの声が聞こえたのを最後に俺は意識を手放した。

案外じめつとしてるなあ、という感想を抱きながら手当たり次第に扉を開けていく。

身体の強化を怠っていたとはいえ時間をかけすぎたか。

全身に強化を回してさっき見たところを無視させて周りを奥へ奥へと急かす。

途中から本以外に、ヘルタースケルターまでもが出てきたがやばげな薬を飲んだジキル博士がハイド氏と化してバーサーカーの如く暴れまわり事なきことを得た。

ていうかマジであんな豹変するんだな……あの薬を使えば誰でもああなるのだろうか。

誰でも使えるならちよつとほしいかもしれない。

あ、でも人目も憚らずヒヤツハアー！ とか叫ぶのはちよつとご免被りたいな。

そんなことを考えている間にも本や機械は湧いて出てくるのだが危機感を抱くほどのことは無く俺たちは次々と歩を進めた。

どれだけ進んだらうか、不意に渋めな声が朗報をもたらした。

やつと見つけたのか、じゃあさつさと持つて帰ろうぜ、と口を開こうとした瞬間ドクターが悲鳴を上げるように声を上げた。

何？ 動体多数？

数瞬遅れて意味を理解すると既に部屋の前はヘルタースケルターや浮遊する本でいっぱいになっていた。

どうしてこういう手合いのやつらはいつもくそ面倒なタイミングで出てくるんだろうな？

少しは空気を読めよ、とルーンストーンを投げつけ起動。

同時に複数投げられたそれは一つ一つが輝き色を放ち、辺りを光で

染め上げた。

それを薄目で確認しながらすぐに下がる。

こういう時調子をこくと俺ってばすぐ死ぬからな。

代わりに前に出たアルトリアの一撃を口火に今回来ていたサーヴァントたちは全員——いや、書庫で資料を読み漁っている“アンデルセン”を抜いた全員が各々の戦いを始めた。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン、という人物を知っているだろうか？

知らなかったとしても彼の紡いだ作品はきつと知っているだろう。人魚姫、裸の王様、みにくいアヒルの子、マッチ売りの少女。

どれも世界中で愛読されているといっても過言ではない作品を作り上げた人物だ。

そしてそんな彼は今、幼い子供の姿で資料を読みふけていた。

そう、幼い子供の姿で、である。

まあ、これにはしつかりとした理由があるそうで、ドクター曰く英霊というのはその人の最盛期であった姿で召喚されるとかなんとか。

つまり彼の最盛期は少年時代だったという訳だ。

70歳まで生きていて最盛期がシヨタ時代だったとか色々報われねえな……

どんまい、と思いつながら接してたらくそ渋い声で毒を吐かれまくったのは記憶に新しい。

少年の姿でありながら声だけは大人顔負けの渋さというギャップに動揺し、更に吐かれまくった毒に普通に傷ついたので言うまでもないだろう。

ちくしょう……絶対言い負かしてやるからな……と負けん気を煮えたぎらせながら書類を読み漁る。

本当ならばちよいちよい前に出てサポートでもしようと思っていたのだがカーミラにすっこんでる雑魚が、と言われてしまったのは仕方がない。

あれだけいれば負けることも無いだろうし、と自分を納得させてせ

めて役に立とうと資料を読み漁っているわけである。

因みになぜ持ち出さないのかと言えば魔術師によつて持ち出せないよう罫がしかけてあるとか何とか。

面倒なことをしてくれる、とは思うが嚴重に閉じられていたおかげでこの書庫だけは霧が入ってきておらず身体の回復ができた。

寝転がるのは行儀が悪いが一応資料を読み進めてはいるし、重要な書類はアンデルセンに丸投げなので問題ないない。

あれ、もしかして俺ってば大して役立ってない？

まさかまさか、と汗をだらだらと流しながら読み流していく。

この時ほど英語を死ぬほど勉強しといて(させられて)よかったと思うことはこの先無いだろうな、なんて思いながら。

一際大きな爆発音、それに伴って届く叫び声と共にアンデルセンは目当ての資料を読み終わり、俺もまた手に持っていた資料を読み終わった振りをして棚に戻した。

……うるせえ！ 日本語ほど流暢に読めねえんだよ……！

この短い間でこんな分厚いの読み切れるわけがないだろう……！

そんな俺のことを察したのか憐みの目を向けるアンデルセンの頭をぐしやぐしやと押し付けながら部屋を出た。

扉の先ではすっかり敵はいなくなり、ハイド氏は消え、代わりに肩で息をするジキル博士とあまり疲れた様子の見えないサーヴァントたち、それにマシユを労っている立香ちゃんがいた。

何事も無かったようであつた。こちらも目当てのものは読み切ったしさつきと帰ろう、と拠点へと足を向けた。

マンション——アパルトメントと言うらしい——について一息ついた後にドクターに促されてアンデルセンは資料について話を始めた。

小難しく色々と並べていくが要するに『聖杯戦争』と『英霊召喚』というのと同じシステムでありながら全く別物のジャンルであり、『聖杯戦争』は人間が利を求めたもの、それに対して『英霊召喚』は一

つの巨大な敵”に対して“人類最強の七騎”をぶつける、というものらしい。

ふうん、なるほどなあ、と思いながら俺と同じことを思ったのかモードレッドが呟いた。

それ、ヘルタースケルター的大量発生とか霧と関係なくね？ と。

それを当然だ、俺の個人的興味だし、と堂々と言い放ったアンデルセンはとてもいい笑顔をしていたとだけ言っておこう。

まあいつもならブチ切れていたかもしれないが今回は珍しく一回しか死ななかつたので許してやろう。

俺ってば寛大……と自画自賛をしていたら一応の解析結果が出た、とドクターが言葉を続けた。

どうやらヘルタースケルターは一つの存在ではなく何かの一部——簡単に言うならば“何者かの宝具”らしい。

え、何それやば……チートやん……いや、宝具は基本全部チート級だったね……

周りがじゃあ本体を叩けばいいんだな！ とざわつき始めたがその本体はどこだよ、と話は振出しに——なつたと思つたらそうはならなかつた。

前髪で目を隠し、金色の機械的な角を生やした少女が本体の居場所を辿ることが出来るというではないか。

最初からそうしろ、と遠い目になったがきつと今まではできない理由があつたのだろう。

……ところでその子誰？ ん？ フランケンシユタイン？ え？

あの少女が？ あ、もしかして戦闘時は大男になるみたいなの？

……違いますか、そうですか……

世の中には不思議に満ち満ちてるんだな、そう再確認して俺は考えることを諦めた。

それじゃあ行ってくる、と立香ちゃんたちは霧の中へと踏み出していった。

本体ってやつを叩きにいったわけだ。

最初はもちろんついていく気満々だったのだが先ほどギリギリま

で外にいたことで身体が弱っていたのもあり待機を言い渡された訳である。

何とか反論しようとしたがライダーさんは既にソファに座り俺の目を見ながらポンポンと自分の膝を叩いているしカーミラは行く気ゼロ、と言った感じで化粧を直し始めやがったので断念せざるを得なかった。

まあ、それだけではなく拠点を守る者が残らないと危ない、という理由もあったのだが。

だってジキル博士は俺以上に疲労しているしアンデルセンたちはそもそも戦闘に適していない。

サーヴァントでありながら俺より弱いとか希少種ってレベルじゃないよな……

珍しいものを見る目でアンデルセンを見ていたら不意に毒と共に質問が飛んできた。

——お前はなんだ？

あまりにも真つすぐな眼で問われたそれに、俺は息が詰まった。

それは間違いなく人では無い”何か”を見る眼で、俺の思考を一瞬停止させた。

普通の素人魔術師だ、と苦笑いをしながら答えるもしばらく彼は俺を見据え、軽く鼻で笑った。

その割には随分とアンバランスなやつだ、そう言い残して彼は読書へと戻った。

どのサーヴァントにも似たようなことを言われるなあ、どこをどう見たら俺を変だと思うのだろうか。

どう見ても一般人、とは言わないが少なくとも全然真つ当な考えを持っててるくそ雑魚魔術師、くらいだと思っただけど……

真つ黒に塗りつぶされた中二の時代なら喜んで受け取れたかもしれない言葉を今は完全に持て余していた。

俺はただ死にたくないだけ……なはずなんだけどなあ。

例えば今回の霧だってそうだ。

この旅は、あらゆる場所に死が潜んでいる。

むしろさくつと死なない立香くん／ちゃんがおかしいのだと言わ  
せてもらおう。

まあそれも主人公補正つてやつなのかな、と皮肉気に笑って目を閉  
じる。

外への警戒はカーミラに任せているし少しくらいは許されるだろ  
う、と俺は意識を手放した。

ゆさゆさと身体を揺すられる感触に目を覚ます。

今回俺寝すぎなのでは……？

ゆっくりと身を起こして窓の先を見れば不思議にも霧は徐々に晴  
れつつあった。

さ、さすが立香ちゃん……もう解決したのね……

それじゃあ今回の特異点ももう終わりだろうか、ずっと寝てた気し  
かしくなくて若干の罪悪感を滲ませつつドクターへと回線を繋ごうと  
した瞬間目の前にホログラムのドクターが現れた。

彼は酷く焦っている様子で今すぐ外に出てほしいとかなんとか。

何々どうしたの、少しは落ち着けよ、と上着を羽織りながら経緯を  
聞いていく。

ざくつと言えば地下にいた魔神柱を倒したら何かやばげなサー  
ヴァントが出てきちゃってそれがロンドンの霧の密集してるところ  
に着いちやったらイギリスがやばい、みたいな。

しかもついさっき外に出てきちゃったらしい。

立香ちゃんたちで止められなかったやつを止められるだろうか。

別に俺が劣っている優れている、とかいう話ではなく単純に戦力の  
差を考えてそう思う。

こちらに居るのはライダーさんにカーミラ、後はまともにサーヴァ  
ントとやり合うには不安が残るやつらばかりだ。

正直無理何てレベルじゃないんだけど……まあやるだけやるか。

礼装の出し惜しみもしなければある程度はもつ……もてばいい  
なあ。

弱気になりながら空へと走る雷を見た。

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。

そんな空へ悠々と向かって歩く姿を視界に入れると同時に魔術礼装“カルデア戦闘服”に施された魔術——ガンドを撃ち放つ。

赤黒い光を放ちながら飛んだそれは背中へとぶち当たってから虚しく飛散して、そいつはゆるりとこちらに振り向いた。

効いてない——？

何でか知らんが無効化されたか、舌打ちしながら距離をとるとその男が笑う。

瞬間、視界が焼けた。

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。

今までにない死に方……あまりにも一瞬で本気で何が起こったかわからなかったんだけど……

まあ大体当たりはつけてるが、最終確認だ。

弓矢を取り出しざまに撃ち放つ。

連続で穿たれた木製のそれはやつに近づいた瞬間微かな火花とともに脆く崩れ去った。

やはり雷、常に身に纏っているのか。

それは少々……いやかなり厄介だ。

こちらにはそれをぶっ飛ばすほどの威力を出す手段を持つものがない。

強いて言うならライダーさんの宝具……だが当たってくれるだろうか。

どう考えてもやつの攻撃手段は雷、そして雷は速い。

例えばほら、こんな風に。

音より早く届いた光は俺の全身を焼き焦がした。

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。

種が分かつても攻略のしようがないんですけどこれ……

リミテッドゼロオーバーを使ったとしても何度も耐えられないのは確定的だし三重結界でもすぐに壊されそうな勢いだ。

悟られる前に速攻で叩き潰すのが最善、か。

令呪を持って命ずる——

ライダーさんの魔力が爆発的に上昇し、彼女の宝具が顕現する。  
流星と化した彼女は光に迫る速さで衝突した。

同時に重ねて令呪をきる。

カーミラが薄く笑って巨大なアイアンメイデンを作り上げた。

爆発音と共に鋼鉄の処女はその腹を開け、ギリギリ退避したライダーさんを逃し、雷を纏っていた男のみを飲み込んだ。

瞬間、雷音、爆発。

砕けたアイアンメイデンの隙間から高笑いが響き、青白く燃える雷が天馬を焼き尽くした。

躊躇うことなくガンドを撃ち放つ。

その光は今度は消されることなくその男の動きを止めた。

雷が俺の足元で燻っている。

ほんの数瞬躊躇っていたら死んでたな、冷や汗を垂らしながら礼装を起動する。

長い銃身を戸惑うことなく構え、スコープに姿が映った瞬間撃ち放つ。

爆音と衝撃と共に鮮やかに色付けされながら飛来した銃弾は当たることなく雷に掻き消されたが注意をそらすことが出来た。

それだけで充分だ。

カーミラの宝具から逃れたとはいえまだ近くにいたライダーさんのつま先が顔にめり込み吹き飛ばす。

瓦礫を散らしながら吹き飛んだ男の全身をライダーさんが鎖で雁字搦めにしてこちらに引き戻す。

ぐんつと勢いよくこちらに戻ると同時に雷鳴と共にライダーさんに雷が走った。

痙攣しながらもこちらに投げ飛ばそうとしてガクリと彼女の身体が崩れ落ちる。

刀を手に持ち、強化を足に回して飛びついた。

ほとんど解けた鎖の間を縫うように刀を振るう。

確かな肉感を感じ、ぬるりとした液体が身体を汚す。

落ちた身体を更にカーミラが引き裂こうとして稲妻が駆け巡った。



「カメラが光に包まれ血を伝って俺を焼き焦がす。足と礼装にのみ強化を回していたせいもあって身体が崩れていった。」

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。かなり上手くいったと思っただが詰めがアマかった……いや、どうしようとも無理じゃね？

そもそも一撃当たったら即死亡するのが良くない、全身に強化を回して常にリミテッドゼロオーバー発動するとか……？

無茶したらただけ反動が返ってきて死にますね……

これが比喩的な意味での死なら全然笑顔で使うのだが物理的に死んでしまうので却下。

全令呪積み込んでライダーさんで消し飛ばす、か？

物は試し、と令呪三画を使いライダーさんを限界まで強化する。

ぶっ飛ばせ——

神々しくすらある光を纏ったライダーさんは雷を薙ぎ払いながら衝突した。

地を剥がし、全てを粉碎しつくしたそれは一筋の稲妻に切り裂かれた。

身体を半分無くしたその男は紫とも青とも、赤ともいえる巨大な雷をもって全てを焼き、消し飛ばした——

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。

絶望しかねえ……

あれだけの宝具を受けて尚生きてられたらもう完全にお手上げだ。どうしたものか、何度も回すが思考は空回る。

焦りかられそうになるのを必死に抑えて震える手で礼装を引っ掴んだ。

気づかれる前に、確実に、完璧に仕留める——!!

令呪を使った流星が流れると同時にスコープをのぞき込む。

大体この辺だと当たりをつけて引き金を引いた。

砂煙を巻いて届いたそれはしかし消し炭にされて崩れ落ちる。

瞬間腹の開いた鋼鉄の処女が男の後ろから身体を現し、しかし高速で回る紫電の輪に刻まれ砕かれた。

雷光が、全てを嘗め尽くす。

赤く染まりつつある空に、青白い雷が昇っている。

何度も深く呼吸を繰り返す。

心臓は激しく脈を打ち、思考がまとまらない。

早くしろ、と己を急かして必死に考えるが打開策が何も浮かばないままやつの姿は現れた。

くそ、くそつたれが。

どうしろっていうんだ。

今までの焼き増しのように令呪を使うと、今までと違い、ライダーさんは地を蹴り天高くから落下するように宝具を炸裂させた。

閃光と土煙が巻き起こり、二人の姿を覆い隠す。

今までと違う展開――

呆気にとられる前に頭を動かせ、と己を叱咤する。

姿の見えない今できることはなんだ。

ぱっと思いついたそれを吟味することなく展開する。

鋭い音と共に矢が放つ。

必中ってマジ便利……見えなくても当たるから本当最高ですわ……

俺の滅茶苦茶な打ち方にも関わらず真つすぐ煙の中にたたずんでいるだろう男に矢は飛び、届いたかと思った瞬間激しい雷が地も煙も何もかもを吹き飛ばした。

天馬の断末魔が響き渡る。ライダーさんとのパスはまだ切れてない。

ライダーさんの安否を確認。やられたのは天馬だけでライダーさん自身はそこまででも無いそうなので魔術でライダーさんの応急手当のみ行う、同時にカーミラの手から緑色の光弾が高速で放たれた。

雷を纏ってこちらに歩み寄ってくるそいつは光弾をものともせず無効化しゆつくりと腕をこちらに向けた。

来る――

バチリ、と雷が嘶き身を焦がす——はずがそれは目の前の鉄塊に阻まれた。

カーミラのアイアンメイデンが俺の目の前に落ちていた。

流石カーミラ……惚れる……

最高かよ、と急いでその場を離れようとして腕を掴まれカーミラの後ろに強引に引き寄せられた。

一体何を……手を離して動揺を見せた瞬間雷音が響いた。

俺の眼前でカーミラが焼かれていく。

激情にかられかけたのを気合で押し込み令呪をきった。

令呪一角に込められた莫大な魔力がライダーさんの全てを強化する。

高笑いをしていたその男は轟音とともに真横に蹴り飛ばされ、建物にその体を激しく擦りつけた。

宝具を使われる前に仕留めなければ——

カーミラを抱きかかえてライダーさんへと叫ぶ。

一瞬の躊躇もなくライダーさんは鎖を鳴らしながら短剣を投げ放った。

しかしその切っ先の届く寸前でそれは炭化した。

ライダーさんが焦りを眼に宿して俺たちの前に素早く立ちはだかる。

神の雷だとその男は叫び、俺たちの視界を覆いつくし——そして背後から現れた雄たけびと黄金の雷に祓われた。

金の髪を靡かせたグラサン男と狐耳を生やした着物の女が並び立つ。

グラサン男は斧のような武器を肩に担いでゴールドデンに参上だぜ！ とか何とか叫び、狐耳の女は呆れたようにやれやれとため息をついていた。

どう見てもサーヴァント、助けてくれたことから敵では無さそうだが如何せん怪しすぎた。

令呪をきってカーミラを回復させながら、取り合えず名乗れよ、と立ち上がろうとして身体が傾いた。

晴れつつあるものの残留していた霧、それが周りより濃いところで戦闘をしすぎたせいで早くも限界を迎えていた。

あまりにタイミングが悪いな……

内心で罵倒を吐き散らかしながら倒れこみ、それをめちやめちや筋肉質な腕で支えられた。

ぐつと勢いよく持ち上げられて今度は細く冷たい何か俺の頭に触れた。

途端に身体から不快感が取り除かれていく。

もやのかかっていた視界が開けていき、蓋をされたような聴覚が音を取り戻していく。

頭に触れていたのは狐耳の女の手のひらだった。

こういうのは柄じゃないんですけどねえ、と彼女は俺の頭から手を離して言った。

正体はわからんが取り合えずこいつらは味方だと信じて動くか、どうせ裏切られたら死ぬだけだし。

それに何より俺は恩は売られたらどうしても感謝してしまうし信じちやう人間なのだ。

ありがとう、と感謝を述べれば気にしないでくださいまし、とツンとする狐耳の女と対照的にグラサン男は構わない、と豪快に笑ってからそれじゃあ第二ラウンドの始まりだぜ！ と金の稲妻を煌めかせた。

雷同士がぶつかり合って、激しく戦場を散らしていく。

ドクター曰く散々俺を殺した奴はニコラ・テスラだという。それに対しグラサン男は坂田金時と名乗りを上げてその戦いは更に苛烈さを増していった。

どちらも勉強するまでもなくメジャーな人物じゃねえか……

通りでそんなバチバチと雷出せまくつちやう訳だ。

といっても勝負は互角、というには些か坂田金時が有利に立ちすぎている。

それもそのはずだ、ライダーさんの渾身の蹴りが防御をぶち抜いて決まってるんだ。

効いてないはずがない、骨を折るどころか粉碎しているだろう。

実際ニコラ・テスラは浮かべていた不敵な笑みを焦りを感じさせる  
険しい目つきへと変貌させている。

ざまあみろってんだ。

礼装を展開させて強く弓矢を引き絞る。

こちらに来てから常に侵食するように体に張り付いていた霧は今  
この時だけ完璧に無くなっていた。

狐耳の女——玉藻の前と名乗った彼女の呪術だから霧を避けてい  
るとか何とか。

妖怪じゃん……と呟いたら笑顔で青筋を浮かべて胸倉掴まれ良妻  
狐、と訂正するよう迫られた。

それはちよつと厳しい、と断ると何ですかー！ とキャンキャン  
鳴かれたので妥協して神様だと訂正した。

いや神様だとしてもおかしい気はするけど……とは思ったが良く  
考えてみればステンノもエウリュアレもいたのだから他の神がいる  
のも特段不思議なことではない。

神様がいることそれ自体がおかしいとかそういう無粋なことはス  
ルーである。

散々俺を殺したテスラとの戦いは既に佳境を迎えていた。

弱弱しく散る雷ごとライダーさんの鎖が身体を縛り上げ、それでも  
ピクリと動いた手先を矢で穿つ。

予想外だと目を見開いたテスラに、黄金色の雷を巻き散らした斧を  
振り下ろされた。

激しい爆裂音が響き、電気が散り切った頃にはテスラはもうほとん  
ど消えかけていて、最後によくぞ倒した勇者たちよ！ とか何とか笑  
いながら完全に宙へと溶けていった。

これでやつと終わりか、早く帰りたい、と座り込んだら人間だつて  
のにやるじゃねえか！ と金時にばしばし背中を叩かれる。

シンプルに痛いからやめてくれないだろうか、目で訴えようとした  
らドクターが悲鳴染みた声をあげた。

あ、これ終わってないやつですね。

聞きたくねえ、と耳を塞ごうとしてドクターに聞いてくれようと叫ばれた。

バッキンガム宮殿、その丁度真上に霧が渦巻くように集まっていた。

街から霧が完全に晴れたのは助かったけど明らかにあれから何か出てくるよな。

確信しながらその元へ駆けていく。

といっても俺は己の足で走っているわけではなく礼装であるバイクに乗っているのだが。

いやだって俺のダツシユのスピードに合わせてたら手遅れになるかもしれないじゃん……

ドクターからの連絡で立香くんたちは既に宮殿の近くまで行っているらしいし早めに合流したい。

もう視界に小さく映る立香くんたちを見据え、不安を抱えながら俺はぎゅつと礼装を握った。

突然、霧の中から半端ではない魔力と同時に嵐のような一撃が地面へと突き刺さった。

強烈な暴風に煽られるも強引にスピードを上げてぶち抜く。

立香くんたちの元へと跳ね上げられた瓦礫を踏み碎き、摩擦音をがなり立てながら目の前へと止まる。

続けて玉藻の前の妖術……呪術が俺たちを守るように瓦礫を粉碎した。

今度はどんな奴が出てくるんだろうな、と一周回ってテンションを高くしながら空を見上げる。

そこには邪悪ともいえる魔力を滲み出した槍を持つ女性が馬に跨っていた。

立香くんたちと一緒に行動していたモードレッドが一言“父上……”と呟きアルトリアが呆然と口を開けていた。

この二人の様子から空にいるあの女性は間違いなく“アーサー王

“なのだろう。”

しかしそこで口を開けているアルトリアとは違う存在——言うなれば彼女はアルトリアのIFの存在なのだ。

あつたかもしれないアルトリアの未来の姿、その存在が召喚されたのだろう。

そんなことあり得るのかって言われたら自信を持ってある、と答えられる。

ダヴィンチちゃんのくきつと役に立つ☆英霊講座くでそんなことも起こりうるって言ってたしな。

俺は案外勉強熱心なのだ。

まあ、命がかかっている時限定だけれども。

冷や汗を流しながら呆けるなよ、と己の臆病さを掻き消すように叫ぶ。

呆気に取られていたアルトリアとモードレッドははつとしたように剣を構え、そんな俺たちをじろり眺めてから彼女は一言も発することなく槍を振るつた。

鋭く振るわれた槍を金時が力づくで跳ね返す。

若干のパワー負けをした彼は二、三步よろめき、その金時を踏み抜こうとした黒の騎馬をカーミラの光弾とライダーさんの鎖が押しとどめる。

その隙に離脱した金時を追おうとした彼女に今度はモードレッドが立ちほだかろうとして激しい風圧に身体を浮かされた。

態勢が不安定になった彼女の胸を貫かんとばかりに振るわれた槍を何とかガードしたものの派手に建物へと突っ込まされた。

追いうちだけはさせない。

それだけを考えて玉藻の前の援護の元矢を放つ。

いくつも撃たれたそれは一つ一つの鏃が火を帯びていたり冷気を漂わせていた。

しかしそれを見向きもされず、ただ圧倒的な暴風で蹴散らされる。

上手く連携を重ねないと攻撃が届かないな……

軽く舌打ちをした瞬間玉藻の前に身体を引っ張られ、同時に迫って

きていた槍で肩が抉れる。

痛みに叫ぶことを耐えながら応急手当を自分にかける。

羽虫を払うように振るわれた二撃目をライダーさんが強引に逸らし、アルトリアの一撃が彼女の肌を掠めた。

つう、と血が滴り爆音と共に全員が暴風に吹き飛ばされた。

強かに身体を打ち付け何度も咳き込みながら立ち上がる。

あれは反則だろ、と睨んだ瞬間槍が俺の胸を貫いた。

鋭く振るわれた槍を金時が力づくで跳ね返す。

まさか俺を狙ってくるのか予想外……

玉藻の前の支援を受けながら矢を放ち、すぐに木刀に持ち替え身体をずらす。

俺より早く反応した木刀が砕けながらも槍の軌道を変え、玉藻の前の呪術による火やら氷やらが降り注ぐ。

先ほどと同じように暴風が吹きすすさんだ。

瞬間、周りを確認してから立香くんのいる方へ、正確にはマシユのいる方へと風に乗るように跳んだ。

変わることもなくまたも俺を追撃してきた彼女の攻撃をマシユが受け止める。

守りを主体としているだけあって上手く受けているものの直ぐに弾き上げられた。

まずい——礼装を展開しきる前に放たれた槍は割り込んできたモードレッドに逸らされた。

耳を塞ぎたくなるような金属の摩擦音が響き、よろけたモードレッドを左手で掴み投げ、マシユの盾を持ち直した槍で地にめり込ませた。

展開しきつたりミテッドゼロオーバーにより強化した身体で次のアクションを起こされる前に眼前に現れて礼装の刀を振るう。

それは上手く躲されたが隙を作ることは成功した。

駆けてきたライダーさんの蹴りが馬を蹴り上げぐらついたところでまたも強烈な暴風が遅れて来ていた金時と玉藻の前も含めて吹き飛ばす。



咄嗟にのばされたライダーさんの鎖を掴み、ライダーさんの元へ跳んでいく。

すぐに礼装を解除し痛む身体を誤魔化しながら刀を構えた。

次はどう動く、荒れた呼吸のままねめつけたら今度は彼女は槍を天にかざし叫び声を上げた。

すると空から何と言うべきか、幽霊、いや悪霊、はたまた靈魂とでも言うべきなような禍々しい存在が辺りから溢れるように出現し始めた。

ええ、何それ……

物理攻撃全然通らなそうじゃん……どうすんだよ……と舌打ちしたら玉藻の前の呪術が靈魂を狙い撃ちにした。

火や氷が幽霊どもを消し飛ばしていく。

それでも溢れてくるそれを任せてください、と彼女は言い、それを手伝うようカーミラに頼み俺たちは再度彼女へと向き合った。

暴風を伴った槍を聖剣が弾き返す。

どうしても出来てしまう隙をフオローし合うようにもうモードレッドの剣が差し込まれる。

チャンスが出来ても風で全員飛ばされるってのが問題だな……

あの竜巻みたいな風をどうにかしなければ、そこまで考えて閃いた。

上からならいけるんじゃない？ と。

ただ上から飛び込むのが俺ではだめだ、彼女を怯ませる一撃を持った人じゃないと。

そう考えると俺とライダーさん以外……一番はやっぱり金時かな……

リミテッドゼロオーバーと両手足強化すれば金時くらいならぶん投げられる。

全員にそれを伝え、モードレッド達に少しばかり頑張ってもらおう。防戦一方の現在を打ち砕いてもらわねば。

ということとモードレッドとアルトリアのあまりよろしくないコンビネーションの間にライダーさんに割り込んでもらう。

振るわれた槍を受け流し石化の魔眼で一瞬、いや、それにすら満たない程の時を止めた隙にモードレッドの剣——宝剣クラレントとアルトリアの剣——聖剣エクスカリバーが同時に閃いた。

交差して振るわれたそれを彼女はやや遅れてガードし派手に後退した彼女は予想通りの位置で動きを止めた。

何故なら彼女の足元には俺が即席で刻んだルーン魔術がある。

これがただの魔術ならそれこそ、ライダーさんの魔眼以上に効き目をなさないだろうがこれは概念礼装を用いたものだ。

一瞬程度なら止められる。

流星と化したライダーさんが地を削って彼女へと飛び、そして今まで以上の暴風が全てを薙ぎ払った。

同時に両手で金時を投げ飛ばす。

ライダーさんの手から手綱が放れ、急降下した天馬はしかしまたも力強く羽ばたいた。

天馬を踏み台のように更に金時は跳ね上がる。

黄金の雷鳴が闇を裂く。

雄叫びを上げながら放たれた彼の究極の一撃は真上から彼女へと叩き込まれた。

雷と煙が燻るそこを見据える。

流星にあれを受けては一溜りもないだろう。

それでもこの目で見えるまでは死を認める訳にはいかず目を凝らした瞬間、今までの暴風とは違い、明らかに攻撃として放たれた風の塊が俺の身体を打ち消した。

雷と煙が燻るそこを見据える。

全然生きてるじゃねえか……!!

すぐさま地を這うように身体を伏せ、頭上すれすれを殺意を持った風が通り抜けていく。

煙の晴れたそこでは馬が倒れ伏し、彼女自身も血を垂れ流しながら金時と武器を弾き合っていた。

今仕留めてやる——

弓矢を引き絞り、撃ち放つ。

金時を弾き飛ばした彼女はこちらに睨みつけ、片腕でそれを受け止め槍を振るった。

瞬間身体が消し飛んだ。

雷と煙が燻るそこを見据える。

こつちに注意を向けさせてはいけない……いや、近距離で叩くか？やるなら今しかない、そう感じてリミテッドゼロオーバーを起動、風を避けるように飛び跳ね高速で迫る。

勢いよく突き出した刀は鎧に抵抗されながらも胸元を無理矢理貫いた。

ごぼり、と血を吐き彼女は俺の頭に触れ、そして力なく滑り落ちた。テスラのように、よくぞ倒してくれたといわんばかりの笑顔で彼女は空へと溶けた。

翌日、俺たちは疲れの抜けきらない身体を引きずるように地下へと潜っていた。

というのも立香くんたちはあまりの急展開に聖杯を回収し忘れたのだ。

うっそだろお前、とも思ったがああ状況なら仕方ないといえれば仕方ないのかもしれない。

それにこの一晩で妙に仲良くなってしまった金時と玉藻の前と話す時間が増えたのはラッキーと言えばラッキーだった。

まあそれももう終わりなのだが。

既に俺たちは最深部まで到達していて、ちょうど聖杯を回収したところなのだ。

あいも変わらず美しくも禍々しいなあなんて思いながらさっさと帰ろうぜ、と皆に促す。

ここの雰囲気はあまり好ましくない、何というか、個人的主観なのだが嫌な予感をさっきから感じるのだ。

ほら早く早く、そう皆を急かしていた時、聞きなれない声がこの広い地下空間に響き渡った。

同じに先ほどまで鮮明だったドクターとの通信が途切れ途切れに

なる。

本当に嫌な予感ってのはいつでも当たりやがるな。

くそつたれが、と地下空間の一番奥底、そこから現れた白髪に茶の肌をした男を睨みつけた。

その男は“ソロモン”と名乗った。

ソロモン——旧約聖書に登場する魔術の祖、と謳われた古代イスラエルの王。

72の魔神を従え人類に魔術を齎した魔術王。

その男はうろたえる俺たちを興味なさげに見つめ、カルデアを脆く、容易く崩れる哀れな船だと言い、人理を滅ぼすと宣言した。

そうさせるとでも？ という立香くんの挑発のような言葉を鼻で笑い、自らの宝具を対人理宝具だと言った。

そこまで聞いて、俺はアンデルセンの話を思い出していた。

『英霊召喚』とは抑止力の召喚であり、一つの巨大な敵——文明を滅ぼさんとする終わりそのものへと立ち向かう人類最強の七人を呼ぶものの。

本来の『英霊召喚』により呼び出されるのは七つの属性の頂点に達した天の御使い。

ここまで話してソロモンはその全てを肯定した上でこう言った。

“我こそは王の中の王、キャスターの頂きに立つ者”

“グランドキャスター 魔術王ソロモン”である、と。

そこまで言い、しかし彼は何もすることなく帰る、と背中を向けた。

はあ？ 散々言っておいてそれかよ、冗談よせよな、お前が全ての

元凶なんだろう？

聖杯四つも取られて慌てて出てきちゃったんだろ？

折角だ、おら、ここで死んで行けよ。

リミテッドゼロオーバーを展開して刀を持つ。

力強く地を踏み、跳ぼうとして見えない力で地に伏せさせられた。

威勢だけは良いな、と値踏みするようにじっくりと俺を見てから酷

く嘲笑った。

続いて聖杯なぞ一つも六つも変わらない、と。

俺の身に降りかかっている魔術を玉藻の前が何とか解除し、倒れ伏した俺を金時が助け起こしてくれた。

それで尚ふらつく俺を立香君が支えてくれながらソロモンに何故こんなことをするのかと叫んだ。

こんなことをして楽しいのか、と。

ソロモンは醜悪に表情を歪め、楽しくないわけがない、笑った。

死を克服できず、死に恐怖を持つお前らが滑稽でならない、と。

そこまで言っただけ俺を薄目で見、お前は少しばかり特殊だが、と更に笑った。

そうして彼は未来には一切の希望がないのだからあきらめろ、と。

そして立香くんにここで全て放棄するのが一番楽だと言いつつ残して姿を消した。

ソロモンが現れてから俺たちを襲っていた重圧感が霞と消える。

同時に金時たちは姿を光へと変えつつあった。

あまりにぱつとしない終わり方だったな、色々疑問が出来上がったってしまった。

また考えなきやいけないことが増えちまったじゃねーかと頭を抱えていたら勢いよく持ち上げられた。

ちよ、何だやめろよ金時。

しかし彼はそんな俺の制止を無視して豪快に笑った後にいつでも力を貸すから呼んでくれよな！ とグラサンをキラツと光らせた。

期待している、と返せば楽しみにしている、とそう言いあんたもそうだろ、フォックス。と玉藻の前へ呼び掛ける。

彼女は眉間にしわを寄せ、在り方は気に食わないがその魂と意志は認めて差し上げます、と呼ばれたその時は力くらは貸しましょう。

そう言い一早く姿を消した。金時もじゃあ待っているからな、と姿を溶かす。

立香くんたちも粗方言葉を交わし終えたようだ。

アンデルセンが呼ばれたとしても俺は役に立たんからな、と必死に説明していたのが面白かったと言わせてもらおうか。

誰よりも先にあいつを呼び出してやろうか、何て考えながら俺たち

は元の時代へと姿を消した――。

――Order Complete――

## 狂ったアメリカ&ケルト@無限ループ

その日は珍しく雪が降っていなかった。

とはいっても別に晴れている訳でもなければ雨が降っている訳でもない。

具体的に言うならば、これから雪か雨でも降りそうな曇り空、と行ったところだ。

まあそれでも、雪山にあることから年から年中雪が降っているカルデアにしてみればそれは酷く珍しいことだった。

それは言うなればラツキー。今日は良いことでもありそうだ。

気持ち悪いくらいには機嫌を良くしながら鼻歌を奏でていたら仮面の取れたカーミラに「え、きもちわる……」……みたいな目をされて冷静になった俺は、それでも窓の外を珍し気に眺めながら足音を鳴らすことなく、しかし足早に管制室へと向かっていった。

ダヴィンチちゃんからの呼び出しである。グツモーニンしたての俺にただ一言「取り合えず来て欲しい」と言い残した彼女……彼女……彼女は有無も言わず回線を切りやがったのである。

まあいつも温厚かつ冷静なダヴィンチちゃんがあそこまで焦っていたのだ、ただごとではあるまいと短針が10を示す時計を横目に部屋をのっそりと這いだしたのだった。

まーた特異点でも見つかったのかなあ、何て考えながらおいつくと扉を開いたその先には思いの外思いつめた顔をしたドクターとマシユ、そして悩むように何かを考えるダヴィンチちゃんがいた。

うーん、嫌な予感。

聞きたくねえなあ、と気分を落としながら何かあった？ と聞けば目を伏せたままマシユが口を開いた。

”先輩が、目を覚まさないんです——”

え、まだ寝てんの？

良く寝る子だねえなんて言っていたら違う違う、とダヴィンチちゃんが詳しい説明を始めた。

彼女曰く、立香くんはほとんど平常の睡眠状態のまま、何故か何をしても目を覚まさない、とのことらしい。

原因は不明、正直な話こちらからは手の施しようが全く無いのとのだ。

え？ 控えめに言っただけやばくない？ やばいで済ませたくないくらいにはやばいよねそれ？

どうしようもないじゃん……こわっ……

だってそれってつまりソロモン側からカルデアへと間接的または直接的な攻撃があったことを意味するということだ。

ここの座標がばれている……？ いやそんなことはありえない、ありえないはずだ。

ということは何時仕掛けられた……？ ロンドンでの最後、あの時そんな素振り、やつは見せたか？

それともこちらに気づかれることなく立香くんに時限式の何かを仕掛けた……？

ううん、と数秒唸って“あり得ないことは無い”という結論にいたる。

何せ俺を見ただけで地面に強引に伏せさせたのだ。

あの時に何かしらの魔術を立香くんが掛けられたとしてもおかしなことではない……か？

一応これからも何かしらできることは無いか探ってはみるが期待はしないでくれ、と締めたダヴィンチちゃんにマッシュが様子を見てください、と管制室を出ていく。

これはしんどいなあ、と俺も続こうとしてグイツと手首をドクターに掴まれた。

何だなんだまだ何かあるのか、という俺にドクターが申し訳なさそうに言葉を吐き出した。

——次の特異点が見つかったんだ——

ジーザス……



緊張した面持ちで扉を開く。

何度やってもどうしても身体が強張るな、そう思いながら俺はゆつくりと幾何学模様の円……所謂召喚サークルの前へと歩き立ち止まる。

特異点に行く前はいつも召喚しているが、今回の緊張具合は今までのそれではなかった。

何故なら今回の特異点は、立香くんは置いていく、つまり俺だけが行くからである。

いや本来なら立香くんの目覚めを待った方が良いんだけどそうも言ってはられない。

時間は有限なのだ、今回見つけた特異点がもしかしたらもうすぐ完全に焼却されてしまうかもしれない。

それだけは避けなくてはならない。

それにマスターは俺だけと言えどサーヴァントもいる。

だがそれでも不安が残るから今回はどうしてもあと一人は来てほしいところなのだ。

頼むぞ、頼むぞくと念を込めながら石を投げていく。

積みあがる礼装、礼装&礼装、そして礼装。

これでもかと言わんばかりに俺の運の無さを具現化させていく慈悲も容赦もない召喚サークルに段々目が死んでいく。

ついでに俺の後ろに佇む二人もあっちゃあ……といったような表情だ。

何か……シンプルに悲しくなってきたんだけど……

もう良い……こうなったら優秀な礼装来い、叶うならば逃走用にめっちゃ役に立つ系の何か……

最初とは打って変わりポイポイツとゴミでも投げてんのかと思わせるようにテキトーに投げ込んだ瞬間、爆発的な光が俺を呑み込んだ

——サークルの中心に人影が出来上がる。

カチャリ、と朱の鞆を片手に女子高生のような制服をきた彼女はに

やりと笑い言葉を紡ぐ。

「サーヴァント、セイバー！ 召喚されて超参上☆みたいなー？」

あ、チェンジでお願いしまーす。

「なんで——!?」

鈴鹿御前——新しく召喚された彼女は己をそう名乗った。

え……いやいやまさか……そんな馬鹿な……

どうか嘘だと言ってくれよ……そんなバリバリア充してるJKになり切ってるのがあの天女とすら謳われる鈴鹿御前とか……

現実つてとことん人の夢を砕くようにできてるよな……

どうすんだよこれ……

そもそも召喚時のセリフに反射的に帰ってくれ宣言してしまう程拒否反応が出る相手と一緒に戦っていくとか無理過ぎるでしょ

現在進行形でうざいノリで構ってくる鈴鹿御前を死んだ目で受け流しながら保管庫へと向かう。

何でかつて？ お前の弱り切った霊基を元に戻すためだよ……！

だからいい加減そのキラキラしたオーラを俺にぶつけまくってくるのはやめない？

あまりのうざさに浄化されちやいそうなんだけど……

絶望的に相性が合わないであろうサーヴァントを何故このタイミングで引いてしまったのか……まるで意味が分からない……

そんなモヤモヤを抱えながらレイシフトに入る準備をする。

そろそろ行かなくては、と制服に袖を通しながら若干身体が強張っているのに気が付いた。

もう五度目だというのにおかしいな、と思う。

そう、もう五度目だ、俺は、俺たちは既に四つの特異点を修復してきているのだ。

俺は死ねない、死なない。今回も絶対に修復しきってみせる。

思えば思う程胸の内側がぐるりぐるりと靄が溜まっていくような感覚を覚える。

そうしてようやく俺は緊張している原因にたどり着いた。

もう俺は最後の二人のマスターから、最後のマスターになりつつあるのだ。

未来はもう、誰にも分からない方に進んでいる。

もしかしたらこの先彼／彼女は目覚めないかもしれないのだ。

そんな中で俺が失敗してしまったら？ 本当に死んでしまったら

？ 人理の修復が間に合わなかったら？

今まで目を背けていた反動なのか今になって急速に不安が心を覆っていく。

呼吸は自然と早くなり、嗚咽が止まらなくなっていく。

早鐘を打っていく心臓を抑えるようにぎゅつと左胸を握った。

加速していく呼吸を宥めるように大きく息を吸って吐く。

震える足には一発拳を入れて黙らせた。

大丈夫、大丈夫、大丈夫。

暗示をかけるように何度も呟いた。

問題ない、成功すればいいだけだ。サーヴァントも三人いる。

できないことはない、やれるはずだ、俺でもできるはずだ。

失敗する訳にはいかない、俺しかない、俺がやらなければいけない。

蹲ってしまっていた身体を起こし、ふらりとする足取りをしつかりと直す。

近くでライダーさんの声が聞こえた。

時間になっても来ない俺を探しに来たのだろう。

弱気になつているところなんて見せられない、今俺が折れてしまつてはどうしようもないんだ。

大丈夫、今行くよ。と声をかけてから礼装がちゃんとあるかを確認して、もう一度深呼吸してから俺はドアをスライドさせた。

なるべくリラックスするように意識して身体から力を抜いていく。

そんな俺を不審そうに見てくるライダーさんに誤魔化すように笑いかけた。

今回は前回ののように連れていくのは一人だけ、という訳ではない。なるべく節約はしたいが事態が事態だ。

何かがあっても死ぬ可能性を限界まで下げるために三人とも連れていく。

レイシフトが初めてでキョロキョロと忙しない鈴鹿御前に少しは落ち着け、と声をかけてレイシフト用の装置に入る。

いつも通りライダーさんとカーミラの手を握ったところで鈴鹿御前が一瞬呆けたような顔をしたがすぐさま納得したようににやりと笑った。

何か文句でもあるんですかねえ……と言おうとした瞬間背中に重みがかかる。

とうか普通に重たいんですけど……ぼそりと呟いたらめちやめちやに力をかけられた、解せぬ。

畜生離れやがれ……！　と言い合っている内に無機質な女性型のアナウンスが流れ始めた。

あ、ちよ、少しは待つてよ!?

せめてこいつを引き剥がして——そう言いかけたところで俺の意識は光に溶けた。

——そこは見渡す限り何も無い大地だった。

草木の一本すら生えず、ただ不毛の大地が広がっていて、そしてそんな中一人の男が俺たちの目の間に立っていた。

黒に近い灰のフードを被っていて真黒に染まった朱槍を持ち、サソリのような尾をふらりふらりと揺らしている男だった。

一目見ただけで分かる。

こいつはヤバい。

つう、と冷や汗が垂れると同時に何者だ、と聞き覚えのあるような声で問われる。

カルデアの者だ、人理の修復に来た、とそう答えながらじりり、と後退した。

何だ、じゃあ敵か。

そう聞こえた瞬間巨大な槍が腹を穿つ。  
際限なく血が溢れ出す。

ライダーさんが悲鳴を上げて、鈴鹿と並んで突っ込みカーミラが俺の体から槍を抜く。

血が、止まらない。

歪み切った視界の中で、特攻した二人から血が舞うのが見えた――

――そこは見渡す限り何も無い大地だった。

そうだね……あそこまで躊躇が無いとは思わなかったよね……

カルデアの者と名乗るのはやめようか……下手したらそれだけで殺しにかかれる。

誰かと問われ、人に名を尋ねるときはまず自分が名乗るべきでは？

と震える声でそう返すと同時に身を翻す。

朱槍が地に突き立ち砂塵が舞う。

俺を庇うようにライダーさんが前に出て鈴鹿御前が勢いよく踏み出た。

金属同士がぶつかり合う、甲高い音が響く。

一瞬の攻防の末に鈴鹿御前の体が仰け反った。

出来上がる隙、差し込むように突き出された槍の前にカーミラのアイアンメイデンが防ぐように現れ、しかしそれごとぶち抜かれた。

丁度胸のど真ん中、ああ、あれはもう助からないな。

頭の冷静な部分がそう言い俺は反射的に令呪を発動させていた。

頼む、ライダーさん。

既に身体を失いかけていた鈴鹿御前もまとめて流星が全てを砕く

！  
激しい衝撃が身体を揺らし、煙がゆらりとたなびいた。

これなら流石に無傷ではいられない、ここで一気に片付ける。

礼装を抜こうとして、しかし突然煙の向こうから投げられたそれに俺は気を取られざるを得なかった。

首を貫かれた一人の女性……いや、ライダーさん。

はあ……？

一体何が、そう思うより先に身体が飛び退いた。

しかしそれでも間に合わず、飛来してきた槍は右足の先を消し飛ばす。

ぐらりと体制が崩れる俺をアイアンメイデンを壁のように出現させながらカーミラが引きずり寄せる。

だがそれすらお構いなしと言わんばかりに放たれたそれは俺を庇ったカーミラごと俺たちを穿ちぬいた。

——そこは見渡す限り何も無い大地だった。

え……ちよ、完全にこれラスボスだよね……？

マジで宝具受けてノーダメージとかふざけてるだろ……

再度問われる言葉に有無も言わさず力で返す。

開幕宝具だ、消し飛べくそが。

ダメ押しだ、と全員に令呪によるバツクアツプを発動する。

巨大な魔力で編まれたカーミラの宝具が男を閉じ込める。

同時にそれは無数の槍で碎き散らされ、そして鈴鹿御前がにやりと笑った。

文殊智剣大神通——彼女がそう唱えるや否や宙には無数の剣が全て、あの男へと向けて放たれた。

360度全方角から飛来するそれをしかしそいつは全てさばききる。

——だが、それでもまだ予想の範囲内だ。

こっちははまだとっておきがいる。

高く、高く高く、どこまでも天高く昇った流星は、綺羅星の如く垂直に落下してきた。

男は未だ鈴鹿御前の宝具を捌いている。

避けようも防ぎようも無い。

——死ね。

蒼色の流星は、過たず男へと激突した——

激烈な破壊音と暴風、全てが晴れたそこに、男はやはり立っていた。だが流石に無傷とはいかなかったか、被っていたフードは吹き飛び

左腕は酷く焼き焦げ身体は血にまみれていた。

やれる、今なら潰しきれぬ。

すぐさま礼装を抜いて、そこで俺は動きが止まってしまった。否、止めてしまった。

その男は、あまりにも見覚えがあったから。

事故同然で発動したレイシフト、一番初めの特異点。

反転したアーサー王がいたあの世界で俺たちを助けてくれた人。

——クー・フリーン。

いや、分かってはいた。そもそもサーヴァントと言うのは召喚される際余程強烈な記憶でもない限り次に持ち越されることはない。

それに見たところクラスも違うの、あのクー・フリーンは俺の知る彼ではない。

理解はしているがそれを処理しきるには少しの時間を要さざるを得なかった。

だがそれを見逃す彼ではない。

投げられた朱槍は真つすぐに俺の胸を穿ちぬいた。

——そこは見渡す限り何も大地だった。

うーん、まさかのクー・フリーン。

もうキヤスニキと呼ばせては貰え無さそうだな……ふへつと笑つてそう思う。

いや笑つてる場合じゃないわ、いや本当に。

正直な話全員の宝具を受けて尚全然戦えるだけの余裕があるとか本当に洒落になっていない。

逃げあるのみ、だな。

ではどうやって逃げるのか、それが問題である。

礼装全部使いきっても逃げ切れる気がしないんだよな……

しかしそれでもやるしかないのだ。

やらなければならぬ、他の誰でもなく俺がやらなければならないのだ。

ふらりとやってきた吐き気を抑え込んで前を向く。

もう三度聞いた問いに、静かに答える。

——死にさらせ。

答えると同時に発動した三重結界がまるで紙のように破られ紙一

重で鈴鹿御前が朱槍を受けとめた。

目と鼻の先で刀と槍が交差する。

一瞬だけできた隙、間に合うかどうかはほぼ運任せだった。

指先からガンドを放たれる。

赤いような黒いようなそれはクー・フリーンの首元を掠めて飛んでいく。

だがそれで充分だった。カルデアの礼装魔術は優秀すぎるくらいに優秀だ。

掠っただけでそれは効果を齎す。

酷く驚いたように目を見開くクー・フリーンを余所に令呪を発動させる。

——俺を連れて、逃げろ！

ライダーさんが俺を肩に担ぎ走り出し、鈴鹿御前とカーミラがそれにく。

今にも動き出しそうなクー・フリーンに向かって煙幕代わりにルーンストーンを勢いよくぶちまけた。

色とりどりの閃光、爆発。

多少の足止めにはなったのか、既に彼の姿は遠目で何とか見える程度だった。

しかしそれでも足は緩めず突っ走ってもらう。

瞬間、赤い閃光がカーミラの胸を撃ちぬいた——

違う、槍だ、クー・フリーンの、朱槍——

令呪を発動してカーミラの傷を癒す。

同時に鈴鹿にカーミラを背負うように伝えて礼装を発動していく。

おら、暴れてこい——！

礼装から勢いよく猪どもを解放していく。

爆音と共に猪どもは走り去っていき、数分後に礼装が碎け散る。だけど足止めにはなったはずだ、それに、もうだいぶ遠くまで来た。

何とか撒けたか……

——何だ、もう終わりか？

ほっと息を漏らしながら得た安堵はすぐさま崩れ去った。



もう、追い付かれた——!?

逃走のみに令呪を使ったんだぞ、ありえない、ありえない、ありえない。

真っ白になった思考を取り戻させるようにライダーさんがクーフリーンの槍を弾く。

力負けして後ずさるライダーさんは俺を鈴鹿御前の方に投げ捨て、逃げなさい、とそう言った。

つまり彼女は足止めをする、ということだ。

相手が並みのサーヴァントなら、安心して任せられたかもしれない。

何なら撃退までしてくれることすら望めた。

しかし今回は相手が違う。

あれは間違いなく聖杯持ちだ。

ライダーさんでも、逃げ切れるだけの時間を稼げるかどうか分からない。

判断しきれない俺を余所にカーミラが杖を突きながらほら、行きなさい、と背中を押す。

俺もそこまで鈍くはない、カーミラもまたライダーさんと時間を稼ぐと言っているのだ。

迷いは一瞬だった。令呪を発動させて二人を強化した後に鈴鹿御前に背負われる。

任せた、と一言だけ伝えて駆けだした。

激しい戦闘音は、みるみると遠ざかっていきやがて聞こえなくな

息を切らすところに到着したのは小さな街だった。

カルデアとの通信を何度も試みるがまあいつものように繋がらない。

いや、正確に言えばいつもよりはちゃんと繋がっているが声があまりに遠い。

さつさと回線を安定させないといけないな……

まあでもその前に身体を休めたいな、と何も考えずに入った瞬間一発の銃声が響いた。

足元から煙が上がる、わざと外された……

鈴鹿御前が俺を守るように前が出る。

ここは敵だらけかよ……軽く舌打ちしたところで声だけが響いた。

——君たちは、敵か味方か——

響いたのは若い男の声だった。

つーか敵か味方かって随分アバウトな聞き方だな……

だがどちらかと聞いたということは少なくとも味方になれる可能性がある、ということだ。

どう答えるべきか幾らか悩み、そして少なくとも敵ではない、そう伝える。

思案するような間が空き、上から何かが降ってきた。

金の短髪にガンマンのような恰好をした少年がギリリと銃を向ける。

君たちは東でも西でもない、ということでもいいのかい？

そう尋ねた少年にまず東とか西とかどういふことなん？ と、彼の

問いにまず問われている意味が分からない俺は悉くはてなマークを浮かべていく。

噛み合わない会話。

呆れ果てていく少年。

流石に敵ではないだろう、と奥から出てきた緑づくめの男の言葉によつて俺たちは彼らに事情の説明を受けることになった。

この時代は三つの勢力に分断されていた。

クローリンオルタ率いるケルト軍。

大統王なる存在率いる機械兵士軍。

そしてこいつら、レジスタンス。

といっても他二つに比べればレジスタンスは戦力不足もいいところらしい。

ということであろうちに来なよ、と金髪の少年が手を差し出した。  
まあ話を聞いた感じレジスタンスに入った方が良い気はする……  
っーかここで他のとこいくわなんて言ったら撃ち殺されるよね……  
？  
流石にこんなところで死ぬわけにもいかない。二つ返事で入るこ  
とを決めて手を握りよろしくしようとしたところで自己紹介タイム  
が始まった。

金髪の方はビリー・ザ・キッド。

緑の方はロビン・フッド。

彼らは簡潔にそう名乗った。

ほーん、キッドにロビン、ねえ……

いやちよつと待ったとんでもないビッグネームじゃねえか!?

あんまりにもさらっと言うから思わず流しちゃうところだった  
じゃん……

ついでにレジスタンスにはもう一人サーヴァントがいるらしい。

名前はジェロニモ。うーん、聞いたことあるような無いような……

まあ思い出すのは今でなくても良いか、そう結論付けて今後どうす  
るのかを話し合う。

俺としてはさくつと聖杯を回収したい。そんなでもって話を聞く限  
りやはり聖杯を持っているのはクーフリーンだ。

なら大統領とやらと手を結ぶことはできないのか？

難しいがやってみる価値はある。けれどもその前にもう一つ見せ  
たいものがある、と俺たちを一件の家の中へと案内した。

そこには、酷く衰弱した一人のサーヴァントがいた。

燃ゆるような赤い髪に鋭い瞳。体中にある酷い傷跡。

名を、ラーマと言った。

驚きに目を見開く。

ラーマと言えば大英雄といっても過言ではないだろう。

インドにおける二大叙事詩の内の一つ、ラーマヤナの主人公であ

る。

そもその話インドの神話はぶつとんでるのが多い、その中の主人公である、実力は破格と行っていいだろう。

どうか治すことはできないだろうか、と言われ状態を詳しく見ていくが傷はあまりに深く、生きることが不思議なくらいだと言わざるを得ない。

ドクターたちに持たされた治療用スクロールを使い多少の回復は見せるがあまり変わったようには見えない。

鈴鹿御前曰く、これはただの傷ではなく呪いのようなものだ、と言う。

呪いの主、つまりクーフリーンをぶつ殺すのが一番早い、とかなんとか。

そもそもラーマが生きているのはこの時代がぐらついているからだとか。

本来死んでなければいけないほどの傷を受けて尚生きているのはこれのお陰であると。

おお……いきなり頭の良さげなところ見せやがって……お前に抱いていた印象がらつと変わったぞ……

照れくささを隠すように見栄を張る鈴鹿御前をはいはいと流し、そして他に方法は？ と尋ねる。

何故なら正直な話今戦っても勝てる気がしない、というか殺される未来しか見えないからである。

しかし鈴鹿御前は頭を捻る。良い案は無さそうだ。

参ったなあ、手詰まりか、そう思ったところで聞きなれた電子音が鼓膜を刺激した。

やつと繋がった！ とドクターが喜色を浮かべる。

こんなに直ぐに繋がるなんて珍しい、と目を見開いていたらダヴィンチちゃんがどや顔をしていた、シンプルに腹が立つ。

だがまあそれも置いておいて現状を説明しようとしたところで事態は把握していると先手を打たれた。

通信はできなかつたもののモニタリングはギリギリできていたら

しい。

俺一人のサポートに全員が全力を尽くしたからだとか何とか。むしろそこまでされないとモニタリングすらできない俺って何なのだろうか……確実に呪われている……

とまあ、そんな俺はさておき、ドクターたち曰く、そこまでぐらついている世界ならばラーマにかかっている呪いの因果もまたぐらついているはずらしい。

何かで強化させることができれば呪いは解けるはずだと。

何かでって何で……という話なのだが生前のラーマを知っているやつがいれば何とかなりそうとか何とか。

お前の知り合いとか来てないの？ 敬うのが面倒になった俺はそんな風に雑に言えば彼の妻もまたここにきているという。

え……でもそれって大丈夫なの？

ラーマの妻と言えばシータ以外にはあり得ない。

だがこの二人は叙事詩通りなら互いに“喜びを分かち合えることはない”という呪いをかけられているのだ。

そしてその呪いによってラーマはシータを追放し二度と会えなくなった。

……サーヴァントと言うのは伝承や物語がそのままスキルや宝具、また彼らを縛る呪いにもなりうる。

もしこの呪いがサーヴァントである彼らをも縛るとしたらそれは果たして上手くいくのだろうか？

若干の不安が頭をよぎるがぐつと押し込める。

取り合えずラーマとシータを会わせることで意見が一致したが同時に問題も浮上してきた。

まずは町の警護、他のレジスタンスの連中でもどうにかなるがやはりサーヴァントがいないと苦しい。

次にシータのいる場所を把握できていない、これでは動くに動けない。

うーん、詰みじゃね？ 誰もがそう察した瞬間であった。

仕方ないから近くの町を制圧しつつ情報集め、かな……

まあ、そうなるよね……と言った具合で会議は終了した。  
誰かに呼ばれている。

何度も身体を揺すられていることに気づきようやく身体を持ち上げた。

疲れてるから……もう少し寝させろよ……と不快感丸出しな眼で俺を起こそうとしていた鈴鹿御前を見る。

だがそんな視線を意にも解さず早く、敵が来た、と短くそう言う

……

マジかよ……ごめん……

すまんかった、と謝り魔術礼装を手早く着込み外に駆けだした。

方角と距離をドクターから聞き遠見の魔術で見る。

……めちやくちや多いな……一つの街を制圧するには多すぎる。

だがこちらには三人の戦えるサーヴァントがいる。勝機は十分だ。それにロビンが俺なら罫だけで6割は削れる、とどや顔で言い放っていたからきつと大丈夫だろう。

接敵するまでもう少し、俺は静かに礼装の刀を握りしめた。

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

ここに来てからやつとこさまともな実戦である。

さつきはいきなりボス戦だったからね……

気を取り直していこう、と再度柄を握りしめて鋭く抜刀。

甲高く、耳に残る鋭い金属音が鳴り響き、俺の刀だけが吹き飛ばされた。

……は？

振り切ろうとした右手が痺れている。

真つ白に染まった思考と共に振りかぶられた槍が真つすぐ俺を貫いた。

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

ちよつと待って、強くない？

何？ 何なの？ こちとら魔術で身体を強化した上、武器に礼装を

使用しているんだぞ？

おかしいだろ……

取り合えず普通に打ち合ったら力負けするということは分かった。

俺は学習するんだ……！

鞘に入れたまま振りかぶられた槍を受け流す。

相手が上手いのか、はたまた俺が下手なのか歪な音を立ててスライドさせた槍を片足で踏みつけ地に押し付ける。

一瞬動きを止めた男のこめかみに柄を打ち付けてから抜刀。

同じ軌道を描いて首を切り捨て……れない!?

刃は半分ほどまでしか食い込まず、獣のように吠えた男の槍がずりりと俺の胸を突き貫いた。

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

何だこれ、何だこれ……

何だよあいつ……何で一発頭に貫つておいてすぐに次の攻撃に対応できるんだよ……

化け物じゃねえか……

片手に刀を、もう片手に木刀を握り走り出す。

振り下ろされた槍を刀で受け流して勢いよく木刀をぶち込む。

魔力で強化をしたそれは眼球ごと頭を貫いた。

迷うことなくそれを手放して勘だけでその場から飛び退こうとし

て右足を槍が深々と貫き地に食い込んだ。

焼けるような痛みを感じる間もなく数本の武器が身体を飛び出した。

た。

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

速攻だ、速攻で片を付けていく。

両手足にのみ強化を回して対峙する。

振りかぶられた槍をいなして脳天へと刀を突き立てた。

強化されたそれはほとんど感触を俺に伝えることなく貫き音も無くそのまま身を引き裂いた。

瞬間何かが熱を残して腹を抜けていく。

ドロブリ、と色濃い赤があふれ出た。

咄嗟に片手で抑え乱暴に刀を振り回し弾き飛ばされる。突き出された槍は、すぐに俺の視界を埋め尽くした。硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

これ倒す云々より先に鈴鹿御前と合流した方がいいやつだよ（真顔）

いや既にはぐれてた上に見失ってるんだけどさ……

仕方がないのだ、確かにロビンは敵の6割がたを排除したがそれでも尚混戦になるほどに敵は多かった。

それに加え敵は所謂“ケルト兵”。一人一人が俺と同じかそれ以上の実力だ。

一瞬一瞬が死を孕んでいる。

ルーンストーンを周りにばら撒き爆発させる。

即座に展開したヒュドラダガーで浅く肌を切りつける。

この礼装ならばこれだけで充分なのだ。

ヒュドラの毒はかつてヘラクレスすら蝕んだ猛毒。

サーヴァントにすら通用するこれはケルト兵の命を一瞬でかつさらう。

だけどこれ扱いが難しいんだよね……リーチ短いし……

大きく振られた槍を躲しながらダガーを戻して刀を展開しなおし頭を貫く。

噴き出す血がかかるのも気にせず引き抜きながら鈴鹿御前を見つけて出す。

思いのほか近い。彼女も彼女で俺の元に来ようとしていたが群がるケルト共に阻まれ上手くいっていないようだった。

まあそれでもあつさり確認できたのはラツキー、そう思ったことで一瞬気が緩んだのか、酷い衝撃と共に槍が俺の腹を貫いた。

槍を掴み引き寄せ頭を切り落とす。

次いで槍を引き抜こうとして頭にかつりと衝撃が走った。

視界が安定しない、鈴鹿御前の怒声が聞こえた気がした――

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

まあ五、六回のコンティニューなんて当然ですよ？



首を撥ねた死体を盾のようにして刃を受け止めその上から強化した刀で貫く。

苦し気にくぐもった声を耳に入れながらルーンストーンを口にねじ込み爆破。

四散した肉体と血飛沫を背に礼装を銃に入れ替えて放つ。

弾丸が額を撃ち抜くと同時に数本の槍が胸を貫いた。

硝煙が燻り怒号と金属音が跳ねまわる。

分かってたけどやっぱり正攻法じゃ無理だよね（真顔

ケケケチしても仕方ないな、と令呪を直ぐに切る。

蹴散らせ、鈴鹿御前——！

瞬間、彼女の魔力が爆発的に膨れ上がる。

——音に聞こえし大通連——

無数に別れた剣は空に群がり、雨の如く”敵のみ”を穿ちぬいた。

さつきも見たけどマジでえげつねえなこいつの宝具……

思わず真顔になりながら、それでも彼女を労おうと肩を叩いたその時レジスタンスの一人が大きく叫んだ。

敵の援軍——

馬鹿じゃん……

ショックで遠のく意識を引っ掴んで取り戻す。

俺の名前を呼ぶビリーとロビンの目を見て強く頷く。

瞬時に振り返りビリーが逃げるぞ！ と号令を出し礼装を取り出そうとした俺は鈴鹿御前に担がれた。

自分で走れるから降ろせ……！

そう途中まで言ったところで担いだ方が早い、と言葉を被せられた。

ぐぬ……確かに……

でもそれならもう少し優しく持ってくれない？ 肩が鳩尾に刺さるんですよ……

お前らサーヴァントと違ってこちとらただの人間なんだから……

やわなんだぜ……？

そう言えば文句が多いわね、と一蹴されて勢いよく風を切り始め

た。

くつ……こんな時ライダーさんならもつと優しく丁寧に持つてくれるというのに……！

あのカーミラですらもう少し丁寧に扱ってくれるというのに……！

文句を重ね続けた結果両腕で前に抱きかかえられた。

いやこれ所謂お姫様抱っこ……

無駄に恥ずかしいからやめない？ そう提案するも無言で却下。

俺は両手で顔を隠した。

おう、ドクター、笑い声もれてっからな、戻ったら覚えてるよ……

——そんな茶番をしていたからだろうか、先頭を走っていた俺たちはそれに気づくのが遅れた。

乾いた銃声は空に響き、腹が血で濡れる。

眼前にはいつかのロンドンを想起させるような機械化兵士の群れ。

一難去つてまた一難……つてところか。

いや難来すぎじゃね？

機械化兵士たちの間から出てきた英霊と思われる男を見ながら俺はゆっくりと血を吐いた。

——そんな茶番をしていたからだろうか、先頭を走っていた俺たちはそれに気づくのが——

いや今度は遅れないから。

熱が昇っている顔から手を離して素早く礼装を展開させた。

来るところが分かってりや弾くことくらいはできる。

展開させた礼装——アゾット剣をそつと腹を守るようにそつと置く。

同時に激しい銃声が響き、金属音と軽い衝撃が身体に走った。

上手く弾けたな……すぐに身を起こして地面に立つ。

ドクターが急に魔力反応が出てきた!? と動揺しているのを聞き流しながら俺たちを囲むように軍を展開させている機械化兵士たち、その奥を睨みつけた。

流石の俺もいい加減わかる。

このいやーな感じの悪寒はあれだ、サーヴァント。

はて、今度はどんな凶悪のが出てくるんだろうか、できれば大したことないやつだといいなあ……

いや英霊に大したことのないやつなんていない、か。

くそつたれが、英雄なんて大層なもんならささっと世界を救ってくれよな、何て思っていたら、現れたのは巨大な槍を持つ白い髪的美男子だった。

深く、美しい緑の眼をしたその男は突然の非礼を済まない、と一言詫びた後に自分たちに着いてきてほしいとのたまった。

いや、正確に言うのならば“カルデアから来た俺たち”に来てほしい、と。

俺たちのことを知っている……？

何だか嫌な予感がするな……

ひしひしと感じる悪寒を振り払いながら条件がある、と伝える。

何、そんなに難しいことではない。

——すぐその町の奪還に協力してくれ。

カルナ、と名乗ったその男はしばしの熟考の後にどちらにせよ通り道か、と呟き協力を引き受けた。

……おん？ カルナ……？

とんだビッグネームじゃん……ラーマと並ぶぞ……

アメリカだというのにどうしてこんなにインドの英霊が集まっているんだ……

もう少しビリーとかを見習ってほしい。

どうかこんなのを手下にしてる大統王何者だよ……

絶対やばいやつじゃん……

ああ、会いたくねえなあ、そんなことを思いながら急遽組まれたレジスタンス・機械化兵連合は占領されかけていた町へと突撃をかけた。

一瞬の出来事だった。

街を埋め尽くさんばかりに数を増やしたケルトの兵どもは一瞬にしてその姿を消し飛ばされた。

“施しの英雄カルナ”インド二大叙事詩の一つ『マハーバラタ』にて語られる大英雄。

不死身とすら謳われた彼はまさしく最強の名が相応しい英雄だった。

いや本当マジでやばいつてあいつ、蟻か何かかお前ら……と現実逃避したくなりそうになるほどいたケルト兵を眼に見える速さで消し飛ばしていくのだ。

何だよ目からビームとか……不覚にもときめいたじゃねえか……

まあとりあえず絶対に敵に回してはいけくないな、と心に刻んだ俺は押し掛かるプレッシャーに具合を悪くしてゆつくりとため息を吐いた。

今だけはレジスタンスに手を出さない、という条件を付けくわえた後に彼らと別れた俺と鈴鹿御前が案内されたのはホワイトハウス……ではなくアメリカにはあるまじき城塞だった。

え……何これ……大統領とか言うくらいだから当然住居はホワイトハウスしかないよな……ふふ、まさかあのホワイトハウスに踏み込めるとは……！ とか内心ワクワクしていた俺の気持ちを返してほしい。

物々しい機械兵たちの横を通り過ぎ武骨ながらもしつかりとした作りの城に入り込んだ俺たちは一等大きく豪勢な部屋、つまり玉座まで案内され少しの待機を言い渡された。

すぐ来るからちよつと待ってて、とか雑過ぎない？ 俺たちがここで暴れだしたら、とか考えないのだろうか、とも思ったがあのカルナがいる時点でそんな心配も杞憂だな、と一人納得する。

少々癪ではあるけれども……と苛立ちを抑えていたところで待たせたな！ と居室を震わせるほどの大声が響いた。

そこにはいたのはライオンだった。

もつと正確に言えばライオンの頭を持った人間……英霊だった。  
ええ……何なのこいつ……流石に予想外すぎるんですけど？

ライオン頭の英雄なんていたっけ……？

動揺する俺を余所にその男は自らを“トーマス・アルバ・エジソン”  
と名乗った。

う、嘘だ！ 絶対嘘じゃん！ ええええ信じたくねえ……

マジで？ 本当の本当にあの発明王なの？

カルデアに来てから無駄に知識をため込みすぎたせいでギャップ  
が凄い……

英霊つてのは本当に想定外の斜め上をぶつちぎるやつが多いな。

けれども今回ばかりはちよつと信用しづらなんだよなあ……通信  
機越しのドクターですらエジソンとライオン……？ と頭を捻って  
いるレベルなのだ。

ううむ……と唸っていたらエジソンの後ろにいた小柄な女性が”

彼は真正銘、トーマス・アルバ・エジソンよ”と語った。

いや誰だお前は（真顔

そんな俺の心の声が漏れていたのだろうか、彼女は少し笑った後に  
エレナ・ブラヴァツキーだと言った。

……ああ、”ブラヴァツキー夫人”か。

マハトマとかハイアラキだとかに接触したとされる神智学の祖。

でたらめだとかインチキだとか言われていた記録もあつた気がする  
がこうして英霊としてこの場にいる以上恐らくそれは本当のこと  
だったのだろう。

元から小柄なのが小柄であるエジソンと並んでいることで更に小  
さく見える。

ただでさえ強烈すぎるインパクトを持ってきたエジソンの後だと  
何か……印象を薄く感じてしまうな。

なんて失礼なことを考えていたらさっさと本題に入りましょうか、  
とさくつと話が始まった。

因みになぜカルデアのことを知っているかと言えばテスラに煽り  
混じりで教えられたらしい。何やってんのあいつ……

端的に言えば仲間になれ、という話だった。

エジソン側もまた戦力が圧倒的に足りていないとか何とか。

兵たちを全員20時間以上働かせてようやく均衡を保ってはいるが、一時的なものでしかなく、若干競り負けてすらいる、と。

まあ、ここまでなら全然おつけーだった。超ブラックじゃん……こわ……労基に訴えんぞ……となるだけで、まあ協力しようか、となるところだった。

問題なのはこの後だったのだ。

エジソンはこう語った。

”人理を修復する気はない”と。

それだけでもうはあ？ 何言ってるのお前、死ね？ 案件な俺に彼

は慌ててこう付け加えた。

”人理焼却は防ぐつもりだ”と。

少しの時間を要して俺はその言葉の意味を理解した。

つまりこいつはあれだ、”アメリカ”という国、時代しか守らないと言っているのだ。

この時間以外の時代を滅ぼしてこの時代だけは守る、とそう言っているのだ。

……こいつは自分が言っている意味をちゃんと理解できているのだろうか？

あんまりにも意味が無さすぎると思うんですけど……

エジソンは”人理を焼却しようとしているやつが与えた聖杯”で

”人理を焼却しようとしているやつ”からこの時代を守る、と言っているのだ。

……最高に頭悪いじゃん……本当にあのエジソンなのだろうか……

100回失敗しても101回目でも成功すればいい、という言葉があるが今回ばかりは何度やっても無意味だ。

成功が最初から無いのは無意味以外の何物でもない。

ドクターもまたエジソンの言い分に”己の正しさのみを信じて国を動かした人は碌な目に合わないんだよなあ”と批判の言葉を漏ら

した。

何か……セリフに随分重みがこもってんな……と思いつつも歴史を鑑みればまあその通りなのだ。

と、いうことで、その話は断らせてもらおう。

……と言いたいところではあつたがグツと呑み込んだ。

何故なら俺には”断る”という選択肢は最初から存在しないのだ。

カルデアだけではクー・フリーン率いるケルトに勝ち目が無い。

レジスタンスと組んでも勝利が見えない。

だから、エジソン側と組んで勝ちを掴むしかないのだ。

もつと正確に言うならばレジスタンスと、エジソンたちが組んでくれないといけないのだ。

それほどまでに、敵は大きく、強い。

それにまああれだ、英霊三人に囲まれて”いやお断りだわ”とか言えるほど死にたがりじゃないんで……

でもここであつさりとおーけーしちゃうのもあれなんだよな……

仮にも俺はカルデアから人理の修復目指してここにきているのだ。

立香くんならばしつと断っちゃうんだろうなあ、そこまで考えてやっぱり俺は立香くんにはなれないわ、とカルデアとの通信機を破壊した。

ドクターの動揺したような声がかすれて消える。

すまんなドクターそう呟いてから俺はゆっくりとエジソンの手を取る。

鈴鹿御前が驚いた声と共に俺の肩に手をかけるがその手をそつと掴んで目を合わせる。

今は俺に従ってくれ。

俺の意志は上手く伝わったのかは分からなかったが鈴鹿御前はあ、とため息を吐き手を引いた。

エジソンが嬉しそうに笑い握手した手をぶんぶんと振る。

ブラヴァツキー夫人が残念そうに俺を見るのが、少し印象的だった。

ここに来てぎつと一週間と四日、状況は思いのほか最悪だった。確かにギリギリのところまで均衡を保っているとは言っていたがもう少しいい勝負をしていると思っていたのが間違이었다。

マジでギリギリのギリだよこれ……

というか日を追うごとに劣勢になっていつてますねえ……

毎日の戦果報告を聞くだけで頭痛がするレベル。

協力することになってからもう一週間は経ったがこのままじゃ普通に負けちゃうんですけど……

そもそも敵ってどこから湧いてきてんの？ と聞けば敵の持つ聖杯で無限に生産されているとかなんとか。

いや無理じゃん……

それだというのにエジソンは根拠のない自信に満ち溢れているし何なんだろうか。

そしてそんな彼がおかしいと分かっておいて何も言わずに従っているカルナにブラヴァツキー夫人。

なに……何なのこれは……戦う以前に内部に問題抱えすぎでしょ……

どう考えても先にこっちを解決しないとダメな奴じゃん……めんつどくせえ……

この意味わかんない状況どうすればいいと思う？ 鈴鹿御前に聞けば私にはお前のことが一番意味わかんねえわ、とそっぽを向かれた。

え……めつちや塩対応……

何でそんなに怒っているのだろうか、やっぱカルデアの使命を無視して協力していることだろうか。

許してくれないかなあ、無理だよねえ……

でもあの何かに取り憑かれたかのようなエジソンに正気を取り戻させるにはぶつたたくのが一番早いと思うんだよなあ……

今のままだと話すら通じない感じだし。

そうなつてくると俺一人だと荷が重いなんてレベルじゃない、荷に



潰されるレベル。

まあでも今はまだ行動に起こすべき時ではない。

そうだな……せめて協力してくれるサーヴァントが一人欲しいところだろうか。

ということであれだね、うん。

ブラヴァツキー夫人に味方になってもらおう。

エジソン一緒にぶん殴ってくんない？

素面でそう言い放った俺に彼女は紅茶を勢いよくぶちまけた。

ちよ、なまぬる……

カルデアの真っ白な制服が若干茶色に染まっちゃったじゃねえか

……

戦闘用の服に着替えればいいとは言うがあれピッチピチでちよつと恥ずかしいんだよ……

いや戦闘時は絶対着るんだけどね？

おつと話がずれてしまったな、と謝罪と共に渡されたタオルで顔を拭きながら返答を待つ。

そんな俺を見て彼女は何を思ったのか貴方ねえ……と何故か説教が始まった。

曰く、そんなことを突然言われて協力する奴はいない、と。

曰く、何ならその場で殺されても文句は言えない、と。

いやまあ、そんなことは分かってはいるけど……

これ以外に平和的な方法が無いじゃん？

それに加えて俺は別にエジソンをぶつ殺すって言ってる訳ではないのだ。

妙に狂ってしまったっているエジソンの頭ぶつ叩いて正気にさせる手伝いをしろと言っているのだ。

充分考慮した結果なので是非検討いただきたく……と今さらながら下手に出まくり敬語を使ってみたが絶望的に似合わないからやめる言われた、解せぬ。

だが結果として彼女は協力するとは言ってくれた。

最高の結果である。

やったぜ！ とその場で叫んだらやめなさい！ と一喝されたがそれはご愛嬌。

つーかこんなあつさりと上手くいくなら通信機潰した意味なかったね……

カルデアをちゃんと裏切ったからね！ というパフォーマンスのつもりでやったのだがやっぱりその場の思い付きはダメだなあ……反省しながら俺は自室……ではなく鈴鹿御前の元へと向かった。

いやほら、いつまでも拗ねられてるもあれだし、ね？

よう鈴鹿御前！ いるう!? と、緊張していることを忘れようと無理にテンションを上げて彼女の部屋の戸を力強く開ける。

あん？ と不機嫌に対応されるも想定内だ、と自分に言い聞かせて口を開く。

エジソンをぶん殴るから着いてこい、と。

瞬間、彼女は酷く目を見開いた挙句JK設定を忘れてしまったようでも間延びも無くふざけも混じらない言葉でどうということかと説明を求めてきた。

お前はカルデアを裏切り人理の修復を諦めたのでは？ と。

ううん、無駄なパフォーマンスが無意味な勘違いを引き起こしちゃったやつだよこれ……

あれのお陰でエジソンや一般兵士たちとはすぐに打ち解けることに成功したが彼女の信頼を地にたたきつけちゃったみたいだからなあ……

プラスマイナスで若干のマイナスだよ……

だがまあ、俺がカルデアを裏切るわけがないのだ。

というか俺に誰かを裏切るような根性とか無いから、いやマジで。

真顔でそう言い放てば彼女は口をぽっかりと開いて動きを止めました。

え、何それ驚きすぎじゃない？

どんだけ薄情な奴だと思われてたんだよ俺……

あまりの悲しさに涙をこぼしそうになっていたらそれならそうと先に言つてよ!? と肩を掴まれぶんぶんと身体を揺らされる。

だって……この城どこで誰が聞いているかも分らんし、それに念話もあのブラヴァツキー夫人ならジャックしかねないと思って……

一応ちゃんとした理由ありきで動いてたんだよ……と云えばぐうう、と唸りあーだのこーだの言うがイヤでも……とすぐに自己解決していく。

この女結構面倒くさいな……そう思ったがそれ以上に聡明で、尚且つくそ真面目ちゃんだな、と認識した。

マジで何でJK！ とかやってるんだろう。多分今の自分を冷静に思いつめたら「私何やってんだろう……」って死にたくなっちゃうタイプの子だよこれ。

数多の黒歴史を持つ自分から言わせてもらおう、やめとけ……その設定だけはやめとけ……

何、JKなるものを否定しているわけではないのだ。

そのカテゴリに収められる人間たちは他から見れば輝かしく見えるのも間違いではないし、それに憧れるも悪くはない。

だけどさあ……そんな本来の自分を押し殺してまでそれになり切るのって何か意味あるの？ と思うのだ。

人は変わろうと思っすぐ変わるものでも無いのだ。

いや、変わろうと努力するのは良いんだけどその結果出来上がった自分を受け止め切れず目を逸らしちゃうくらいならやめとけって話だ。

最高の恋がしたいとか何とか言ってたけれどそんな無理して作った自分を好きになった相手と最高の恋ってやつはできるの？

本当の自分ってやつを好きになってくれた相手の方が良くない？

……あれ何の話してたんだっけ……

いつの間にか英霊に説教染みたことを語るぱつとしない男がいた、俺である……

や、やべー、調子乗り過ぎちゃったやつだよこれ……

接しやすくするために元々の冷静真面目そうな性格の方が良いなあ、という俺の願望も見え隠れしちゃってるし……

殺されても文句言えねえよ……と土下座をかまそうとした瞬間鈴鹿御前の目の端から涙がポロリと零れた。

あ、ああああ……泣かせちゃったよ……

おいおいどうすんだよこれ、もう死は免れないよ？ と頭の中がサイレンがけたたましく鳴りまくる。

同年代（の外見）の女子が泣いてる場面とか遭遇したこと無いからどうしていいのかわからないんですけど……

あたふたと動揺する俺を余所に彼女はどんどんと涙を流していく。

お、おとおお落ち着け、これだけ言っておいてあれだけど俺の価値観、考えでしかないから、ね？ 落ち着いて？

落ち着いてよおおお！ と心中叫びながら動揺していたら目元を服の袖で拭いまくるのが目に入る。

取り合えずハンカチ渡しておくか……

俺の見事な女子力を見せつけながらそつと渡せば流れるように奪い取りズビーツ！ と鼻をかんだ。

お？ もしかして喧嘩売られてる？ ？

とことん付き合うぞ？ と思うも未だに目を赤くはらした彼女を見ればそんな気もどこかに行ってしまう。

まあ泣かせたの俺だしな……

そうしてしばらく泣かせっぱなしにした後によく彼女は泣き止んだ。

ハンカチとか既にデロツデロである。

ここじゃ洗濯できないし持って帰るころにはもう駄目になってるねあれ……

しかし数少ない自宅からの持参品だ、カルデア自慢の科学力でどうにかしてもらおう。

そんなことを頭の隅で考えながら鈴鹿御前と目を合わす。

そしてそのまま土下座をしようとしたところで彼女は言った。

私は本気でJKをリスペクトしているしこの生き方に誇りを持つようにしている、と。

しかし俺のせいで不安が生まれてしまった、どうしてくれる、と。

まあ何事も他人に口出しされまくると不安になるよね……うんうんわかるわかる。

わかるわかる、じゃないし！ と拳を一発貰ったところで俺はゆっくりとこう言った。

いやJKって別に全員が全員ギャルギャルしいわけじゃないし……

別に物静かで真面目なJKもありじゃん……才色兼備、だけど陰のあるアンニュイなクラス委員長、とかどうよ？ 最高に性癖に刺さらない？

そんなJKいたら思わず惚れちゃうって！ 絶対！ 惚れる！

今なら俺の意見をゴリ押せるのでは？ とさつと訪れた天啓に身を任せて口走る。

いや言ってることは全て本音だし彼女のことを考えてはいるから……いや、勿論俺の接しやすさを第一に考えているのは否定できないんだけど……

そんな俺を何故か鈴鹿御前はぽかんと見ていた。

え、何その意外……！ みたいな目つきは……

そして徐にお前のごこと信じていいの？ みたいなこと言いだすのやめない？

そうやって決定権を他人に託して良かったことなんてほとんどないんだぜ……

目を遠くしながら言えば若干引かれながらもそれもそうね、と一人納得した彼女はしばらく悩んだのちにふんつ、と鼻息を漏らした。

結果からいけば彼女は少しばかり自分の在り方を見直してみらうしい。

まあ直せとは言わないしお好きなように……と、いやいや、だからこんな話をしてきたんじゃないよ。

こんな話!? 雑に扱うなよ!? みたいなことを言われるが実際おまけみたいなものなのだ。

というかほとんど口から出まかせみたいなものだったし……まあなんだ、俺の用件はただ一つ。最初に言ったことだけだ。

——エジソンを、ぶん殴るぞ。

ブラヴァツキー夫人……いや、エレナはカルナはこちら側に着くことは無いだろう、と言った。

まあ流石の俺もそれくらいは分かる。彼は決して自分が味方すると決めた存在を裏切るような真似はしないだろう。

だけどもあ、別に敵対するという訳ではないのだ。

強いて言うなら俺は戦争の結果を鑑みて陳情しにいくにすぎない。何、すぐに終わるさ、任せてくれ。

足取りは軽く、カルナの部屋の扉をノックしてから押し開ける。

ここにきてからカルナと話すことは少なくともなかった。

もつと言えばこうして部屋に来ることも初めてではなかったりするのだ。

よう、今良いか？ と尋ねればもちろんだ、と返ってくる。この男は基本的に人を拒まない。

ついでに言えば遠回しな物言いにしてもズバツと要点を切り抜いてくる男だ。

ということでもちよつとオブラートに包んで話を切り出した。

明日、エジソン——大統王に陳情を申し出に行く。既に劣勢に押し込まれている上に市民の限界も近い、そのことを含めて事細かく改善されるように幾つか提案してくるつもりだ。

この気持ちは中々に譲れない、それなりに長引くだろうし熱くなりすぎて少々うるさくなるかもしれないんだ。

それでもこの話だけは邪魔されたくないし、決着をつけてしまいたい。

だからさ、その間誰も入ってこれないように見張り番してくれない？

一応、方が一が無いようにエレナ達も連れて行くんだけどやっぱり少し不安だろうか？ 頼むよ。

薄っぺらいオブラートだな、むしろそれ本当に包めてる？ と自分で言っておいて突っ込みたくなるような話に彼は少しの思考の後に良いだろう、と頷いた。

いい結果を期待している、と変わらぬ表情のまま言い放つカルナにサンキュー！ と礼してからまた少しだけ話して部屋を出る。

上々の結果だ、早速報告だぜ！ とエレナに伝えればええ……何こいつマジかよ……みたいな色んな感情の織り交ぜられた表情で見つめられた。

その理解できない生物を見る眼やめない？ ねえ……と抗議するも華麗にスルー、その後何もなかったように話を詰めていたらそういえば、とぼつりと彼女が言葉を漏らした。

言つてたつけ？ と前置きしてから彼女は言った。

何かこつちに一人サーヴァントを連れ戻しているところらしい

……ん？ いやちよつと待ってもう一人いるの？ 何それ聞かない。

あ、やつぱり？ と彼女は軽く笑った、いや笑いどころじゃねーから。

もう一人のサーヴァントは“ナイチンゲール”と言った。

言わずもがな、“あの”白衣の天使！ ナイチンゲールである！

うつひようこれは期待が高まる！ と思つたのも束の間、彼女はぶつちぎりでイカれたサーヴァント、つまるところバーサーカーであつた。

いやマジで何なのあの人……

人の面見た瞬間「治療！」とか叫んで顔面掴んできたんですけど……

いやあちこちについた傷を放置してたのが許せなかつただけらしいんですけどね？ だとしても勢いが激しいなあつて……

まあ何はともあれやる気があるのも非常に高ポイントだ。

だけどやる気がありすぎるのもどうかと思うの……

だからピストル磨きながら執拗に俺を急かすのをやめない？

こういうのはタイミングつてもものがあるんだよ……

まだ全然準備が整ってないからね……

俺のハイレベルなトーク力で宥めること数日。

一緒に戦闘しに行った結果あなたは……と考え込んだ後に貴方も

治療対象ですと言いはじめたがそれにはそれ、これはこれ。

治してみせます!! と本気で宣言する彼女から全力で逃げつつやってきた決行日。

寝ぼける俺を必死に起こそうとする鈴鹿御前と、シャキツとしなさい! と窘めるエレナ、そして早く起きろとビンタをかましてきたナイチンゲールとともに玉座の扉を押し開けた。

因みにビンタした後はそつと冷えピタを貼られた、アフターケアもばっちりかよ……

じゃあよろしく、とカルナに告げてからグツと扉に力を籠める。

ギイイ、とそれっぽい音をあげながら開いた扉の先に彼はいた。

獅子の頭を持った天才、トーマス・アルバ・エジソン。

彼はゆるりとこちらに振り向き、そしてぱつと笑ってどうかしたかねと尋ねてきた。

ちよつと話させてくれ、と三人を片手で制して前に出る。

まあ、その、なんだ。

今日はちよつと聞きたいことがあつてきたんだ。

ふむ? と不審な表情をするエジソンにかまいもせずにお問い合わせきた。

お前は今自分がやっていることを理解できているのか?

本当に今のままでどうにかできるって信じているのか?

なあ、よしんばケルトに勝てたとして、そのあとたかが聖杯で守り切れるって、そう思うか?

俺には上手くいくとは到底思えない。

いや、断言させてもらう、無理だ。

けどそんなの言われるまでもなくあんたなら分かっているんじゃないのかよ?

おい、何とか言えよエジソン――

返答は言葉ではなかった。

分かっている、そんなことは分かっているのだ、だがそれでも私は止まるわけにはいかないのだ!



エンジンが泣くようにそう叫びを上げた。私がこの国だけは守らねばならぬのだ、と雄たけびをあげるのだ。

その姿はまさしく狂氣的で、文字通り取り憑かれたように、何かに突き動かされるように、彼は吠え猛った。

爆音と共に加速した彼の拳が紙一重のところまで頬を掠り抜ける。

バチリ、と雷特有の音が鼓膜を打つと同時に激しい銃声が音を塗り替えた。

ぐう、と彼が唸ると同時に背中を鈴鹿御前に掴まれ後ろに放り投げられる。

つてうおおお!! ぎっけんなお前!?

何とか受け身を取りながらゴロゴロと床を転がり態勢を整える。

俺を避難させたかったとはいえ乱暴すぎない?

隣に立つエレナがほら起きて、と見向きすらせずと言う。

お前らはただの人である俺を何だと思っているんだ……? とも

思うが口には出さずに立ち上がって戦況を見定める。

ふむ……余裕だな。

まあ当然ではあるのだが。

そもエンジンという人物には戦闘に関する逸話等存在すらしないのだ(ついでに言えば獅子に關しても)。

今でこそ何故かあんななりであれだけの力を振るっているがこと殺し合いの経験で言えば俺の方が上だと言えるレベルだ。

それ故に、戦況を操りやすい。

その上でエレナの魔術によるサポートにも加わっているのだ、見ていて冷や冷やとはするものの完全に手玉に取ることが出来ていた。

分かりづらく、しかし確実に気づかれるような細かな隙をわざと作りだしてからカウンター。

動揺を隠すように雷が嘶き打ち消すように銃声が鳴り響く。

返す刀で翻った剣の峰がエンジンの頭を打ち抜いた。

ふらりと覚束ない足取りになった彼を追い撃つようにナイチンゲールが銃床で真っ白な獣毛に覆われたこめかみをぶち抜いた。

カハツと空気の抜けたような声がエンジンから漏れ出たのを聞き

逃すことなく二人は同時に彼を蹴り飛ばした。

壁にもたれかかって息を荒くした彼の首元、その数ミリ横を刀が通り強い音と共に壁に突き刺さる。

気を抜くことなく銃を構えるナイチンゲールの肩を叩き力を抜かせる。

俺たちは確かにエジソンをぶん殴りに来たが決して倒しに、殺しに来たわけではないのだ。

だからほら、鈴鹿御前も、殺気抑えろ。

よしよしよしよし、と頭を撫で繰り返してからバシツと弾かれた片手を擦りながらエジソンへと語りかける。

そら、少しは浮いた熱も落ち着いたかよ。

馬鹿みたいにくらき散らしていた彼はいくらか理性の宿した目をこちらに向け、しかしそれでも私は止まる訳にはいかないのだ、私が守らねば……とうわ言のように呟いた。

こうなれば超人薬を……と震える手で懐から取り出した液体の入った瓶をスツと奪い取る。

こんなものに頼ったところで、だろ。少しは落ち着けよ、と飽くまで冷静にそう諭す。

それを取り返す力もないのか彼は片手で幾らか空を掴み、そして軽く床を叩いた。

ここで私が戦わねば誰が戦うのか!? 私が! 私こそが踏みとどまらなければ誰がこの国を守るというのか!

私は、この国を行く末を託されたのだ! 私の全てを傾けてでも、この国だけでも救わねばならぬのだ!と。

託された……? 少し引つかかったがそれはすぐに解消された。

エジソンは、過去現在未来における“全て”の大統領に力と信念を託されたのだそうだ。

つまりそれこそがエジソンの力の源の大半であり、彼を突き動かす“何か”であった、ということだ。

何それこわ……というかそんなことできんだ……とあまりの驚きに思考を停止させられていたところをナイチンゲールの言葉がすっ

ば抜いた。

その割にあまりにも非合理的ですね、と彼女は言った。

どうということだと低い声を出すエジソンに彼女は続けて言った。

——勝てない。かのケルトの戦士たちは生まれてから死ぬまでを戦いに捧げた化け物だ。

この時代の人間たちが抗うには差がつきすぎている。ましてや彼らは敵の持つ聖杯を元に無限に生み出されている。

故に勝てない、勝てるはずがない。

無限に繁殖する彼らに数で勝負する、という発想が既に間違っている。

確かに大量に生産する、より安価で良いものを普及させるのが貴方の才能だ、だからこそ貴方はムキになってしまい、結果的に劣勢に追い詰められているのです。

有限の資材しかない上に同じ戦いをすれば勝つことはできない、当然のことでしょう。

容赦なく、ナイチンゲールはズバズバとエジソンの心内を暴いていった。

曰く、貴方のその願いは貴方個人のものではない、と。

呪いのように残った大統領たちの願いであり貴方のものではない。

イ・プルーリバス・ウナム。アメリカとは多数の民族から成立した国家であるあなた方はあらゆる国家の子に等しい。

であるならばあなた方には世界を救う義務がある、そこから目を逸らして自分のことばかり考えるから貴方は苦しむのです。

そして——そんなんだから、かのニコラ・テスラに敗北するのです。

最後のセリフが余程効いたのか、エジソンは一度ぐるりと目を回した後に断末魔のように高らかに鳴いて完全に倒れ伏した。

……うん、俺いらなかったね……？

ビクビクと痙攣しているエジソンに心なし柔らかく声をかける。

そんでお前、結局どうしたいんだ？ ん？ 何？ 自分が間違っていたことは認めるって？ よーしよしよし、良い判断だ。

やつとスタートラインだな、こつからが本番だ。

一仕事終えたぜ……と汗を拭えばボソリと彼が弱音を漏らす。

ここまで——ここまで市民を犠牲にしてきてやつとスタートか、手厳しいな、これは……これから、私はどうすれば良いのだろうか、としおしおうなだれる。

ええ……うっそじゃんお前自分の在り方すら忘れちゃったの？

俺ですらそんなん学ぶまでもなく知ってたレベルなんだけど……

仕方ないなあ……と頭をかくとエレナがすつと前に出て言い放った。

いつも通りで良いじゃない、と。いつも通り、失敗しても次に挑戦する。百回失敗したなら百一回目に挑戦する。

何度も何度も繰り返し返して、周りに散々苦勞を掛けて、そうしてちやつかり立ち上がるのが貴方の生き方で、あなたの長所よ、と。

そうだな……その通りだ、最終的に上回れば良い、が私であった……！ としかしそれでも私は負け猫だとうじうじとし続けるエジソンにはあ、とため息をつく。

何だこいつめんどくーな、もう一発殴れば良いのかこれ？ と思つて袖を捲り上げればポン、と肩を叩かれた。

カルナ——

扉越しに全てを聞いていたであろう彼は優しくも厳しく彼を諭した。

お前は道にこそ迷ったがそれでも目指していたのは正しいものだった、と。

何かを打倒することでしたか世を照らせなかつた英雄俺たちと違って発明で人を救つてきて、最終的に世界を照らす光となっただろう、と。

その希望、成果を糧にもう一度立ち上がれ、現状は最悪だが終わりではない、と。

どうして英雄ってのはこうもかっこいいことを憶することも照れることもなく言えるんだろうな？

何はともあれエジソンは再び立ち上がった。

迷惑をかけた！ と謝る彼に二エレナとカルナ人は友人なのだから構わないと

笑った。

その光景を前にふと吐き気がした。

ふらりとする俺をどうしたのかと鈴鹿御前に支えてもらう。

果たして俺は人理の焼却を阻止し、友人とまた笑い合うことはできるのだろうか、それを考えるだけで不安で押しつぶれそうだった。

最終的にエジソンは完全に復活した上に俺を副大統領（仮）みたいなやつに任命した。

彼曰く大統領には常に優秀な副大統領がいるものだ……（どやっ）ってな感じらしい。

まあ気分は悪くないけどちよつと荷が重いですね……立香くんと変わりたい……

そういえば彼はどうなったのだろうか、できればさっさと助けに来てもらいたいものだな、と宛にならない希望を少しだけ考えてか円卓に座る。

エジソン曰く作戦会議だ。

……と言つてもやるべきことは一つしかない。

簡潔に言うのであれば戦力の増強、つまるところ野良のサーヴァント探しである。

幾つかの発見情報もあるしそれを元に俺が動くこととなった。

本当なら城でぐーたらしていたくもあるのだが、実際の所俺がこの城でやれることが限りなく少ないのだ。

というか最早皆無なまである。

故にサーヴァント探しなのだ。

地図を広げてこの辺は敵に占領されているだとかあの辺はレジスタンスが多いだとか云々話を詰めていく。

最終的にこの街に最初に行こう！　なんて話が決まったその直後だった。

階下から響く爆音、そしてそれなりの大ききさを持つ扉が砕かれんばかりの勢いで開け放たれた——

——立香君？

彼は如何にも激怒していた。

それは俺に対してなのかはたまたエジソンに対してなのか。

そこは分からないが取り合えず彼は酷く激昂していた。

ついでに何か見慣れないサーヴァントが扉の先からわらわらと溢れてくる。

良く見ればレジスタンスのサーヴァント……ビリーやロビンも混ざってるし絶対あれ他のも現地のサーヴァントたちだよな?　というかラーマ君しれつと混ざってるけどどうしたお前治ったの?　

色んな意味で困惑していたら立香くんは俺を見て少し悲しげな顔をしてから先輩を返せー!!!　と叫んだ。

先輩——つまるところ俺である。いや俺の方が立香先輩!　まじかっけえっす!　と敬った方が良いのは百も承知なのだが先にカルデアに来ていた、というこだけで彼には先輩と呼ばれていたりするのだ。マシユが立香くんのことを先輩と呼ぶので実は若干紛らわしいな、と思っていたりいなかったり。

まあでもこれはあれですね……確実に俺の無駄なパフォーマンスがとんでもない勘違いを引き起こしていますね……

落ち着いて話を聞いてほしい、と制止をするも今助けるから!　と話を聞かない立香くん。

ううん……こいつあ参ったぜ……!

立香くんが快復したのはとても喜ばしいのだがこの状況は割と深刻である。

何が深刻って後で関係者各位に土下座をして回らなければならぬってことだよな。

いや本当憂鬱だな……

本当……マジでごめんね……俺……微塵も操られてないんだ……洗脳とか一切なし、ここまで全て自分の意志です……

え、じゃあガチで裏切っちゃったの……と動揺する立香くとマシユにいやいや違う違う違うからあ!　と軌道修正をかけること十数回。

何とか話を理解してくれた二人と、更には通信機越しのカルデアの皆にごめんなさい……と謝る。

最早土下座である、もうね、申し訳なきがやばい。

何ともあつさり許されただけに罪悪感が残り続けるのだがいい加減頭を上げないと変な空気になってしまいうな……とゆっくりと頭を上げた。

その場には圧巻するほどのサーヴァントがいた。

というか立香くんの連れてきたサーヴァントが多すぎる。

ネロ、エリザベート、ロビン、キッド、ジエロニモ、アルトリア、マルタ、マシユ、ラーマ、スカサハ。

元からいた三人を引いても七人で……立香くんのコミュ力がヤバすぎる。そしてエリザベートまた呼ばれたのか、縁ありすぎでしょ……

ていうかとんでもないビッグネームをさらりと混ぜてくるのやめない？ スカサハとかマジ大物つてレベルじゃないんですけど……

何だか面白いものを見つけたぜと言わんばかりの視線を送ってくる彼女によ、よろしく……なんてどもりながら挨拶してから席へとつこうとしてすつ……と俺の真横に人影が現れた。

——!?

ヒエツと声が出かけたところで姿をようやくやつと確認できた。

……ライダーさんである。ただいま戻りました、とか冷静な感じに言ってるけど今とんでもないスピードだったし若干息が切れてるな？

ちよつと面白いわ……と思っていたら普通に走ってカメラミラがやってきた。その姿に吹いてしまった俺は悪くないと言わせてもらいたい。

これからどうするかを話す前に立香くんたちの話を聞けば彼らは既に数度のサーヴァントとの戦闘をしていた。

もつと言えばサーヴァントを一人倒していた、仕事早すぎない？

ラーマを治してサーヴァントを一人撃退して更には三体のサーヴァントと戦闘を繰り広げて退かせるとか手際が良すぎるなんて

レベルではない。

なに、立香くんループでもしてんの？ その手腕に逆に恐れを感じるんだけど……

しかし皆のお陰だよ、何て爽やかに笑う彼にそんなことを言えるわけも無く、ただ何がとは言えないが変わったなあ、というぼんやりとした印象を立香くんを抱えたまま会議へと進んだ。

会議は順調とはいかなかった。

問題は二つ。

一つはこの聖杯戦争は陣取りゲームみたいなものであるということ。

敵が支配した地域が広ければ広い程このアメリカの地、時代にとって異物であるケルトの存在が大きくなりやがてこの時代が崩壊してしまうということ。

そしてもう一つが、シンプルに敵の大將が強すぎるということだ。

俺としては初耳だったのだが敵さんの大將はクー・フーリンオルタだけでなくコナハトの女王・メイヴまでいるとのことだ。

彼女もまたケルト神話に出てくる一人である、ぎつくばらんに言っ  
てしまえば世界で自分が一番美しいと信じている清楚系ハイパー  
ビッチ……みたいな感じ。

生前ではクー・フーリンオルタとは敵対していたはずなんだが……

まあ事実は事実として受け入れなければなるまい。

因みにこの話を聞いてカーミラがふうん……と意味ありげに深く  
頷いていた。

その顔を見てみなかったことにしようと己に言い聞かせました、ま  
る。

しかしここで問題になってくるのが聖杯を持っているのは彼女の方  
である可能性の方が高い、ということろだ。

つまりケルト兵を無限に生産しているのは彼女であり、そして  
クー・フーリンオルタは素であれだけの力を持っているということ。

もしこの場にいる全員で挑めば勝ち目が見えるがそれはこの聖杯



戦争の性質上不可能なのだ。

それに敵にほかにもサーヴァントがいるのは確認済みだ、黒い肌に青く燃える弓を携えた男を見たとき機械兵から聞いている。

素晴らしいことに写真まで撮ってきたのでそれを見せたところカルナが彼はアルジュナだと、そして自分が相手すると言った。

まあ当然のことだ、そいつが本当にアルジュナならば相手はカルナ以外ありえないだろう、実力的にも、因縁的にもだ。

他には三体のサーヴァント——かの竜殺しベオウルフにファイアナ騎士団団長フィン・マツクール、同じくファイアナ騎士団のディルムツドオディナー——にサーヴァントには敵わないがそれでも強力かつ無限に湧いてくるケルト兵がいる。

機械兵だけでは到底かなわない、量で負けている以上質で勝負するしかないのだ。

ざっくりと言うならばこれ以上相手に領土を取らせないようにする防衛組と敵を討つ攻撃組に別れるのだ。

そしてできることならばカルナとアルジュナが戦っているところをクー・フリーンオルタたちに邪魔されないうように引き離したい。

しかしどうやって？ というところで会議がストップしそうになったところで「わしがやろう」と女性の声が響いた。

スカサハである。クー・フリーンの師匠でもある彼女は確かにうつつつけの存在だった。

じゃあ頼むわ、と二つ返事で返して会議を進める。彼女が言いださなかつたらこつちから指名する予定だったしちようど良かったのだ。マシユと立香くんが抗議したそうにしているので先んじて彼女なら大丈夫だろう、ね？ と問いかけるように言うておく。

当たり前だろう、わしだぞ？ と自信満々に宣言したことで二人は口を閉じ、恙なく会議は進んだ。

何かスカサハから含むような視線をもらっているけどスルースルー。

最終的に作戦開始は三日後とし、攻撃組と防衛組の振り分けは立香くんと俺に任された。

マスターだから仕方ないとは言え大任である、正直胃が痛い。

立香くんですら具合悪そうな顔をしているのできつと考えていることは同じだろう。

自分のこの采配がミスだったらどうしよう、ということだ。

全く、こういう一番責任が問われるところがあるから嫌なんだよなあ……とブルーのまま会議は終わった。

場に残ったのは立香くんと俺だけである。

俺と契約しているサーヴァントも含め全員には一旦退室してもらったのだ。

扉がゆつくりと閉まりきるのを見届けてからふう、と息を吐いてからだらりと姿勢を崩す。

何だかこうやって二人で話すのは久しぶりだな？ 何て声をかけてから何気ない会話が当分続いた。

彼が眠っていた一週間、その間に彼はちよつとした冒険をしてきたらしい。

良く知らん男と二人で脱出不可能な牢獄を脱獄してきたとか何とか。

彼曰くその男のお陰でちよつとは成長できた実感していると。

ソロモンの仕掛けたその罠により結果的に成長するとか逞しいなこの子……

ていうかその男は結局何だったんだ……とか色々疑問は残ったがまあそこまで深く聞く必要も無いかな、と感じてようやく本題を切り出した。

すなわちどう振り分けるかだ。

途端に自信なさげにな表情になる立香くんに不安がるなよ、と務めて冷静に言う。

俺たちはマスターだ。サーヴァントは俺たちに従い全力を尽くしてくれる。

俺たちが不安がっていたら彼ら彼女らも不安になっちゃうかもしれないだろう？

頼つてもいい、縋つてもいい、けれども決して自分の出す指示に対

しての不安を見せてはいけない。

それにあれだ、俺もいるんだから責任は二等分、だろ？

俺が全責任背負うなんて言うつもりは無い、だから一緒に背負おうぜ。

二人でも背負っても重すぎないだけだな、何て笑えば彼は覚悟を決めなおしたようにうなずいた。

すっかりと日は沈み、やることを済ませてから一人ゆっくりと城の塀を歩いていく。

成功するにしろ、失敗するにしろ三日後には俺はここに戻ってくることはできないのだ。

だからということでもないのだがいつまで経っても眠気が襲ってこないのを理由にこうして一人でいるのだ。

自分のいた時代と違って星が良く見えるな、と柄にも無いことを思っていたら後ろから、見つけたぞ、と声がした。

殺気や敵意とはまた別物、しかし明らかに戦意を感じて大きく飛び退くと同時にスカサハの拳が俺の鼻を掠めた。

いや地味に痛いんだけどなに？ なんなの？

鼻を押さていたら彼女は勝手に語り始めた。

俺は他の魔術師や立香くんと比べてもまた異質だと。

それにマスターというよりは戦士だな、とも言った。

まあ確かにマスターなんて柄ではないと思うけど……だからなに？ と問えば彼女はクスクスと絵になるように笑いを携えてこう

いった。

”面白そうだから暇つぶしがてら、この三日だけ修行をつける”と。

……は？

ちよつとふざけんなよおおおおお！？

突然拳が降ってくるのかいう強烈なモーニングコールを受けて目が覚めた俺はすたこらさっさと城内を駆けまわった後に訓練場で組み手をやらされていた。

昨晚スカサハはそのままふつと姿を消したのでてつきり冗談だと

思っていたらこの始末である。

ライダーさんたちに助けてもらおうとしたらあっさりとかスカサハに言い包められて頑張ってくださいね、と手まで振られた。

ちくしょう……！

しかも何が質悪いっていきなりスタートしちゃうところもそうだけど最高に痛いしギリギリ死なないラインを熟知しているせいで苦痛レベルが非常に高い所だ。

正直めつつちや痛い、涙ぐむレベル。

こうなりややくそだ、と礼装まで使っているが掠りすらしねえ。そして回避しようにも避けられる確率が二分の一、というところだ。

多分躲せるか躲せないかみたいなギリツギリの攻撃をしてきているのだ、彼女は。

お陰で身体のうちこちが痛すぎる、しかし痛みで倒れた傍から回復させられるもんだから疑似ループしてる気分になってくるまでである。その度にちよくちよく煽られるので怒りをエネルギーに変えているが如何せんどうにもならない。

というか時間が経つごとに明らかに攻撃が激しくなっているよね？

お陰で倒れる頻度がくそ高いんですけど……

振り下ろされた脚を骨が砕けるのも構わず片手で受け止め流す。

そうして作った隙に木刀を振るうが手首を叩かれ呆気なく落としてしまう。

直後に砕けた腕を回復させられてから彼女はふと攻撃をやめて大きくため息をついた。

え、なに？ 何かあった？ と動けずにいたらスカサハは至って静かに言った。

おい小僧、ふざけるなよ、と。

超スパルタな彼女が怒気を露わにして問うのだ。

己の身を顧みず攻撃するのはなぜかと。

普通なら動けなくなるような痛みですら表情を変える程度でいるのはどうしてかと。

その戦い方はまるで、まるで死を前提に戦っているようだ。

それは人の戦い方ではない、と。

その言葉に俺は反論することができなかった。

パクパクと幾度か口を開いてそしてやがて閉じてしまった。

正しくその通りなのだ。

意識しないようにしていた、けれどもとうに気づいていたのだ。

いつかの魔女の言葉を思い出す。

きつと俺は既に依存しきっているのだ、このループに。

それは即ちもう常人ではないということの意味していて、途端に不

快感が胸を占めていく。

スカサハはまだ気づいていないだろう、事実一目で理解したのはソ

ロモンくらいだ。

だがそれを理解されるのも時間の問題だろう、彼女は魔術について

も異様なまで造詣が深い。

まあ隠すようなことでもないし、と思ったが何て言ったものかと悩

んでいたら不意に頭を持ち上げられた。

至近距離にスカサハの顔がある。

彼女はじつとりと俺の眼を覗いていた。

無駄に緊張する……と動けずにいたらすつと手を離され彼女は納

得したようにふん、と唸った。

そういうことか、と独り言ちたスカサハは一呼吸置いた後にその戦

いは禁ずると言った。

それについてどうこう言うつもりはないが、少なくともわしの前で

それは許さん、と。

それ以上人間から離れたくないだろう？　とも付け加えて。

当たり前だ、と二つ返事で返せばにやりと笑ってそら立て！　続け

るぞ！　と吠えた。

いや、休憩はもう少ししたいかなって……だめ？　だめかあ……

作戦決行日はすぐにやってきた。

修行飯修行睡眠修行みたいなアホな生活のせいで一瞬に感じたまである。

きつちり睡眠とご飯の時間を取らせてくれる辺りは配慮を感じる。その逆でシャワーとかの時間が激短かつたのには配慮は感じなかった……

飴と鞭の切り替えが激しすぎるんだよ、と愚痴を漏らしながら出発である。

この三日で振り分けも納得できる形で終わらせられた。

攻撃組は俺、ライダーさん、カーミラ、鈴鹿御前にラーマとエリザベート、ビリーとスカサハ、カルナ、ナイチンゲール。

防衛組が立香くん、マシユ、マルタにアルトリア、エジソンとエレナにネロ、ロビン、ジェロニモ。

俺と立香くん、どちらが攻める側に着くかは悩んだが最終的にじゃんけんで決めてしまったのは内緒だ。

くそう……あのときパーを出していれば……！

と、まあそんなこんなで出陣である。

立香くんが不安そうに見てくるので心配するな、としかし何かあった時はよろしく頼むとだけ伝える。

因みにスカサハは出陣と同時に先に行ってしまった、あの女、自由すぎる。

出陣してから更に三日経った。

それなりに小競り合いはあったがこちとら全軍の半分をほどを引き連れてきている上にサーヴァントがたくさんいるのだ。

そこらのケルト兵では話にならない。

いつかのローマを思い出すな、なんて思いながら進んでいたところで先頭を進むカルナから連絡が入った。

二十キロ先に敵の大軍を発見、遠目だがアルジュナを確認できた。

ではここからの主役はカルナだ、俺たちはその戦いの露払いだ。ドクターにこれより本格的な戦闘が始まると伝えて概念礼装を纏

う。

敵の姿がゆつくりと視界に入ってくる。

真っ白な服装に黒い肌。

蒼く輝く巨大な弓を携えたあの男がアルジュナか、と写真と照らし合わせて確信を得る。

カルナがガチャリ、と槍を持ち上げた。

アルジュナがグツと矢を引いた。

蒼い炎と紅い炎、二つがぶつかり合って激しく弾けたのを合図に両軍は激突した。

彼らの戦いはまさしく天災のそれだった。

多少の露払いを覚悟していたがそんなことが必要ないと分からされるほどその戦いは激しく、誰をも近寄せなかつた。

だがまあ、やることは変わらない。

この軍の大將に据えてあるラーマの怒号のような指示を魔術を通して末端にまで拡散させる。

これもスカサハの修行の賜物である、ついでにカルデアの科学力。

因みに俺は軍師的なポジション、本当は大將に……みたいな案もあったのだが全力で拒否してもらった、恐れ多すぎるわ……

一際大きな爆発と轟音。

蒼と紅が乱れ合つてついに蒼が失墜した。

カルナとアルジュナ、二人の戦闘はついに終わりを見せた。

カルナの勝利だ。

膝をついた彼にカルナの槍が振り下ろされ、そして真っ赤に染まった槍がカルナをぶち抜いた。

——え？

カルナもアルジュナも目を見開いた。

嘘だ、あり得ない、いくらなんでも早すぎる。

しかし現実は無情で、そこにはクー・フリーンオルタが立っていた。彼がそこにいるということとはつまりスカサハは敗北したということだ。

参ったな、いや本当に参った。

もう少し踏み込んだところで遭遇したかった。  
現状では少し不利だ。

全員が疲弊している。

ビリーが銃を放つと同時にエリザベートにカルナを回収させる。  
高速で行われた銃撃にやはり彼は反応しきつた。

弾かれた銃弾が地に埋まる。

ちよ……割と絶体絶命だな……

そんな俺をつまらなそうに見てクー・フリーンオルタはグツと槍を握った。

アルジュナがカルナは私の獲物だと言ったはずだ、と抗議をするも知るか、と一蹴される。

それを見ながら舌打ちをして令呪を切ろうとした。

カルナの傷を――？

ふと、その必要はないと言わんばかりに誰かに肩を叩かれた。

気づけば俺もクー・フリーンオルタもその周りを深い霧が覆っている。

瞬間ロンドンを思い出して口を塞ぐが不快感は感じない。

そんな俺が面白かったのか男の快活な笑い声が響いた。

そいつはうたたねしていたらいつの間にかこんなところにいた、と。

皆の頼れるマーリンさんが助けてあげるよ、何て言い始めた。

マーリンと言えば一人しか思い当たらない。

かのアーサー王伝説にて登場する夢魔とのハーフの魔法使いである。

相手を煙に巻いて何とかするのは得意なんだ、とごちゃごちゃ並び立ててマーリンは必殺の槍を無効化した。

何か無性に腹立つけどすげえ……！

おっとそろそろ時間が来てしまった、何て言っただけはすぐに消えていったがその時間は充分以上の役目を果たした。

血にまみれたカルナが太陽を背に槍を振るう。

ヴァアサヴィ・シヤクテイ  
『日輪よ、死に随え』!!



光と化した炎がクー・フリーンオルタを包み込んで巨大な爆発を作り出す。

激しい轟音の後にカルナは後は任せたと、そしてアルジュナに何かを言い残してから消えていき、そして爆炎の中から姿を現すクー・フリーンオルタに俺は息をのんだ。

全身を爛れさせるほどの大火傷。

今ならやれる――

そう思う前から身体は動いていた。

今が千載一遇のチャンスだ。

必中の矢をつがえ、放とうとして手首を叩かれ矢を取り落とす。

今のは、鞭……？

誰だと思えばクー・フリーンオルタの隣には一人の女性が立っていた。

桃色の髪に純白の服装。

間違はなくメイヴだ。

いやなタイミングで出てくるものだ、これでは追うに追えない。

先ほどからケルト兵が増えてきている、それも彼女の力なのだろう。

ここは追うより戦線に助けに入った方が吉と考え来るならワシントンでやってやる、と撤退していくクー・フリーンオルタの言葉に歯噛みしながらも見送った。

戦闘はようやくと収まりを見せた。

ケルト兵はほぼ全滅、しかしこちらの損害も軽微なものではなかった。

およそ3割がやられ、カルナもまた消えた。

しかしその代わりというべきかアルジュナが力を貸すという約束をしてくれた。

カルナが消えた今俺たちと敵対する意味も無いとかなんとか。

今すぐは無理だが必ず償いはする、と。

所詮口約束、だが彼は決して約束を違えないだろう、という確信を得た俺はどこかに消えていくアルジュナを見送った。

その日の夜、防衛組からの定時連絡を聞く。  
やはりケルト兵はこちらよりもあちらへと戦力を割いたらしい。  
今のところ平気ではあるがこれが続くとなると徐々に撤退せざるを得ないとのことだ。

そうなつてくるとこちらにも急ぐ必要が出てくる。

今のうちに少しでも……と逸る俺をラーマが冷静に宥める。

休憩をしっかりとらねば活躍できるときに全力を出せない、と。

その他のサーヴァントたちにも休め休めと布団に押し込まれ仕方なく目を閉じた。

おら急げ急げ！ と全速力で前進していく。

ケルト兵の他にもシャドウサーヴァントが出始めたがそれは防衛側も同じこととのことだ。

なおさら早くいかなければならない。

幸いにもホワイトハウスは目の前だ。

あまりにも数が多い所は一点突破してからいくらか軍を割いて足止めしてもらって先に進む。

これの繰り返しで既にビリーにエリザベートが離脱していた。

一気に踏み込め、とラーマが叫ぶ。

ホワイトハウスを固める多数の軍勢に炎が走り道ができる。

そこを一気に駆け抜けてどう足止めするかと考えたところで任せて、と彼女は言った。

信じているから、任せたから、と背を向けた鈴鹿御前が言う。

彼女の宝具は対軍宝具、多数の敵にはうってつけた。

ごめん、とは言わない、任された、すぐに終わらせると告げた俺に満足そうにうなずいた彼女を後にホワイトハウスへ駆け込んだ。

ホワイトハウスは魔力によるものなのか、異界と化していた。

大地は荒れに荒れ、嫌な魔力が吹き荒れている。

そしてその中央にコナハトの女王、メイヴと狂王クー・フリーンオルタは佇んでいた。

すっかり傷を癒した彼が思いのほか早かったな、と言った。

はは、そうだろ、そんなでもつてすぐに終わらせてやるよ。グツと力を籠める俺の前にナイチンゲールが出て静かに口を開いた。

貴方は病気で、自殺するか負けておけ、と。

そんな彼女をクー・フリーンオルタは笑い飛ばした。

戦いを好みながらも決して表情を変えなかった彼が笑って言うのだ。

俺も大概だがお前も相当狂っていると。

それにかかった病は不治の病だとも。

それ見て黙っていられたのかメイヴが黙れ、と。

彼は私の最強の王だと言ったのだ。

——ああ、そうか、そういうことなのか、とそんなやりとりを見てようやく納得した。

あのクー・フリーンは戦闘に愉悦を抱かぬようにしているのだ。

きつとメイヴは聖杯にこう願ったのだ。

クー・フリーンを自分に並び立つほどの王にしてくれ、と。

だから彼の知る限りでの王に倣って動くのだ。

それは即ち愚王。

後を考えず今のみを考える究極の力を持つ王。

それがきつとクー・フリーンオルタなのだ。

違うか？ と尋ねればメイヴが激昂の儘に黙れと叫んだ。

激情にかられたメイヴが飛び出して鞭を振るう。

同時にアイアンメイデンが飛び出てそれを弾いた。

カーミラは口早に言った。

私より美しいか思いあがるんじゃないわよ、と。

ならばその間余はあいつとやらせてもらおう、とラーマがクー・フリーンオルタへと向いた。

ライダーさんをナイチンゲールとラーマの援護に、俺はカーミラの援護へと二手に別れた。

振るわれる鞭を光弾で弾き、アイアンメイデンを滑らせていく。

ガバリと口を開いたそれを身を翻して避けていくメイヴを執拗にアイアンメイデンが迫っていく。

それを鞭で掴み投げ返すと同時にメイヴはこちらへ一気に踏み込んできた。

風を切って振るわれた脚を杖で受け止め押し返す。

至近距離で放たれた鞭に片手をからめとられたカーミラはかかった、と笑った。

絡まっている鞭を強く掴んで思いつきり引つ張る、引つ張られないように踏ん張った彼女の後ろからアイアンメイデンが姿を現した。

メイヴの反応は一瞬遅れた。

回転するように躲そうとした彼女は片手を巻き込まれて左腕を失った。

苦し気な悲鳴が響き、同時にカーミラの体が斜めに浮いた。

まだ鞭から手を離してない——!!

メイヴに強く引つ張られたカーミラは同じように左腕に強烈な一撃をもらった。

バキリと骨が折れた音がする、同時にガンドを放った。

カーミラが回復はいらぬ、と叫んで杖で硬直したメイヴの顔をたたきつけ、光弾で打ち倒す。

カハ、と息が抜けた彼女はそれでも的確に鞭を放った。

高速で放たれたそれはカーミラの体を打ち付け最後にぐるりと首を締めあげた。

ぎりり、と聞こえてきそうな程に力の込められたメイヴに静かに矢を放つ。

必中の呪いつきだ、死んどけ。

彼女は反射的に片手で矢を受けた。

同時に鞭が緩む。

助かったわ、とカーミラが言うと同時に大量のアイアンメイデンがメイヴを囲み、しかし彼女はそれが分かっていたかのように避けた。

彼女の眼が不思議な色に輝いている。

——愛コンフオボル・マイ・ラブしき人の未来視と彼女は言った。

一時的な未来視を可能にするその宝具を以て彼女は易々と俺の懐へと踏み込んだ。

黄金に輝く蜂蜜酒を浴びせられる。

その香りで一瞬にして意識が飛びそうになった俺は反射的に己に刃を突き立てた。

彼女の眼が不思議な色に輝いている。

最後のあれは言われなくとも分かる。

魅了の伝説のある蜂蜜酒だ。

あんなもんを俺が近距離で、しかもあのメイヴに浴びせられて良く数瞬意識が持ったものだ。

あれ以上遅かったら確実にやつの支配下に置かれていた。

だがあれならいくらでも避けようがある。

こちらでタイミングを計るからそれに合わせてアイアンメイデンを、とカーミラに伝える。

メイヴがカーミラと俺の攻撃を完璧に避け切って懐へと踏み込んでくる。

—— 3

近づかれないようにルーンストーンを投げつけ爆発、それと同時にごろりと転がった。

—— 2

それすらも予期していたように俺を追尾してきた彼女に矢を放つ。

—— 1

当然途中で押し折られたそれを捨てながら彼女は俺へと片手を差し出した。

—— 0！

瞬間片手を掴み、アイアンメイデンが口を開く。

きっと彼女が見ている未来は俺が未来を知っていない時の未来なのだろう。

だからこそ未来を知っている俺が動くことによつて未来はいくらでも変わるのだと思つたがやはり当たった。

その証拠に彼女は想定外だと目を見開いた。

ではさらば、コナハトの女王。

ギイイ、とアイアンメイデンが閉じて、鮮血が隙間から零れ落ちて、しかしそれは内側から破壊された。

彼女の体は血にまみれているし、もつと言うならば既に死に体だ。野球のバットののように杖を振るったカーミラに派手にその身体を飛ばされ、クー・フリーンオルタの横へと落下した。

一瞬、戦闘がやむ。

激しい金属音と共にいったん離れたラーマとライダーさんが俺の横へ来る。

ラーマはよくやった、あと一息だと言った。

そう、あと一息、しかしそれがあまりにも遠く感じた。

メイヴはかすれた声で役割を果たしたわ、と誇らしげに言った。

そんな彼女にクー・フリーンオルタはそうだな、よくやったと褒め称える。

やればできる女だ、と。

メイヴはそれが聞きたかった、それだけで救われた、と涙を流して体を光に溶かし始めた。

……ん？ いや待て役割ってなんだ。

そう問えば彼女は私の伝説を知っているか、とのたまった。

当たり前だろう、メイヴと言えばあれだ、クラン・カラデイン二十八人の戦士。

クー・フリーンを倒すための戦士たちだ。

それを召喚するってか？

それはちと困る、さっさとやるか、と意気込めば彼女は高らかに笑った。

見当違いも甚だしいと。

そして同時にドクターが叫んだ。

防衛組の拠点で二十八の魔神柱が現れた、と。

——そういうことかよ。

メイヴは俺の悔しそうな顔を愉悅に歪めて見た後ふわりと消えた。

クー・フリーンオルタは残念そうにいい女には縁がねえな、と一人ごちた。

その言葉には理性が伴っていて、メイヴを倒したことで彼に理性が戻っているのが分かった。

しかしクー・フリーンオルタはそれをわかっているながらもさて、殺し合うか、と宣った。

聖杯は渡さねえ、これは誓ゲッシュユいだ、と。

時代すら取れるもんを俺にだけに使ったその心意気だけは買わねえとな、と。

まったく勘弁してくれよ……

はあ、とため息をついて俺は木刀を構えた。

火花が飛び散りライダーさんが後ずさる。

クー・フリーンオルタは時間が経つごとにその強さを増していた。

聖杯が彼を強化しているのだ。

短期決戦、いつもそれしかない気がするな、と笑みが浮かんだ。

剣と槍がせめぎ合って弾き合い、銃声が鋭く響き渡る。

間を縫うようにカーミラの光弾とライダーさんの短剣が駆け巡り動きを止めていく。

徐々にはあるが押していた。

何よりラーマがすさまじく強い、その上ナイチンゲールが暴れるように動き回り、それを二人のサーヴァントが後押ししているのだ。

いける、と頭のどこかで思った。

思ってしまったのだ。

それは一瞬の隙を生んでしまつて、気づいた時には槍が俺の眼前を支配していた。

いける、と頭のどこかで思った。

同時にそう簡単に行くか!? と身体を捻る。

頬を掠めて槍がすり抜けていった。

落とし損ねた、とカーミラが謝るのを気にするなど礼装を展開した。

出し惜しみは無しだ。

ルーンストーンを投げ放つ。

先ほどから使っているそれをまたかと無効化しようとした彼が一

瞬驚愕に目を見開いた。

当然だろう、何故ならそれはあのスカサハが直々に刻みなおした古代ルーン魔術の石だ。

直撃を浴びて足を止めた彼の体をライダーさんの鎖が雁字搦めにして一瞬だけの隙を作り上げる。

同時に令呪を切つて更にガンドを放った。

胸の中央に当たったそれは更に数秒だけの時間をラーマに与えた。

爆発的に膨れ上がった魔力が鋭く練り上げられる。

——ブラフマーストラ羅刹を穿つ不滅

ようやく硬直の溶けたクー・フリーンオルタに不滅の刃が襲い掛かった。

激しい爆音、爆炎。

まさしく必殺の一撃であったそれはクー・フリーンオルタに防御する暇すらなく直撃した。

流石に生きていられないだろう、と思ったがそれでも気を緩めずに見据えた瞬間無数の棘がラーマを貫いた。

はあ——？

驚くと同時に朱槍が飛び、俺を押しつけたカーミラがそれに貫かれる。

前だけ見て進め、と彼女は言い残して消えていく。

やられた、と睨みつけた爆炎の中からほとんど碎け散った棘の鎧を纏うクー・フリーンオルタが姿を現した。

ラーマを貫いた後に機能を停止したのかその鎧は完全に砕き散つて光に溶ける。

動揺したライダーさんはそれでも数度武器をかち合わせた。

令呪を切つてラーマを回復させる。

一画では足りずに二画、それでもようやくと立てる程度のラーマを下がらせて勢いよく前に出た。

ここで仕留める。

幾度も切り結び、しかし横合いに吹き飛ばされるライダーさんと入れ替わるようにナイチンゲールが躍り出る。



幾度も銃声が響き、槍が頬を掠め弾が空を貫く。しばらくの拮抗の後に彼女はクー・フリーンオルタに一発蹴りをぶち込んでから激しく薙ぎ払われた。

同時に鋭く前へと踏み込む。

後、三歩。

届け——！

されどそれは届くことは無く。

必中必殺の槍は俺の胸へと吸い込まれるように貫いた。

後、三歩。

放たれた槍を身を振るように躲し、しかし躲しきれずに胸を貫いた。

後、三歩。

全身の強化を足だけに回して素早く接近。

くたばれ、と叫んだ俺の頭を赤い閃光が貫いた。

後、三歩。

必中の槍を片手で受け止める。

それでも尚止まらぬそれは抵抗させることなく俺の首を引き裂いた。

後、三歩。

避けられることは当然なく、それは胸を貫いた。

ライダーさんの悲鳴がいやに耳にこびりついた。

後、三歩、

あまりに遠いその距離は赤い閃光があらゆるルートで襲い掛かる死の道だった。

死するという運命は既に決まっていた。

死へのレールに乗ってしまったっていいのだ。

降りることは許されず、加速度的に死へと突き進むばかり。

血を滴らせて朱に染まった槍が、あらゆる形で俺を死へと誘った。

だけど、それでも俺は諦める訳にはいかないのだ。

今ここで終われば勝ちの目は無くなってしまふのだ。





ないのだと己を何度も律し続け、そうして、ここまでしてようやく、”因果は捻じれ狂った”

定められた運命は道を外した。  
進むべきレールはついに砕け落ちた。

殺すことを確定された朱槍は右脇を掠って地を穿つ。

油断——いや、殺したと確信していたクー・フリーンオルタは驚愕に目を見開いた。

——礼装、連続起動、重複展開。

バラリバラリと礼装が身を纏っていく。

一步踏み込むごとに加速する俺は自身の体の悲鳴をすらも忘れて狂王の喉笛へと牙を向けた。

フラガラツク——！

それでも彼は辛うじて身を逸らした。

だけれどもその動きはどうにも見たことがあるような気がして、何となく次の動きに予想がついて。

それで半ば反射的に軌道を変えて、加速した。

フラガラツクが喉を食い破る寸前、正しく驚愕、といった面を彼は顔に張り付けた。

そこでようやくと気がついた。

今の動きはスカサハと同じものなのだ。

彼、クー・フリーンはスカサハの弟子である。

つまりはそういうことなのだ。

ありがとうございます、と心の中で呟いて。

そして次の瞬間フラガラツクは彼の命を食らいつくした。

首を抉り飛ばして鮮血が散る。

あふれ出たそれを全身に被り勝利を確信した。

途端に全身から力が抜けた、その場にへたりこんで、それでも聖杯を強く握りしめる。

勝った、勝った、勝った！

俺の傍に倒れ伏すクー・フリーンオルタを見てやってやったぞこんなちくしょう！ と腕を振り上げる。

だけどそこで違和感を覚えた。

何でまだ彼は消えていない？

背筋がひやりとして反射的に飛び退こうと力を込めようとして失敗する。

彼の手が俺の手ごと聖杯を掴む。

半ば義務的に彼はその聖杯をもって雄たけびを上げた。

瞬間、俺の体が吹き飛ばされてライダーさんに抱き留められる。

そうして次に俺の視界に入ってきたそれは、ハルファスと名乗った巨大な魔神柱だった。

絶望。

今の心境を現すのはその言葉以外に見当たらなかった。

俺は満身創痍でラーマは瀕死、ライダーさんも摩耗している。

エリザベートと鈴鹿御前も戻ってきたがどちらも疲弊しきっている。

状況はどう言いつくっても最悪だった。

ふらふらと全身から力が抜けてどうしようもない。

もう駄目だ、と頭の中でそんな言葉が反響する。

ドクターの声援が耳を通り抜けて入ってこない。

終わりだ、終わったのだと腕を下ろしかけた瞬間バァン！と背中を叩かれた。

何だなんだ!? と驚けばナイチンゲールが立ちなさい、と言った。

私たちは治療しに来たのです、あれが最後の病魔でしょう、さあ立

ちなさい、と。

あれの後で貴方も治して差し上げますから、とも。

………いやあ最後のはいらなかなあ。

必要ですとも、と言いきる彼女に負けじといらねええ！ と叫びながら己を奮い立たせる。

そうだ、やるしかないのだ。

礼装を起動させ直して強く握る。

諦めてはならないのだ。

やってやる、と構えたと同時に蒼い爆炎が柱を包んだ。

轟音と共にその柱が呑まれていく。

……？

すいません、お待たせしました、と声がかかる。

アルジュナ——！

超助かった……！

というか今のでほとんど仕留めたも同然だな……？

その巨大な体躯をぼろぼろと崩しながらそいつはギリリと目を輝かせてすぐさま撃ち抜かれた。

せつかく出したやる気は無駄にされた苛立ちというか虚しさのよ  
うなものを銃弾に乗せているかのように乱射するナイチンゲール。

何か言うまでも無く魔神柱は悲し気に消え去っていった。

ドクターの歓声が響き、あちらも魔神柱が消えたとはしゃぐ。

後から聞いた話だが防衛側には何とロンドンで出会ったあのテス  
ラもいたとかなんとか。

あのエジソンと協力したらしい……見てみたかった……。

ナイチンゲールが姿を溶かしながら次に会ったときは意地でも貴  
方を矯正します、と眼を爛々と光らせながらそう言う。

それはいらぬわ、と真顔で返しながらそれでも助かった、と手を  
差し出す。

感謝はいりませんと言いつつもグツと握った彼女は今まで見たこ  
とも無い華やかに笑った後にずっと目を細めた。

この先たくさんの苦難があるでしょう、それでもあきらめてはなら  
ない、と。

嗚咽を踏みにじり、諦めを叩き潰して、そうして前に進み続けな  
さい。

それが人に許された唯一の歩き方なのだから、と。

夢ではなく、願いを持って戦い続けてください。

そう言い残して彼女は消えた。

ラーマはこの戦いには誇れることがいくつも出来た。

お主のような戦友も出来たしな、と笑いながら肩を叩き、また会  
おう！ と言い残して彼は消え去った。

エリザベートがにやりと笑って俺の前に来る。

竜のような牙をチラ見させながら今度も中々大活躍だったじゃない？

もつと褒めてくれて良いのよ？ 何て言いだした。

よしよし助かった助かった、また次もよろしくな、とすらすら言っておけばテキトーに言っつてんじやないわよ!? と叫びだす。

わがままだなあ……頭に手を置き本当にありがとう……! と真顔で言えば彼女は顔を真っ赤してやればできるじゃない! あんたも中々だったわよ! と言い残して消えていった。

ちよろいなあ、あのドラ娘……

さて、帰ろうかライダーさん。

片手を差し出すとギユツと心なしか強く握られた。

私も今回頑張りましたよ、何て言いだしてさりげなく頭を差し出すのだ。

何この可愛い生物? やばすぎるでしょ……

ライダーさんもありがとうな、と手を置くと同時に身体が光に透けていった。

帰ったらカメラミラも褒め倒さないとな、と思いつながら。

— Order Complete —

## 別つ円卓@無限ループ

存在の証明とは、一体何なのだろうか。

レイシフトの説明を聞いたときに、そう思ったことがある。

そもレイシフトとは——元所長の言葉を借りるなら、“魂を用いた時間跳躍と並行移動のミックス”らしい。

そんな意味不明なことをしている人間が、その人間で有り続けるために世界に対しその存在を証明し続けるのがカルデアスタッフの主な仕事である所謂“存在証明”。

これを少しでもミスると二度と元の自分には戻れないんだとか。

取り敢えずスタッフの仕事がミスれば俺が死ぬ、ということは分かったがそれってつまり出来るもんなの？ って話である。

いや既に何回もレイシフトして帰ってきている時点で出来ているという証明にはなっているのだが。

でもそれって普通に考えておかしくないだろうか、そう思うのだ。

だってそれはつまり俺の考えも何もかも、全てあちらの方で一定の範囲内でしか揺れ動かないように調整されているということに他ならないのではないか。

そう考えドクターに訴えたら爆笑しながら普通に否定された。

解釈が少し違うよ、と言った彼はざっくり言えばだよ、と説明し始めた。

自分がいないはずの世界に自分が行くのだから、それを世界のほうがおかしくね？ 何これ消そ。とかならないように世界に俺はここに元からいるものだぞ!! と騙し続け、尚かつ今いる世界から消えたことによつて起こる問題を補正しているのだとかか。

世界に意志とかつてあるんだ……中二病大勝利だな、本来の考えから逸れてそう思ってしまった俺は悪くないと思う。

華麗に論破されたのでちよつとしょんぼりしながらマイルームのベッドへと寝転がる。



やる気が起きないことを理由にゴロゴロしていれば律儀に（ライダーさんが）毎日更新しているカレンダーが目に入った。

……もう夏も過ぎるのだな、とそう思う。

そう、人理を修復するという旅が始まってからもう半年を過ぎ、残すところ4ヶ月もないのだ。

まあカルデアの外はいつも通り雪が降り積もっているので季節感はずゼロなのだが。

何はともあれ現在は8月半ば、つまりタイムリミットは着実に近づいてきていた。

焦らない、と言えば嘘になるかもしれない。

だが俺には「あれ？ 結構良いペース……案外いけるんじゃないか？

」といったような勉強してないやつが試験前日に抱くような謎の安心感を抱いていた。

しかしそれも仕方なし、と言わせてもらいたい。

なんてつつたつて回収すべき聖杯は残すところ2つなのだ。

更に言えば残している特異点の内片方は既に見つけている。

これには流石の俺もにつこり……という訳でもないが少なくとも過剰なまでの焦りを抱くことはなかった。

まあ焦りはしないだけで緊張はするのだが、それもまた仕方ないと大目に見てほしいかなって。

再三言ったが、今回のレイシフトは今までに無く危険かつ、イレギュラーなものだ。

確認のためにも、一度最初から説明させてもらおうね。

招集に応じて始まったミーティング、ドクターが開口一番で放った言葉がこれである。

周囲の無言を肯定と見て彼は話を進めていく。

次の特異点は十三世紀エルサレム、飽くまで予測でしかないが十字軍絡みだと思われる。

充分に気をつけてほしい、と付け加えた後に彼は今回のミーティングの一番重要である部分を口にした。

”今までの特異点”と”今回の特異点”の差異である。

今回観測した特異点は”完璧に観測できていない”特異点なのだ。今まであれば完全に時代と場所、その状況を完全に観測、把握出来た上でレイシフトを敢行していたが今回はそれが出来ない。

つまりこちら側で一番大変かつ重要なレイシフトしている人間の存在証明、というやつが非常に困難になる、ということだ。

もうその時点で行きたく無いな……パスして良い？ ……と、本来ならばやいている頃なのだが今回ばかりは事情が違った。

今回、イレギュラーなのはレイシフトだけではない。

第六特異点——このレイシフトに立香くん達は一緒に来ない。

というのも前述の通り、今回のレイシフトの危険性が原因である。うかうかしていれば見つけた特異点が手遅れになる可能性と、レイシフトする危険性。

2つを天秤に賭けたとき、最初ドクターはレイシフトを見送り、次の特異点の搜索並びに見つけた特異点の恒常的な観測をするべきだと提唱し、スタッフたちも同意した。

それに待ったをかけたのが俺である。

多少のリスクを飲んででもレイシフトはすべきだと提言したのだ。いや別に死にたがりとかそういうわけではない。

ただ、次の目的地を見つけ、それを知ってしまった以上指くわえて待つ、ということが俺には出来なかつただけである。

勿論ドクターには駄目だと素気なく断られたがそこは意見を曲げないことに定評のある俺である。

というかその特異点がこれからもずっとそうであるという可能性もある以上見送りにすべきではないと粘ってみたのだ。

一個人の命より人理の方が、価値が重いのは測らなくても解る。

そして立香くんを元の日常に返すのは俺たちカルデアの義務だ。

であれば俺が行くべきだろう、これは使命であり義務でもある。

そうゴリ押しした結果今回のレイシフトが決まった訳だ。

スタッフたちの不安を煽りドクターたちを急かすとかいう卑怯な方法も取ったがまあそれはそれ。

それに今回はダ・ヴィンチちゃんがサポートを全力でしてくれるら

しいしまあ大丈夫であろう。

いつだって死ぬ覚悟はあるけれども出来れば死にたくないのが人間ってものだ。

ミーティングは終わり全員が配置につく。

俺もライダーさん達を連れてコフィンに向かおうとして、引き止められた。

泣きそうな顔をするドクターに最悪の事を考えて置いてほしいと念を押すダ・ヴィンチちゃん。

この二人がこんなになるまでに今回の件は非常に危険性が高い。なにせ存在証明がほんの少しでもズレてしまえば俺は二度とこちらには帰れなくなるのだから。

大丈夫だ、覚悟は決まっている。だから、あまり気負うな、これは俺が決めたことだから。

最悪の場合になったとしても振り返らずに進んでくれ。

そう告げればダ・ヴィンチちゃんが、わかった。よろしく頼むよ、と言いながら礼装を手渡してくる。

今までのピッチピチの戦闘服ではなく黒いフードのついた礼装だ。いや中には勿論戦闘服は着ているのだが、流石にアレだけだとちよつと恥ずかしいし……それにそろそろ新しい機能が欲しかった。

ありがとうと言いながら上に羽織っていたら立香くとマシユが心配そうに、しかしどんな言葉をかければ良いのか分からないような顔するのでガシツと頭を掴んで撫でくり回す。

何、すぐに終わるさ。心配するなよ。

ていうか観測が安定して出来るようになったら立香くんたちにも来てもらうんだからね？

頼むぜ、と笑いながらコフィンに入り、ゆつくりと目を閉じる。

当然のように身体は震えていた、怖くないわけが無い。

けれどもやらなければならぬ、これが一番効率が良くて、最短の道だ。

俺は主人公じゃない、だけど主人公が進む道くらいは作れるはずだ。

早まる呼吸をグツと抑え、早鐘を打つ心臓を落ち着かせるように胸を叩く。

そのままギュツと服ごと握りしめて聞き慣れた女性の声を聞く。

これを聞くのも最後になるのかもしれない、そう思いながら意識を過去へと溶かした――

――銀の剣閃が間を断ち切る。

ハラリと髪の毛が数本落ちて、同時にダラリと冷や汗を流した。

いや何事？

眼前に立つ、おそらく剣を振ったであろうお兄さんまで何こいつ

……みたいな眼を向けてくるんだけど……

過去最高の物騒さにビビっていたら後ろからも金属音。

ぞろりぞろりと鎧を纏った騎士が並んでこちらを不審な目で見ていた。

……あれ何か見覚え有る顔が……モードレッド!?

え、ていうことは何、そいつらは”円卓の騎士”……?

え、何それやばくない？ いや論議するまでもなくやばいっしょ。

というかそう考えると何、このお兄さん一人でこいつら全員相手していたの……?

そして俺たちはそんなとんでもない場所とタイミングでレイシフトしてしまったの……?

……ど、どうしよう？

――何者か。

ただ一言、女性の声が響いた。

全身を白銀の鎧に包んだ女性が身の丈ほどもある槍を地に突き刺しこちらを睨めつける。

それだけで、強烈な重圧感が押し掛かる。

全身を撫でるような寒気を握りつぶして、カルデアのものと答えれば彼女はなるほど、と。

次に、では貴公らは敵である、と呟いた。

瞬間、剣が靡く。

音すら置き去りにしたそれは確かに必死の一撃で、されども甲高い音とともに勢いよく弾かれた。

お、お兄さん………！

感謝を伝える前に邪魔だ、退け。と吐き捨てられる。

多量の血を流し、片足一本引きずりながら、そう言ったのだ。

……ああ、この人はいい人だ、そう感じると同時に罪悪感が湧いてくる。

彼はこの瞬間、俺達の為にも戦うと、暗にそう言っているのだ。

傍目から見ても戦力差は膨大で、戦況は引つくりかえせないと確信できるほどであるにも関わらず。

それこそ俺達が来ようが来まいが、共に戦おうが戦わまいがこのお兄さんは死んでいたと思えるほどだ。

それならば俺は俺が逃げることに罪悪感を感じる必要は無いのは………？

そこまで考えてライダーさん達に呼びかける。

——戦闘態勢！ 隙見て全員で逃げんぞ!!!

刹那、銀の鎧の騎士は眼前へと姿を現した。

砂塵を巻き上げながら振るわれた剣は下から跳ね上がるように軌道を描き、反射的にガードに入ったライダーさんの鎖ごと俺の胴を切り裂いた。

燃えるように真っ白になった思考の中でも辛うじて致命傷ではないと判断して、今にも叫び出したいくらいの痛みを気合で抑えながら血を吐き出す。

流れるように続いた左上からの一撃をカーミラが弾き、そして現れた紫色の騎士が彼女の首を断ち切った。

は、あ——

止まる思考を無理矢理回転させる。

首を失った彼女の身体を蹴り飛ばし、それごと展開した木刀で貫いた。

血をぶち撒けながら穿たれたそれは確実に騎士の胸を捉え、激しい衝撃が腕を伝う。

数歩後ずらせた騎士にライダーさんの蹴りが炸裂し、そして次の瞬間赤い雷光が彼女の身体を呑み込んだ。

動揺する暇を与えず黒い鎧の騎士は抜刀し、鈴鹿がそれを受け流す。

血を垂れ流しにしながら礼装に手を伸ばし、そして同時に手首から先が転げ落ちた。

音もなく、ただボトリと呆気なく。

理解するのに数瞬かかった、理解してから痛みが襲うまで数秒もなかった。

焼け付くような痛みを絶叫でかき消し礼装を――

刹那、銀の鎧の騎士は眼前へと姿を現した。

音もなく腕が落ちるとかどういふことなの？

あいつらやばすぎるんですけど……

覚悟はしてたけど開幕からこんな詰みの仕方はあんまりじゃないですか……？

身体に迫る刃に刀を割り込ませる。

鞘から抜く暇も与えられなかったそれは激しい衝撃とともに俺の身を守り、同時に紫の騎士が空から降ってきた。

目視して、ガードしようとしてから衝撃で腕が痺れて動かないことに気がついた。

くそつたれがと吐き捨てながら身体を捻り、直後にグンツと裾を引っ張られた。

お、お兄さん……！

感動していたら何をやっているんだ馬鹿が！ と怒鳴られたが知ったことではない。

だってこの状況で見捨てたら何か……胸がモヤつとするっていうか……

まあそんな感じなのだ。

だから、黙って助けられておけよ。

最早膝すらガクついてる彼をカーミラへと蹴り飛ばす。

同時に雷光を纏った剣が振るわれた。

真上からの一閃、暴力の塊とでも言うべきそれは確かな技量を持つて放たれ、鈴鹿に受け流された。

激しい摩擦音、斜め下へと受け流された騎士へと刀を差し向けそしてまたもや腕が滑り落ちた。

ズルリと音もなく、しかし痛みを伴って。

だから、一体何なんだこれ……！

悲鳴をあげること無く敵を見据える。

迫ってきている騎士、じゃない。

その後ろ、赤い長髪を揺らしながら手に持つ弓の弦を豎琴のように弾き――

刹那、銀の鎧の騎士は眼前へと姿を現した。

え、何あいつ見えない矢でも撃ってきてんの……？ いや矢つていうより刃つて感じだけど……

そんなん回避不可能じゃん……どうすんだよこれ……

二度見た斬撃を半身そらして紙一重でかわし切る。

眼を見開く騎士にライダーさんの蹴りが突き刺さり、同時にルーンストーンを直上に投げつける。

瞬間、爆音。

色とりどりの光を放ち、爆発したそれは確実に飛んできた騎士に直撃し、その上で無傷でそいつは降り立った。

――は？

高速で振られた剣を反射で躲す。

銀の直剣は浅く肌を斬りつけ、血を弾く。

こいつやばすぎ――眼前と迫る切っ先を鈴鹿が力チあげる。

鋭く高鳴った金属音と共にライダーさんに引き寄せられて、次の瞬間赤い雷光が俺たちを包んだ。

刹那、銀の鎧の騎士は眼前へと姿を現した。

無理すぎない……？

サーヴァントの質は互角でも俺とお兄さんという荷物がある限りどう足掻いても隙すら作れない。

だとするならばまあ、取るべき選択肢は一つしか無いだろう。

超短期決戦。開幕だけで何もかも、全てを決める。  
鋭い剣閃を肌を掠めさせながら右手を握りしめる。

鈴鹿――！

手の甲に刻まれた紋が赤く輝き、同時に幾百の刀が宙を舞った。  
俺の叫びと同時に姿を表したそれは鈴鹿の掛け声とともに一斉に  
指向性を定め、少し遅れて激しく降り注いだ。

称すならばそれは正しく剣の雨で、しかしそれは人を穿つことは無  
かった。

弾かれた？ 防がれた？ 否。

鈴鹿は真の意味で俺の意志を理解していた、ということだ。

動かずとも当たらない剣、しかし彼女の叡智を持って計算し尽くさ  
れて放たれたそれは確実に行く手を阻むように地へ突き立っていた。

言わずとも言わんとしたことが伝わったことに軽く感動を覚えな  
がら、呆けているお兄さんを強引にライダーさんへと放り投げる。

危なげなくキャッチした彼女は強引に天馬へと彼を乗せ、カーミラ  
を加えた三人を乗せた天馬は鋭く羽ばたいた。

あるえ!? 置いていっちゃうのん!?

………とか思うほど流石に俺もライダーさん達への信頼が無い  
わけではない。

数瞬遅れて橙の衝撃が走る。

響いた振動に軽く呻きながらも俺たちは高速でその場から離脱し  
た。

どれだけの間を駆け抜けていただろうか。

追ってくるような足音は聞こえず、しばらくバクバクと暴れていた  
心臓もゆっくりと穏やかに鼓動を刻むようになっていた。

もう大丈夫、何とか逃げ切った、そう確信して、もう降りてきても  
大丈夫だと、そうライダーさん達を見上げたらまさにその瞬間、天馬  
は片翼を失った。

真っ白な体毛とは真逆の真っ赤な血を翼のように激しく吹き出し  
落下し始め、地に着く前に身体を四等分にされた。



嘘だろ——そう呟くと同時に、俺の視界は斜めにズレていった。どれだけの間を駆け抜けていただろうか。

——右翼付け根！

瞬間ライダーさんの釘剣が飛来し、何かにぶち当たって甲高い音を響かせた。

次いで十字の斬撃——伝えると同時に、お兄さんが飛び上がった剣を振るった。

——馬鹿かあいつは!?

凄まじい金属音を響かせながら見えない斬撃を弾いた彼はそのままヒュルヒュルと落下してくる。

す、鈴鹿ア！

叫ぶと同時に放り投げられる俺、キャッチされるお兄さん。

砂地をザラリと滑っていくマスター、優しく抱えられるサーヴァント。

普通逆なのでは……？ 疑問が生じた瞬間であった。

お兄さんはケイと名乗った。円卓の騎士である、とも。

サー・ケイ。かのアーサー王の兄であり10日間不眠でも戦える騎士。また、「口先一つで巨人の首すら落とす」と自ら自称するほどの饒舌さの持ち主……とされている人である。

先程から迂遠にかつさりりとトゲを持った言葉を連ねているので、饒舌さに置いては間違いなかったということだけは理解した。

うるせえ黙って治されとけや！ とカーミラにがっしりと固定してもらいながらカルデアから持参した治癒のスクロールを使い始める。

いや……本当にカルデアって優秀だな……とすぐさま治っていく傷を見ながら実感する。

余計なお世話であったが一応借りは返したいと言うのでこの時代で起こっていることや先ほどの仲間割れは何だったのか、とストレートに聞いてみる。

こういう手合はオブラートに包んだら変化球で返ってくる人が多いのである。

彼は少々躊躇った後に全てを語りだした。

この時代は”偽”の十字軍に支配されかけていて、その隣には何故かエジプト（正確にはエジプト領らしい）があり、それらに対抗するのが現地の人々。

そこにポツと現れた戦力が円卓の騎士たちらしい。

マジで意味がわからなくて数回聞き返したのだが全て同じ返答であったことから間違いないのであろう。

では仲間割れの原因は？ と問えば暫くの無言である。

じつと待っていていれば彼はあれば、アーサーでありアーサーではない、かの王の考えに肯定を示すわけにはいかなかった、とそう言った。次いで、かの王の考えについても。

一言で言ってしまうえば、かの王の目標は人理の守護だった。

ただし、それは聖槍ロンゴミアドに人の魂を保管する、という形であるらしいが。

ちよつと意味が分からないですねえ……という顔をしていれば彼は一つため息を吐いた後にこう語りだした。

一つ先に言っておくが、かのアーサー王は既に人でもなく、また英霊でもない。

あれは神と化した、と付け加えて。

聖槍ロンゴミアドとはそもそも”槍”としての側面と”塔”としての側面が有る。

まず”塔”としての聖槍は世界の果てに、世界に貫く形で存在するものであり、そこから管理者は人間を見守っており、”槍”としての聖槍は、この”塔”としての聖槍の能力、権能を自在に操れる個人兵装になる。

では何故これが星に刺さっているのかと言えばだが、俺たちが存在するこの世界は一枚のテクスチャにすぎないという考えがある。

この一枚のテクスチャである俺たちの世界は知つての通り物理法則に従って成り立っているが、それが乱れないよう、崩れ無いように世界に貼り付けていなければならないからだ。

そういった役割を持つものを総じて最果ての塔と呼び、これが幾つ

かあることで世界は成り立っているのだという。

その上でアーサー王——彼曰く“獅子王”は現在個人兵装として使用している聖槍を“塔”として使用するつもりなのだ。

塔の中に、厳選した人物のみを保管し、人理の焼却から逃れるのだと。

それを受容して協力するか、はたまた否定して反乱するかで円卓は2つに別れたのだとか。

それでサー・ケイ側——つまり反乱側が負けたのだとか。

今の話を聞いてむしろ反乱しなかった側は一体何考えてんの……？ とは思ったが現状それは最悪の中でもまだ希望の有る一手では有ると頭のどこかで理解していた。

いやそれでも俺は、俺達<sup>カルデア</sup>はそれを真つ向から否定しなければならぬのだが。

そんなことをせずとも人理は守れると、証明しなければならぬのだ。

アーサー王を止めたいなら俺達と組むのが合理的なのでは？

その一言でサー・ケイはしばらく同行することとなった。

目立った武勇は知らないが、円卓の騎士であると言うだけでかなり戦力であるのは確かだ。

正直な話助かったと言える。

といってもこの人数で勝てるとはさらさら思っていない。

サー・ケイが瀕死であったとはいえ俺たちは手も足も出せず、ただ逃げることしか出来なかったのだ。

ど、どうしよう……とカルデアの方にも確認してみるが返ってくるのは声のようなものが混じったノイズばかり。

ですよね……とため息を吐いたとき、それは確かに耳へ届いた。

擦れる金属音、空間を震わせるような騎馬の音。

不味い——そう思うのと彼らが姿を表すのはほとんど同時だった。地平線を、埋め尽くすほどの軍勢。

その先頭を走る、いやに金銀に彩られた戦士——

これ、十字軍か——

怯んだのは一瞬、逃げるべきだと背中を向ける寸前、それは眼前にいた。

振りかぶられた剣は、音すら置き去った。

目視した瞬間、それは眼前にいた。

いや無理すぎ——

目視した瞬間、それは眼前にいた。

同時に身体は自動的に動き始めた。

弾けたように後ろに飛び去り、剣はそれで尚首を浅く斬りつける。

緊急回避で避けきれない——？

地べたを転がりながら距離を広げる。

同時に、ガードに入ったカーミラが杖ごと両断された。

はあ——？

悪寒が身体を一瞬で包み込む。

駆け出そうとした鈴鹿の腰を掴んで強引に引き寄せる、同時に彼女の身体を掠めるように剣が振り抜かれた。

やばい——やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい！

こいつは今までとは比べ物にならないほどにやばい！

圧倒的プレッシャー、あまりの殺意に意識が揺らぐ。

サー・ケイと騎士が剣を数回力ち合わせて大きく弾かれる。

朦朧とした頭で令呪を切った。

二画丸ごと逃走に——

槍と矢の雨が、降り注ぐ。

目視した瞬間、それは眼前にいた。

剣は少しだけ首に触れていき、少しの血を滴らせた。

同時に礼装を起動した。

フラガラック——！

因果を逆転させる必中の一撃。

しかしそれは真正面から粉々に斬り碎かれた。

遅れて片腕がバラけて落ちていく。

悲鳴を上げたカーミラが、次撃から俺を守るようにアイアンメイデンが展開させて、それごと身体が半ば斬り裂かれる。

ゴボリと血を吐き出し、鈴鹿とライダーさんの叫びが響いた。

サー・ケイが剣を振るい、血に塗れた俺は鈴鹿に抱きかかえられて、吼えたけながらライダーさんが宝具を放つ。

サー・ケイが距離を取ると同時に、流星と化した彼女は確かに戦士へと一撃を与え、しかしその身体を斜めに切り崩された。

鎧が砕け、血を吐きながらこちらを見た戦士の兜の奥が、光った気がした。

目視した瞬間、それは眼前にいた。

剣が薄く首を切り裂くと同時にガンドを撃ち放つ。

赤黒く、雷のように輝くそれはやはり躲されたがそれだけで良かった。

余計なワンステップを踏ませれば、それだけで取れる手段が増える。

強引にカーミラを引き寄せる。

瞬間剣が杖だけを斬り飛ばし、伸びてきた鎖が俺たちを縛って更に後退させる。

戦うな――

それだけ叫んで令呪を切った。

サー・ケイが数回剣をカチ合わせたところに鈴鹿が滑り込む。

高速で振るわれた斬撃を全て受け流し、同時に宝具を解放させた。

無数の刀剣は眼の前の死神と、空から降ってきた死の雨とぶつかり合って、その間を縫うように俺たちは空へと羽ばたいた。

逃げる、逃げる、逃げる。

ありつたけのルーンストーンと猪どもをばら撒きながら高度を上げる。

こちらを見上げた戦士が徐に剣を鞘に戻す――

瞬間、全身を悪寒が駆け抜けた。

反射で今自分に出来る最大の防御を展開。

橙色光る三重の結界が俺たちを包み込み、そして音もなく半身はずり落ちた。

目視した瞬間、それは眼前にいた。

後一手だ、後一手が足りない。

鋭く下がる俺の首を撫でるように薄く斬り裂き、遅れて手の先からガンドが放たれる。

焼き増しのように全く同じく躲かれるのと同時に礼装を展開させた。

次こそ喰らえよ——振りかぶられた剣と交差するように概念礼装によるガンドを撃ち放つ。

初めて、戦士の動揺さが目に見えて、それも当たり前かとひとりごちた。

いくら俺でも考えなしに撃つわけが無いだろう。

さつきと同じことをしているのだ、であればどう動くかなどわかりきっている。

避けられないコースに乗せるように撃ち放つ。

それだけで吸い込まれるように胴に当たった戦士は一瞬だけ動きを止めた。

——カーミラ!

叫ぶと同時に地面からアイアン・メイデンが現れる。

くたばりやがれ——アイアン・メイデンが閉まると同時に天馬に飛び乗ろうとして、次の瞬間破砕音が鳴り響いた。

……早すぎない?

あいつが強すぎるのかあるいは使い手である俺が雑魚すぎるのか……どちらもですね本当にありがとうございます……

これはさつきと同じパターン、所謂詰みだ。

そのため息を吐いた瞬間、米俵が戦士をぶっ飛ばした。

……は?

かつて米が飛び交う戦場があっただろうか……いや、無い。

ていうか未来永劫無いであろう風景が目の前を占領していた。

いや本当に意味わかんねえな……?

誰がこんなことをしているのか、食べ物粗末にしちや駄目って教わらなかつたのだろうか。

視力を強化しながら見回せば上半身半裸で米を片手に馬を駆る緑

の髪の男が一人。

くそ強い戦士を米の山に埋めながらそいつは俺の手を引いて逃げるぞ！ と大きく叫んだ。

その声にハツとして、あまりの展開に停止していた思考を回す。

鈴鹿の宝具を展開させて、降り注ぐ金属の雨をやり過ぎしながら叫ぶように指示を出す。

既に天馬に乗り込んでいたライダーさんとサー・ケイ、鈴鹿を先に飛ばし、カーミラと二人で男の馬に乗る。

男の担ぐ米俵から流れる米が尾を引くように俺たちは逃げ出した。逃げて、逃げて、逃げて。

果たしてどれだけ駆け抜けてきただろうか

すっかり荒れ果てた大地を超えて、俺達は先の見えない砂漠に降り立った。

勢いのまま乗せられてしまったがこの男は何者なのだろうか。

悪人ではないだろう、何となくそう思っただけの名を聞けば彼は己を俵藤太、と名乗った。

俵……藤太……俵……藤原秀郷じゃねえか!!?

龍神に請われて山を七巻き半するほどの大百足を退治した大英雄！ 全身に無数の眼を持った妖怪——百々目鬼を祓われた大豪傑！

不死身とすら言われた平将門を討ち取った大英傑！

ひええええサインください!! とテンションが爆上げになったところで頭をはたかれ冷静さを取り戻す。

コホン、と一息。

自己紹介をしながら目的を話していけば、彼はすんなりと力を貸してくれることを承諾してくれた。

これは今回の聖杯戦争勝利確定ですね……にやけていたらライダーさんに不機嫌になられた、何故だ。

噎せ返るような熱気、視界はほんの少し先すら開けないよう砂嵐が埋め尽くしていた。

——身体が重い、呼吸がしづらなくて、視界がうっすりぼやけていた。

これ、魔力濃度が高すぎる、このままでは長くは保たない——今までならば。

そう、今までならばである。

新しく貰った礼装に魔力を流して起動する。

それだけで身体が徐々に楽になっていき、呼吸がしやすくなっていく。

ダ・ヴィンチちゃんに新しい礼装を用意してもらって正解だったな、と己の先見の明に驚きを隠せない。

ロンドンのことがあつてから、そういつた環境的なものに対する対策を頼んでいたのだ。

アメリカでは間に合わなかったが今回のレイシフトには間に合ったって本当に良かった。

これが無かったら即死だったな、と身を震わせながらカルデアに通信をつなごうとしたが試みは失敗に終わった。

ノイズの間に声っぽいのが混じってくるのちよつと怖いからやめてくれないかな……

繋がらないなら繋がらないでもう慣れたからさあ……

ただでさえ砂嵐の中にいるのに無線機からまで砂嵐の音聞きたくないよ……

そう愚痴をこぼした瞬間だった。

ザラザラと変わり映えのしない音の中に混じる明らかかな異音。

風を切り、翼をはためかせる生物の物音——

警戒すると同時に巨大な腕が嵐の先から現れた。

不味い——

躲そうとして砂を蹴り、しかしまるで跳べなかった身体が突然鋭く引き寄せられる。

鎖が腹に巻き付いている、流石ライダーさん……

神かよ……と感動していたら落下音が2つ並んで響き、直後に人のものでは無い悲鳴が響かせながらそいつは現れた。

スフィンクス——!?

驚きは一瞬、血を吹き出すスフィンクスに向かって矢は放たれた。



俵藤太が放った一矢は正しく致命の一撃で、あれだけ鳴っていた悲鳴はパタリと止んだ。

……思いの外呆気なかったな……？

この程度なら余裕ですな、はっはっは。

緊張感からすぐさま解放された反動か、ほっと安心しながら笑ったその瞬間視界がブレた。

遅れて衝撃、身体は激しく真横に吹っ飛び砂を擦って転がった。

呼吸が出来ない、右半身は麻痺ったように動かなくて、言葉を発そうとすればゴボリゴボリと血が溢れてくる。

俺の名前を叫ぶ鈴鹿、その奥に幾つもの影が立ち並んでいた。

逃げろ、そう叫ぶことも出来なくて。

俺の意識はゆっくりと沈んでいった。

この程度なら余裕——だったら良かったんだけど、な！

全力で前に飛び込む、足元を掠めるように拳が通り過ぎ、同時に幾つもの影が降り立った。

逃走は——不可能。

あまりの数の多さに辟易しながら頭を回す。

この短時間に二回も宝具を使わせているせいで鈴鹿の消耗は激しい、無理にもう一度宝具を展開させてここでいなくなられても困る。

逃走すると言つてもこの環境じゃ逃げ切れない。

だが、正直戦力的には勝てる、頭の冷静な部分がそう言った。

とはいっても当然長くは保たない、何時も通りの短期決着。

五分で終わらせる。

ここに来てからもう逃げてばっかりでいい加減うんざりしていたんだ。

全部ぶっ飛ばしてやる。

——令呪を切った。

二画残った令呪の片方が燃えるように輝き消える、同時にライダーさんの魔力が爆発的に膨れ上がった。

酷い砂嵐の中、ライダーさんは空へと翔け上がり——そして光と なった。

轟音が響き渡る、爆発するかのように膨れ上がった砂塵もお構いなしにサー・ケイは飛び出した。

視界は全く開けていないはずなのに、剣が振るわれた直後に悲鳴が鳴り響き、間髪入れず放たれた矢が脳天をぶち抜く。

何この人達……砂嵐×爆風＋砂塵の中でも見えてるの……？

怖すぎるんですけど……

流石……と震えていたら突然グンツ、と視界がブレて足が地から離れる。

だからあれだけ俺を投げるなど——!?

上手く受け身を取りながら転がっていくのと同時に響く悲鳴。

これは……あれですね、俺を助けるために投げたんじゃなくて単純に邪魔だから投げられましたね……

いや結果的に助かるし正しい判断なんだけどさあ……何か、こう……寂しいものがありますね……

せめて退けろくらい言っただけで、そう思った頃には全てのスフィンクスはその場から姿を消していた。

サーヴァントが一人増えただけで戦いの幅の広がりようが凄すぎる、いや、俵藤太の立ち回りがうまいのか。

何はともあれ誰も傷つくこと無く終わって良かった、そう思いながら歩を進めればそれは姿を現した。

そう——ピラミッドである。

正確に言うならば、それは巨大なピラミッドを中心に展開された街

——いや、国だった。

ええ……こんな砂嵐のど真ん中に何でこんな立派な国が……と思っただけ砂嵐はとうに消えていた。

というよりは国を中心に砂嵐が展開されているのだ。

つまりあの砂嵐はこの国を守る結界のようなものなのだ。

それであればあのスフィンクス共も説明がつく。

あれはこの国の番犬的な存在なのだろう。

そこまで考えてふと思う。

俺たちその番犬殺しまくっちゃったんだけど……お、怒られないよ

ね？

周りの人々に聞いてまわれればこの国のトップの名前はすぐに聞き出せた。

フアラオ・オジマンディアス——ラムセス二世の方がわかりやすいだろうか——とその側近、女王ニトクリス。

ええ……いやどっちもフアラオじゃん……

どうして二人もいるんだ……どうなつていやがる……

若干混乱してしまったがつまりこの国で一番偉いのはオジマンディアス、次にニトクリスなのだろう。

何でニトクリスがオジマンディアスより下なの……？ とは思わざるを得ないが成した功績や知名度でいけばオジマンディアスの方が圧倒的に上である。

そこら辺の関係なのだろう、と思い取り敢えずそこに忍び込むにはどうすればよいか、と頭をひねった。

——翌日、俺達は城——というより神殿内部で朝飯を頂戴していた。

いや意味が分からないな？ と思うかもしれないが俺だって動揺しているのだ。

先日適当なところで寝泊まりしようと思つたらやたらごつい兵士に連れられ豪勢な部屋に泊まらされて流れるように食事タイムに入ったのだ。

一連の流れがあまりにスピーディかつ快適すぎて思わず流されてしまったが一体どういうことなのだろうか。

ここまで饗されると何か……怖いんですけど……

若干震えながら食べればフアラオが呼びだ、と連行される。

完全に相手のペース過ぎるがこんなところで抵抗しても仕方がない。

それにこちらには複数のサーヴァントがいる。

出会って即死ということもないだろう。

現状まだ問題ない、そう判断して兵士の後を追った。

通された玉座内部は主に金で彩られていた。

若干の眩しさを感じて、ぐっと眼を細めれば上から声が降ってくる。ふと見上げればそこには絶世、といつてもいいほどの美青年——直感的に、彼がオジマンディアスであると察した。

その黄金の眼差しは俺の全てを見透かしているようで、目を逸らしそうになつたのを気合で抑える。

きっとこの人は既に俺のことを測り始めている、何となく、そう思わせられたのだ。

彼はつらつらと言葉を並び立てていく。

ざっくりまとめてしまえば長旅ご苦労、旅人は饗すようにしている主義だからお前らも饗してやったわ、みたいな。

そんな軽いノリだったのん……と思っていたら彼は思っていたよりも遅かつたな、この特異点の戦争は直に終わるぞ、と眩き黄金の杯——聖杯をヒラヒラと見せつけた。

この世界には既に果てが近づいてきている、とも付け加えて。

——それだけで、鼓動は急に速さを上げた。

この人——どこまで知っている？

俺はまだカルデアのことすら説明していないのだ。

だと言うのにその口ぶりでは、俺がレイシフトしてきたカルデアの人間で、その目的すら把握しているようではないか。

たらりと汗が流れた、この特異点は今までのそれとは一線を画する。

それが分かった、分からされてしまった。

……でもまあ、それはそれで都合か。

説明する手間も省ける、ラッキーラッキー。

そう何度も心中で反復させて落ち着きを取り戻し、口を開く。

——じゃあ単刀直入に。貴方の力が必要だ、手を貸してくれ。

オジマンディアスがスツと眼を細め、俺を見る。

俺の後ろにいた鈴鹿に単刀直入過ぎる!?! 素直か! と小声で

叫ばれるが知ったことではない、そもそも嘘をついたところで見透かされるのが見えている。

それならば最初から要件だけ告げてしまった方が早いだろう、大体

俺たちには悠長にしている時間はないのだ。

元より余裕はないと思つて動いてはいたが、この特異点はでかい歪みが多すぎる。

暴れまわる十字軍、広がるエジプト領、ついでに円卓フルメンバーである。

ついでに聖杯はオジマンディアスが保持している、と。意味不明である。

取り敢えずこの特異点は既に聖杯を回収すればそれで終わり、という話ではないということだ。

だがそれならそれで聖杯持ちとは協力関係にありたい。

というか円卓と十字軍とはもう敵対しちゃってるし、現地の人々の他には頼れるのもうここしかないのだ。

つまり俺は別におかしなことは言っていない、何ならこの場で取れる最善手を繰り出しただけでも言える。

オジマンディアスを見据えれば彼はしばし眼を瞑り、そして全身を震わせながら爆笑し始めた。

え、ええ……人がそれなりに緊張しながら言つたというのに笑いで返すとかこの人失礼すぎない？

マジで言つてる？ 冗談にしては面白すぎるんだけど、と涙目で尚笑い続け彼は言葉を続けた。

あまりに現実離れた夢見る才能だけはあるそうだが、余には無い才能である、と。

ライダーさんが一歩踏み出て、肩を掴んで止める。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一歩踏み出した。

——俺は本気だよ。

そんな俺を見下すように、口の端を歪めて、そして彼の首はズルリと斬り離された。

はあ——？

遅れて、王の威光が走り、しかし一瞬姿を現した下手人はするりと消えた。

次いで俺へと目が移り、光が玉座を塗りつぶした。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

え、いや今の何？ 何なのあの通り魔みたいなのやっ？ ？

完全に俺らの味方だと思われてまとめて消されたんですけど？

？ ？

とぼつちりにも程があるっていうか、あのオジマンディアスの首を落とすって何？

しかも首が落ちていながら動くってなんなの？ サーヴァントですから、で説明ができるレベルじゃないんですけど……

短時間に詰め込まれた情報に閉口していたらやはり彼の首がズルリと落ちた。

あ……あ……

光が、視界を埋め尽くす。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

——走り出す。

全力で地を蹴って礼装を展開した。

先の二度はどちらも首を狙われていた。

そこだけガードすれば一撃目は防げるだろ——

光が身体を貫いた。

幾条もの光が全身を消し飛ばす——

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

いやそりやそうだわ。

大して信用も出来ないやつが武器出して迫ってきたらそりや殺される。

当たり前過ぎる……だというのに気づけなかったとか……

焦りすぎるな、と己に言い聞かせて強く叫んだ。

——逃げろ！

ただそれだけを叫んで、しかし彼ははあ？ と表情を顰めた。

瞬間、玉座は闇夜に包まれた。

さつきとは違う——いや、怯むな。

間に合え、間に合え、間に合え。

しかし祈りは届かず、オジマンディアスの首は綺麗に斬り落とされて、次いで光が全てを埋め尽くした。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

……ど、どうするべきなんだこれ……

憂さ晴らしなのか、見られていたのが癪だったのか、それとも暗殺者の仲間だと思われたのか。

確かな理由は察せないがオジマンディアスが殺られるところをただ見ていれば殺される。

だが殺されないように行動しても結局彼に殺される。

思いの外詰みでは……？

——敵だ！

そう叫んでグツと力を込めた。

オジマンディアスが不審な目で俺を見て、そして——

——そして、夜が来る。

光り輝く神殿内を真闇に染めて、死神は現れた。

怯えるな、震えるな、臆するな。

常に首元に刃を感じる程の殺気、いや、既に首が落ちてしていると錯覚するほどの殺気を飲み込んで駆け出した。

右から左へ、平行の一撃。

防げ無いことはないはずだ。

礼装も魔術もフルで展開して最短最速で玉座まで走り抜ける。

赤い2つの光がゆらりと靡き、同時に刀を王座に突き立てた。

剣が振り抜かれる寸前、光が飛び出した。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

あの王様反射で攻撃しまくるのやめろよお！

俺ごと撃退しようとするのよくない……

顔を顰めるオジマンディアスへと全身全霊で駆け出して、同時に闇夜が全てを包み隠した。

防ぐのは不可能——なら無理矢理にでも躲させる。  
今ここでオジマンディアスを失うわけにはいかないのだ。

赤い光が揺れ動き、同時にオジマンディアスの首を掴み強烈な拳が腹にねじ込まれた。

衝撃に眼の前が明るくなって、血が吐き出す。

それでも掴んだ手をそのまま引き寄せて、同時に剣が走る。

——血と光が、全てを覆う。

どうして、という表情で俺を見るライダーさんより更に一步踏み出た。

うん、これ無理（ガチ）。

俺では守れない、かといってライダーさん達では一瞬反応が遅れてしまう。

そしてその一瞬でオジマンディアスの首が落ちるのだ。

そこまで考えて、ふと思った。

俺が撃退する必要無くない……？

オジマンディアスは気づくことすら出来ず首を断たれていた。

だからこそ気づかせようと、気づかせられないなら助けないと躍りになったがそうではない。

気づかせなくても良い、ただ反撃させられればそれで良いのだ。

まあ、何だ。

つまりはタイミングを見計らえ、ということである。

——聞けよ太陽王、俺には、何度死んでもやり遂げる覚悟がある、自信がある、力がある。

力を貸せ、びびってんじゃねえよ。

——瞬間莫大な極光が迸り、闇夜とともに現れたそれを問答無用で弾き飛ばした。

オジマンディアスが目を見開いてそいつを見る。

二本の大きな角をあしらった髑髏の仮面を被り、髑髏の甲冑を身に纏った巨大な戦士。



身の丈程の剣を両手に持ち、二、三步程後ずさつてからするりと動き出した。

——首だ！ 頭を下げる！

反射的にオジマンディアスが動き出す、放たれた斬撃は確かに彼の身体に傷をつけたが致命傷には至らなかった。

はじき出すように飛び出たオジマンディアスの加勢をするようにサー・ケイと俵藤太が飛び出して、前に出ようとする俺をライダーさんが引つ張った。

すつこんでろつてことですねごめんなさい……

頭を冷やししながら横を見れば、あのオジマンディアスが薄っすらと汗を流す。

それを見てやはりあの戦士はオジマンディアスよりずっと格上であることを悟った。

きつと、ここにいる全員でかかっても敵わない。

痛みと重圧で呼吸が浅くなる、それでも力を込めて立ち上がる。

こんなところで終わるわけにはいかない、怖がるな、恐れるな、前を向け。

真つ赤に光る両の眼を見据えてどれだけ経っただろうか、ほんの数瞬だったかもしれないし、けれども何時間だったかのようにも感じられた。

——天命が——そいつはそう何かを呟いて、元からそこには何も無かったかのように霧散した。

……た、助かった……？ ……上手くいった、やってみせた！

押し掛かっていた重圧が消えて、緊張感と入れ替わりに安堵が全身を満たし、少し遅れて意識は暗転した。

——目を覚ます。

ふわりとした感触が気持ちよくなって、何度か寝たまま転がってからハッと飛び起きた。

ここは何処だ？ あれからどうなった？

目まぐるしく駆け回る疑問を上手くアウトプットできず暫く呆け

た顔でいればガチャリと扉が開き、そこからライダーさんが現れた。  
お、ライダーさん丁度良かった。

ここはどk——  
飛びつかれた。

ついでにペタペタとあちこちを触られ大丈夫かどうかを何度も確認される。

……心配性が過ぎないだろうか……

そうは思ったが正直心配されて悪い気もしなければむしろ心配させてしまつて申し訳無いという気持ちの方が先にくる。

ご、ごめんねえ……と謝つていれば鈴鹿にカーミラ、俵藤太にサー・ケイと続々と部屋にサーヴァントたちが戻ってくる。

いや、一気に入つてきすぎじゃね？

まあ察してはいたと言うかなんというか、取り敢えずここはオジマンディアスの神殿内であつた。

わちやわちやと身体を触られ心配されながらも事情を聞き出していく。

どうも丸々5日間ぶつ倒れていたらしい、道理で身体がすつきりしている訳だぜ……

因みに俺がぶつ倒れた後オジマンディアスは俺の頑張りを讃えて一室与えてくれたとかなんとか。

やっぱり懐が深いやつは違うな……とツカフカのベッドを押しながら立ち上がる。

じゃあ行こうか。

どこへかつてお前……そりゃ勿論オジマンディアスのところだろうよ。

お礼とか話とか、多分しなくちゃいけないから……

玉座へ向かえば見張りの兵はどうぞどうぞと道を開けてくれる。

何か……ちよつと気分が良いな……なんて思いながら扉を開き、金に染められた玉座へ足を踏み入れる。

前回はいなかった褐色の女に頭を下げながら真ん中まで行けば定位置に座つたオジマンディアスから声が降ってくる。

まあぎつくりとまとめてしまえば大儀であつたな！　さんきゅみみたいな感じだった。

もつと厳かで語彙豊かな台詞ではあつたが脳内ではそう変換されてしまう自分を恨みながら、それで何だが、と話を切り出す。

協力はしてくれんの？　と。

直後、褐色の女が不敬です!?　と叫んだが知ったことではない。

ここで協力を取り付けられるか否か、死活問題なのである。

オジマンディアスは今度は笑いもせず、目を細めて俺を見て言った。

——余は余の権限で民を救うまで、それ以外のことなど知りはせぬ、と。

……………絶句である。

こいつここまでさせておいてそんなこと言うの……………？

いや俺が勝手にしただけでも言えるんだけどさあ……………！

それでも何でこの人ほどの実力者がそう簡単に逃げに走ってしまったのか、それがわからなかった。

円卓も十字軍も、魔術王も全て強力で強大で、規格外かもしれない、それは認める。

だとしても、これだけ尊大で、強大な力を持ち、聖杯すら所持している彼が、どうしてこんなところで逃げ腰になるのか。

——どうせ逃げるくらいなら力を貸せよ、俺が全部救ってやるから、民も砂漠も時代も世界も、何もかも！

俺に託してみせろよ、お前の首すら守った俺を、今この時だけで良い、信じてみせろ、お前の前にいるこの俺は、世界を救うべくしてやってきた人間だ！

気づけば叫んでいた、そんな俺の言葉を最後まで聞き取ってその上で彼は笑って言ったのだ。

ではその証拠を見せてみる、と。

お前がこの世界を、時代を救えるという証拠をもってこいと。

——この時俺は初めて理解した、この人は既に俺を見下し十把一絡げとしては見ていなかったということ。

今まさに、彼は俺を測っていたのだ。

少しの沈黙の後に分かったと、そう答えて頭を回す。

次の目的は既に決まっていた。

先程の暗殺者の打倒、もしくは協力の取り付け。

これさえ出来れば彼の王も力を貸さざるを得ないのは確かだったからだ。

あれの実力は獅子王、オジマンディアス、十字軍を見た上で言わせてもらうがその全てを凌駕していたのだ。

であればそれを倒すか協力さえできればこの時代は救えたも同然と言えた。

と言ってもあの暗殺者は正しく神域の達人だった。

敵対すれば間違いなく勝ち目は無いだろう。

つまり今の所協力してもらうしか道はないのだ。

でもそもそもあれって誰なんだろう、と思い聞けば返答は二トクリスから返ってきた。

あれは恐らく北の山にいるハサン・サツバーハ、その一人でしょう、と。

RPGばりに目的地が転々としやがるな、そろそろ本来の目的忘れちやうよ？

そんなことを考えながらスフィンクスに跨がり風を切る。

一先ずハサン達に話をつけに行くことにしたのだ、俺達は。

というのもハサン・サツバーハという英霊とはたくさんいるのだ。

つまり代々ハサン、という名前を引き継いだ暗殺者達が存在しているということである。

その内の一人であることは確かであろうとオジマンディアスからもお墨付きを貰ったのだから疑う余地は無い。

とりあえずハサンの内の誰かに話をつけることが出来れば自ずとさっきのやばいハサンにも出会えるだろうという安易な考えである。

まあ仮に出会えたとしてもそこからどうするかは全く考えてはいない——というわけでもなかったりするのだ。

といったもちよつとしたことではあるのだが。

先程の戦闘についてである。

クソ強かったとかは置いておいて、引つかかったのは彼の引きの良さである。

ループ前では彼は首を断ち、それで尚生きているオジマンディアスを見た上でトドメを刺すことはなかったのだ。

それで今回は俺たちが一撃防いだだけで撤退。

何かしらの意図が存在していたのは傍目から見ても確かだった。

それが取っ掛かりになってくれれば御の字である。

まあどちらにせよ協力してもらうしか無いわけだし、上手く行けば良いなあと思いつつ行ってくるわ、と言えば彼らは気前良くスフィンクスを貸してくれた。

あれだけ大見得切っておいて貸してくれとか何かダサイ……：……とい  
うかオジマンディアスも良くキレなかったなとは思いますがまあラツ  
キーだった、そう思おう。

にしても気前よく貸してくれのは良いけど滅茶苦茶目立つなこれ  
……

見つかったら面倒なんだけど……まあ良いかと思ったその時、声が  
聞こえた。

耳を澄ます。荒れた砂漠の中でも冷静に、どんな音でも聞き逃さぬ  
よう細心の注意を払って耳を澄ませた。

!?

微かに風に乗って聞こえてきたのは女性の声だった。

それを塗り潰すような戦闘音も聞こえてくることから戦っている  
のだと予想がついた。

向かうことを悩みはしなかった。弾かれるように声のする方に駆  
け出した。

この砂漠のど真ん中で誰かが何かと戦っている、それだけで理由は  
充分だった。

円卓なら叩き潰す、十字軍でも叩きのめす、どちらでもなければた  
だ助ける、それだけだ。

まあでも野良のサーヴァントとかだったら良いなあ、そう思いなが

ら俺たちは砂塵を突き抜けた。

——いやああああ！ もう来ないでよ！ お願いあつち行ってもうやだ誰かたすけてえええええ!!!

一人の女性が砂漠のど真ん中で化物の群れと追いかけてっこをしていた。

といっても時折ドンツと重い一撃をかまして群れごと吹き飛ばしてはいる。

……………悲鳴を上げている割には思いの外余裕なのは……………？

正直面倒そうな予感しかなくて関わりたくないんですけど……………でもここでスルーするのもな、と思いついてから藤太とサー・ケイ、それから鈴鹿に声を掛ける。

さて、一気に片付けようか。

殲滅とも言えるそれは、殊の外抵抗されたがやはりあっさりと終わった。

露と消えていく奴らを踏み越えながら酷く号泣している女性へと声をかければ彼女は涙を止め処無く流しながらこちらを仰ぎ見た。

——ふと、ドクンと心臓が高鳴った。

この砂漠の上でも艶やかさを失わない鳥の濡れ羽色の髪に純白の肌、クリアな紅い眼差しはまるで寶石のようで、一瞬息が止まった。

ドスツと割と重めな一撃が脇腹に入り意識が戻る。

ライダーさん何で殴った……………!!?

人に見惚れたのは何時以来だろうか、鈍く響く痛み顔に顔を顰めながら名前を聞けば彼女はこう答えた。

——玄奘三蔵。

……………!!?

玄奘三蔵——つまり三蔵法師。

勉強するまでもなく知っている、それほどまでの大偉人。

国禁を破り、死の道とすら呼ばれたシルクロードを突っ切りインドから經典を持ち帰った偉人。

世界というスケールで見ても彼——彼女を知らないものはまずいないだろう。

でもまさか……こんな鼻水と涙で顔面くっしやくしやにしたこの人が三蔵法師とかそんなことある？　？　？

嘘だと言ってくれないだろうか、割と真剣にそう願ったが彼女は訂正する様子もなくお礼を述べながら涙を拭っていた。

現実とは無情、はつきり分かんだね……

取り敢えず手で拭うのはよくない、とハンカチを取り出し久々の女子力アピールをしたその時だった。

——咆哮が、全てを揺るがす。

漆黒の鱗に砂漠の熱気すら上塗りする火気。

チロリと口から溢れた炎はそれだけで己を焦がし尽くすものだと察することが出来た。

——ていうか——お前——フランスの——!?

突然現れたそれは正しくフランスで見た邪龍、ファブニールそのものだった。

死の記憶がフラッシュバックする、燃える記憶は微かに身体を震わせる。

何でこんなところに——？　と震えた声で呟けば、隣にいた三蔵がさつき召喚失敗して出てきた挙げ句襲いかかってきたやつ——!?

と叫んだ。

この人もしやトラブルメーカーなのでは？　そう思うと同時にそれは大きく炎を吐き出した。

瞬間、身体がグンと引かれて視界がブレる。

炎が大地を舐め尽くして行くより早く身体は後ろに下がり、すれ違うようにライダーさんが飛び立った。

遙か上空から、星のごとき一撃が叩き込まれる。

炎を吐き出し続けていた巨大な口は強制的に閉ざされて、行き場を失った炎が体内で爆発を起こした。

二度、三度と身体は大きく震え、やがて牙の隙間から黒煙が漏れ出しグラリとファブニールは態勢を崩した。

それに合わせるように弓はしなり、矢は放たれる。

正確無比かつ強力なその一射は誤ること無く脳天へズプリと突き

立って、グルリと眼球を裏返したファブニールは失墜した。

ドシンと激しい衝撃と共に落下してきたそれは、やがて霞へと姿を変える。

前回と違って何をするまでもなく倒されたそれが、何だか酷く哀れに見えた。

事情を話せばあっさり協力してくれることになったお師匠——何故か三蔵法師から弟子にしてあげるわ！ 今度からはお師匠様と呼びなさい！ と言われた——がスフィンクスの上ではしゃいで落ちそうになるのを必死で掴んだりしている内に俺達は砂漠を抜けた。

大地が死んでいるのではと錯覚してしまうほどの荒れ地に降り立ち、俺たちは一先ず北へと向かう。

褐色の女——ニトクリスから大体の事情は聞いていたからだ。

西には砂漠が広がっており、東には聖地エルサレム——つまり十字軍と現地の人々がぶつかり合い、円卓の騎士たちが召喚された場所がある。

現地の人々はつい最近十字軍に破れ、聖地を奪われたが少なくとも皆殺しにはならず逃げたものも多いとのことだ。

それはつまりポツと出の十字軍と違い大きな拠点があるということだ。

はつきりと確認できたわけではないがまあ北の山脈でしょう、という彼女の言葉に従い進んでいるわけである。

砂漠を抜けてもかまうこと無くスフィンクスに跨がりグングンと進む、見つかる可能性は低いと見積もつての行動だ。

俺の予想通りであるならば、今頃円卓の騎士と十字軍は聖地でぶつかり合っている頃だからである。

つい先日俺たちは聖地付近で円卓から命からがら逃げ出し、そうして聖地に向かう十字軍からも逃げたのだ。

まさかほんの一日二日程度であれだけ人数と強者達の戦いが終わることはないだろう。

今はまだ、ある程度目立っても目につくことはない。

そう踏んでの行動だ、といっても山の近くまで来たら流石に降りな



ければならないが。

初見でエジプト側のやつ、侵攻しに来たか!? とか思われても洒落にならない……いや、逆か?

むしろ攻撃された方が話は早いのでは? 見つけれないのであれば見つけてもらえば良い、逆転の発想である。

何か無茶苦茶頭悪い気がするが、これ以外ではこの辺で現地の人を見つけて誘導してもらおうくらいしか無いのだ。

死体ならあちらこちらに落ちているが未だに現地の生存者を見たことが無いので今の所はあまりいい案とは思えない。

なるはやで頼むぞ……! とスフィンクスに語りかけながら俺たちは風を切った。

因みにハサンつてのは複数いるらしい、皆ハサンとか頭がこんがらないのだろうか。

スフィンクスに乗りながらわざとらしく山をグルリと見回してみても拠点らしきものは見つからなかったし、攻撃されることもなかった。

明らかにこちらには気づいているだろう、しかし見つからないという絶対の自信があるのだろう、事実、それは当たっている。

どうしようかなーと思っていれば鈴鹿が提案が有る、と口を開いた。

スフィンクスに乗ってるんだし、エジプトの名前を借りてしまおう、と彼女は言った。

………ああ、なるほど。

そうか、その手もあったか、と思うと同時に首を傾げる。

え、どうやって?

魔術の一つでも使えば良いだろう、馬鹿か、という罵倒をサー・ケイから言われてハツとする。

そうだよ魔術が有るじゃねえか!

ゆっくりと適当なところに降り立ってもらい、手をメガホンのように口に当てて魔術を発動した。

拡声魔術、ここに來て俺の努力の成果を見せるときが来るなんてな

……やはり何事も日々の積み重ねが大事なんだってことですね……  
エジプトの使いの者である、話をしに来た、とドストレートに、かつ大音量で山々へ響かせながら進んでいく。

反応が無かろうが関係ない、何なら夜中でもこの声を響かせ続けてやるぜ、とはた迷惑なことを考えていれば不意にライダーさんが獲物を閃かせた。

キン、軽いものが弾かれる金属音。

乱回転して黒いナイフが地を転がった。

次いでどこからか響いてくる謎の声。

——釣れた。

響いてくる音の出処はまるで掴めなかった。

どこからもしていないようにも思えるし、どこからでもしているようにも思える。

だが少なくとも敵意よりは不信感や疑問が勝っていることがわかった時点で第一関門は突破といったところである。

最初から敵意マシマシだとやりづらいなんでレベルではないのだ。

何用か、と響く声に繰り返すようにエジプトの使いであり、同盟を結びに来たと返す。

重ねるように不利益は無いと思うが、と伝えれば暫くの沈黙が辺りを包んだ。

何のために？ 手を組む理由が無い、と響く声。

理由はある、俺達はほんの少しでも力を、知恵を必要としているからだ。

何故なら俺たちは——この時代を、救いに来たから。

最後の言葉に何を思ったのか、声の主は動揺したような声を漏らしたがやはり信用がならないと返した。

ですよー、と思ったがここで引いたら後が無い。

仕方ない、取っておきの秘策を出すか……

深呼吸してから声を張り上げる。

——俺達と手を組めば、毎日腹一杯になるまで飯を提供しよう、何なら今すぐにでもだ！

——はあ？

そう漏れた声にすかさずパチンと指を鳴らす。  
不意に笑った俵藤太が任せておけ、と魔力を練り上げて、大きく叫ぶ。

美味しいお米がドーン！ ドーン！

瞬間、綺羅びやかなお米が俵から吹き出、多くの人の声、ついで声の主の非常に動揺した声が響いた。

これは——勝ったな……

まあそもそもエジプトと山の民側の間にはそれほどの軋轢は無かった。

互いに無干渉だったとも言える。

これがもう少し情勢が進み戦闘等が激烈化していれば話は別だったかもしれないが今回はそうとはならなかった。

早い段階で動き出せたのはラッキーだったな、と思いつつ木陰から姿を現した呪腕のハサンと名乗る男の後を米俵を担ぎながら村へと入っていく。

上から見ても全く視界に入らなかったというのに村はそれなりの規模を誇っていた。

いやめつちやでかいな……何故見つからなかったのか……

唸っていればハツハツハ、と笑って呪腕のハサンが我々は隠れることに秀でていますからなあと自慢気に言い張る。

まあアサンだし当然か、と思い進んでいけば肌の焼けた好青年にはじめまして、よろしくな！ と握手される。

ええ……めつちやフレンドリーなんですけど誰ですか、そう問えば彼はこう答えた。

サーヴァント・アーチャー、アーラシュ・カマンガーだ、と。

………は？

俺は思わず米俵を地面に落とした。

アーラシュ・カマンガー。

英語表記すれば“アーラシュ・ザ・アーチャー”

西アジアに於いて弓兵とはすなわち彼こそを指し示す。

知っている人は案外少ないかもしれないが、彼こそは古代ペルシャにおける伝説の大英雄であり、六十年にわたって続いたペルシャ・トウルク間の戦争を一矢で終わらせた救世の勇者だ。

そう、たった一矢、されどそれは究極の一矢であった。

その一矢は大地を割り、両国に国境を作り、本人は引き換えに五体を四散した。

正しく大英雄、大英傑。

興奮より先に畏れが来るほどで、軽くどもっていたら快活に笑われて、そう緊張しなさんな！ と肩を叩かれる。

接しやすいタイプでよかった、と手を握り返しながら米を置いていく。

村人たちもぞろぞろと集まってきたところだし折角だ、宴にしようぜ、と誰かがそういった。

そう言えば俵藤太も笑い、またも宝具を開放した。

おにぎりを頬張りながら呪腕のハサンの対面に腰掛ける。

隣にライダーさんが座るのを確認して口を開いた。

——すまん、ぶつちやけ嘘ついた、俺達はエジプトの使いではない。

瞬間、呪腕のハサンの腕がピクリと動き、しかし努めて冷静に詳しく聞いても？ と低い声で唸るようにそういった。

素直に助かった、とそう思った。

彼が冷静な人物であってよかった、ほっと一息つきながら事情を説明していく。

といってもカルデアのこととこっちに來てからの流れを話してくだけなのだが。

途中から参加したアーラシュにも分かるように、話をすればするほど呪腕のハサンからの殺気はスルスルと引いていった。

しかしオジマンディアスの首を狙いに來た暗殺者の話で、彼の雰囲気はガラリと変わった。

何か分かるか？ と聞けば彼はそれは恐らく初代様でしょう、と答えた。

初代……初代ハサン？ 何かすごかったりするの……？

疑問を浮かべればそれはもう、と食い気味に彼は答えた。

歴代ハサンの中でも初代様だけは圧倒的であり、絶対的な存在である。

齒向かおうなど愚行の極みでも有ると。

やっぱり？ 明らかに強者オーラ放つてたもんねあれ……

まあでもそれなら尚更話をしにいきなきやなくなつたな。

それだけの力を持っていてあそこで引いたのはやはりおかしい。

俺たちごと仕留められた筈なのだ。

呪腕のハサンは次いで、初代様は天命を司るとも言った。

初代ハサンにとってサーヴァントも人も総てが平等の存在であり、彼の刃の前では一つの命に過ぎないのだと。

自らの力で殺すのではなく、彼に相對したものは自らの運命に殺されるのだとか。

……何かよくわかんないな……？

俺たちがいない時点の運命ではオジマンディアスの首は落とされていて、俺達が介入したことにより運命が変わつたとか……？

そこまで考えたが途中で意味不明になつたのでやはり直接話すべきだな、とうんうんと頷きながら道案内を頼めないかと聞いてみる。

サー・ケイの話が本当であれば、円卓が勝とうが、十字軍が勝とうがこの時代に未来は無い。

これ以上人々を苦しめる訳にはいかない、早々に蹴りはつけるべきだ。

あんた達だけじゃ戦力不足だろうし、そう思わないか？

そう問えば彼はほんの少しだけ悩む素振りを見せてから任せてほしいと承諾して握手を求めてきた。

差し出された左手は、微かに震えていた。

翌日、早速行くこうと思つたところで呪腕のハサンに待ったをかけた。

ハサンというのサーヴァントは数多くいるらしく、今日はそれらの会合があるからその後にしてほしいとのことだった。

まあどちらにせよ山の民と協力するのであれば全てのハサンに許

可を取ってもらわねばなりませんしな、と笑う呪腕にじやあ仕方ないな、と笑みを返す。

正直誤算ではあったがそれは嬉しい誤算だった。

思っていたよりも広い村ではあったが、戦力としては乏しすぎると思っていたが、他にも複数村があり、呪腕のようなサーヴァント達がいるのであれば話は別だ。

戦力としても大いに期待できるというものだ。

……まあそれも俺が信用を買いえるかどうかなのだが。

何とか上手く行けば良いなあと思いつながら村の集会場へと足を運んだのであった。

ハサンと名乗る暗殺者達は呪腕を除いて合計五人いた。

思っていたよりも多いな、というのが素直な感想である。

所感でも広いとすら思った村がこの山に後五つあるということなのだから。

当然では有るが、彼ら彼女らから歓迎の意は伝わって来ない、というか誰だてめえ……みたいな殺伐とした雰囲気すら感じる。

呪腕の方から俺達の説明をしてもらい、取り敢えず殺気は収められたが、百貌のハサンと名乗った女性はさらりと信用ならないな、と吐き捨てた。

ですよねー……という感想しか出てこないがそれはそれ、え、ちよっと信用してくださいよおとか言ったら尚更信用ならんわと他のハサンにすら言われてしまった。

確かに今のは軽率すぎたな……と反省しながら懐から一枚、書類を取り出して前に出す。

セルフギアス・スクロール  
自己強制証明。

魔術師の世界においても最も容赦の無い呪術契約の一つであり、これを以て結ばれた契約を破った場合契約者を死に至らしめる呪いが強制的に掛けられるとかいうイカれたアイテムである。

ただしその効果は裏返せば絶大な信用になる。

だからこそ此処でこれを使う、制限は掛けられるが何、元より裏切るつもりが無いので心配はいらないってもんである。

俺は山の民を対象とした殺害、傷害の意図、及び行為をこの時代に於いて禁則とする、みたいな文を書き連ねこれでどうだと見せつける。

俺はあんたらの信用を買うために命を張る、人理の救済を使命とした俺がそれをするにどれだけの意味が込められているのか、どうか分かって欲しいと頭を下げた。

沈黙が降りる、何時間にも感じられたそれは分かった、分かったもう良い頭を上げろ、という女性の声で破られた。

本当に良いの……？ と恐る恐る頭を上げれば私も問題ない、俺も、私もと賛同の意見が湧いてくる。

やったぜ、と内心思い、それを顔に出さないように努力していたがそれはある一言で破られた。

——我々と闘いその力を見せてもらえたならばな、と。

………んん!?

さあということが始まりましたハサン、s対カルデア一派。

殺す殺されるつもりでやってほしいけど実際そうしちやったら不味いから峰打ち程度でやってね、とかいう中々難しい条件の闘いが今始まるうとしています。

……いや本当勘弁してくださいなんだけどなあ……と遠い目をしていたら頑張れよ、といい笑顔でアーラシユに言われてしまった。

頑張るけどさあ……！ 頑張ってもらうけどさあ……！

何で……何で闘いな……サーヴァントは皆血の気が多すぎるよう……

嫌だなあとため息を吐きながら六人のハサンと相對するように立ち並ぶ。

こちらの戦力としてはライダーさんにカメラ、鈴鹿に堅苦しい呼び方やめてー！ と迫ってきた三蔵、つい先日フルネームで呼ぶのを止めろと言ってきた藤太、いい加減サーとか付けなくて言いわとてくれたケイである。

ぶっちゃけ純粋な戦闘力であればこちらの方が圧倒的に有利を取っていた。

後は連携、俺の指示にかかっているということだ。

といつてもまあ、全員が全員歴戦の猛者なことからちよつとしたフオロー程度にはなるが。

他には俺自身が狙われても数秒保たせられるよう準備しておく、くらいのものである。

礼装を展開しながら彼らの後ろに下がる、アークシユが投げたコインが地に落ちるのを合図に全員が鋭く動き始めた。

勝敗はあっさりと決した。

言わずもがな、こちらの勝利である。

勝利ではあるが——そもそも考えても見れば彼らは全員暗殺者……つまりアサシンなのである。

クラス上最も正面からの闘いを苦手とするクラスだ。

何度か接近されてヒヤリとはしたが概念礼装や魔術礼装に助けられながらやり過ぎることが出来たし、実際「殺す」ということに特化している存在にこの形式の闘いは何から何までこちらの有利だったということだ。

その上でいやあ参った参った、だったり和やかな感想を口にしていくハサン達を見て、あれ？　この人達実は滅茶苦茶お人好しなのではない？　と思わざるを得なかった。

表向きだけのような闘いを終え、一応という形で契約を結んだ俺達は晴れて彼ら山の民と協力関係を結ぶことに成功した。

静謐のハサン、百貌のハサン、煙酔のハサン、震管のハサン、影剥のハサン。

全員の自己紹介をしあつた後に、これからどう動くのかという会議を始める。

取り敢えず第一目標としては初代様とやらに会いたいんだが、と言えば場が凍りついたがまあそれはそれ。

え、ちよ、マジ……？　みたいな空気が流れたが最終的には呪腕の他に一人——煙酔のハサンが案内をすることになり、それからの話は戻ってきてからということになって会議は一旦の終りを迎えた。



翌日、村の周りの化物共を軽く一掃した後、俺達は村の守りをアラシユとカーミラに任せて初代ハサンの元へと向かった。

往復で丸二日かかるという初代ハサンが住まう場所——名をアズライールの廟といった。

ひええ……と思わず声が出てしまいそうになるような深い谷に落ちていかないよう、細い谷をそろりと渡りながら丸一日。

俺達は巨大な寺院にたどり着いていた。

敵がいるような感じもせず、魔力の有無も感知できず、だけれどもただただ深い恐怖がそこに渦巻いていた。

全身の震えが、抑えようとしても止まらない。

全身が、全霊がここから逃げろと叫んでいた。

瞬間、音が聞こえた。ヒュルリと風が渦巻く音。

気づけば俺達の前には”死”があった。

”死”そのものとするら思える実態のない、魔力のような、煙のような”何か”がそこにいた。

呼吸が浅くなる、もう既に死んでいるのでは、と錯覚してしまいそうな程の濃密な殺気に気が狂いそうになる。

震える足をグツと握れば俺を安心させるようにお師匠とライダーさんが肩を掴む。

俺の後ろでハサン達がひれ伏し、煙——初代ハサンが声を発した。

汝らの声は届いていた、この時代、この時、この一瞬における汝の意志は認めている、と。

だけどこの廟に入る人間は皆死ななきやいけないから、死者として戦って生をもぎ取れ、と。

いや意味不明なんだけど……もうちょっと分かりやすく……と思っていたら煙酔のハサンが初代ハサンに呼ばれて祭祀を委ねるとだけ告げて姿を消した。

否、煙酔のハサンに乗り移った。

煙酔の翁の首とお前たち、天秤はどちらかを召し上げる、彼はそういった。

つまりそれって煙酔のハサンを——？

いや自己強制証明うううう！　と思っていたら気にするなと軽い感じで言われた。

それは無理なのでは……？

そう言う前に、煙——否、初代ハサンはその身を翻した。

煙酔in初代は間を縫うように、眼前へと迫り黒の短刀を振りかぶった。

反射でそれを片手で受け止めて、同時に拳を振りかぶる。

当然のように魔力を込めていたそれは白い髑髏を模した仮面に突き刺さり、派手な音ともに吹き飛ばしてしまった。

瞬間、やべえと思った。

脊髓反射で反撃しちゃったんですけどおー!?

ど、どどどどどうしよう……受け止めた左手から血が溢れててクソ痛いしこの後更なる痛み（不可避）が襲いかかってくるとか鬱なんですけど……

ひえええ……と身体を震わせていること実に数秒、俺の身体に変化は訪れなかった。

痛みどころか痒みも無いのである、一体どういうことなのだろうか、ライダーさんと刃を交えている煙酔を見ながら思う。

……まああの初代とやらが何かしたのであろう、さっきの気にするなっていうのも実のところ（俺が何とかしたから）気にするな、の意かもしれないし。

少なくとも何かしらの細工がされたに違いないのは確かだったので、気にすること無く煙酔を殺すなよ！　とだけ叫んで礼装を起動した。

煙酔in初代ハサンは元の煙酔とは考えられない程の拳動で戦闘を繰り広げた。

恐らく元の煙酔には到底不可能な動きで、そうする度に煙酔の身体は悲鳴をあげているようにも見えた。

まあそれを複数で袋叩きにしたわけだが。

結局中身の初代ハサンがどれだけ強かろうとも身体が煙酔の時点で、今の煙酔に出せる限界までしか出ないわけである。

それはそれで厄介ではあったが、多少苦勞したというだけであつさり屈服することには成功した。

頼むから殺すなよ！ 頼むぞ!? と叫んでいたお蔭でボロ雑巾の如しではあるが煙酔はその靈基を保っていた。

生きていればそれで良しである、回復ならカルデアから持ってきたスクロールがあるから……と治癒を掛けていく。

すると煙酔の身体から抜け出てきたそれが生をもぎ取れとは言つたけどさあ……普通片方だけじゃん……両方とか気が多いわ……まあでも良いや、許す！ と彼は実態を露わにした。

煙が人の形を象つて、神殿内で見たあの時の姿が造り上げられる。

——よくぞ我が廟に参つた。山の翁ハサン・サツバーハである。

以前のときほどの威圧感を感じなかつた、いや、恐らく彼が意図的にそれを抑えているのだろう。

二歩前に出て、頭を下げる。

——どうか力を貸してほしい、今のままではこの時代の修正はまず不可能、ほんの一時でいい、貴方の力をお借りできないか。

仮面のその奥の表情は読み取れなかつたが、彼はしばらく黙つてから言葉を発した。

曰く、天命を変える者、狙いは獅子王の首、これに間違いはないかと。

天命を変える者つてなんだ……俺のこと？ 俺のことなの……？

聞き返せば、左様、と当然のように返されるので黙り込み、口を開く。

俺の狙いは飽くまで特異点の修復、そうすることでこの時代が修復されるのであればその通りだ。

確かに何故人であるアーサー王が神になつていいのか、人を護りたいと言っているのにこの時代を滅ぼすようなやり方をしているのか、それは正直分からない。

何か複雑な理由があるかもしれない、酷く大切な何かがあるのかもしれない。

だから取り敢えず話がしたい、その神様と話をしてそれから、それから——やっぱり獅子王を、殺すと思う、殺せるまで、繰り返し返すと思う。

だって俺は、”この世界”を救わなければならぬから。

俺の答えに彼は無言で頷いて、では、と言葉を続けた。

お前はもう少し識るべきである、と。

人理の綻び、そしてその始まり、これが叶った時、我は戦場に現れよう。

——天命を告げる剣として。

……何を調べればそれ分かるんでしょうか……そう問えば彼は砂漠の中に異界あり、と答えた。

太陽王ですら手の届かぬ領域に、汝らに必要な知識はある。

砂に埋もれし知識の蔵が、そこに眠っている、と。

では呪腕の翁、首を出せ、と初代ハサンはそう言った。

………いやちよつと待って？ 何いきなりどうしたの？

どうやったらそんな流れるように処刑ムーブに入れるの？

呪腕も当然のように首を出すから一瞬反応が遅れたんですけど

……

全身でストップを掛けにいった俺に初代は言った。

——我が面は翁の死、我が剣は翁の裁き。

山の翁が濃み、墮落し、道を違えた時、我はその前に現れる。

どの時代のハサンも、最後には我を見ている。

我が面をみたものこそ真の翁であり、時代のハサンに救いを求める

ということ己に翁である資格が無いと宣言するに等しい。

翁の面を剥奪するのだ。

いやそんな当然ですよ？ みたいなトーンで言われても困るんですけど……

すけど……

ていうか何？ 呪腕も分かかってて自ら道案内請け負ってくれたの

？

そういうことは先に言っておいてくれないと困るんですけど、情報共有ちゃんとしてようや……

戦力はほんの少しでも失いたくないんだよ！ という俺の意志が前面に現れ呪腕に捲し立てたら初代が教えてなかったの……つて若干呆れていた。

お前は生前から諦観するのが早すぎる、と。

面をあげよ、既に恥を晒した貴様に上積みは許されない、責務を果たせ。

そう言つて彼は剣を仕舞い込んだ。

早く行けと、そう言つて。

血を垂れ流しっぱなしだった左手をグルグル包帯で巻きながら、いやあ全員無事で良かったねえ……と煙酔を背負いながら歩いていたら突然モスキート音が響いた。

要するにばかでない”キーン”とした音が両耳を鳴り貫いたのだ。

ぐおおお……!!? と叫ぶように唸つて倒れ込む、煙酔が背中を滑り落ちてグアツと声を上げた。

すまん……と思ひながら既に音の止んだ耳を抑えながら立ち上がるうとすれば今度は非常に聞き慣れた声が、無線機から聞こえてきた。

ど、ドクター！ やつつつつと繋がったのか！

きやつほう、とテンションを上げていればあちらも一安心、といったように息を吐き、しかしそこで違和感を感じた。

ダ・ヴィンチちゃんいなくね……？

どうしたの？ と聞けば彼はハハハと苦笑いしながらこう言った。

立香くん達と一緒にレイシフトをした、と。

——ええ？

それはつまり観測は安定した、ということだ。

てことは、何かしらの変化がこちらで起こったと考えると然るべきである。

ドクターとの回線を維持しながら立香くんたちへと回線を開けば、ダ・ヴィンチちゃんの声がいの一歩に飛び込んできた。

——大丈夫かい!? 怪我はない? ご飯はちゃんと食べてる? また無茶してないだろうねえ!?

………あんたは俺の親か何かなの？ そう思ったがこうも心配されると何だかむず痒い。

嬉しさと照れくささが、混じり曖昧な返答をすれば立香くとマシユの声が入り込む。

——先輩無事ですか!? 生きてる!? 現状は!?

うんうん、心配してくれるのは嬉しいけど取り敢えず落ち着こう、な？

ダ・ヴィンチちゃんと同じような言葉を繰り返す彼らに少し笑いなからそう言った。

彼らは正しく数分前にレイシフトしてきたばかりであった。

どこかと問えば砂漠の手前の荒野らしい、ということは西側か……そう思うと同時に閃いた。

さつき初代が言つてたところ、立香くん達に探してもらえば良くね………?

おいおい天才かよ、己の発想に震えが止まらねえぜ……

何とか探してみる、と元気のいい返事を貰ったことに気を楽にしなから、このタイミングで起こった何かしらの変化について考える。

ただただ偶然観測が安定しただけなのかもしれないが、俺には一ツ気になることがあったのだ。

即ち、それは円卓と十字軍との戦争。

あの勢いであれば俺達がレイシフトしてきたその日の内、または次の日にでもぶつかり合ったものだと考えていいだろう。

それからもう一週間は優に過ぎているのだ。

英霊と英霊との闘い、互いに籠城する場所も無い以上決着はついてもおかしくはないだろうと思うのだ。

それだけでも確認したいんだけどと言ってみれば、それがそのまま村に戻ってからの目的となった。

聖地での戦いの行く末、個人的には円卓が勝った気がするけど、どうなのだろうか。

ケイに聞けばさあな、と返ってきたがその眼は彼らの敗北をまるで疑ってはいなかった。

全体的に（主に俺と煙酔）疲れはあったようで、村に戻るまでに俺達は一日と半日を費やした。

この間に立香くん達は流石の優秀さで初代の言う知識の蔵とやらの場所に見当をつけていた。

知識の蔵——その正体は“アトラス院”だった。

その名をダ・ヴィンチちゃんから聞いた時、素直に聞かなかや良かった、とそう思ってしまったのを覚えている。

アトラス院——別名：巨人の穴蔵。

世界を七度滅ぼせる兵器を保持すると言われるイカれた魔術師集団である。

ええ……何でそんなもんが砂漠に埋まってるんだよ……意味不明だよ……何で？

そう聞いたが流石のダ・ヴィンチちゃんもそれは分からない、だから取り敢えず行ってくるね☆と言い残して回線を切った。

ドクターに聞けば、砂漠地帯は無線は繋がらないが未だバイタル等は安定しているのでまず問題ないだろうとのことだった。

まあ無事なら良いんですよ無事なら……でもなるべく早く出てきてね……

そんなところに行かせたことを後悔しながら村で休息を摂る。

出来れば早いところ出立したかったが、まずは休んで、それから計画を練って行動しなさい、とカーミラに怒られた結果である。

モソモソとご飯を食べて、寝っ転がってみれば、思いの外意識はすぐさま落ちた。

朝日の光が窓を通して突き刺さる。

まさかあのまま朝まで寝てしまうとは……眠気の残る身体を無理に起こせばお師匠がおはよう、と手を挙げる。

そろそろ御飯の時間だから呼びに来てあげたの、と言われ暫し呆けた後に身だしなみを整え小屋を出る。

皆でご飯を食べながら話し合えば、彼らは俺の寝ている内に既に情報を得ていた。

というのも、俺が爆睡している内にこの村に何人かの難民が逃げ込

んできたらしいのだ。

その人達曰く聖地での争いは終結したらしい、そして今聖地には巨大な白亜の城が立っているそうだ。

それを聞いて俺達はすぐさま察した。

その城——いや、その塔は間違いなくロンゴミニアドである、と。

やはり円卓が勝ち、そして獅子王は間違いなく計画を進め始めた。

一応煙酔と百貌が確認と、あわよくば立香くん達の回収をしに山を降りているらしいし行動を起こすならそっちの確認が取れてからかな、とそう思った時に回線が開いた。

立香くん達である。

結構アトラス院に居たみたいだし、話を聞こうか、そう言えば彼らはゆっくりと領き見てきたもの、知ってきたことを語り始めた。

アーサー王の最期について知っているものはそう多くもないだろう。

多大な伝説を残した偉人といえども、その最後はあっさり、また無残なものであった。

円卓の騎士モードレッド率いる叛乱軍によるブリテンの崩壊、最終決戦の地であったカムランの丘にて彼の王は相討ち気味に倒れた。

己がもう助からないと悟ったアーサー王は円卓の騎士であったベデイヴィエールにエクスカリバーを湖の乙女に返還するよう頼み、それが叶った時息を引き取り妖精郷アヴァロンに向かったとされている。

——だが、この時代ではそうではなかった。

理由は定かではないが、この時代の彼の王は死ぬことができず、アーサー王ではない”何か”へと変質してしまった。

それが獅子王の正体であると。

マジ……？ そんなことまで分かるの？ アトラス院すげえ……と唸ったがそこで思う。

え、それって倒せるもんなの……？

俺の言葉に沈黙が訪れ、え、何これやばくね？ と思ったその時沈黙は破られた。



——私にお任せください。

通信の先から聞き慣れない男の子の声がした。

銀の義手を持った長身の騎士。

は、お前誰？ 俺がそう言う前に後ろにいたケイが酷く驚いた声を上げた。

——サー・ベディヴィエール!?

………え、はあ？

聞けば立香くん達はスフィンクスと戦ってた際に彼に助けられたらしい。

それから一緒にアトラス院に入りここまで一緒にやってきたんだ、ね、ベディ、と立香くんは笑う。

こつちに来てほんの数日でそんな信頼できる仲間を作るとか相変わらずだな立香くん……と最早呆れたような眼を向ける。

ケイもサー・ベディヴィエールもどちらも何故貴方がここに？ といった様子なのでこれは一回会わせて話し合わせてほうが良いかもな、とそんな感想を抱きながら他に何かあった？ と聞けば彼らは勿論、と得た情報を語り始めた。

この時代の観測が中々上手くいかなかった原因である。

分かってしまったら何てことはない、一言で言うのであればこの特異点は既に手遅れになりかけていたから、それだけである。

この時代は既に元の時代から離れすぎていて、最早この世界にはどこにも存在しない場所になりつつあった。

以上である。

ゴリ押ししてでもレイシフトして結果的には正解だったな、と息を吐く。

ちようど良くハサン達が山を降りているから彼らの案内のもと村まで来て欲しい、と伝えハサン達が使用しているルートを記したマップを送る。

彼らがこつちに戻ってくるのにだって時間がかかる、といっても後一日もすれば辿り着くだろう。

そこで一度顔合わせしてから行動だな。

全員にそう伝え、村の周りの害獣駆除へと乗り出した。

後日、二人のハサンに連れられた立香くんたちと俺達は合流を果たした。

何か助けてきたとか言っただ量の人を連れてきたもんだからビツクリしたがまあそれはそれ。

ご飯的な意味でも受け入れは余裕であるし、そもそもこの合流の目的はどちらかと言えば円卓の騎士である二人の合流である。

立香くんの召喚している方のアーサー王とも出会うこととなり彼はギョツと目を見開いていたし、サー・ベディヴィエールも照れくさそうに眼を伏せていたがまあそれはそれ。

ケイは彼についてこう言ったのだ、サー・ベディヴィエールはあの時召喚されていなかった、と。

円卓の騎士でありながらあの場には居なかったサー・ベディヴィエール、それはつまり彼は獅子王の召喚に応えなかったということに他ならない。

だと言うのに何故この場に？ 何故今更？ といった疑問が浮かぶのは至極当然であった。

相對して、すぐにこの人は無茶をしているな、というのが分かった、分かってしまった。

取り繕ってはいるが顔色は悪く、足取りは確かなようでいて少しふらついている。

確認してみても確かに英霊ではあったので英霊でもこんなになるんだな、という感想を抱きながら彼らの会話を聞いていた。

彼……ベディヴィエールはケイに対しお久しぶりです、とまるで何事もなかったかのように、ただ旧友と再会したかのように言った。

ケイは挨拶を交わした後に不意をつくように銀の義手を掴みこれは何だと、そう聞いた。

そう、彼がサー・ベディヴィエールであれば腕が両方あるのはおかしいのだ。

円卓の騎士ベディヴィエールは隻腕でありながら他の騎士の三倍

の強さを誇ったと言われる騎士であるからだ。

彼はそれをヌアザの右腕であると言った、魔術師マーリンから託されたとも。

マーリンを好まないケイは嫌そうな顔をしてそうか、とそれ以上の追求をしなかった。

ヌアザの腕とかそんな軽い感じで渡されるもんなの……？ と思っただが特にその辺の掘り下げがなかったことからマーリンという存在が何でもありなんだろうなあ、という感想を抱く。

その先を聞かれなかったサー・ベディヴィエールの少し安心したような顔が、少し印象的だった。

何だかんだと話し合いを重ねれば動き出すのは翌日になっていた。

とりあえずこの村に待機するのが立香くん達、オジマンディアスのところへ向かうのが俺達、といったざっくりとした作戦ではあったが。

無事初代ハサンからの協力を取り付けた今、オジマンディアスも力を貸してくれるだろう。

その確認が取れたその時が、円卓を攻める時である。

だから正確にはただの待機ではなく戦闘準備、ついでに初代ハサンへの連絡。

各村から戦える人員を集めてもらい、全員で山を降りてきてもらい、それでオジマンディアスの協力の下一気に叩き潰す。

円卓と十字軍の戦いが終わってからまだ日は浅い、円卓もまだ迎撃体制が完全に整っているとは言えないだろう。

正しく好機、今此処で叩き潰すのが最善最良の選択だった。

山を降り、荒野を渡る。

その間俺は一度確認した円卓の戦力についてケイに聞き直していた。

サー・ガウエイン、サー・ランスロット、サー・トリスタン、サー・モードレッド、サー・ガレス、サー・アグラヴェイン。

円卓の騎士はこの六人に間違いない、と。

だが十字軍との戦いで誰か一人くらいは削れていてもおかしくは

ないだろうな、とも言った。

まあこの六人だけであれば正直、十字軍との戦いで良くても相討ちで全員消えていたであろう、だが獅子王は騎士を生み出せるらしいのだ。

それが無限かどうかまでは分からない、だが調査してきた百貌と煙酔曰く、英霊には届かないまでもそれに迫るほどの力は持っている。見て間違いないと、そう言っていた。

そんなやつらがポコポコいる所に襲撃かけるとか普通に考えれば却下である。

しかし今回ばかりは話が違う。

少なくとも同等程度の力は保有しているであろうオジマンディアスの助力があれば、その成功は現実味を帯びてくるのだ。

それに今は、初代ハサンの助力の約束も取り付けてある。

彼が課した条件は既にクリア済みだ、上手くことが進んでいければそろそろ――

そう思ったところで回線が開く、相手は立香くんで、内容はちょうど良くキングハサンの助力を確定してきたというものだった。

………ん？ キングハサン………？ いや何それ………？ そう尋ねれば彼は初代ハサンがなんて呼んでも良いっていうから………分かりやすいあだ名を………とそう言った。

この子恐れ知らずにも程がありすぎないしかもキングハサンって………いや分かるけど………！ 込めたい意味は伝わってくるけども………！

流石立香くん………俺の予想の斜め上をぶつちぎって生きていやがる………と笑いながら通信を切り、砂漠へと足を踏み入れた。

砂漠も砂嵐もすっかり慣れたもので、そこら辺を蔓延る化け物たちを薙ぎ払いながら神殿に向かっていく。

今回はハサン達の作成した地図を元に最短ルートを叩き出しているので迷うこと無くサクサクと進んでいった。

という訳で神殿である。

予測していたよりもずっと早く着いたがまあ好都合。

最早顔パスで神殿内に入れた俺達はそのまま兵士へと頭を下げつつ玉座へと歩を進めた。

見上げれば、当然ように彼はそこに居た。

視線を下げればニトクリスがまさか本当に戻ってくるとは、みたいな顔して見てくる。

いやそりや戻ってくるよ……あんたらの助力が無いと戦いにならないんだから……

スツと見上げて口を開く。

——彼の暗殺者、初代ハサン・サツバーハからの助力を得ることは成功した。

証拠は………そう思ったところでふと思う。

——証拠なんて無えな、と。

………証拠は！ 無いけど！ 本当だから！ 信じて！

お願い！

俺は土下座した、いとも軽く流れるように地に頭をこすりつけた。し、信じてえー！

渾身の土下座だった、証拠もなく弁舌で誤魔化せるほどの話力が無い俺には素直に信じてくださいと叫ぶ他にはなかったのだ。

頭を下げると同時にお前は馬鹿かとガスつと蹴られ持ち上げられる。

協力を取り付けたことは事実なのだからもつとドシツと構えろ、下手に出るなと睨まれる。

お前とあいつは飽くまで対等で無くてはならないのだから、と。

そう言われてハツとする、思わずひれ伏す方向で考えていたぜ……あぶねえ……と佇まいを直してキツと見る。

そんな俺を珍妙なものを見る目で見た後オジマンディアスは笑って言った。

良い、良い、と。

証拠はないなら証明してみせよ、と。

は？ 何を……？ と問えば勿論、と。

お前達の力を、だ。

オジマンディアスは不敵に笑って聖杯を掲げた。

悪寒が走る、クー・フリーン・オルタと姿が一瞬重なって見えて、やっぱりと感覚がそう叫んだ。

礼装を展開する、同時に聖杯は光り輝き神殿内を光で埋め尽くした。

光が晴れた頃には、オジマンディアスはその姿を醜悪な黄金の化物

——魔神柱に変質させていた。

ええ……趣味悪……ほら見ろニトクリスも啞然とした顔で震えちやつてるじゃん……

アモン・ラーと名乗ったそれが口上を上げてる最中に銃を撃ち放つ。

ドンツと音を立ててそれは確かに肉を貫いたがその小さな傷はすぐさま再生を果たした。

……嘘じゃん……え、再生とかあり？　ありなの？

ライダーさん達と顔を会わせて数秒、コクリと頷き俺はすぐさま後ろへ下がった。

令呪は使わない、だが最大火力で叩きのめす、再生する暇も無いくらいので速さでミンチにしてやる。

動き出しは早かった。

展開された幾百の剣は立体的に魔神柱を囲み、貫いた。

間髪入れずお師匠が走り出す、地を割る勢いで駆け出した彼女は渾身の一撃を叩き込んだ。

激しい爆裂音が響き、魔神柱は身体をくの字に曲げて苦悶の声を絞り出す。

まだだ、まだ足りない。

ケイが走り出し深々と一閃、次いで突き刺さっている刀を使いそのまま斬り裂いていく。

反抗するように、魔神柱の周りで爆発が起こった。

魔力をそのまま爆発させたような、荒つぽいそれは確かに彼を吹き飛ばし、上手く受け止めると同時に巨大な星が駆け抜けた。

神殿内に爆音が響き渡る。

まだ、まだ仕留め切れてない。

生半可な傷ならすぐに治されてしまう、それだけは避けたかった。

——走り出す、既に駆け出し剣を振るい切っていたケイとライダーさんの裾を引っ掴んで思いつき引き寄せて射線を空けさせる。

瞬間、矢が走る。

緑の光が尾を引くように、宙に軌跡を残して飛んだそれはアモン・ラーの身体ど真ん中にぶち当たり、勢いよく貫いた。

アモン・ラーは激しい悲鳴を上げながら、その姿を現した時と同じようにその身から強烈な光を生み出した。

神殿内を、光が埋め尽くす——

光が晴れば、玉座にはオジマンディアスが悠々と座ってこちらを見ている。

え、ええ……!?!? なんで生きてんの……?

俺の疑問に彼は当然だろと言わんばかりの表情で余は神々の王だからな、と鼻で笑った。

うーん……意味不明……

良くわからないよ、と言った顔を見せてみるが彼は意にもかいせず良く戦った、と俺達を褒め称えた。

神を気取る獅子王を相手取るに不足はない、と。

良いだろう、認めよう。

余が共に肩を並べるだけの勇者であると、貴様の言う、世界を救うものである、と。

そら、持っていけ、と彼はまるで石ころみたいに聖杯を投げてよこした。

こんなもんがあったから柄でもないことに執心したのかもな、と付け加えて。

柄でもないこと……? 疑問を抱けばお師匠が気づいてなかった? と小声で言った。

彼もまた、獅子王と同じような方法で己の民だけでも救おうとしていたのだ、と。

え、ええ……いや、ええ……? なんてそんなこと分かるの……

？

純粋な疑問をぶつければ彼女は御仏的な勘だという、何だそれは。何でこう……目に見えない雰囲気的なものから細かいことまで察知できるんだ……困惑しながらオジマンディアスを見上げれば彼は不機嫌そうにフン、と息を吐いた。

あれは凶星って顔です間違いはない……

まあ協力してくれるんだしその心配も最早無くなった、後は攻め込むだけである。

じゃあちよつと詳しい話をしようか、と俺達はその場で会議を始めた。

砂漠地帯では通信ができない……というよりは酷く安定しない。

ノイズが走り全く会話ができない、しかし通信自体はできていた。

オジマンディアスとの協定が上手く言ったら一度のみ通信を繋げる、断られたら一度繋げ切り、もう一度繋ぐ、イレギュラーな事態が起きたら三度繋ぐ、という風な約束をしていた俺達は当然、一度だけ繋いでみせた。

未だ完璧な態勢を整えられていないはずの円卓にはすぐさま攻撃を仕掛けたい、それはオジマンディアスにも納得できたのか概ね俺達を立ててきた計画に沿った形で作戦は纏まった。

オジマンディアスとの協定により借り受けたスフィンクス軍団——オジマンディアス曰く神獣兵团——を左右からぶつけ陽動に、本命は正門からぶち抜くとかいう大雑把な作戦である。

決行日は四日後、山から降りてくる立香くん達と合流しそのままどれだけ急いで進軍しても辿り着くのが四日後であるからだ。

という訳で俺達はもう行きますね、とそう言った時、激しい揺れが俺達を襲った。

次いで激しい爆音、微かな悲鳴と大地が抉れるような異常音が木霊した。

何だ——!?

神殿から飛び出て見れば、豊かに広がっていた砂漠の都は巨大なクレーターを幾つか作り、そこにあったはずのものは一切適切、何もか



も消し飛んでいた。

一体、何が――

誰かが空だ、空を見ろ、と叫んだ。

つられて見れば、空には極光が走っていた、ちょうど聖都のある方向から、弾丸のように発射された光が、四方八方に撃ち出されていた。

それは勿論、北の山にも。

こちらの動きを悟られたのか、だとしたら何時、どのタイミングで

光が迫る、空から、極光が落ちてくる。

傍目から見てもそれは宝具級の一撃だった、防ぎようがない、そう思った瞬間、エジプトの空には巨大な鏡が突如現れた。

光を受け止め、弾く。

幾つも降ってきたそれを鏡は難なく防いで見せた。

ええ……何あれすごい……助かった……ほっと一息つくと同時にハツと思う。

山の方は――

北を見れば、山の方向には幾つも光が落ちていた。

奥歯を噛みしめる、浅く早くなる呼吸をそのままに、ただ只管に無事を祈ることしか、俺にはできなかった。

あんなものがあつちにあるとかもう無理なのは……？

一発きりの攻撃であればまだ希望は持てた、だがあれだけの質量攻撃を幾重にも放ってきたのだ。

もし仮にあんなものを戦闘中にも放たれてみる、一瞬で塵だ。

どうしようもできない、敵を見誤っていた、勝ち目が――  
パチン、と頬を張られる。

お師匠が何時になく真剣な眼差しで俺を見据えた。

諦めるな、と。

諦めることは誰だって簡単にできる、でも、だからこそ諦めてはいけない。

貴方が背負っているものは、そう簡単に投げ出して良いものなの？  
投げ出せるものなの？

貴方は時代を、世界を救うのでしよう、それならば、こんなところで逃げてはいけない。

だから、だからね、もう少し頑張ってみない？

お師匠は慈愛の笑みを浮かべて言った。

その眼差しは力強く、励まされるようで、不思議にも何とかしなければ、という心に火を付けた。

というかあれを無限に撃てるなら最初からずっと撃ちつばなしだっただろ、冷静になれ。

ケイの非常に冷静な言葉でそう言われればそうだな……と納得し立ち上がる。

作戦は変えない、無限ではないにせよ、あれがまた発射されることも無いとは言い切れないのだ。

であれば時間をかければかけるほどこちらは不利になる。

あの後通信が開かれたことから少なくとも無事であることは確かめることができた、ならばやはり作戦通りに進むしか無いと思ったのだ。

まあ砂漠を抜ければ通信は繋がるし、それ次第でもあるが……

それでも取り敢えずは作戦通りに動きたい、という俺の意志に応えて、彼は神獣兵団を貸し出してくれた。

進軍である、あと数日、それで全てを決める。

覚悟を新たに俺達は砂漠へと踏み出した。

砂漠を出て、通信を繋ぐ。

あちらの被害は思っていたよりもずっと少なくはあったがしかし確かな被害が出ていた。

具体的言えば複数ある村の内一つが消し飛んだ、主に利用させてもらっていた呪腕のところでは無かったが、それでも呪腕は悔しそうに、絞り出すようにそういった。

戦える人員は殆ど集まっていたが故に進軍に関しては問題なかったがそれでも戦えない人たちが百単位で殺された。

もつと早く動くべきだった、そう思う気持ちにこれでも最速だった、と言い聞かせる。

努めて冷静に、同じように動き出していたあちら側に合わせて作戦通りに進める。

荒れた大地は、やはり光が落ちていてあちらこちらに巨大なクレターが刻み込まれていた。

日は沈み、辺りはすっかり夜の帳が落ちた。

あれから数日、俺達は聖都付近まで歩を進めていた。

聳え立つ白亜の城、それを見てケイがポツリと言葉を漏らした。

あまりにもキヤメロット城に似すぎている。

細部は違うが全体的に見ればあれはキヤメロット城そのものである、と。

ふうん……え、だから何？ 問題でもあった？

そう問えば彼は暫し悩んだ後にもし、仮にだぞ、と口を開く。

あれがもしキヤメロット城を模倣していて、その特性すらも備えていたとすれば、俺達にそれを突破する術はない、と。

………うん!? どういうことだそれは!? ここまで来ておいて何その新情報!?

慌てふためく俺にケイはゆつくりと言った。

キヤメロット城は心ある者のみを通す、強だけの攻撃では決して碎けることはない。

つまり善なるものの攻撃しか通らない、そういうことだ。

………ここまで来てそんなことが判明するとかある………?

いやチートなんてものじゃないでしょそれ、ズルくない?

正門をぶつ飛ばすほどの力を持っていて尚かつ善なるもの………?

俺の中で善の代表といえど立香さんとマシユな訳だけどあの二人に正門をぶつ飛ばすなんてことは不可能だ。

不安が内心を埋め尽くしていく、そもそも根っからの善人なんているものか――

そう思ったところで誰かの手が頭押し付けグリグリと撫で回す。

――お師匠?

彼女は笑って私に任せておきなさい、可愛いお弟子のためにお師匠

様がとっておき見せちゃうんだから！ とそう言った。

——時は来た。

神獣兵団は左右から奇襲を掛けて派手に注意を引き、その間に俺達は正門へと迫る。

既に先程の話は共有していて、立香くん達は俺達のフォロー、道を空けてもらいながら素早く駆ける。

一気に叩き割る、そう思い動いていれば突然、闇夜は取り払われて太陽が中天へと上りだした。

これは——？

眼の前には銀の鎧を纏う騎士、ケイがガウエインだと叫んだ。

サー・ガウエイン、彼は逸話通りであれば日中三倍。つまり太陽が出ている内は彼の騎士は全ての能力に置いて普段の三倍の力を誇るということだ。

何でか知らんが太陽が顔を出してきた今彼は最強に近い能力を保持しているということに他ならない。

やばいかも……一度、二度と剣を交え何とかいなすケイを見る。

長くは保たない——その時だった。

晩鐘の音が、鳴り響く。

北の空から嵐がやってきた、聖都を呑み込むように、巨大な髑髏を模した嵐が太陽すらもかき消していく。

——来た。

キングハサン、最高のタイミングだ。

聖都から放たれる矢は全て嵐に阻まれ、サー・ガウエインの能力をあげ笑うように太陽を覆い隠す。

そうして振るわれた剣は最強の暗殺者にいとも容易く弾かれた。

脇を抜ける、お師匠が凄まじい勢いで魔力を練り上げていく。

戦いが長引けば苦しんで死んでいくだけの人が増えていく、それは仏門的にもよろしくないから。

だから、後はお願ひ。

お師匠は俺にそう言い一人駆け出した。

善なるものしか通さぬのなら、慈悲の拳こぶしで推し通る。

——破山一拝、釈迦如来掌

傷一つつかない正門に、御仏の心が叩き込まれる。

激しい衝撃だった、爆裂音が響き渡って白亜の正門は木っ端微塵に粉碎し尽くした。

その一撃は正しく渾身の一撃で、文字通り捨て身の一撃だった。

倒れ込み光と化していく彼女の身体を抱き起こして馬を駆る。

突然弟子認定されて何この人変人……とか思いはしたが、何だかんだ世話にはなった。

ていうか捨て身の一撃とか聞いてないし、何それふざけてんの？

お師匠にはもう少し頑張ってもらわないとなんですけど、嫌味のよ  
うに言えば彼女は少しだけ笑ってごめんねと謝った。

また出会えたら、その時はもつと助けてあげられるし、活躍してあ  
げるから、だから。

もう一度出会えるように、世界を、救ってね。

ふわりと笑って彼女は消えた、その身を光の粒へと変えて消滅し  
た。

——任せろ

小さく呟いて、俺達は走り出した。

立香くん達が正門から入り込む、その後が続こうとして、赤雷が  
奔った。

——モードレッド！

叫ぶと同時にケイとモードレッドの剣がぶつかり合って火花を散  
らす。

瞬間、バチリと稲妻が鳴る。

直感的に不味いと思った、一步踏み込みケイの肩を掴んで引き寄せ  
る。

直後彼女の剣からは巨大な赤雷が迸った。

溜めもなしに宝具——！？

円卓はどいつもこいつも卑怯すぎない！？

動揺する俺達を嘲笑うように彼女は剣をもう一度振り上げて、そし  
て飛来した矢が彼女の肩を貫いた。

アーラシュ——！

彼は笑って先に行きなと促した、させるものかと叫んだ彼女を米俵が吹き飛ばす。

拙者も残ろう、と藤太が言った。

——任せた、必ず後を追ってこい。

それだけ伝えて走り出す、すぐに追いつくから安心しろ、とアーラシュが笑った。

正門を抜けた先は、美しく整理された城下町が広がっていた。

流石聖都——そう思ったのも僅かですぐさま酷く濃厚な血の匂いがすることに気づいた。

城内に入ったのは俺達の他には立香くん達だけ。

嫌な予感がする、ドクターに現状は!? と聞けば城下町にはハサン達が残って交戦中の筈だと言った。

だとしたらこれはちよつと不味いのでは？ 己を急かして走る。

ちようど城下町の真ん中、大きな噴水があるそこで五人のハサン達は血の池に沈んでいた。

嘘だろ、いくらなんでも早すぎる——

瞬間、鋭い剣閃。

眼前まで迫ってきたそれは寸でのところで差し込まれたケイの剣によつて弾かれた。

甲高い金属音を高鳴らして離れ合い、同時に琴のような音が——

瞬間、鋭い剣閃。

眼前まで迫ってきたそれは寸でのところで差し込まれたケイの剣によつて弾かれた。

甲高い金属音を高鳴らして離れ合い、音を聞きながらケイを引っ掴んで全力で姿勢を下げる。

ま、間に合った……また上半身と下半身をバイバイさせる気はねえんだよ……！

ルーンストーンを投げつけながら下がれば、爆風を物ともせずに紫色の甲冑の騎士が飛び込んできた。

振り降ろされた剣を鈴鹿がいなす、ケイがサー・ランスロット、

サー・トリスタン、と二人の騎士の名を呼んだ。

円卓の騎士、それも二人。

ここは仕留めていかないと駄目っぽいな、と礼装を展開した。

彼らとケイは、鋭く視線を交わしはしたが、互いに何も言わなかった。

きっと彼らの間の話し合いはとうに済んだことなのだ。

視線を外し、今度は俺に向けて彼らは口を開く。

今のを躲すとは、お見事です、とトリスタンが言い、ランスロットが何故齒向かってくるのか、と顔を歪めて言った。

いくら十字軍との戦いが終わった後だとしても、我々円卓の騎士は万全の状態だ、獅子王から祝福も授けられている。

貴公らでは我々には敵わない、投降するべきだ。

そも、我々の目的も人々の守護であるのだから、闘う必要はあるまい？ と。

は？ 舐めてんの？

俺達は世界を救わなければならないのだから、その獅子王様がやろうとしていることを看過する訳にはいかない。

そもそもお前らだっておかしいとは思わないの？ それは人道に反しているとは思わないのか？

聖槍に人を押し込んで、それでこの時代だけでも人理の焼却から逃れて、それは結局護ったってことになるって本気で思ってるの？

我が王に反するわけにはいかないってか？ 我が王をまた裏切る訳にはいかないって？ 自分たちの生前の悔みを晴らすために、今を生きている人間を、その先の未来を捨てろってか？

——冗談じゃねえ、死人が、生きようと藻掻く人間の邪魔をしてんじゃねえよ。

動き出しはどちらも同じだった。

鈴鹿がランスロットと剣を交え、音と共に走る真空の刃をケイが弾いた。

現状見えない刃に対抗できるのは同じ円卓のケイだけだ。

トリスタンの対処をケイに、その援護にカーミラを任せてランス

ロットから先に崩す。

鈴鹿の援護にライダーさんを回す、あの二人ももうそれなりに一緒に戦ってきた仲だ。

そんじよそこらの英霊よりずっと連携が取れている。

超高速で行われる剣戟を二人でいなし、弾き合い、苛烈に攻め立てる。

鈴鹿の刀は確かに肌を斬り裂いている筈なのに、ライダーさんの格闘は確かにダメージを与えているはずなのに、ランスロットには傷一つつかない。

いくら何でもおかしい、英霊だから、で済む話ではない。

それでも二人は攻め立てて、鎖がランスロットの身体を縛り鈴鹿が刀を振るう。

瞬間、ダメ押しのようにライダーさんの目が光った。

石化の魔眼——！

決まったと、そう思った。

しかし彼はほんの少しも、ほんの数瞬すらも止まること無く、鎖を砕き、振り降ろされた鈴鹿の刀ごと彼女を断ち切った。

はあ——？

二対一で成り立っていた均衡はあっさりと崩れた、血しぶきを上げながら倒れる鈴鹿ごと、彼はライダーさんへと剣を突き立てた。

——走り出す、瞬間片脚はいとも簡単に斬り落とされた、音もなく飛んできた不可視の刃によって。

カーミラが作り出したであろう無数の拷問器具は粉々に斬り砕かれて、彼女は血にまみれていた。

二人でもいなしきれない、いや、そもそもこいつらが、いかに高名な円卓とは言え異常なまでに強すぎる。

先のモードレッドもガウエインもそうだ。

こいつらの強さには何かしらのギミックが——

動き出しはどちらも同じだった。

令呪をきる。

出し惜しみをしている場合ではない。



本気で殺す、全身全霊、何もかもを掛けなければこいつらは倒せない。

魔力は爆発的に膨れ上がった、幾百の刀がランスロットを覆うように宙を舞う。

しかしランスロットは全方向から飛来するそれを全て弾いてみせた。

——想定通り。

鈴鹿の宝具は仕留めるために展開したんじゃない、躲せないようにその場に縫い止めるためのものだ。

——全ては幻想の内、けれど少女はこの箱に——

直後、刀ごと呑み込むように巨大なアイアンメイデン——  
幻想の鉄処女は展開された。

躲そうと派手に動けば串刺しで、かと言って逃げなければカーミラの宝具で串刺しだ。

ランスロットが焦りを面に出した。

助けを求めるように視線を変えて、同時に弓矢を放つ。

必中の呪いがかけられたそれは過たずトリスタンへと飛来した。

当然のように撃ち落とされたが、それで良い。

それだけでランスロットの手助けには入れないようにケイが邪魔できる。

幻想の鉄処女が、刀ごとランスロットを呑み込んだ。

骨を砕き、肉を貫く音が響き渡り、そして幻想の鉄処女は粉々に斬り碎かれた。

莫大な魔力で形成された、蒼の輝きが迫りくる——

動き出しはどちらも同じだった。

あの宝具エグすぎない……？ 範囲が広すぎるんですけど……

俺とか一瞬で塵だよあんなの……

カーミラの宝具だと駄目だな、そう思って令呪をきる。

同じように刀は宙を舞い、動き出したトリスタンへと矢を放つ。

トリスタンの動きを牽制しているケイを横目に、蒼い星は流れ落ちる。

直上から放たれたそれは弾かれた刀ごとランスロットを叩き潰した。

真っ赤な血が辺りを染める、追い打ちをかけるように残った刀は彼の身体を針の筵に仕立て上げた。

そら、次はお前だ。

トリストアンへと展開し直した銃を向ける。

瞬間、剣が走った。

隣に居たカーミラが俺を突き飛ばす、同時に彼女の首は容易くとんだ。

ランスロット――

全身から血を垂れ流し、その上刺さっている刀を抜きもせず剣を振り抜いたランスロットは正しく鬼のようで、一瞬思考が止まる。

呆けるなどケイが叫び、ハツとした時には遅く。

蒼の光は放たれた――

隣にいたカーミラが俺を突き飛ばす、同時に彼女の首は容易くとんだ。

――動きを止めるな、頭を回せ！

ダンツと一步踏み出る、ライダーさんと鈴鹿は間に合わない。

令呪を使っても、宝具を止めない。

だから、俺が仕留める。

魔力を練り上げる時間すら与えてなるものか。

概念礼装を幾つも展開する。

全身に炎のような熱さが、剣のような冷たさが広がっていく。

今の俺は、英霊にも手が届く。

必ず殺す、確実に、完璧に。

フラガラック――！

剣が腹に突き刺さる、同時にフラガラックは既に碎けていた鎧から除く肌、それも傷がついている部分を的確にぶち抜いた。

ゴボリと血が溢れる、見ればランスロットの眼からは既に光が消えかけていた。

――俺の勝ちだ、何度でも言うぞ、お前は、お前たちは間違ってい

る。

密着した状態で言えば彼は血を吐き出しながらもそれを認めた。申し訳無い、と目を伏せて、どうか我が王を、止めてくれと。

そう言い彼は身体を解かして消えた。

身体は崩れ落ちる、痛みと失血で意識が飛びそうだった。

ここで倒れてはいけない、まだやるべきことが残っている。

その意志だけで気を保てばトリスタンはああ、悲しいことだ、と言った。

ランスロット卿はやられてしまいましたか、ですが貴方はもう動くことすらままならないでしょう、と。

そんな貴方を庇いながらこの先へ進むのは自殺行為にも等しいと。

馬鹿を言え、カルデアの技術力をなめんじやねえぞ。

治療スクロールはすぐさま身体を癒やし、傷を塞ぐ。

血を一気に無くしすぎたせいか軽いめまいがするし、傷は表面上塞がったように見えるだけで激しく動けば傷口は開くだろう。

それでも、今はそれで充分だった。

ここまで治れば、まだ戦える。

次はお前だ、トリスタン。

真空の刃が弦を弾く音とともに鳴り撃ち出される。

そのほとんどをケイが弾き落とし、漏れた刃を鈴鹿の剣の束が弾いた。

刃が不可視であろうが関係ない、飛び抜けた叡智を持つ鈴鹿であれば残りの少なくなった刀でもある程度ルートを絞って予測できる。

まあそれに、もうその攻略法は見えた。

ありったけのルーンストーンを地にばらまく。

ダメージにはならないことは分かっている、だからこれはそのためものじゃない。

トリスタンが弦を鳴らすと同時にルーンストーンを起爆させる。

爆発は大地を抉り、砂や草を大いにばらまいた。

そうすればほら、真空の刃であればそれはもう不可視ではない。

そこにあるものなのであれば、砂を斬り裂いてくるそれは姿を現

す。

まあだからといって躲せるかといえはそうではないのだが、それは俺一人であればの話である。

ライダーさんが俺の身体を引き寄せる、同時に魔術礼装を起動した。

くたばりやがれ。

ガンドと呼ばれる魔術は弾かれたように勢いよく宙を飛び、粉塵を突き抜けてトリスタンの肩を掠めていった。

それだけで充分、ケイの剣は振るわれて、トリスタンは片腕を失って、しかし反撃の如く放たれた斬撃を防いだケイは弾き飛ばされた。

勢いよく飛び退いた彼は血の池を滑りながら後退する。

同時に、魔力が練り上げられる。

不味い――

気づいた時にはもう遅い、彼の騎士は魔力を練り上げきって、己の弓に手を翳した。

瞬間、彼の胸から腕が生えた。

黒と赤が入り混じったような腕が、トリスタンの心臓を掴み上げて握りつぶす。

何が起こったのかもわからず倒れたトリスタンと入れ替わるように、ハサン――呪腕のハサンが立ち上がった。

血を吐き出しながらも、この時を待っていたと彼は笑った。

そして、自分は使い物にならないから、先に行ってくれとも。

どう見ても、彼の傷は治しようが無かった、死んでないほうが不思議なくらいの傷だったのだ。

眼を伏せてありがとう、とそう言えば彼は謙遜したようにいえない、と。

どうか先に進んで――全てを救ってください、とそう言った。ライダーさんに背負われて前へと進む。

ドクターに聞けば、立香くん達は既に獅子王と交戦中で、その前に円卓の騎士アグラヴェインをアルトリアが相討つ形で打倒しているという。

つまり残った円卓の騎士は後二人。  
ガレスにガウエイン。

ガウエインはキングハサンが相手しているがガレスは分からない。  
それに、円卓の騎士でなくとも、この城を守る騎士は異常なまでに  
強い。

その前に早く決着をつけなければ、そう思って足を早めれば、背後  
から金属音が鳴り響いた。

誰だ——そう思って振り返ればそこにいたのはガウエイン、ただ一  
人だった。

……は？ お前はキングハサンが戦ってたんじゃ……何故ここに。

そう問えば私は見逃された。私の天命はあそこではないと、そう言  
われ見逃されたと彼は言った。

……ああ、そういうこと……そう言えばあの人そういう存在で  
したね……

キングハサン、その人の力ではなく相對したものの運命に殺される  
んだとか。

良くわからないが少なくとも、キングハサンという存在は、そこで  
死ぬ運命にあるものをそこで殺すだけの存在なのだろう。

つまりガウエインの運命は、正門前でキングハサンの手によって殺  
されるものではなく、ここで俺達に殺される運命だった、というわけ  
だ。

異論はいらない、真実はこれだけでいい。

何故獅子王に付き従うのか、獅子王が言う守護は、真の救いじゃな  
い。

本当は分かってんじゃないの？ そう問えば彼は吠えるように  
言った。

そんなことは関係がない、と。

生前、王の右腕でありながら私怨を捨てきれず結果的に王の死を招  
いた私に、王は言ってくれたのだ。

何をしても良い、聖都から離れようが、私を討とうが、好きにする  
が良い、と。

その歡び、貴公らにわかるものか！

ブリテンの円卓は滅び、また我らの世界は滅んだ。

だがその上で王はこの世界を守護するとお決めになられたのだ。

我が劍は既に騎士王のものにあらず、獅子王のものである。

生前のような愚かな真似はもうできない、さあ劍を抜け。

分かっているだろうが容赦はしない、ケイにそう言つて、ガウエイ

ンは劍を抜き放った。

劍はぶつかり合つて弾き合う。

連続する金属音が広間を埋め尽くしていた。

鈴鹿、ケイ、ライダーさんによる高速連携攻撃を完璧に受け流し、そ

の上で攻撃にすら転じるガウエイン。

どう見てもこちらの分が悪かった。

人数に差はあれど、こちらは全員がかなりの消耗をしている。

それに反してガウエインは多少の傷はあれど、祝福<sup>ギフト</sup>つてやつの効果

か、特段消耗もしている様子を見せずに劍を振るう。

流麗にして剛健。

一撃一撃が必殺とも言えるそれは三人の英霊を相手に圧倒するほ

どだった。

ライダーさんの鎖を臂力のみで碎き、ケイの劍を難なく弾き、鈴鹿

の攻撃を先読みしているかのように躲し返す刀で劍が跳ねる。

見れば見るほど隙が無いことを思い知らされる、完成された闘技を

大きく上回った能力で振るわれる。

部下を連れてすらす来ず、単身でやってきた意味がここに来てようや

く分かった。

最初から必要ないのだ、彼ほどの力があれば、むしろ味方は邪魔な

のである。

不意に、大きく放たれた劍が鈴鹿を刀ごと叩き切る、それと同時に

穿たれたライダーさんの釘劍は首に突き刺さり、しかし浅く傷をつけ

ただけに終わった。

——嘘だろ。

ランスロットやトリスタンも異様なまでの頑健さを誇っていたが

ガウエインはその比じゃない。

ライダーさんほどの英霊がトップスピードで放った剣が人体の急所とも言える首に突き立ち、浅い傷ができた程度で済むとか異常にも程がある。

人の皮被った化物かよ……

ドロリと血を流す鈴鹿の身体を抱き寄せすぐさま応急回復をかける。

彼女も伊達に英霊ではない、斬られる瞬間身体を引いていたのか思っていたよりも傷は浅く、それだけで傷はある程度塞がった。

不幸中の幸いだった、だがそれはこの戦況に何一つ影響を与えない。

このままでは勝てない、そのことがはっきりと分かってしまう。ループするまでもない。

どう動いてもあの能力差では間に合わせられる。

俺が指示したのでは遅すぎる、かといって俺が動いたところで速さが、力が足りない。

打開策は出てこない、このまま全員殺される未来しか見えない。

事実、鈴鹿が抜けたこの数秒でライダーさんは片腕を落とされた。同じ円卓であるケイが居なければ既に俺すら殺されていただろう。

そして、そのケイですら長くは保たない。

それが分かってしまう、理解できてしまう。

お師匠に託された、呪腕に託された、カルデアに、世界を託されたのに。

未来が、もう、見えな——

ポン、と肩に手を置かれる。

そんな如何にも絶望してますみたいな顔するのをやめて、と鈴鹿に窘められる。

いやお前現状をわかっているのか——

そう言いかけて、口を塞がれた。

理解ってる、だから、私に全てを賭けて。

彼女は薄く笑ってそう言った。

その眼に冗談や偽りはなく、本気であることが見て取れる。震える声で分かった、とそう返す。

手の甲の紋様が熱く輝きそれがそのまま鈴鹿の力になる。そうして彼女に言われるままに城内のガラスを魔術で破壊した。

ガウエインが血迷ったかと叫び、同時にケイとライダーさんを見た。

一瞬、視線が合う。

それだけで彼らは俺の言いたいことを完璧に理解した。

一言で言えばそれは時間稼ぎ。

勝利するための時間稼ぎ、それが必ずどちらかは死ぬことが分かっている、それでも彼らは引き受けた。

魔力を練り上げながら、鈴鹿は口上を述べていく。

——これなるは、菩薩が鍛えし小通連。抜かば知恵は文殊が如く——

ガウエインの動きは攻勢を増した、激しく振るわれる一撃を流すように受け、またライダーさんの血霧が視界を覆う。

——これなるは、菩薩が鍛えし大通連。抜かばその数雨を超え——ケイの剣が弾かれる、素早く振るわれた剣を阻むが如くライダーさんの鎖が片腕だけを絡め取り、一瞬の硬直を作り出す。

——これなるは、水龍の尾より取りし顕明連。抜かば虚空を斬りし、億なる世を覗く——

振り落とされたケイの剣を鞘で受け止め受け流す、ライダーさんの釘剣が罅迫り合って叩き折られた。

——三振揃いて三明剣、兜率天の名のもとに、世を見渡し邪を淨げ

ライダーさんの身体が斜めに崩れ落ちる、瞬間石化の魔眼が、一瞬にも満たない時間だけガウエインを止めた。

——宝具重複展開——三千大千世界——恋愛発破・天鬼雨——

瞬間、鈴鹿の刀は普段の倍の数を以て空へと現れた。

同時に、鈴鹿の姿は立烏帽子を被り、徐々に巫女のような装束へと変わっていく。



ケイを下がらせながら一振りの刀を日に翳し、そして彼女は一步踏み出した。

合わせるようにガウエインは剣を振り抜いた。圧倒的な力、目にも留まらぬ速さで振り降ろされたそれを彼女はほんの少し身体をそらしたただだけで躲しきる。

続く二閃、三閃、それすらも彼女はまるで分かっているかのよう。その全てをくぐり抜けた。

——一閃。

彼女の放った斬撃はガウエインの防御をすり抜けるように斬り裂いた。

鎧ごと斬り裂いたそれは彼の肉体にまで傷をつける。

瞬間、刀は殺到した。

恐ろしい速さと物量で放たれていくそれをガウエインは捌ききれない。

彼ほどの能力であればただ放たれるそれに対処することは幾らでも可能なはず、だというのに鈴鹿の宝具は彼の動きを知っているかのごとく地に、身体に、突き立った。

鋼とすら思えた彼の騎士の肉体に、徐々に深く刀がめり込んでいく。

ここに來てガウエインは初めて動揺を露わにした。

戦いとは鍛え上げられた肉体とスキルだけで決まるものではない。

揺れ動いた精神は彼に大きな隙を作り上げた。

見逃すはずもなく刀は空を駆る。

動揺したとは言えガウエインも一流の英霊、彼はすぐさま片腕を犠牲に生き残る判断を下して左腕を盾に、弾けるように跳び出た。

瞬間、彼の上半身と下半身は別たれた。

とつさに下されたガウエインの動きを見通して、彼女はルートをなぞるように刀を振り抜いたのだ。

ありえない、と彼は言った。鈴鹿はそれを聞いて尚宙を舞う刀で地に縫い止めるように串刺した。

同じ過ちは繰り返せないから、と、そう呟いて。

天命とは良く言ったものですね、お見事です。

ガウエインは掠れた声でそう言って、剣を固く握ったまま、その身を光へと還した。

ガウエインが消えると同時に、鈴鹿は気が抜けるように倒れ込んできた。

その頭からは既に立烏帽子は消えていて、服装もまたいつもの制服姿に戻っている。

少し無理をしすぎたかも、そう言って全身から力を抜いた彼女はもう限界まで消耗しきっていた。

呼吸は浅く、指一つ動かすのさえ苦勞なようで、全身をそのまま預けてくる。

ごめん、ごめん、ありがとう。

そう言えば彼女は何で謝るし、と少し笑った。

ほら、早く行きなさい、後もうひと踏ん張りでしょ、と続けて。

信じているからね、と言って鈴鹿は姿を消した、今さっきまで感じていた重みが消えていく。

立てるか？ と手を差し伸べたケイに、勿論と応えて手を掴む。

さて、残すはラスボス戦のみ。

立香くん達の助けに、早くいかなければ。

玉座扉を蹴り開ける、瞬間莫大な魔力の奔流が俺達の身体を押し阻めた。

聖槍は開放されていた。放たれた究極の一撃は、しかし彼女——マシユ・キリエライトによつて防がれていた。

何か見たこと無い宝具使ってるんだけど何あれ……そう呟けばケイは軽く呆然としたように言った。

あれはキヤメロット城そのもの、ああ、やはり彼女の中にはあいつが居たか、と。

あいつ……？ 疑問を浮かべれば彼は言う。

サー・ギアラハツド、アーサー王より最も偉大な騎士と称され、また聖杯探索にて聖杯を見事見つけた最も穢れの無い騎士。

そんな彼——彼女の宝具がキヤメロット城か、当然だな、と笑った。

白亜の城は持ち主の心によって変化する。

その心に一点の迷いもなければ決して崩れはしない。

倒すための騎士ではなく、その善き心を示す騎士。

びったりだな、と言って彼は俺を連れて前に踏み出た。

そら、時代を、世界を救うぞ、と。

俺達の登場に獅子王は来たか、と笑った。

いや、どちらかと言えば俺達、というよりはケイに対し、彼女はそ

う言った。

応えるように、ケイは剣を抜き放つ。

円卓の騎士として、騎士王の剣として、俺は貴様を討つ。

そう宣言した彼に、サー・ベデイヴィエールが並び立つ。

援護を頼む、と彼らはそう言った。

——スウィッチオン・アガートラム 剣を握れ、銀色の腕

サー・ベデイヴィエールは早々に己の宝具を開放した。

白金に輝く義手を、まるで星々の輝きのように光らせて、獅子王に見せつけるように振りかざす。

しかし彼の王はそれに対抗するでもなく、ただその光を見て眼を見開いた。

私はその輝きを知っている、私はそれを、知っている——？

そうして彼女はこう言った。

円卓の騎士であるサー・ベデイヴィエールに対し、何者であるかと。

それにサー・ベデイヴィエールは失望するでもなく、目を伏せるでもなく、円卓の騎士、その一人でありますと応え、次いで立香くん達と俺を見た。

あなた達のおかげで此処までこれた、これまでの全ての厚意に感謝を、そして一つのお詫びを。

私は——獅子王の変質の理由を知っていた。

黙っていたことを、許してほしい、と。

瞬間、ドクターが観測反応がおかしい!? と慌て始めた。

サー・ベデイヴィエールを指して、霊基反応も無ければ、魔術回路

も人並み——彼は、英霊ではなく人間である、と。

その言葉に、彼はその通りであると応えた。

マーリンの魔術で全てを騙していました、アガートラムも、また同じ。

これはヌアザの腕ではありません。

これは、これは——貴方が、騎士王であった時に扱った聖剣である、と。

私は罪を犯した、聖剣を、湖に返せなかった。

その結果王は死ぬことさえできず、手元に残った聖槍を携え彷徨える亡霊の王へと変質してしまった。

そして、その罪を償うために、私はこうして貴方を探し続けていたのです。

——エクスカリバーは所有者の成長を止める、つまり彼は1500年もの間、彼の王を探し求めていたということだ。

その重みが、思いがどれほどのものであるか、予想すらできない。

貴方は私に復讐しなくてはならない、だが私は円卓の騎士、ベディヴィエール、善なるものとして、悪である貴方を討たなければならぬ。

さあ、行きましょう、と彼はそう言った。

聖槍の一撃を、マシユの大盾が振り弾く。

出来上がった隙にケイの剣が振り抜かれ、しかしそれは紙一重で躲かれた。

地を割るが如く踏み込んだマルタの一撃が、聖槍によって阻まれ、吹き飛ばされる。

瞬間、聖剣は振るわれた、その輝きは聖槍を押しきり彼女を大きく後退させる。

——展開した礼装を撃ち放つ。

決定打どころか傷一つ付けられないのは分かっている、だがこの攻撃はそのためのものではない。

彼女の動きをワンテンポずらす、それだけで高度な戦いをしている彼らは動きやすくなる。

必中の呪いがかかった矢は彼女の顔めがけて飛来し、掴まれ折られる。

それと同時に、金の十字架が振るわれた。

圧倒的な重量を誇るそれはしかし片手で受け止められて、投げられる。

だがそれで良かった、ほんの少しでも視界を覆うことが出来れば――

二振りの剣が閃いた、金と銀の輝きは彼女の首を断つように振るわれて、しかし聖槍によつて阻まれた。

大きく弾かれた二人を無視し、宙を転がるマルタへと聖槍が迫り、寸でガードに入ったマシユごと大きく吹き飛ばした。

二人まとめて壁にめり込み瓦礫に埋まる。

不味い――マシユとマルタの名を叫ぶ、同時に、聖槍から黄金の魔力が放出された。

それは立香くんの身体を巻き込み、瓦礫ごと全てを塵に返す。

やば――

ケイが弾かれ、ベデイヴィエールは叩き潰される。

渦巻くように放たれた聖槍は、全てを無へと還した。

二人まとめて壁にめり込み瓦礫に埋まる。

――走り出す。

立香くんに令呪を使えと叫びながら概念礼装すら用いて全身を強化した。

聖槍から放たれた魔力の前に、三重結界を展開する。

数秒の拮抗を以て、それは破られた。

視界を埋める極光は、しかし俺の身体を消し滅ぼさない。

揺れる視界、助かったと叫ぶマルタに強引に立香くんのもとに投げ飛ばされて、何とか受け身をとる。

何で君たち英霊は俺をそんなに投げ飛ばすのん……？

加速したマルタはケイへと迫る聖槍を割り込むようにガードして食い止める。

よろけていたサー・ベデイヴィエールは雄叫びを上げて聖剣を振る

う。

一撃、浅くはあるが獅子王を光が斬り裂いた。

血を流しながら、獅子王は大きく後ろへ跳んだ。

形振りは構っていられないか、そう言って彼女は聖槍を構えた。

瞬間、信じられないほどの魔力が聖槍へと渦巻くように集まっていた。

黄金の魔力はその大きさを勢いよく膨らませ、近づくことすら敵わない。

そしてその光を、俺は見たことがあった。

あれは、あの日降ってきた光だ。

直感的にそう思う、各地に飛ばしたあれを、一点に凝縮して彼女は撃ち放つつもりなのだ。

もう、止められようがない、あまりの魔力の奔流に、一步も前に進めない。

マシユは宝具の展開準備に入ったが、あれはこの場ごと全てを消し飛ばす。

特性関係なく、あれは全てを塵へと返す、あれはそれほどの力を持っていた。

ああ、これは無理、理性も本能も同時に言ったその時だった。

——おつといきなり修羅場か、よし、俺に任せておけ。

遅れてやってきた、大英雄アラーシユ・カマンガーが笑って前に出た。

——陽のいと聖なる主よ

令呪のバックアップを受けて、彼は弓を携え魔力を練り上げる。

——あらゆる叡智、尊厳、力をあたえたもう輝きの主よ

聖槍の光は止まること無く渦巻いていき、しかし彼の魔力も負けること無く膨らんでいく。

——我が心を、我が考えを、我が成しうることをご照覧あれ

莫大な魔力の奔流は、互いにぶつかり合って空間を軋ませる。

——さあ、月と星を創りし者よ

獅子王は聖槍を少しだけ引き、魔力を整え纏め始めた、無作為に撒

き散らされていた魔力は聖槍へと収束していく。

——我が行い、我が最期、我が成しうる”スワンタ・アールマティ聖なる献身”を見よ  
アーラシユが、矢を番えて力強く引いた、魔力の差はほとんど存在しない。

——この渾身の一射を放ちし後に、我が強靱の五体、即座に碎け散るであろう！

彼は後ろに居た俺に、頼んだぜと笑った後に、下がってな、と言った。

——流星<sup>ス</sup>一条<sup>テ</sup>アアアア!!

両者の魔力は同時に解き放たれた。

凄まじい衝撃と爆音と共に、黄金の魔力は互いにぶつかり合って、空間を歪ませる。

白亜の床は碎け始め、壁や天井はその総てが吹き飛んだ。

同時に展開されたマシユの宝具の後ろにいて尚、その衝撃は空間を通して伝わってくる。

煙が晴れた頃、アーラシユの姿は光へと消えていて、獅子王が呆然とした姿で彼を見た。

彼の王の究極とも言えた一撃は、伝説の英雄の決死の一撃によって防がれた。

後は頼んだぜ、と言った彼の言葉が蘇る。

ケイの名を叫んだ、同時に立香くんはサー・ベデイヴィエールの名を叫ぶ。

これで終わりだ、これで全てを終わらせる。

魔力の大半を失った獅子王に、二人の騎士が迫った。

銀の剣閃が、二度三度と聖槍を防ぎ、ついにその腕を弾きあげる。瞬間、金の閃光は弾け輝いた。

アガートラムではなく、エクスカリバーとして放たれたそれは聖槍を折り、獅子王の身体を呑み込み、全てを打ち砕く。

義手から剣へと戻った聖剣は、彼の王へと返される。

1500年の時を経て、聖剣は返還された。

とうの昔に限界を迎えていたサー・ベデイヴィエールの身体は、こ

の戦いの影響で手足が土塊のように砕け、崩れ落ちる。

それでも彼は和やかに言った。

勇ましき騎士の王、ブリテンを救った偉大なお方。貴方こそ、我々にとつての輝ける星。

我が王、我が主よ、今こそ、いいえ、今度こそ、この剣をお返しいたします。

その言葉によつて、獅子王——いや、騎士王は全てを思い出した。身体が崩れていくサー・ベデイヴィエールの身体を抱きとめ、見事、と。

我が最期にして最高の忠節の騎士よ。

聖剣は確かに還された、誇るが良い、と。

貴卿は確かにそなたの王の命を果たしたのだ、と。

サー・ベデイヴィエールはそれを聞いて笑った。

笑つて、砂へと還つていった。

騎士王は、彼の騎士を見送った後に聖剣を携え振り抜いた。

聖剣は手元にある、王に齒向かうものを生かして返す道理は無い、と彼女は高らかに宣言し、そして馬鹿か、と一人の騎士に罵られた。

お前は挑戦を受けて、負けたんだ。

いい加減認めて、賛辞でも送れ、と。

ケイは何時になく穏やかな表情で、騎士王へとそう言った。

暫し騎士王は呆然として、少しだけ笑つて聖剣を地に突き刺した。

私の最後の空元気だというのに、そう言った王にケイはもう休めと和やかに言った。

同時に、俺達の身体が光へと代わつていく。

ドクターが特異点の崩壊を確認したと連絡が入る。

聖槍は無くなり、聖杯は既に回収済みだった。

聖都そのものがこの時代にはありえないものだから、時代の修復力は今までよりずっと早いから気をつけて、と伝えられる。

どうやら、どちらにしても再戦は不可能のようですね、と彼女は言つて、残念だったな、とケイが笑った。

それに少しだけムツとした後に彼女は、では手土産を一つ、と口を



開いた。

私は、神霊と化したことで魔術王と同じ視界を得ました。彼の思惑、その最終目的も理解できた。

魔術王ソロモン。その居城となる神殿は正しい時間には存在しません。

魔術王の座標を示すものは第七の聖杯のみ。そのみが、魔術王がその手で自ら過去へ送ったもの故に。

つまりそれは、ソロモンの生きた時代より更に前の時代にあるという事です。

魔術王はこう言ったでしょう、聖杯など、一つも六つも変わりはない、と。

つまりそれは、七つ目の聖杯に至った時、脅威とみなすということなのです。

七つの聖杯を手に入れたら、ということではない。

七つ目の聖杯こそ魔術王の絶対なる自信。

それが復元されない限り、人理焼却は止められないでしょう、と。それを聞いて、ドクターが歓喜の声を上げた。

それだけの情報があれば、時代の割り出しができる！と。

礼には及びません、と彼女は言った後に俺達を見てこう言った。カルデアのマスターたちよ、この度の戦い、私から謝罪はしません、と。

私は私の行いを、今でも正義であったと信じているから。

護る手段や正しさ、善の有り様。

そういったものは個人によって異なるものです。

——だから、貴方達は貴方達が正しいと、善いと信じる道を突き進んでください。

きっと貴方達は、魔術王の居城を見る位置まで辿り着くでしょう。

次の聖杯、最後の特異点は今までをずっと上回る巨悪がいるでしょう。

ともすればそれは、魔術王すら上回る大魔。我ら人類の原初の罪。星を集めなさい、人間の悪性、どのような闇にも負けぬ煌く星を。

強制退去が始まる、意識を集中して、というドクターの声が響く。  
さらば、私は——私達は、理想と共に滅びます。  
そう言った騎士王の隣にはケイが居て、早く帰れと言う。  
さようなら、と手を振れば、彼らは穏やかな笑みを浮かべてこちら  
に手を振った。

—O r d e r C o m p l e t e —

## 眠らない魔獣戦線@無限ループ

——長い、とても長い夢を見ていた。

裏切りに満ち、民衆に翻弄され、誇りを汚され、運命に殺された一人の女の話だった。

人々を救うはずだった白く美しい手を、真紅に汚さざるを得なかった神の話。

偏見と迫害、それらから身を守るために戦い続け、最期には呆気なく殺されてしまった怪物の物語。

長かった幕は降り、同時に薄っすらと浮上していく意識を感じながら俺はああ、これは彼女の話だったのだと遅まきながら理解した。

目が覚める。

朝の弱い俺にしては異様な程珍しい寝覚めの良さだった。

そつと身体を持ち上げたと同時に、瞼の端から薄く涙が緩やかに零れ落ちた。

あくびでもしたかと思うも、何故だかそれは止まることが無くて際限なく溢れ続ける。

そのことに俺は大して動揺することはなく、またか、と一つ嘆息した。

ここ数日、ずっとこうなのだ。

何かとても大切な夢を見ていたようで、けれども何一つ思い出せない。

いや、思い出せない、と断言するのは少し語弊があった。

言葉にするのであれば本当に、何となくそれがとても大切なことである、と思うその気持ちの輪郭の名残だけを寝起きの頭が力強く握りしめている、といった程度。

要するに何か見た確信はあるけど何を見ていたかという記憶は無い、というやつだ。

故に、それだけではどうにもならない。

どうにもならなければ、どうにかする必要も感じない。

多少気になりはするがそれに係っているくらいなら少しでも己を高めた方が有意義だと思ったからだ。

一応、ダ・ヴィンチちゃんに相談はしたが身体に異常は無いと言っていたから問題は無いのだろうし。

目をゴシゴシと擦って涙を拭い、さくつと身だしなみを整えてからふと思う。

随分とボロボロになったものだな、と。

いや身体の話ではない、制服の話である。

俺がここに来てからもう一年は優に経ってはいるが、それでもその程度だ。

仮にも魔術礼装でもあるこれがこんなにボロっちくなるとか、何だかおかしい気分である。

それだけここ半年と数ヶ月が濃かったということだろう。

いやまあ薄くても困るんだけれども。

……いややつぱり薄い方が楽だったのか？

そんな取り留めのないことをぼんやり考えていたら不意にポケットに突っ込んでいた端末が微かに震えた。

見てみればそこには『早くしたまえ！』とダ・ヴィンチちゃんからのメッセージが表示されている。

カルデア内限定チャットメッセンジャーである。

あつたら便利なのにね、と呟いてたらダ・ヴィンチちゃんがさくつと用意したのだ。

本当万能だな……

お陰でスタッフさん達とのやり取りが非常に楽になった。

これをきっかけに仲良くなった人もいて、今ではお部屋にお邪魔し夜食を振る舞われている仲である。

……あれ？ 餌付けされてない？

そう思ったのも束の間、今度は立香くんやマシユからもメッセージが届き始めたので流石にヤバイと部屋を出た。

事情は知らされていないが今日は召喚ルームに招集をかけられていたのだ。

思いつきり余裕かましていたがぶつちやけ起きた時点で全然遅刻である。

ああ、ダ・ヴィンチちゃんに口うるさく言われそうだなあ、そう思った俺は顔を顰めて足を早めた。

謝罪を叫びながら召喚ルームへと飛び入った瞬間細い衝撃が頭を貫いた。

前のめりになっていた身体が勢いよく後ろへと反り返る、いや痛すぎない？

い、一体何が……そつと額に手を当てれば白い粉が微かに指につく。

ええ、いや何これ……？

寝起きからホラー体験が過ぎる……そう思うと同時にダ・ヴィンチちゃんが遅刻だよ、と言ってクイツと眼鏡を光らせて片手を振った。

よく見ればそこには白い、円柱型の物体——つまるところチョークが握られていた。

は？ チョーク？ え、それを当たった衝撃で消し飛ぶような勢いで投げちゃったの？

道理でくそ痛いわけだ、馬鹿か？

いや俺が遅れたのが悪いから何も言えないのだけれども。

未だヒリつく額を抑えながらライダーさんの横へとついて、ふと彼女を見ればやれやれといった顔で見られた。

この人俺が寝坊するの見越して起こさなかったな……最近ちよつと手厳しすぎない？

部屋の掃除も手伝ってくれないし……むつとしようとしてからいや全面的に俺が雑魚すぎるな、と思い直す。

日が経つにつれて生活力が落ちている……今更ながら気付いてシヨックを受けていればそこ、話をちゃんと聞く！ とダ・ヴィンチちゃんに名指しされた。

学校の先生か何かかよ……いやあながち間違っつてはいないんだけど……

ごめんなさいと謝り続きを促せば彼女はちゃんと聞いてよね、と

頬を膨らませた。

ダ・ヴィンチちゃんのした話は、簡潔に纏めてしまえば召喚にかかるコストが減った、という一点のみだった。

かかるコスト——即ち”聖晶石”

今まで四つ必要としていた召喚が、これからは三つで良くなったらしい。

もう半年以上前になる——カルデア襲撃により故障してしまっていた機器類の修理の完了、これが主な理由になってくるらしい。

これがあるかどうかで魔力の転換効率が段違いだとか何とか。

まあ何にしろこれ以上無いくらいありがたいニュースだった。

サンキューな！　ところでいい加減礼装ばかり出る辺り改善されない？　と聞けばそれについてはキミ次第だから……と言葉を濁された、無念。

ところで、”聖晶石”が何か、キミたちは知っていたかい？

もう終わりだな、と思ってさっさと出ようとしたらダ・ヴィンチちゃんがそんなことを口にした。

まだ講義が続くのか、という気持ちと確かに全然知らないな、という気持ちが同時に現れ結局その場で次の言葉を待てば、彼女はニヤリと笑う。

ダ・ヴィンチちゃん曰く、聖晶石とは”あまたの未来を確定させる概念が結晶化させたもの”らしい。

……ちよつと抽象的過ぎない？　意味が分からないんですけど

……

言葉にせずともそう思っていればやはり顔に出ていたのかダ・ヴィンチちゃんは仕方ないなあ、と益々笑みを深めて説明を始めた。

一言で言ってしまうのであれば、それは”可能性”というやつらしい。

一般的な話でもあるがこの世には無限とすら言える可能性が広がっている。

あらゆるIF、あらゆる可能性、そういった取る選択肢一つで安々と行き先が変わってしまうようなあやふやなままにいる未来を”確

定”させてしまえる概念の結晶体。

それがコレだ、と彼女は言った。

え、そんな大仰なものだったのこれ……？

この前これでスタッフさんたちとキャッチボールしたばかりな  
んだけど……

え、大丈夫？ 落としまくってここちよつと欠けちやつただけど  
大丈夫？

そう言えば目えひん剥いてグーで殴られた、いやすまんかったつ  
て。

そんなハードだった午前も終えて午後、ちよつとお昼を済ませて  
カーミラと談笑していればまたもや集合がかかった。

今度はドクターで、いやに声が硬い。

もう、それだけで内容が察せられるくらいだ。

少しは隠せよな、そう少し笑い合ってからブリーフィングルームへ  
と入れれば今度は珍しく一番乗りだった。

早かったね、と笑うドクターにさつきまで食堂にいたから、と返し  
て適当な席につく。

ドクターはご飯食べたの？ と聞けば僕はまだ、と返ってくる。

そんなぎこちがなくて、当たり前障りのない会話だけを重ねていく。

部屋中を満たす心地の悪い緊張感が俺たちにそうさせていた。

背に冷や汗をかく、軽い嘔吐感が胸に広がっていて、何だかじつと  
していられないような情動に襲われるがそれをぐつとこらえた。

そうしてどれだけ待たせようか、何だか妙に長く感じたがそれで  
も数分といったところだろう。

スタッフ達がそろそろと集まって来はじめて、それから一拍置いて  
立香君とマシユが慌てて入ってきた。

これで全員か？ と思つたところでゆつたりとダ・ヴィンチちゃん  
がやってくる。

これで全員、そう、全員集まった。

コホン、とドクターが一つ咳払いをする。

それだけで全員が静まり返り、緊張感が高まり全てを包み上げた。

第七特異点への、レイシフト準備が完了した。

ドクターは静かに、感情を排した声でそう言った。

これが、最後の特異点。

ここの聖杯を回収すれば、残すはソロモンのみ。

だがしかし——そう、焦らないでくれ。

彼は俺たち全員に——とりわけ俺と立香くんを見て、諭すように言った。

これまでカルデアが総力を上げて前進し続けてきたお陰で、我々には僅かながら猶予がまだある。

今回だって相当辛い旅になるだろう、何度も死ぬような目に合うかもしれない、絶望という壁に打ちのめされるかもしれない。

だから、落ち着いて判断してほしい。

今すぐレイシフトをする必要はない、確りと準備を重ね、気持ちの整理、覚悟が決まったら声をかけて——

そう言いかけたドクターの言葉を遮るように席から立ち上がる。

そつと横を見れば立香くんが目があつて、彼もまたマシユの手を取って立ち上がった。

気持ちの整理はどうについている、あの燃え盛る都市から戻ってきた時から、覚悟だつて決まっている。

だから、大丈夫だよドクター。

全部、任せてくれ。

そう言えば彼は少しだけ呆けたように口を空け、それから苦しげに笑った。

そうだったね、キミたちはそういう子達だった。

今更氣遣う方が、ずつと失礼だったね、と。

さて、じゃあブリーフィングを始めようか。

切り替えたようにドクターは朗らかにそう言った。

最後の特異点、そこは人類史の、その始まりの場所。

地球全土に於ける各文明の興りたるもの、世界が未だひとつであった頃の母なる世界——紀元前2600年：古代メソポタミア。

正真正銘の最古の文明、つまり世界が未だ”神秘、神代”によつて



いた世界。

もつと簡単に言ってしまうえば、”神や神話上の怪物が日常的に存在していた頃の地球”。

敢えて難易度という言葉を使うのであれば、これまでの特異点とは一線を描く、そういうレベルの特異点。

ただ、そこに行くだけで今までの特異点を超える難易度だ。

レオナルド、頼んでいたものは？ ドクターがそう言うと同時に、ダ・ヴィンチちゃんがつこり笑って勿論できているさ、とマフラーを取り出した。

え、なに、あつちは冬なの？ そう問えば彼女はチツチツチ、と指を振るって言った。

これはキミたちに作った魔術礼装の発展型さ、と。

それを聞いて、直後に察して一瞬口元がひくついた。

だって、それはつまり、今度のレイシフト先はかのエジプトよりもずっと魔力濃度が濃い、ということに他ならない。

あそこですら神代レベルと言われたのにあれより濃いかそんなバカな、冗談が上手だなハツハツハ、と笑えば真顔でこれがなきや死ぬからね、と彼女が言う。

あの顔は……ガチの顔ですね、そうですか、はい、ありがとうございます……とマフラーを受け取る。

首元に巻いてみれば意外にも暑くない、どうなってるの？ と聞けばこれが魔術ってやつさ、とドヤ顔で言われた、いやちゃんと説明して？

まあそんなこんなで話は戻り、ドクターは改めて口を開いた。

紀元前2600年のメソポタミアは、所謂初期王朝時代にあたる、と。

これを魔術的な視点で見れば、ちょうど人間が神と袂を分かった最初の時代である、と。

この時代の王が、何を思い何を考えそうしたのはかは判明してはいないが、それでもこの事実だけは確かなもので、所謂神々の時代とも言えるものはここを起点に薄れていった。

要するに、先程も言ったがレイシフトをする、という事自体がもう  
とんでもなく難しく危険が伴う。

何せ紀元前だ、シバだって中々安定しない——否、するはずがない。  
しかしそれでも特異点の位置は割り出せて、その上で観測も可能と  
した。

大体スタッフたちと、それからレオナルドのお陰だよ、と彼は笑っ  
た。

ダ・ヴィンチちゃんが存在証明は任せてくれたまえ！ と大きく胸  
を張って言う。

レイシフトは確かに危険も多いが、同時に得難い経験でもある、現  
代では味わえない古代の世界を思う存分堪能してきたまえ、と。

それに呼応してドクターも不謹慎だけでもね、確かに素晴らしい発  
見や出会いもあるだろうと言った。

続けて、そのすべてが解決したら、旅の終わりに君等が得たものを  
僕にも聞かせてくれ、と。

いい話っぽい空気は禁止だ、これから戦いに行くんだぞ、ダ・ヴィ  
ンチちゃんが言ってる俺の背中をバンツと叩いた。

これくらいの勢いで送り出してやらないと！ と。  
いや普通に痛いからもうちよつとやんわり送り出してくれない？

そう言えばもう一発叩かれた、何故だ。  
そんな俺を見てドクターが軽く笑い、それもそうだね、と同調して

から己の両頬をぱちんと叩く。  
僕も皆に負けないくらい気合充分だ、コフィンの準備は直ぐにでき

る。  
準備が終わったら、そこから先は君たちの戦いだ。

前回の特異点は正に例外続きだったが——今回の特異点は例外そ  
のものみたいなものだ。

何があっても冷静に余裕を持って対応するように、いいね？  
ドクターはそう言って、それに俺たちは無言で頷いた。

では一時間後、レイシフトルームへ。  
その言葉を最後に、俺達はパラパラと部屋を出ていった。

一時間、寝るには少し半端だし身体を動かすにも半端な時間だ。どうしたもんかなあ、とどこか現実味のない感覚に身を委ねながら寝転んでいればふいにノックの音が部屋に広がった。

どーぞ、と言えは少しの間を置いて扉は開き、そこから鈴鹿が身を現した。

やつほー、なんていつも通りの軽い調子で、けれどもどこか、真剣味を帯びた表情で。

彼女にしては随分と珍しいことだ。

レイシフト先ならまだしもここ、カルデアでここまで緊張感を醸し出す彼女を見るのは初めてで、少しだけ緊張してしまう。

どうしたのさ、何て震えた声で言えば鈴鹿は少しだけ逡巡するように目を伏せて、それから意を決したように俺を見て、こう言った。

ねえ、大丈夫？ と。

——一瞬、言葉に詰まる。

何に対しての言葉なのか、それが分からなくて、しかしそれでも考えうる可能性のその全てに対しての言葉である、ということが直感的に理解出来てしまったからだだった。

大丈夫な訳、ないだろう。

奥から吐き出されそうになったその台詞を飲み下して繕うように笑って大丈夫だと、そう言おうとした直後ふわりと何かに抱きしめられた。

いや、何かではない、鈴鹿だ。

な、何を……!?

慌てて突き放そうとして、けれどもそれはできなかった。

鈴鹿は頻りに謝っていた、何故かはまるで想像つかないが、彼女は何に対して酷く繰り返すように謝っているのだ。

どうしたどうした!?! 何があつた!?! 意味不明過ぎるんだが!?!

パニックになりながらも努めて漏らされていく言葉を聞けば、鈴鹿は「ごめんなさい」と「私のせいだ」を繰り返していた。

ええ、何、怖いんだけど……

どうしちゃったの？ 軽いホラー体験すぎて気味が悪いまである

んだけど……

背中を軽く叩いてやって、鈴鹿を落ち着かせてやる。

何か俺お前のこと慰めてばっかりじゃない？ 何で人が英霊相手にこんなことしなければならぬのか……

ちよつと情緒が不安定すぎると思うんですけど……

ほら、俺は大丈夫だから、泣きやめ、と言えば鈴鹿は涙で頬を濡らしながらこう言った。

もう、二度と繰り返させないから、と。

今度こそ、息が止まった。

何を言われたのが直ぐには分からなくて、時間をかけてその意味を噛み砕いていく。

砕いて飲み込んで理解して、そこまでしてやっと声が出た。

お前、何を……？

たったそれだけの言葉が掠れて細くなって零れ落ちた。

動揺して上手く頭が回らない。

ループしているなんざ、誰かに言っても問題しか生まないことだ。

それ故に途中から誰にも悟らせないようにしていたというのに、どうして——。

そこまで考えたところで、鈴鹿が言った。

宝具を、使ったでしょ、と。

三千大千世界——太刀の中に無数の世界……つまるところ”可能性”を作り出し、見渡す事のできる力。

もつと細かく具体的に言ってしまうえばそれは、己の取りうる全ての”可能性”を確認、選択することのできる、ある種千里眼にも似た力。

それで、俺を見た、ということか？

そう問えば半分正解で半分不正解、と彼女は言った。

正解は視えてしまった。

何でもかんでも無差別に見えるわけじゃない、けれども、私と親しい貴方の姿は、見ようとしようがしまいが視えてしまった。

故に、識ってしまった。

マスターのこと、私識っちゃったよ、耐えられない。

いや、違う、あんなこと耐えられちゃいけないよ。

ごめん、ごめんね、本当ならずと黙っているつもりだったんだ、だってそれが、マスターの覚悟で、願いで、決意なのは分かりきったことだったから。

けれども、抑えきれなかった、レイシフトする前にいつも見るその顔を見ちやったら、我慢なんて出来なかった。

ねえ、行かなくても良いんだよ、あつちは恐くて、痛くて、苦しいよ。

先に待っていることは楽しみや喜び以上にずっと辛いことばかりだよ、だから、今ここで休んでも良いんだよ。

そう彼女は優しげに言っ、しかしそれをノータイムで跳ね除けた。

大丈夫、俺は、大丈夫だと、そう言っ。

それ以上、鈴鹿は何も言うことはなかった。

ただ一言、そっか、と呟き俺の身体を今一度強く抱きしめて、それからゆつくりと離れて向き合うように立った。

なら私も、私の全てを貴方に尽くしましょう、人理のために、貴方の願いのために、と。

この身が朽ち果てるまで、貴方の可能性をほんの少しでも押し上げましょう、と。

素晴らしい彼女は笑った、無理やり作ったものではなく、極自然に、華やげに笑った。

それがなぜだか無性に嬉しくて、ありがとう、と小さく言えば、鈴鹿はでも、と言葉を付け足した。

もつと周りに頼って良いんだからね、と。

いや頼るところか依存しているレベルなんだよな、お前らいなかったら今頃ここにいないからね？

そう言えばそういうことじゃないんだけど……と顔を顰められた、解せぬ。

何はともあれもう時間だよ、と言われてハッと時計を見る。

時間は既に残り十分、つまりもう五十分経っているということであ

る。

一時間ってやっぱり短いな、と思っただけから行こうか、と声をかけてから扉を開く。

すると、ちょうどよくライダーさんとカーミラが目の前に現れた。呼びに来てくれたのだろう、ナイスタイミング、なんて思っただけからふと違和感に気づく。

即ち来るのがおそすぎない？ ということだ。

ライダーさんやカーミラなんて、ダ・ヴィンチちゃんに過保護すぎると軽く説教されるくらい俺に甘いのだ。

いやそのせいで最近はおちよつと厳しめなのだが……まあそれは置いてこの二人なら一時間もあれば確実に俺の部屋に来ていたであろうことは間違いないのだ。

どうしたんだろう、と思えば後ろから鈴鹿が顔を覗かせてありがとうね、と二人にそう言った。

何のことだ？ と聞けば鈴鹿はおちよつと二人にさせてほしいと二人に頼んだらしい。

なるほどな、と納得する。

お前、思いの外用意周到だよな……そう言えばそれって褒めてる？ と返された。

うーん、ノーコメント！

思いつきリケツを蹴られた、いや褒め言葉、褒め言葉だから！

そんなこんなで五分ほど余裕を持って部屋に入れば当然のように全員集まっていた。

立香くんもマシユも、見た感じは気負いすぎている感じもしないし良い感じだ。

これなら安心して特異点に挑める、少しだけホッとしてればその立香君に大丈夫ですか？ と心配そうに問われた。

何か今日大丈夫かって聞かれ過ぎな気がするな……そんなどうでも良いことを考えながら大丈夫だよ、と返す。

大丈夫じゃなくても大丈夫でなければならぬのだ、そうでなければ次に進めない、歩を進めることができない。

だから、大丈夫、俺は問題ない、いつも通りの平常運転だ。

人の心配してる場合か？ と頭をくしやりと撫でて頑張ろうな、と軽く腹を叩く。

ぐつと漏れた声を聞き流してコフィンに入った。

当然のようにライダーさんにカーミラ、鈴鹿にがしつとしがみついてもらっていた。

何があっても離さんとばかりに力を込めるせいで若干腕が痛い、もうちよつと緩めて良いんだよ？ と言えば何故か更に力を込められた、何故だカーミラ。

そんなやり取りをしていれば不意に、ドクターの声が響いた。

心の準備は出来たね、という言葉に肯定すれば彼は少しだけ、確認をしようかと口を開いた。

これまでもそうだったが——任務は“聖杯の回収”だ。

特異点となっている時代の、その原因を突き止め消去するのは確かに重要なことではあるが、それ以上に聖杯の回収は優先されるべき事項だ。

残念ながら聖杯の座標は未だ不明、だがメソポタミアの何処かには必ず存在するはず。

だから、優先順位を間違えないように。

——これが、ぼくらにとつての最後の聖杯探索になることを祈っている。

では、いつてらっしゃい。

そう言い終えた彼の後を引き取るように、もう何度も聞いた無機質的な女性の声が響く。

手先は震えなかった、足は竦まなかった、これが最後なのだ、そう思つて目を瞑ると同時——世界は歪んで解けて、俺の意識は過去へと飛翔した。

一度粒子となった己の全てが再構成される、身体、精神、魂、そして意識と全てが移動しきつた次の瞬間、身体が跳んだ。

比喩ではない、ただ只管に、物理的にとんでもない勢いでふつとばされた。

瞬時にヤバいと本能が叫ぶ、それに従うまでもなく伸ばしきった手はしかしライダーさんの指先を掠めただけで終わった。

いや、いや、それはまずいだろ……!!

夢中で叫ぶ、ライダーさんの事を叫んで彼女の鎖が飛んで、しかしそれを掴めない。

誰かが叫ぶ、いやそれはもしかしたら自分だったかもしれない。

それすら分からなくなるくらいの強風——いや、それを通り越して最早暴風とでもいうべきほどの風が全身を、頭から爪先まで吹き飛ばしかねないくらいの力強さで叩きつけられていた。

身体のバランスは全くとっていいほど取れない、不安定に浮いた身体が為す術なく流された。

ああ、これはいつになくヤバいパターンだな、頭の何処か、冷静な部分がそう言って、直後に身体と意識が同時に飛んだ。

——声が聞こえた、大勢の人の安堵と不安が織り交ぜられた不安定な声だった。

——熱を感じた、何もかもを燃やし尽くす炎の熱、けれどもあの日味わった燃え盛る都市の炎とは違う、どこか優しい焰。

何なのだろう、そう思ったところで目が見えないことに気付いた。

真っ暗だ、何も見えない——いや、正確には薄っすらと光が透けて見える。

目隠しをされている……? 外そうとしてから腕が何かに縛られていることに気付いた。

………? ……!!? いや何事!?

全力で力を込めればギリりと手首が痛む、どうやら随分太い縄で縛られているようだ。

い、一体何が……そう思うと同時に後頭部に痛みが走った。

その痛みで冷静さを取り戻す、同時に意識を失う直前までの記憶を取り戻した。

沸き立つパニックを深く呼吸しながら落ち着かせて、一先ずパスの確認をする。

そつと気持ちを鎮めて彼女たちとの繋がりを探り、未だ途切れては



いないことを悟って少しほっとした。

何故だか念話は上手く出来ないが、それでも無事が確認できたのはラッキーだ。

彼女たちは未だこの時代にいる、そして俺はこの時代の現地人、もしくはこの特異点の元凶共に捕らえられた、と考えるべきだろう。

後頭部の痛みはまあ、落下時に頭でもぶつけたとかだろう——そう思っただけは違うな、と思い直す。

周りにライダーさん達の魔力を感じない以上、一緒の場所に落ちたという可能性は皆無なわけで、その上で俺が落ちたのであれば即死していて然るべきなのだ。

であれば俺は助けられた、そう考えるべきか？　そこまで思考を巡らせたところでいやそんな推測する必要ないじゃん、とそう思う。

普通にドクターに聞こう、どうせあつちからはこつちが見えている筈なのだから。

小声でドクターに問いかける、ハローハロー返答求む、ドクター  
おーい、ダ・ヴィンチちゃん……

暫らくの間待つて返ってきたのは只管の沈黙だった、え？　また？　またなの？　また通信が繋がらないの？　嘘だろおい……と嘆い

ていたが少ししてからいつもなら耳元にある通信機も存在を感じないことに気付いた。

……ああ、落としたか……

察すると同時、最悪だなと思ったがまあいつものことか、と切り替える。

ここまで状況が意味不明なことなんて——それこそいくらでもあった、誰にも頼れないことだって、同じくらいあった。

だから、大丈夫。

落ち着いて自分にできることを一つ一つチェックしていく。

身体のコンドিশョン——頭は痛むがそれ以外に問題は見当たらない、全快状態と考えて良さそう。

腕の縄——解くことは可能、魔力を込めるか礼装を使えばすぐにも。

周囲の状況——確りとは把握できないがそれでも不特定多数の存在を感じる、戦士というよりは一般市民のような雰囲気だが俺一人で制圧出来るかと言われれば絶対に不可能。

さて、どうしたものかなと頭を悩ませる。

このまま転がっていても仕方がないし——うん、まあこうするしかないか。

わざとらしく咳をする、同時に力づくで上半身を起こして壁にもたれかかった。

これだけすれば当然気付かれる、想定通り複数のざわめき声が聞こえ、同時に想定外の圧と共に声をかけられた。

——ようやく目を覚ましたか。

女性の声だった、けれども大人の声音ではない、どちらかといえば童女に近い声音。

しかしそこに込められた威圧はこれまで感じてきた所謂「強者」のものと同類のもので、下手には動けないなど思わせられて冷や汗が滲んだ。

ヤバそうなのいるじゃねえか……気付けなかった……！

——おい、聞こえなかったのか、返事くらいせぬか。

高圧的な口調でそう声をかけられて、それに慌てて応じようとするれば突然目隠しを剥ぎ取られた。

瞬間、目に写り込んできたのは二本の巨大な角を生やし、正しく炎を体現したかのような童女。

鬼——いや、サーヴァントか。

手汗が滲む、選択を一つ間違えたら死ぬと確信させられた。

これで少しは余裕が出来たであろう、と笑ったサーヴァントは次に、”何者か”とそう言った。

その一言に、どれだけの意味が籠もっているのだろうか。

俺の素性、所属、名前——いや、それ以上に問われているは恐らく敵か味方……いや、それも違うか。

もっと正確に言うのであれば害をなそうとするものかどうか、と聞いたところだろう。

であれば回答はシンプルで良い、そう、俺は——人理を救いに来た者、それだけだ、それだけでいい。

反応はあまりにもわかりやすかった、というよりこのサーヴァントが表情を隠すのが苦手である、と言ったほうが良いか。

聞いた直後は噛み砕くように眉間に皺を寄せ、徐々に理解していくと同時にふむ、と納得してから少しだけ頬を引き皺らせた。

もうそれだけでああ、このサーヴァントは敵じゃないな、と察せられた。

人理なんてワード、解っているやつが聞けば態度なんて直ぐに変えるものである、ただでさえ俺は身動き取れないようにされているのだから、尚更だ。

その上でこの反応、ということとはどちらかと言えばこちら寄り……聖杯に呼ばれたサーヴァントか……？

いや、そうだとしたらここまで納得したような表情をする理由がわからない、聖杯は現状の人理がうんたらという話は英霊に与えていない。

それなら……いや……うん、少し頭がこんがらがってきたな、と思ったところで何だかぶつぶつと何かを呟いていた彼女はコホン、と咳をしてであれば汝はあれらと敵対するもの、ということか、とそう言った。

あれら……？ 何それと思わず口に出してしまえば驚いたように目を見開かれた。

知らんのか!? とか言われたがいやマジで分からん、そもそも俺はここに来たばかりなのである。

この時代に来たと思ったら何か飛ばされて意識も失って気付けば今なのだ。

正直意味不明が過ぎている状況に慣れてなきや今頃パニック状態で奇声でも上げてるレベルだ。

なので至って冷静を装っているけどこの時代については本気で無知だし現状どうなっているかも全くわからない、と言えばハア、と大きくため息を吐かれた。

だからその辺の説明が出来ればしてほしい、がその前に——そこま  
で言つて言葉を切る、同じタイミングで腕の縄を強引に引きちぎつ  
た。

それを見た彼女の炎が揺らめぎ上がる、しかしそれを無視してそつ  
と頭を下げた。

助けてくれてありがとうございます、と顔を伏せたままそう言つ  
た。

確証はないがここまで来れば流石に助けられたことくらいは俺に  
だつて分かる、故に色々聞き出す前に頭を下げた。

何事も礼儀は大切なのである、それも命の恩人とあれば尚更だ。

深々と地につくまで下げる、そうすれば彼女は多少動揺したが、そ  
れ以上にどこか満足そうに鼻息を吐いた。

むふー！と言つた感じである、何だか張り詰めた空気が霧散した  
瞬間であつた。

ということの説明してくれ、すっかり説明ムードだと思つてそう言  
えばすげなく断られた。

曰く、何故吾がそんなことを、である。

すっかり宛が外れてぽかんとすればカラカラと笑い、吾が人間相手  
にそこまでする必要がないわ、と言ひ捨てその場に寝そべつた。

此処にいたければ好きにすれば良い、が、面倒は見んぞとそう言つ  
てから遂にこちらを見ることはなくなった。

……完全に予想外である。

殺されるわけでもなければ味方になるわけでもない、ただ好きにし  
ろと放られたのが初のこと過ぎて思わずフリーズしてしまつた。

だがまあ幸運なことに情報源はこの鬼だけではない、その辺の人た  
ちに目を向ければ俺たちの様子を見ていた人たち全員に目をそらさ  
れてしまつた、何故だ。

一步踏み込めばざりつ……若干後ずさりられる。

えつ、マジで何なの？ どうしてそんなに恐れられている……？

何かちよつと悲しいんだけど……そんなに俺の顔怖いか……？

いや本当に頼むから話だけでも聞かせてくれない？ 若干泣きそ

うになっていたら兵士風の男がこちらに歩み出てきてくれた、助かった……。

男曰く、ここはエビフ山というところで、ここにいる人たちは一応”盗賊団”を名乗っているらしい。

頭領は当然あの鬼——茨木童子である、とそう言った。

茨木童子……茨木童子!? いや待て待て待て、何で?

茨木童子といえれば日本の昔話とでも言うべきものに出てくる鬼の名称である。

かの大江山を本拠地に据え、京都にて悪行を繰り返した末に源頼光に討たれた……ああ、いや、討たれたのは酒吞童子だったか。

討たれそうになり、逃げおおせたんだっけな。

まあ兎に角そういう言ってしまえばしぶとく、また強大な力を持った鬼。

それが、あれ……? ?

チラツと姿を視界に収めまた男に視線を戻す。

まあ今更イメージと違うくらいでは驚きはしないがシンプルにここにいる、という事自体に驚きを隠せない。

メソポタミアと日本って何か繋がりあるか……? ? そこまで考えたがいや、考えるだけ無駄かと思う。

経緯は何にせよ、此処に居るということ自体が重要なのだ、いや出来れば経緯も知りたいところではあるのだが。

何となく知っていないのかな、と思っつて男に聞いてみればああ、それなら、と当然のように語り始めた。

えっ、知ってんの……? ? そう問えば勿論、というかウルクの民であれば誰でも知っている、と当たり前のようにそう言った。

彼曰く、茨木童子はウルクの王——賢王ギルガメツシユによって召喚されたらしい。

ついでに言えば彼女の他にも六人召喚したとか何とか。

その事実を頬を引き攣らせる、英霊召喚をたった一人で、しかも七人同時召喚! ?

化け物かよ——いや、実際化け物レベルなのか……ギルガメツシユ

と言えば相当ネームバリューのある英雄だし何よりこの時代はあまりにも古い。

神祕が近ければ近いほど魔術の類ってのは難易度が落ちるらしいし、まあそういうことなのだろう。

いやそれでも規格外過ぎるくらいなのであるが。

そこまで考えてふと思う。

彼はウルクの民であれば、とそういった。

じゃあ他の都市の人たちはこのことを知らないのか？

英霊召喚なんざするくらいだ、確実にこの時代は未知の脅威に晒されていて、それに対抗しているはず。

それなのにウルクの民しか知らないってのはどういう……？

そう聞けば彼は顔を曇らせて、それから絞り出すようにこう言った。

数多くあった都市はここ数ヶ月

でその数を大きく減らした、と。

大都市バビロンは廃都になり、都市ニップルは魔獣によって囲まれ都市ウル、都市エリドゥは突如現れた密林に覆われ連絡が取れない。

今ではウルクとその周りの都市しか機能していない、と彼はそう言ったのだ。

うーん、情報量が多すぎるな？

一体何がどうしてそうなった？

そこまで踏み込んで聞いても良いか？ とそう聞けば彼は少しの逡巡の後に、小さく、しかし確りと頷いた。

この時代、この世界——メソポタミアは現在三柱の女神による同盟……三女神同盟によって滅ぼされかけている。

北に巢食う魔獣の女神、南に腰を据える密林の女神、そして本拠地を持たず天を翔ける女神。

これらによってまたたく間に各都市は滅んでいったとか何とか。

特に北の魔獣の女神がヤバいらしい、都市ニップルより北はもう人の子一人おらず、現状ウルクより少し先に建設された北壁——通称：魔獣戦線によって食い止めているのが現状だとか。

そして此処は、その抵抗することから逃げ出した人々が集まっている場所であるとも。

それを統率しているのが茨木童子、彼女によって元よりこの地に住んでいた獣達も保護されていると。

ええ……何それ茨木童子めっちゃ良いやつじゃん……そう思えば実は彼女も元々前線にいたんですよ、と彼は言葉を漏らした。

北壁で戦っていたが、何かの理由によって前線から身を退いたらしい、それについてきた形で此処に来たと、男はそう言った。

身を退いた——？ この状況で、彼女ほどの英霊が？

傍から見ても相当な実力者だ、その上で撤退せざるを得ないと彼女が思うほどに敵は強大なのか……、なんて考えていたら原因は内輪もめだったらしい。

いや、え、ええ……？

そんなことある？ あまりにも理由が残念すぎるんだけど……

そんなことを言えば男に笑われた、あの人は意外と見た目相応ですからね、と。

ところで俺は数日前に茨木童子に拾われてきたらしい、何か茨木童子に向かつて一直線に落ちてきたんだとか何とか。

もし彼女がいなければ俺は今頃粉微塵になっていたということだ、マジでありがとう茨木童子……

そんなことがあってから数日、俺は未だに此処を出ずにいた。

なぜかと言われれば答えは至極シンプルで、今一人で降りていっても死ぬ未来しか見えないからである。

流石に俺も無駄死に何て御免である、故にここから出ずにいた、というよりは出られずにいた、と言ったほうが正しかった。

なにせ現状、茨木童子に頼り切りなのである。

ご飯一つ、身の安全一つとってもほぼ茨木童子に依存している形に近い。

せめてライダーさん達に見つけでもしてもらえなければ何か能動的な行動を起こすのは不可能であった。

まあ、茨木童子の協力を得られればその内では無いのだが、それも

また難しい話であった。

何せ茨木童子、ウルクの話をしようとすればそっぽを向くのである。

多少罪悪感的なものを表情に出してからプイツとするのだ。

子供か!?　と思うがそれはそれ。

機嫌を損ねても仕方がないので下手に触れられない、という訳である。

仲良くなろうにも割と取っ掛かりが見つかからない、俺は立香くんと違つてコミュカオバケじゃないのである。

考え事をする甘いものが欲しくなっちゃうな、とちやつかり持参した板チョコをパキパキ割つて食べていればもうすっかりマブダチと化した男に羨ましげに見られたので一欠片渡してやる。

滅茶苦茶嬉しそうな顔をするのでむしろ得した気分である。

……!　もしやこのチョコを配っていけば他の人とも仲良くなれるのでは!?

ふふふ……自分の天才的過ぎる発想に震えが止まらないぜ……と徐に立ち上がったと同時に、妙な視線を感じ取つた。

特段警戒すること無く振り向けば茨木童子と目が合った、いや、目が合ったというよりは熱烈な視線が俺の手の中にあるもの……即ちチョコレートに注がれている。

ゆっくりと右から左へ、左から右へと動かせば頭ごと動かし追いかけてきて妙に面白い。

猫か何かかよ、と思つたがこのまま遊んでたら気付かれて怒られそうだしチョコを差し出し食べてみるか?　と声をかける。

なっ、わ、吾は別に……とか言い出したがめんどくせえと一欠片強引に手渡せば彼女は恐る恐る口にそれを放り込んだ。

直後起こつた事柄は正直動画に撮つておきたいと思つたほどである。

警戒しているのが見るだけで分かるほどの渋面が、チョコを口に入れた瞬間氷解していき自然と口角が持ち上がっていくのだ。

所謂満面の笑みというやつである。



不覚にも愛らしいとか思っちゃうレベル、何だこの鬼完全に童女じゃないか……

そんなチョコ事件があった日から、茨木童子と関わることが増えるようになったと思う、ついでに言えばその他の人たちともだ。

とうか茨木童子に関しては何事あるごとにチョコを要求してくるもんだから会話することが必然的に増えた、と言った方が正しいか。クッククック、早くちよこれいとを寄越すのだ、とか言ってくるの控えめに言っただけ面白すぎる。

そんな日々がどれだけ続いただろうか、ここに來てからもう一週間は経過しているだろう。

流石にここまで日数が経てば焦りもするが、しかしあまりにも平穩過ぎるこの環境が少しの安心を俺に齎していた。

今日も今日とて茨木童子と狩りと見回りに出て、炊事組とご飯を作り、それを美味しくいただき適当に喋っていればもうおやすみなさいの時間である。

うーん、この墮落っぷり……

目を逸らしていたがそろそろ行動起こさないよな、と自分に言い聞かせて立ち上がる。

向かう場所は当然茨木童子の元だった。

この盗賊団は基本、巨大な洞窟に屯してるが彼女だけは更に奥の小さな部屋にいるのである。

なあ、今良いか？　と言えば吾はもう眠い、と言われたのでチョコレートをチラつかせておく。

それだけでううむ、仕方ない、何用だ！　と彼女はその身を起こしてその場にちよこんと座った。

あまりにもチョコすぎる……

まさか俺のおやつが交渉道具になろうとは誰が想像できただろうか……

過去の俺最高かよ……超ナイス……

内心グツと親指を立てながら茨木童子にちよつと前線——魔獣戦線について聞きたいだけでも。

そう言えば彼女は酷く嫌そうに顔を顰めたが、一つため息を吐いた後にそうさな、と話し始めた。

彼女はどうかやら魔獣戦線にて巴御前と名乗るサーヴァントと共に戦っていたらしい。

巴御前——平安時代の女武者、かの源義仲の妻である。

また日本出身のサーヴァントか、と思えばギルガメッシュが呼んだサーヴァントは一人を抜いて全員日本出身らしい。

いやどうして？　と思っただが流石にそこまで知らん、と切り捨てられた。

まあ兎にも角にも茨木童子は巴御前と共に戦っていたが何とも反りが合わなかったという。

なぜかと言えば巴御前は、所謂鬼嫌い、らしいのだ。

そんな状況であれば協力も何も上手くはいかず、結果的にこうなった、と茨木童子は少し淋しげにそう言った。

なるほど、ね。

なんか——すつげえだつせえな。

そう言った瞬間、空気が揺らめいた。

ゴオツと熱気が走り、俺の周りに火が立ち上り茨木童子がゆらりとこちらを見据えた。

今、なんと言ったか。

その言葉だけは認めんと言わんばかりに彼女は圧を高めてそう言った。

呼吸がしづらくなっていく、汗がダラダラと流れ始めて鼓動が早くなっていく。

そしてそれら一切を無視して口を開いた。

だって、そうだろ。

召喚されて主従関係を結び命令に従うことになったけど仲間と反りが合わないから勝手に逃げ出しまーす、茨木童子がやったのはそういうことじゃないか。

そこにはもつと複雑な何かがあったかもしれない、けれども結果的にはそう見えるしそうなっている。

であれば尻尾巻いて逃げ出したって言われても仕方のないことじゃないか？

そう言えば彼女は顔を酷く眉間に皺を寄せたが、しかし次にこう言った。

話し合いなど、和解など、人間のすることである、と。

吾は鬼だ、であればそのようなことは不要である、と

熱気が高まっていく、炎はジリジリと皮膚を焼き焦がして燻った匂いが鼻孔を擽っている。

何でこんなことしてんだ、と思うと同時にしかし言わなければならぬと、強くそう思った。

逃げ出したというのに、それでも誰かを護るために動けるような英霊なのに、何て——何て、情けないんだ、とそう思ったのだ。

鬼であったとしても、それでも貴女は人理を救うのを手伝ってほしいという呼びかけに答えてくれた強大で、頼もしくて、心強い英霊なのだろう。

であればその意思を半端に捨てないでくれ、たかだか反りが合わない程度で諦めないでくれ。

確かにまどろっこしいことは嫌いかもしれない、もしかしたら気を遣って離れてくれたのかもしれない、だけどそれは悪手だ。

それでは巴御前は貴方の存在を認めないままだ、結局貴方は大したことのないちっぽけな、逃げ出したモブ以下の鬼であると記憶されて終わりだ。

そんなのは、あんまりじゃないか？

認めさせてやろうじゃないか、見せつけてやろうじゃないか。

茨木童子はこんなにも強くてかっこよくて頼り甲斐があるのだと、巴御前に、メソポタミアに刻みつけてやろうじゃないか！

炎は急速に強まった、煩いと叫ぶ茨木童子に負けなくらいの叫び声を上げた。

少しでも悔しいって気持ちくらい、持ち合わせてるはずだろ！

それなら、逃げるなよ、立ち向かえよ、認めさせてみろよ!!

言葉と同時に、焔は想像を絶するほどに燃え上がって空気を焦がし尽

くした。

ああ、これ死んだな。

言葉の選択をミスったか、頭の冷静な部分がそう言って、素直にそれに納得した瞬間、焰はふわりと火の粉を散らして姿を消した。

……？

現状に理解が追いつかない、困惑に頭を支配されて思わず動きを止めてしまう。

一体何が……？

そう思うと同時、揺らめく空気その奥で、こちらを見据える茨木童子と目が合った。

一言、吾に出来ると思うか？ と不安定に揺れた声音でそう言った。

茨木童子——彼女も、どこか思うところはあったのだろう。

というか、こんなことをしている時点で未練たらたらではあるのは明白だった。

思えばたかだかチョコ如きでさらっと話をしたのもおかしなものだ。

恐らく彼女は戻る理由を求めていた、後押ししてくれる何かを探していた……そう捉えるのが自然だろうか。

まあ大体そんなところだろう、そうあたりを付けてから無言で領けば、彼女はそうか、と薄く笑った。

翌朝、彼女は山を降りると宣言した。

そして人々はそれに対して一切反抗するような言葉を吐くことはなかった。

何だかんだウルクが気になって仕方なかったのよね、何て笑顔でそういう準備を始めたのである。

いやメンタル強すぎない？ 多少の動揺すらしないとか強者が過ぎる……

意図せずポロツとそう言ってしまえば、何となくこうなるような気もしていたから、と言われた。

皆、察していたということなのだろう、自分たちの気持ちも、茨木

童子の気持ちも。

そんなこんなで告げられたその日の内に下山である。

行動力が高すぎる……そう思ったらウルクの民は皆こんなもんだ、と言われた。

いやウルク民怖すぎるだろ。

下山に一日、そこから更に都市ウルクまで三日。

少数であればもう少し短縮できる距離ではあったがしかしこの盗賊団、意外にも数が多い。

百人近くいるとなればどれだけ早く動いても遅れは出てしまうし——それに何より、道中チラホラと遭遇する敵が強いのだ、それこそ今まで相手にしてきた魔獣と比べても、一線を画するほどに。

かの特異点——エルサレムでも馬鹿げた戦闘力を誇っていた粛清騎士達と比べても負けられないほどの実力を持つているこの時代の戦士達と同等のちからをもっている、といえればわかりやすいか。

つまり俺が一人でもまともにもやり合おうと思えば数匹殺したただけで呆気なく殺されてしまう程度、ということだ。

正直茨木童子がいなければ今頃全員死んでいただろうことは想像に難くない。

それほどまでに、この時代が晒されている脅威が大きすぎる。

久方ぶりの不安が肌を撫でる、思わず片腕を抑えてああ、早く合流したいな、とそう思った。

山からウルクまでの道のりは、それでも被害は全くのゼロでスムーズに進むことが出来た。

というのも魔獣と遭遇すること自体があまりなかったのである。

見かけたとしても二〜三匹程度の群れで、盗賊団の男衆と共に時間を稼ぎ、後は茨木童子が一扫してくれる、というワンパターンな戦法だけで案外どうにかすることが出来た。

何だかんだ、魔獣戦線とやらで多くの魔獣を塞ぎ止めているのだから、そんなことを考えながら歩き日が沈んだ頃、ウルクへと到着した。

茨木童子が何だか気まずそうにスピードを落とすのでその背中を押すようにウルクへと近づけば門番と思しき男が現れた。

茨木童子を視界に収め、遅れて後ろの民衆へと目を向け愕然と口を空け開く。

帰ってこられたのですか!? という声が響き茨木童子が無言で、しかし照れくさそうに頷いた。

それに良かった、本当に良かった、直ぐにでも王にお会いください、と声を漏らしながら後ろの人々は全員避難していた民たちですね——と言いかけたところで言葉を止めた。

正確に言うのであれば、俺に目を向けて言葉を止めたのだ。

次いで、その服装、その手の甲の印……それに聞いていた風貌にもピツタリ合う——貴方は、カルデアの方、ですよ？ とそう言った。

思わず目を見開く、何故それを——そう尋ねる前に頭が答えをはじき出す。

此処には恐らく立香君達が既に来ているのだ、そして俺のことを捜索していくれていた……いやまあ一週間も連絡取れて無かったのに探されて無かったらショックってレベルでは無いのだが。

この時間であれば恐らく……カルデア大使館にいらつしやると思います、心底心配なさつていらしたので、どうかお早めにお会いください、と言われて門を通された。

いやカルデア大使館って何？

都市ウルクは想像を絶するほどに賑やかな街だった。

あれだけの脅威に襲われているながら、民衆からはまるで笑顔というものが失われていない。

どこか緊張し、急かされているような雰囲気はあるがしかし何処までも楽しそうにしている。

今までの特異点とは全然違うと言って良いだろう、それほどまでに皆が皆、明るく振る舞っていた。

盗賊団の皆は出てく前の職場や家に各々走っていき、他の都市から来た人だけが数人残る。

先に寄ってつても良いか？ と聞けば許す、と茨木童子が言って、残った人たちも一様に頷いてくれた。

特に茨木童子は若干助かったみたいな顔をしている辺り相当王——

—恐らくギルガメツシュ王に会いたくないんだろうなあ、というのが分かる。

まあ何はともあれ取り敢えず道行く人にカルデア大使館は何処かと聞きながら辿り着いたそこは、少々古ぼけた大きな宿舎だった。

大使館……？　　と思いつながらももしもーし、誰かいますかー何て言えはばーい、ともうすっかりと聞き慣れた声が響いて扉が開く。

よっ、久し振り、マシユ。

そう言えば彼女は呆けたように口を開き、次いで先輩?!?!と驚きの声を上げた。

同時、ドタドタと音が聞こえてくる、随分と複数の足音だな——そう思った瞬間重い衝撃と共に視界がブレた。

何かいっつも人を不安にさせてるな、倒れ込みながらそう思う。

……心配かけたな、ごめん。

飛び込んできた鈴鹿や立香君、その彼の通信機から溢れるダ・ヴィンチちゃんたちの声を聞きながらそう呟いた。

しばらくもみくちやにされて、ようやく解放されたと思ったたら何か知らない人たちがいた。

……いや本当に誰？　　と言えば彼らは苦笑いした後自己紹介を始めた。

立香君が右から牛若丸、弁慶だよ、と笑って言う。

……ふーん、なるほど、なるほどね？

事前に七騎、サーヴァントが召喚されていると聞かされていなければ思わず吹き出していた所だがなんとか堪え、よろしくな、と手を差し出す。

二人とも歓迎するように、ええ、宜しくおねがいます、と手をとつた後に黒髪の剣士——牛若丸がところで、と口を開いた。

後ろのそいつは一体？　　と。

そいつ——勿論、茨木童子である。

前線から逃げ出した臆病者が今更どの面下げて来たのか、少々気になるのでありまして、と真顔で言う。

うーん、この当たりの強さ……幾ら何でも歓迎されなさすぎだろ

……  
何て返したもののかな、と思っていればズイツ、と茨木童子が前に踏み出た。

何、吾の力がどうしても必要だと言われたのでな、気まぐれに応じただけよ、と。

カカカと笑いそう言ったものの牛若丸にギラリと睨めつけられてしよぼんと俺の後ろに隠れた。

いや何をやっているんだこいつは……？

そう思ったが口に出す前に飲み込みまあ、そういうことだ、とだけ言っておく。

状況は大体把握してる、戦力は少しでも多いほうが良い、それが英霊であるならば尚更だろう。

そう言えば彼女はじつと俺を見据えた後に、まあ良いでしょうと視線を外した。

ということで王つてのに挨拶をしたんだけど、彼処に居るつてことで良いのか？ と街の中央、最も高い建物を指差して言えば肯定の言葉と共に頷かれる。

立香君にもらった予備の通信機を付け、ちゃんと繋がることを確認してからじゃあ行つてくるわ、と言えば当然のようにライダーさんとカーミラ、鈴鹿が立ち上がる。

疲れてるだろうし良いよと言ったら無言で足首を蹴られた、何故だ。

そんな経緯があり、四人のサーヴァントと数人の市民と共に王の居場所——ジグラットと言うらしい——へと向かう。

道中、この一週間何をしていたのかと尋ねれば三人は当たり前のように俺の搜索だ、と言った。

ウルクを拠点に情報をあちこちで集めながら搜索していた、と。

申し訳ねえ……そう思いながら立香君は？ と聞けば彼らは町中の仕事を手伝っていたとか何とか。

……え？ 何その格差は……一体何があったの？ そう尋ねれば立香君達は王——ギルガメッシュ王のお眼鏡にかなわなかったら



い。

何でも弱すぎると一蹴されたとかなんとか。

ええ……立香君達でそれなら俺とかもうどうしようもない？

というかそれなら何でお前らはそんな自由にしてたの？ と聞け

ば彼女らはこう言ったという。

サーヴァントはマスターがいてこそ本来の力を発揮する——我らがマスターが現れれば今の何百倍もの力をお見せ出来るでしょう、と。

いや何言ってるの？

待て待て待て待て、いや俺を過信し過ぎだろ馬鹿か？

期待が重すぎて身動きが取れないまであるんだけど……そう言え  
ばにつこり笑って無視された、いや話を聞いて？

空には月が上がる頃、未だジググラットには誰か——恐らくギルガ  
メツシユ王の声が響いていた。

ひつきりなしに命令が飛んでいる、忙しいってレベルじゃないぞ  
……これ俺とかが普通に話しかけにいいって良いものなの？ そう言  
えば気にしないで、早くしてくださいと急かされた。

彼女たちに背中を押されて前が出る、ついでに茨木童子も押されて  
隣に来たと同時に声をかけようとしてかけられた。

遅かったな、と。

ただ一言、たったその一言だけで重圧がのしかかってきた、思わず  
頭を垂れてしまいそう——そう、かつてのオジマンディアスにも近  
い重圧。

気合でそれを捻じ伏せる、静かに全身へと力を漲らせグツと顔を上  
げて目を合わせた。

ほう、と何故だか驚いたように納得した彼はしかし、俺から直ぐに  
目を逸して茨木童子に目を向けた。

何用か、と静かに彼はそう言い、茨木童子は身を震わせた。

その肩に、そつと手を乗せる。

視線を合わせた後に、彼女はゆっくりと頷き声を張り上げた。

もう一度チャンスをくれと、次こそは巴御前とも上手くやってみせ

ると、この鬼の誇りにかけて、と。

そう、鬼の誇りとまで彼女は言ったのだ。

その言葉に少しだけ目を細めた彼は、よかろう、と口にした。

であれば明日からまた持ち場に戻れ、とあっさりと言った。

意外だな、なんて思ってたればもう貴様に用は無いと云わんばかりに

茨木童子から目を離し、次に俺を見る。

またカルデアのか、ふん、少しは骨がありそうか。

そう呟き、それから何をしにきたとそう言った。

無論——人理を救いに来た。

異常なほどの緊張感の中、目を合わせてそう言えば彼は少しだけ目を細めてから、またそれかと言った。

貴様ごときに出来るとは思えんが——まあよかろう。

そう言い彼は玉座から立ち上がり杖を構えた。

……え、何？ 何をする気なの？

その疑問は問う前に解消された。

構えろ、深く言葉を交わすよりこちらの方が早い、我が貴様らにかける時間はそう無いのでな、とそう言ったのだ。

彼の背後の空間がまるでしずくを落とされた水面のように円状に、そして黄金色に歪んだ。

何だか嫌な予感がする、回避に徹しろと叫んだ瞬間、その歪んだ空間からいくつもの杖が顔を覗かせた。

直後、杖の先が輝いて、そしてそこから光が飛び出した。

——!?! 一撃目を身体を逸して躲し、次いで勢いよく手を伸ばす。

同時、ライダーさんが俺の手を引き一気に引き寄せた。

耳元を光が掠めて通り抜ける、助かったと思った瞬間、光は頭を貫いた。

彼の背後の空間がまるでしずくを落とされた水面のように円状に、そして黄金色に歪んだ。

殺す気満々かよクソツタレが……!!

正直手を抜くくらいはするだろう何て油断していた、甘すぎたし、見透かされていた。

全身の緩みきった空気を入れ替えるように空気を吸い込み吐き出す。

礼装にそつと手をかけて、相手を殺すのだと思い込む。

黄金色の杖が顔を出す、瞬間地を鋭く蹴りつけた。

姿勢を低くする、自動なのか手動なのかは分からなかったが執拗に俺だけ狙う光の束を二つ、三つと躲して軽く跳躍、腹の下を通り抜けた光を見ながらライダーさんと叫んだ。

直後、身体に鎖が巻き付き鋭く引つ張られる、それについてくるように走る光が鈴鹿とカーミラによって弾かれた。

——近づけない、というかの確に雑魚の俺が狙われて、それをフオローするのに手間がかかりすぎている。

厄介だな、そう思うと同時に宝具を展開させた。

鈴鹿——！

瞬間、幾百の刀が顕れた。

これ以上は躲しきれない——ならば全て叩き落として穿ち抜く。

先手必勝、何か新しいことをされる前に殺してみせる。

金属音が激しく、連続で高鳴っていく。

光と刀の欠片が舞って、それらを縫うように駆け抜けた。

ギルガメツシュ王が俺を見る、同時に振りかぶられた斧をカーミラのアイアンメイデンが受け止め、しかし断ち落とされる。

だがそれで良い、勝負はいつだって刹那で決まる。

ライダーさんが一步踏み込んだ、二本の釘剣がギルガメツシュ王の足下に突き立ちライダーさんが跳ね上がる。

鎖が伸び切り同時、その鎖が彼の身体を縛りあげた。

カーミラの杖がひらめく、激突音は更に苛烈さを増して鈴鹿が苦悶の声を上げた。

時間は無い、直ぐに決めないと生存は無い。

走り込む、カーミラの魔力光が爆発的に閃いて、そしてそれが極光に撃ち落とされる。

衝撃で目が眩む、それでも構うこと無く踏み込んだ。

足音はしない、つまり動いていない、であれば見えなくても仕留め

られる——！

鎖がちぎれる音がした、同時カーミラが吹き飛びライダーさんが動揺したような声を漏らした。

つまりもう、今しかないということだ。

概念礼装展開——拳舞は鮮やかに——焰を纏う少女の姿を幻視して、直後にそれと身体が重なった。

燃え尽きろ——！

叫び声を上げながら拳を撃ち放つ、瞬間視界が反転、宙へと浮いた。巨大な斧の、刃のついていない部分が身体へと吸い込まれるように近づき、そしてそれを躲した。

緊急回避……やっぱりカルデアの魔術は最高だな！

身体が無理な方向に動いて嫌な音を立てて軋む、それでも通り過ぎる斧を蹴って前へと躍り出た。

——収斂こそ理想の証——

全身に炎のような熱さが、剣のような冷たさが広がっていく。

異常なまでに向上した身体能力を以て、一步強く踏み込むと同時に、腹へと衝撃が走った。

あまりにも重い一撃、ゴボリと息が吐き出されて霞む視界の中、反射的に令呪を切った。

爆発的に魔力が上がり、光よりも早く俺を捕まえたライダーさんの眼光が弾けるように輝いた。

刹那の停止——それを狙ってカーミラの杖が閃きアイアンメイデンが口を開いた。

しかしギルガメッシュ王の姿は飲み込まれること無く切り捨てられる、だがこれで数瞬間の時間が稼げた。

光の雨は既に止みかけていた、それは即ち彼女に余裕が出来るということに他ならない。

傷ついてはいるが依然その瞳の光は失われていない、鈴鹿の名を叫ぶと同時に彼女は刀を以て突っ込んだ。

銀の刀が閃き数度かち合い光が注ぐ、ライダーさんの鎖が彼女の腹を縛って引き寄せそれと入れ代わるように飛び込んだ。

盾になるかのように光が降り注ぐ、それごとぶち抜こうと礼装を展開して——「ここまでだ戯け!!」

光は霧散しカウンターで殴られた、え、何？

此処を壊す気か阿呆め、と彼は玉座にどかっと座りそう言った。

次いでまあいい、貴様のことはよく分かった——さしずめ、天命を変えるものといったところか、と。

天命を変える——かつてキングハサンにも言われた呼び名。

一体俺に何を視ているんだ、そう思うと同時に気が抜けたのかその場に座り込んでしまった。

概念礼装をしまったせいで足がガックガクである、リミテッドゼロオーバーを使っても疲労困憊でぶっ倒れることはなくなったがそれでもこの有様だ。

はあ、はあ、と息を荒くしながらギルガメッシュ王と目を合わせれば彼は少しの逡巡の後に認めよう、と言った。

この時代においてその力を振るうことを許す、カルデアの、そこな三騎のサーヴァントと魔獣戦線にて活路を拓け、とそう言った。

思わず呆けてしまう、何とかなったのか、と実感が湧かずにそうしていれば返事はまだか、と言われて反射的に立ち上がり応える。

そうすれば追って他のものから指示を出す、カルデア大使館にて待機せよ、と言われてそれに従い背を向けると、思い出したかのようにああ、少し待て、と言われて振り返る。

貴様のその心意気は認めよう——だが、怪物と戦うものは常にそれにならぬように気をつけねばならない、努々そのことを忘れるなよ、と彼はそう言った。

鼓動が一際強く跳ねる、何を言われているのかが一瞬すら必要なく解ってしまい、それでも肝に命じておきます、とそう答えた。

翌日、カルデア大使館で朝を迎えた俺の元をシドウリと名乗る女性が訪ねてきていた。

何でも昨日命じられた命令の詳しい内容だとか。

といってもまあざっくり言ってしまうえば昨日言われたことと大して変わることはなかった。

立香君達にじやあまたね、何て別れを告げてからシドウリさんの連れてきた兵士の案内で茨木童子と共に魔獣戦線へと向かった。

北壁自体はそう遠くない場所——歩いて数時間程度の場所にあった。

右から左まで延々と続く壁、果てが見えないほどで現代風に言うのであれば正に万里の長城、といったところだ。

壁の後ろには巨大な……それこそウルクにも負けないほど巨大な都市があり、一步踏み込めばやはりここも酷く盛んだな、と思う。

まあ、楽しいだけではなさそうだけれども。

ギの24を超えられた！ 付近の市民は退避、牛班は至急討伐へ！ そんな怒声と戦闘音が響く、手伝った方が良さそうか？ と聞けばいいえ、あの程度で助けを請うほど我らは弱くはありません、それよりも早く最前線へ、と促された。

城壁のように連なる高い北壁の上、そこには銀の長髪靡かせた麗人がいた。

それを視界に収めると同時、茨木童子がヒエツと声をあげる。

その反応で、あああの人が噂の巴御前かと察した。

ほら、行こう、と茨木童子の手を取り兵士に続けば彼女はゆるりはこちらに振り返り、何かを言おうとして口を開き、しかしそのまま固まった。

そう、戻ってきたのですね、茨木。

それは——ええ、それは頼もしい限りです。

何かを飲み込むように、激情を抑えるように彼女はそう言って、俺へと直ぐに目を向けた。

そちらの方は？ と聞かれてカルデアのものです、と答える。

ギルガメッシュユ王の命により魔獣戦線に配属されました、宜しくおねがいしますと手を差し出せば優しく握られる。

時間が空いた時にでも話したら良いですね、とふわりと笑って彼女は言った。

……随分と態度が違う、いや、これでも彼女は相当平等に接しようとしている方なのだろう。

そう思いながらああ、よろしく、と強く握り返した。

和やかな挨拶もそこそこに、どうすればいいのか聞こうとしてふと止める。

なぜかと言えば、巴御前が何も言わずにじっと見つめているからである。

いや、俺のことは見ているのではない、俺の後ろ……つまり茨木童子。

そんな巴御前と意地でも目も合わせようとしなない辺り二人の溝は深そうだ。

まあ、そんなことは分かりきっていたことではあるのだが。

ゆっくりと振り返って茨木童子を見る、揺れに揺れていた瞳と目を合わせて、一言、呟くように言葉を紡ぐ。

覚悟は、決まってるんだろ——。

直後、彼女はパンツ、と乾いた音を両頬を叩いて響かせた。

睨むように目を細める巴御前に、一步踏み出て茨木童子は頭を下げる。

無断で離脱したことは、悪いと思っている、と。

だが吾は吾の在り方を、絶対に汝に認めさせてやる、何を言い、何を言われようがこれが吾であり、鬼である、見ておるがいい！

巴御前を指差して、叫ぶようにそう言い茨木童子はザッ！ と駆けで行った。

元よりこの場は彼女が戦っていた場所だ、勝手はわかっているだろうから心配はないが——何というか、想定外である。

少しだけポカンとしていれば、彼女もまた呆けていて、どちらともなく咳払いをして場を取り直す。

改めてと言っては何だが、結局どうすれば良いのか聞けば巴御前は迷う素振りすら見せずにこう言った。

貴方方には私と共に魔獣達の総指揮官・ギルタブリルを討ってもらいます、と。

さらりと、何か重みを言葉にのせることもなく、さも当たり前のように言った。

いや誰？ そう思ってたアホ面を晒していれば聞いていないのですか？ と首を傾けられる。

聞いていればこんな顔しないんだよな、そう思ってた領けばなるほど、と少し考えるように唇に指を添えて、それから少し説明だけしましようか、と小さく笑った。

城壁から中に降りていき、少し広めの部屋——彼女曰く、休憩場で彼女は口を開いた。

ではさらっとだけ説明いたしますね、と彼女はそう言い魔獣が写った二枚の写真を貼り出した。

此処、魔獣戦線では二種類の魔獣との交戦が主なものとなっていない。

各名称を右からウリデインムとムシユフシユ、どちらも強力ですがこの時代の戦士たちは勇敢かつ、強靱。

お陰で未だにこの防衛ラインを守ることが出来ていますが、それでもやはり数が多すぎる上に、異様なほどに統率が取れているせいで押されております。

ギルガメツシュ王が召喚した、私以外の英霊達の尽力が無ければ今頃この壁は原型をなくしていたと思えるほどには。

とは言っても現状が続くようではその未来も遠いものではありません、そこでまずはこの統率を崩すべきだと私達は考えました。

数の差はもうどうしようもありませんが、この統率さえ無くしてしまえば向こう半年は保つ見込みだからです。

ではこれをどのように崩すか、色々考えましたがやはり統率している者——つまり総指揮官：ギルタブリルを討伐するしか無いでしょう。

しかし現状の戦力では攻勢にまで踏み出せなかった、更に言えば大きな戦力が一つ欠けてしまっていた、故に防戦一方でした……が、しかし。

貴方達が来た。

あまりにも大きな使命と、強大な力を持った貴方達が。

カルデアのマスター、偉大なる使命と責任を背負った勇敢なる人、



その意思に共感し従う三人の英霊達よ。

どうか、お力添えをお願いいたします。

言葉の終わりに彼女は頭を下げた、そつと静かに深々と。

顔を上げてくれ、そう言ってから立ち上がる。

俺に……俺達に出来ることであれば何でもしよう、いや、何でもさせてくれ。

この時代を、未来を救うための努力は、ほんの少したりとも惜しみたくはないから。

そう言えば彼女は少しだけ、見ようによつては悲しそうにすら見えるような瞳でありがとうございます、とそう言った。

ギルタブリルとは幾度か戦っております、故に戦場に出れば直ぐに、とは言いませんが必然的に戦闘にはなるでしょう、と彼女は言った。

しかしこちらにも直ぐにはうって出ません、とも。

曰く、何事も準備は必要なものです、相手が強敵となれば尚更、とのことだ。

その言葉に少しの安心感を覚える、怯えるように震えていた心が少しずつ落ち着きを取り戻してゆつくりと息を吐いた。

それを自覚すると共に軽い嫌悪感を覚える、ここまで来て何をビビっているんだ俺は、と唇を噛んで、それから少しずつ飲み下す。

そんな様子を不思議そうに見ていた彼女は何を思ったか、今日はまだ戦場にも出てもらうことはないのでご安心を、と言った。

内心を悟られたか……？ そう思った俺は大丈夫だからと、そう言おうと思つたら口に指を当てられた。

どちらにせよ兵士の皆さんと顔合わせをしなければ戦場に出たところで上手く立ち回れませんよ、と。

そんなこんなで巴御前に北壁内を案内して貰ったり、戦況を聞いている内に日は沈みかけていた。

今日は何処で休めば良いんだろう、なんて聞けば巴御前の代わりに鈴鹿が答えた。

勿論宿舎つしよ、と。

これから一緒に戦う人たちとも交流できるし丁度いいんじゃない？　と言われてなるほど、と思う。

確かに効率的だ、一応巴御前に聞けばええ、そのようにしてください、とお墨付きを貰う。

やったぜ、と思うと同時に宿舎と言ってもどの部屋で休めば良いのか、そう聞けば私達と同じ部屋で良いでしょう、とライダーさんが言った。

彼女らはここに寝泊まりしていたらしい。

何か気恥ずかしい気もするが今更だし、まあ良いかと思えば不意に、一際大きな、複数の人の声が微かに鼓膜を打った。

妙に暑苦しい声だ、何の声かと聞けばああ、そういえば挨拶がまだでしたね、と巴御前が言う。

兵士たちが訓練しているのですよ、指導を任されているのは私達と同じギルガメツシュウ王の英霊です、挨拶に参りましょう、と彼女はそう言った。

北壁の上、黄金に彩られた砲台——巴御前曰く神権印章ディンギルというやつらしい、何だそれは——がやけにだだっ広く作られたそこには二十から三十人ほどの戦士と、それからやけに目立つ金の鎧を纏った人がいた。

兜も被り、その頭からは炎のようなものが揺らめいている。

ええ……何あれ？　何かちよつと怖いんだけど……

そう思うも構うこと無く巴御前やライダーさん達が行くため追いかけるように足を早めて近づけば、その戦士もこちらに気付きその手を止めた。

すみませんが、少しの間反復練習！　と叫ぶように言いこちらに近づいてきた。

巴殿、何用ですか？　と男——声音が男性のそれだった——は言い、巴御前はええ、少し人を紹介したくて、と俺を見る。

自己紹介は自分でしろ、ということだろう。

まあ当然だ。

若干ビビりながらも一步踏み出てカルデアから来ました、と言えば

ああ、貴方が例の、と口にした。

例の……？ 何それ俺のいない所で俺の噂でも流れてたのか……！? 驚きと恐怖に身を震わせれば彼はハツハツハ、と快活に笑いそのように心配なさるようなことではありません、と言った。

ライダーさん達を見て、彼女らがしきりに自慢するものですから、少し気になっておりましてね、とも。

そんな恥ずかしいことしてたの？ そう思ってみれば顔を赤くしたライダーさんがこちらから目をそらす。

何それ可愛い……じゃなくて俺も恥ずかしいんだけど……まあ良いか。

少しだけ熱くなった頬に片手を当ててれば、彼は徐に兜を取った。現れたのは赤髪の短髪で、勇ましさと、どこか尊大なイメージを与える風貌の男。

街中で睨みつけられたら一瞬で震え上がるだろうな、なんて思っていれば彼はニコリと笑ってこう言った。

自己紹介が遅れましたね——レオニダス1世と申します、気軽にレオニダスとでもお呼びください、と。

ふうん、レオニダス1世か……えっ、レオニダス？ ……レオニダス王!?

かの有名なテルモピュライの戦い、たった100人で10万以上いるとされたペルシア軍と直角以上の戦いを見せつけた、スパルタの大英雄!!!

思わず早口でそう捲し立ててしまう、カルデアに来てからすっかり歴史や神話を読み漁るようになり、ファンになってしまった人物が多すぎるが故の弊害だった。

カーミラにちよつと落ち着きなさい、と肩を叩かれ冷静さを取り戻す、直後にやつべえやらかした、と思っただが彼は表情を崩すこと無く、笑みを浮かべたままご存知でしたか、と言った。

当たり前である、そも俺はカルデアに来てから歴史等を深く勉強するようになったが、そうする前から知っていたレベル——つまり教科書にだって載っている人物なのだから。

そう言えば彼は恥ずかしそうに頬をかき、そこまで言われると何だか照れてしまいますね、とそう言った。

魔獣戦線では主に、巴御前が指揮をとりレオニダス王が兵士たちの育成を行っているらしい。

つまり魔獣戦線は英霊達の指揮や育成があるからこそ成り立っている。

逆に言ってしまうえば、たったそれだけの手助けで彼らはこの時代を、世界を守り抜けているということだ。

幾ら何でも遅すぎるだろう、と思っていれば他の英霊達にも時折戦場に出てもらっていますかね、とレオニダス王は言った。

ただし早々あることではないですが、とも。

それに同意しながらも巴御前がしかし、と口を開いた。

今回の作戦では勿論出てもらいますがね、と。

ギルタブリル討伐にあたり、彼女は出陣するからその間の指揮をお願いするとのことだ。

当たり前と言えば当たり前のことである、英雄が七人もいればそりや彼女やレオニダス王以外にも指揮を取れる人間がくらいいるだろう。

それに、ギルタブリルに近づくためにも魔獣を少しでも寄せ付けたくない、というの也被まれている。

ギルタブリルと接敵するまでは主にレオニダス王とその精鋭たちに護衛していただきますので、取り敢えずの顔合わせです、と彼女は言った。

まあそれでなくとも近い内に話す機会は訪れていただろうが、こういうことは早い方が良いということである。

何はともあれよろしく、と手を差し出せばガツチリと握られる。

ええ、宜しく願いますと笑った後に彼はほう……と俺の腕から肩、それから身体へと視線を走らせた。

え、何？ 何でそんな舐めるような視線で見えるの？ ちよつと怖いんですけど……

そう思っていれば彼は不意に笑った。

良い筋肉です、良く鍛えてらっしゃる、と。

は？ 筋肉？ いや確かにそれなりに鍛えてはいる———というか、鍛えなければならなかったから多少はついているだろうが、言うほどだろうか。

まだまだですよ、たとえばレオニダス王はそれは確かにそうでしょうと言ったが、しかし、と言葉を付け足した。

見たところ貴方はこの戦い———人理修復、でしたか。その旅が始まるまではあまり鍛えていなかったでしょう。

筋肉の付き方、そしてそれらに刻み込まれた傷を見れば分かりません。

まだ一年も経っていないでしょう、だというのに荒削りですが立派な筋肉がついている、これは小さくはありますが、貴方が世界を、時代を渡り歩き救ってきた数少ない証拠とも言える。

人を救うために全力を尽くしてきたという、分かる人には分かる証拠。

胸を張りなさい、自信を持ちなさい、貴方は強い、強い人間だ。

物理的な実力のことではありません、これは精神の、そして魂の話です。

大きな責任と義務、そして使命を背負うことになり、また強大な悪と戦うことになり、あまりにも果てしない目標を目指すことになったにも関わらず、そうして努力をし続けていられる、前を向いていられる。

それが出来る人間というのはあまりにも尊く、また希少なものです。

故に世界を救う者よ、苦しいことを言いますが———出来ればその在り方を、捨てずにずっと持ち続けなさい。

この時代でも、そしてこの時代を乗り越えた先でも恐らく、想像を絶する巨悪が立ちはだかるでしょう。

そして貴方のこの旅が終わったとしても———その身には果てしないほどの困難が降りかかるでしょう。

しかし、貴方が努力し続けてきた、前を見続けてきた、折れずに立

ち向かってきたという事実はきつと貴方の背中を支え、足の震えを、心の怯えを振り払ってくれるから。

レオニダス王は笑顔でそう言った、慈しむように、慰めるように、また応援するように。

あまりにも優しい声音で、そう言った。

目端から、熱い何かが溢れ落ちた、そんな気がした。

そんな出会いから一週間と少しが経過した。

立香君達の方は今日も絶好調なようで、通信を繋ぐ度に今日はこういうことがあった、ああいうことがあったとあまりにも嬉しそうに話す。

しかもその内容が毎度毎度想像の斜め上に行くような、まるで小説みたいな話ばかりで思わず笑みが溢れてしまう。

何だかんだ一日の楽しみになりつつあるな、なんて思いながら壁の上を目指す。

向かう先はレオニダス王直伝マツスル講座である。

いやこれ以上無いくらい巫山戯た名称だがこれがまた中々為になるのだ。

何故かと言えば彼が一角の英雄であるから、というのもあるがそれ以上に彼のスタンスに理由があった。

スタンス——つまり戦い方、戦場での立ち居振る舞い。

レオニダス王の伝授してくれるそれは、戦場でどれだけ多くの敵を倒すか、ではない。

戦場で如何に何かを、誰かを、そして何より自分を守り抜くか、どれだけ己を、味方を生かせるか。

そういうことに特化したものだ。

俺としてはもう少し攻勢に特化したものを教えてほしいところだったが、それでもこれは役に立つ。

何より死にづらくなる、というのは俺にとっては値千金であった。時間を確認してから少し足を早める、彼は時間厳守なのだ。

最終的には駆け足で鍛錬場にたどり着けば、そこには既に数十人の兵士たちがいた。

今では全員顔見知りである。

これまで多くの特異点を旅してきたお陰で俺のコミュ力も、立香くんのそれには勿論程遠いがそれでもそれなりに上昇しているのだ。

それに加えて兵士たちもかなりフランクに接してくれたお陰で、今では大分仲は良好になっていた。

具体的に言えば夜にこっそり集まり俺お手製の花火ではしゃいで遊んだレベル。

ダ・ヴィンチちゃんの英才教育を受け続けている俺だからこそ出来ることである。

まあ勝手に火薬を拝借していたことがバレて巴御前にみっちり叱られたがそれはそれ、これはこれ、である。

遅かったなあ、もう始まるぞ？　なんて盗賊団からの付き合いの男から声をかけられ、それにちよつと寝坊しちゃって、と笑う。

何だか友達みたいだな、と思うと同時にいたはずの友人達を幻視して視界が歪み、それを力づくで振り払う。

気にするな、幻覚だ、気にするなと己に言い聞かせてふらついた態勢を立て直す。

大丈夫か？　とかけられた言葉に問題ない、と笑顔で返した。

レオニダス王の講座、と言っても基本的には彼の話を聞き、それを元に実戦形式で試合をするというのが主である。

ここ数日の付き合いで分かったが、レオニダス王は計算タイプに見せかけた脳筋などところがある。

理論は一応展開してくれるがやはり最終的に頼るのは筋肉、ということだ。

まあ特段間違ってもなんでもないし、実際とても役に立つと思いがらもふと、壁の外へと視線を走らせた。

複数の兵士たちや魔獣の中で、一際目立つ炎が目に入る。

茨木童子だ。

此処に戻ってきてから彼女の活躍というのは目覚ましいものだった。

何せ戦場から戻ってくる兵士たちの話題には必ずと言っていいほ

ど彼女の名前が出るのだ。

最初は戻ってきたことによる話題性かとも思ったが話を聞けばそうでもない。

何故断言できるかと言えば理由はその話の中身にあった。

大体の確率で「茨木童子に助けられた」と誰しもが言うのだ。

魔獣に囲まれた時、巨大な魔獣が立ちはだかった時、味方が負傷しそれを庇いながら戦っていた時。

どこからともなく現れ、周りを焼き尽くし退路を作り出してくれるのだという。

まあそれを褒めるように彼女に言えば照れているのかフン、とそっぽを向くのだが。

なにはともあれ茨木童子は茨木童子で、今までを取り返すように努力している、ということだ。

であれば、焚き付けた俺も少しくらいフォローを入れるのが筋だろう。

今日にでも巴御前の元へ向かうか、と思っていればレオニダス王から集中力が散っていますよ！ と指を指された。

ご、ごめんなさい……。

夜、満月が雲の隙間から顔を見せる頃に俺はそつと部屋を出た。

ライダーさんが着いていきましようか、と言ったが流星にここで襲われるようなことはないだろう。

大丈夫、と断わり巴御前の元へと向かった。

簡素な扉をノックすればはい、と声が聞こえる。

名前を告げれば直ぐにどうぞ、と言われそつと扉を押し開けた。

何かありましたか？ 少なくとも火薬に手は出させませんよ、と言われて不覚にも笑ってしまふ。

流星にもうあんなことはしない——じゃなくて、ちよつと話があつてき、今大丈夫？ そう聞けば彼女は大丈夫ですよ、こちらにどうぞ、と椅子を一つこちらに寄せた。

お礼を言いながら椅子に座り、少しだけ深呼吸するように息を吸って吐いてから茨木童子のことなんだけど、と切り出した。



瞬間、場の雰囲気は少しだけ剣呑になる、眉をひそめて彼女は続きをどうぞ、と促した。

コホンと咳払いをする、抑え込んできたはずの緊張感が姿を現してくる。

それを表情に出さないように押し込み口を開いた。

以前、貴方と対立して彼女が此処を出ていったつてことは、既に聞いている。

というかむしろそれを焚き付けてここまで彼女を連れてきたのは俺なまであるくらいだ。

その上で一つ聞きたい。

貴方が茨木童子に取る態度の、その理由は何だ？　少なくとも茨木童子は——そりや前はわからないけどそれでも、こちらにとつて不利になるようなことはしなかったはずだ。

戻ってきてからのことを言えばむしろ、分かりやすく助けになってくれている、と俺は思う。

だというのに貴方の態度は変わらないし、仲直り……つて言つて良いかわからないけど、貴方達が仲を改善したつて話も聞かない。

俺は、その、何ていうのかな。

巴御前——貴女を、とても理知的な人だと、英雄だと、そう思っている。

だからこそ、理由がわからない。

何故そこまでして茨木童子と反目するのか。

彼女の目を見ながら、静かにそう問いたです。

緊張から若干早口になってしまったがそれでも聞き取れなかったなんてことはないだろう。

俺が話している間巴御前は益々眉の顰を深めるばかりで、終わった後も暫くそうしていた。

それでも、言葉を待つ。

そうしていれば彼女はやがて、深く息を吐いた。

長く、深く、大きなため息とでも言えるような吐息。

そうやって吐ききつてからまた少し吸い込み、それからやった彼女

はそうですね、と口を開いた。

私はきつと——いえ、間違いなく、茨木童子を、茨木童子という“鬼”を認められない、否——認めたく、ないのです。

”鬼”というのは総てを蹂躪し、翺り、殺し尽くすものです。

非道、という言葉がこれ以上似合う生物もないでしょう、民衆が抱く恐怖の象徴そのものです。

そのようなものが、英霊として呼び出されている？ ましてや人々を、世界を守ると？ ええ、それはあまりにも、あまりにも信じ難い。

故に私は、認められない、認めたくない。

人々を守る鬼など、想像することすら出来ないのだから。

彼女は表情を変え、こと無くそう言い切った。

それを見て、それでも俺はけれども、と言葉をつなげる。

茨木童子は人を守っている、この世界の為に魔獣と戦っている。

純然たる事実そのものとして、茨木童子はそうしているだろう。

認めざるを得ないだろ、事実から目を逸らすのはよせよ。

そう言えば、彼女はええ、今はそうですね、と言った。

そう、今は。今だけは。

そのようにしていますがこの後裏切るという可能性は大いにあります。

なぜなら彼女は鬼なのだから——。

頭に血が上りそうになる、あまりの融通の利かなさに思わず口を開き、しかしぐつと抑えた。

それから少しだけ咳払いしてから、何故、どうしてそこまで、貴女に何が分かるって言うんだ——。

そう言えば彼女はそつと立ち上がった。

それから自分の胸へと片手を当てて、分かりますとも、と言いきそれからこう言った。

この身には、鬼の血が流れているのですから、と。

驚愕に思考が止まる、ポカンと呆けてしまえば彼女は言葉を続けた。

故に、鬼の残虐性を、非道さを、その恐ろしさを、何よりもわかつ

ているつもりです。

この身の半分しか流れていないのも関わらずこれほどまでの情動に襲われる。

ええ、そうです。

この血は人を狂わせる、理性を穿つ、狂気に身を浸らせる。

理由も何もなく、ただ何となくで親しいものを殺そうと思えてしまう。

そういうものなのです、あの鬼もいつそうなるかはわからない。

であればやはり、信じるなんてこと出来ようはずもないでしょう。

認めるなんて、愚の極みです。

ご理解、いただけましたか？ と彼女は言った。

まるでこの話はこれで終わりだと言うように。

頭の中で色々な情報が錯綜する、俺はどうすれば、何を信じれば、という思いがぐるぐる回って混乱しそうになって、しかしその中で茨木童子の顔を見た。

泣きそうな顔をしながら、それでも吾に出来るかと、酷く不安気に聞いてきた茨木童子を。

空から降ってきた謎の男（俺）を救ってくれたということを出し出す。

逃げだした民衆を盗賊団という名称でまとめあげ、守っていたということを思い出す。

何だかんだチョコなんかで懐柔できたことを思い出す、いやまあこれは彼女の精神状態が万全であつたならここまで上手くはいかなかっただろうが。

そうなるくらい、彼女は思いつめていた、そのはずなのだ。

俺は、そうしてきた過去をただ鬼だから、と切り捨てたくない。

それに救われた人がいる、ただ何となくで出来るようなことでもないことを、茨木童子はしてきたんだ。

だから、こう言えば茨木童子は怒るかもしれないけど、それでも、それでも！

鬼であるという前に、”茨木童子”という個人として見てほしい！

貴方と手を組み協力したいと思った彼女を信じてほしい、その為に  
今も戦場を駆けている彼女のことを、見てやってほしい！

気付けば叫ぶように声を張り上げていた、お願いします、と頭を下  
げていた。

巴御前の動揺したような声が聞こえる、しかし、と口にした彼女に  
被せるように頼む、と言葉を漏らした。

俺にはこれしか出来なかった、茨木童子が裏切らない、だなんて物  
理的証拠は持ち合わせている訳が無かったし、巴御前の抱える不安を  
消すなんてことは出来なかったから。

だから俺の安い頭を下げる、それしか出来ない。

何時までそうしていたらどうか、巴御前は顔を上げてください、と  
震えた声で言った。

貴方がそうしようと思うまでのことを茨木はしてきたのでしよう。

私とて、ええ、私とて分かっております、茨木が普通の鬼に純粹に  
当てはめて良いような鬼では無いということは。

しかし、しかしそれでも、私は——怖いのです。

何故ならそもそも私は——私という、存在を認められないのですか  
ら。

鬼とも人ともとれない曖昧な化生、そんな私には、とても、とても  
――。

その言葉が、何故か俺の心に靄を作り出す。

俺はまだ大して生きていない若造だから、偉そうなことは言えない  
けれども。

何故だかそれは安易に肯定して受け止めてはいけなないと、そう思っ  
た。

巴御前、とその名を呼ぶ。

こちらを見た彼女に、俺は言葉が続けた。

巴御前、平安時代末期の女武者。

平家物語によれば、源義仲に付き従った人物。

その怪力で敵の首すらもいだという逸話をもつ英傑。

一騎当千の強者と謳われその最後は討ち取られたとも落ち延び尼

となつたとも言われる謎多き女性。

これが現代まで伝わっている、貴方と出会う前から知っていた貴方のことだ。

俺はこれに加えて、ここ数日で関わった程度のことしか貴方のことを知らない。

だけど、きつと、鬼であるとか人である、なんてことは大して関係ないんだ。

在り来りな言葉だけでも——貴方は、貴方でしか無い。

巴御前は巴御前以外には成りえない。

人でもない、鬼でもないそんな曖昧な化生、じゃなくて、きつとその全てを併せ持った存在が巴御前という一つの個なんだと俺は思う。

人である巴御前、鬼である巴御前、高名な女武者としての巴御前、源義仲と共にあると決めた巴御前、そして——こうして英霊として、ここに在る巴御前。

世界を救うために力を貸してほしいと、そう願ったはずのギルガメッシュ王の呼び声に応じ、馳せ参じた高潔な英霊。

それ以上でも、それ以下でも無いはずなんだ。

それでも——その上でも、不安になるのであれば。

この時代の人々が、戦士が、そしてギルガメッシュ王が信じる貴女を、信じてほしい。

少なくとも、今だけは。

英霊として、召喚に応じたものとして、判断してほしい——色々と、な。

二度目は、叫ぶようなことはしなかった。

水面に雫が落ちれば、その音が反響するのではと思うほどの静寂の中で、やはり静かに俺はそう言った。

巴御前はその真つ赤に輝く瞳をこじ開けるように見開き、それからそつと目を閉じ自分の胸へと手を当てた。

まるで今の俺の言葉を咀嚼し、飲み下すように。

ゆっくりと慎重に、その意味を理解していくように。

それから、どれだけ経っただろうか。

恐らくそれほど経ってはいないだろうが、それでも恐ろしいほど経ったようにも感じるし、刹那のような一瞬にも感じられた。

巴御前が口を開く。

恐る恐ると、それでも確りとした口調で。

ああ、そうですね、ええ、そうでした、と。

自分はただの自分に過ぎない——そう、でしたね、と。

けれども少しだけ……今宵だけは、少し心の整理をさせてください。

明日朝、私の答えをお見せいたします。

彼女はそう言つて、俺はそれに小さく頷いた。

翌朝、食堂に降りてきた俺の視界に飛び込んできたのは、それこそ驚愕の瞬間であつた。

あの巴御前が、深々と頭を下げているのだ。

数々の非礼、許されるものではないと思いますがそれでも——それでも、申し訳有りませんでした、と。

謝罪の言葉とともに、茨木童子へと。

二人の関係性を知っている者たちであれば誰しもが目を疑う光景である。

かくいう俺も当然のように驚いていて、そこでようやく昨夜の巴御前の台詞を思い出した。

明日朝、答えをお見せしましょう——。

つまりはこれが彼女の答え、という訳だ。

それに茨木童子がどう応えるのか、というのはまた別の話ではあるが——まあ、問題はないだろう。

目的を達成できたことで滅茶苦茶嬉しそうなのを噛み殺し、無駄に変になつているあの顔を見れば一目瞭然である。

ここまで上手く行けば少しだけとは言え関わった俺も多少なりとも嬉しいものだ。

思わずほくそ笑みそうになるのを堪え、そつと部屋に戻ろうとした所で一瞬、茨木童子と視線が合う。

ニヤリと、それこそ鬼らしく笑つた彼女に、軽くサムズアップを返

した。

以来、巴御前と茨木童子は仲睦まじい……とは言わないが、それでも距離は近くなったように思える。

というか、巴御前が前より他人に頼るようになった、という方が正しいだろうか。

レオニダス王も、随分と丸くなったものですな、と笑っていたほどである。

俺の方も俺の方で、ウルクの人たちがフレンドリーだったのもあり大分馴染んできた。

それは魔獣戦線内の不和要素が限りなく0になっていつている、ということ、同時にそうなるだけの時間が経過した、ということも指し示していた。

まあ、なんだ。

つまるところ準備はもう最終段階を終えた、ということだ。

巴御前曰く、ありえないくらい早く済んだ、と称賛していたのが記憶に強く残っている。

決行は明日。

いつもよりたくさん複雑な命令や作戦が立てられたが基本的にやることと言えば至極シンプルであった。

魔獣達を除けてもらい、その間にギルタブリルの首を獲る、ただそれだけのこと。

魔獣達の相手はレオニダス王や茨木童子、魔獣戦線の皆にしてみたら、直接戦うのは俺達と巴御前。

士気は上々、連携もバツチリ、情報伝達にミスもない。

後は俺たちに全てがかかっている。

割り当てられた自室の寢床に寝そべったまま、そんなことを考えながらごろりと寝返りを打つ。

上手くいくだろうか、という不安。

役目を果たせるだろうか、という緊張感。

そして何より、どれだけ敵が待ち構えているのか、という恐怖がこの身を苛んでいく。

これまで何度も戦ってきた、幾度も死んできた、けれども大切な戦いの前というのはきつとこれからどれだけ経験しても慣れないだろう、という確信があった。

もうすっかり付き合うことが多くなった吐き気を感じ、しかしそれを握りつぶす。

覚悟はもう決めてきた、であれば今更怯えても時間と体力の無駄だ。

大丈夫かい？ と通信機から聞こえてきたダ・ヴィンチちゃんの声に、勿論、と答えた。

魔獣戦線は眠らない。

誰かが言った言葉で、それは魔獣戦線を的確に表していた。

そう、魔獣戦線では戦闘が止むことはない、勢いの強弱はあれどこでは常に戦闘が続いている。

自分が寝ている間も、訓練している間も、談笑している間も誰かがその命を削り、その平穩を守っている。

そして今日この日、俺はそこに初めて足を踏み入れようとしていた。

そう、初めてである、ここに来てもう暫く経つというにも関わらず初なのだ。

といっても別に俺が出たくないと言ったとか、そういう訳ではない。

巴御前の命令である。

貴方は我々の——そうですね、所謂秘密兵器、というやつですので、決行日までは魔獣戦線には出てもらいません、と彼女は言ったのだ。

つまるところ今日の今日まで引きこもりをキメていた訳だ。

しかしそんな日々ももう終わりである。

今日、この日で確実に仕留めきる。

北壁の真上、そこで眺めるようにして戦闘の行く末を見守っている。

俺たちの役目はギルタブリルが姿を現してからだからだ。

嫌になるくらい緊張感が身を包み込んでいる、じわりと滲んでく



る手汗を拭っていていればそつと誰かが隣に座った。

といつてもまあ、大体見当はついている。

こんな時に何も言わず察してくるのは彼女くらいだからだ。

ある種の確信を抱きながら横を見ればそこにいたのはやはりライダーさんだった。

何も言わずに肩を預け合う、それだけで幾分か緊張が解れていく気がする。

有難うな、と言えは何のことでしょうか、と返されて、それが少しだけおかしくて笑ってしまう。

本当、俺には勿体ないくらいのサーヴァントだな、と思うと同時に笛のような音が響き渡った。

——合図だ。

巴御前が掛け声と共に北壁から飛び出した、それに続くように地を蹴りつける。

一拍遅れて身体に衝撃が走る、彼女に抱えられて俺達は魔獣戦線へと飛び込んだ。

降り立ったそこは正しく地獄と言って差し支えは無かった。

溢れかえるように魔獣が視界を埋め尽くす、吐き気すら催す濃い血の匂いと異様な魔力が充満していて吐き気すら覚える。

少しの不安が頭を過ぎり——

デルモビユライ・エフモタイア  
炎門の守護者アアアアアアアアアアアア!!!!

——その全てが、絶叫とともに薙ぎ払われた。

彼の王の呼び声に応じ、三百の伝説の兵士たちが爆発じみた光と共に姿を現していく、その全員がレオニダス王と同じ盾を担ぎ、もう片方の手には各々の武器が握られていた。

号令とともに彼らは動き出す、今の今まで溢れかえっていた悲鳴、剣閃、全てを塗り替え炎の守護者達が魔獣達を押し退けた。

一本の道が拓かれていく、今です！ と叫んだレオニダス王の横を通り過ぎる瞬間、彼は笑った。

そちらは任せました、と確かにそう言って、彼は兜を付けたのだ。重苦しい空気が、不思議にも霧散した気がした。

どうしてか自分の口は弧を描き、ああ、任せろ、と言葉を漏らした。拓かれた道の先にやつはいた、金に靡く長髪、裸に晒した上半身には赤黒い紋様が描かれていて、布に隠された下半身の、その腰辺りからはさながら蠍のような尾が生えていた。

言うなれば蠍人間である、鈍く輝く巨大な尾がゆらりと揺れて、片手に握られた弓がピクリと動いた。

瞬間、グンツ、と強引に頭を押し下げられる。

体勢を崩して倒れ込むと同時に、酷く耳障りな高音が頭上を流れていった。

今の一瞬で矢を放ったのか——!?

間違いなく今まで見た中でも最速——いや、アメリカのキッドといふ勝負か？ そんなことを考えながら体勢を立て直すと同時に、今度は炎が散った。

爆音と共に巴御前の矢が放たれる、ゆらりと空気を融かしながら燃ゆる数本の矢は、しかし尾の一振りで薙ぎ払われた。

だがそれで良い、彼女の弓矢は確かに強力だが普通に撃つたところで決定打になりえないのは分かりきっていたことだ。

巴御前はギルタブリルとは数回手合わせしたが、しかし本気でやり合えることは今まで無かったと言っていた。

それはつまり、こちらの全力を知られていないということであり、反面あちらの全力も分かっていないということだ。

だからこそ、焦ってはならない。

ほんの少しの、刹那の焦りが致命を生むのはもう何度も身にしみて分かってきていることだ。

故に慎重に、しかし迅速に、そして確実に叩き殺す。

そのために俺は、俺達は——時間をかけてきたのだから。

神々しくもおどましい死の光が閃き走る、虚空を引き裂き飛来したそれはしかし届き切る前に撃ち落とされた。

火の粉と光の欠片が混じり合ってキラキラと宙を彩る、それを見ながらじわりと汗をかく。

今のが一つでも撃ち漏らされていたら間違いなく躲せなかった、そ

れが分かる、分かってしまう。

ふとギルガメツシユ王の光を思い出す、あれも確かに似たようなものだったがこれはアレよりもっと早い。

まだ想定外、という訳ではないがそれでもその強さに頬をひくつかせた。

そんな俺を見て巴御前がご安心を、と言う。

全て私が撃ち落としますから、と。

その言葉に頼むぞ、と呟くように答えればやつ——ギルタブリルは口を開いた。

星見の台のマスターですね、と。

刹那の間、思考が止まる。

いやにドクンと跳ねた心臓を無理やり宥めすかして内側に押し留める。

何故知っているのか、という問答する気は無かった。

ただ睨みつけるように見据えてよく知ってるな、と言えば彼は観察するようにな俺を見てからええ、勿論、とニコリと笑った。

それこそ今まで出会って来た敵にぶつけられてきた、およそ敵意と呼べるようなものが一切混じらない表情で。

味方から向けられるならまだしも敵に向けられるような表情ではない、普通に気味が悪いな、と思えば彼は言葉を続けた。

貴方方のことなら——ええ、ある程度は存じております。

この時代を除いた全ての特異点の修復を完了し、そして今、この時代すらも修復しようとしてそこに立っているということくらいは。

随分と物知りだな、と吐き捨てながら礼装を起動する。

それを見て、しかし余裕を崩すこと無く彼は言葉を続けた。

この程度は常識とも言えるでしょう、何せ貴方方は私達にとって最も恐ろしい脅威なのですから、と。

そう言う割には脅威を感じているようには見えないな、思ってたより弱そうだったか？

礼装を握りしめながらそう言えば、ギルタブリルはまさか、と言った。

むしろその逆——思っていたより強そう……いえ、強い上に思慮深い、ひと目見れば分かります。

こうして私と会話をしながらも私の魔力量、実力を量り、どこから攻撃が来ても良いように警戒を張り巡らせ、尚且つ他の者達の動きの邪魔にならないよう立ち位置を調整している、なんて並の人間が一年足らずで習得できるようなものではありません。

ましてや怯むこともなく、恐れを呑み込み歩みを止めること無くここまで来たその在り方には美しさすら感じます。

故に——残念です。

想定よりずっと弱ければ、歯牙にもかける必要は無かったというのに——貴方は見るからに強くなりすぎた。

これまでの特異点を修復してきたという実績、その良く回る思考、戦闘に慣れきっている魂、体中に刻まれた傷、戦う為に無理やり仕立て上げた身体、瞳に灯らせる光、決して折れないその心——そのどれもが私……否、私達が脅威であると認めてしまうほどには。

ええ、本当に、実に残念、残念ですが——仕方ありません。せめて痛みはなく、一瞬で楽になりなさい。

そう言葉を区切ると同時に、何かが飛んだ。

——違う、何かではない、あれは矢だ。

回避しようとしても間に合わない、俺を守るように前に出ていた三人の間を縫うようにそれは空を駆け、しかし届くことはなかった。

高速で飛来した矢をキャッチした巴御前がそつと前に出る。

その程度では仕留めさせませんよ、と握った矢をへし折る彼女のを見て、ギルタブリルは流石ですね、と返し。

次の瞬間、真下からきた馬鹿げた衝撃と共に意識が飛んだ。

流石ですね、とギルタブリルが口にした瞬間、鋭く地を蹴った。

瞬間、爆碎音。

大地を貫き俺の全身ほどもある巨大な尾が地中から飛び出て虚空を貫いた。

そんなのありかよ……？

頭を吹っ飛ばす程の威力とかおかしすぎるだろ……そう思わざる

を得ないが無理やり飲み込むように納得する。

そういうものなのだと思うしか無いのだ。

なにセギルタブリルに関して分かることはあまりにも少ない。

というか、分かっていたことと言えば蠍の尾を生やした弓矢使い、という程度だ。

直接戦ったという巴御前でさえ、数度、ほんの少しやり取りしただけ。

その上彼は現在まで残る文献等にほぼ記載が無い。

ティアマトから生まれた十一の怪物であり、知恵者である。

読み取れるのはそのくらい——いや、正確に言えばもう少しくらいは逸話等あるがどれがデマでどれが真実かもわからない、そのレベル。

故に基準となる強さが全くわからない、実質どれだけの逸話がありこの程度なら出来るだろう、という憶測すら出来なければ弱点もわからない、というわけだ。

つまるところ彼は——どれだけ強くてもおかしくない。

魔獣の司令塔を務めるほどだ、元より並の英霊を凌駕するほど強いかもしれない、もしかしたら敵の親玉に考えられないほど強化をされてるかもしれない、もしくはギルタブリルの名を騙った別の”何か”かもしれない。

数えられないほどのIFが彼には当てはまってしまふ、文字通り有り得ないなんてことは有り得ない、とかいう馬鹿げた化け物だと思つていい。

まあ、その逆で拍子抜けなほど弱いという可能性もあったが——まず無いだろう。

更に距離を取りながら構えばギルタブリルはやはり危険ですね、と声を漏らした。

今のを躲された以上、出し惜しみは出来ません、と。

そう言い捨て地を蹴り、それに合わせるように三人が地を蹴った。

鼓膜を劈くほどの地響きが空間を揺らがして、直後に全身へと衝撃が走った。

いつの間にか眼前へといたそいつの拳が無防備な腹へとねじ込まれる、身体がくの字に折れて、嗚咽すらままならず掠れた声を端から零した。

いや、はや、すぎだ、ろ——

内心言葉を漏らし、それでも半ば貫通しつつあるその腕を掴んだ。驚いたように見開く目を見ながら力を込める。

焼けるような痛みが腹から全身へと広がっていく、それを奥歯で噛み殺してこちらを見据えるその目を睨みつけて魔術礼装を起動した。

いくら早かろうが強かろうが、この距離なら外さない——ガンド！ゼロ距離で撃ち放つと同時に令呪を切った、刹那、ギルタブリルはその目を見開きほんの少し、瞬き一回分だけ動きを止めた。

それだけあれば充分過ぎる、振りかぶられた鉄の釘剣がこめかみへとぶち込まれ、よろけた彼の身体を蹴り飛ばす。

拳がズロリと抜けて同時にゴボリと血を吐き出した、吹き飛んでいくギルタブリルが鉄処女へと飲み込まれるのを見ながらまだだ、と叫ぶ。

言うまでもなく飛来した炎の矢が雨のように降りしきる、止まらない血を抑えながら引きずるように足を動かすと同時、視界がグラリと揺れた。

全身が痺れて動かない、急速に力が抜けていく感覚が身体に広がって視界が歪んで掠れていく。

血を流しすぎたとはまた違う、これ、毒か、つまり毒手、ね、なる、ほど。

ライダーさんの声が酷く遠い、既に見えなくなりつつある視界の中には炎に包まれながらも傷の一つも見せない男がいた。

鼓膜を劈くほどの地響きが空間を揺らがして——緊急回避！

誰かに引つ張られたように不自然に身体が動く、骨肉が悲鳴を上げて、直後に拳が鼻を掠めた。

ピツと線が入って血が流れる、刹那の間視線が交錯して鋭く地を蹴り、同時に引き寄せられた。

——は？

理解が追いつかない、一体何がと思うと同時に蛇と化した右腕と目が合った。

キメラかよ……ありえねえ……

にこりと笑ったギルタブリルを見ながらクソツタレがと吐き捨てて、同時にそのの牙が首元へと突き刺さる。

直後、それと彼の右腕の真上に鉄処女が現れた。

しかし潰せない、下手すればかのキヤメロットで出会ったガウエインと同等かそれ以上の硬度を誇る身体には傷一つつかない。

グジュリと不快な音と感覚が脳髓に響き渡る、叫ぶことすらできずに空気を吐いて、直後に絶叫が響いた。

瞬間、轟音。

流星が輝き落ちて、しかしそれは地へと辿り着くことはなかった。

鋭く放たれた蠍の尾が彼女の身体を穿っている、それを見届けながら拳を握ることも出来ず、意識は落ちた。

鼓膜を劈くほどの地響きが空間を揺らがして——ライダーさん！

手の甲が燃えるように熱くなる、二人がすれ違う寸前彼女の蹴りがギルタブリルの腹へと食い込んだ。

一瞬の硬直、勢いが衝突しあつて互いが止まり、そして弾けるように離れ合う。

それを逃さんとばかりに巴御前が全身よりも長い薙刀を構えて踏み込んだ。

穂先を火炎を纏う、振るわれた薙刀は火の粉を虚空に残しながら連撃を打ち込み、裸に晒した両の腕で受け流された。

そう、何かを纏っているわけでもないただの腕でギルタブリルは傷一つ無く巴御前のそれを受け流したのだ。

熱さを感じる様子すら見せないとか反則だろ……

しかし巴御前は俺とは違い止まることもなければ動揺を顕にすることもなく、ただ薙刀を手から離れた。

瞬間、拳が飛んだ。

目にも留まらぬ速さで回転、流れるように裏拳を放ち受け止められると同時に掌底、その手を掴んだギルタブリルの身体を強引に螺子回

した。

グンツ！ と鋭く彼の身体が横に回る、直後彼の鼻っ面に爪先をぶち込んだ。

ギルタブリルの身体が虚空に舞う、刹那、その身体は鎖で雁字搦めとなつた。

一瞬、カーミラと目が合う、互いに言わんとしたことは一緒に、遅れること無く令呪を切つた。

手の甲を焼けるような熱さが駆け抜ける、魔力が爆発的に高まりそしてそれは姿を現した。

幻想の鉄処女——怪しげな魔力を漂わせたカーミラの宝具は確実にギルタブリルを呑み込み、しかし砕かれた。

内側から、異様なまでに肥大化した蠍の尾が天を貫くかの如くその全てを突き破つたのだ。

嘘だろ、と思わず声を零す、勢いよく宙へと舞つたギルタブリルは弓を引いた。

直感的に躲せないと察する、それでもどうにかしようとして身体をひねると同時、光の雨——いや、滝が降り注いだ。

——ギルタブリルへと。  
神権印章デインギル、それは一言で言つてしまえば“ギルガメツシュ王風のバリスタ”であつた。

彼の王が保有する多くの力ある武具、それを宝石に秘められた魔力を利用し撃ち出す大型の投石機。

壁上にずらりと並べられたそれらは一撃一撃が宝具級、魔獣を貫くなど容易い以上のものであつたが、しかし此度の戦いではそれを牽制用に使用していた。

巴御前になぜかと聞けば、狙いを上手く定めることが出来ないということだつた。

どれだけ調節してもその苛烈すぎる一撃は狙い通りの場所に着弾させられない、大体の弾道は決められるが一個人を狙い撃つ程までの機能はつけられていなかったし、多くの兵士が利用するその癖を把握することは出来なかつた。



更に付け加えるとすればこのような兵器はそもそもこの時代にあつてはならない、そう断言してもいいほどのものだ。

故に、誰もが使い慣れていない、そこまで訓練している時間もなければ武器だつて有限である以上無駄にはできない。

結果的に数撃ちや当たる戦法を起用するしかなかった、というわけだ。

であれば。

その弾道を完璧に予測し調節できる程の叡智を持ち、尚且多少ずれたとしても何らかの方法で狙い通りの弾道に修正することの出来る術があれば、そのような問題は消え失せる。

あまりにも馬鹿げた条件だ、普通はそんな都合の良い存在はいやしない。

そう、普通はいない、当然だ。

けれどもこの時代は普通ではなかったし、そも人理が焼却されそうな現状は普通とは程遠いものだった。

ならば、そんな存在はいてもおかしくなかったし、事実いた。

第五特異点よりその力を貸してくれている大英霊——鈴鹿御前。

常軌を逸した叡智を誇り、幾百を超える刀を自由自在に操れる彼女は正しく適任だった。

準備期間のほぼ全ては、彼女が用意された神権印章、その全ての癖を把握しどれくらい重さでどんな形をした武器をどの角度からどれだけの魔力量で放てばどういう弾道を描くか、その予測精度を限界まで合わせ調整することに費やした。

後は令呪込みの魔力で彼女の宝具を展開し、ギルガメッシュ王の武器にでも括り付けて一緒に撃ち飛ばせば多少の修正は叶う。

と、簡単には言うが正直言ってもその負担は計り知れないほど大きい。

一度使えばしばらくは動けないだろう。

彼女は何としても共に戦場に出たがったがそれはそれ、切り札であることに加えそういう事情もあり壁にいてもらつていたということだ。

光り輝く数十の砲撃がギルタブリルを包み込む、第一波から休むこと無く連続で撃ち出されるそれは容赦なく彼の男の鋼とでも言うべき身体を呑み込み穿ち抜いた。

絶望するほどの硬度を誇った肌をぶち破り様々な武器が突き立ち抉り、貫き飛ばす。

未だそれが降り続ける中で終わったな、とそう思う。

何度でも言うようだが神権印章はその全てが宝具並の破壊力を持つ、それをこれでもかと浴びせかけられれば死なないわけがない。

慢心でもなければ油断でもない、正しくそれは事実で光の滝が止む頃には彼の身体は頭から胸にかけてくらいしか残っていないかった。

それでも浅い呼吸をしながら虚ろな眼差しで、それでも命の灯火を燃やし続ける彼にゾツとする。

しぶとってレベルじゃねえぞ、それこそあのガウエインですら真つ二つになったら潔く消えたつてのに。

ああ、もう、さっさと死んでくれ、礼装を展開しながら近づいて、刀を鞘から抜き放つ。

仰向けに倒れているせいで目が合った、ただ虚空を見つめているようにでしかし、どこか力を感じさせる眼差し。

それを見ながら、一步踏み込めば、ふとその口が開いた。

——お見事です、やはり貴方は強い……まるで、未来を見ているようだ。

力なく、しかし確りとそう口にした彼に、ああ、俺には未来が見えるんだ、とそう言い迷うこと無く刀を振り下ろした。

神権印章に散々捌られたのであろう、恐ろしく硬かった表皮はポロポロで、抵抗はなくするりと刀は突き立った。

ほんの一瞬だけ両手に不快な感触が駆け抜ける、同時にギルタブリルの身体はグズリ、と解けるように消え去った。

ようやっと死んだか、そう息を吐いた直後、背中をドンと押された、不意の一撃だった。

何が、と思つた直後、あまりにも短い断末魔と共に、カメラの全身から幾つもの蠍の尾が飛び出した。

真横まで来ていた彼女の身体が恐ろしい数の尾に持ち上げられて夥しいほどの血を流す。

止まりそうになる思考を無理やり回す、まだ生きていたのか、浮かんだその言葉をありえない、とかき消した。

ギルタブリルは今、俺が殺したのだ。

この手で、完膚無きまで消し去った、であればこれは別の敵——。理解不能の光景に頭の中がグチャリとかき混ぜられる、それでも足は動いた。

思考はぎこちなく回る程度だった、けれども敵はいるということだけは分かりすぎさま飛び退こうとして、そして衝撃が胸を貫いた。

急速に感覚が失せていく、口からゴボリと血が溢れたのに苦しいとも痛いとも感じることはなく、意識は落ちた。

何が、と思った直後、あまりにも短い断末魔と共に、カーミラの全身から幾つもの蠍の尾が飛び出した。

瞬間、後退るように飛び退きけばその足先を掠めるように複数の尾が地中を押し退け顔を出す。

うようよとまるで意思を持つかのよう蠢くそれを見ながら更に距離をとる、そんな俺を庇うようにライダーさんと巴御前が前に出た。

ここに来て新手とかありえねえだろ、そう思いながら神経を研ぎ澄ます、

腹から湧き出る怒りを鎮めながら拳を握ればカーミラの姿はかき消えると同時にそれは姿を現した。

金に靡く短髪に、腰から生えた幾本もの蠍の尾。

ギルタブリルと違い上下に衣を羽織ったそれはパツと見で分かるくらい女性で、しかしどこかギルタブリルと同じものを感じた。

というか、尾が生えてる時点で近いものではあるのだろうか。

何なんだよ、と呟き少しだけ後退る、そんな俺を見て彼女は無機質な表情のまま口を開いた。

まさか、彼が殺されるとは思いませんでした。

けれども——ええ、カルデアのマスター、貴方が来たというのであればそれも納得出来ましょう。

六つの特異点の修復者、この短い間に偉業を積み重ねてきた英雄、ええ、理解も出来ました。

私達は時代を破壊するもの、本来倒されなければならない敵なのですから。

しかし——それでも私は、貴方を赦さない。

彼女の瞳から血の涙が流れ出し、次の瞬間、地を踏み抜いた。

一瞬だけ湧き上がってきた動揺を消し飛ばす。

考えるのは後だ、と魔術礼装を立ち上げ二人の裾を掴んだ。

突風が身体をなでつける、眼前まで迫った拳をしかし紙一重で避けきり派手に吹っ飛んだ。

あ、あつぶねえ……緊急回避が無けりや死んでた……！

不格好なまま地を滑り、それでも手を離すと同時に彼女らは地を蹴りつけた。

迫る数本の尾を前にして距離を詰めるライダーさんを援護するよう巴御前の火矢が飛ぶ。

高速で動く尾の軌道をほんの少しだけズラせばそれだけでライダーさんには掠りもしない。

一瞬足らずで間合いを縮め、振りかぶった釘剣はしかし振り切る前にその手首を絡め取られた。

眼に映らないほどの速さで動いていたライダーさんの身体がグンツ、と止まる、瞬間彼女ら二人の姿が同時に止まった。

それを見ると同時に理解した、アレは魔眼、石化の魔眼だ——。理解してから一寸遅れて巴御前の名を叫ぶ、それに応じて彼女は地

を踏みつけた。

腰から抜かれた刃が火を纏って宙を融かす、豪速で振るわれたそれはしかし寸でのところで重ねられた尾とぶつかりあった。

一本二本と切り飛ばし、三本目で刀が止まる。

同時にライダーさんが締め上げられて巴御前の足首を一本の尾がえぐり飛ばした。

直後、矢を放つ。

展開された礼装であるそれは必中の呪いつきだ、わざわざ見当違いのところ放ち、異常なまでの曲線を描いて飛来したそれを、しかし彼女は見向きもせず受け止めた。

刹那、焰が舞う。

常に己の武器に纏わせていた火とは格が、次元が違う。

番えられた矢は赤々と、何もかもを飲み込むように燃え上がり、極至近距離で放たれた。

——否。

放たれたと、そう思った。

しかしそれは彼女の手を離れることはなく、ただその焰を徐々に散らせて消えた。

巴御前は不自然なまでに微動だにしない、それを見ながら彼女は危ないところでした、と口にした。

貴方ほどの英霊でも後数秒は動けないでしょう、と彼女はそう言い、巴御前の首を、まるで花を手折るようであらぬ方へと折り曲げた。ガクリと彼女の身体から力が抜けて、同時に締め上げられていたライダーさんが爆散するように血しぶきを上げる。

不味い——そう思うと同時に、連続した衝撃が胸を全身を貫いた。

瞬間、彼女と謎の女、二人の姿が同時に止まった。

刹那、ほんのコンマ一秒も空けない内に巴御前の名を叫び、礼装を展開する。

スコープを覗き込むと同時に引き金を引く、そしてそれより早く巴御前が地を踏みつけた。

先程よりもギリギリのタイミングで二本の尾がガードに入り、それら全てを断ち切り女の片腕を斬り落とす。

真つ赤な血が舞い、少し遅れて飛んだ銃弾が巴御前の足へと向かう尾の軌道を少しだけずらして弾くのを見ながら令呪を切った。

前回の焼き増しのように、しかし遅れて締め上げられたライダーさんの魔力が爆発的に膨れ上がって尾を千切り飛ばす。

見せびらかすように空まで持ち上げられていた彼女は即座に己の

首を掻き切った、直後その血から天馬が姿を現し高く高く、空を舞う。腕の断面を抑えながらそれでも吼え猛る彼女をその場に縫い止めるように巴御前が刀を振るった。

残った数本の尾を弾き、その内の一本を突き刺し地へと固定し即座にそれを捨ててバク転するように飛び退いた。

それを見ながら女は口に指を当てた。

何をするつもりだ、と思うより早く音がなる、あまりにも甲高い指笛に顔を顰めると同時、魔獣が地から姿を現した。

は？

一瞬思考が止まる、けれども身体は反射的に飛び退いて、それを認識すると同時に頭が回りだす。

魔獣を呼び出すとかクソチートかよ、ふざけんな、そう悪態をつきながら距離をとり、同時に流星が空気を貫き落ちた。

しかしそれは届かない、飛び出た魔獣が壁となるようにその身を寄せ合い女を守る。

くそつたれが、と罵倒しながらどうすればと頭を回す、同時に大丈夫です、と巴御前が言った。

矢番える、あの時見た矢と同じだけの輝きを持つそれが、今度こそ放たれた。

太陽と見紛う程の熱量、輝きを内包したそれが音の速さで宙を翔ける、

それすらも防御しようとする間に魔獣を問答無用で融かし、焦がし尽くしてそれは総てを貫いた。

無限とも思えた魔獣の噴出が嘘のようにやんでいく、勢いを失ったライダーさんは、しかし魔獣の全てを薙ぎ払って俺の横へと降り立った。

殺せたのだ、とそう思う。

でなければ魔獣が消えるものか、少しだけの安心感と、それでも失わない警戒を以て見据えれば、女はその身をまだ残していた。

胴体に巨大な穴が空いている、幾ら化け物、英霊と言えどあれ程の傷を負えば後は死ぬだけだろう。

そう思える程の負傷具合で、それでもやつはこちらを強く見据え、そして動いた。

最初ほどの速さはない、されど尋常ではない速さでその胴を、まるで蛇のように伸ばしてこちらへと迫ってきた。

本ツ当に化け物だな、そう思うと同時にライダーさんが地を蹴りつけ巴御前が薙刀へと火を灯らせた。

ジャラリと伸びた身体へと鎖が幾重にも巻き付き動きを止める、瞬間、振るわれた薙刀が彼女の首から上を撥ね飛ばした。

飛んだ頭が足下へごろりと落ちる、見開かれたその目を見ながらやっと死んだかと思うと同時に、ゴボリと血を吐いた。

かなり遅れて痛みが全身を駆け抜ける、既に感覚が無くなりつつある手で触ればそこには何かが俺の腹を貫いていた。

毒のせいなのだろう、既に眼が見えない、けれどもこれは蠍の尾だということとは分かった。

最後の最後まで粘んじやねえよ、そう吐き捨てようとして空気が喉を通り過ぎる。

くそつたれが、そう思うと同時に、意識は落ちた。

最初ほどの速さはない、されど尋常ではない速さでその胴を、まるで蛇のように伸ばしてこちらへと迫ってきた。

先ほどと同じようにライダーさんが動きを止めて、その首を巴御前が切り落とす。

勢いよく空を舞った頭を、落ちると同時に刀を振り切った。

口から吐き出されるように射出された蠍の尾とぶつかり合って、数瞬の拮抗を経て切り捨てる。

あり得ないものを見たように、彼女の目が見開かれて、そつと口を開いた。

——恐ろしい、ですね。まるで、未来を見ているようです、と。それ、ギルタブリルにも言われたよ。

そう言えば彼女は薄っすらと笑って、当然でしょう、と言った。

私も『ギルタブリル』なのですから、と。

は？　と思う俺に彼女はそのまま言葉を続けた。

私達は二対で一つの存在、どちらもギルタブリルなのです。

片方が死んでもこの戦線を機能させられるように、私達は二対で一つの存在として、産み落とされた。

その言葉に、ふと疑問が浮かぶ。

何故なら彼女は、最初のギルタブリルが死んだ直後に姿を現したのだから。

そう思ったことを察したのだろう、彼女は表情を変えずに口を開いた。

ええ、ですから、私は本来あの場で姿を現すべきではなかった。

本拠地に戻り態勢を立て直し対策を練るのがベターだったでしょう、それくらいは私も理解しておりました。

しかし、感情はそれを良しとしなかった。

今すぐにも貴方を殺さなければならないと本能は叫び、迷うこと無く私はそれに応じた。

その結果がこれです、あまりにも情けない——ですが、後悔はありません。

いえ、貴方を殺せなかったという悔いはありますが、しかしあの場で姿を現したことに、私は悔いなど持たない。

ああしなければ私は私を許せなかった、ただそれだけですから。

きっとあの人は、死ぬ間際に貴方にお見事と、称賛の言葉を贈ったでしょう。

しかし私は贈りません、私は貴方を赦さない、あの人を殺したことも、これから私を殺すことも、絶対に赦さない。

どちらが悪でどちらが善であるかどうかなどは関係ありません、私はまだこの二点において、死んだその先でも貴方を怨み続けましよう。

そう言つて彼女は目を見開いた。

まるで俺の姿を瞳に焼き付けるかのように限界まで見開き俺を見て、逃げることに無くそれを見つめた。

瞬間、カーミラの顔が頭を過る。

——は、散々人を殺しておいていつちよ前に人を恨んでじゃねえ



よ、バケモンが。

そう言い刀を振り下ろす。

グチャリと嫌な感触が腕を駆け抜けて、それから少し遅れて彼女の頭はサラリと砂のように宙へと溶けた。

## 神々との訣別@無限ループ

あれから一週間、魔獣達の統率は緩やかに、しかし目に見えて分かるほどに瓦解した。

およそ理性や戦略というようなものを一切感じられない、ただ本能のままに襲いかかってくる集団と化したのだ。

完全に狙い通りである、お陰でこの戦線の負担は大きく減少し、全体的な余裕が増えた。

最前線に出っぱなしだったレオニダス王や巴御前が出撃することも多少なりとも少なくなり、それこそ指揮するだけにとどまることが多くなった。

まあなんだ、つまるところ作戦は大成功だったことである。

もしかしたら第二第三の指揮官が……とかいうクソ展開になるのではと危惧していたからホツと一安心だ。

何せここで新たな指揮官が出てこない、ということとはそれ即ち相手の軍勢にはギルタブリル級の指揮能力を持ち合わせている人材がない、ということに等しいからだ。

頭クルクルパーな魔獣達と女神一柱か……ふふふ、いけるな。

そんなことを思っていればそう簡単にことは運びませんよ、と巴御前に言われた。

敵にはまだギルタブリルと同等——いえ、明らかにそれよりずっと上の敵がいるのですから、と。

……？ え、なにそれ聞いてない……

ご存じなかったのですか？ と両の手を合わせて彼女は言った。

いやそりゃあ言われてなきや知るはずないよね……

ヤバイやつがいるとか先に知らされておくべきだと思っんですけど……

そう愚痴をこぼせば巴御前は申し訳ありませんと笑い、この時代では常識過ぎててつきり知っておられるものだとばかり、と言った。

常識……？ そいつ、そんなにメジャーなの？ と聞けばええ、勿

論、と返ってきた。

兵士はおろか——民衆でさえ知っています、と。  
うわあ何だか凄い嫌な予感がする、けれども聞かないわけにもいかないだろう。

ただ何となくストレートには聞きたくなくて、この時代の人？ 俺でも知ってそうな感じ？ と聞いていけばその全てに彼女はええ、と肯定を示した。

ギルガメツシュ王の名を知っていたのであれば、恐らくは知っているかと思えます。

その名は——エルキドゥ。

我らがマスター、ギルガメツシュ王の唯一の友にして、最強の兵器。

この時代において間違いなく最強格の敵です、と。

……は？

エルキドゥ、またの名をエンキドゥとも呼ばれる彼、または彼女の別名は——神の兵器。

かつて暴君として名を馳せたギルガメツシュ王を諫めるため、神々の力の全てを籠めて作りあげられた世界最強の神造人間。

天の楔として生まれたギルガメツシュ王と対象的に、天の鎖として生み出された意思持つ最強の宝具。

巴御前が言ったように、ギルガメツシュ王にとって唯一無二の対等な友であるとされるエルキドゥが、敵……？

——ありえない。

思わずそう言葉を零す、そう、そんなことはありえないのだ。

違う、ギルガメツシュ王の最大の友であるエルキドゥが裏切るなどありえない、とかそういった話が問題なのではない。

問題なのは、この時代のギルガメツシュ王が暴君ではなく、賢王として崇められているということだ。

史実で行けば彼が暴君としての鳴りを潜め、賢王と呼ばれるようになったのはエルキドゥの死後なのである。

むしろ彼、または彼女の死がなければギルガメツシュ王は暴君であり続けるまであるレベルだ。

故にありえない、そんなことは絶対的にありえない。

しかしそう言った俺を見て彼女は苦々しげに笑い、しかし事実そんなのです、と言った。

それが本当にエルキドウなのか確証は無いがしかし、その姿形は紛うことなきエルキドウその人であったのだと、彼女はそう言ったのだ。

そんな衝撃の事実を知らされた翌日、俺はレオニダス王と共にジグラットへと足を踏み込んでいた。

その心中は穏やかではない——と見せかけて実はそう荒れている訳でもなかった。

確かにエルキドウが敵というのは正直に言ってヤバいと一言で現したくないくらいヤバいのだがしかし、例によって例の如く感じる現実味が薄かった。

これが恐らく実際に会ったことがあるとかならそのヤバさを存分に理解でき、今でもブルっていたレベルなのだろうが、当然のごとく俺は会ったことが無い。

それはつまり俺にとつてエルキドウという存在は未だ架空の存在であるということに他ならない。

例えば、友達が「俺の知り合いにめっちゃ怖いヤンキーがいるんだぜ〜！」とか言ってきたり「なにそれやべええ！こえええええ!!」とはならないだろう、それに近い。

だからこそ心は安定しているし、余裕がある。

結果オーライってとこだな、と思いつながら歩を進めれば玉座にはすぐに着いた。

報告をしに来た人たちの列に並んでいれば順番は直ぐに来た。

次の者！ という声にレオニダス王が力強く返事をし、それに遅れて声を出して前へと進みでる。

報告自体は簡潔なもので、大した時間もかけずに終了した。

今回の内容といえば敵方に指揮官相当の敵は今の所見られない、というのと魔獣達の連携が無くなったことにより各兵士への負担は大きく減った、ということくらいだ。

かのエルキドゥと思しき敵が前線に立ち、ギルタバリのるように指揮でも取らない限りは魔獣戦線は向こう半年は保つだろうとも。

それを聞いたギルガメツシュ王は深く頷き、大義であった、と言った。

まさかこの短い間で魔獣戦線を安定させるとはなと笑い、それから本来なら少しばかり休みを与える所だが——必要か？ と聞かれて即座に首を横に振る。

だろうな、と嘆息した彼ははあ、と少しだけため息を吐いた後に貴様には新しく頼みたいことがある、とそう言った。

新しく……？ てつきりこのまま魔獣の女神をぶちのめすまでやるのかと思っていたせいで面食らってしまう。

一体何をすれば……？ 少しばかり小さくなってしまった声でそう聞けば、ギルガメツシュ王はニヤリと笑い、密林調査だ、とそう言った。

共に向かわせる者がこれから来る、詳細はそいつらに聞いておけ、と言われ玉座を出る。

では私は北壁に戻ります、ご武運を、と言ったレオニダス王と別れた後に一人、ジグラット内で待っていればそいつらは姿を現した。

褐色の肌に白銀の髪を靡かせ、赤い衣を纏った青年に、酷く目立つ赤い髪が目隠れるくらい伸ばし、灰色の和服——いわば忍び装束のような服を纏った少年。

どちらもここ、ウルクに住んでいる人たちとは違う、言ってしまうば奇抜な格好であるお陰で一目でこの人達だとわかる。

あちらもこつちに気付いたように歩み寄れば貴方がカルデアのマスターですね、と問いかけられた。

ああ、そうだ、よろしく、と手を差し出せば赤髪の少年がこちらこそ、と手を握り返した後に名を名乗る。

風魔小太郎です、と。

風魔……？ 風魔……!!!?

忍者じゃん!!! 思わず大きくなってしまった声で言えば彼はご存知でしたか、と言った。

そりやもう、若いころにはお世話になりましたよね……

変わり身の術とか使えるんですか？ とか聞けば勿論、と答えてくれるのもう最高である。

テンション上がりまくりだぞ……！ そう思いながらもしかしてそちらの方も忍者……？ と聞けば笑って否定される。

それで少しだけ冷静さを取り戻し、とりあえず名前を聞けば彼は己を天草四郎時貞であると言った。

天草……？ あ、島原・天草の乱の人！

海面を歩き、盲目の少女を触れただけで治したとかいう聖人！

どっちも勉強するまでもなく知ってる……というか天草四郎とか教科書にも載ってるような有名人だし、風魔とか忍者の代名詞みたいなものじゃん……ええ、ビッグネームが過ぎる……

恐れ多いですがよろしくお願いします、と改めて言えばそう畏まらなくても大丈夫ですよ、と彼らは言った。

これから共に向かう場所は未知の領域ですので、少しでも早く互いを信頼し、背中を預けられるような関係にしていきましょう、と優しげに笑ったのだった。

では、今回の任務について私のほうから説明させていただきます、と天草四郎時貞は言った。

お願いします、と頭を下げればそう畏まらないでください、と朗らかに笑い、それから内容としては、酷くシンプルなものとなります、とも言った。

その内容は、かいつまんで言ってしまうえば、突然現れた密林に飲み込まれた都市：エリドウ、都市：ウルからの使者が暫く来ていないから、その原因の調査と、現在のエリドウの様子を見てくるというものだった。

彼が言った通り、とてもシンプル。だがそれゆえに若干の不安が伴った。

正直な話それだけであれば俺達や、風魔小太郎のような英霊でなくてもいい。

少数の兵士だけでも良いのでは？ と思えば風魔小太郎が因みに、

と彼の説明の言葉を付け加える。

既にエリドゥには50人ほどの兵士を送り、その全員が未だ帰還しておりません、と。

……え？ なにそれ怖すぎない？

それから数日、準備や親交を深めるのに徹した後、俺たちは密林への調査へと乗り出した。

まあ親交に徹したと言っても顔見知り、ちよつと頑張れば友人といえる程度の仲になった程度である。

これが立香君であれば友人すつ飛ばして親友レベルまで持つていったのかもしれないがここが俺の限界であった。

というかこれが普通だと思うの……立香くんが異常なんだよ……

内心そんなことを思いながら、その立香君達に見送られウルクを出る。

移動方法は基本的には徒歩だ、流石にこの時代に車なんて便利なものはないから当然である。

メンバーは俺の他には小太郎、天草、ライダーさんに鈴鹿のみ……まあカーミラがいないだけでいつもどおり+αと言ったところだ。

下手にこちらに人員を割くよりかは少数精鋭で向かい、兵士たちには極力ウルクの守りに徹してもらおうということである。

当然といえば当然の判断である、流石に英霊が四人もいれば早々やられるようなことはない。

と、まあそんな訳でテクテクテクと適度に休みを挟みながら南へまる一日ほど進めばそれは視界に入ってきた。

ここバビロニアにおいてあまりにも似つかわしくない光景、鬱蒼と生い茂った密林が俺たちを誘うようにその口を広げて待っている。

何だか嫌な予感がしますね、全員警戒を怠らないように、と言った天草の言葉に静かに頷き俺たちはそこへと足を踏み入れた。

——暑い。

しかも歩きづらい。

それが密林に入って最初に出てきた感想で、今も脳内を支配している感想だった。





「ニャーハハハハハハハハハハハハ!!!」

笑い声が響き渡る、瞬間起動した礼装が音もなく砕け散る、驚く暇もない、胸に強烈な衝撃がぶち込まれて弾け飛ぶ。

否、俺の身体が吹き飛んだのではない、ヒットした面積がまるごとぶつ飛んだのだ。

ゴボリと血が零れ出る、右胸と腕が無くなっているのが視界に入り、同時に視界は暗転した。

「ニャーハハハハハハハハハハハハ!!!」

礼装が抵抗することすらなくぶつ壊れるとかそんなことある？

防御は不可能だと断じてその場を蹴りつける――が、間に合わない。

そもそも何で誰に攻撃されているのかすら分からないが、それでも多少の軌道修正は叶うのか傾き少し離れた俺の身体を中心に何かがぶち当たる。

衝撃と痛みで飛びかけた意識を引っ掴む。

せめて姿だけでもと見開いた目に飛び込んできたのは巨大な肉球だった。

「ニャーハハハハハハハハハハハハ!!!」

魔術礼装を起動する。

一切の躊躇もなく地を蹴りつけて、その上で肉球を模したこん棒のような何かが迫り、そしてそれは確実に俺の身体を捉えた。

緊急回避を使った上で尚当ててくる……!?!

あり得ない、くそつたれが吐き捨てながらそれでも下がる、先ほどより威力は弱い、辛うじて息はできている、五体は満足だ、ならまだ生きられる。

膝をつく、胸を抑えながら立ち上がればそいつはおかしそうに首を傾けて、それから良くかわしたわねへなちよこくん!と俺を見て言った。

マジで何なんだお前と呟けばそいつは笑った、愉快そうに、楽しそうに、にゃーはっはは! と快活に笑ってから言った。

何だかんだと聞かれたら答えてあげるのが野生の情け！ そう、私は——私は……んー、何なんだろう。

ちよつと待つて具体的に聞かれると困るにや、美女であることに間違いはないんですけどね、と頭をひねってからハツとしたように口を開く。

しまった！ 考えている内に仕掛けたトラップの場所を忘れてしまった！ くっそうこの理系め！ と。

……なるほど！ ただの馬鹿かあ！

まあそんなやつに三回も殺されているのだがそれはそれとして、そんな言葉が吐き出されていて、その瞬間ギョーン！とそいつは俺を見た。

私はカバじゃねー！ そう！ 私はだれでもねえ！ 敢えて言うのであれば密林の化身！ 大いなる戦士の化身！

その名は——そう！ ジャガーマン！！

ドドン！ と効果音が付きそうなほどのどや顔で彼女はそう言った。

……いや何者なのかちやんと分かってるじゃん……

どっせーい！ という謎の掛け声と共にそれは振りぬかれた。

空気を貫くかのような速さで迫り、直後に天草さんが受け止める。

それを見ながら素早く下がれば入れ替わるように鈴鹿とライダーさんが前に出た。

鎖のついた釘剣がこん棒を絡めとり、少し遅れて鈴鹿が踏み込み刀を振り下ろして、そしてライダーさんの身体が宙へと浮いた。

力任せに鎖を引っ張られ、異常な速さで引き寄せられたライダーさんの身体に刀がめり込み血がはじけ飛ぶ。

沸騰しそうになる頭を無理やり回す、押し付けられたライダーさんの身体ごと吹き飛ばされた鈴鹿の手を掴んで引き寄せて、同時に小太郎の蹴りがジャガーマンの頭にたたきつけられた。

鈍い音が響き、しかし彼女の手は彼の足をグツと掴みあげた。

死ねにやー！ という叫び声とともに地へと叩きつけられる、瞬間、天草さんが懐へと潜り込んだ。

音もなく刀は振るわれる、最早防御しようもない程接近した距離で放たれたそれは、しかし躲された。

いや、早すぎ——下手をすればギルタブリルよりも早いぞ。

ふぎけんなよ、と言葉をもらす、直後、肉球が視界を支配した。

どっせーい！ という謎の掛け声と共にそれは振りぬかれた。

同じように天草さんが受け止めて、それを見ながら礼装を起動、現れた二丁の拳銃を手に取りながら下がれば同時に二人が前へと進み出る。

焼き増しのようにライダーさんの鎖こん棒を絡めとり、鈴鹿がさらに前へと踏み込む瞬間拳銃を構えた。

焦燥感に追われながらも、しかしカルデアでの練習を思い出しながら冷静に引き金を引く。

引き寄せられた鎖がピンツと張り、直後に二つの銃弾が鎖を穿つ。ライダーさんがよろけて、同時に鈴鹿の刀が振り落とされる。

しかし余裕そうに身体を傾け躲した彼女の側頭部へ、小太郎の蹴りが打ち込まれた。

完璧な不意打ちだったのだろう、彼女の身体は大きくよろけてそれを逃すまいと鈴鹿と天草さんが地を蹴った。

二振りの刀が迫る、それを援護するように矢を引き絞り撃ち放つと同時に、爆音とともに天草さんの身体が弾きあげられた。

それでも迷うことなく振るわれた鈴鹿の一撃はしかし宙を裂き、空を駆る矢ごと蹴り飛ばされた。

強すぎる……！ あんなふぎけた振る舞いでこれだけ強いとか原則にもほどがあるだろ……！

この先にも何かがある可能性が捨てきれない以上使いたくなくなかったが仕方がない、そう思つて令呪を切る。

瞬間、ライダーさんの魔力が膨れ上がって、直後にジャガーマンへと蹴りを叩き込んだ。

激しい音と共に防がれる、しかし彼女は止まらない。

両手に持った釘剣を用い、まるで踊るように滑らかに地を踏みしめて、時には掌打、時には蹴撃を織り交ぜ巧みにぶつかり合う。

その間隙を縫うようにクナイが飛来して、それを躲すと同時、地面が爆発して火柱が立ち上った。

うおお……忍法かあれ……すげえ……

そう思った瞬間、ライダーさんが弾け飛んだ。

距離をとっていた俺の真横を高速で吹き飛んでいき激しい音と共に木へと身体を打ち付ける。

冗談にしては質が悪すぎるだろ、そう呟くと同時に衝撃は身体を突き抜けた。

どっせーい！ という謎の掛け声と共にそれは振りぬかれた。

いやこれ無理なのでは？ あの小太郎のクリティカルヒットが決まってるにも関わらず何てことない顔で動けるとか化け物が過ぎるんですけど……

多少傷ついてるならまだしも全然余裕そうにしているから余計に質が悪い。

もつと言えば最悪だ、こんなふざけた相手なのに勝てるビジョンが浮かばない。

けれどもどうにかしなければいけないのだ、そうしなければ全員死んで終わる、それだけだ。

だから——出し惜しみは抜きだ。

小太郎の蹴りが吸い込まれるようにジャガーマンの側頭部へ叩き込まれる、直後に令呪を切った。

瞬間、爆発するかの如く膨れ上がった魔力と共に幾百の刀が現れた。

その全てがスラリとジャガーマンへと切っ先を向けて、数瞬の後に鋭く、しかし激しく撃ち放たれた。

爆音にも近い音が連続して響き渡り、しかしジャガーマンは一切の切り傷も追わずに素早く跳ね上がった——が、想定通りだ。

そもそも俺が令呪を切った相手は鈴鹿ではない。

流星にあれだけ分かりやすい攻撃で殺せるとは今更思ってもいない、こういう手合いは二段構えが基本だろ——ぶちのめせ！ ライダーさん!!

刹那、流星が弾けるように輝き空から落ちてきた。

轟音と地響き、それから“ギニャーニャーニャー!!?”という何とも間の抜けるような悲鳴が辺りを支配する。

これで多少なりともダメージは入っただろ、と思えば未だに広がる砂煙の中からライダーさんがふわりと、歪な曲線を描きながら落ちてきた。

ドサリと俺の前へと力なく倒れ伏し、煙の奥でギラリと獣の瞳が怪しく輝いた。

やばい、と思うのと不快な音が鼓膜に響いたのは同時だった。

次いでおかしくなりそうなほどの痛みが全身を駆け抜ける、今まで何度も味わってきた鉄の味がする深い赤が口から零れ落ちた。

ドサリと俺の前へと力なく倒れ伏し、煙の奥でギラリと獣の瞳が怪しく輝いた。

やばい、と思うより先に身体を捻る、恐ろしいほどの速さで放たれた手刀を寸でのところで躲しながら素早く地を蹴った。

瞬間、巨大な肉球が迫り、それからガードするように数本の刀がそれを刺し貫いた。

ほんの少しだけの停滞、けれどもあまりに意味を成さない妨害ごとそれは振り抜かれ、しかしそれは鼻先を掠めるだけに終わった。

天草さん——！

申し訳ありません、下がって！　　という言われると同時にそこその力で後ろへ投げ飛ばされる。

上手く受け身をとりながら礼装を起動してすぐさまを姿勢を整える。

ライダーさんは大丈夫だ、まだパスは繋がっている、であれば俺が今すべきことは邪魔にならない程度の援護と指示。

数回弾きあつて離れたジャガーマンへと追い打ちをかけるように鈴鹿の刀と小太郎のクナイが閃き空を走る。

それを事も無げに叩き落した彼女の脳天へとスコープを覗き込み、照準を合わせて撃ち放つ。

ドン、という炸裂音を響かせ飛んだ銃弾はしかし当たり前のように

躲された、がそれで良い。

これだけ時間を稼げば彼女——ライダーさんは動ける。

ジャラリと舞った鎖がジャガーマンの身体を縛り上げる、直後に固定したら手を放せと叫びながら礼装を起動する。

ほんの瞬き一回分の停止、それから鎖が千切られる刹那、それだけあれば充分すぎた。

懐へと潜りこんだ小太郎の小刀がギラリと光を反射する、それを援護するように天草さんの魔術が弾けるように飛んで、動きを阻害するように鈴鹿の刀が降り落ちた。

首を狙った一撃が掠めて血を弾く、どれだけ強化しても俺では捉えられない速さの一撃が小太郎へとぶち込まれて彼の身体が虚空へ浮いた。

——ガンド。

カルデア戦闘服へ備え付けられた魔術礼装のガンドに概念礼装のガンドを加えたミックスバージョンだ。

当たれば動きを止められる、当たらなくても一瞬の猶予を周りへ与えられる。

くたばれ、と声を出さずにそう言った直後に、黒い光がこん棒に弾き落とされる。

瞬間、刀の群れが殺到した。

彼女の目がほんの少しだけ見開かれる、即座に超スピードで離脱した彼女へと天草さんが踏み込んだ。

刀身が木漏れ日を薄っすらと弾いて光る、それを躲そうとした彼女の真後ろで爆発するように火柱が立ち上がった。

刹那の驚愕、一瞬の動揺、瞬き一回にすら劣る瞬刻、しかしそれが全てを決めた。

ジャガーマンの身体に刀が鋭く入り込む、後退する暇すら与えぬほどの速さで振りきられて鮮血を散らした——と、思われた。

否、確かに天草さんの振った刀は彼女の身体を捉えた、捉える筈だった。

しかしそうはならなかった、ジャガーマンの首筋へと走っていたそ

れはほんの数cmの間隔だけ残して受け止められたのだ。

「ハアイ、中々楽しそうなことしてるわね？ 私も混ぜてくれるかしら？」と、優しい気な微笑みを浮かべる女性によって。

金の長髪にエメラルド色の瞳、どこからどう見ても美女だと言いたいのない女性はしかし、これ以上ないほどの覇気を伴い姿を現した。考えるまでも、確かめるまでもなく、彼女がこの密林を作り出した調本人、もっと言うのであれば“密林の女神”であることを理解する。

直後にヤバイ、と逃げろ、が頭を支配した。

けれども足は動かない、迂闊に動いたらそれだけで死ぬのが目に見える。

参ったな、と素直に思う。

この珍生物ジャガーマンだけでも手いっぱいだったのに、大本命が来るとか最悪だとしか言いようがない。

今のメンバーじゃ勝ち目がない、それだけが分かって、だからこそ何もできない。

脂汗が頬を伝って落ちる、それでも今すべきことだけは即座に理解していた。

すべきこと——即ち情報収集。

彼女が誰なのか、何をしているのか、何をするつもりなのか。

それだけ分かれば後はもう、誰か一人が生き残ればいい。

その一人が情報を持ち帰れば、それだけ此方が有利をとれる。

静かに息を吸い込んで、ゆつくりとそれを吐き出してから口を開こうとすればそれより早く天草さんが問いを投げかけた。

何者ですか、と端的に。

それから場外からの乱入は少々マナー違反では？ と。

そうすれば女性は驚いたように口を少しだけ開いて、それから楽しんで表情をゆがませた。

場外も何も、この密林こそがワタシのフィールドデース、むしろ場外からやってきたのは貴方達デスヨー、と。

この場に合わない随分と陽気な語尾だ、それでも威圧感が増してい

く一方で上手く身動きが取れない。

そんな俺たちを見ながらけれども、と彼女は言葉をつづけた。

その勇猛さに免じて名乗りを上げましょう、ワタシは——三女神同盟が一柱、ケツアルコアトルデース！ と。

……!?

ケツアルコアトル——アステカ神話における最大レベルの神。

かのギリシャ神話と同じように、人々へ火をもたらしたという創造神だ。

詳しくは知らなくとも、それでもそのくらいは俺でも知っている、それくらい強大な神。

なんでそんなやつがここにいるんだよ……!!

焦る気持ちを無理に鎮めて、落ち着かせる。

大丈夫、大丈夫だ。

まだ、まだ場は保たせられる。

刀をひいた天草さんの隣に並び、今度こそ口を開いた。

なぜ、貴方のような神が三女神同盟に入っているんだ？ と。

それは確かに情報を抜き取るため、この場を持たせる為の言葉であつたがしかし、それは同時に純粋な疑問でもあつた。

何度でも言うようだが、彼女は人類に文明一般を授けた文化神でもあり、また平和の神ともされる神なのだ。

そんな彼——彼女（ケツアルコアトルはそもそも男神だ）が、人類の敵側につく……？

普通に考えてあまりにもミスマッチ、正直違和感しか覚えないくらいだ。

だからこそ、ストレートに、飾り気もない言葉でそう聞いた。

そうすれば彼女はポカンとしたように俺を見た後に、アハハ、と少し笑った。

良いでしょう、応えてあげます……といつても期待していたような特別な理由なんてないんだけどね。

それは——私たちが、人間を殺すために母さんに呼ばれたから。ただ、それだけの話。



彼女はそう言つて、それからそんなことより、と話を変える。

貴方、それ、大丈夫——と聞くのは愚問なのでしょね、ですから、ええ、言い方を変えましょう。

それ、良くないわ……ええ、見ていて許せない、私が許せない。

確かにその魂の色は気高く力強い——ですが、ダメ、ダメ、ダメ。

その在り方は、あまりにも見過ごせませーん！

矯正の時間デース！ と彼女は強く叫んだ。

矯正——!? と思う暇はなかった。

拳が眼前に迫り、続いて守るように飛び出た天草さんの刀がバキリと折れる音がする。

次いで、天草さんの身体が吹き飛び木へと全身を打ち付けた。

早い——ジャガーマンの比じゃない！

ヤバイ、いや、ヤバイで済ませて良いようなヤバさじゃない！

驚いている暇はない、気を抜けば死ぬ——否、気を抜かなくても殺される！

瞬時に令呪を切つた、二画残つていた紋様が音もなく輝き消えて、ライダーさんと鈴鹿、二人の魔力が爆発的に膨れ上がる。

直後、身体は宙を舞っていた。

遅れてやってきた衝撃が全身を貫いて飛びかけた意識をつかみ取る。

気絶しない俺を見て、少しだけ驚いたような顔をした彼女の姿が掻き消えて、それに気づいたと同時に踵が腹に食い込んでいた——と、思つた。

認識するより早くに視界がブレる、彼女の一撃は俺と同じサイズの丸太をたたき割り、代わりに俺は小太郎に抱えられていた。

助かった、と言う暇はない。

ただ一瞬だけ目を合わせて頷き合つてから、未だ倒れている天草さんの首根つこを引つ掴む。

ライダーさん！ 鈴鹿！ 撤退だ！

そう叫んで地を蹴りつける、瞬間、もう見慣れたこん棒が視界いっぱいに広がって、しかしそれが当たることは無かつた。

当たり前だ、令呪でブーストかけた二人がいるんだぞ。

一撃を避けることくらい訳ない。

といつても何度も無理だ、だからこそ、早く離れたい——んだけどなあ！

音より早く迫ってきた一撃を鈴鹿が受け流す、それに使われた幾本もの刀が音を立てて碎けていく中を潜り抜けるように走り抜ける。

直後、フラついていた足取りを整えた天草さんが逆方向へと向いて足を止めた。

ここは私に任せて、どうかお逃げください。

そして、ギルガメッシュ王には申し訳ありませんとお伝えいただけると幸いです、とそう言つて彼は、その魔力を勢いよく爆発させた。

——迷っている暇は、無い。

誰かが犠牲にならなければどうやってでも切り抜けることは不可能だ、それをすぐさま察したからこそ彼はああ言った。

それが分からないほど、俺だつてもうど素人じゃない。

綺麗ごとだけで片付けられる世界ではないことは、もうわかりきっていた。

だからこそ、すまないとは言わなかった。

ただ、ありがとうございます、と大声で叫んで駆け抜ける。

少しでも追いかけて来づらくなるように小太郎が木々へと火をつける。

陽炎に揺らいだ天草さんの身体が、どこか儂く見えた。

何だか酷く慣れた心地の揺れと、酷く耳障りな音で目を覚ます。

うつすらと目を開ければ天気は最悪で、豪雨が降り注いでいた。

服が身体に張り付いていて絶妙に気分が悪い。

そこまで思つて、ようやく目をしっかりと開ければ、直ぐに視界に入ってきたのはライダーさんで、前を鈴鹿が走っていた。

後ろからも足音がするから、恐らく小太郎がいるのだろう。

雰囲気的なんとなく、ああ逃げ切れたのだな、と思う。

いや、少なくとも今はまだ、追いつかれていない、と言うべきか。

まあ何はともあれ天草さんを除いた全員が無事つてのは良いこと

だ。

とりあえずライダーさん、と声をかければ彼女は眼を覚ましましたか、よかったです、と言った後にもう少しだけ我慢してください、と言った。

まもなくウルクですので、とも。

……マジ？　つてことは俺、少なくとも一日以上は気絶してたのか……

迷惑かけたな、と言いながらも背中にしがみつく、いやだつて降りたほうが色々迷惑だし、ね？

目を覚ましてから数時間もしない内にウルクへと帰ってきた俺たちは、一息入れることもなく直ぐにジグラットへと足を運んだ。

内容自体は急を要することでも無いですが、しかし、なるべく情報というのは早くに耳に入れておきたいですし、それに貴方への説明も兼ねてですから、と小太郎が言ったからだ。

まあ俺としては今ベッドに寝転がろうものなら二日は爆睡できるという自信があるくらい疲労を感じていたので、それについては概ね賛成だった。

だからこそ、今こうして血みどろかつずぶ濡れの状態でギルガメツシユ王の前へとやってきたという訳だ。

報告自体は簡潔にまとめられたものを小太郎の口から告げられた。

密林に潜入後、ジャガーマンと名乗る珍生物との遭遇、撃退寸前で現れた女神——ケツアルコアトルの出現。

天草四郎時貞が殿を務めてくれたお陰でこうして戻ることができたこと。

それに加え、あちらは密林を出てからはしつこく追ってこようとはしなかった、ということ。

それを一通り聞いたギルガメツシユ王はふむ、と一息ついてから俺を見て、ケツアルコアトルについて詳しく知っているか？　と聞いてきた。

まあ、当然ながら知っているけど……まあ、ドクターのほうが詳しいよね、と言えば彼は僕かい!?　と彼は驚いた後にコホン、と咳払い

してから説明を始めた。

ケツアルコアトルは端的に言えば南米の神の一柱だ。

と言つても数多くいる神々の中でも彼……彼女は群を抜いているだろう。

何せ彼女は——金星の女神にして太陽の大鳥、マヤの征服王、トルテカの太陽神！

間違いなくこの時代において最強レベルの敵——下手をすれば現状最大戦力であるエルキドゥより格上だ、と。

それを聞いてからギルガメツシュウ王はなるほどな、と呟いた後にもう少しまとめたものを作っておけ、とドクターに命じた後ご苦労だった！ と俺達へと声をかけた。

見事な働きであつた、と彼は言つたのだ。

本来の目的は果たせなかつたが密林の女神の素性が割れたのは大きい、と。

その言葉を、甘んじて受け入れる。

もつと俺が上手く動いていれば、もつと皆を動かせていたら、もしかしたら天草さんが犠牲になることは無かつたのかもしれない、という思いを飲み下す。

あれがベストだつた、あれがあの時打てる最善手だつた。

それを迷うことなくとれたのだからやはり、これは最善の結果だつたのだろう。

頭を下げ続けながらそう思つていけば、おい、と声をかけられた。

それに応えて頭を上げる、目と目が合つて数秒経つてから彼は分かっているなら良い、と言つて数日の休みを与える、確りと休めよ、と伝えてから俺たちに退席を促した。

それからの数日は、何か特筆すべきようなことは無かつた。

強いて言うのであれば今までのぶり返しが来たのか全身が疲労と筋肉痛でまるで動けなかつたくらいである。

お陰でごはんもまともに一人で食べれなかつたレベル。

流石にこの年で”はいあーん”をしてもらうとは思わなんだ……

もちろん、俺だつて動けない以上口で散々抵抗はしてみせたが当然

上手くいくわけもなく、何だか知らんが沢山の人に食べさせられてしまった。

そう、沢山の人である。

つまりライダーさんや鈴鹿だけでなく立香君を始めマシユ、牛若丸、弁慶、小太郎、果てには面白がったウルク市民にまでされたということである。

いや一生モノの恥でしょこれ……

確かにダ・ヴィンチちゃんやドクターには”得難い経験をしてくることがいい”とか”素晴らしい発見や出会いがある”とか言われたけどこれ間違いない必要な経験だったでしょ……

何年も遡ってやったことが現地の人たちにあーんしてもらったとか口が裂けても他人に言えねえよ……

まさかこの歳になってまで黒歴史を生産してしまうとは……人生いろいろありすぎ……

と、まあそんな感じで遠い目をしていれば与えられた休日なんていうのは光の速さで過ぎていったという訳だ。

色々と文句は言いたかったが、それでもこれ以上ないレベルの待遇で休ませてくれたのですっかり身体は健康体である。

疲労のひの字もないくらいだ、何でも従いますぜと言わんばかりの表情でジグラットに向かえばそこにはギルガメツシユ王とシドウリさん以外にも見慣れない男が立っていた。

真っ白な長髪に、どこか胡散臭そうな、しかし優し気な表情を張り付けた、如何にも魔術師然とした青年。

仕事の報告があるから、と一緒に来た立香君とマシユが手を振っているから知り合いではあるのだろう。

後で誰なのか聞いておくか、何て考えながらギルガメツシユ王へ報告をする立香君とマシユの話聞き流す。

その内容は毎日聞いているお陰で知ってはいるが、相変わらず意味が分からない。

いやだって浮気調査してたら地下迷宮の探索になつてたとか言われて一発で理解できる？ 俺はできなかつた……

そんな話をワクワクとした様子で聞き入るギルガメッシュ王を見て何だか意外だな、なんて感想を抱いていれば彼らの報告は終わっていた。

案外早かったな、と思い彼らの横に並べば、ギルガメッシュ王は俺と立香君の名を呼び、それから貴様らには天命の粘土板の搜索をしてもらう、と言った。

詳しい話等はそこの男に聞け、とも。

そこの男——つまり先ほど目についた魔術師然とした青年である。何となくだけこの人知っているような気がするんだよな、と思えば彼は薄っすらと笑ってこう言った。

やあ、君とは久し振りだね、私のこと分かるかい？ と。

聞くと同時に、既視感を覚える。

もう知り合いだったの？ と言う立香君に曖昧な返事をしながら頭を回し——あ。

あ、ああああああああ!!! マーリン!!! あんた、マーリンか!?

思わず叫んだ俺に、正解、と彼は笑った。

大魔術師マーリン。

かのアーサー王の始まりに立ち会い、支え続けたキングメーカー。控えめに言って超が付くほどヤバイ魔術師である。

もつと言えばあのソロモンと同格——冠位の資格持ちの魔術師だ（これはギルガメッシュ王もだが）。

まさか冠位の資格持ち二人と会えるとは、と思いつながら頭を下げる。

アメリカでは助かった、貴方の助力が無ければ勝てなかった。

そう言えば彼は気にすることは無いさ、私は君たちのファンでね、あれくらいはただサービスだよ、と片目を閉じて言った。

ファン……? ああ、千里眼か。

ダ・ヴィンチちゃんとドクターに聞いたことがある。

かのソロモンがもつ千里眼は未来と過去を、ギルガメッシュ王の千里眼は未来を、そしてマーリンは現在の総てを見通すらしい。

普通にチートが過ぎるとは思うがまあ、つまり彼はその千里眼を用いて今までの特異点修復の旅を見ていたのだろう。

その様が偶々彼のお気に召したということなのだろう、まあ立香君なら当然ですよね！

不幸にもレイシフト適性が100%だったってだけの一般人がこんな壮大なことに巻き込まれ、尚且つ生き残り、戦い続けているのだ。そりゃ応援もしたくなるだろう、彼、カッコいいし。

うんうん、と内心頷いていればマーリンは不思議そうに俺を見て、それから言った。

私は特に君のファンだよ、君のお陰で紡がれた物語は、非常に味がある、と。

……こいつ正気か？

じゃあ早速行こうか、とマーリンは言った。

いや行くも何も何をしに何処へ行くのかさっぱりなんですけど……

せめて説明をしてくれ？　と云えば彼はああ、忘れていた、と言つてから君たちは天命の粘土板というものを知っているかい？　と聞いてきた。

ううん……聞いたことないですね。

立香君達を見ているが、やはり彼等も心当たりは無さそうだった。

そんな俺たちを見て、彼はぎっくり言うたあれだよ、ギルガメツシユ王が常に持っている粘土板あるだろう？　あれだよ、と言った。

あれと同じものをかの王はどこかに置いてきてしまったらしくてね、それを回収したいという訳さ。

因みにこうしていることから察しているとは思いますが、どこに置いてきたのかはわかっていない、つまり地道に探すしかないということだね！　とも。

うわくつそめんどくせえな……と思いつながら一つ聞く。

即ちそれってどんくらい重要なもんなの？　ということだ。

その問いに彼はコホン、と咳払いをしてからこう答えた。

ギルガメツシユ王は時折自分自身とは関わりのない未来を、意図せ

ず視ることがあってね、それを無意識の内に記録することがある。

それが天命の粘土板さ、彼個人にとっては重要ではないが、余人にとっては値千金の代物、という訳だ。

今回の戦いに関わることかもしれないし、そうでなくても敵方に利用されてしまったら面白くない。

だからさくつと見つけ出しておこうということさ、なーに、粘土板は微弱な魔力を発している、近くまで行ったら直ぐに分かるから気長に探そうじゃないか！ と。

そういう訳ならチームを分けたほうが良いのでは？ という意見が出てくるのは至極自然なことだ、それに誰も文句を言わないのもまた自然なことだった。

一つ、魔力の探知ができるのがマーリンだけなのは、という問題が浮上しかけたが、カルデアの方でも探知できるということだ、その問題は霧散した。

ではどうチームを分けるか、という話だが、これもまた直ぐに決まった。

というよりは、悩む余地がなかったというべきか。

マスターである以上、俺と立香君は一緒になるべきではない、となればそれぞれと契約しているサーヴァント達もそれぞれ分かれるだけだったし、強いて言うのであればマーリンがどちらに着くか、という問題があったが、それも彼が俺と行動すると言ったことで終わった。

それ自体は彼の気分で決定されたことだったが、確りとした話し合いをしたとしてもやはり同じ結果になっていただろう。

何せ俺のところにはライダーさんと鈴鹿しかいないのだ。

いや何も心許無いと言っている訳ではない、ただ立香君の方と比べれば戦力があまりにも乏しい。

故にこちら側、という訳である。

よろしく、と改めて挨拶をしながらどこへ行くのかと聞けば彼はそうだねえ、と少し考えた後にバビロンと杉の森にしよう、と言った。できればクタの方も見ておきたいが、逆方向だしね、とも。



ううん……名前を言われてもいまいちわかんねえな、いう顔をしてれば立香君が北西側ですよ、と教えてくれた。

北壁の更に奥である、と。

ええ、めつちや危険地帯じゃん……気が進まねえな……というか立香君もうこの辺の地図覚えてんの？ 優秀かよ……

廃墟バビロンと黒い杉の森。

この二つは近くにあるがしかし杉の森のほうが奥にあるそうだ。

ということは一層危険なのは？ と思ったがバビロンも大して変わらないらしい。

バビロンは魔獣戦線に近く、魔獣が住み着いている。

杉の森は単純に魔獣の女神の巣が近い。

いやそれ間違いないく杉の森の方が危ないでしょ……大丈夫なの？

そう聞けばまあ、あんまり踏み込みすぎなければ大丈夫さ、とマールンは言った。

杉の森全域を探すとなればあまりに時間がかかるだろうが、なに、ギルガメツシユ王も森のど真ん中で書くなんてことは無かっただろうしね。

何せ森は危険がいっぱいだ、精々端っこを探してくれば良いよ。

それにもし何かあったとしてもこの戦力であれば抗戦しながら撤退も容易だろう。

別行動すると言っても長くて半日程度だ、緊急事態に備えて信号弾もあるしそう危険はないよ、とも。

なるほどな、とひとまずの納得をする。

じゃあどつちがどつちに行こうかと立香君と話し合う。

正直に言えばどつちに行っても良いのだが独断で決めて良いことでも無い。

かといって互いにどつちに行きたいという希望はもちろん無いわけ、面倒だしじゃんけんしようかとなるのは必然なことだった。

必然……？ うんまあ、よくあることだから……

まあそんな大分緩い感じでしゅっぱーつとウルクを出す。

簡単にバビロンとか杉の森とか言っているが実のところ滅茶苦

茶遠い。

普通に馬とか貸し出してほしいところだったが、もし敵と接触したら間違いないで殺されてしまうのが目に見えてしまうため借りれなかった。

つまり徒歩である。

まあいけない距離でもないが、それでも日数はかなりかかってしまう。

ざつと片道二日と言ったところだろうか。

といつても火急という訳ではない、焦って進む必要はない故に、まったくとした雰囲気は拭えないまま俺たちはテクテクと足を運び、大したトラブルに遭遇することもなくバビロンへと到着した。

ここからは別行動である、立香君は更に北へと足を運ぶのだ。

たかだか数時間も歩けば杉の森だ、マーリンの言っていた通り、緊急事態でも直ぐに合流できるだろう。

一応の合流地点である北の高台——バビロンと杉の森の間にある——だけ確認してから、じゃあ気をつけて、と声を掛け合い別れ、廃墟となったバビロンへと足を踏み込む。

当然ながら人の気配はない、けれども生物がいるような痕跡はあちらこちらにあった。

マーリンがそつと横に来て、なるべく交戦は避けたい、慎重にね、と言い、それに無言で首肯する。

当たり前だ、そもそもこの廃墟全域に住み着いてる魔獣全部と戦うなんてことになったらそれこそ逃げることはできるが本来の目的は達せない。

といつてもマーリンの魔術で姿も気配もばっちり隠れているお陰でそうそう見つかることは無いのだが。

それでも音を立てたりぶつかったりすれば終わりである、故に慎重に、かつ迅速に、廃墟を回る。

魔獣の真横をすれ違ったりとか中々スリルのあることをしながら数時間かけて都市を回ったが結果的に粘土板を見つけることは叶わなかった。

残念だったなあと思っていけば見つかるに越したことはなかったけど、ここにはない、ということが分かっただけ収穫さ、とマーリンが言う。

ロマニの方からも連絡が無いしきつと森の方も見つからないだろう、今回もはずれだったね、と。

慣れてるなあ、そりゃ慣れるさ、なんて会話をしながらさっさと出よう、と歩を進める。

取り合えず戦闘が無くて良かった、と思いながらサクサクと歩いていけば不意に、声が聞こえた。

女性の声のように聞こえる、それにこの感じ、悲鳴？

反射的に周囲に視線を走らせる、どうかした？ と俺を見るライダーさんと鈴鹿に声が聞こえた気がする、と言おうとした。

「どーいーてー!!! じゃまあああああ!!!」

そう、言おうと口を開こうとした瞬間、盛大な悲鳴と衝撃が俺を貫いた。

瞬間的に腕を伸ばす。

落下してきたそれが腕に乗る瞬間膝を沈み込ませて勢いを和らげた。

しかしそれでも問答無用の威力を持ったそれはキヤツチするといふよりは普通に直撃したみたいいな音を立てた。

ドゴオオオオオン!! と激しい衝撃音が辺りに響く。

ぐ、おおおおおおお!! くっそいてえ!! 腕がもげる、いやもげた! 真面目にそう思うほどの痛みが腕を襲うがグツとこらえる。

反射的に礼装を起動し魔力で強化しなければ今頃思った通り腕はもげていただろう。

それだけの勢い、威力だった。

けれども成果はあった、なにせ落ちてきたのは人間だ。

上手くキヤツチできたし見たとこ五体満足、うーん、完璧な受け止めでしたね……

ビリビリとする腕を無視してもう少しだけちゃんと思えば腕の中の人は酷く美しい黒髪を伸ばした女性だった。

目をぎゅつと閉じているがまあ、それでも控えめに言っただけで美女と言っただけで支えのない容姿。

ここでいつもの俺であれば、遂に親方！ 空から女の子が！ ができるとは……！ と感動していたところだが流石にこの状況でそんなことを考えるほど阿呆ではない。

むしろ嫌な予感がしているレベル、経験上こういう手合いは碌な相手ではないからだ。

マジでどうすべきだろう……と呟けば女性は不思議そうに俺を見た。

視線と視線が一瞬絡み合う、直後に女性は叫ぶように声を上げた。

「なによアンターーーー!?」

ほら、碌な相手じゃない……!!!

叫ぶと同時に女性は素早く離れ、警戒したように俺を見てから口を開いた。

こ、この私の身体に断りも無く触れるとか……！ 見慣れない顔と恰好ね、どこの市の人間よ、ていうかまだこんなところにいるとか正気？ ニツプルから逃げてきたのか、それともバビロンの生き残りつてどこかしら。

まあでも、そのどちらかなら年貢の納め時ね。

手足を撃ち抜いた後にエビフ山にばら撒くわ、と。

ええ……何この人いきなり落ちてきた拳句滅茶苦茶物騒なこと言いはじめたぞ……

シンプルに怖すぎる、あれ誰？ とこつそりマーリンに聞けば彼は最悪だ、といった顔をしながらあれはイシユタル、ウルクの都市神にして最大の問題児、女神イシユタルだよ、と言った。

……女神!!? イシユタル!!?

マジ名前負けしすぎなのでは……? 女神ってそんなホイホイ落ちてくるもんなの？

そう聞けばまさか、と彼は笑いながら否定した。

だよな、つまりあの女神——イシユタルが間抜けなことか。だとしても不味い、と思う。

流石に女神を相手に勝てる気は微塵もしない、かといつて上手く撤退できるかと言われればそれも難しいだろう。

どうするべきか、そう思いながら一步前に出た。

そのどちらでもありません、私たちはこの特異点の修復をしにきた者であり——今はウルクの一住民として働いているものです。

そう言えば彼女は驚いたように目を開き、それからさういえばアンタは見たことあるわね、とマーリンを見て言った。

それにしても異邦からの来訪者、ね。

信じ難いけどまあ、そういうこともあるか。

そのお陰で私もこうしているんだし、その言葉を信じます。

つまり貴方は私のことを知らない、もしくは知識として聞いたことがある程度、という訳ね。

それなら仕方ない、か。

今回だけは見逃してあげましょう、代わりに先ほどのことは忘れなさい。

そう言つてから俺を見る。

先ほどのこと……ああ、落ちてきたことか。

わかりました、と適当に返しておけば絶対よ!? 今の私の身体のサイズとか! 悲鳴を聞いたとか! その辺諸々含めて悪質な嘘流したら地の果てまで追い詰めるからね!? きちんと敬いなさい! 一日三回くらい! と捲し立てるように言葉を並び立てられる。

いや注文が多い……見逃してくれるって言うんならさっさと行つてくれ……

了解了解と言つておけば、彼女は弓のような形をした巨大な道具——彼女曰く天舟に乗り、ああ、そうだ、と思いついたようにまたも口を開いた。

この辺りに大切なものが落ちてなかった? と。

大切なもの——反射的に天命の粘土板を思いつく、しかし直後にさうではない、と思に至る。

そもそも大切なものつてなんだ?

そう聞けばだから、大切なものよ! と彼女は言った。

こう、見るからに「これはすごい……」ってなるものよ！ 一目見れば分かるようなもの！

見覚え、ある？ と。

いや分かるかあ！ そう言いたいのを抑えていけば、マーリンが何か失くしたのかい？ と聞いた。

そうすれば彼女はばっ、そんなわけないでしょう!? ちょっと頼まれただけなんだから！ あんなの、どうでも良いんだから！ と慌て始めた。

もうそれ失くしたって言ってるも同然なんだけど……

ひとまず主語をくれないかな……

そう思っていれば、彼女はだから！ と口を開く。

とにかくこの辺りに「なにか」「あった」か「なかった」かを教えればいいの！

で、どうなの。

やっぱり落ちてた？ あれ？ ていうか壊れてなかった？ 壊れてた？ 私またやつちやつた!? と。

もう表情の変遷の仕方がすごい、最後なんてほぼ泣いてるといっても過言じゃない顔である。

見えて愉快すぎるだろう……ていうか答えようが無いな……そう思いついていけば何とか言いなさいよー!! と彼女は叫んだ。

沈黙って、時に一番残酷なんだからねー!! と。

いや答えてはあげたいんだけど、ほら、情報が無すぎ……

どうしようも無——礼装を起動する。

多数の魔獣——気づくのに遅れた！

バビロンは魔獣の住処、そのど真ん中でこんなことをしていれば当然のことだった。

流星に時間が経ちすぎたね、集まってきてしまったか、と隣でマーリンが言い、ごめんと謝る。

俺の対応が悪かった、と言えはいや、彼女と敵対しなかっただけ充分以上だよ、正直驚いたくらいだ、と彼は言い、それから逃げに徹しようとも言った。

同意である、けれどもイシュタルを置いて逃げるのは後味が悪い。彼女一人で充分対応可能なのは分かるがそれでも、というやつだ。そう思っていればイシュタルはへえ……と口端を上げた。

切り替えの速さは中々、覇気も上々、観察眼も悪くないわ、と。

良いわ、今はちようどむしやくしやししてるし、見てなさい！ 派手にやるわよ！ とイシュタルは弓を引いた。

急速に集まった多量の魔力が鋭く弾ける。

閃光弾のように激しく輝いたそれはしかし、圧倒的な熱量をもって現れた野生の魔獣の悉くをたかだか数秒程度で焼き払った。

……うっそだろ。

思わずこぼした声が、空へと解けて消えていく。

傍から見ても強靱であると言えるウルク兵が三人でかかってようやくと一匹相手にできるほどの力を持つ魔獣を一瞬で、何十と焼き尽くした？

流石に女神というくらいだし、何より肌で感じられる魔力から尋常じゃないのは分かっていたが、これほどとは……

そう思ってから俺はアホかと、そう思う。

いくら馬鹿げた出会い方をしたと言っても、あの人は正真正銘、ガチの女神なのだ。

つまりあの日密林で出会い、逃げることにしかできなかった女神・ケツアルコアトルと同格。

無意識的に気が緩んでいた、それを自覚し気合を入れなおしてから素早く頭を回す。

逃げるのであれば今が最大のチャンスだ、そう思ってそつと後退ると同時、彼女はふわりと空へと浮いた。

さて、ストレスも粗方発散できたし、私はもう帰るわ。

精々抗いなさい、私、弱い者には興味ないから。

あー……それと、受け止めてくれてありがとね、お陰で助かったわ。そう言い残してヒューンと消えていく、滅茶苦茶自由だなあの女神

……

そんな感想を抱いていたらグツと腕を引かれてそのまま肩に乗せ

られた。

鈴鹿……！

判断が鈍い！ どうしたの!? と言われながら風を切る。

ちよつと動揺した……と零せばしつかりしてよね!? と激を入れられごめんと謝り、それから現状に既視感を覚えて少しだけ笑みがこぼれた。

そんな俺を横目にいきなり何にやけてんのよ……気持ち悪いわね、と鈴鹿が言う。

いや、その、何だ。

お前、俺を担ぐの上手くなったよな。

そう言えば彼女は少しだけ考えた後にプツと嘔き出した。

何だかんだ寄つて来る魔獣を（ライダーさんと鈴鹿が）ふつとぼしながら走れば高台には一時間程度で着いた。

立香君達の姿はない、まだなのだろう。

一応ドクターに聞けば後三十分もすれば合流できるだろうとのことだ。

それまで暇だな、と思っていればマーリンがあの子シユタルで助かったね、と言葉を漏らした。

……あの？

なんかあったのか？ と聞けば彼はそう言えば話してなかったか、と言った後に彼女に関しても色々と込み合っているし、話しておこうか、と口を開いた。

女神イシユタル、先ほど出会った彼女は真正正銘、本物の女神イシユタルではあるが、しかし完全に同一のものではない。

彼女は——そう、カルデアで言うところの疑似サーヴァントというやつなのさ。

ウルクは確かにギルガメッシュ王による王政なんだけれどもね、それも一枚岩じゃないんだ。

王権、祭祀場、そして巫女所の三権分立で成り立っていて、この巫女所というのはギルガメッシュ王よりも都市神を優先するところだった。



君たちがここに来るずっと前、この時代が特異点と化す兆しを見せ  
時空が不安定になり始めたころのことだ。

ギルガメツシュ王がバビロンの蔵を開放し、あの北壁作成に取り掛  
かっていることを好機と見たんだろうね、巫女長は女神イシュタルの  
召還を試みた。

といってもイシュタルは女神だ、普通にいけば召喚できるわけがな  
い。

だから彼女らはまず女神の神格に適合する魂を召喚し、その魂にイ  
シュタルを召喚しようと試みたわけさ。

だがまあ、それが成功したかどうかは定かではない。

なにせ女神だ、いくらこの時代が不安定で、召喚方法を工夫したと  
しても成功する可能性は高くはないだろう。

だが事実としてイシュタルはああして顕現した。

基本的にメソポタミアの神々は金髪で、その一方人間は黒髪とされ  
ている。

そして今の彼女の髪は美しい黒髪、つまりは基となった少女がいる  
ということだろう。

恐らくカルデアのデータでは彼女は紛れもなくイシュタルだった  
だろうが——まあ、そうだね。

その少女は元々すごくイシュタルと気が合う人間だったというこ  
となのだろう。

つまりイシュタルとその少女、二人の自我が完全に混ざり合って新  
しい、しかし元のままの女神として成立している、という訳さ。

だから今のイシュタルは元々のイシュタルより凶暴性や残酷さ、残  
忍さというものが薄れている。

言うなれば善性のようなものが混ざっている状態、と言ったほうが  
分かりやすいかな。

だから助かったという訳だ、そうでなければ今頃僕らは塵だよ、と  
マーリンはハツハツハと笑ったが割と笑い事ではない。

マジで危ないところだったじゃん……くそ助かった……

そう呟きその場にぐったりとすれば遠くから声が聞こえた。

のそりと起き上がれば遠くに見える複数の人影。

立香君達だ、と思つて手を振れば別れた時と比べて人が増えている。

フードを被つた紫髪の、幼女。

えつ、誘拐してきちやつた？

再会してすぐにそう言えば立香君は酷く慌てた様子で違いますよ!? と軽く叫んだ。

いやまあ流石にそれは分かっているがここまで反応されると面白い。

からかわないでくださいよ! と言うマシユに悪い悪い、と謝つてからその幼女のもとへ行く。

視線を少しだけ下げてからフードに顔を少し隠したその子によりしく、と手を差し出せば触らないでください、と拒否られた。

えつ、シンプルにシヨック……

どうしよう、出会い頭で嫌われた、と思い立香君を見ればその子はポソリと人間が嫌いですので、近寄らないでください、と言つた。

嫌いの範囲がでかすぎる……そう思うと同時に、フードの隙間から見えた彼女の顔に既視感を覚えた。

いや、既視感なんてレベルではない、は!?! と思つて素早く振り向きライダーさんを見る。

後ろでハテナマークを浮かべる彼女の顔を見て、もう一度幼女の顔を見た。

……えつ、ちつちやいライダーさんじゃん……

そう呟くと同時、後ろのライダーさんがへ? と間抜けな声をあげてから俺を押しつけて幼女と見つめ合う。

次に響いたのは、ライダーさんと幼女、二人の間の抜けた声だった。

私、ですか……

私、なんですね……

二人の呆然とした声が響き、その神妙さに思わず押し黙る。

本当なら滅茶苦茶問い詰めたいところだが流石に割つて入れる雰囲気ではない、しかし放つておいたらこのままな気がしてどうするべ

きか、と考え込んでいたらふと、ライダーさんが俺を見た。

俺の手を引き、こちらへ、と。

ええ、ちよつと話が長くなりそう……そんな予感がする。

本来であれば合流してすぐ出発する予定だったのだ、出来ればさっさと帰りたい。

どうせ途中で野宿をするのだ、その時の見張り番の時でも良いか？

と聞けば彼女は少しだけ考え込んだ後に頷いた。

ごめんな、だけど一旦落ち着いた方が話しやすいとも思うし、と付け加えてから立香君達を見る。

あー、なんか只ならぬ関係らしいんだけど取り合えず放置でおけー！ 後で俺が話聞くから帰ろう！

そう言えば彼らは苦笑いをして、それからじゃあ行きますか、とリュックを背負いなおした。

パチパチと、火が弾ける音がする。

焚火をするのもすっかり手慣れたものだ、そう思いながらその前に胡坐をかく。

そうすれば後ろに立てた簡易的なキャンプからライダーさんとアナ——幼女ライダーさんの名前らしい、道中でそれだけ聞いた——がごそごそと姿を現し隣に座った。

お預けにさせてしまったお話タイムという訳である、何だか嫌な予感がして胃が痛いな、と思いながらごめん、待たせたな、と声をかける。

そうすればライダーさんはいえ、むしろ少し時間を空けてくださって助かりました、と言ってからでは先ずは単刀直入に事実を、と言つてから言葉を続けた。

メドウーサとアナ私は貴方が思った通り、同一人物です、と。

だろうな、だってあんまりにもそっくりだ、そうでない方が怪しいまである。

そう言えばそう思うのは貴方くらいです、とアナが言った。

いや、本当に似てるからね……？ そのぶつきらぼうなことか、クール可愛いところとか——

言葉の途中でガツと口を掴まれる、ちよ、ライダーさん力が！力が強い！

口がとれちゃうんですけど！と反抗すれば余計なことは言わないで下さい、と釘を刺され、それからもう一つ、お伝えしなければならぬことがあります、と言った。

静かに耳を傾ける、そうすれば彼女は魔獣の女神、その正体が判明しました、とそう言った。

……は？ いつ、どこで、何をもって分かった？ 思わずそう聞けばアナが、少し震えた声でそれもまた、私ですので、と言う。

私——？ 一瞬だけ疑問符を浮かべる、しかしその直後に燃え盛る都市で見た、槍を持った女を幻視して、ようやく言葉の意味を理解した。

英霊には、いくつかの全盛期がある。

ライダーさんは成長し、アテナに呪いをかけられ魔物になる少し前の姿。

アナは女神としての姿。

となれば後は一つしかないだろう。

完全に魔物と化したライダーさん／アナ。

そういうこと、ね。

なるほど、ああ、だから、アナか。

そう呟けば彼女らは無言でうなずいた。

アナ——聖杯によって女神として召喚された彼女は、魔物と化した彼女へのカウンターなのだ。

あまりに強すぎる魔神、ゴルゴーンへの抑止力ということである。そう考えれば納得はできたが、しかしそれでは流石に説明がつかないものがある。

即ち、魔獣である。

あの魔獣は魔獣の女神から生み出されていると聞いた。

もつと言えばその魔獣達は、ティアマト神の子供であるとも。

魔獣戦線最前線、北壁で巴御前から教えてもらったことだ。伝承通りの魔獣が湧いて出るようにやってくるのだと。

そう聞けばじゃあそれは僕から説明しようかな、と後ろから声をかけられた。

!? マーリン!?

お前いつから!? と聞けば最初からさ、と薄く笑う。

秘密の話は誰だつて気になるだろう? と。

いや趣味が悪すぎる……とは思うがまあどうせ報告することでもあるから良いか、と思い直し、それから浮かんだ疑問をそのままぶつける。

即ち相手の女神すら分からなかったのにそんなことが分かるのか? ということだ。

そうすれば彼は笑って、それから僕らもただ手をこまねいていた訳じゃないからねえ、と言ってからじゃあまず、と俺達を見て口を開く。ティアマト神と十一の子供達について、君たちは知っているかい? と。

それに対して、多少は知っている、と言う。  
といつても完璧ではない。

カルデアにてダ・ヴィンチちゃんの教えのもと知識を集めている俺だが全てをカバーできる訳じゃないのである。

隣のライダーさんとアナも知らない様子で首を振り、彼はではそこから説明しよう、と言った。

ティアマト神——それはメソポタミアにおける原初の神だ。

メソポタミア神話では宇宙はアンキと呼ぶんだけどね、アンとは天と男神、キは地と女神を意味する。

女神は命を育み、男神はそれを支配する、という構図だね。

そしてティアマト神は女神、つまり地の神として、男神アプスーと交わり多くの神々を創り子供たちとした。

けれども子供たちは成長すると権力を欲し、世界をより広くするためティアマト神に反逆したんだ。

だがティアマト神も黙ってやられるわけにはいかない、彼女は裏切られた怒りと悲しみのまま、新しい子供を作った。

しかしそれは天のない、地のみによる創造だった。

故に出来上がったのは神ではなく、恐ろしい合成獣だった。  
これが、十一の子供達さ。

君達が打倒したギルタブリルも、この内の一人だよ。  
そしてこの十一の子供たちを率いて戦ったのが神：キングウ。

彼らは壮絶な戦いを繰り広げたが、しかし神々の軍勢の勢いは激しく、また最も新しいマルドゥーク神の力は凄まじく、彼の下にキングウは倒れた。

ティアマト神もマルドゥーク神を噛み砕いたがしかし、彼の起死回生の一弓にて敗北した。

そうして神々は倒れ、動けなくなったティアマト神の身体を裂き海に浮かぶ大地とした。

これがメソポタミア神話における大地だ、神の亡骸の上に作られた世界、という訳だね。

一般的な創世神話はざっくりこんな感じだ。  
そして問題はここからだ。

今の創世神話にあったティアマト神のように、本来生命を育む女神が混沌に落ちたとき、彼女らは総じて人間と敵対する魔獣達の母となる。

この時獲得する権能を百獣母胎ポトニテ・トローンという。

生命の種、資源さえあれば無限に魔獣を生産できる権能さ。

これを魔獣の女神——ゴルゴーンは持っているのだろう。

といっても仮説に過ぎないんだけどね、まあ十中八九当たりだろうけど。

事実魔獣戦線から新型の——しかも神話にある通りの姿をした魔獣が増えてきているからね。

と、まあそういう訳だから、魔獣の女神、ゴルゴーンが魔獣を生み出しているもおかしくないって訳さ、と彼は笑って言った。

話のスケールの大きさに思わず眩暈がする、そんなヤバイ力を持つ女神とかどうやって倒すんだよ……

そう思うがしかし、倒さなければならぬのだ、と思う。

グラリと揺れそうになる身体を抑えていれば、だから、ラツキー

だったね、とマーリンはそう言った。

ラツキー……ラツキー？ 何を言っているんだこいつは？

そう思えば彼はだつてそんな化け物への天敵が、こつちには二人もいるんだよ？ と言った。

言わずもがな、ライダーさんとアナのことである。

彼女たちは完全に魔物と化した彼女が、自ら捨てた女神の神格そのものだ。

ゴルゴーンに対する確実な秘密兵器となる、慎重に動こう、と彼は言い、それに静かにうなずいた。

さて、話も終わったようだし僕はそろそろ寝るよ、とマーリンはテントの中へとござりと入っていった。

それをぼおつと見送り、それからふと思立ってアナの方へと手を差し伸べる。

これからよろしく、と。

そう言えば彼女は少しだけ目を見開いた。

私が怖くないのですか？ と。

私は魔獣ゴルゴーンと同一の存在なのですよ、と。

醜く、恐ろしくはないのですか、と。

それに合わせて、ライダーさんが少しだけ不安そうな顔で俺をうかがう。

それが何だか、酷くショックだった。

いやショックと言うか驚愕と言うか失望と言うかなんとか

……

まあそんな感じの思いを抱きながらあのさ、と言ってから言葉を続ける。

別に俺は物語の主人公でも何でもなし、立香君みたいにかっこいいことも言えないんだけど、それでも。

そんなことで、仲間を恐れ、嫌うような人間じゃないよ俺は。

ましてやライダーさんなんて、何度俺の命を預けたと思っっているんだ。

確かに敵は同一人物で、自分自身なんだろうけどさ。

君たちはそれを止めるためにここにいるんだろ、その為に、自分たちの命すら賭けようって思っているんだろ。

だったら、怖がる必要なんてないし、それに——俺には二人とも、クールで可愛い女性にしか見えない、悪いな。

そう言えばライダーさんは泣きそうな顔をして笑って、アナは不思議そうに俺を見た。

そんなこんなでウルクに帰還である。

帰り道もやはり行きと同じように大したトラブルは無かったということだ。

精々野良の魔獣に襲われたくらいで、それも危なげなく蹴散らせた。

流石に英霊が何人もいればこの程度は脅威にすらならない、行きと比べて一人英霊が増えているからそれも尚更つてなものである。

とりあえず報告を済ませてこようか、と言ったマーリンに俺とライダーさんとアナ、立香君にマシユが着いていく。

他のメンバーは待機である、別に全員でも問題はなかったが大人数だとシンプルに邪魔なのだ。

ついでに言えば報告なんて多数ですることでもない。

若干渋った鈴鹿をそう諭してからマーリンの背中を追うように玉座へと足を踏み込んだ。

マーリンからギルガメッシュ王へ、今回の調査の報告がされていく。

第一に今回の調査も外れだったこと、それからイシユタルとの遭遇、アナとの出会い、そして魔獣の女神・ゴルゴーンについて。

それらのことがマーリンの口から、なるだけ簡潔に伝えられている。

流石に手慣れたものだ、俺や立香君よりずっと伝わりやすく話をまとめている。

これが年季の差ってやつか……と思いつながらアナの話が出た時だけ、彼女と一緒に前に出て礼をしておく。

と、まあ今回も残念な結果ではあったけれども総体的に見れば悪く



ない……いや、むしろとても良い結果だったんじゃないかな！　と言  
う彼の言葉で報告は終了した。

それに対してギルガメツシユ王はご苦労だった、とだけ言い、それ  
から暫し待て、と俺達に告げてから目を閉じた。

何かを考え込むように額に手を当てて、少々性急な気もするが備え  
は早い方が良い、か、と呟きパチリを目を開いてから俺達を見、それ  
からゆつくりと口を開いた。

三女神同盟を崩すぞ、と。

同盟を崩す、といつてもいきなり女神に喧嘩を売り行くということ  
ではない、と彼は言った。

飽くまで最終目標にそれを据え、その為に来ることを少々早回し  
に進めるとのことだ、と。

では何をするか、と言えば答えは簡単だ。  
情報収集である。

各女神の正体は分かったが、しかし何を目的に、信念に動いている  
のかが定かではない。

何せ現状表立った被害を出しているのはゴルゴーンのみ。

ケツアルコアトルは密林を作り出し都市を飲み込んでからは音沙  
汰なく、イシユタルは見ての通り何がしたいのかがさっぱりわからな  
いのだ。

つまり三女神同盟と謳う割にはゴルゴーン以外やる気を感じられ  
ない。

これには流石に何かしらの意図があると感じざるを得ないとい  
うことである。

という訳で役目の割り振りなのだが、これはもう迷う素振りも悩む  
素振りも見せることなくギルガメツシユ王が即決した。

雑にまとめて言ってしまうえば立香君チーム＋マーリンが情報収集、  
密林調査担当。

そして俺達が魔獣戦線担当である。

えっ、俺に割り振られた役目が今の話に掠りもしてないんですけど  
??

まさかゴルゴーンに特攻しろとか言う人ではないのが分かってい  
るだけに意味が不明すぎて頭を捻っていけば、貴様には今の件とは別  
に一つ頼みたいことがあってな、と言ってから言葉をこう続けた。

貴様には都市：ニツプルの解放とその市民の誘導を任せる、と。

知っているとは思うが既に少人数ずつ行っただけはいる、だがこの際  
だ、一気に終わらせてしまえ、と。

此方も受け入れるだけの準備は既に大体整えている、魔獣達の勢い  
が落ち着いた頃を見計らい迅速に、慎重に済ませよ、と。

とはいってもまさか一日で総てこなせとは言わん、二か月くれてや  
る、できるか？

そう問われて、しかし直ぐに返事を返せない。

それでもギルガメツシユ王は俺の目を見ながら答えを待っていて、  
それに気が付き息を呑み、それからゆっくりと吐き出すように言っ  
た。

日数の方は、巴御前達と話し合ってから決めてさせてください、と。  
そうすれば彼はフ、と少しだけ笑みを溢して、よかろう、と優しい気  
に言った。

と、まあそういう訳でニツプル解放作戦を一気に進めることになっ  
たから計画の再組立て等手伝って？　　と言えば彼女たち——巴御前  
にレオニダス王、小太郎というギルガメツシユ王に呼ばれた三人の  
サーヴァント達は勿論、とうなずいた。

因みに茨木童子はここにはいない、会議するから来てねーと声をか  
けたら普通に断られた。

あの鬼、普通に協調性が無さ過ぎる……

だがまあ茨木童子は何だかんだ現場での指示には割と素直に従っ  
てくれるから特に問題は無いだろう。

牛若丸と弁慶は立香君チームである、流星石に全員をこちらに割くわ  
けにはいかないからだ。

ひとまずありがとう、と言った後にとりあえず聞きたいんだけど二  
か月でできると思う？　聞けば三人は暫く悩んだがしかし、出来ない  
ことは無い、という結論をたたき出した。

これまでもずっとニップルから市民を誘導してきましたが、安全性を大きく重視しているので一度に少人数しか誘導できていない、そこをしっかりと見直しすれば無理な話ではないでしょう、とは巴御前の弁だ。

ただそれをするには魔獣達が活発になる間隔に兵士たちの疲労度等考えなければならぬことはたくさんありますけどね、と疲れた笑みを見せていたが。

まあそれでも絶対に出来ないとは匙を投げざるを得ない状況ではなかったことに安堵する。

このことに関して特に関わってきた彼らがそう言うのであれば間違いはない。

じゃあ話を詰めようか、時間は——まあとりあえず二時間で、と伝え、会議は始まった。

会議は思いの外順調だった……というよりは順調すぎると言ってもよいほどだった。

どれくらい順調だったのかと言えば既に会議は終わり、俺が自室のベッドで寝転ぶのが許されているレベル。

といつても、こうなることはある意味必然とも言えた。何せここにいるのは誰もが集団の長をしてきた者ばかりなのだ。

俺を除いて全員、多くの人を動かすということを熟知している。それに加えてカルデアの頼れる二大柱であるドクターロマニと万

能の天才・ダ・ヴィンチも助言をくれたり、細かいデータは纏めてくれたりと助けてくれたのだ。

お陰で会議はほとんど滞ることは無く、拍子抜けしてしまうくらいの速さで粗方の計画が定まってしまった。

後は幾つかの細かい点を煮詰めてちよちよいと修正するくらいである。

正直俺がいる必要はあったのだろうか……？ と首を捻るまであったのがそれはそれ。

自分の中でこういう、作戦会議と言うのはうまく進まない印象があったせいで驚きも人一倍である。

そこまで考えたところであれ？　と思った。

いくら魔術師といえども俺はまだまだひよつこだ。

ガチの戦闘なんてカルデアに来てからしかしていない。

大規模戦闘なんて人理修復の旅が始まるまでは経験したこともなかった。

だというのに、どうして俺はこういった作戦に、妙な偏見を持つているんだ？

ふとそう思い、今までこんな風にあらゆることを考慮し、確りとした作戦を立てるなんてことあっただろうか、と考える。

燃え盛る都市、アイドル志望に振り回されたフランス、初めて船酔いをしたローマ、ライダーさんのお姉さんが怖かったオケアノス、死の霧が充満していたロンドン、ケルト師弟にいじめられたアメリカ、沢山の人に背中を押されたエルサレム……といったように思い返していけばあつ、と気が付いた。

フランスから数えて、五番目の特異点。

イ・プルーリバス・ウナムと名付けられた特異点にて、思いつきりぶん殴ったエジソンに副大統領に任命され会議をしたことがあった。といつてもあの時は大まかな方針を決め、雑にチームを分けただけではあるのだが、それでも何となく既視感を覚えて苦笑いを零す。

あの時は確か立香君と二人で攻撃側と防衛側の振り分けをして、結果的に相当胃にストレスをかけたのだった。

懐かしい、とそれほど月日も経っていないのにそう思う。

そう思っても仕方がないと、自分で思えるほどの道のりだった。

だがそれでもここまで来れた、後少し、もう少しで全てが終わる、否、終わらせる。

何度も固めてきたような決意を再度確認して固め直す、そうしなければ直ぐに折れてしまうと錯覚してしまうほどにそれは、弱弱いものだと自覚していたからだだった。

とかなんとか大仰な覚悟を決めはしたが、しかし計画が定まってしまえば後は流れ作業のようなものだった。

いや、流れ作業と言うよりは、忙しすぎてそんなことを考えている

暇がない、と言った方が正確か。

俺だけやらなければならぬことがあまりにも多いのだ、正直一日のノルマが終わるころには即爆睡である。

ではなぜ俺がこんな忙しいのかと言えば、全てはレオニダス王の言葉にあった。

彼、とてもいい笑顔を浮かべながら『このようなことは現代では中々無いでしょうが、それでも経験と言うのは良いものです。無駄になることは何もない、全て糧としていきましょう』とか言い始めたのである。

勿論俺は異議を唱えようとしたが他の面子が全員即いいねしたせいでそれも失敗に終わったという訳である。

これで過労でぶっ倒れる、なんてことになればまだいい方で、むしろそうでないからこそシンプルにしんどかった。

何度でも言うようだが彼らは全員人を使うことに慣れ切っているのだ。

しかもドクターやダ・ヴィンチちゃんに至ってはもう随分と深い仲で俺の限界を知り尽くしている。

それにライダーさんや鈴鹿が補足をするように助言をするせいで俺の許容範囲ギリギリを攻めてくるのだ。

何だか最近はずっかり忘れていたが英霊は基本的にスパルタだったな……なんて疲労感タップリに眩きながらも兵士たちとバカ騒ぎをするといったような毎日を延々と繰り返して行けば時間というのはあつという間に流れたし、それだけの時間があれば流石に仕事にも慣れた。

とはいえこちらの様子を見て仕事を増やされるせいでプラスマイナスで言えば完全にゼロ……むしろマイナスと言いたい気分であったがそれはそれ。

珍しいことだが、立てられた計画は都度少しばかりの修正をし続け調整する程度で、概ね最初に定めた理想通りにことは運び続けた。

後二回、欲張れば一回で避難誘導ももう終わり、というところまで来た、ということである。

それはつまり、三女神同盟へ手をかける時が近づいてきている、ということに他ならない。

流石に前ほどの頻度で立香君と連絡は取り合わなくなったが、それでも最低限以上のやりとりはしているし、情報の共有も行っている。あちらも順調だそうだが、それにアナも段々と心を開いてきてくれる、と嬉しそうに彼は言っていたのが強く印象に残っている。

事実、彼女は時折こちらに来ては俺の様子を見兼ねて手伝いをしてくれていた。

立香君に言われるまでもなく、アナがこちらに対する壁を無くしてくれている、というのは肌で実感できていたという訳だ。

というか元より彼女はあのライダーさんと同一人物なのだ。

面倒見が良いのも当たり前と言えば当たり前だった。

まあそれが表に出るまで結構時間がかかったというのもまた事実なわけだが。

アナは心を開けば開くほど、ライダーさんと似ているところが散見出来て、それでも全然違うところもまた見えてきた。

例えば誰かに親切にされた時、ライダーさんもアナも絶対にありがとうとは言わない。

最初に出てくるのはすみません、または申し訳ありません、なのだ。ありがとうは中々出てこない、感謝より申し訳なさを先に感じるのだろう。

あまりにもそういう場面を見かけるのでこういう時はありがとう、つて言うんだぜ？ とどや顔で言えばライダーさんは、そうでしたねと笑い、アナにはすいません、距離が近いです、離れてください、とシンプルに近づくの拒否された。

また違う例として、分かりやすかったのがご飯を食べる時である。というか、美味しさを表すところだろうか。

ライダーさんはあまり顔には出さない、それこそ絶品！ というレベルでもなければ中々表情を崩さず、感想を聞かれれば美味しいですね、と少し微笑む程度。

だがアナはその真逆で、隠しているつもりなのだろうが滅茶苦茶笑

顔、もう可愛くてたまらない笑みを浮かべて食べるのだ。

そしてそのことに気付くとムニムニと自分の頬を抑えつけている。久しぶりに俺の料理スキルが輝いた結果とも言えるだろう、カルデアでは最近よく料理を教わっているのだ。

そしてその上で感想を聞きに行けば、そこそこですね、なんてさらつと言うのである。

違いが良く分かるだろう。

といっても驚くことではない。

同一人物とは言っても完全完璧、全く同じ個体という訳ではないのだ。

むしろ全く同じと思われた方が彼女のにもライダーさんのにも迷惑だろう。

そんな日常が当たり前になるまでにかかった時間は、数字にして一か月と三週間、ついでにプラス三日かかった。

そうして、もう一つ情報を付け加えれば次の作戦決行日時は明日夜九時である。

今のところは、この一回で最後にするという方針で進めているのだ。

そして多分、これはそのまま行われる。

緊張が無いか、と言われれば勿論あるが、しかしそれでも不思議と不安は存在しなかった。

別に慣れたせいで嘗めている、という訳ではない。

ただ、その、何て言うのだろうか。

きつと俺は、今、心の底からこの北壁で戦う全ての人を信頼しているのだと思う。

この作戦は今まで行ってきたそれとは違い、だれか特定の人物に大きな負担や、勝敗のキーを握らせるようなものではなく、戦場に出る誰もが、同じ心持ちで、同じ意思を持ち、同じ場所で、同じ目標の為に動きを揃え、同じように動き、平等に協力し合うものなのだ。

無責任なことを言ってしまうえば自分が失敗しても誰かがカバーしてくれる。

そしてそのカバーが、必ず入ってくれるということ、疑う余地もなく信用している。

だからこそその安心感、なのだと思う。

いや本当に無責任だな、とは思いますが仕方ない。

自分は特別ではない、そう思えただけで、何となく気が楽になった、そんな気がしたのだ。

作戦は滞りなく始まり、また予想外の出来事もなく平穩無事に成功という形で終わりを告げた。

ニツプル市民は全員、ひとまず北壁へと受け入れられ、それからウルクに収まっていく。

何だか最後にはあっさりとした終わりであった、いや特に何か起きれば良かったのに、とか思っているわけではない。

ただ単純に、こういつた大きな事柄の終わりは大体の確率でトラブルに見舞われてきたから、逆に拍子抜けだった、という訳だ。

まあ何はともあれ成功したという事実は変わらない、お疲れさまでした、なんて皆で労い、祝い合い、次の日には通常運転である。

ニツプルは解放されようが魔獣にとっては大して関係が無い。

休むことなくやつらは常に此方を襲撃してきているのだ。

といつても俺がここに残り続ける理由はもう無い、というか俺達がいなくなろうがこの北壁にとつては大きな損失ではない。

兵士たちにまたな、何て適当な挨拶をしてから巴御前とレオニダス王にお世話になりましたと告げる。

普通にしんどかったけど何だかんだ良い経験にはなった……と思う。

ゴルゴン討伐の時が来たら多分この人たちの力をまた借りることになると思う、その時はよろしく。

そう言えば彼女らはええ、その時をお待ちしております、と笑って言った。

小太郎とライダーさん、鈴鹿と共にジグラットへと足を踏み入れれば、そこには立香君達があった。

特に示し合わせた訳ではない、偶然である。



奇遇だな、なんて言いながらギルガメツシュ王への元へと行けば彼も少しだけ驚いたように俺達を見て、それから都合がいい、と笑った。情報は集まった、場は整った、状況も悪くない。

三女神同盟の攻略を始めるぞ、と彼は言った。

少しの緊張感が身に走る、けれども表に出すことは無くギルガメツシュ王の言葉を待てば、彼は俺には一柱＋α、立香君には二柱を任せると言った。

＋αってなんだ!? そう思うがそれよりもそこも分けるのか、と少なくない驚きが胸を占める。

何せ女神は強い、それこそ英霊とは文字通り格が違う。

俺はこの時代に来てから出会ったのはイシュタルとケツアルコアトル、それにジャガーマンな訳だが、そのどれもが桁違いの実力を持っている。

普通にやっては勝てない、だからこそ全員で一柱ずつ倒してくのかと思っていた。

故の驚愕を味わっていればギルガメツシュ王は俺を見て、何か勘違いをしているようだ、と言った。

その言葉に込められた意味を理解しきれず疑問符を浮かべていれば、彼は倒す必要はない、と言う。

言ったであろう、三女神同盟といっても目立った脅威はゴルゴーンくらいであると。

そこまで聞いて、ようやくなるほど、と理解する。

つまり彼は、女神をこちらに引き込めと言っているのだ。

そうであれば立香君が二柱担当するのも領ける、彼はコミュ力の塊だ。

そしてそう考えるのであれば俺はやはり、ゴルゴーン担当なのであろう。

魔獣戦線にほとんどいた訳だし連携も立香君達よりずっと上手くできる。

このために俺にニップル解放作戦を任せたと言っても過言ではないのであろう、そう思っていればしかし、ギルガメツシュ王は予想

外の言葉を口にした。

立香君にはケツアルコアトルを、そして俺にはひとまずイシユタルを任せる、とそう言ったのだ。

その言葉に、頭を傾ける。

俺にイシユタル、ということとはケツアルコアトルとゴルゴーンを立香君に任せる、ということなのか？ そう聞けばギルガメツシュ王は少しだけポカンと口を開き、それから納得したように笑った。

そのあまりにも意味深な笑みに動揺すれば、彼は何、安心せよ、直分かる、とだけ言う。

こうなつてしまえばもう聞き出すことは出来ないだろう、実際、彼は既にそういうことで良いな？ と話の締めにかかっていた。

それを遮るようにマーリンがイシユタルを味方に？ 大丈夫なのかい？ と言った。

それを聞いてギルガメツシュ王は、いささか不服そうに顔を顰め、それから口を開いた。

確かにあの女を味方に引き入れるなど蓋をしていない瓶を荷台に乗せるようなものだ、我自身もやつにこれっぽっちも期待しておらんしな。

だがやつを持つ天の牡牛・グガランナは別だ、あれほどの焦土兵器は此度の戦い、必ず必要となる。

よつて仲間とする、文句はあるか？

それを聞いたマーリンは少しの笑みを浮かべ、オーケーだ、と言つた。

それくらいの遊び心はあってもいい、と。

そんな会話をききながしながら、いやそもそもそんなことできるのか？ と思う。

ひとまず動揺は呑み込み切つたがしかし、彼女がそう簡単に仲間になるようには思えない。

一度であったことはあるが、あそこまで自由な女というのも中々いない。

俺は立香君ほどのコミュ力も無いし、普通に無理だと思うんですけど

ど……

そう思っていれば不安か？ と彼は言う。

そりゃ不安しかないでしょ、と言おうとすれば彼は何、安心しろ、と言った。

あれは確かに手懐けるのに苦勞する猛獸だが、とっておきの方法がある、そら、教えてやるから近くに寄れ、と。

素直に従い寄れば、彼は俺だけに聞こえるよう、小さな声でその内容を話し始めた。

こうしてギルガメッシュ王より各々作戦内容と方針を聞いた後に、俺はイシュタルの住まう神殿へと向かうため、大量に用意した荷物を引き摺りながらエビフ山を登っていた。

そう、この時代に来たばかりの頃、茨木童子が根城にしていた山である。

あの時は中腹程度の場所に陣取っていたが、今はその頂上を目指しているというわけだ。

面子は俺とライダーさん、鈴鹿は当たり前として今回は小太郎と巴御前が着いてきている。

小太郎はまだしも巴御前はわざわざ北壁からやって来てくれたのだ。

彼女をわざわざこちらに呼ぶほどか？ とは思ったが腐つてもあれも女神だ、それに神殿がある場所はエビフ山、念には念を入れて損をすることはなからう、とギルガメッシュ王が言ったという訳である。

残念ながら俺はエビフ山についての伝説を特には知らないし、もつと言えばイシュタルについても良く知らない。

漠然と強い女神である、ということを知っている程度だ。

本当であればニップル市解放作戦の合間に勉強でもしたかったところだが生憎とそんな余裕は存在しなかった。

という訳で彼女についてなんか知っている？ と聞けばそうだね、と通信機越しにドクターがイシュタルとエビフ山、その二つについての伝説を語り始めた。

エビフ山はシュメルでも最高峰の魔境、霊峰だった。

マーリンからも聞いたことがあるだろう、あの最高神アンですら恐れた霊峰と言え、その恐ろしさが分かるだろう。

そしてイナンナ——イシュタルの別名だね——はこの山に酷く執着していたんだ。

何故かと言えばエビフ山は酷く豊かな山だったんだ、その恵みも、その深さもね。

とはいえエビフ山は神をも脅かす力を持つ、故に最高神アンはイシュタルにこう言った。

我が娘、乙女イナンナ。エビフ山に逆らうなど愚か者のすることだ、と。

しかしそれが彼女にとつては逆効果だった。

イナンナは持てる限りの力を開放し、嵐を巻き起こしながらエビフ山の山肌を蹂躪しながらその中心を目指し始めたんだ。

当然、エビフ山もこれに対抗し山に棲むあらゆる脅威——獣、火山、川、冷気によって彼女を叩きのめした。

だがここでエビフ山は一つのみスを犯した。

一度に大量の災害を起こせば良かったものの、これなら帰るだろう、これなら、これなら……と言ったように災害を小出しにしたんだ。

そしてその度にイナンナは激怒した。

信じられない！　こんなもてなしを受けるだなんて！　つてな具合でね。

質が悪いことに彼女は逆境にてガッツを發揮する性格だった、それに伴いこの怒りが加わり遂に彼女は山の頂へと到達し、その体内へ深々と刃を打ち込んだわけだ。

こうしてエビフ山の頂は半分に崩れ、イシュタルは戦いの女神としての側面を人々に見せつけたという訳だ。

少しは参考になったかい？　ドクターは言うが、むしろ聞かない方が良かったな、とすら思う。

英霊達もそうだが、どいつもこいつも残しているエピソードがおかしすぎるのだ。

大丈夫かなあ、と不安が増幅するがしかし、ギルガメツシュ王に授けられた策を信じるしかない。

とはいえ仲間になるにせよならないにせよ、話をするには一度戦いでもして力を見せつけなければ不可能だろうがな、とも彼は言っていた。

そのことを思い出してため息を吐き出せばライダーさんが見えてきましたよ、とそう言いを指を指した。

彼女が指を指したその先には、正直趣味が悪すぎるだろう、と思っ  
てしまうくらいど派手にギラついた建造物が鎮座していた。

もうギラツギラに輝きすぎていた目が痛いレベルだ。

金や宝石の類が大好きだとは聞いていたがここまでか、と軽く引きながらもその内部へと足を踏み込み進めばそこには随分と豪勢なソファに座る、一人の女性がいた。

勿論、イシユタルだ。

あの日見た時と特段何も変わった様子はないが、しかし一つだけ違う点があるとすればあの日よりもキレ気味だということくらいだろうか。

良い度胸ね、と彼女は言った。

確かに弱いものに興味は無いと言ったけれど、まさかこんな堂々と、強引に踏み込んでくるとは思っていなかった。

貴方がした意味、分かってる？

この山は私の所有物で、ここは私の神殿なの。

そこに貴方は土足で踏み込んできた、あの日のように異邦の者だからって見逃す気はないわ。

あれ以上の馴れ合いをする気はありません、神には神のルールがある、そう甘い顔をし続ける訳にもいかないわ。

つまりは問答無用ってこと、貴方もその気で来たんでしょ？

お望み通り、女神の本気見せてあげるわ！ ウルクまでふつとばし  
てあげる！

それが嫌なら貴方の全力、見せてみなさい！

我が名はイシユタル！ 戦いの女神にして金星の女神！ その力、

存分に味合わないさい！

え、いや俺達は話をしにきたんですけど……そう思うがしかし、彼女は言い切ると同時に極光を撃ち放った。

いや展開が早すぎる、話を素直に聞いてはくれないだろうとは思ってたけど、ここまでとは思わなんだ。

とはいえこうなってしまうものは仕方がない。

一度戦って、一旦落ち着いてもらう、それしかないだろう。

そう思うと同時、眼前に迫った矢を見て一瞬、かつてギルタブリルの放った矢を幻視して、反射で身を逸らす。

頬を掠めた一矢が背後の壁にぶつかり破碎音が響き渡る、それと同時にライダーさん達が飛び出した。

金属同士がぶつかる音が響き、極光が幾度も輝いた。

ライダーさんと小太郎が常にイシユタルの速さに追いついて、その拳動から自由さを奪う。

その間隙を突くように巴御前の火矢が飛び、その上で鈴鹿の刀が襲い掛かる。

しかしここまでしてもイシユタルを仕留めるのはおろか、その美しい肌に傷一つ負わせることすらできずにいた。

流石、と言うべきだろう。

仮にも女神だ、真つ向からぶつかったところで勝機が見えないのは当たり前前で、それは誰もが分かり切っていたことだった。

故に、俺達が彼女を叩きのめすには搦手を使うしかない——と、普通なら考えるだろう。

それは勿論イシユタルでさえも、だ。

四人の英霊を相手にしながらなお、戦闘力の無い俺を警戒しているのがその証拠と言える。

しかし、だとしても使わない手はなかった。

彼女は己に自分の強さを見せつけろとそう言ったのだ。

であれば出し惜しみをする必要は無いだろう。

何もかもを使い尽くして彼女を叩きのめす、そういうことだ。

と、言ってもこのまま真つ当に戦い続けられればいずれバテるのはこち

らだ。

だからこそ、早々と決着はつけさせてもらう。

その為に、礼装を起動しながら俺は地を蹴りつけた。

礼装を限界まで駆使すれば何とか魔獣を一匹相手に出来るかな？

程度の戦闘力の俺が踏み込んできたのを見てイシユタルはほんの

一瞬だけ目を見開き驚いた。

それから貴方馬鹿なの!? と言いながら弓を引く、瞬間ライダーさ

んの釘剣が閃きイシユタルの鼻先を掠めて通る。

直後に俺とイシユタル、その間にあつた空間を喰らいつくすように

火炎が現れた。

あまりの熱気に顔を顰める、けれども怯むことなく足を踏み込むと

同時に身体を掴まれ加速した。

巴御前だ、彼女が、俺の身体を全力で投げ飛ばした。

ほんの数秒で炎を突き破る、しかし彼女はその程度は予測していた

とばかりに矢を撃ち放ち——そして幾十もの刀がその軌道をかすか

にズラした。

極光が肩を掠めて通る、同時にもう一步踏み込み礼装を起動する。

既に彼女は射程圏内だ。

ぶち抜け、フラガラツク——!!

必中の蒼き一撃がバチバチと雷のような音を立て彼女へと迫り、し

かし音もなく砕かれた。

押し伸ばしていた右腕が鋭く弾きあげられる。

奥歯を噛みしめながら、それでも前に進もうとした俺を、見て、イ

シユタルがつまらなそうに口を開いた。

下らないわね、それが一生懸命考えた苦肉の策ってやつ? と。

ハ、と笑う。

いくら俺でも、俺ががむしやらに突貫するだけ、とかいう阿呆みた

いなことを策とは呼びはしない。

ていうかそもそもこんな俺が余裕で死んじやうのが目に見えてい

るようなことを好き好んでするわけがないだろう。

これで勝てる可能性が一握りでもあるならまだしも今回に限って

言えば一ミリもない。

だからこれはまだ、策の途中だ。

といつてももう仕上げな訳だけど、な。

イシユタルが光を集める、直後に俺の真後ろで太陽が降臨した。

凄まじい熱気が神殿内の温度を急激に上昇させていき、既にその輝き、熱気はこちらにまで届いてた。

は？ とイシユタルの手がピタリと止まる。

マスター毎撃ち抜く気!? 死ぬわよ!? と叫ぶ彼女に、じゃあ一緒に死んでくれとそう呟く。

それを聞き更にイシユタルが動揺を露わにする、直後、極炎の矢は放たれた。

ばっかじゃないの!? そう言ったイシユタルは俺を無視して再度集めた光を凝縮し、撃ち放つ。

しかしその程度では止められない、何せあれは彼女——巴御前の宝具だ。

多少勢いが落ちても所詮その程度、炎は止まることなく迫り、そして俺の背中毎イシユタルを焼き払う——その瞬間、視界がブレる。

魔術礼装を起動、あらかじめ予定してた緊急回避が発動して有り得ない挙動でその場を離脱。

しかしそれでもイシユタルは俺を見ていた、そういうこと、と少しだけ笑い、炎に構わず俺へと狙いを定め撃ち放つ。

そうして飛んだ光の矢はしかし、俺を貫くことは無かった。

等身大の丸太が代わりに貫かれ、小太郎に抱きかかえられる。

変わり身の術というやつだ。

俺自身ができる訳ではないが、小太郎程の腕であれば俺を丸太にすり替えるくらい訳ないということである。

はあ!? と驚くと同時にイシユタルは炎に包まれた。

想像を絶するほどの高熱の炎が火柱を挙げて神殿内を明るく照らす、そしてその上で令呪を切った。

準備をしていたライダーさんが、光の星と化して広がる炎のその先へと突っ込んだ。



地面と天井を砕き飛ばしながら飛翔し爆音が響き渡る、多少焦げながらライダーさんが鋭く跳んで俺の横へと戻ってきた。

ここまでしても流石に倒したということは無いだろうが、それでも多少なりともダメージは入っただろう。

そう思いながらも炎によって歪む空間の奥を睨みつけていれば、不意にその全てが吹き飛ばされた。

次いで響いたの笑い声。

アツハツハツハ！ といったような非常に愉快そうな笑い声をあげながらイシユタルは姿を現した。

その身体に傷らしい傷は見当たらない。

マジかよ、と思っていれば彼女はやるじゃない！ とそう言った。

サーヴァントを駆使するマスター！ 思っていた以上だわ！ 予想外に次ぐ予想外の展開！ 最高ね！

人理とか女神の責任とか、そういうの関係なしにノツてきた！ ギア、上げていくわよ！！ と。

聞くと同時に察知する。

あ、今話し出さないとマジで死ぬまで戦う羽目になる、と。

それだけはまずい！

思うと同時に叫びをあげた。

タイム!!! ストップ!!! ギア上げるのはいいからとりあえず話を聞いてくれ！ と。

はあ!? ここまで女をその気にさせといてまさか降参しますとでも言うつもり!?

冗談じゃないわよ！ とイシユタルは言ったものの、しかしその手を収めた。

といつてもとりあえずは、だろうがそれでも話を聞く態勢に入ったのであればもうこちらのものである。

身に纏っていた礼装を解除しながら前に踏み出て、提案があるんだ、と口にする。

その言葉に、眉を顰めて提案？ と繰り返した彼女に無言で頷きながら、小太郎、お願い、と言えば彼は俺達がここまで引きずってきた

ものが載せてある荷台、その一つを神殿内へと持つてきた。

流石忍の英霊、頼んでから数秒での仕事である。

ありがとう、と礼を言いながらそれに近づき、実は貢物があって、と言えばイシユタルは少しの間その言葉を噛み砕くように唸り、それからハツと笑った。

貴方一人で用意できる程度のもの、貰っても何にも嬉しくないんだけど——と、更に言葉を続けようとする彼女を無視して荷台の積まれたそれを包む布を解き放つ。

そうすれば溢れるように姿を現したのは深く美しい蒼色の宝石——即ちラピスラズリの山だった。

いや、正確に言えば大量のラピスラズリと、それから多種多様の金、宝飾品の類である。

それを目にした瞬間、イシユタルの動きが完全にフリーズした、次いではわわ……とだらしなく口が広がり始める。

そんな姿を見て、ああ、ギルガメツシュ王から聞いていたことは一言一句本当のことだったんだなあ、と思った。

彼はあの時、俺にこう言ったのだ。

貴様にはイシユタルめの弱点を教えよう、と。

といつても勘違いするな、戦う上での弱点ではない、あやつとの交渉を優位に進める為に突くべき弱点だ。

そう告げてから彼は俺に彼女の弱点——即ち宝石の類に弱いということを聞いたのだった。

ついでに言えば、彼女自身の黄金律——端的に言えば人生にどれだけお金が付いて回るか、という宿命のこと——が致命的に欠けているということも。

それが欠けているということとは、つまり貢いで貰うかカツアゲでもしない限り彼女の元に金の類はほとんど寄つてこない、ということだ。

その上でありえない程に混乱したこの時代である、当然貢物を捧げる人間は存在しない、イコール彼女は今、金の類が非常に乏しい。

故の多量の宝石である、彼に委ねられた宝物庫三割分の宝石、これ

で彼女を競り落とす、ということだ。

何、これまで多くの時代を渡ってきたのだ、この程度の交渉、できるであろう？ とか言われたが実を言えばちよつと荷が重い。

こういう交渉事自体、そう多く経験してきたわけではない、むしろ立香君の方が適任なのでは？ とすら思ったがそれはそれ。

任された以上はやらねばなるまい。

まあこれまでそういったことを繰り返してきたであろう英霊達にも相談し、何とかなるだろう、と思いやつてきて、それでこの現状である。

小太郎の他の英霊達にも協力してもらい、他にも運んできた荷台の中身を彼女に見せていく。

な……なにその荷台いっぱいの宝石たちはー!? え、く、くれ、くれるの!?! うっそ!?! 貴方が神か!?! などと叫び始めたがそれを落ち着かせるように口を開く。

これら全ては手付金だ、と。

貴方を頼れる戦力として雇いたい、これはウルクに住む全ての人の願いだ。

その証拠に、ギルガメツシユ王はバビロンの蔵を開放すると約束してくださいました。

もつと分かりやすく言えば、女神イシユタル、貴方にこの宝物庫の鉱石、宝飾類、その内の二割を献上しよう。

その言葉を聞いて、彼女の動きがまたもや止まる。

それから徐々に震えるように口を開き、い、いえ、ちよつと待ちなさい、と言った。

バビロンの宝物庫ってあれでしょ? あいつが未来に向けて作ってるっていう底なしの宝物庫。

その二割? 正直眉唾すぎて信じられないっていうか……と冷静なようで荷台をガン見しながら彼女が言う。

それを聞きながらふむ、と声に出し、それからじゃあ仕方ない、か、とため息を吐いた。

じゃあこの話は無かったってことで! ギルガメツシユ王から預

けられたこの宝石類は全て持ち帰らせていただきますね！

ではさような「待って!! いいえ待ちなさい! そういう悲しくなっちゃうようなことをするのはやめて!! 泣いちゃう、泣いちゃうから!」

言葉通り泣きそうになった彼女がいやく! と言った様子でそう叫ぶ。

それからちよつと考えさせてね、えーと、えーと、と唸り始めたので鈴鹿と顔を合わせ、それからグツと頷く。

そもそも、ここで契約が為されなければ世界は滅び、その宝石はおろかイシユタルのその美しさを讃え、語り継ぐ人すらも消え失せる。だがここで力を貸してくれば貴方は後世まで清く美しく、正しい女神として人類史にその名を刻むことになるだろう。

どちらが貴方にとって得か、もう分かっているのでは? とかなんとか、それっぽいことを言い続けていれば彼女はチラチラと俺と宝石を見ながらそ、そうね、と言った。

確かに……その、地上が焼き尽くされれば? 私にとっても? あまり、面白いものでも? 無いし? と。

ああ、これは勝ったな、と思い、それと同時にイシユタルは満面の笑みで俺を見て言った。

よし、そういうことなら、よしとしましょうか! 貴方の勝ちよ、その条件で、味方になってあげましょう、と。

と、まあ紆余曲折あったがイシユタルゲットである。

いやゲットという言い方はあまりにも語弊があり過ぎるが、とにかくにも契約成功という訳だ。

私も一応サーヴァントだから、契約しないとね、と彼女が足を差し出しながら跪いてキスしてくれる? とか言い始めた時は流石にビビったが結果的には契約は成された。

いやキスとかはしていないが。

オツケーと近寄ったら鈴鹿に腹を蹴られたのだ、お陰で未だに腹が痛い。

いや冗談半分に従う素振りを見せた俺も馬鹿だけど何も蹴ること

なくない？ 割と全力だったよね……

想像を絶する痛みに爆笑したイシュタルが良いわ良いわ特別に普通に契約しましょう、と言ってくれなきやどうなっていたのだろうか、と思わなくもないがそれはそれ。

その後ドクターがイシュタルに元となった少女はどうなったとか何とか問い質していたが特段興味はなかった。

そもそもマシユのような存在が、存在していることを許してしまっている時点で、俺が彼女に対して言うことは何一つない、そういうことなのだ。

そういう訳でサクサクと、巴御前やライダーさんと他愛も無いような話をしながらウルクへ向かっていけば、日は沈み始めて夜がやってきた。

ウルクとエビフ山は結構離れているのだ、それこそピクニック気分で行けるような距離ではない。

つまり何が言いたいかと言えば今夜はここで野営する、ということだ。

行きでも使った廃屋へとお邪魔してテキパキとご飯と寝床の準備を済ませていく。

そんな俺を見ながら、イシュタルは手慣れたるわね、と言ったが当たり前である。

これまで何度野営をしてきたと思っているのか、お陰ですっかり板についてしまった。

ついでに言えば非常食の缶詰の味にも慣れた、慣れればこれも結構美味しい。

そんなこんなで今夜の見張り番をじゃんけんで決めながら各々の休息へと入る。

行きの見張り番は鈴鹿だったが今日は俺だ。

最後にはライダーさんとの一騎打ちだったがあえなくチョコキに負けてしまった、くっそうあそこでグーを出していれば……！

そう思いながらもよっこらせ、と火を起こしながら座り込む。

正直見張り番と言っても何か異常があれば叫ぶだけでいい。

それだけで他の全員がすつとんできてくれるからそう大した重荷でもないのだ。

本来なら交代をしたりするのだが今回は交代は無しだ。

戦闘時はいつもライダーさん達に頑張ってもらっているのだ、これくらいはやるべきだろう、とふと思ったからである。

かといって毎回この役目をするとなればそれはそれで嫌なのだがまあ、今はそういう気分だった、ということだ。

アナと出会った日のようにパチパチ、聞き慣れた火の音を聞きながら手持ちの礼装を確認していれば、隣、良い？ と声をかけられた。イシユタルである。

勿論、と答えれば彼女はありがと、と言いながら俺の隣へと腰を下ろした。

じいいい、と音が出るとすれば正しくこのような音が似あう、そんなことを考えてしまうくらいイシユタルは俺のことを見ていた。

いや本当になんなの？ そんなに見ていて面白いような顔をしているつもりはないんだけど……

そう言えばイシユタルは何となく、よ、と言った。

まさかイシユタルを味方につけるなんてね、と。

その言葉に、若干の違和感を覚える。

何故ならばそれは、まるで第三者からの言葉のようだ。

そう思えば彼女は急に口に手を当て、くしゅん！ とかわいらしくくしやみました。

まあそんな薄着ならそりや寒いだろう、むしろ今まで寒くなかったんだろうか、そう思いながらも一応上着をかけてやる。

こういった細やかな気遣いが大切なのよ、とカーミラに教え込まれているのだ。

お陰で一部を除いたカルデア内スタッフからは少なくとも嫌われではない、といったところをキープしている。

いや普段バカ騒ぎしたりしてるからそこぶつかりあってプラスマイナスなんだよな……やめた方が良いのは分かっているんだけど禁止されていることってしたくなる……ならない？

そう考えていれば彼女はあ、ありがと、口にしてギョツとかけられたそれを握る。

それを見ると同時に絶句した。

いや、別にその仕草に対して絶句したわけではない。

俺が驚いたのは、彼女のその髪色に対してだ。

イシュタルの髪の色は黒色だ、その原因も、予測ではあるがマーリンの口からきいている。

だから彼女の髪色が変わるわけがない、だというのに。

彼女の今の髪色は美しい、金色だったのだ。

動揺を、表に出さないようにグツと手を握りこむ。

最初に考えたのはイシュタルに化けた敵であるということだ。

しかしその考えを直ぐに排除する、もしこちらの命を狙う敵なのであれば、今こうして話しているのはあまりに不自然だ。

情報を引き抜くにしても、こちらに見抜かれるリスクを考えれば殺した方が早い。

今なら俺と契約している鈴鹿とライダーさんまで強制退去なのだから、普通であればそうする。

だからこそその線は無い。

であれば何か、混乱と動揺を飲み込み、平然とした様子をするように努めながら頭を回せばふと、マーリンから聞いた話を思い出す。

基本的にメソポタミアの神々は金髪で、その一方人間は黒髪とされている。

確か彼は、俺にそう語ったはずだ。

そう思うと同時に、聞こえてきていたドクターと彼女の会話の一部を思い出す。

彼女はイシュタルという自我と、器となった少女の自我が混ざり合っただけで出来た新しいイシュタルだ、と言っていた。

つまり彼女はある意味ではイシュタルでも、少女でもない、と。

だが普通に考え、彼女を見てみればイシュタルの面が強いのは明らかだ。

大体7：3くらいの割合とも言っていたがぶつちやけ9：1と言わ

れでも納得できるレベル。

となれば彼女はもしかしたら現在、神としての側面が強く出ている状況なのではないか？

もしくは新しい神となった、というくらいだ。

召喚されてから今にかけて長い時間をかけてようやく、神として肉体が目覚め始めてきた。

故の金髪、ということなのでは？

何だか無理がある気がするがしかし、一度結論が出てしまえばそれ以上頭が回ることは無かった。

なんかイシユタルも何事もなかったかのように話してるし、もしかしたら金髪になったり黒髪になったりと結構自由にできることなのかもしれない。

現代でも髪染めたりとかあるしな。

まあ敵意も無いし大丈夫でしょ！

そう思っていれば不意に彼女がこちらを見て、ねえ、聞いてる？  
と言った。

なんか難しい顔してるし……はっ、やっぱり私の話つまらない？

それとも私が怖い……？ 貴方も、私を怖がるのね？ と。

え、何だそのくそ面倒くさいやつムーブは。

かつての鈴鹿に近いそれ、対応が死ぬほどめんどろなんだが……  
すっかり気の抜けてしまった俺はそんな程度で嫌いになるとか、ありえない、と言っておく。

本当に？ と聞かれるが当たり前である。

これでも今まで、多くの特異点を取り越えてきたのだ。

その中で色んな人たちを見た、接してきた、戦ってきた。

相容れない人がいた、尊敬するべき人がいた、憎むべき人がいた。

誰もかれもが個性に満ち足りていて、何かしらに尖っていた。

だからまあ、そんな簡単に嫌うとかは早々ないよ、と言えば彼女はキラキラと、目を輝かせながら俺を見る。

え、何？ 特異点の話が気になる？ 仕方が無いな……

聞かせてほしいと言われて満更でもない自分を自覚する。



何だかんだ俺も誰かにこのことを話したかったのかもしれない、誰だつて自慢話は好きなものだ。

特に自分の大好きな英霊達や、頼れる後輩たちの話なんかは、どれだけでも足りない程に。

あまり口が上手ではない俺の口から物語が語られ始める、それに金の女神は静かに耳を傾け、緩やかに時間は流れていった。

フハハハハハ！ 良くぞ帰ってきた素晴らしき勇者たちよ！

そして恥知らずにも戻ってきたその女神！ 我らが軍門に降つた感想を述べるがよい！

それがジググラツトに帰ってきた俺達を出迎えた、ギルガメツシュ王による第一声である。

見てることちまで笑つてしまいそうになるほど痛快な笑い声だ、しかしそれを聞きながらイシユタルは苦い顔をしながら口を開いた。

軍門に降つてなんかないわよ！ 飽くまでビジネスパートナー！

私は先見の明がある女神イシユタルなんだから！

見てなさいこいつすつごいマスターになるんだから！ ていうかなるまで死のうが爆散しようが生き返らせるわ！ と。

いや割と冗談になっていないんだよなあ……という感想を抱きながらもこの人たち仲が悪すぎだろ、とそう思う。

何しろずっと言い合いを続けているのだ、こつちが置いてけぼりである。

止める手立ても無いし、ぼうつと見ていればシドウリさんがそこまです、と間に入り二人を鎮めさせる。

さ、流石シドウリさん……！

次の問題がありますでしょう、王よ。

そう言えばギルガメツシュ王もうむ、そうであつたな、と言いながら俺を見た。

つい先日、立香率いる調査隊は天命の粘土板の回収に成功し、その後密林の女神——即ち女神ケツアルコアトルとの交渉のため都市：エリドウへと出発した。

我らの方でも万全を期すための用意はしたが、彼方には女神が少な

くとも二柱いるのは貴様のお陰で確認済みだ。

少々の不安が残る、故に援軍を送りたい——が、しかしそれと同時にゴルゴーンへの対処も行いたい。

その為の人選を貴様に任せる、今、決めよ。

彼はそう言い俺を見る、その真つすぐな視線を受け止めながら、それじゃアイシユタルよろしく、俺はそう言った。

はあ!? アンタ私を使いつ走りになろうだなんていい度胸じゃない!? とイシユタルが叫ぶ。

それを聞き流しながら、いや話を聞いてくれ、と言えば彼女は納得のいくものじゃなきやぶっ飛ばすわよ、と一旦黙り込んだ。

ふう、と内心一息を吐く、正直言った瞬間ぶっ飛ばされるかと思つてちよつとビビった。

とはいえこちらも即決した理由がある、でなければこんなことを言えるものか、そう思いながら口を開いた。

理由は三つある。

そもそも、今ここで立香君達に追いつけるような人がイシユタルしかない。

ライダーさんも頑張ればいけるだろうがしかし、空を飛べるイシユタルであれば特に障害に出会うことなく、また誰よりも早く彼らに追いつくことができる。

また今回の戦いは女神が二人いる、俺は実際相対したから分かるけど正直言つてジャガーマンだけでも相当強い。

ケツアルコアトルに至ってはそんなジャガーマンが霞に見えるレベルだ。

いくら三女神同盟の契約によりケツアルコアトルとは戦えなくともジャガーマンとなら戦えるはずだ、そしてイシユタルならばジャガーマン程度、完封できる。

そして三つ目、俺達の戦いはこの密林で終わるものじゃないからだ。

俺と契約してくれたのは素直に嬉しいが、この後の戦いは確実に俺と立香君達との連携が必須になってくる。

その時、彼等とイシュタルが上手いこと連携を取れたら、只でさえ滅茶苦茶頼りになるイシュタルが更に頼りになる。

それはもう、こちら側の切り札になると言っても過言ではない程に。

と、まあそういうことなんだけど、頼めるか？

そう言えばイシュタルは少しの間うむむ、と考えたがやがてはあ、とため息を吐いて仕方ないわねえと言った。

そこまで頼りにされているのを無碍にするのも女神的にアレだし、良いわ、私が行ってあげる！ とそう言い勢いよく空へと飛び出し、光のような速さでその姿を消した。

流石女神……めっちゃはええ……そう思うと同時、ギルガメツシユ王と目が合った。

無言のサムズアップ、見事飼い慣らしたな、とそう言われたような気がした。

そういう訳でこちらもさくつと出発である。

目指すのは取り合えず北壁だ。

ゴルゴーン討伐の為にアナは既に北壁で待機しているらしいし、あまり待たせる訳にもいかない。

正直休みは欲しかったところだが、北壁に着けばひとまず休息をとれる。

そこで巴御前とレオニダス王には魔獣戦線での指揮を執ってもらい、それから俺達は杉の森の先にあるというゴルゴーンの神殿へと向かう、という手筈だ。

とはいえそのまま突入、ということにはならない。

何せ神殿をどうにかして破壊しなければ、ゴルゴーンとは戦いにならないからだ。

というのも神殿、というのはケツアルコアトルやゴルゴーン、つまりこの地の神ではないものにとって必須のものであるからに他ならない。

イシュタルのようにこの地の神ではない以上、普通であれば本来の力を振るうことは叶わない。

そういった問題を解決するのが神殿である。

この地で彼女ら異邦の神を祭る祭壇、それがあることにより彼女らはより高い神性と権能を發揮できている。

逆を言えばその神殿を破壊してしまえばその力がガクンと落ちるということだ。

と言ってもそんな急激に、一人の英霊レベルにまで落ちるといふ訳ではない。

全くお話にならない、ただ蹂躪されるだけ、逃げるしかない、という現状から何とか全力を尽くしきれば倒せる……かも！ というところまで力を削げる、くらいだ。

要するに神殿を壊せなければ俺達は抵抗もできずに死ぬのみ、故に破壊するしかないということだ。

そして破壊するための方策は二か月に及ぶ立香君たちの調査の陰で目途が立っていた、もつと言えば立香君達が密林に向かったのはその為、というのもある。

つまり俺に出来ることは今のところもうない、後は立香君にかかっている、そういうことだった。

それからの数日は、これまでの人生を顧みても中々無い心境だったということ間違いない。

ドクターの方からちよくちよくと報告は聞いていたがそれでも不安になるのは仕方のないことだったがしかし、立香君はやはりやり遂げた。

神殿を破壊することなく、ケツアルコアトルとジャガーマンを味方に着けた、正直予想以上の成果である。

あのジャガーマンを……!?! と動揺したのは記憶に新しい。相も変わらず予想を飛び越えた結果を残す人だ、流石過ぎる。

イシユタルの方とも上手くやれているようだし良かった、とそう思う。

全てが順調に進んでいるのだ、それこそ、怖いくらいに。

とはいえ計算違いはあった。

ゴルゴーンの神殿を破壊する方策——即ちマルドゥークの斧が想

像以上にでかすぎたのだ。

因みにマルドゥークの斧ってのはいつだったかマーリンから聞いた、マルドゥーク神がティアマト神の喉を裂いた時に使用した斧のこ  
とらしい。

そんなものが残っているとか神代はやっぱ尋常じゃないな、とは思  
うがこれに限っては大分都合だった。

そんなものがあれば神に対する決定打になる。

まあでかすぎてどうやって運ぶのか、という心配は当然上がったが  
新しく味方についたケツアルコアトルと、それからイシユタルが手  
伝ってくれるということと二日で北壁まで持ってこれるとのことだ。

となればこちら時間も見て出発の準備である。

ここから杉の森までかかる時間は二日丸々とは言わないがそれ  
も一日以上はかかる。

あちらがマルドゥークの斧をこちらに運んでくるまでと大体同じ  
時間だ。

神殿まで運ばないの？ という疑問は当然出たし、それも俺がぶつ  
けたがマーリン曰く北壁からなら神殿まで一気に運ぶ方法があるら  
しい。

具体的に聞きたいんだけど……とは言ったが教えてはくれなかつ  
た。

何かその時がくれば分かるらしい。

サプライズのもりか？ 何が起こるか分からないって正直胃に  
悪いんだけど……

そうは思ったがあれはもう完全に教える気の無い顔だ、流石にここ  
まで付き合えばそのくらいは分かる。

信用しろ、ということなのだろう。

であればこれ以上何か聞くのも無駄というやつだし、悩んでいても  
時間の無駄だ。

杉の森で活動していた期間のあるアナの案内のもとに北壁を出発  
する。

因みにレオニダス王と巴御前は北壁で待機だ、流石に指揮官を動か

しすぎた。

いくら魔獣戦線が以前と比べ安定したと言えども不測の事態というのはいつ起こるか分からないのだ。

故の待機である、とはいえ直接殴り込む俺達の戦力が少ないのもまた事実だった。

という訳で今回、俺とライダーさん、鈴鹿に小太郎、それからアナの他にサーヴァントがもう一人いた。

名を茨木童子、そう、あのチョコレート好きの鬼である。

”獣どもの相手ももう飽きた、その作戦、吾にも一枚噛ませよ”とのことだ。

断る理由は特には無かったし、レオニダス王達と話して許可は貰っている、だから同行自体は問題なかったがしかし連携にはやや不安が残る。

まあその辺をどうにかこうにか上手く動かすのが俺の役目でもあるのだが。

そんなことを道すがら考えながら進んでいけばあつという間に杉の森である。

道中も当然魔獣と出くわしたが正直今更その程度は障害にすらならない。

群れと遭遇したりでもすればまた話は別だったがそういうことも無かったし至極順調と言えるだろう。

アナの先導のお陰で杉の森でも身を隠せる場所等は把握できだし、後は待機一択だ。

そんなことを考え茨木童子と二人でチョコを食っていたその時である。

ドクターから、落ち着いて聞いてくれ、と連絡が入った。

いつになく神妙な面持ちである、何が？ と聞けば彼はこう言った。

「ギルガメッシュ王が亡くなった、と。」

……は？

あり得ない。

その言葉を聞いて直ぐに思ったことがそれだった。

あのギルガメツシュ王が死んだ？ いやいやいや、ジグラットは魔術的にも物理的にも完全な守りを施されていた。

何度か立香君と共に外に出たとは聞いたが、それも無傷で帰還し、以来ジグラットからは一歩たりとも出ていない、そのはずだ。

そんな彼を、誰が殺せるというのか。

まさか自殺するだなんてことはないだろう、死因は？

努めて冷静に、止まりそうになる思考のままそう聞けばドクターはうん、それがね……と前置きした後にかう言った。

過労死なんだ、と。

……は？ 割と現実味があるのが嫌すぎるんだけど、え？ 何それマジで？

いや死んだということ自体はかなりの重大性があり尚且つ滅茶苦茶シリアスなんだけど、え、過労死？

何だよそれ現代の日本かよ……闇が深すぎるだろ……

冷静に考えればギルガメツシュ王一人に負担をかけすぎていたがしかし、彼なら大丈夫だろう、という思いもあっただけに驚きが凄すぎる。

一周回って普通に冷静になれたレベルだ。

取り合えずどうすれば良いんだろう、一旦作戦は中止してことで良……良いよね？ とそう聞きながら荷物を纏めようとすれば待つてくれ、と止められる。

え、このまま決行するの？ 大丈夫？ そう聞けばドクターはいや、実はね、と言う。

ギルガメツシュ王は死んだがしかし、生き返らせられるかもしれないんだ、と。

——いや、死んだ人は生き返らないだろう、それがどれだけ強い人だろうが、偉い人だろうが、死ねば誰もが皆平等だ。

特別は無い、死したものはただ腐りゆくのみ、それが普通だ。

いくらギルガメツシュ王と言えど流石にそれは希望を見すぎなのでは？ 思わず早口でそう返せば彼はまあ普通はそうなんだけどね、

この時代に限って言えば話は違ってくる、と言った。

どうやらギルガメツシュウの死因は過労死だがしかし、正確には完全に死んだのではないらしい。

死により近いところにはいたが生きていた、そこをガルラ霊とかいう霊に魂を冥界に持っていかれたのだとか。

つまり取り返せれば問題ない、と。

うーん、いきなりの専門用語で頭がギリギリ追いついていないですね……

そもそも冥界ってあの世のことだろ？　そこに行つた人の魂を取り返すとかそんな神話みたいなこと——あ。

そこまで言つたところで、ふと気づく。

この時代は、神の存在が未だ色濃く残る、それこそ神話として語り継がれるような時代、即ち神代なのだ。

と、いうことはである。

現代では概念程度のものでしかないあの世——つまり冥界が、こちらでは比較的近くに存在している……？

呟くようにそう言えばドクターは正解だ、その通りだよ、と言つた。

イシュタルのお陰で確信が出来たんだ、冥界は都市：クタのその真下にあるらしい。

そこに今から超特急で立香君が向かう、そしてそれと並行してゴルゴン攻略作戦は始めようと思うんだ。

どうかな？　と提案されるがその返答に少し迷う。

正直に言えば作戦を決行する、そのこと自体はギルガメツシュウはいなくともまあ、支障は無いのだ。

だからここで問題になるのは、その作戦の重要な役目の一つ、つまりゴルゴンと共にいると考えられるエルキドゥ——自称：キングウの足止めだ。

作戦が立てられた時点では、北壁にあるマルドゥークの斧を見せびらかしキングウを釣り、そこを立香君達が足止め、同時にマーリンの秘策で届けられたマルドゥークの斧を用いて神殿毎ゴルゴン攻略、という流れだった。



だがそこで立香君達が抜けるとなれば話は変わる、イシュタルもこちらに来る予定だったのにそちらに同行するとなれば戦力不足の面も出てくる。

そこらへん、どうするの？ と聞けば足止めはどうかになるらしい。

というのも北壁にはケツアルコアトルが向かうらしいのだ、彼女の程の神霊であればキングウを足止めするのは容易であろうとのことだ。

だから、考えるべきはイシュタルの抜けたこのメンバーでゴルゴーン討伐を執行するかどうか、それだけ。

つまるところ俺の判断にかかっているという訳だ。

ダメそうだと君が思うのなら、僕らは作戦を見送ってもいいと思っている、とドクターは言うがしかし、マルドゥークの斧は滅茶苦茶目立つ。

ドクターから写真を見せてもらったが、あれを振り回せるやつがいればその一振りで都市一つ破壊できるのでは？ というレベルだ。

そんなもんをウルク近辺まで輸送してしまえば間違いなくあちらに察せられる、つまり攻略の難易度は跳ね上がる。

それは避けたい、ギルガメツシユ王はこの作戦にマルドゥーク電撃作戦と名付けた、それは即ち相手に対策を立てさせる隙も与えず速攻で仕留めるという意味だ。

彼がそうした意味は、当然その方がやりやすい、ということもあるだろうがむしろそうしなければ成功する確率がガクンと落ちるということでもある。

故に多少の無茶を通してでも、この作戦は予定通りに進めるべきなのだ。

はあああ、と深く長めにため息を吐く。

こんな重大なことを俺一人に決めさせるとか、大人げなさすぎだろ、と愚痴を言いたかったがしかし、こちら側の状況を最も把握できているのは俺だけなのだ。

それは自らの戦力、という意味でも彼方側の戦力という意味でも

だ。

キングウがいない以上、ゴルゴーンを守るのは魔獣のみだろう、そしてその魔獣と最も戦ってきたのは俺達だ。

故に今、最も現状に即した判断を下せるのは俺だけ、ということに他ならない。

同時に、そうなのだと理解してしまったことに吐き気を覚える。

具合の悪さが胸の中心から広がっていく、不安と心配が混ざり合っ  
て今すぐ叫びだしたい気分なのを、グツと押し込めてからもう一度空  
気を吐き出した。

吐き出してから、良し、と言う。

やろう、否、やるしかない。

今が最大の、チャンスなのだから、と。

『そろそろケツアルコアトルとマルドゥークの斧が北壁に到着す  
る、準備を進めてくれ』

ドクターからの連絡に了解、と返して杉の森の奥へと進む。

鬱蒼とした、どこか暗く淀んだ雰囲気を持つ森の中、その最奥にそ  
れは存在した。

ゴルゴーンの神殿、来るものを阻み、遠ざけるような威圧を  
持っていたそれは、しかし、元からここに存在していたのだと言われ  
ても納得できるほどそこに溶け込んでいた。

恐ろしい、と理性ではなく本能がそう感じとる、けれども思考はそ  
の真逆を行っていて、神殿に潜入とかどこかゲームっぽいな、と思っ  
ていた。

いやまあぶつ壊すのだから潜入とは言いつらいのだが。

そういえば結局聞くのも、考えるのもやめた訳だがマルドゥークの  
斧、どうするのだろうか。

もしかしてぶん投げるとか？ そう思うがしかし、それは無理だな  
と、鼻で笑う。

北壁からここまで何キロあると思っっているのだ、どれだけの膂力、  
どれだけのコントロールで投げたにせよ正確にここまで飛ぶはずが  
ない。

そこまで考えたところでアナが何やら赤い布を持って、ひよこりと神殿前へと飛び出した。

何をするつもりだ？ と問おうとしたが、彼女はそこで待つように、といったジェスチャーをしてその布をポイツと放り投げる。

瞬間、黄金の台風が、やってきた。

豪風と爆音に破砕音と言ったあたりとあらゆる”暴力”が詰め込まれた一撃が、空から神殿へと振り下ろされた。

あれだけ禍々しく放たれていたオーラを一瞬で振り払うようにその一撃は神殿へと深く食い込み、瓦解させていく。

間違いない意表を突く究極の一撃で、何よりもダメージを与えられる一撃。

しかしそれほどまでに強大な一撃が繰り出した爆砕音の他に、これまで耳にしたことの無いような絶叫が響き渡っていた。

具体的に言うなら『スーイーシーダー???!』って感じ。

これ間違いないケツアルコアトルの悲鳴だと思っんですけど……  
ねえ、大丈夫？  
!!!

思わずそう呟けばドクターの代わりにマーリンの声が響いた。

はっはっはっはっは！ いやあ！ 参った参った！ アナに持たせた布が斧を誘導するはずだったんだけどまさか着弾してしまうとは！ 予想外も予想外！ だがこれでゴルゴーンの神性もガクンと落ちただろう！ ケツアルコアトルという、尊い犠牲を無駄にするわけにはいかない！ さあ、行きたまえ!! という如何にも愉快そうな笑い声に彩られた声が。

いやこれもう確信犯でしょ……計画性がありすぎる。

アナも共犯だな？ と聞けば何のことでしょうか、私にはさっぱり分かりません、けれども癪ですがマーリンの言う通り、ここは先に進むのが吉でしょう、ほら、早く。

とか何とか早口に言っただけ先頭を進みだしたが耳が真っ赤である。

この子、嘘を吐くのがへたくそすぎるだろ……というか、カルデア内で隠し事をするライダーさんにそっくりだ。

そう思いながらライダーさんを見れば彼女はうつすらと顔を赤ら

めていて、にやりと笑えばこつちを見ないでください！ と無理矢理前を向かされた。

いやきつしよくわるいなあもう……

神殿内に入ってすぐ出た感想がこれである。

といつても、こう思うのは俺だけではないだろう。

その証拠にライダーさん達も一様に、苦々し気な目で壁を見ていた。

否、正確には壁一面へと張り付いた紫色の繭を。

ただでさえ生物の内部かと誤解してしまいそうになるような見た目の壁であるにも関わらず、人ひとりなら平気で入れそうなサイズの繭がびっしりと生えているのだ。

いやマジでキモイな……ちよつと近寄りたくないんですけど……というよりもうここから逃げ出したいままであるんですけど……

そう思うがしかし、逃げ出すわけにはいかない。

弱音を吐き出しそうになるのをグツと堪えて止まりそうになった足を踏み出そうとする、同時に何かにつかつかつてグラリと身体が揺れた。

とはいえ転んだりはしない、流石にこんなことで無様に倒れるような鍛え方はしていないのだ。

おつとつと、と言いながら壁の方によろけつつ数歩歩いてから態勢を立て直す。

危うく繭に手を付くところだった、あぶねえ……。

そう思いながら繭を視界に入れる、先ほどよりもずっと近くで、鮮明に、そして仔細に見えたそれに、言葉を失った。

その繭の中には、影があったのだ。

それはつまり、繭の中に何かが入っている、ということを示している。

……いや、何か、という曖昧な表現はやめにしよう。

その中に入っている影は、紛うことなく人の形をしていた。

それを認識すると同時に、魔獣戦線が出た犠牲者のことを思い出す。

魔獣戦線で出る犠牲というのは、死者よりも行方不明が多い。

それは即ち魔獣に連れ去られたということだ、それを俺は今まで、食糧扱いされてしまったのだろう、とそう思っていた。

だが、違ったのだ。

連れ去られた彼らは、生きてままその肉体を、魔獣に変えられていた。

その事実を飲み込めないまま吐き気が顔を覗かせる。

それを力づくで抑え込んでいけば、湧き出てきたのは怒りだった。戦線に出ている兵士たちとは俺ももう長い付き合いだ。

何せ三か月近くはこの時代にいる、その中で知り合った兵士達だってその全員が無事に帰れるなんてことはない。

当然、行方知らずになったもの、命を落としたものはたくさんいた。けれども、彼等はウルクの為であれば、愛する家族の為であれば、親しい友の為であれば、王の為であれば、この命を犠牲にすることすら厭わないと、そう覚悟を決めて戦線に立っていたのだ！

だから俺達だって、その死を必要以上に悲しむことは無く、あいつは最期まで己の覚悟と意地を張り続けたのだと、そう思い、そして道半ばになってしまったその意思を背負うと誓い、戦ってきた！

それが、捕えられ、魔獣にその身を変えられて、守りたかったものを壊す存在へと変えられていたなんて、その悔しさたるや、計り知れるようなものではない！

ああ……悔しい、悔しい、悔しい——許せない。

赦すわけには、いかない。

己の心に巣くっていた恐怖とでも言うべき感情が、怒りに払拭されていく。

あらゆる雑念に支配されていた思考が、ただゴルゴーンを倒す、それだけに集中されていき、徐々にクリアになっていく。

取り乱すことは無かった、ただ、爆裂しそうな程の怒りを冷静に沈み込ませてすつと息を吸って、吐きなおす。

ゴルゴーンと聞いて、どこかライダーさんと同一ならば、もしかしたら話合いができるかもしれない、そう思っていた。

アナと同じでなくとも、もしかしたら一欠けらでもそういう可能性があるかもしれないと、そう思っていた。

希望的観測なのは分かり切っていて、けれども捨てきれなかったその可能性を投げ捨てる。

そつと礼装を起動して、未だその鼓動を絶やさぬ繭の中のそれを斬り捨てる。

血飛沫が舞う、それをライダーさん達は止めることは無かった。

ああ、我が友たちよ。

待っていてくれ、今、魔獣の女神の死を、贈り届けよう。

神殿内は複雑だったが、しかし迷うことは無かった。

アナが神殿内部を把握していたのだ、故に無駄に時間を食われることは無く、スムーズに神殿の最奥部まで足を運ぶことができた。

そこに着くまでの間、当然魔獣は襲い掛かってきたが障害にはなりえなかった。

俺の指示なしでもこの程度なら十分対処可能だ。

というかこれくらいは戦闘であれば無駄に指示をするよか好きにやらせた方が早いまである。

そんなこんなで最奥部、という訳だ。

深く深く、深呼吸をする。

何があっても、冷静さを崩さないように。

そうしていれば鈴鹿がそつと隣にやってきて、大丈夫？ とそう言った。

それに対して問題ない、と答える。

頭はクリアだ、腹の底は煮え滾っているけど、それでも思考は冷静に回ってる。

悪いな、心配かけてばかりだ、と言えばライダーさんがまったたくです、と笑って言った。

それだけで、少しだけ気が楽になる。

そうして一歩踏み出せば前にいた茨木童子が逃げ出すなら今の内だぞ？ と言う。

それに逃げる気はないさ、と応えればアナが、では行きましよう

最奥部、そこに出来た巨大な空間へと足を踏み入れた。

洞窟のようだった神殿の、その最奥にあつた空間はこれでもか、というくらい巨大な場所だった。

そしてそれに収まりきらないゴルゴーンの、その長大な尾が何重にも壁に沿って巻かれている。

女神というよりも化け物だな、とそう思いながら更に進めばそいつは、ゆるりと気だるげに、しかしどこか気品を感じられる素振りでの鎌首を持ち上げた。

紫の混じった、酷く悍ましい赤色に染まった瞳と目が合う。

それはどこかライダーさんの瞳の色と似ていて、けれども全く違う眼差しだった。

重そうに持ち上げた口から、ここが、ティアマトである私の寢床であると、知つての狼藉か？　と言う。

ビリビリと、嫌になるほどの殺気を感じ、それでもすすと息を吸い、叫ぶように言った。

魔獣達の母、仮初のティアマト神——ゴルゴーン。

お前の神性は最早落ちた、後はもう、疾く、死ぬ。

そう言った俺を見て、しかしゴルゴーンは浅く笑った。

何かと思えば、世迷言を。

貴様らのような羽虫に何ができると？　と。

何ができる、できないではない。

やるのだ、やってみせるのだ。

お前がこの地に呼び出されて……それで何を思い、何がしたくてそうしているのかは俺に分からない。

けれどもお前がしたことは許されるべきではないことだ。

どれだけの事情があろうが、間違いなく、許されない、否、赦さない。

言葉を重ねるように、叫ぶように、そう言えば、ゴルゴーンはやはり笑った。

先ほどよりも大きく高らかに、明らかな嘲りを込めて笑ったのだ。

許さない……赦さない？　ハ、ハハハ、ハハハハハハ！

良く言ったものだな、人風情が！

その言葉は私のものだ。

赦さないのは、私の方だ。

貴様ら人間には、何もかもを奪われた。

愛したものも、護り続けたものでさえも！ 貴様らは悉く奪い去つ

ていた！

これは復讐だ、それに対する、これ以上無いほどまでに分かりやすい復讐である！

復讐に、意味は無いとでも言うつもりか？ だがそれは違う。

復讐こそが、私の求める唯一のものであり全てなのだ。

既に姉もこの身へ取り込み複合神性と化した。

後は全てを殺し、踏みにじり、この世界を殺しつくして、そうして自らも殺しつくすのみ。

これはそういう復讐だ、それが復讐者である私であり、求めるものだ。

人間どもを滅ぼす、ウルクはその一步目のようなものなのだ。

そう思えるだけの憎しみを、貴様らには与えられた。

分かるだろうか？ 貴様とて、我が恩讐を作り上げた人間の一員だ。

うん？ どうだ？ と、そう言ってから彼女は俺を見た。

その澱みきった眼を睨みつけながら、コホンと咳ばらいする。

なるほど、確かにそうかもしれない。

女怪メドゥーサ、その伝説は、ライダーさんを召喚した時からもう

ずっと知っている。

彼女は基より女神として生まれた存在だ。

二人の姉同様、人々へと恵みを与える女神の一柱、だが彼女はある日女神アテナにより化け物になる呪いをかけられた。

そこから行われたのは人々による篡奪、襲撃の嵐、そして遂に、彼女たちはその命を落とした。

故の復讐なのだろう、多く痛みつけられた彼女の、心よりの復讐。

けれども、それを俺が認める訳にはいかなかった。

色々理由はあるが——それでも、ライダーさんがそうとは思わぬの



だから。

だからこそ、俺は言う。

「んなこと俺が知るかよバーカ」

一瞬呆気にとられたゴルゴーンが、少しだけ笑って叫びをあげる。そうか！ それほどまでに死にたいのなら、今くれてやる！ と、その濁り切った紅の瞳がギリリと、かつてあの燃え盛る都市で見た時のように輝き——同時に輝いた光によって相殺された。

ライダーさんと、アナだ。

今度こそ、ぽかんと口を開けた彼女が、遂に二人の姿を認知する。パクパクと、動揺したように口を開閉して、それからなんだ、と言った。

貴様——貴様らは、何だ、何なのだ！

寒気が止まらぬ、全身が、震えだす。

理性が狂いそうだ！

消えろ——消えろ消えろ消えろ！

我が視界から、消え失せろ！ 怪物どもが！

そう慌てふためくように捲し立てる彼女を見ながら、二人に聞く。

散々心配されたけど——二人こそ、大丈夫なの？ と。

そうすればアナが、ええ、と短く言ってから、続けて言った。

まだ彼女が私を……私たちを、見ようとしてくれたら、ほんの少しの救いはあったかもしれませんが。

けれどもそれはなかった——だから、もう、大丈夫です、と。

その言葉に俺は静かに頷いて、礼装を起動した。

紫色の光が空間を埋め尽くすように走り輝き大地を砕く。

頻繁に放たれるその軌道を鈴鹿の刀が、小太郎の忍術が逸らし、茨木童子が踏み込み込みライダーさんとアナが魔眼を相殺しながら肉薄するが、しかしゴルゴーンのその肉体に傷をつけることは叶っていないかった。

彼女はその図体のでかさゆえにこちらの攻撃は躲せない、だがその分その表皮は鋼のそれを上回っていたし、また圧倒的手数でこちらの手を潰していた。

この狭い戦場は一見こちらの有利に見えて、しかしその実圧倒的不利だったということだ。

絶えず降り続ける紫光の雨、腕を振るっただけで実体を獲得して迫りくる衝撃波、隙間を縫うように現れる数多の黒蛇、その全てがこの狭い中で縦横無尽に放たれ続けるのである。

つまりこちらは躲すに躲せない、自由自在かつ派手に動き回れる場所ではない以上、一定以上の動きはできないからだ。

故に躲しきれないそれらを、相殺するしかないがしかし、その全てが冗談じみた破壊力を内包している。

受け止めきれぬわけがない、受け流すにしても限界がある。

武器も体力も所詮は消耗するものだ、無限には存在しない。

いくらその神性が地に落ちようとも、やはり彼女は女神の名を冠するほどの存在だったという訳だろう、端的に言って、俺達はこれ以上無いほどに追い詰められていた。

だが、だからといって諦める訳にはいかなかったし、もつと言えればそれは諦める理由にはなりえなかった。

その程度で折れるような心は、もう持っていないかった。

俺だって人間だ、ビビりもする、恐れもする、怯みもする——けれども、これまでの旅で得てきたものは、教えられてきたものは、授けられてきたものは、その全てを押しつけてでも生きようと、未来を見ようと思わさせてくれるには充分過ぎるくらいのものであったということだ。

足元から現れた細身の蛇の頭を斬り潰す、直後に降ってきた紫の雨に礼装を投げ捨て軌道を逸らし、肩を掠める程度に抑えて走り出す。

立ち止まるわけにはいかない、俺に出来る最大限の力で自分の命だけは守り、ライダーさん達にはゴルゴーンに集中してもらおう。

その為にも必死に地を蹴った、周りを事細かに観察しながら、これまでの浅くとも濃厚な戦闘経験を基に来るだろう攻撃を予測する。

荒くなってきた呼吸をそのままに、煮え滾る腸もそのままに、しかし冷静に頭を回す。

ゴルゴーンは怒りに身を任せ、粗雑に振舞っているように見せかけ

てその実酷く冷静だ。

完全に計算されつくされた上で選択される攻撃、その悉くが一番来てほしくないタイミングで放たれる。

つまり彼女はこちららが打たれて嫌な手を先読みして打ってきている、ということに他ならない。

それもかなりの精度で、だ。

ということはそれを更に先読みすればやつの意表は突けるし、その鉄壁とも思えた弾幕には穴が空く。

そういうことだろう、ならばこれは、指示を下す指揮官マスターの戦いだ。ふう、と軽く息を吐く。

こんななどでかい局面で、こんな真面目にマスターっぽいことするのって何時ぶりだ？ そう浮かんできた疑念に少しだけ笑いながら鈴鹿の名を呼んでから叫ぶように言う。

——俺を守れ、無論、勝つ為に、だ！

その言葉に彼女は笑い、そんな理由まで言われなくても分かっているし、と刀を展開した。

蛇が出てきた傍から鈴鹿の刀が打ち破り、ゴルゴーンの周りから離れない大蛇から放たれる光を、それが打ち出される前に茨木童子が焼き尽くす。

縦横無尽に駆け巡らされる衝撃波は、それが振るわれる直前に勢いを弱めることでその威力をゼロにする。

延々と、その繰り返しが続けられていく。

けれども状況は最悪から悪い、程度までには昇華されていた。

つまり詰みの状態から抜けたということだ。

それでもギリギリの攻防だった、いや、もっと正確に言うのであれば俺達の対処は数コンマの遅れがあった。

お陰でこちらの傷は見るからに増えているが、それでも圧倒的な蹂躪と思われたそれを、確かな戦闘へと引き上げることには成功していた。

相手の先を読む、と言えば難しく聞こえるが、実のところこれは自分がやられたら嫌なことを先んじて潰しにかかる、それだけなのだ。

更に言えば彼女はライダーさんと同一の存在なのである、お陰で多少なりとも戦闘で優先的に取ろうとする手段が若干似通っている。未だ何もかもが浅い俺が、指示によつてここまで活躍できているのはこの二つの要素が大きいだろう。

とはいえこのバランスを長く保てないのは目に見えていた、こちらの消耗具合が激しすぎるのだ。

一人抜ければ即瓦解するだろう、その確信があるからこそ焦りが背中を伝つて鼓動を早くする。

短期決着は慣れてるが、今回ばかりは解決の糸口が見つからない。それでも、焦りに全てを任せることだけはしなかった。

冷静に、出来るだけ早く思考をぶん回す。

手っ取り早く宝具をかましたくなる気持ちも落ち着け、落ち着けと宥めながらこちらの手札を数え、組み上げる。

宝具は確かに強力だが、それでも溜めが必要になる、そしてその溜めは隙となり周りに大きな負担を与える。

だからこそ、それだけは考えなしに取つてはいけない。

何も戦闘というのは個人の武力だけで成立するものではないのだ、炎上都市を思い出せ、戦場にある全てのものは工夫次第で強力な武器になる。

英霊達の動きを見ろ、覚えろ、予測しろ。

ライダーさんと鈴鹿の動きなら大体わかるだろう、だから、茨木童子と小太郎、アナの動きを限界までトレースしろ。

そう思うがしかし、思考は纏まらない、策は組み上げられない。

荒れた呼吸が思考を乱していく、それに若干のいらだちを覚えながらも駆け回る、的にだけはなるかと頭を回し、足を動かす。

ゴルゴーンの尾が小太郎を捉える、吹き飛んだ彼の身体をアナが受け止めそれを狙い、束ねて凝縮する紫の光を鈴鹿とライダーさんが放たれる前に潰して回る。

邪魔だと叫んだゴルゴーンが振るい出す衝撃波を茨木童子の炎の手が受け止めそれでもそれは相殺されず大地を抉り飛ばしていた。

叫ぶように必死に指示を出しながら、それでも思考の裏側を、諦め

たような声が通り抜ける。

もう無理だ、俺じやダメだ、何もかもが足りていない、どうにかできるだなんて思うのは、あまりにも傲慢だ。

それを無理やり振り払う、大丈夫だと己に言い聞かせた瞬間、鈴鹿がダメ！ と叫ぶ。

反射的に地を踏みつける、前に進もうとした身体を止めようとして、しかし止まれずによろけた身体を、紫色の光が貫いた。

鈴鹿がダメ！ と叫ぶ。

瞬間、全力で一步踏み込み、そのままダイブした。

直後に紫の光が足首を掠めて地を穿つ。

その事実には、焦りが加速する。

鈴鹿が、逸らしきれなくなってきた。

それはつまり彼女はそれ程までに限界に近い、となると当然、他の皆も同じくらいの疲労度はずだ。

このままじゃ拙い、だけど打開策は見いだせない。

もつと頭を回せ、と必死に考える、けれどもその意思に反して段々と、音が遠ざかっていくような気がしてきた。

自分の酷く乱れた息遣いだけが耳朶を打つ、走っている己の足の感触すら抜けてきて、もう駄目だと、思いそうになる。

折れかけている、とそう思った。

そしてそれは間違っていないことを、しかし受け入れない。

諦めない、とういうことがどれだけ大切なことかはもう身に染みるほど知っている。

だから、諦めない、けれども、もう駄目だ。

その二つがグルグルと全身を駆け巡る、それに伴い酷く吐き気がしてきて——そら、前を見たまえ、道はまだあるぞ。少しの間だけだが

この天才がサポートするから、さ、気張っていこうじゃないか！

酷く聞き慣れた、俺の先生とも言える、女性の声が聞こえた。

ダ・ヴィンチちゃん……!? どうして、と素直にそう思う。

何故なら彼女は今回のレイシフトにおいて、存在証明という最も重要な役割を担っているからだ。

神代——しかもレアもレア、ウルトラレアケースである今回のレイシフトで必要になる存在証明の難易度は常軌を逸している。

それこそ、現代において所謂「天才」と称されるような人しかいないカルデアの、それも何度も存在証明をしてきたスタッフですら、長時間は無理だと、そう匙を投げるほどの難しさ。

だからこそ今回はダ・ヴィンチちゃんとその役目を一手に担っていたし、助言や少しの会話程度ならしてくれたが、それ以上のことはしなかった……いや、できなかったと言うべきだろう。

万能の天才と謳われたダ・ヴィンチちゃんですらそうなるというのに、そこに加えて現状の戦闘分析をするとか頭がどうにかしちやつたのだろうか？

そう聞けば、長時間は無理、ということは短時間であれば任せられる、ということだよ。

カルデアのスタッフをあまり嘗めない方が良い、彼等は天才であり、そして同時に努力を惜しまない子たちだ。

彼女はそう応え、それからそんなことより今は目の前に集中すべきだ、と言った。

目を逸らさないで、第一に己の安全を確保して、全てに視線を走らせ状況を完全に把握しよう。

君なら、できるだろう？ とそう煽るように、しかし信頼を込められた言葉に、ああ、と応えて止まりかけていた足を動かし始める。

周りには多量の刀が刺さっていた、護ってくれていたのだろう、その代わりとでもいうように、鈴鹿の身体には随分と傷が増えていた。

すまない、と言えば謝罪より打開策が欲しいな、と彼女は片目を瞑って言う。

それに任せろ、と言いながら周りを見渡せば、当然だが状況は変わっていないかった。

全員が疲弊していて、相も変わらずゴルゴーンの動きは何となくしか読めず、また味方の動きもライダーさんの動きしか読み切れない。

そう感じた俺に、しかしダ・ヴィンチちゃんは落ち着いて、と諭すように言った。

良いかい？ 完璧な予測をする必要はないんだ、というかできる筈もない。これはゲームでも何でもない現実で、君は私と違って天才じゃあないんだから。

何でもそうだが君は多くを背負い込もうとしすぎで、やることも考えることも極端すぎる。

君は何でもはできない、やる必要もない、ただ彼らを強く信頼して、彼等の強みを最高の状態で引き出してやるだけで良いんだ。

分かるかい？ うん、わかったならよろしい、ではまずは再配置といこうか。

ゴルゴーンの手札は分かっているかい？ そう聞いてきたダ・ヴィンチちゃんに、把握していることを手短かに伝えれば、なるほどね、と言った後にアホみたいな配置してるなあ！ と笑って言う。

帰ってきたら再教育だよ、という言葉に顔を顰めれば、彼女は蛇の対処には茨木童子、彼女が適任だろう、と言った。

衝撃波なんて一番軌道が読みやすいんだ、これに彼女を当てるなんて愚の骨頂。

君程度の攻撃で容易く殺せる蛇なんだ、彼女が炎を撒くだけで対処としては充分だろう。

それに、君のお守りは小太郎君に任せるべきだ、鈴鹿御前があつた力を全てゴルゴーンに回せばあの程度の光線、全て逸らすなんて訳ないはずだしね。

そしてそうすれば切り札であるメドウ彼女たちの負担はグツと減るだろう、積極的に当てに行こう、と。

その言葉を基に陣形を組み立て直す、全員の位置を把握し、まずは小太郎と鈴鹿をバトンタッチ、それから茨木童子が勢いよく炎を走らせた。

ゴウ、と音が鳴る、同時に地から這い出てきた蛇達は一瞬で根元から焼き切られる。

それに巻き込まれないように小太郎が俺を担いで駆け回る、同時、鈴鹿！ と叫べば刀の雨がゴルゴーンへと降り注いだ。

幾百もの剣閃、それでもゴルゴーンの周りの蛇を彼女を守ろうとぐ

るりと彼女に幾重にも巻き付いて、同時にそら、ここで令呪だろう、と彼女が言う——より先に令呪を切った。

流石にこれくらいの判断は自分でできるという訳だ、ライダーさんの魔力が、爆発的に膨れ上がって空を駆ける。

それをサポートするようにアナの魔眼がギリリと輝いた、邪魔をしようとした蛇の姿が止まり、その隙間を縫うように彼女は星と化し、そして刀の雨からゴルゴーンを守り通した蛇毎、ライダーさんは全てを貫いた。

血飛沫と共に絶叫のような苦悶の音が響く。

それを見据えながら彼女はおっと、少し構いすぎたかな、そろそろ時間のようだ、と言った。

私はもう戻らざるを得ないが、決して油断はしないよう、焦らぬよう、視野を狭くしないように、と。

それありがとう、大丈夫と伝えて前を見据える。

胸の中心に風穴を空けた彼女は、しかしそれでもまだだ、と叫びをあげた。

そして言葉の通り、彼女の傷は徐々にふさがっていく。

神性は地に落ちた——けれども生きてはいた、神ゆえの不死性が、生きている!?

驚愕に身を震わせる俺を見ながらも、ゴルゴーンは血を吐き捨てながら言う。

まだ、まだこの程度では私は死なない！ 死ねない！ 死ねわけにはいかない！

私は——私は原初の神、ティアマトであるぞ！

ティアマトで、あるはずなのだ！

何故なら私には声が聞こえる、咽び泣く、母の声が、今、この時も！

故に、故に私は——代わりに、復讐を、果たさなければならぬ！

それが、私に課せられた使命でもあるのだから！

そう彼女が叫ぶ、同時に振り回された尾の衝撃で天井が大きく揺れた。



激しく続いた戦闘で、この空間がもう駄目なのだろう、岩盤が剥がれ落ちてきている。

けれどもそんなことは関係なくて、今の言葉を理解すると同時に俺の中で何かがキレた。

これで彼女が、それでも己に降りかかってきた全ての悪に対する復讐を忘れられないと、そう叫びをあげて戦い続けようとするのであれば、まだ納得できた。

ライダーさんでありながら、ライダーさんではなく。

アナでありながら、アナではない。

そんな彼女の、その恩讐すら飲み込み背負い、この先へと進もうと思えた。

だが、彼女は今こう言ったのだ。

”代わり”と、彼女は言ったのだ。

己の思いでは無く、誰かの復讐を、己のものとして果たそうと躍起になっていると言ったのだ。

それは、それは——あまりにも侮辱が過ぎる。

ふざけるな、と叫ぶ。

否、叫ぼうとして、その手前で止められた。

ライダーさんが少しの笑みを湛えて、俺の前へと手を出したのだ。

なぜ、と思うがしかし、それより先に彼女は酷く落ち着いた声音で

ゴルゴーンへと言った。

ゴルゴーン  
私、哀れな女神——否、変わり果てた怪物。

夢を見るのは、もうやめましょう。

私の……私たちの復讐は、あの小さな島を出ることは決してないのです。

英雄殺しのゴルゴーン、それが貴方であり、私であり、彼女。

それ以上でも以下でもない、増してや、他の誰かの復讐を背負えるほどのものでもありません。

だから——もう、終わりにしましょう。

大人しく、お消えなさい、と。

言うと同時に彼女の両の眼はかつてないほどの光を放つ、それを黙

れと、そう叫んで開かれたゴルゴーンの魔眼の光とぶつかり合い、互いにほんの少しだけ動きを止めた。

瞬間、影が鋭く通る。

大蛇の群れに囲まれたゴルゴーンへ単独で接近し、美しい、紫色の長髪を靡かせながらその鎌を振りぬいた。

血飛沫が激しく弾ける、間違いなく急所を捉えた一撃で、けれどもそれは捨て身の一撃だった。

魔眼が効果を発揮し合ったのはほんの少し、それこそ瞬き一回分程度の時間だ。

それを過ぎれば彼女も、その周りも動く。

やめろ、やめろやめろやめろ！

私に寄るな、私を見るな、私を——！

そう叫ぶと同時にその巨大な手はアナを捕らえる、あまりにも凄惨な音が響いて血が弾けて、それでも彼女はもう一度、鎌を振るった。

その首へ、彼女の一振りには深々と突き刺さり、やがてゴルゴーンの身体から力が抜けていく。

それでもその手は離されることが無かった、彼女の周りにいた蛇は徐々に彼女自身を覆っていく。

ダメだと踏み込み込みそうになってしかし茨木童子に襟を引かれた。

あれは彼女がそうすると、他ならぬ彼女がそうすると決めたことであるのだ、と。

それにどちらにせよあの少女は手遅れだ、とも。

分かっていた、頭では彼女のした行動がどれだけ合理的だったかは理解していた。

もうサーヴァント達は限界で、何より俺が一番限界だった。

もう、立っているのすらやっとなほど。

そして彼女の振るう鎌はハルペーの鎌——つまるところ不死殺しの鎌だ。

彼女の死因が武器として昇華されたもの。

それを致命打になるほどの一撃として振るうには、弱っていた今が最高のチャンスで、もしかしたら最後のチャンスだった。

だから理解はできた、だが、そうだとしても感情というものは制御できるものじゃない。

命を捨てて駆け寄ろうとはしなかった、そんなことをすれば彼女の決死の一撃を台無しにしてしまう。

それでも声だけでもかけたくて、声を絞り出す。

すまない、と。

そうすれば彼女は俺を見て、笑って言った。

いえ、これは私たちの戦いでもありましたから。

でも、そうですね——もし、これで助けられた、と思っているのであれば。

こういう時は、ありがとうございます、と言うものらしいですよ、と。

どこかの誰かが言っていました、と彼女は言った。

言ってから、優し気に笑う。

ああ、そうだった、うん、その通りだったな。

——ありがとうございます、助かった。

君のことは、忘れない。

その言葉に彼女は満足そうな顔をして、それからライダーさんへ、後をお願いしますと言ってから、その姿をゴルゴーンと共に、蛇に飲み込まれる形で消えていった。

直後に天井がガラリと揺れて、それから勢いよく崩落を始めた。

この神殿自体が既に限界なのだ、俺がヤバいと、そう言う前に担ぎ上げられる。

ドクターの悲鳴にも似たガイドに沿って、俺達は走り出した。

神殿を抜け、各自に応急処置をしてから杉の森をただ走っていれば、ドクターはすまない、と前置きした後、なるべく早くウルクへ戻ってきてほしい、と言った。

もとよりそのつもりではあったから、それ自体は特に構いはしなかったが、しかし態々そう言ったということはそれだけの理由があるということだ。

冥界側がポカしたか？ そう聞けばいや、そっちの方は順調だよ、

後で立香君からも聞くかもしれないが、そちら側は全て丸く収まった、ギルガメツシユ王もその息を吹き返したよ、と。

その言葉に、ほっと息を吐く。

良かった、と心底をそう思い、同時に、じゃあなんだ、と思った。

もしかして魔獣戦線か？ 正直、巴御前たちに加えてケツアルコアトルとマーリンがいれば盤石だと思っていたんだけど……と言えはドクターは苦々し気な顔で、マーリンが死んだ、と言った。

——!? マーリンが、やられた!?

そんな馬鹿なことがあるか！ 最悪、ケツアルコアトルやレオニダス王達なら分かる、だがよりにもよってマーリンが!? ありえない！ あいつは保身にかけてはスペンシャリストだぞ!?

そんな彼が、やられた？ 到底信じられるものじゃない、けれども、ドクターが嘘を言う訳が無かった。

だから、言いたいことを飲み込み、必要な質問をする。

原因は？ と、ただ一言、全て説明してくれよ、という意味も込めてそう聞けば彼は、ティアマトだ、と言った。

端的に、事実だけ言おう。

原初の神、ティアマト神がこの時代において復活した、いや、正確に言えば復活していた。

あのマーリンがそのティアマトを、夢に落とすことでティアマト神の覚醒を先延ばしにしていたんだ。

そしてたった今、それが破られた。

ああ、焦らないで、ちゃんとそこも説明するから。

これは先ほどケツアルコアトル神、マーリン、巴御前と交戦していたキングウが言っていたことなんだが、ゴルゴーンが持っていたときれる権能、百獣母体があっただろう、あれは彼女が独力で獲得したものでなかった。

同調、というやつだ。

彼女はこの時代に現れたティアマト神と、その感覚を共有することであれだけの力を得ていたんだ。

感覚を共有する、ということは当然痛みも共有するという他に

ならない。

そしてゴルゴーンは今、君たちが討ち取った。

どれだけ深い眠りに入ってしようが、死の痛みを味わえば目を覚ますのは道理で、眠りに落とし続けていたマーリンはあえなくティアマト神に潰された、ということだ。

それに加えて、悪いニュースがもう一つある。

ウルクから見て南東にあるペルシア湾、そこから正体不明の魔力反応が大量に確認された。

その数——一億を超え、留まることなく増え続けている上に、メソポタミア全土に広がり始めている。

ただその全てが海から這い出してきたわけじゃない……と言っても十万はいるんだけどね。

各都市で抵抗は試みているが、確認されている魔力反応は、そのどれもが魔獣戦線で戦っていた魔獣と同じか、それ以上。

このままでは滅びは免れない、だから、すまないがなるべく早く、来てくれ。

その言葉に、了解と返しながら頭を回す。

この速度で走り続ければ半日しない内にもウルクへ着くのは訳ないだろう、とはいえこちらでも随分と疲弊している。

このスピードを保ち続けるのは無理だ、であればこうするべきだろう。

一度全員に止まってもらい複数の礼装を捨てるように宙へ投げる。

直後、それは姿を現した。

モータードキュイラツシエ——つまるどころバイク。

そんな毎回使い捨てするって訳じゃないんだけどなあ……と思う俺の意思に反して大量に召喚されたやつである。

確かに滅茶苦茶早い、走ってる間けたたましい騒音を出すというアホみたい目立ち方をするため、あまり使いたくは無かったのだが、今回ばかりは仕方が無いだろう。

これで移動して、と言えば彼女らは半笑いで了承してくれた。

大丈夫？ ちゃんと乗れる？ とは思ったがしかしその心配は杞

憂だった、とだけ言っておこう。

徐々に見えてきた、ウルクの上空は黒々とした何かの群れが夥しく飛んでいた。

あちらこちらから黒煙が上がり、同時に微かな悲鳴が風に乗って耳に届く。

一万だか十万だか、数は聞いていたがこうして見るととんでもねえ数だな……そう思いながらもウルクへと、減速もせずに突っ込んでいく。

ウルク市内は既にあらゆる場所が血で染まっていて、見慣れた人々の死体が見ようとせずとも目に入ってしまうほど転がっていた。

そして彼らをそうしたのであろう、人に近い風貌の、しかし決定的に違う、見るからに悍ましい”何か”。

反射的にアクセルを踏み込んだ、本能があればこの世にいてはならない存在だと、そう叫んでいた。

爆音が鳴り響く、ちょうど背中を見せていた一体に躊躇なく突っ込み吹き飛ばし、同時にバイクを捨てるように飛び出せばそいつらはその醜悪な、口にも見える巨大な顔を醜く歪ませて、奇声を上げた後に殺到してきた。

といつても、俺だって別に考えなしに突っ込んだわけではない。

巨大な炎の両手が、俺の真横を勢いよく通り抜けていき、眼前のそいつらを焼き払う。

と、思われた。

本来であれば、そうなるはずだった。

魔獣ですら一瞬で焼き尽くした茨木童子の炎だ、それは当然この正体不明の敵すら灰にする。

疑いすらしなかった、その確信はしかし、非情にも破られた。

炎の先から、身体を焦がされながらそれでもこちらへの歩みを止めない。

礼装を起動する、だがそれより早くそいつらの腕が閃いた。

巨大な炎の両手が、俺の真横を勢いよく通り抜け——同時に全力で後ろへ下がる。

余裕をかましている場合ではない、魔獣と同等かそれ以上？ 馬鹿なことを言うな。

アレは魔獣の強さの比ではない、サーヴァントには及ばずともそれに近い、それだけの力を持っている。

ドクターに立香君達のことを聞けば、彼等は交戦しながら市民を北壁へ逃がすルートを確保しているらしい。

つまり入口付近の俺達に増援は望めない、ということだ。

だがそれでも戦わなければならぬだろう、この都市にはまだ多くの市民が残っている。

なるべく大量のこいつらを相手にして、あちらの負担を減らす。

これが今、すべきことだろう。

幸いにも兵士たちが奮闘しているお陰で絶望はまだ遠い。

そう思いながらライダーさん達を見て、正直滅茶苦茶しんどいけど、大丈夫？ と聞けば彼女らは勿論、と答えた後に、私たちの心配より、自分の心配をするべきだと言った。

理解の出来ない、言葉なのかも分からない奇声が響き、異質な形をした腕が脇腹を掠めて通る。

奴らは茨木童子の炎にすら短時間であれば耐えるほど硬質な肌を持つていたが、それに加えてその膂力は凄まじいものだった。

こちらが万全の状態であればまだ、まともに抵抗できていただろう。

しかし現実というのはそう上手くはいかない、事実、こっちは応急処置をただけで未だに体力は減ったまま、傷は癒えてないままだ。

だがそれでもギリギリの抵抗は出来ていた、この広い戦場であれば俺も、ゴルゴーンの時よりは上手く動けたし、何よりこのサイズの敵の相手はもつとも戦い慣れていたのであった。

故に自身の命を守りやすい、それはつまり、サーヴァント達もあまりこちらに気をかけずに済むということだ。

俺の出す最低限の指示を基に、即興の連携を組み上げる。

互いが互いのカバーに入り続けてこの拮抗を保ち続ける。

それは綱渡りのように危ういバランスの上に成り立っているもの

で、些細なきっかけで崩れてしまうものでもあった。

そうしてそのきっかけが作られやすいのは、当然ながら俺だった。握った黒鍵が鋭く弾きあげられる、続けて逆方向から迫ってきた一撃が肩を貫き瞬間的に肘を顔へとぶち当てる。

けれども返ってきたのは鋼でも殴ったかのような感触だった、いくら魔力で強化しても、こいつらの身体にダメージを与えることは容易ではないということだ。

俺の危機を察して鈴鹿の刀が飛ぶがしかし、もう間に合わない。

黒に近い紫色が、俺の視界を支配して——しかし意識は飛ばなかった。

視線の先には、貫かれた丸太——変わり身の術！

小太郎に助かったと、そう言おうとした瞬間、痛みが走り、ゴボリと血があふれる。

彼の身体ごと、俺の身を黒紫の腕が貫いている。

下卑た笑い声が耳朶を打った。

握った黒鍵が鋭く弾きあげられる、続けて逆方向から迫ってきた一撃を身体を傾けて躲した。

ジリリ、と肩を掠めて通り抜ける、瞬間、それを掴んで投げ飛ばした。

重さはそこまでももないな、そう思いながら下がればライダーさんに無茶はしないでくださいと諫められる。

それにごめんと謝るが、それでも反省の色を見せない俺に彼女はため息を吐きながら釘剣を振るった。

ジャラリと鎖が伸びて奴らの動きを止める、そこを炎が焼き尽くしながら茨木童子の一撃が数体を塵へと変えた。

けれどもやつらの数はまるで減らない、むしろ増えていると言ってもよかった。

ついでに言えば立香君達の避難誘導は、まだ終わらない。

振るった傍から碎けるそれを補充するように絶え間なく礼装を起動させていく、いくら表皮が固いと言えど、そのバカでかい頭のような口であれば話は別だ。



口内から身体へと差し込むように貫き殺す、微かに震えて力を抜くその死体を蹴り飛ばしながら振り向きざまに礼装を振るう。

ガギン、と振り抜かれていたやつらの腕とぶつかり合い、火花が空へ舞って衝撃が腕を痺れさせる。

これだけ強化してるのに、嘘だろ、馬鹿げてる。

弾かれるように距離をとる、俺の援護に入ろうとした小太郎が複数の敵に囲まれ悔し気に顔をゆがませた。

それを見ながら地を蹴りつけ下がる、瞬間、ドズリと鈍い音が胸元から飛び出した。

ガギン、と振り抜かれていたやつらの腕とぶつかり合い、火花が空へ舞って衝撃が腕を痺れさせる。

数が、多すぎる、んだよ！

同時にぐるりと半回転、既に振り抜かれようとしていたそれに痺れた片手を合わせて無理矢理軌道を逸らした。

血が走る、しかしそれに合わせるように無事な方の手で火薬をばら撒いた。

と、言っても勿論ただの火薬ではない。

ばら撒いたその名は励振火薬、魔力を込めることで勢いよく燃え上がる特殊な火薬だ。

魔術師っぽい物を俺だつてたまには使うということである。

てことでさっさと死んでくれ、そう呟いて銃を撃ち放ち、着弾と同時に爆炎を作り出した。

衝撃と爆風が巻き起こる、それでも倒しきれないのは承知の上だった。

だからこれは、一つのチャンスだ。

巨大な音と衝撃で、こいつらの意識が一気にこっちに向いた。

それはつまり、彼女たちの手が一瞬空くということだ。

ライダーさんが俺の身体を掴んで勢いよく離脱して、直後に幾百の刀が舞い、炎が揺らめきあがる。

ほんの数コンマの時間だけで化け物どもの身体を刀が固定する、直後に爆炎が全てを焼き尽くした。

無論、茨木童子の炎だけでは無い。

小太郎と茨木童子の合わせ技だ、炎は緩やかに、しかし激しく燃え広がって視界いっぱいを焼き尽くした、がしかしやつらは無尽に湧いてきた。

ゴキブリかなんかかよ……

キリが無さ過ぎる、こっちももういつ誰が倒れてもおかしくない。どうする、どうすればいい？ 逃げの一手は封じられている、ウルク市民は後どれだけ残ってる？

くそ、くそ、くそ、畜生。

グルグルと考えることの多さに吐き気すら催してくる。

焦りが表に滲みだす、それを表すように汗がにじみ出て、砕けた右腕の痛みを頭が自覚してきている。

ちよつと拙い状況が続きすぎた、お陰で既に視界は霞んできている。

前が良く見えない、それでもやつらはどんどんと数を増やして包囲の輪を作り上げているのは分かっていた。

反射で身を捻る、何かが胸を抉り飛ばして同時に力強く引つ張られた。

それに抵抗しないで身を任せる、これまで一緒にいたのだ、今の手がやつらではないことくらいは分かる。

申し訳ありません、と言いながらライダーさんの一撃が化け物の頭を捉えて蹴り飛ばす、直後に全力で彼女を引き戻せば彼女のいた場所を鋭い一撃が走った。

それを掠れた視界で見ながら落ち着け、と己に言い聞かせる、震える手で礼装を取り出そうとして、その瞬間、声が響いた。

『良く持ち堪えたわね、アンタ達！ 流石じゃない!!』と、快活な、それでいて上品な声。

ああ、助かった。

そう思うと同時、金星の女神の輝きが、地上へと落ちるように降り注いだ。

彼女の放った光が諸共全てを吹き飛ばし、消し飛ばす。

といつても直ぐに湧いてくるのだろう、そう思い身構えたがしかし、やつらは突然ウルクから興味を無くしたように撤退していった。え……何？　どういう行動なのそれは……マジでただいきなり絡んできたヤンキー並みの興味の移り方じゃん……

ふざけてんの？　そう思うがしかし、追うことは出来ないし、そうする理由もなかった。

ドクターが言うにはウルク全域から撤退していったらしい、と言ってもほとんどの個体はここにいたらしいのだが。

お陰で誘導は想像以上に上手くいった、本当にすまなかった、ありがとう、と彼は言う。

それにああ、大丈夫、上手くいったなら何よりだ、そう返そうとして、視界がグルリと歪む。

ああ、しまった、気が抜けた。  
張りつめていた意識が緩んで、力が抜ける。

急激に遠くなったドクターやライダーさん達の声が、微かに聞こえた。

目を覚ます。

全身を包み込む、心地の良いまどろみを受け入れながらも一眠りしようとして、ハツと気づいた。

ここどこだ!?!　状況は!?!　あれからどうなった!?!

そう思うが周りには誰もいない。

改めて周りを見渡せば、あまり見慣れない、それでも豪華な一室であることが分かる。

それを眺めながら、ああ、多分ジグラット内だな、と思った。

普通に取り乱したが、考えてみれば危険が去ってから俺はぶっ倒れたのだ。

その後は当然、ジグラットに集まっただろうし、意識の無い俺は治療をされたのちに空き部屋にでも投げ込まれたのだろう。

となれば話は早い、ジグラット内であれば大体勝手は分かる。

未だに若干腕は痛むがその程度だし、問題は無い。

ベッドの直ぐそばにかけてあった上着を羽織りながらそつと扉を

押し開ければ、その先でちょうど良くライダーさんと目が合う。

あ、おはよう、とそう言おうとしてグツと抱き寄せられた。

そのいきなりの行動に動揺し、ライダーさん？　とさえいえば彼女は言った。

申し訳ありません、と。

毎回毎回、私は貴方を守り切れない。

いつも目も当てられないような凄惨な傷を負わせてしまう。

その右腕の傷も、治りはしましたが傷跡はずっと残ってしまうでしょう。

貴方はいつも心強く、頼もしい。

その折れない心は、魂は気丈で、いつも私たちを支えてくれる。

だというのに、私は貴方の身を、守ることすらできない。

私はサーヴァントで、貴方はマスターで、護るべき存在であるにも関わらず、私が護られていることの方がずっと多い。

私は、そんな私が、あまりにも情けない。

そう言い彼女はギュツと力を込めた、そんな彼女を優しく抱き留め背中をポンポンと叩く。

そうやって自分を責めるのは、あまり良くないよ、ライダーさん。

確かに、事実として俺は傷を負っているけど、逆を言えばこれはその程度で済んでるってことだ。

これまで負ってきた傷は、そのどれもが決死の一撃だった、それから俺を守ってくれたのはライダーさんなんだよ。

だから、謝らないでほしい。

俺はいつだって、どんな時だって貴女に助けられてきたし、これからもそうだ。

だから、泣かないで、な。

そう言えば彼女は小さな声で、ありがとうございます、と言った後に、それでも今少しだけは、このままで、とそう言った。

それから数分、もしくは十数分の時間を経て、落ち着いた彼女の背中を追うように歩く。

彼女曰く、皆が王座で待っているらしいのだ。

その為ちよつと早歩きである、気持ち程度だが早い方良い。

そんなこんなで王座へと行けば、立香君が、あ！と言った後にバツと飛び込んでくるようにこちらにやってきた。

良かった、ちゃんと目を覚ましてくれて、本当に良かった。

もう大丈夫なんですか？ 記憶飛んでたりとかしてませんか？ 身体に痛みは？

と矢継ぎ早に質問してくる。

それに苦笑いしながら、問題ないよ、と頭を撫でようとして気付く。

立香君、もう随分とボロボロだ。

俺が眠りこけてる間にも大きなことがあったんだな、と直ぐにそう察して、ごめんな、と言いながら彼の頭を撫でて、ギルガメツシユ王の前に行こうとして、金髪の女性——ケツアルコアトルと、目が合った。

今はもう、彼女へ恐怖を感じることはなかったが、それでも否が応でも天草さんの顔を思い出す。

だが、それだけだ。

言いたいことはもちろんあるが、それを飲み下してから頼りにしています、とそう言いながら手を差し出す。

彼女は彼女で、この戦いが終わったら、きっちり矯正してあげマース！と言つて手を握った。

いや………いらないですね………そう返しながら若干痛いぐらいにグツと握り合う、それだけで良かった。

俺たちの間にあつた何かを、言葉とともに精算する。

そうしてからようやくギルガメツシユ王の前に行く。

ご迷惑おかけしました、と頭を下げようとしたが彼は良い、と先んじて言った。

此度の働き、ご苦労であつた。

無理をさせたな、と。

だが、起きてすぐだが働いてもらう、現状は急を要する故、頼めるな？とも。

それにええ、と応えてから現状は？と聞けば簡単な説明がギルガ

メツシユ王からされていく。

一、目覚めたティアマト神——人類悪、ビーストは聖杯を飲み込んだ末にその正体を現し、今も尚このウルクへと進撃してきている、到達するのはもう二日もない。

二、それに伴いペルシア湾は神の泥によって染め上げられ、進撃と共にメソポタミア全土を侵している。

三、貴様らの戦った化け物どもはラフムという呼称を与えた、そしてこのラフムはティアマトめと共にこちらへと進撃を開始している。

四、ウルクに残った市民は1326人、内軍属が826人、北壁に逃れた生存者が500人。

五、この時代に送られた聖杯は、キングウの心臓だった。

彼からなされた説明はざっくりと分ければこんな感じであった。

中には聞き慣れない単語もあったが、聞けば彼は殊の外丁寧に教えてくれた。

流石賢王と言うべきだろう、滅茶苦茶分かりやすい説明で思わずダ・ヴィンチちゃんより分かりやすい……と呟いたレベル。

お陰で帰ったら即殴られることが確定してしまった。

と、まあそれは置いといて、取り合えず現状は把握した。

道理でゴルゴーンから聖杯が手に入らなかったわけだ、なんて思いながらもその上でもう一つだけ聞いた。いや、倒せるのそれ？ と。

相手が強すぎるとか、そう言った次元の話ではない。

彼から語られたティアマトは、『死』という概念がない生命体らしいのだ。

かの神は全ての命の母である、つまり俺達がこの世に生きている、という事実がイコールでティアマト神の存在を証明してしまう、と。

そこはもう、一度立香君が殺して復活したのを見てるから、間違いは無さそうだということも。

その一度倒したつてのにも驚きだが、しかし死なない、というのはそれを塗りつぶすほどの事実だ。

故の質問だったが、彼はちようど今、それを話していたところであつてな、と言つてから鏡を取り出し叫んだ。

エレシユキガル！ いるか！ と。

いったい何を？ と思つたのは一瞬だけだった。

何故ならば、鏡から返答が返つてきたのだ。

うるっさいわねー!? という、イシユタルに良く似た声音が響き、何も映していなかったその鏡は一人の女性を映し出した。

イシユタルに良く似た——というか、まるでイシユタルを金髪にして少し気弱そうにしたような見た目の女性。

その姿にどこか既視感を覚え、何だ？ と記憶を探り——あ。

え？ あ、あああああ!? あの日の晩のイシユタルじゃん!!!

不覚にも叫ぶように言えばイシユタルがええ!? アンタもなの!? と言ひ、立香君が先輩も会つたことあるんですか!? と聞いてきる。

それに、ああ、多分一度、話した、とそう言えば彼女は頬を赤らめて、覚えててくれたのね、と言つた。

うわなんか凄い……凄いダメ男に引っかけりそうな人だな……そう思いながらも勿論、と応える。

あの時は本当にびっくりしたけど、まさかイシユタルとは別人だったとは。

そこまで言い、ふとギルガメツシユ王の言葉を思い出して、ハツと気づく。

『何、安心せよ、直分かる』という、意味深な言葉を。

つまり三女神同盟つてのはイシユタルでありイシユタルではなかったということなのだ。

なるほどね、と頷き、それから容姿は良く似てるけど、やっぱりそっくりなんだな、と言う。

特にそうやって叫んだり感情豊かなとこ、イシユタルに良く似てる、と。

そう言えばイシユタルはちよつとー!? 一緒にしないでよ!? と叫び、エレシユキガルは顔を真っ赤に染め上げた後にや、やり直しします!!と叫んだ。

冥界の女神、エレシユキガル。

華麗に参上したわ、私に何か用かしら？ ウルクの王。

と、彼女はコホンと咳払いしてからその佇まいを直しそう言った。テイクツーである、シンプルに茶番だ。

そう思うが口をはさんで話が進まないのも面倒。

彼女も動揺をなるべくなくし、ギルガメツシュウ王の呼びかけに答えた、という体でやり直したのだから口をはさむのは面倒なだけだろう。

故に黙ってギルガメツシュウ王の言葉を待てば彼は、一つ、頼みがある、と言う。

ティアマト神が、後二日も無い内に来る上、倒さねばメソポタミアは滅ぶ。

しかもティアマト神は地上に命がある限り、必ず死なぬ。

そこで、ティアマト神の接待を貴様に譲ってやろうと思つてな。

生命である世界では死を知らぬというのであれば、生命無き世界に落とすまで。

冥界であれば、アレは最期の命になるであろう？ と。

突然の言葉に彼女はポカンとして、それからか、母さんをウチに落とす!? と動揺を露わにしながら言った。

それに彼は王の名のもとに、貴様に命じる！ と言う。

このウルク全土に冥界の門を開き、ティアマト神を騙る災害の獣を、地の底に繋ぎ止めよ！ と。

そんなスケールの大きい言葉に彼女は、暫し黙り込み、それから二日じゃ無理ね、と言った。

そもそもこんな広い都市の地下に冥界を持つてくるって作業自体、十年以上はかかるような作業だわ。

まあ、昔からウルク憎しで企んでたから三日でできるんだけれども！

でも、それでも三日よ、無理をして進めても、最速で三日。

どれだけ短くても後一日は押しとどめてくれないと、間に合わないのだわ、と。



その台詞に、できるのか？ と周りを見る。

正直に言つて俺は話を聞いただけで未だ、ティアマト神のヤバさというのを実感できていない。

故に立香君を見たのだが——彼の顔には、明らかに不可能だ、という表情が浮かんでいた。

諦めないことに定評のある彼が、である。

ああ、無理なんだなあ、と確信し、どうにか手は無いかと頭を回したところで、ギルガメツシユ王が勝つたな、と笑った。

勝ち筋は見えた、故に案ずるな。

こちらには——イシュタルがいるであろう。

否、正確には、グガランナが！

そら、グガランナを呼べ、イシュタル、と彼は笑つてそう言った。が、しかしその喜色に満ちたムードに反し、彼女の顔はこわばっていた。

おかしい、と素直に思う。

彼女であればその性格上、鼻高々に自慢し始める筈なのだ。

それが、無い。

嫌な予感がする、ふと、イシュタルと出会った時のことを思い出した。

”この辺りに大切なものが落ちてなかった？”見るからに、これは凄いい！ っとなるようなものよ！”や、やっぱり落ちてた？”

……なあ、イシュタル。

最初であつたときにさ、探してたのっでもしかして——。

そこまで言つたところで彼女はうわあああん！ そうです、ありませんグガランナ！ どっかで無くしちゃいましたああ！ と、謝りながら叫んだ。

ギルガメツシユ王の、何の為に貴様をスカウトしたとー！？ といふ悲鳴が、ジグラット内で虚しく響いた。

ジグラット、その天辺に横になりながら夜風を浴びる。

対ティアマト神会議は一旦解散したのだ。

何せグガランナがない以上、抵抗のしようがない。

完全に行き詰まってしまった結果なのである。

一応、夜明けまでの休憩とは告げられたが、何かいい方策が浮かぶだろうか。

何だかそれが心配過ぎて既に胃が痛い、どうにか気持ちをリセットしないと、と思いい外に出たがあまり効果は無かった。

仕方が無いのであーとかうーとか言いながら、ふと隣に誰かが降り立った。

顔だけ向ければそこには、黒髪を靡かせた麗人——否、麗神、イシユタル。

なんか用？ と聞けばちよつとね、と彼女は笑う。

私と契約したマスターが、今何を思い、何を考えているのか、ちよつと気になるところじゃない？

何せ契約してから一緒にいた時間も短いんだし、と。

その言葉に、少し笑う。

確かにそうだ、俺と彼女は契約したにも関わらず大して近くにはいなかった。

まあ強いうえに早いのだから、仕方ない。

そんなことを考えていれば、彼女は言った。

ねえ、貴方は今、何を思う？

これまで六つの特異点を乗り越えてきたと思うけれど、こんな事態は多分初めてだと思う。

正に時代が滅びる一歩手前、分かりやすいその原因が少しずつ確実に迫ってきているこの現状に。

嫌な質問だなあ、と口に出して言う。

それでも答えを待つ彼女に俺はそつと口を開いた。

ぶつちやけね、逃げ出したいよ。

当然だ、俺は死にたくないし、出来れば痛い思いも苦しい思いもしたくない。

平穩無事な生活が何よりも望ましい。

だけど、さ。

逃げ出したって思っても、逃げ出そうとは思わないんだ。

それは、きつと、ここに来るまでの間に、いろんな人に託されて、背中を押されて、応援されてきたから。

別にその期待に応えたいって訳じゃない。

でも、そういう人たちがくれたモノは、すっかり俺の一部になっていて、そのどれもが、俺がもう駄目だって思いそうになった時に、諦めちゃダメだって教えてくれるモノなんだよ。

だから、怖くても、痛くても、俺は前に進む。

隣を歩んでくれる人たちと一緒に、どこまでも。

そう、思っているし、これから先も、そう思い続けるよ。

と、そう言えば彼女はなるほどね、と笑った。

良いじゃない、そういうの。

さっすが私の見込んだマスター、好きよ、その考え方。

ええ、とつても美しくて好み。

その答えに免じて、貴方のそれについては何も言わないでおいであげるわ。

それに、勿論私の全力も貸してあげる、と。

彼女は言った。

言うてから、美しい笑顔を浮かべ、精々頑張りなさい。

この勝利の女神が、貴方についてあげるんだから、とそう言った。

それじゃ、私はマシユ達とも話してくるわ、何て言つて彼女は優雅に空へと飛び立っていった。

その背中を、見えなくなるまで見つめてから立ち上がる。

行くべき場所と、話したい人がいるのである。

いや、正確には話したいというよりは教えてもらいたい、なのだが。

まあそういう細かいことは気にせずそつと飛び降りてから王座へと向かった。

なるべくゆつくりと、遠回りの道を通っていく。

ここに来るのも最後かと思うと、突然ちよつとだけ寂しさでも言うべきものを感じたのである。

だからちよつとだけ、あちこちを見て回ろうかと外回りに歩を進めていけば、出会ったのは巴御前だった。

奇遇だな、なんて言えば彼女は少しそうでしょうか？　と言った。私は貴方を探していましたので、私はそうは思いませんね、と。

……俺を？　何、また説教でもする感じ……？　流石にジグラットに来てまで火薬使つて遊んでたりなんかしてないですよ……

そう言えば彼女は違います、と随分と語気を強めて言い、それから、少し、お話がしたいと思ひまして、時間はありますか？　と言った。

用事はあつたが、しかしまだ急ぐような時間でもない。

大丈夫です、とそう返せば彼女は良かった、と笑い、それは良かった、立ち話というのもあれですし、掛けてお話をしましょうか、と言つてからジグラットの縁へ、足を投げ出す形でちよこんと座つた。

え、そこ座るのちよつと怖くない……？　そう思うがしかし、彼女はなんてことない顔で座っているので仕方なく腰掛ける。

思いの外不安にはならなかったが、それでも足場が遠いつてちよつとビビるな、そう思いながら彼女に話つてのは？　と問いかける。

返答は、すぐには返つてこなかった。

それでも急かすこと無く待てば、彼女はこほんと、咳払いをしてから口を開く。

此度の戦い、未だ終わつてはおりませんが、それでも今晚が最後の安息日です。

なので、お礼を言おうかと思ひまして。

魔獣戦線、その最前線——北壁にて、貴方には本当にお世話になりました。

貴方は茨木童子をあそこに連れ帰つてくださり、私の偏見を和らげ、張り詰めていた兵士たちの緊張を程よく解してくれた。

あの日私達ともに、ギルタブリルと戦い、勝利に導いてくれた。

準備期間であつた二ヶ月間、北壁内のあらゆる仕事を担当し、また時には戦場に出て指揮をしてくれた。

その全てが狙つたことではなかったかもしれませんが。

ですが、私達はその全てに助けられ、励まされた。

貴方抜きでは、このようにことが運ぶことは無かつたでしょう。

故の感謝です、どうか遠慮はせず、是非受け取つて欲しい。

これは私だけでなく、北壁全員の意思でもありませんから。

そうして、彼女はこれは気持ちばかりですがね、と言いながら短刀を俺に手渡した。

紫の鞘に収まっていたそれを抜けば、姿を表したのは美しい、鮮やかな赤の短刀だった。

本当ならもう少し、可愛げのあるものが良かったのですが時間もなく、思いつきもしなく……結果的に少しでも身を守ってくれば良いなということとこれに……と彼女は言った。

その言葉にありがとう、と素っ気ないと言えるほど短くそう言えば、彼女は優しく俺の頭に手を載せた。

ちなみにその声は、酷く震えて聞けたものではなかった、とだけ言っておこう。

大分引き止めてしまいましたね、用事があるのでしよう？ そう言った彼女にうなずいて立ち上がる。

ありがとうございました、とそう言いながらジグラット内を少しだけ早足で向かった先は、王座であった。

そこには、未だ兵たちに指示を出し、書に何かを記している人がいた。

言わずもがな、賢王ギルガメツシユである。

流星に数ヶ月前と比べれば忙しい、とは全然言えない状況の彼が指示を出し終えるのを待ってから歩み寄る。

当然それに気づいた彼は、どうした？ と言った。

それから、最後の挨拶でもしにきたか？ と。

その言葉に、少しだけ笑った。

最後になんてする気もないくせに、大分意地の悪いことを言いますね。

そうすれば彼はまあな、と言った後に、して、何用だ？ と言った。貴様が何の用も無く来るようなことはないだろう、何が望みだ？

と。

いや察しが良すぎる……が、まあ不都合はない。

そう思ってからグツと顔を上げ、ギルガメツシユ王の目を見てから

口を開く。

ギルガメツシュ王、貴方の持つ千里眼は、未来を見通す千里眼。だから、きつと貴方は、こうなること——ティアマトが襲来してくることを、知っていましたよね。

掠れたような声でそう問いかける、そうすればギルガメツシュ王は、当たり前だ、と言った。

魔術王がこの時代に聖杯を送り、虚数世界よりティアマト神が引き出された、その時点で我は未来を知り、その事実を民にも伝えた。

それがどうかしたか、と言いつ切る前に、口を開く。

その時、貴方が見た”今”から、俺達は、少しでも何かを、変えられましたか？

そう放った言葉は意図せず不安に揺れてしまった。

実際、今聞いたことも、本当に聞いてよかったのかとすら、内心思う。

けれども、聞けるのであれば聞いてしまいたかった。

巴御前はああ言ってくれたがしかし、それでも俺は、知れるのであれば知りたかった。

俺は本当に、誰かの為になれたのかを。

これまで頑張ってきたことは、無駄ではなかったと言ってくれたその言葉を、信じたかった。

そんな俺を見て、ギルガメツシュ王はやはり笑った。

それも軽い笑いではない、大口開けての爆笑である。

一頻り笑ってから、戯け、そんな聞かずともわかるようなこと、聞くでないわ、と彼は言う。

何か変わったか、何か変えることは出来たか、だと？ そんなもの

——当たり前であろう。

貴様がいなければ救えぬ何かがあった、貴様が動かなければどうにもならぬことがあった。

誇れ、今生き残っている1000以上の生命は、貴様無くしてはここにいなかった。

貴様のしてきたことその全ては、決して無駄ではなかった。

その言葉に、ポロリと何かが零れ落ちて、ありがとうございませう、と、そう言った。

こんな短時間で二回も泣かされるなんてことある？ 涙腺がガバガバすぎるんですけど……そう思うがしかし仕方がない、とそう思う。

人って認められると嬉しいものなのだ。

とはいえ、こんな風に確かめようとはあまり思ってもいなかったのだが。

今までずっと、自分がしてきたことは正しかったのかと思うばかりだった、その反動的なあれなのであろう。

我ながら情けない、そう思うがまあ、それも俺らしき、ということ勘弁いただきたい。

そう考えながら裾で目をこすり、それから彼に聞く。

ギルガメツシュ王が召喚をした際に使った場所を、教えてほしい、と。

ついでで申し訳ないが、その使用許可と後、召喚手順を教えてください、とも。

その言葉にギルガメツシュ王が呆気にとられたような顔をして、それからほう、と笑う。

随分と急ではないか、このタイミングで呼んだところで連携が上手く取れるかもわからんと言うのに。

そう、彼は言ったが、多分、その問題はありません、と言った。

召喚つてのは縁が大切らしいので、それなら多分来てくれると思うので。

だから、大丈夫です。

そういえばギルガメツシュ王は、それなら良い、と言ってからこつちだ、と地下へ向かって歩き出した。

案内されたそこは、地下にしては酷く明るく、けれどもそう広くはない一室だった。

その中心には、良く見慣れたような円状の、いわゆる魔法陣というやつが刻まれている。

それを見て、今更ながら緊張で手に汗が滲んできた。

いや勢いで動いてるのは良いが、しかし俺はまだ一度たりとも、こういう一般的（と言っても良いのかは分からないが）な召喚というのはしたことがないのだ。

カルデアのは石をポイポイと投げれば良かっただけなので、尚更不安が加速する。

そんな俺を見て、ギルガメッシュ王はそう緊張するな、と言った。そもそも貴様が言い出したことであろう、自信を持って、と。

やり方は我が教えてやる、と。  
それに静かに領きながら、彼に言われるがままに手順をこなし、それからようやく手をのばす。

魔法陣の中には欠けた虹色の石——いつだったかカルデアで割った聖晶石だ。

ないよりマシだろう、ということで見ているのだ。

それを見つめながら、言われた言葉を一小節ずつ繰り返す。繰り返すごとに、魔法陣は輝き出した。

目がくらむ、それでも聞こえてくる言葉を真似して続けていけば、ついにその光は爆発するように部屋中を満たした。

不思議にも発生した暴風が身体を打ち付ける、それでも目を閉じずに開いていれば、その奥に人影が見えた。

それだけで、ああ、やっぱり来てくれた、とそう思う。  
再びつながったパスがどこか懐かしい。

そうしてやがて落ち着きを見せた光の中にいたその人は、俺を見るなりハアとため息をついてから言った。

これも運命というやつなのかしら……とは言えこんなアホみたいな触媒にホイホイ釣られた私も私よね……と。

その姿に、良かった、と自然と笑みが溢れる。  
彼女は俺の知る——カルデアの、カーミラだ。

その事実には静観していたドクターが何でだ!!? と動揺をしていたが詳しい理由なんぞ知るものか。

この時代が不安定だとか、例外だとか、そういうふわふわとした理



由があればそれでいい。

本当、来てくれて助かった、早速だけど状況を把握してもらって働いてもらうから、よろしく。

そう言えば彼女は、私を小間使いみたいに扱うんじゃないわよ！

と言ったが、しかしそれでも仕方ないわね、と薄く笑って言った。

そういう飲み込み早いところ本当好きだわ……でも、うん、そうだな、改めて来てくれて、ありがとう。

若干の恥ずかしさを隠しながらそう言ったら、彼女は少しだけ顔を背け、それからこう言った。

当たり前じゃない、私は貴方のサーヴァントなのよ、と。

そうして、カーミラへと現状の説明をした後に少しだけ仮眠を取れば、夜はすぐに明けた。

当然のように王座へと集まり、ドクターからティアマト神と、黒泥への対応についての調査報告が始まった。

ではまずこれを見てほしい、と彼が宙に投影したそれは、ティアマト神の全体図だった。

半日もなかったのにこんなの作ったの……？ 優秀すぎるだろう……そう思っていれば彼は、脚に注目してほしい、と言った。

かの神はあまりにも巨大だが、それに比べてあまりにも細すぎる。これでは自らの重さを耐え切れはしないだろう、ということとは、だ。おそらくティアマト神は海水の上でしか歩行できないと考えられる。

絶えず黒泥を作り出しながら進んでいるのが、それを裏付けているとも言えるね。

となれば、足止めをするにはどうすれば良いか、流石にわかるよね。

そう、この黒泥——カルデアはこれをケイオスタイドと呼称する——を、物理的に除去すればいい。

もちろん、こちらでもケイオスタイドを元の海水に戻せないか解析中ではあるが……しかし、ティアマト神の進行が予想より半日ほど早い。

ウルクより南にあるギルス市跡が飲まれるまで後三時間もないだ

ろう、再計算したが、ウルクに来るには後ざつと八時間つてところだ。解析が出来ても葉ができないことは確か、ということだ。

どうだろうか？ ギルガメツシュ王？ と、彼がそう区切ればギルガメツシュ王はふむ、と唸り、それから不可能であったとしても、脚を破壊するしかあるまい、と言った。

あれだけの泥を除去するのはいくらなんでも不可能だ、と。

だが、それに待ったをかけた人物がいた。

いや、神、というべきだろうか？

まあ何はともあれ声を上げたのはケツアルコアトルだった。

彼女は自信満々に前へと踏み出て、それからケイオスタイドの除去であれば、私が任されましよう、と言った。

我が太陽<sup>ピエトラ・デル・ソル</sup>遍歴であれば可能です、と。

この時立香君がぎよつとしたよう顔で彼女を見て、微笑みかけられていたが、まあ、何かしらあったのだろう。

聞けば神殿に置いていたシンボルだったのだとか。

と、まあその話は置いて、彼女は可能ではあるが、その間守つて欲しいとも言った。

また宝具発動中も魔力供給が必要だと。

あまりにも危険だ、生命が幾つあっても足りないだろう。

だが立香君は迷わずにやろう、と言った。

恐れがあることは間違いないだろう、だが、それでも強く、はつきりと。

それを聞き届け、ギルガメツシュ王はニヤリと笑う。

良からう、とそう言い今の立香の返答を以て、ティアマト迎撃作戦、開始の号砲とする！

全兵士はサーヴァント：レオニダス、牛若丸、武蔵坊弁慶と共に城壁にてウルクの守護を！ 巴御前、風魔小太郎はカルデアのサポートへつけ！

これよりジグラットに残るものは王のみである！

何があるうとも、城壁から離れることは許さぬ！

では行け！ 事を成し終え、もう一度我の元へ戻るがよい！

さあ、真なる神との訣別の時だ！ という言葉を背中に受けて、俺たちは飛び出した。

そうして飛び出してから、約二時間ほど経過しただろうか。

もうちよい遠くにいてくれないかなあ、という俺の気持ちに反してティアマト神は、遂にその姿を現した。

——でかい。

もうただシンプルにその一言が出て、それからその周りを飛び交うラフムの多さにゾツとした。

あの日の比ではない。

空がやつらの色に染まって見えるほどの多さ、これ、ケツアルコアトルを守り切るなんてできるのかよ、そう思うがしかし、できるできないではないのだと、そう思う。

やるしかないのだ、やれなければ、黙って死にゆく運命を受け入れるしかない。

先に行くわよ、とイシユタルが先陣を切る、それについていくようにケツアルコアトルと立香君たちが乗った翼竜が速さを上げた。

それを見ながら翼竜から飛び降り泥の上に着地する、魔術が無ければ余裕で沈んでいるだろう、魔術様様だ。

近づけば近づくほどに、泥の汚染が強まっていく、それに比例して、異質な形に変化したラフムが多く見られた。

パツと見だけで、普通のラフムよりずっとやばいと、そう察する。だがそれでも戦うしかない、

準備は良いな、と問いかければ、返ってきたのは各々の、肯定の返事だった。

金属音が、高らかに響き渡る。

炎が走り、血が跳ね、悲鳴が劈き、光が落ちる。

ここはそういう戦場だった、間違いなく、これまで戦ってきた中でも最も異質な戦場。

パチャリと泥の上を跳ねるように駆け抜ける、ラフムの軍勢はもう、数えるのも馬鹿らしいほどにいた。

ラフムが叫ぶ、既に俺たち人間と、同レベルの言葉を用いて”人間

だ”殺せ”と、狂ったように何度でも、叫びを上げながら突っ込んでくる。

振り抜かれた、既に腕とは言えない——例えるのであれば甲殻類の脚のような何かを紙一重でかわす。

いや、正確に言えば余裕を持つて身を捻ったつもりだったのに、結果的に紙一重となった。

馬鹿げてるだろ、早すぎる……！　グツと礼装を握りしめながら降り掛かってきたもう一本のそれを力づくで受け流せば、瞬間眼前のそれは蹴り飛ばされた。

ライダーさん！　助かったとそう言おうと思ったがしかし彼女が前に出すぎです、下がってください、と叫ぶように前に出る。

いや好きで出たわけじゃないんですよ……結果的にそうなたただけで……とか言っている暇はない。

やつらは掃いて捨てるほどいるのだ。

前にライダーさんとカーミラ、後ろに鈴鹿が付き、巴御前と小太郎が互いをカバーしながらラフムを相手する。

俺たちの役目はケツアルコアトルと立香君へ向かうラフムの足止めだったが、しかしこれだけ多ければあまり意味を成さなそうだと、も思ったがそうでもない。

大体半分くらいの数がこちらに向いている。

そのことに少しだけホツとして、それから気合を入れ直す。

いくら守られているとは言えこの状況では完璧にそれをこなされるというのは不可能だ。

当然穴はできるし、そこからラフムはやってくる。

ケラケラと耳に障る笑い声を垂れ流しながら振り抜かれた一撃を受け流す。

基本的にやつらの攻撃はその二本の腕での単調な攻撃のみだったが、しかし尋常ではないパワーとスピードが加われれば一苦労なんてものではなかった。

だが、それでも俺はラフムの猛攻を捌ききれていた。

このまま延々と続けろと言われれば無理があつたが、それでも今こ

の瞬間、俺はまだ自力で生き残っていた。

それはきつと、否が応でも積み重ねざるを得なかった経験のお陰だろう。

その経験こそがこいつらを上回っている唯一のものであることは確かだったからだ。

不意に、一撃一撃に、かつてのスカサハの一撃を見る。

あの光の速さとも思われた朱色の槍が、悍ましい色をしたラフムの腕と重なって見えて、しかしそのお陰で軌道が見えた。

無理に受け流したせいで腕が痺れを覚える、が、それでも構わず礼装を握り直す。

この程度で怯んでは、笑われる。

そう思った、だからこそ恐れず一歩踏み込めた。

そのかつてのガウエインすら思い出させる硬質な皮膚に、どうにか傷を付けようとは思わない、俺が倒す必要はないからだ。

極度に接近した俺に第二撃が降りかかる、それをギリギリで躲せば、直後に刀がラフムのその、大きく開けられた口へと突き立った。

ドズリ、と鈍い音が響き渡る、今の今まで動いていたせいかビクビクと動いているその身体を蹴り倒して刀を引き抜けば即座にそれは泥へと変わり、その後ろからラフムが飛び出した。

反射的に刀を突き立てる、バキリと刀が折れて、ラフムがニヤリと笑う。

瞬間、右腕が切り落とされた。

焼けたような痛みが駆け抜ける、直後にライダーさんの鎖がそいつに巻き付き宙へと投げた。

それを見ること無く、泥を蹴りつける。

血はとめどなく溢れていた、だがそれでも関係はない。

まだ死んでない。

そう思い礼装を起動して、瞬間カーミラが駄目！ と叫ぶ。

ラフムの笑い声が、いやに近くで聞こえた。

ドズリ、と鈍い音が響き渡る、今の今まで動いていたせいかビクビクと動いているその身体を無視して礼装を起動した。

落ち着け、と己に言い聞かせる。  
攻めるな、守れ、躍起になるな。

即座に展開された銃を幾度も撃ち放つ、ダメージにならずともほんの少しの動きさえ止めれば直後にそいつは巻き上げられて投げられた。

先程のようにそれを見ること無く、思いっきり横に飛び込んだ。

刹那、ラフムの二本の腕が、泥へと叩きつけられる。

バシヤリとどす黒いそれが大きく跳ねる、視界が遮られて、これはまずいと更に下がれば同時に背後を掠めるように薙刀が振り下ろされた。

焰を纏い、空を溶かすような一撃が真後ろのラフムを叩き斬る。

それに動揺しかけた俺に巴御前は前、集中！ と叫び矢を射った。

音すら置いていくような速さで数本の矢が身体を掠めて通り抜ける、直後に跳ねた泥の先にいたラフムへと突き刺さりその身体を激しく燃やした。

苦悶の声をあげたそれに刀を突き刺し仕留め、その身体が溶け切る前に放り投げる。

宙でバシヤリと泥へと化したそれは一瞬数体のラフムの視界を遮って——しかし迷わず放たれた一撃が脇腹を抉り飛ばした。

叫びを上げる、痛みを誤魔化すように限界まで叫んで礼装を振るうと同時に、視界が真っ黒に染まった。

苦悶の声をあげたそれに刀を突き刺し仕留め、その身体が溶け切る前に放り投げる。

あいつら視界を共有でもしてんのか……!?

そう思いながら全力で下がる、同時に伸ばされたその軌道を逸せば小太郎と背中があった。

短く、大丈夫ですかと、問われ、それにまだ平気と返す。

まだ、まだ大丈夫。

それを聞いた小太郎は良かった、と言ってから目の前のラフムの首を振り切って、直後に泥の下から出てきたラフムに叩きつけられた。

思わず彼の名前を叫び、振り落とされた一撃を逸らそうとして、横

合いから腕ごと引きちぎられる。

目の前を自分の腕だった肉塊が回転するようになり過ぎ、直後に目の前で血しぶきが派手に散った。

——意識を、切り替える。

悲しむ暇も、シヨックを受けている余裕も今はない。

グルリと半回転して、もう一度きたラフムを躲す、痛みを噛み殺すように奥歯を噛み締めながらその口へと刀を突き刺そうとして弾き上げられた。

眼前を二体のラフムが支配して、その口が嫌らしく歪んだ瞬間勢いよく鎖に巻きつかれ、引っ張られた。

ライダーさんに抱きしめられる、早く治療を、と悲鳴をあげるように言った彼女を、死角から現れたラフムが、俺ごと突き刺した。

それを聞いた小太郎は良かった、と言つてから目の前のラフムへ飛びかかろうとして、それを無理やり止める。

襟を引っ張りこちらへ引き寄せれば、彼は何を、と顔を歪めたが、直後に泥から飛び出したラフムを見て、助かりました、と言いながら俺を掴んで宙へと跳んだ。

直後、真下で二体のラフムが交差するように獲物を振り下ろす、その瞬間を狙うように、小太郎の手から巨大な手裏剣が放たれた。

ズバン、と抵抗なく身体を真っ二つに切り裂きその横に着地すれば、その手裏剣は軽い煙とともに姿を消した。

あれも忍法なのか……そう思いながらも意識は目の前からそらさない。

ケタケタと、如何にも余裕そうに、新たな玩具を見つけたようにラフムが地を蹴った。

その動き自体は、いつか戦ったエジソンと似た読みやすい動きだった。

ラフムは無限とも思えるほどいたが、それぞれに個性とでも言うべきものがあるようだ——そう、ちょうど俺たち人間のよう。

単調な一撃が頬を掠める、俺の眼はいい加減その速さに慣れてきていた。

身体は若干遅れてついてくるが、無理やり礼装を重ねがけしてカバーする。

少しだけできた隙を庇うように他のラフムが腕を振るう、それを緊急回避で躲すと同時にラフムの頭を両手で掴んだ。

瞬間、跳躍。

他のラフムの一撃を躲そうと勢いよく、自動的に跳んだ俺の身体はラフムを連れてきて、思いつきりそいつを投げ飛ばした。

すかさず幾十もの刀が飛来する、一瞬にして串刺しにされたそいつは真上で溶けて、かぶる寸前でライダーさんが天馬と共に俺の身体を抱えて飛んだ。

直後、その更に真上から、黒い闇が降ってきて、強烈な一撃——いや、多撃が全身を隈なく潰した。

すかさず幾十もの刀が飛来する、一瞬にして串刺しにされたそいつは真上で溶けて、かぶる寸前でライダーさんが天馬と共に俺の身体を抱えて飛んだ。

直後、令呪を切る。

焼けるような感覚が手の甲を駆け抜けて、同時にライダーさんが俺を投げ飛ばしてから光と化した。

軽い衝撃とともに小太郎に受け止められる、刹那、真上で激しい衝突音が響き渡った。

黒い闇と思われたそれは、何百にも重なったラフムだったのだ。

一体一体は軽々と蒸発させられても、あれだけ重なればライダーさんの火力が間に合わない。

故に、迷うこと無く令呪を切ろうとして、足を、掴まれた。

集中する間もなく引きずり込まれる、それに気づいた小太郎が足元に手裏剣をぶち込もうとして弾き飛ばされた。

泥が身体中へと纏わりついて、染み込んでいく。

直後、胸の中心に鋭い衝撃が走った。

すかさず幾十もの刀が飛来する、一瞬にして串刺しにされたそいつは真上で溶けて、かぶる寸前でライダーさんが天馬と共に俺の身体を抱えて飛んだ。



——令呪を、二画重ねて命ず！ ぶちのめせ、ライダーさん！

叫ぶと同時に投げられて、次はカーミラに受け止められる。

助かったと叫びながら飛び退いて、展開し直した銃を真下へ撃ち続けながら駆け抜けた。

飛び出た腕が数発の銃に弾かれて、それごと身体をカーミラの一撃が叩き殺す。

上空で、流星が闇と衝突し、全てを磨り潰した後に力なく宙へと漂った。

天馬が血まみれで落ちていき、ライダーさんが受け身も取れずに落ちていく。

そこを巴御前が受け止める、けれどもライダーさんは意識を飛ばしているようだった。

大量のラフムが二人に襲いかかる、それを援護するように礼装を展開するが、しかし俺程度では意味をなさない。

そちらに意識を割いたカーミラが俺のカバーに入る、小太郎は間に合わない、鈴鹿が操作し飛んだ刀が途中で他のラフムに止められる。

迷っている暇はなかった、残った令呪を切るが、しかしもう、間に合わない。

二人の姿はラフムへ飲まれ、直後に投げ飛ばされた。

ふわりと宙を舞う、泥を滑るように転がればカーミラがラフムに飲み込まれて消える。

こちらへ伸ばした腕だけがボトリと落ちて、光と消えていくのを見ながらそれでも泥を蹴りつけた。

止まるわけにはいかない、切り替えろ、切り替えろ。

そう思うがしかし思考は止まりそうになる、小太郎が俺を見ながら何かを叫んだ、聞き取れずとも鋭く横に飛び、しかし足元から出てきた腕が俺を掴んだ。

ラフムの連撃が、俺の身体を磨り潰す。

大量のラフムが二人に襲いかかる、クソツタレがと叫びながら令呪を切った。

ライダーさんが目を覚ましてもう、間に合わない。

だから——焼き尽くせ！ 巴御前!!

刹那、太陽が顕現する。

ノウマク・サンマンダ・バザラガン・カン  
滾る私の想いの一矢!!

圧倒的な熱を用い広がった爆炎が、津波のような勢いで襲いかかったラフム共を一瞬にして灰へと化し、彼女は鋭く下がった。

同時に降り掛かってきたラフムを薙刀で叩き斬る彼女からライダーさんを受け取り回復のスクロールを使用する。

数秒の時を持って彼女は目を覚ました、それに良かったと呟こうとしたその瞬間、ドン、と突き飛ばされた。

他の誰でもない、ライダーさんに。

何を、と思う前にその理由は目の前で起こった。

俺を突き飛ばしたライダーさんが、ラフムの群れに飲み込まれて消えていく。

一瞬の油断が命取りだと分かっているながら、ほんの少し、気を抜いてしまった。

その結果がこれだ、けれども、後悔している時間はない。

間髪入れず襲いかかってきたラフムの一撃を受け流す、ようやくこいつらの攻撃の上手い受け流し方が分かってきた。

第二撃もすかさず流し、だめになった刀を捨てながら赤い短刀を口のような頭へ押し刺し捻じり飛ばす。

直後、ラフムの群れが踏み込んできた。

俺を守るように刀の雨が降る、それでもやつらは止まらない、が、猶予はできる。

そしてその猶予を以て、巨大な鋼鉄の処女は顕現した。

ばかりとその腹を開き、ラフムを飲み込み刺し殺し——直後にグッと視界が動き、掠めるように一撃が泥へと突き刺さる。

カーミラ！ 助かった。

そう言うが彼女は気にもとめず、頑張りなさい、足は止めないで、前を見て、と言う。

それに頷き短刀を構え、また一撃を受け流すと同時、バギリ、と不快な音が響く。

カーミラの宝具が、砕かれて、ラフムの大軍勢が雄叫びを上げる。そのあまりの叫声に顔をしかめると同時、カーミラが足を掴まれて、それを認識した直後、真上からの衝撃が意識を刈り取った。

同時に降り掛かってきたラフムを薙刀で叩き斬る彼女からライダーさんを受け取り回復のスクロールを使用しながら駆け抜ける。

少しの時間を以て、目を開いた彼女に、良かったと思いつつも足は止めず、グツと踏み込み大きく跳んだ。

瞬間、衝撃音。

真後ろで巨大なラフムの軍勢が泥へとぶつかり、それから不機嫌そうに俺たちを見た。

けれども不安はない、俺の隣にはライダーさんがいる。

彼女が俺の腰を掴んで勢いよく泥を蹴りつける、同時、ラフムの軍勢は飛び込んできた。

焼き増しのようにカーミラの宝具が顕現する、けれどもそれに合わせるように励振火薬の入った袋をそのまま、ありったけ投げつけた。

瞬間、ラフムの大軍勢が押し込められ、串刺され、逃げ場のないそこで巻き起こった大爆発にその身を塵にする。

だが、油断はしない、気は抜かない。

ライダーさんの手から離れて直ぐに短刀を引き抜き、直感のままに背後へ振るう。

激しい衝撃が右腕を貫いて、それでも背後の一撃から身を守り、第二撃が来る前に釘剣が頭を貫いた。

姿が泥と化して溶けていく、これだけ殺してもやはり数は減らない、まだかと上を見上げれば、ケツアルコアトルが空へとその身を投げた。

何よりも熱い、全てを消し飛ばす太陽風がティアマトの、その足元へと吹き注ぐ。

瞬間周りの泥が蒸発して飛んでいく、流石にラフムもアレが一番やばいと思ったのか飛び出そうとして、そこを叩き潰す。

行かせるものかよ、ここにくたばってろクソどもが。

ここが正念場だ、彼女がこの泥を全て蒸発させるまでが勝負所。

そう思ったが、しかしそこまで覚悟を決める必要はなかった。  
飛来してきた翼竜たちが俺たちを迎えに来る。

えっ、もう大丈夫なの？

そう思いながらも乗り込み、空へと浮き上がれば瞬間的に足元のケイオスタイドは蒸発していった。

ケツアルコアトルの切り札とも言える、その宝具は俺達の想像を遥かに超えるほど強力なものだったということだ。

視界に入る泥の全てが、一瞬で灼き払われていく。

これが、神霊の全力つてやつか……とんでもねえな……

ホッと息を吐きながら、それでも誰も死なない未来を勝ち取れて一先ず良かったと、思う。

そう、思ってから、しかし目を見開いた。

ティアマトの、足元から、ケイオスタイドが、発生している!?

バツと勢いよくケツアルコアトルを見る、彼女もそれに気づいたのか、収めかけていた宝具を再度発現した。

その彼女へと向かって、ラフムの大群がやってくる。

迷うことはなかった、ただありつただけの魔力を注ぎ込んでカーミラの名を叫ぶ。

瞬間、幻想の鉄処女は中空に現れる。

自重で落下するそれは多くのラフムを叩きのめし、また猛然と進んできたラフムのその尽くを閉じ込めた。

それを見て、ふとファラリスの雄牛という刑罰を思い出す。

真鍮で出来た牛の像の中に人を入れ、真鍮が黄金色になるまで炙り殺すとかいうイカれた刑罰である。

まあ今日の前に在るのは牛ではなく鉄処女では在るが、大きな差は無いだろう。

下手な炎よりもずっと火力の高い太陽風がケイオスタイドを飛ばすついでに、急速に、そして容赦なくその内部の熱を上げて全てを炙る。

その火力についに耐えきれなくなり幻想の鉄処女が壊れた時、その中からは大量の泥しか出てこなかった。

それを見ながらケツアルコアトルが笑って叫ぶ。

良いわね！ とつても良い！ 貴方達が守ってくれるなら、私もそれに応えましょう！ 意地でもこれは止めないわ！ 私が燃え尽きるか、エレシユキガルの準備ができるか、文字通りの泥試合デース！ と、元気よく、絶望なんて微塵も感じさせない表情で、そう言い切り、続けて言葉を続け、しかしティアマトが大きく叫んだその瞬間、言葉を止めた。

丸一日、勝負を長引かせてあげ——なんですって？ と、酷く焦りを帯びた顔で、即座に宝具を停止し緩やかに立香君の隣に降り立った。

どうした——と、そう聞く前に彼女はアイツ、とつてもタフかつルール違反の悪役デース！ まともによつては勝ち目がありません！ と言った。

そのくらい、言われずとも分かっている、だからこそケツアルコアトルはその身を焼き尽くすつもりであの宝具を展開したのでは？ そう聞けば彼女は、いえ、あれでは駄目なのデース、と悔しそうに言葉を切る。

それを聞いてイシユタルが、ちようど良いわ、と言った。

どちらにせよ、貴方が燃え尽きるまで太陽になっているところなんか黙ってみていられないもの、ここは私の奥の手で——と、そう言いかけた彼女に、ケツアルコアトルはそれが良くないの、と言ってから、言葉を続けた。

アイツ、飛べるわよ、と。

——え、はあ？

思わずそう言つて、その気持を代弁するようにイシユタルが嘘よ！ と叫んだ。

ティアマト神は地の女神！ 決して天には近づかない！ そう続けて言うイシユタルに、しかしケツアルコアトルは笑った。

ええ、その通り、けれども、これは間違いのような事実、だから、ね、立香？ と彼女は不意に立香君の名前を呼んだ。

へ？ と呆然したような彼を、彼女はギュツと抱きしめ頬にキスを

する。

いや何やってんだ？ そう思ったのは俺以上に立香君だろう、真っ赤な顔をして何を!? と言うがそれを意に介さずケツアルコアトルは元気を貰いました、とエへへと笑い、それから俺を見た。

アナタも分かっているとは思いますが、その在り方はいずれ破綻するべき在り方。

それは誰しもが耐えられるものでもなければ、受け入れられるものではない。

否、受け入れるべきではないものだった。

それでも貴方はその全てを飲み込み背負ってきた、私はそれを矯正すると言いましたが、それは撤回しましょう。

私も一柱の神、この短い時間でも、ちゃんと見続ければ理解しました。

貴方はきつと、現代の英雄なのでしよう。

本来であれば、平和かつ穏やかな生活に埋もれ、日を浴びることは無かったはずの素質、器量。

それがその旅で見いだされ、磨かれた。

それを私は善しとはしません、しかし認めましょう。

他の誰かが何を言おうとも、この神が保証私します、ですからどうか、道は誤らぬよう。

できれば私の愛しの立香君と共に、光ある道を歩き続けてください。

では、また。

いつの日か会いましょう。

彼女はそう言って、拳を突き出した。

それに何も言わず、右の拳を合わせる。

俺を英雄とか目ン玉節穴か？ とは思ったが彼女は神の名に懸けてそう言ったのだ。

であればその称賛は素直に受け取るべきだ。

後は任せて、そう言えば彼女はええ、よろしくね、と言ってからとっておきの空中技でノックアウトしてきマース！ と飛び出し叫ぶ。

メソポタミアの神、何するものぞ！ 我ら南米の地下冥界！ 多くの生命を絶滅させた大衝突の力、見せてくれる！

燃えろ闘魂！ 炎、神をも灼き尽くせ——！！

同時、顕現した、神々しくも恐ろしい火の鳥は、音を超え、光の速さでその翼へ変質しようとした巨大な角へと飛翔した。

瞬間、爆炎、爆風。

隕石でも落ちてきたかのような威力を内包したそれは全ての視界を爆炎で支配して、強烈な大爆発を巻き起こし——そして、ティアマトはその中から悠然と姿を現した。

多少なりとも後退はしたが、直ぐにでも地を鳴動させ、その歩みを進め始める。

——よろしくね、と言われた言葉が蘇る。

躊躇うことはなかった、ただ只管に立香君にジグラツトへ戻れ！

と叫び、翼竜とともにティアマトへと飛び込んだ。

ドクターの駄目だ、逃げろ！ と激怒したような声に、ごめん、任せた、とだけ言つて通信機を投げ捨てる。

それを見ながら、ああ、勢いでやつちまったな、と思つたが後悔はしなかつた。

きつと俺はここで死ぬ、繰り返せることもなく、きつと本当に死ぬ。不思議とそう思えた、そしてその気持ちをどこか安らいだ気持ちで受け止めていれば肩を掴まれた。

振り返ればカーミラがいて、何を考えているの！ と非難するが、それでも力強く笑う。

立香君を、死なせる訳にはいかないし——それに、足止めは絶対に必要だ。

別に自暴自棄になった訳じゃないよ、これはそうすべきだったからそうした、それだけだ。

それに、なんだかんだ皆着いてきてくれたじゃんか。

そう言いながら、カーミラ、ライダーさん、鈴鹿、それからイシュタルに小太郎と巴御前を見る。

俺なんかと一緒に来ていいの？ そうイシュタルに聞けばあつた

りまえでしよ、と彼女は言う。

貴方の最期を見届けて、それからきつちり魂回収してあげる、そうしたら貴方はもう、私の所有物じゃない？と。

いや欲が強すぎる、ブレねえな、と笑ってから後ろの二人に、マスターはギルガメッシュユ王だけど、良いの？と問えば彼らは貴方のサポートにつくと、かの王は仰つしやりましたからと言った。

この命は既に、貴方と共に、どこまでも行きましよう、と。

そうか、と一言だけ返し、続けて、じゃあ悪いけど、一緒に一晩明けた後に、死んでくれ。

そう言った瞬間バチン、と頬に衝撃が走った、何が――？　そう思えば目の前にライダーさんがいて、いいえ、死なせません、と言う。

貴方だけでも生かして返します、絶対に、何があつても、死ぬことだけは許しません、と続けた彼女の後ろから、鈴鹿が、そもそも貴方が生きることを諦めるだなんて、有り得ないでしょ、と分かったように笑う。

それから深く、大きくカーミラはため息を吐き、それから私も、私の全てを賭けて守るわよ、当然でしょ、と横を見ながら言った。

それがなんだかおかしく、嬉しくて。

堪えた激情が目の縁から少しだけ、本当に少しだけ、零れ落ちた。ティアマトへと流星が流れ落ちる、ラフムを蹴散らしながら衝突し、しかし微塵も勢いを殺せないやつを見ながら巴御前が弓を引いた。

直後、焰が空を駆ける、幾本もの焰の筋を作りながら飛来しラフムを焼き殺し、出来た穴に刀の嵐が飛び込み弾かれる。

同時、光が落ちた、何よりも美しく輝く閃光が尽くラフムを撃墜し、ティアマトすら飲み込まんとする巨大な幻想の鉄処女が降臨し、しかし破られる。

だが作り上げられたラフムの穴へ焰を纏う暗器が乱れ飛び、やはり効果は成さない。

目の前にあるのは間違いなく絶望だった、だが諦めることはなかった。



目に見えるダメージにはならずとも、ほんの少しでも歩みを遅くできれば良い。

事実ティアマトは時折歩みを止めかけることすらあった、それを何度も積み重ねる、何度も何度も何度でも。

ありつただけの礼装を展開する、己の限界なんて思いつきり無視して獣も武器も、銃器も機械も出し尽くす。

何もかもを出し尽くす、知恵も力も、文字通り全て出し尽くして抵抗を図る。

だがその抵抗も徐々に、しかし目に見える形で削がれてなくなっていく。

翼竜は既に落ちていた、汚染が強まる泥の上に立ち、戦っていた俺達の中で次に貫かれたのは小太郎だった。

その一身ごとラフムの大軍勢ごと燃やし尽くしながらティアマトへと踏み込みその歩みをほんの一瞬、瞬き程度の間だけ押し止めてその身体を塵へと化した。

それを見届けながら叫びを上げる、限界まで魔力を回しながらもう一度礼装を展開しようとして、ふと、ラフムの一撃が死角から、差し込まれるように現れた。

躲せない。

そう思った次の瞬間、目の前で鮮血が飛び跳ねた。

だが、それは俺ではなかった。

紫の長髪を優美に揺らす、相棒——ライダーさん。

彼女は刺し貫かれながらもラフムを仕留め、ゴボリと血を吐いた。

応急処置をかけようとして、止められる。

魔力は他に回せ、と叫ぶように彼女は言っ、その言葉に直ぐに動けなかった。

光と化していく彼女を見て、自分の時間が一瞬止まってしまう。

鈴鹿の叫びにハツと前を見れば焼かれようが、閉じ込め串刺されようが止まらない、ラフムの軍勢が飛んできて——そしてその全てが、突如現れた大蛇の大群に絡め取られて落ちた。

この蛇——まさか。

そう思い下げていた視線を上げる、そうすればそこには、魔獣の女神：ゴルゴーンがいた。

死のうが何をしようが、許すことは出来ないその姿を前にして、しかし俺は何も言わなかった。

否、言葉を交わさずとも、見ただけで解かった。

彼女はメドウーサー<sup>ゴルゴーン</sup>であつてもゴルゴーンではない。

間違いない、彼女はアナだ。

理屈なんて理解りはしないが、しかし彼女たちはその霊基、霊核を融合させたのだ。

そうだろ、とえば彼女は何で分かっちゃうんですか、と呆れたように笑った。

何でって言われもな……前にも言ったが、お前たち似てるんだつて。

見た目云々だけじゃない、雰囲気とか、そういう……なんだろう、上手く言葉に出来ないけど、感じ取れるものが、似てるんだ。

来るのが遅すぎ、とは言いたいけど、それでも有難う、助かった、と言えば彼女はもう一度笑い、それからその巨大な、ティアマトにも劣らぬ体躯でティアマト神へと対峙する。

そこから行われたのは壮絶な戦いだつた。

光が降り注ぎ、焰が走り、金属音が幾度も響き渡る。

無尽蔵に現れる大蛇が、同じく無限に湧き続けるラフムを食い殺し、また殺されながらも争い合う。

そしてそのど真ん中でアナはティアマト神へと猛然とぶつかり、闇を凝集したような光を放つ。

その一撃はティアマト神の顔に強烈に叩きつけられて、そしてようやくその歩みを止めた。

そこまでしてようやく、ティアマト神はアナを認識したとでも言うように、赫灼の輝きを強く放つ。

瞬間、爆音。

アナの片腕が消し飛ばされる、それでも彼女はその巨大な尾を絡ませ地に叩きつけようとして——しかし、鋭い爪のように、幾つもの軌

跡を残した輝きがそれを鋭く斬り飛ばした。

彼女の絶叫が響く、だが、それでもアナはまだ！ と叫び魔力と急激に練り上げた。

—— 宝具の展開、だが、間に合わない。

三度放たれた輝きが、彼女の胸を、消し飛ばす。

グラリと彼女の身体が傾いた、もはや叫びすらあげることのなかった彼女は力なく、道を開けるように横へと倒れ伏した。

それを見て、ようやく走り出す。

あの時駆けつけられなかった時のように、しかし駆け寄り、ごめんとありがとうを、絞り出すように言う。

そうすれば彼女は弱々しく、私こそ、力になれませんでした、ごめんなさい、と言いつつ、しかしただけで、と言葉を続けた。

私では——ゴル<sup>私</sup>ゴーンとアナでは駄目<sup>達</sup>でした、だけど、メド<sup>私</sup>ウーサ<sup>達</sup>ならどうでしょう、と。

それに、いや、と首を振る。

ライダーさんはもう消えた、俺を守って、その姿を消した。

強く手を握りながら、彼女の今にも閉じてしまいそうな瞳を見ながら言えば、彼女はいいえ、とそれを否定した。

メド<sup>私</sup>ウーサはまだ、います、残滓であれども、しかし確実にまだ、ここにいます。

そう断言する彼女に、たととしても、どうしろってんだと荒っぽく返す。

呼ぶって、どうやってだよ。

そう言う俺を見て、彼女は笑う。

貴方は、魔術師でしょう。

サーヴァントの呼び方を、忘れたんですか？

それを聞き、ようやく英霊召喚のことなのだと思います、だがそれに気づいてもやはり無駄だと、そう思った。

よしんば呼べたところで俺とライダーさんじゃあれは止められない、それはもう、ついさつき証明したばかりだ。

悲鳴のようにそう言った、その周りでは、激しく刀が飛び交い、焰

が散っている。

だが、それを聞いた上でおも、彼女は口を開いた。

一際力強く、俺を嗜めるように。

だから、”私達”と言っているんです。

私一人では無理、私達二人でも無理だった——なら、三人なら？

周りにあつた全ての神性すら取り込み化け物と化したゴルゴーン、完全なる女神として顕現した私<sup>アナ</sup>、そしてその狭間にいる、どちらの要素も兼ね備えたメドゥーサ。

大丈夫、彼女はまだ、此処にいます。

残った力を振り絞り、貴方が名前を呼んでくれるのを待っています。

だから、お願い——彼女を、呼んでください、と。

その言葉に、静かにうなずいた。

刀が走り、ラフムが閉じ込められて落ちていく。

焰が走り、俺たちを囲むように光が落ちる。

それを頼もしく思いながらも、ポケットから小瓶を取り出した。

超人薬、というかの獅子顔の天才が作った薬を覚えているだろうか。

正直使えばどうなるのか分からなかったし、悪化なんてさせたら最悪だと思っていたから、使わずにいたその蓋を外して捨てる。

何故かと言えば、正直魔力がもう、すっからかんに近いのだ。

召喚できるほどない、だからこそ、これに全ての望みを託し、グツと流し込んだ。

瞬間、やってきたのは奇妙な不快感と激痛、味わったことの無いほどの吐き気、理性を食い破らんとばかりに暴れる獣性。

だが、それをドン！と力強く胸をたたいてねじ伏せる。

女神に英雄とまで言われたのだ、この程度に負けてたまるかよ。

そう強がりながら言葉を吐き出せば、それに負けたように不快感や痛みがすつと落ち込んだ。

次いでやってきたのは、溢れんばかりの魔力と体力で、負いまくっていた傷は、ほとんど塞がっていた。

流石天才、あの日取り上げたの持つておいて良かったぜ、そう思いながらグツと彼女へと近づいた。

思い出すのは、数時間前に聞いたギルガメツシュ王の声、言葉。

カーミラを召喚した際に教えられたその言葉をなぞるように、静かに言の葉を紡ぐ。

——素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

思い出すのは、かつてライダーさんを召喚したあの日のこと。

——降り立つ風には壁を、四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

彼女は親愛もくそもない、ああ召喚されてしまった……と言わんばかりの目を俺に向けて口を開いた。

——閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

”物好きな人ですね、生贄がお望みでしたら、どうぞ自由に扱ってください”と。

——繰り返すつどに五度。

何の感情も乗っていない、酷く冷たい声音だったのを覚えている。

——ただ、満たされる刻を破却する。

それを考えれば、随分と変わったものだ。

——告げる。

その冷たい態度は鳴りを潜め、暖かい言葉をかけてくれるようになった。

——汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

ふざけた冗談にも乗ってくれるようになった。

——聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

何も言わずとも、傍に来て、支えてくれるようになった。

——誓いを此処に。

だから、ライダーさん……

——我は常世総ての善と成る者。

いや、もうそう呼ぶのはやめよう。

——我は常世総ての悪を敷く者。

最初にそう呼んでいただけに、途中で変えるのは恥ずかしかった。

——汝三大の言霊を纏う七天、

でもそれも、もうやめよう、だから、だから！

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

来てくれ——メドゥーサーアアアアアアアア!!!

ギョルリと風が逆巻き、それに膨大な魔力が乗って神々しい光の帯が展開された。

同時に発生した激しい音が鼓膜を揺さぶる、それでも手を伸ばし、ただ、叫びを上げる。

刹那、急速に膨張した光は爆発し、全てを飲み込み——そして、一筋の閃光が走った。

かつてのアナが振るった際に見た、あの鎌の軌跡に似た何かが通り抜け、ティアマトの右角を斬り落とす。

激しい悲鳴が轟き、それに呆然とすれば未だ満ちた光の中から、声が聞こえた。

「私を呼ぶとは、物好きな人ですね——とは、言いません。だから、代わりにこう言いますよう」

「やつと名前で呼んでくれましたね、お陰で応えることが出来ました。今度こそ必ず、私が貴方を守ります」

そうして現れたのは、まるで光を纏っているかのような、真っ白く、美しい羽衣を羽織り、同じくらいの輝きを秘めた鎌を持つライダーさんだった。

A——A A A a a a a a a a a a A A A a a a a A A  
A——!!! という、歌声のような悲鳴が戦場に響き渡る。

そのティアマト神を守ろうとラフムが周りを飛び交い、そしてその全てが一瞬で石と化して墜落していった。

えっ、石化の魔眼……だよな？ と思えば振り返ればメドゥーサはその黄金の瞳を輝かせ、ふわりと笑う。

そんな彼女を見れば、自然と笑みがこぼれた。もう、絶望は微塵ほどにも感じていなかった。

そこにあるのはもう、眼が潰れるくらい明るい、暖かくて優しい希望だけだった。

ようやつとまともな反撃開始つてわけね、と鈴鹿が笑う、遅すぎじゃない？ とカーミラが苦言を呈すが、しかしその口元は少し上がっていた。

けれどもその言葉に、メドゥーサは静かに首を横に振るう。

いいえ、下手に希望を持たせる訳にもいきませんので言いますが、今の私でも、かのテイアマト神を討つことはできないでしょう。

なにせあちらは覚醒しつつある、”本物”の神、そもそのスペックが違いますし——まず、前提として私達だけでは勝てない、この時代の全てが協力しなければ勝てない相手だからです。

角を切り落とせたのすら、あのケツアルコアトルの尽力があつてこそのものですし、あの攻撃自体も私のおきのようなものでした。

とは言え別に諦めましょう、と言うつもりはありません。

私達は足止めができれば良いのですから——だから、そのために力を貸してくれませんか？ マスター、と彼女は言った。

その言葉で全てを察し、ただ一言、できるのか？ と問えば彼女はお任せください、とうなずいた。

十全に補充されるどころかその身から溢れんばかりの魔力を全て彼女に注ぎ込む、同時に彼女は飛び立った。

かつて——ゴルゴーンが俺たちと対峙した時、彼女はこう言った。

”既に姉もこの身へ取り込み複合神性と化した。”と、そう言ったのだ

それはつまり、いつか出会った女神ステンノ、女神エウリュアレを取り込んだということに他ならない。

そしてそのゴルゴーンは今や、アナと共にメドゥーサと混じり合っている。

つまるところ、今のメドゥーサはメドゥーサという一つの存在どころか、神話にもあるゴルゴーン三姉妹、その全てが集まった存在——言ってしまうえばスーパーメドゥーサさんだ。

さて、ここでメドゥーサだけでなく、女神ステンノ、女神エウリュアレの持つ、力の共通点を考えてみる。

否、考えるまでもない。

彼女らの持つ最も強力な力——それ即ち『停止』の力。

石化の魔眼然り、女神ステンノ、女神エウリュアレの宝具しかり、その真価は停止に在る。

ということとは必然的に、今のメドウーサの力、その真価はそれにある。

と、まあゴチャゴチャと並び立てたがつまり、俺の言いたかったこととしての——。

瞬間、溢れんばかりの魔力がそのままゴツソリと消し飛んで、神々しいとすら思える光が、世界を染め上げた。

ほんの数秒だけの支配、瞬きを数回しただけで収まったその光の後に残ったのは——動きを完全に止めずとも、しかし微動、と言っているほどの動きしかできなくなったティアマト神と、その周りで完全に石と化したラフムだった。

やるじゃない！ アナタ最高よ！ というイシユタルについていくように空を駆ける。

このスーパーメドウーサ、飛べるのだ。

それに皆してしがみつき、みるみると離れていくティアマト神を見る。

このペースで行けばやつがジグラットに着くのは後半日はかかるだろう。

それだけあればエレシユキガルもギリギリ間に合う……かもしれない。

間に合わなかつたらその時はその時だ、もう一度、命を捧げてでも止めてやる。

そう考えていれば、ジグラットには殊の外すぐ着いた。

まあ、あのイシユタルの速さについて行っていたのだから相当早いのは分かっていたのだが。

それでも時間にしてしまえば一時間程度といったところだろう、早すぎる。

流星にビビって引き笑いするレベルだ、しかしそんなことはおくび



にも出さずにジグラットへと降り立って、そのまま王座へと駆け込んだ。

そこにはあいも変わらずギルガメツシュ王が、余裕たっぷりに、笑みを浮かべながら腰掛けていた。

ハ、と彼が笑う。

随分と無茶をしたようだが——良く、やった。良くぞ戻ってきた。

お前たちの戦いを称賛しよう、見事であった。

まさか——本当にティアマトめを止めるとはな。

暫しの間、その身を休ませろ。

直ぐに酷使することになる——そう言いかけた彼に、しかし、と口を挟んだ。

休むわけにはいかない、ティアマトの動きは遅らせられたが、しかしラフムは未だに湧き続けている。

抵抗しなければ——そう言った俺に、それでもギルガメツシュ王は笑った。

いらぬ心配をするな、未だウルクは健在だ。

この時代の民、そして我の呼びかけに応えた英霊が押し留めている。

直ぐに落ちはしまい、安心せよ。

貴様らの使い所は此処ではない、それを自覚しろ。

そう言った彼に歯噛みする、だが事実として、俺達は満身創痍だった。

いくら超人薬でドーピングしたとは言え、一時的なものだ。

既に身体が変調をきたしている、その上メドゥーサ含め、全員が限界だ。

それを認め、了承する。

そうすれば彼は、一度カルデアのロマンとも顔を合わせておけ、と言ってから立香君が休んでいる場所を教えてください。

王座の直ぐ側だ、それに礼を言ってから足早に部屋へと向かう。

そつと扉を開ければ、そこにはたぐさんの寝具が並んでおり、その中で立香君達は気絶したように眠っていた。

その彼が外し、置いていた通信機を手に取りドクター、と呼びかける。

レスポンスは何よりも早かった、どうかしたかい!? と見慣れたウインドウが眼前へと展開されて、直後に彼は言葉を失った。

俺の姿を見て、ぼうぜんとしたように口を広げてから、涙を流す。

既に泣き腫らしたように赤くなっていったその優しげな瞳からポロボロと涙をこぼし、俺の名を呼んだ。

その姿に思わず笑い、それからいやごめん、生きてたわ、と例えば彼は良かった……と言葉を絞り出し、そして勢いよく画面の端へと押し寄せられた。

ダ・ヴィンチちゃんである、その大きな瞳をウルウルとさせながら君ねえ！ と叫ぶように言い、しかし言葉を止める。

あの俺の行動が、100%間違いではなかったことは確かだったからだ。

俺たちが抵抗したことで、結果的に立香君たちの撤退の安全性は急激に上がった。

だからこそ、言葉をつまらせ、しかしそれでも苦しうに言った。

二度と、二度と自分の命を自ら捨てるような真似だけはするな、許さない、君が死ぬなんて、私は許さないからな、と。

いつもとは違い、その弱々しくなった声に分かつてる、と返す。

それから、心配とか、色々させちゃって悪かった、気をつけるよ、と。そう言えば彼女らは気をつける、じゃなくて絶対守るんだ！ と

言った後に、一先ず今は休もうか、と言った。

こちらでも観測したデータを集計し終えた、ティアマト神がウルクに到達するまでは後7時間少しあると思われる。

それまでは、ゆっくりと、休んでくれ、とそう言い、それに素直に頷き、手近な寝具へ横たわる。

途端に張り詰めていた意識は解けていき、瞼はゆるりと閉じていった。

ズン、と都市を揺らさんばかりのあまりにも重く、鈍い衝撃が走り、全身を揺さぶる。

それでバツと目を覚ませば、そこには俺を呆然と見つめる立香君。こ、これ、夢……？　と言った立香君にいや現実、何やかんやで生き残った、とそう言えば彼は良かった、良かったああああ！　と涙を流した。

どれだけ自分が傷つこうとも、悲しい思いをしようとも、涙すら流さなくなつた彼は、しかし誰かのためには涙をこぼすのだ。

心配かけてごめん、と言つてから、取り敢えず出ようか、と上着を羽織りながら走り、一先ず王座に行くが、誰もいない。

頭を回す、この状況でギルガメツシュ王であれば恐らくは――。

そう思えば立香君は外へと飛び出した、それを追うように走れば着いたのはジググラットの頂上だった。

そこにはギルガメツシュ王がいて、その眼前には巨大な黄金の鎖に絡まれたティアマトがいた。

その光景に呆気にとられていれば、ギルガメツシュ王は目を覚ましたようだな、と言つた。

丸一日も寝れば流石に少しは休めたであろう、どうだ？　と彼が聞き、その言葉に頭を驚きで染められる。

一日!?　馬鹿な、それだけの間休んでいたとか、は？　起こしすらしなかったのかよドクターは!?　と思うがしかし、彼の満足そうな笑みを見て全てを察する。

俺たちは、休ませられたのだ、このギリギリの時間まで、少しでも回復をさせてもらったのだ。

見ればわかる、残っていたはずの牛若丸や、弁慶、レオニダス王に茨木童子まで、もういないから。

眼前の鎖に加え、彼らの尽力によって、今があるのだろう。

目の前の鎖が何なのか、俺には分からないがしかし、立香君は納得したようにそれを見据えている。

きっと、俺には知り得ぬ何かがあったのだろう、後でじっくり聞こう、そう思いながらありがとうございました、とそれから充分休めました。

と返す。

それにギルガメツシユはそれは重畳、と言う。

では、この後は任せられるというものだ、と穏やかにティアマト神へと目を向ける。

見ての通り、ティアマト神は我らが目前、あと数歩こちらに踏み込めば全て灰燼と化すだろう。

だが——ハ、その一步があまりに重い。

わずか数刻の束縛だったが、しかし気の遠くなるような永劫だった。

——さらばだ、天の遺児よ。

以前の貴様に勝るとも劣らない仕事——見事であった。

天の鎖はついに、創生の神の膂力すら抑えきったのだ。

そう言い切った直後、その巨大な鎖は限界を迎え、バギンと大きな亀裂を入れて砕け落ち、同時にエレシユガルの声が響いた。

ウルクの地下と冥界のとの相転移、完了したわ！ 後は穴を、開けるだけ——！ と。

しかしそれと同時に、真つ赤な閃光は光り輝いた。

それは間違いなく立香君を狙っていて、そして誰よりも早く動いたのはギルガメツシユ王だった。

だが、それとほぼ同時に俺の身体は動いていた。

見たことがある光だった、だからこそかの王と同じくらい早く動いて、その彼を弾こうと全力で飛び込み——戯け！

ドン、と力強く弾かれた、刹那、その光はギルガメツシユ王の胸をぶち抜き通り過ぎる。

彼はゴボリと血を吐き出して、それでも俺を見た。

本当に、度し難いほどの愚か者だ、だが、その忠義は見事であった。何、気にするでない、ほんの致命傷だ。

それより貴様は、貴様らは無事であるな？ なら良し、と言ってから彼は、ここからが本番だと叫び、イシユタルの名を高らかに呼んだ。

それに呼応して、ようやっとね！ と直上からもうすっかり聞き慣れた声が響く。

準備はもうできてるけど——アナタはそれで良いの？ とギルガ

メツシユ王に問いかけたが、彼は無論だ、と返した。

何を悲しむことがあるろう、我は二度友を見送った、一度目は悲嘆の中、だが此度は違う。

その誇りある勇姿を、永遠にこの目に焼き付けたのだから、と。

それを聞き、彼女はそつちじゃないわよ、バカ、と呟き空へと舞い上がる。

ちよつとだけ悔しいわね、イシユタル——さ、アンニユイなのは終わり！

未練もろともふっ飛ばす——行くわよ！ 注文通り、容赦なくぶち抜いて上げる——！！

瞬間、莫大な光の奔流が、彼女を中心に渦巻きその大きさを膨らませる。

それを見ながら、彼は血を流しながらも口を開いた。

真なる神との訣別、ときたか。

我ながら勢いで、たわけた事を口にした。

であれば、我が残る訳にはいくまいよ。

良いか、良く聞け。

確かに、このウルクは滅びるであろう。

だがティアマト神と、この特異点の起点となる我が消え去れば、その結末は違う解釈となる。

滅びるのは飽くまでウルク第五王の治世のみというわけだ。

続く第六王の時代は健在だろう。

倒されなければならぬのは、ティアマトだけにあらず、この我も、この先には不要だったというわけだ。

唯一の懸念は死に方だけだったが——都合よく傷を負えたわ。

故に、礼を言うぞ、無論、これまでのこと、その全てにだ。

貴様らは異邦人であり、この時代にとつての異物であり、また余分なものであった。

しかし、その余分なものこそが、我らだけでは覆しようのない滅びに対しての切り札となりえた。

——時は今満ちた。

すべての決着は、貴様らの手に委ねるものとする。

そう言いながら彼は俺たちの後ろにいるサーヴァントへ目配せをした、直後グンと身体を引き寄せられて、ジグラットから鋭く離れる。駄目だ、と叫ぶが動きは止まらない。

ギルガメツシユ王が、俺たちを見て、優しく微笑んで。

そしてティアマト神は彼ごとジグラットを踏み込み——そして、超弩級の光が、空から落ちた。

離れたものの、その衝撃はその場にいた全てを吹き飛ばし、整えようとする態勢を軒並み崩す。

しかしメドゥーサがいる以上落下はしない、鈴鹿やカーミラ、巴御前にも助けられながら風を全身に受けていれば、はい、貴方達に冥界での浮遊権を許可します、という声が耳朶を打つ。

瞬間、支えられずとも、足を空を踏みしめた。

え、どういうこと——そう思いながらも階段を降りるように地の底へと降り立てば、良く来たわね！ と声をかけられた。

振り返ればそこには、いつか見たイシユタル——エレシユキガルがいて、立香君が嬉しそうに手を振り、それに彼女が優しく振り返す。

俺はと言えば何を言えば良いのかも分からず、ただ久しぶり、と言い、彼女もまた、そ、そうね！ と言ってから少しの沈黙が降り立った。

いやなんだこの恥ずかしさ!? そう思えばエレシユキガルはそれより、と言ってから指差し言った。

もう大丈夫よ、と。

それに従い視線を向ければそこにはティアマトがいて、その身体には幾つもの、強烈かつ強大な雷がほんの少しの隙も無く降り注いでいた。

冥界の防衛機構よ、私の許しもなく入ってきた生者は皆ああなり、死へと誘われる。

ああなればもう、勝ったも同然よ、と彼女は言っ、それを保証するようにドクターがあの一撃一撃が、イシユタルの宝具級だ……すごい、と呟いた。

それを嬉しそうに聞きながら、彼女はそういえばギルガメツシュ王は？　と言い、続けてもう最後のトドメ、始めちゃつていいのかしら？　とう。

それに一瞬言葉をつまらせながらも、大丈夫、お願い、と立香君が言い、なら始めるわ！　とエレシユキガルは元気よく一步踏み出した。

任せて、ギルガメツシュ王も、イシュタルも必要ないから！

この私だけで、決めてあげます——冥界のガルラ霊よ、立ち並ぶ腐敗の槍よ！

あれなる侵入者に我らが冥界の鉄槌を——総員、最大攻撃！！

瞬間、雷光が赤く美しく輝き、槍と化し、雨のようにティアマトを撃ち貫いた。

それを見て、満足そうにエレシユキガルがどう？　と言うがしかし、嫌な予感がざわついて止まらない。

まだだ、まだ、続けて！　思わずそう叫び、しかし言うのは遅すぎた。

ティアマトが大きく長く長く叫ぶ、同時、彼女の足元から泥——ケイオスタイドが波のように流れ出し、冥界を侵食し始めた。

同時、ドクターが悲鳴をあげるよう叫ぶ。

ティアマト神——ビーストⅡ、霊基反応更に膨張！　霊基の神代回歸、ジユラ紀まで進行！　霊基膨張インフレーション工程停止、魔力炉心、連続起動……冥界で受けた傷も修復——出るぞ！　あれが、本当のやつのだ！

刹那、ティアマトの叫びは地も空も割くように響き、同時にラフムを大量に排出し始めた。

エレシユキガルが嘘でしょ、と恐れたようにつぶやく。

それを聞いて、それでも前に出た。

——諦めるわけには、いかない。

メドゥーサ！　と叫ぶ、同時に彼女の眼が、全てを捉えた。

一瞬の硬直、同時に諦めるニヤー！　その青年を見習えそんな女神いー！　という随分と前に聞いた声が響いた。

久しぶりだな青年！　そしてよく此処までやった立香サン！　でももうひと踏ん張りよ！　特に貴女、さっさと続けて！　そう言うがしかしエレシユキガルは無理よ、と言った。

全然、全然効かないのよ、それに、冥界全体の出力も落ちてきている！　そう悔しそうに言うが、それでも！　やるしか無いの！　とジャーマンは言った。

あれでもティアマト神は今が一番弱い状態なの、此処で！　どうにかしないと！　人類終了どころ地球終了よ!?　あんな状態で外に出せば一日で世界は覆われちゃうんだから！

そう豪語した彼女を、メドウーサが肯定する。

間違いないでしょう、と言い、ドクターがだろうね、と言った。

それを聞いて、クソツタレがとつぶやく。

全て事実なのは、俺から見てもわかることだったからだ。

現にこの短時間で冥界はほとんど覆われた、ここで消滅させないと、世界は終わる。

そしてやつを外に出してしまえば、生きるものが他にいる、イコールそれを生み出したものであるティアマトは死なない、という理屈の逆説的復元によりもう倒せない。

だから、ここで止めるしか無い、無理だとしても、やるしかない。立香君がどいてください、と叫ぶ。

宝具で泥を消し飛ばす、と彼が契約しているセイバーの剣が振り上げられて、しかし振り下ろされるより先にそれは起こった。

禍々しく、全てを侵食していくケイオスタイドの、そのことごとくが、綺麗な花へと姿を変えていくのだ。

冥界中が花に包まれる、それを見て、ドクターがケイオスタイドの権能が、停止していく……これは、花が神の力を枯渇させているのか？　と言え、またも聞き慣れた声が轟いた。

いようし！　間に合ったああああ!!　という、いつになく熱くなった偉大な魔術師の声。

ダン！　と勢いよく降り立った彼は、発想が貧困だなあ、アーキマンと笑う。



命を生む海であれば、その生命を無害なものに使わせてしまえば良いんだよ、花の魔術師、その二つ名の面目躍如、というわけさ。

そう言って彼——マーリンは笑った。

再召喚——なわけがない、そもそも呼べる人間がない。

であれば、一体どうやってここに……？　そう思うと同時に、違和感を覚え、それに応えるように彼は言う。

単純な話だよ、私は本物、真正正銘のマーリンさ！

慌ててアヴァロンから走ってきたんだよ！　と。

——!!?

そこ抜け出せるもんなの!?　思わず言えば彼はびっくりしただろう！　だが今人理は残念ながら焼却され、真っ白になっている。

その状態であれば、妖精郷を使えば、こっそりね、とウインクをする。

何でもありだな……流石……

震えた声で呟けば、ボクはね、と彼は口を開く。

悲しい別れとか大嫌いなんだ、だから、ちよつと信条を曲げて幽閉塔から飛び出してきた。

無論——キミ達に会うために。

言つたら？　ボクはキミ達のファンなんだって、と。

その言葉に思わず笑みがこぼれ、しかし頭の冷静な部分がまだだ、と言った。

確かにマーリンの登場は予想だにしなかったことで、戦況を大きく変えるものだった。

だが、まだ足りない。

彼は強力かつ偉大な魔術師ではあるが、ティアマトを殺すその切り札にはなりえない。

そう思った俺の思考を、しかし彼は見透かしたのか、安心すると良い、と言いながら俺の頭をポンポンと叩いて言う。

キミ達は、此処に至るまで実に多くの手を出し尽くしてきた。

けれども、まだ足りない、そう思っているだろうし、そしてそれは間違いない事実だ。

我々はこのままでは負けるだろう、だがしかし！  
それはこのままでは、の話だ。

助っ人でもいるのかって？ ああ、勿論いるとも。

ではそんな助っ人は誰に呼ばれのか？ そう問われれば勿論、その  
答えはキミ達だ。

ギルガメツシユ王でもなく、魔術王の聖杯でもなく。

これまで苦しくても、辛くても、痛くても、耐え難くても。

その足を止めず、心を強く保ち、決して諦めること無く前へと歩ん  
できた、キミ達によって彼は呼び出され、そして彼は礼を返すため  
であれば、その冠位すら捨てると言ったよ。

それに敵は人類悪——即ちビースト。

始めから、彼がこの地に現れる条件は整っていた、これまでの全  
ての戦いは、その一つ一つに意味があったのさ。

——さあ！ 天を見上げるが良い、原初の海よ！ そこに、貴様の  
死神が立っているぞ！

そう叫んで締めたマーリンの言葉に習い、勢いよく上を見る。

イシユタルの渾身の一撃により砕かれたことで出来上がった崖に  
も似たそこを見て、驚愕に目を見開いた。

何も言えずにただ呆然と口を開けば、声が響いて渡る。

——晩鐘は、汝の名を指し示した。

刹那、真つ暗な光が走り、ティアマトの、もう片方の角翼が斬り落  
とされた。

ビーストⅡの霊基パターン、変化！

こ、これ、角翼が切断されたばかりか”死の概念”まで付加されて  
いるぞ!?

規模は変わらず膨大だが、これは通常のサーヴァントの霊基パター  
ン！

つまり、今ならビーストⅡは完全消滅させられる！

定番だが狙うのは頭部だ！

ドクターがそう叫び、それに了解、と返しながら真横に立つ立香君  
を見る。

そうすれば彼は同じタイミングで俺を見て、それから共に笑った。

——これがラストチャンスって訳だ、行けるよな？

——勿論、先輩こそ遅れないでくださいね

そう短く言葉を躲し腕を軽くぶつけ合い、共に叫んだ。

弱気になりかける自分たちを鼓舞するために。

本当に大丈夫なのかと、不安になる仲間のために。

強く強く、高らかに叫んだ。

——今まで俺たちを、信じてくれた人達に応えるために！

——あの災害を、ぶっ潰すぞ!!

良いでしょう、今回だけは特別です。

冥界の女主人、エレシユキガルが請い願う！

地上の勇者よ、あの魔竜に鉄槌を！

遙か未来まで続いた貴方達人間の手で、天と地に楔を穿つのです！

俺達の声に応えるようにエレシユキガルがそう叫ぶ、それと同時に自分の身体がまるで、自分のものでなくなつたような気さえた。

身体が軽い、力が漲ってくる、魔力が迸っている。

いける、これなら、倒せる。

そう思つて前を見る、そこには“死”を恐れたティアマトを守るようにラフムが壁のようになっていて、けれども無駄だと、そう思った。

すう、と息を吸う、直後、俺の後ろから一人、誰かが跳んだ。

否、誰かではない、見ずとも分かる。

——やれ、メドゥーサ！

瞬間、光が全てを満たし、ラフムの壁は一瞬にして瓦解した。

その先に見えるはティアマト——人類悪。

かの存在は必死になつて冥界から這い出ようと崖を登っていた。

それを見て、立香君が叫ぶ。

させない、絶対に、させるものか！ と。

同時に英霊達が地を蹴りつけて、しかしティアマトへとすぐにたどり着くことは出来なかつた。

飛行特化型、とでもいふべき異形のラフムが十一体、異質な魔力を

漂わせながらこちらを撃墜せんとばかりに飛んでくる。

それを見て、ドクターが気をつけて！　そいつら、一体一体が魔神柱の魔力を上回っている！　と言った。

此処まで来てまだそんなのが出てくんのかよ、と奥歯を噛む、がしかしそれを斬り捨てるような声が響いた。

なるほど、それは斬り甲斐がある。

角一本斬り砕いただけでは、この剣も錆びるといふものよ。

暗殺者の助けは、必要か？　という、絶大な安心感を与える声。そしてそれに、ノータイムで応えた。

ああ、頼む、と。

刹那、眼前にいた十一のラフム、その一体が無様に斬り崩された。

それから、少しだけトーンの高い声が耳朶を打つ。

これより我が銘、我が剣は汝らとの縁を繋ごう。

冠位の銘は原初の海への手向けとしたが、我が暗殺術に些かの衰えもなし。

契約者たちよ、告死の剣、存分に使うが良い——願わくば末永くな、と。

迫りくるラフムをメドゥーサの一撃が斬り捨てる、直後に迫ってきたもう二体のそれらを、刀の嵐が塞ぎ止める。

それすら潜り抜けようとしてきたラフムをカーミラが防いで、それらを縫うように火矢が飛ぶ。

魔神柱を上回る魔力と言えど、一体ずつであればそう相手取るのが難しい敵ではない。

だが複数で迫り、また時折降ってくるティアマトによる赤い閃光があると話は別だった。

近づけない、完全に足を止められて、ティアマトへと近づけない。やつは刻一刻と冥界を抜けようとしているにも関わらず。

焦燥感が身を焦がす、ヤバイヤバイヤバイ、という言葉が頭の中を埋め尽くしながらも、しかし冷静に判断を下す。

焦ってミスるのが一番ダメだと、分かっているからだだったが、その余裕も長くは続かない。

後十数分もあれば登りきってしまう、それまでに、間に合うか？  
そう自分に問いかけて、いや、無理だな、と思った。

なればこそ、今するべきことは決まっている。

息を吸い、回復していた魔力を注ぎ込む。

一瞬よりは長く、そして大きな穴を作り出す。

その為に——頼む！ メドゥーサ！ 巴御前！ 宝具開帳——！

瞬間、ラフムの動きが止まる。

全魔力を使い切って使用したあの時ほどでなくとも、強力な魔眼の光が降り注ぐ。

魔神柱さえも凌ぐ魔力量を誇るラフムの動きはそれでも、一瞬しか止められない。

だが、それだけで充分。

回避行動、防御態勢、それらに入るのを少しだけでも遅らせられればそれで良い。

爆炎の一矢は、それだけで全てをぶち抜き溶かす。

一体一体を倒しきれなくともそこに空間は出来上がる、直後、立香君を見た。

言うまでもない、行け、とそう思うより早く彼らは踏み出し抜ける。

それを援護するように白刃は飛び交い無理やりラフムを抑え、そうして暗殺の極みにまで辿り着いた一撃が、もう一体の首を撥ねて飛ばした。

その様子を見ながら、悪いけど、俺達の役目は取り敢えずこいつらを潰すこと、ティアマトは暫く立香君に任せようと思う、と言えば全員が静かに頷いた。

とは言え、ティアマトを気にすることをやめ、ラフムに専念するとなれば戦い方はガラリと変わる。

なにせこちらに飛んでくる閃光も、どうにかして足を止めないと攻撃を放つこともしなくて良くなるのだ。

ティアマトが放つ閃光にも似た光をラフムが放つ、それを弾き、逸し、躲して前へと進む。

初代の一撃がラフムを斬り砕く、メドゥーサの一撃がラフムを縦に

割る、カーミラの一撃がラフムを拘束し、それごと束ねられた刀の嵐が、焔を纏った一撃が焼き殺す。

立香君達の元へと飛び立とうとしたラフム目掛けて礼装を展開してめちやくちやに翼へ撃ち込んでいく。

そうしてほんの少しだけ態勢を崩したそれに、白刃が幾度も突き立って、それ毎飲み込むように一体のラフムが大きく口を開く。

人であれば幾人もを軽々と飲み込む勢いでそれは迫ってきて、しかしするりと音もなく、それは斬り碎かれた。

残り、四体。

考えるより先に魔力を回す、同時に極光は迸り全てを停めた。

刹那、剣は振るわれる、拷問器具はその口を開く、刀は降り注ぐ、焔は空を溶かす。

そうして残された一つの命を、メドゥーサの一撃が刈り取った。

ここで稼がれた時間はどれくらいだったのか、そう思うより先に見える。

ティアマトは未だ、冥界を出るには至っていない。

立香君達の猛攻が、ティアマトを冥界へと押し留めていた。

流星だ、そう思ってから宙を踏みしめ跳んで、それと全く同時のタイミングでマーリンが勢いよく落ちてきた。

その手を掴もうとして、しかし彼がボクは問題ない！ 行け！ と叫び俺たちに魔術をかける。

瞬間、加速。

元より万全以上に強化された身体が更にそのスペックを上げる。

うわこれ元の状態に戻ったときの揺り返しが怖すぎる、と思っただがそれでも今は最高のアシストだ。

ティアマトへと迫る、迫る、迫る。

止まることも、止められることもなく、ただ只管に前へと進み――直後、回復した令呪を切った。

手の甲の文様が、赤く美しく、少しだけの痛みを伴い光り輝く。

刹那、光が走る。

紫の髪を優雅に靡かせて、光をそのまま形にしたような鎌による一

撃がその巨大な足を刻み、削り飛ばし——それに重ねるように、研ぎ澄まされた極みの一撃が振るわれる。

音は無かった、ただそこにはかの巨大な神の、その脚が斬り落とされたという事実のみが作り上げられる。

同時、莫大な悲鳴が上がり、それでも力の限り掴まれた大地を、光が尽く砕き飛ばして、イシユタルがニヤリと笑う。

その姿を捉え、怨嗟にも似た、鼓膜をぶち破るほどの音量が劈き響き、ついにティアマトは冥界の底へと再び墜ちた。

直後、待つていましたと言わんばかりに紅の雷が、空を裂き、地を叩き割る。

それを見て、ここだ、と思った。

ここだ、ここしかない、決めるなら、今だ。

今この瞬間が、最もやつを仕留められるチャンス。

やれるか？ そう湧き上がってくる疑問を打ち消そうとして——

そうする前に極光が、何もかもを消し飛ばした。

見たことのある光だった。

イシユタルの輝きとも違う、エレシユキガルの手繰る稲妻とも違う、メドウーサの振るうそれとも違う。

神々しくも力強い、王の威光。

ほとんど確信したように上を見ればその人は映り込む。

金の短髪を風に揺らし、深く美しい紅の瞳をギラリと輝かせた、偉大なるウルクの王——英雄王・ギルガメッシュが、そこにいた。

——なあに、この程度の常識破り、許容範囲というものであろう？  
そう笑ったかの王は、ゆるりと墜ちたティアマトの前へと降り立った。

——ティアマト神よ。

ようやく、神の姿に立ち戻ったようだな。

我々と貴様には、分かり合えぬ摂理があった、それ故に、我も、ウルクの民も、憎しみは持たぬ。

貴様は産み、管理するもの。

我らは育ち、旅立つもの。

どれほどの愛情を注がれようとも、子は母の手から離れなければならん時が来る。

それが、今だ。

安心せよ、貴様の亡骸を辱めようとは思わぬ。

最早、我らの世界に土台は不要！ 死の国にて、今度こそ眠るが良  
い！

そう叫んだギルガメツシュ王に、ティアマトは大きく叫ぶ。

歌声のような、悲鳴のような、雄叫びのような、ありとあらゆる感情を凝縮させたような音が冥界中に響き渡った。

ギルガメツシュ王の隣に並ぶように宙を踏めば、立香君もまた同じように空に立つ。

そんな俺達を見て、彼は笑った。

決着の時はきた。

最期に我と共に戦う栄誉、真に許す！

神殺しの英雄譚、見事果たして見せるがいい！！

ありつたけの魔力を注ぎ込み、叫びを上げる。

宝具開帳——！

刹那、開放された極光と衝撃は、巨大な神のその全てを呑み込んだ。

果てしないほどの威力の衝撃に身体が空に浮く。

そのまま飛んで、ろくに受け身も取れずに冥界の上、ウルクの地に

尻もちをつけばドクターの声が響いた。

ピーストII 霊基崩壊、完全、確認……勝った、勝ったぞ！

この時代の特異点は、ついに消滅した！ 後は今まで通りの歴史に戻  
るだろう！ という、涙混じりの声。

その言葉を聞いて、ほつと息を吐く、次いで疲労の波が身体を飲み  
込みその場に倒れ込んだ。

ティアマトの出現により渦巻くように赤黒く染まっていた空が、  
戻っていく。

それをぼおつと見ながら全身から力を抜いていく。

もう頭を回すことさえ億劫だった、そんな俺をメドゥーサが持ち上げ  
頭を膝に乗せる。



正直なことを言えばめちやくちや恥ずかしかったが、力が入らない以上抵抗しようがない。

文句を言う気力もなくて、やめてくれ、という視線を送っていればそつと、彼女は傍にやってきた。

——巴御前。

それに気づいて直ぐに上半身を起こす、痛みが走るがそれでも力づくで起き上がれば、彼女はい、無理はしないでください、と言ったが大丈夫、と返して、それから有難う、と言った。

本当に、本当に世話になった。

散々助けてもらって、もう感謝の念しか無い、貴女のお陰で、俺はここまでこれた。

そう伝えれば彼女はふわりと笑う。

いいえ、どれだけの助力があつたにせよ、ここまで来れたのは貴方が頑張ったからでしょう。

決して折れること無く、戦ったからでしょう。

昨晚、ジグラットでもお伝えしたように、貴方に助けられたのは私達の方なのですから。

私にできる助力はここまですが、しかし貴方達には次がある、いいえ、次こそが本番でしょう。

長々とは言いません、故に、一言だけ。

成し遂げてくださいね、と。

それに勿論、と返せば、やはり彼女は笑い、そうしてその身を光に変えた。

光の残滓が空に漂って、ふわふわと消えていく。

その様を眺めていれば俺達の近くにマーリンが降り立った。

無事で良かった、という前に彼は静かにそれ——聖杯をことりと足元に置く。

あの瞬間、ティアマトから飛んできてね、危うく落とすところだったよ、なんて言って笑う彼に流石マーリン！ と立香君が言ったが、それにマーリンが言葉を返すことは出来なかった。

ぼん、と彼の肩に手が置かれる。

後ろには、女神ケツアルコアトルがいた。

パツと見ただけでも満身創痍、それでも彼女は満面の笑みで、マルドゥークの斧の、あれ、アナタの策でしょ？　ぶつころしマース！と叫んだ彼女がマーリンの身体に組み付いて、関節技を決めていく。なぜキミが!?　いやそれよりも痛すぎる！　な、何だこれ何だこれー!?　と悲鳴をあげるマーリン。

それを見ながらジャガーマンが、フフン、私がククルンを拾ってきたのです！　と立香君に自慢していた。

ぶつちやけ色んな意味で恐ろしい光景だったがしかし、それすら笑えた。

なにせ俺たちはやり遂げたのだ、ついに、七つ目の特異点の修復を、成し遂げた。

その達成感に身を委ねていれば、彼女らの身体が光に変わって透けていく。

それに気づいてジャガーマンが、もしや神霊としての格が上がるとか!?　と嬉しそうに言うがそんなわけがない。

強制退去だ、この時代は修正されたのだから、当然である。

同じことを思ったのかケツアルコアトルがマーリンを離して笑みを浮かべた。

母なるティアマトがいたからこそその神性召喚でしたから、彼女がいなくなれば私達もいなくなるのは道理デース。

そういう訳だから、ごめんね。

ここまでしかお手伝いできませんが、貴方達はここからが本番。

しつかりね、私の可愛いマスターに、私の認めた英雄さん。

観客を湧かせるような豪快な勝利、期待しているわ、と。

それを聞き、グツと力を込めて上半身を持ち上げる。

そうしてから片腕を出し、ぶつけ合わせて任せろ、と言い、それから立香君が彼女を抱きしめながら今までありがとう、また会おうと言った。

その行動にケツアルコアトルは少しだけ顔を赤らめて、それからそういう別れ方、大好きデース！　とジャガーマンと共に姿を消した。

それらを見ながら、イシユタルが疲れたように笑う。

最期まで騒々しかったわね、と。

いやイシユタルも充分以上に騒がしかったけど、なんて言えばうっさいわねえ！ 頭を小突かれる。

そしてその身体が光に溶ける様子は無い。

まあ、当然だろう。

彼女は聖杯に呼ばれたサーヴァントでは無いのだから。

そう思っていれば立香君はエレシユキガルは？ と言った。

それにイシユタルは、少しだけ、ともすれば見間違いかと思つてしまふくらい少しだけ、目を伏せてから、冥界で休んでるわ、と言つた。大分無茶しちゃつたからね、貴方達によろしくつて言つといつてつて言われてるわよ、と。

その言葉に立香君は少しだけ残念そうにそつか、と納得する。

同調するように俺も頷ぐが、しかし何かちよつと引つかかるなあと思つていればイシユタルがそれより、と口を開いた。

やつたじゃない、流石私の見込んだマスターね。

その活躍に免じて、次があればまた、力を貸すことを約束しましよ、と。

助かる、と笑えば彼女はあつたりまえじゃない、百人力つてもんじゃないわよ、と言ひ、それからふと横を見て、問いかける。

そこの金ピカ、さっきのなによ、と姿を現したギルガメツシュ王に。そうすればギルガメツシュ王はなに、死の淵にいたのでな、少しばかり無茶を通したまでのことよ、と言つた。

もう身体がない故な、エレシユキガルめの眼を盗み、一時のみ見せてやつたのだ。

このウルクにまで来て、英雄王の姿を一度も見ないなどと、不幸にも程があるう？ と。

何の後悔も感じさせないような笑顔でそう、言つたのだ。

身体がない、つまり彼はもう死んでいて、今の彼はサーヴァントとということだ。

そうでありながら、しかし気にするな、と彼は言う。

貴様らとの別れは既に済ませてある。

勝利の凱歌を上げ、我の名を讃えながらカルデアに戻ればいい、と。それにつられたように笑みを零せば、彼は、ああ、そうだ、と口を開いた。

そして一言だけ、俺達に問いを投げる。

このウルクは、どうであった？ と。

一秒も考えること無く立香君が楽しかったですと笑い、それから散々遊ばれた気もするけど、面白かったです、と言う。

そうすれば彼はそうか、と満足気に言った。

言ってから、だが、それでは王の威信に欠ける、と呟いた。

旅人が笑顔で帰るのであれば、土産の一つでもくれてやるのが善い国というものだ、と。

いや、そんなの無くても、と言おうとしたが、それより早くかの王は芝居じみた様子でおお、そう言えば、とそれを差し出してきた。

ウルク名物、麦酒だ、と言いながら、聖杯を。

ふあ!? え、それ、それ良いの!? ていうかお酒飲めませんし!

と動揺すれば何、飲めぬのなら容れ物だけでも持っていけ、と優しく言う。

なにかの役には立つだろうよ、と。

そうしてから、ドン、と地を踏みしめる。

——では、さらばだカルデアの!

此度の戦い、まさに痛快至極の大勝利!

貴様らの帰還をもって、魔獣戦線は終結とする!

人理焼却、必ずや阻止してみせよ! とそう言い彼は姿を光に溶かして消えた。

それを瞳に焼き付けながら、必ず、と胸に誓う。

同時に、俺達の身体も光に解け始めた。

もう時間がない、ということだろう。

カルデアの方ももう受け入れ態勢は出来ているし、問題もない。

そう言ったドクターは、だから、最後に何か言ったら? とマリーに声をかけた。

マーリンが、驚いたように口を開ける。

ロマンに気を遣われるようでは私も本当に年貢の納め時かな？

なんて軽口叩きながら、それでも俺たちを見る。

ボクはまた、あの幽閉塔に戻る。

故に、この先ボクが手を貸すことは出来ないだろう、まあ、それが本当なだけども。

だから、今回は相当特別なレアケースだったと思ってくれ。

それを聞き、でも力を貸してくれたね、と立香君が笑う。

でもその答えはもう分かっていたし、それでも彼は言う。

そりゃあボクはキミたちのファンだからね、と。

私は、観ることのできない男だ。

人間ではなく、人間が紡ぐスクロール物語が好きなんだからね。

書かれた物語にはドキドキするが、その作者には興味がないのさ。

基本的には、ね。

でもキミたちの場合は少し違うだろう？

キミたちは私と同じ、本から本へと渡り歩く旅人だ。

私とは違うアプローチで物語を活かし、救い、よりよい紋様エンディングを紡ぎ

あげる旅人。

そしてその活躍は、私にしか認識できないものだ。

まあ、だからこそ、かな。

一度くらいはこうして力になりたかったのさ。

そう言っつて、彼はニコリと笑う。

そこに胡散臭さはなくて、同じように笑う。

楽しかったし、助かった。

本当に、ありがとう。

そう言っつた俺たちを見て、彼は私も少しまともになったかな、と言葉を漏らす。

こういう言葉に、前までは何も感じなかったのだがね。

それでは、私もここでお別れだ。

カルデアの星読み、誰の記憶にも残らない開拓者。

私は、キミたちの戦いに敬意を表する。

全ての星は満ちた。

人理終焉の暦で、キミたちはあの悪と戦うことになるだろう。  
どうか、最後まで善い旅を。

その行く末に、晴れ渡った青空があることを祈っているよ。  
そう言い残したマーリンを見て、俺達は意識を光に溶かした。

— Order Complete —

## 旅の終わり／始まり@無限ループ

カツカツと、果てがないようにも見える廊下に足音を刻む。

真夜中——それも日付が変わってから二時間も経つ深夜の廊下にそれは酷く響いて、逆に言えばそれ以外の音は聞こえない。

当然と言えば当然だ。

こんな時間帯にこうして暢気に散歩しているような人間は稀だろう。

それこそ、このカルデア内なら俺くらいのもなのではなからうか？

少なくともこの時間に誰かと会ったことはない。

襲撃前ならいざ知らず、今や二十名ほどしかスタッフも残っていないし当たり前だ。

そんなことを考えながら、綺麗に磨き上げられた廊下に音を響かせる。

この行動自体に特に意味はない。けれど、俺はこの時間をそれなりに気に入っていた。

カルデアは元々、二百人以上のスタッフが住み込みで作業していた大規模な施設だ。

そこを、一時的とは言え自分が独占しているような気持ちになれて、少しだけ心地よい。

何だかんだ昼間は誰かしらと遭遇することが多いし、気づけばメドゥーサやカーミラ、鈴鹿が俺の傍に引っ付いているからなおさらだ。

この施設内において、俺が一人でいられる時間というのは意外と少なかったりする。

それが嫌ということは決してないが、人間ってのは時折一人の時間が欲しくなったりするものだ。

いや自室にいるときは大体一人なのだが、それはそれ。

ベッドで一人だらけるのと、室内とはいえ散策するのはまた別物だ。

それに遅い時間に出歩くのはなんだか、悪いことをしているようで気分が良い。

……メドゥーサあたりに知られたら、いつまで起きているつもりなのでしょう、と静かに詰められそうだから、あながち間違いでないか。

そう考えればよく見つかってないものだなあと思う。

サーヴァントというのは俺たち人間と違って基本、眠りを必要としない存在だ。

暇つぶしに出歩いていてもおかしくはなさそうだが……まあ必要としないだけで眠ること自体はできる。

人間があんまり寝てないと体調を崩すように、サーヴァントも意外と寝たりしなきゃ精神のバランスが乱れたりするのかもしれない。

寝る、というよりは休む、の方が言葉選びとしては適格かもしれないが。

結局のところ、人に限らず知性のある生命体は「必要性」を分かっているながらもその通りに動けるわけではないのだろうと思う。

それは例えば感情だったり、欲だったりに頻繁に負けるものなのだ。

その証拠という訳ではないが、今実際こうして俺は寝るべきであろう時間に出歩いている。

……まあ、俺とて目的がない訳じゃあないのだが。

自室から暫く歩いてやつとたどり着いた、一枚の扉の前に立ち止まり、胸ポケットからセキュリティカードを取り出す。

カルデア所属の人間なら誰だって持っているものだ。

ここはどの部屋にも鍵が付いていて、こうやってカードをかざしてやらないと開くことはない。

ついでに言えば重要な部屋であればあるほど、上位の権限が付与されたカードでなければ開かないようになってる。

どこでも見るようなシステムだ。ちなみに俺の権限は襲撃後、大幅に引き上げられたから早々入れない部屋というのはない。

と言っても、今は電力の節約つてこともあつて使っていないフロアに



は電気が回っていないから、そもそも開けられないという部屋の方が多いのだが。

ピピツという聞き慣れたシステム音の後に、プシューツと扉が開く。

一步踏み込めば扉は直ぐに閉まり、パパパツと電気のついたそこで出迎えてくれるのは四十七つの棺。

あの日、もうすぐ一年前の出来事になるカルデア襲撃の日。

二百余名のスタッフは命を落とし、生と死のはざまにいた四十七人のマスター達は全員凍結保存された。

カルデア所長——オルガマリー・アムスフィア所長の指示だったという。

処置としてはこれ以上ないほど適切な対応だっただろう。お陰で未だマスター候補達に限って言えば、誰も死んではない。

死んではないだけで、生きていると言って良いのかどうかは知らないが。それでもまだ、ここにいます。

解放される時を待ち望んでいる……はずだ。

少なくともその事実が心が支えられているところはあった。だからついそう思ってしまう。

俺は、自分で言うのは何だが魔術師としては相当出来の悪い人間だ。

その上何か身体を鍛えていた訳でもないし、性格だって聖人のそれではない。

精神だって未熟で、精々褒められるのは諦めの悪さくらいだろう。

それだって、窮地に追い込まなければ発揮しなかつたくらいのも出来ない人間だ。

想像力や見通しだって甘いから、正直なところ、未だに世界を救うという実感はわいていない。

この長くて短い旅で得られたものは多すぎるくらい多かつたけど、それでもやっぱり世界を救うなんて夢見がちな目標はちよつと手に残る。

どの特異点でも、自分が生き残るのに必死すぎた。

誰かを助けたいとは星の数ほど思ったが、最後には自分が死なないように立ち回るのに精いっぱいだった気がする。

目で見える範囲ってのは思ってるよりもずっと狭くて、手の届く範囲はそれよりずっと短かったから。

それをいやなくらい思い知らされてきたから、なおのことだ。だけど。

それでも見えているのなら、どうにかできないかと考えてしまう。どうにかしたいと思ってしまう。

見えてしまうから、よりよい結末を求めてしまう。

いつそお前ら全員、死んでしまっていれば俺もこんなに苦しまなくても済んだかもしれないな。

明るく照らされた部屋の中、一つの棺にそっと指をあてて、ふっと笑った。

ガラスにも似た材質できた蓋は透明で、中に入った人物を見ることが出来る。

一枚の壁を隔てたその先にいるのは、一瞬目が奪われるほど美しい金の髪を長くのばした一人の男。

一つの絵画にすら見える、瞼を閉じた彼の名はキリシユタリア・ヴォーダイム。

襲撃前のカルデアで、数少ない話し相手になってくれた俺の……多分、友達だ。

キリシユタリア・ヴォーダイムといえば、この魔術・科学問わず『天才のみが集まる場所』であるカルデア内でも飛びぬけて優秀な魔術師である。

名家（らしい）であるヴォーダイム家に生まれ、持て余すほどの才能を授かっていながら研鑽を怠らない、いわゆる出来た人間。

それなのに上下分け隔てなく接する人格者。

そんな「おいおい何かの主人公か？」みたいな感想を抱いてしまいそうな男が、キリシユタリア・ヴォーダイムという男である。

簡単に言えば、俺の真逆みたいなやつだ。

周りの対応も、たたき出す成績も、何もかも。

俺が劣っている、と言いたいわけではないが、それでもこの魔術や  
体術、専門の知識によつて評価される環境で俺は勿論ドベで、あいつ  
はトップだった、ということだ。

ついでにコミユ力にもだいぶ差があつた。

そんな俺とヴォーダイムが頻繁に話す仲……とは言わないが、少な  
くとも赤の他人でなくなったのは偶然のようであり、実は必然だった  
のかも知れない。

と、前置きしておいてあれなのだが、特段運命的な出会いを果たし  
たという訳じゃない。

むしろ、どちらかと言えばひどく情けない、鈴鹿辺りが聞けば「だ、  
ダサツ」とか言われてしまいそうな出会いだった。

まあなんだ、端的に言おう。

俺はカルデア内部で盛大に迷子になったのだ。しかも深夜、トイレ  
に行こうとして。

いや違う、言い訳をさせてほしい。

当時の俺はカルデアに来てまだ二週間程度の新参者だったのだ。

は？ 二週間もあつたなら道くらい覚えられるだろ、という人もい  
るかもしれない。

うん、その意見は非常に良く分かる。良く分かるのだが——どこに  
でも例外つてのはあるものなんだ……。

要するに俺は方向音痴であつた。ただ一つ過去の俺をフォローで  
きるのは、カルデアの廊下がどこも違いの見られない統一されたもの  
だつたというところだろう。

どこでもそうだろ、というのは全くその通りなのだが、道一本間違  
えただけで全然別ルートに入っちゃうカルデアはちよつと俺には難  
易度が高かつた。

今でも、知らない区域とかに入る時はダヴィンチちゃんお手製の内  
部マップアプリが無いと迷う自信があるほどである。

ただこれは俺が我がままを言った結果作られた物なので、当時は当  
然存在しない。

なんならダ・ヴィンチちゃんのことすら知らない時期だ。

とうか当時の俺が名前も顔も把握していた人間とか、所長とドクター、それから一部のスタッフさんくらいである。

他のマスター候補とか同じ空間にいても話すようなことがなかったからだ。

これは俺のコミュ力の問題もあるのだが……扱う言語が違うというのほかにハードル爆上がりであった。

ただでさえ慣れない環境だったせいでしり込みしてしまっていたというのもある。

つまるところ限界ボツチしていたって訳である。

まともに話してくれた相手とか、スタッフさんとドクターくらいだったからな……。

と、そういう訳なので迷ったところで助けを求めることすらできずにいた。

こんな時間に助けを求められるのとか、親か友達くらいである。

そしてここには親も友達もいなかった。

詰みである。

腹は痛いし道に迷うし神は俺に恨みでもあるのか？ とふらふら彷徨っていた、その時だ。

特徴的な金の長髪が目に入ったのは。

どこでもそうだろうが、夜のカルデアはどこも消灯されている。

だから廊下はほとんど真っ暗で、仕方なくスマホのライトを使っていた。

その光を、こつちが驚くくらい弾く金の髪。

え、なに？ 誰？ お化け？ とビビった俺の言葉に反応して彼――

ヴォーダインは振り返って言った。

こんな夜更けに、どうしたのかな、と涼しげな表情で。

ただ当時の俺からすればヴォーダインなんて「何かよく目立ってる人だ〜！」くらいの感覚だ。

それにそろそろお腹の具合が大変なことになっていた俺に余裕も礼儀もなく、ただ一言「お手洗いの場所を、教えてください……。」と

だけ絞りだしたのだった。

この時のヴォーダイムの意外そうな顔と、それからたまりかねて笑った顔を、俺は忘れることはないだろう。

それくらい、彼の笑みは少年的な笑顔だったから。

幸いにして、ヴォーダイムは日本語ができるやつだった。

というか多分、日本語に限らずほかの言語もある程度は習得していたのだと思う。

笑みをたたえながら、逆方向だよ、とヴォーダイムは言った。

頼む、通じてくれ……！ と願いを込めて言ったのは確かだが、まさか本当に通じるとは思ってなくて一瞬呆気にとられたものだ。

そんな俺を見て、ヴォーダイムがどう思ったのかは分からないが、恐らく全然道を分かっていないことは察したのだろう。

案内しようか、とヴォーダイムは言い、俺はそれに申し訳ない……とうなずいたのだった。

それから数分後、無事手洗いにたどりついた俺は腹のSOSに応えることに成功、安堵のため息をもらしながら手洗いから出れば、ヴォーダイムはまだそこにいた。

え？ なに？ と思ったのも束の間。ヴォーダイムは無事帰れるか心配になってね、なんて言ったのだ。

そして同時に俺は確信した。こいつ、超良いやつだな……と。そんなわけで部屋番号を伝え、案内してもらったのだが予想外に俺は彷徨っていたらしくかなり遠くまで来ていた。

最短ルートで行っても十分はかかるという。つまり俺はそれ以上の時間ふらついていたということになる。

そりやお腹様も「やばいよやばいよ！」と騒ぎ出すわけだ。

もしあの時ヴォーダイムに保護されていなければ尊厳を失っていた可能性もあったことを考えれば今でもぞつとする。

ヴォーダイム様様だ。

ありがとう！ と感謝し倒してからヴォーダイムの横へと並び歩く。

俺は三角のナイトキャップまで被った完全睡眠準備状態だったが、ヴォーダ임はそうではなかったのを覚えている。

ただいつもの真つ白なマントは外していて、いささかラフな格好ではあった。

いつも堅苦しい恰好しか見ていなかったことによるギャップもあって、接しやすかったのだと思う。

改めて自己紹介をしてから、だらだらと雑談をした。

内容は特に覚えていない、そのくらいいつでもできるような話だった。

雰囲気としてはあれだ、下校時にする友達との会話とか、そんな感じ。

中身がそこまで重要ではないような、そういう話。

特に俺たちは互いのことをほとんど全く知らなかったから、手探りのような会話でもあった。

ただそれも一瞬で終わった。否、正確に時間を計れば一瞬ではないのが分かるだろうが、少なくとも俺にとつては一瞬だった。

だがそれは俺の部屋に着いたからではない。

カルデアの外の吹雪が、止んでいたからだった。

今更のようではあるが、カルデアは日本ではなく南極に存在し、基本的に天候は吹雪で固定されている。

それが止むのは一年に数回程度で、その上晴天なのは一年に一回あるかないか程度の確率だ。

そんな低確率を俺とヴォーダ임はこの日この晩見事に引き当てた。

ヴォーダ임曰く、一時的なものだろう、とのことだったがそれ込みでもラツキーはラツキーだ。

それはガラス張りの壁越しですら美しいと感じるような景色で、俺は見事に視線を奪われた。

返答をすることも忘れて見とれてしまい、そしてヴォーダ임が言ったのだ。

せつかくだし、外に出て見てみようか、と。

カルデアは広い、といつてもその比率は横にかなり割かれている。要するに都会なんかでバンバン立っているような高層ビルとは違い、横長にできていて高さはそれほどでもないってことだ。

とはいえそもそもカルデアがある場所自体が滅茶苦茶高い、分かりやすく言うなら標高……ええと、確か6000mだ。

そう、6000m。ぶつちやけ数字で言われても「そ、そう……高い、ね？」となるくらいにはよく分からなくなるくらいの数字。

そんな場所にカルデアはあって、だからこそ一般の人には中々見つけられない……ということらしい。

他にも人避けの魔術が云々とか言っていた気もするがとにかく、ここはかなり秘匿性の高い場所とのことだ。

まあちよつと話は逸れたが、兎にも角にも此処はかなり高い位置に存在していて、きつとそこから見る景色は抜群に良いだろうってことだ。

少しだけ胸躍らせながら、ヴォーダイムについていき長々と続くエスカレーターに乗り込めば屋上にはあつきりと辿り着いた。

真っ白な扉の横についたパネルにヴォーダイムがカードを翳せば扉は素直に開く。

同時、刺すような冷気を伴う風に身体をあおられた。

晴れているとは言ってもこの季節は基本的に冬みたいなものだから、当然だ。

ナイトキャップが飛ばされないように手で抑えて外へと出れば、あつたのは満天の星空だった。

見たこと無いくらい空気は澄んでいて、丁寧に塗られたような夜空の中で星々が一つ一つ自己主張するように輝いている。

こういうのを幻想的な風景というのであろう。

思わず呆けて食い入るように見つめた記憶が強く残っている。どれだけ見ているも飽きない空、というのは初めてだった。

それはもしかしたら思い出補正とかが入っているかもしれないが、それでも、俺にとってはアレが一番の夜空だった。

あんまりにも長いこと見惚れてしまって、次の日風邪を引いたがプラスマイナス全然プラスだった。

それに見舞いに来た時のヴォーダイムの、ちよつと申し訳なさそうな顔が面白かったから、マイナスなんて無かったも同然だったと言えるだろう。

色々話が混ざってしまったが、一先ずこれが俺とヴォーダイムの出会いの話で、それからちよいと付き合いができた切っ掛けだ。

何でお前みたいなのがあのキシユタリア・ヴォーダイムと……!?  
みたいな目で見られたのが懐かしい。

ヴォーダイムに限らず、ヴォーダイムの所属していたAチームのメンバーともそれなりに話すようになったし、俺の快適なカルデアライフに彼は多大な貢献してくれた。

ヴォーダイム以外のAチームの面子も、エリートだなんだと言う割にはかなりよく相手をしてくれたものだ。

各々嬉しそうだったり、面倒くさそうにしたり、困ったようにはしていたが、その上でよく面倒を見てくれた人たち、という括りでもある。

俺はAとGまで振り分けられた各チームの、一番下のチームにおまけとして入れられた、というくらいダメダメだったから、よく魔術の手ほどきを受けたものだ。

レイシフト適性以外は本当の本当に取り柄がないほど才能がない、というのは言われなくても分かったが、それでも多少は使えるようにさせてくれた辺り、彼らの人の良さとその実力がうかがえるだろう。

お陰で随分と助かった、俺の魔術師としての土台を作り上げてくれたから、多分ここまで来れた。

その思いは、今でも変わらない。

世界を救うのというのは規模が大きすぎて実感はわかないけれど、この先を生きるため、というのであれば分かる。

けどそれだけじゃ弱気になるときがある。もう別に良くないか？  
と思う時がある。だからそうなった時はこうして此処に来るよ



うにしていた。

人理を救わなければ、彼らを目覚めさせられない。

折角の借りを返すチャンスだし、それにもう一度くらいはちゃんと話したい。

つまりまあ、こうやって、彼らを見て気合を入れるとかしてみたりしていたのだ。

心を支えてくれる柱のその一つ、というわけである。

俺は頼れるものには何でも頼る主義なんぞな。

あと少し、あと一歩だけだから。

悪いんだけど、もうちよつとだけ頼りにさせてくれよな。

そう呟いて、間違つても起動なんてしたりしないように、優しくコフィンから指を離す。

あんまり長居すると段々しんみりとしてきちやうから、次来るときは最後のレイシフトをする時だ。

じゃあ、もう少しだけ頑張ってくるから、見えてるもんなら見てくれ。

そう言い残して、部屋を出た。

それから十分近い時間をかけてゆっくりと自室に戻った俺はベッドに寝そべっていた。

……正確に言えば、メドゥーサに膝枕されていた。

いやなんか戻ってきたら当たり前前みたいな顔して俺のベッドに座ってたんだよな……。

お早い戻りでしたね、なんて言ってポンポンと自分の膝を叩くのだ。

無視……するのはちよつと難しかった。

かれこれもう一年近い付き合いになるのだ、こういう時にする抵抗が大体無意味に終わるってことくらいは流石の俺だってもう学習している。

それにこう……何だか口にするには恥ずかしすぎるのだが、決して嫌な訳ではない。

鈴鹿なんかに見られた暁には写メでも撮られて一生からかわれそうなのがするが、今は二人だけだ。

少しくらいは許されるだろう、と自分に言い聞かせながら横になっていた。

随分と髪が伸びましたねと、肩辺りまで伸びた俺の黒の髪に手櫛をかけながらメドゥーサが言う。

彼女の持つ滑らかなそれとは違い大した手入れもしてない俺の髪は頻繁に指に引っ掛かっていたが、メドゥーサはやけに熱心に梳いていた。

何だか嬉しそうだな、と訊いてみれば少しの間のにちに、ええ、お揃いのように嬉しいのです、とメドゥーサは顔をほころばせた。

それが気恥ずかしくて、一瞬黙り込んでから「んんっ」と咳ばらいをする。

そして誤魔化すように、願掛けみたいなものなんだ、と言った。

夜空を裂く流れ星に願いを込めるとか、七夕の短冊に夢を書くとか、ミサンガが切れるまで身に着けておくとか、そういうある種の気休めみたいなもの。

——うん、そうだな、気休めだ。

でも誰だってそうじゃないか？

奇跡は勝手に起こるものなんかじゃない。

運命はいつだって命に牙を剥いている。

都合のいい結末は待っているだけじゃやってこない。

縫ったところで結局最後にものを言うのは積み上げてきた自分自身だ。

分かっている、分かっている、分かっている。

俺に限らず誰だって、そんなことくらい言われなくても分かっている、だけど。

否、だから、不安になる。

自分の弱さを知っているから、自分の情けなさを知っているから。

自分の命の軽さを知っているから、他人の命の軽さを知っているから。

そこにどれだけ強い思いがあろうと、いとも容易く踏みじられてしまうことを知っているから。

俺一人の力なんて本当に本当にちっぽけなものだつてことを骨の髄まで刻み込まれているから。

自分なんて、一番信用ならないって分かっているから。

それがどこまでも怖くて、でも逃げる訳にはいかななくて、意味もなく見えもしない何かで怯える心を誤魔化している。

ここまで言うとは何か、この伸ばした髪も情けなさの象徴みたいに思えてきたな、と笑えばメドゥーサは別に良いのではないでしようか、と言った。

ええ、どれだけ怖がろうと怯えようと、何かに縋ろうとも。

何も悪くないと思います、と。

——いいえ、悪くないというよりは、それが正常なのだ、私は思っています。

この星には数多くの人間がいますよね。

過去、現在、未来。いつ、どの時代を見ても、必ず数えきれないほどの人がそこにいて、そして皆、誰しもが何かに怯え、恐れている。

それはひどく矮小なものから、世界の命運にかかわるほど壮大なものまで、多岐に渡って存在するでしょう。

そう、何度乗り越えようとも恐怖や障害というものは生あるものが終わるまで絡みついているものです。

どれだけ努力を重ねようとも、乗り越えることのできないものだけであるでしょう。

そういうものに直面した時、多くの人はどう乗り越えようと思えますか？　なんて、聞くまでもありませんね。

ええ、そう。人は他人に頼るのです、縋るのです、求めるのです。そしてそれらの行為は決して——そう、決して、恥ずべき事ではない。

情けない？　どこがでしょうか。

恐れ、怯え、臆し、しかしそれでも前を向いていられるのはごく少

数の人だけです。

己の弱さを知り、目の前の障害の強大さを知り、逃げ出してもよい道が提示され続けていて尚、苦難の道を進んでいける人はもつと少なくなります。

だからマスター、私のマスター。

そう、卑下なさらないでください。

貴方が当然と思っただけのこと、誰もができることではないのですから。

それは子供をあやすような、とても暖かい声音で紡がれた言葉だった。

身体の表面から心の芯にまで溶けて浸透してくるような、そういう暖かさ。

じんわりと、強張った感情を解きほぐすように、それはしみ込んできた。

今こうして頭を撫でられているように、心まで優しく撫でられているようだった。

それを明確に感じながら、脱力するように息を吐いた。

そう言ってくれると安心できる、ありがとう、とそれだけ言った……というか、それ以上言葉にすることができなかった。

俺はあまり言語化が得意じゃない、不安と安心感に挟まれるような今の状態を何て言っているのか分からなくて、だけど気が楽になったことだけは分かったから、それだけは言えた。

少しの間を置いて、もう一度口を開く——より先に、メドゥーサが微笑んだ。

今日はもう眠りましょうか、と。

日が経つにつれ、決戦の日が近づくにつれ、貴方が眠れなくなっているのは知っています。

眠れなくて、真夜中にシミュレータを起動していることも、今日のように出歩いていることも、何も言うつもりはありません。

ですが、人間は根本的に休まなければ壊れてしまうものです。

ですから今晚くらいはもう、安心して、ゆっくりと眠りましょう。

貴方が目覚めるまでずっと、お傍にいますから。

慈愛とやさしさに満ちた声音で紡がれる、暖かな言葉たち。

それに従って目を閉じればやってきたのは柔らかな暗闇で、拍子抜けするくらいストーンと俺の意識は微睡みに沈んだ。

パチリ、と予兆もなく目が覚める。

視界に入るのは見慣れた自室の天井だが、右の鼓膜が静かな寝息に揺さぶられていた。

そつと視線を向ければ、メドウーサが俺の身体を抱えるようにして眠りに落ちていた。

道理で少しばかり暑苦しかったわけだ、と苦笑し彼女の手を外してから二度寝しようとして諦める。

どうやら今日は久方ぶりに寝覚めのいい日らしい、落ち込んでた気分もすっかりフラットに戻ったし調子がいい、なんて思ってた自分の端末に手を伸ばした。

一年前まではゲームにSNS、調べものやメッセージのやり取り何かで大活躍だったそれも、今では目覚まし機能付きチャットツールではない。

今の状況からしてみれば、それでも十分豪華ではあるがそれはそれ。

ちよつと寂しくはあるよなあと思いつつも画面を点ければ飛び込んできたのは『13:25』という数列だった。

はーん、なるほどね？

そりゃ寝覚めが良いわけだ、だってもうお昼ご飯の時間すら超えてんだもん……。

まるで朝方までゲームして寝落ちた日の翌日みたいだあ、なんて若干の虚無感を抱えながらロックを解除すると同時にカメラを起動した。

というか勝手に起動してしまった。多分、指が触れちゃったんだろう、よくあることだ。

意図せずとはいえ、カメラ何て起動したのはいつぶりだろうか。一

年前までは結構使ってた記憶がある。

まあカルデアは機密が多いから、自室と食堂くらいでしか使用は許されていなかったけど。

ついでに撮った写真もチェックされるってくらい厳格だったから、自然と撮ることは無かった。

というかそれは今もだな……人手が足りなさ過ぎてその辺はほったらかしだけど、全部上手くいって終わればきつとこも元通りになるだろう。

……となれば好き放題できるのは今だけなのでは？

うーむ、でもなあ、と唸りながら何とはなしにパシヤリと一枚撮ってみる。

そうすれば画面に残ったのは眠る一人の麗人だ。

紫の長い髪を散らばせて、静かに目を閉じるその姿はどこか神聖さを感じさせる。

うーん、我ながらナイスショットだな……。

正直ちよつと引くくらい完璧な一枚が撮れてしまった。

待ち受けにしよ、そう思ったのと連絡が来たのは同時のことだった。

ドクターからの通信。一瞬、出ようか出まいか悩んで、悩んだという事実顔に顔を顰めてから出た。

内容は簡潔なものだった、というか出るまでもなく察していた。

その時が来た、準備はとうに万全だ、つまりはそういうことだ。

ため息を一つ吐こうとして思い直し、ドンツと胸を叩く。

これが最後なのだから、と自分に言い聞かせて立ち上がった。

集まったのはいつものブリーフィングルームではなく、中央管制室だった。

スタッフを含め全員がそこにいて、ゴホン、と咳ばらいをしたドクターが口を開いた。

我々はついに魔術王の本拠地を突き止めた。

それは普通の時間軸とは異なる場所に存在する、最も歪かつ特殊な

特異点。

当カルデアはこれより、この特異点との接触を試み、施設ごと特異点に乗り上げる、と。

それが意味するところは、レイシフトは行うものの実質地続きの場所に向かう、ということだ。

これまでのように時間を飛び越え、時代を跨ぐのではなく、ただ外へ出るためにレイシフトを使用するって感じである。

要するに今回の作戦の概要は——電撃☆上陸作戦！——ということさ！ いやあノルマンディーとは無茶をする！

俺の思考を読んでいたかのようにダ・ヴィンチちゃんがそう言った。

や、それにしてもドンピシャ過ぎない？ こわく……と思っていたら目が合った。

怪しげに笑ってからウィンクをしてくる、こっち見んな。

そんなダ・ヴィンチちゃんを見てドクターがため息を吐き、それからまあシリアス一辺倒で行くのは無理かあと呟いてからじゃあ説明頼めるかい？ という。

ダ・ヴィンチちゃんの返答は勿論おっけー☆である。語尾に星が見えるの、俺だけか？

といっても別に彼女とてふざけている訳ではない、アレでも万能の天才ダ・ヴィンチなのだ。

凝り固まった雰囲気解すように、彼女は朗らかに作戦概要を説明しだす。

さて、上陸作戦と言った通り今回は今までのオーダーとはちよつと違う。

まず第一に——といっても、これが一番大きいとは思うけど、聖杯を探す必要が無い。

なにせ今回の特異点は聖杯を起点に作られたものじゃあないからね。

では何をすれば良いのか？ と思うだろうが安心すると良い、難易度はこの際置いておくとして、やること自体は非常にシンプルだ。

一つ、城攻め。二つ、魔術王の撃破。そして三つ、敵領域からの生還だ。

三つ目を言った時やたら注視されるもんだから何？ という顔をしたら特に君ね！ 君！ 命大事に！ と付け足された。

何か相打ち上等とか思ってたそうでもんね、と立香くんが笑う。

流星にそんな蛮族みたいな思考はしてないが!? という俺の反論はダ・ヴィンチちゃんの「しー」という人差し指を口に当てる仕草で封じられた。

ちよつと扱いが雑過ぎない？ と思うがここで粘っても仕方ない。続きをどうぞと手を出せば彼女はにっこりと笑む。

まあ生還というのはその命がけ上等、みたいな馬鹿に限ったことではなくてね、単純にレイシフト自体がこのカルデアと、敵領域との接触面でしか行えないんだ。

シバによる調査でね、敵特異点の基本構造はおおよそつかめた。

今回の特異点は——そうだな、一つの小世界、概念宇宙になっている。

ここには地球をモデルケースとしたカルデアがあるだろうか？

そのカルデアスの宇宙版みたいなものさ。

といっても、本来の宇宙と違い天体も銀河もない、人間のスケールに例えれば単細胞のようなもので、注目すべきはそこには一つの生命しかないことなだけど……それは置いて。

この特異点の中心には計測不能になるほどの魔力が渦巻いている、間違いなく魔術王の玉座だろう。

ここがとりあえずの目的地だ、だが当然ここに至るまでの道は塞がれている。

要するに城門が閉じている。ま、心臓部なんだから守るよね、普通。そこでまずは敵領域全体の破壊を行ってもらおう。

敵領域は一つの生命体であり、末端から中心に絶えずエネルギーを送出し続けている。

だからまずはその末端を破壊しエネルギー供給を止める、そうすれば自然と城門は瓦解するという訳さ。



後はもう、開かれた道を通って走れば玉座にたどりつけるから、魔術王を打破しカルデアまで戻ってきてくれたまえ。

そう、今までと違って戻ってきてもらわねばならない。

先ほども言った通り、レイシフトはカルデアと特異点の接触面で行えないからね。

当然乗り物何て便利なものはないから徒歩で、それもダツシユで戻ってきてくれ。

何せ魔術王が倒れたら特異点の崩壊が始まってしまう。

だから、魔術王を倒すのは飽くまで前座だ。君たちが無事戻ってくることだけが重要なことから。

遠足は家に帰るまで遠足です、なんて言うだろう、これも同じことだ。

君たちが帰還し、カルデアが通常空間に転移したところようやくこの戦いはおしまいだ。

人類の、そしてカルデアの大勝利というオチでね。

そうだろう、ロマニ？ とダ・ヴィンチちゃんがドクターを見れば、彼はいつになく険しい顔で勿論、と言った。

ボクらはその為にここまでやってきたのだから、と。

まずは敵特異点への侵入、そこから観測された七つの拠点を破壊し、玉座で待ち受けているであろう魔術王ソロモンを撃破。

その後崩壊が予想される特異点から離脱し、接触面からカルデアへ帰還する。

作戦内容は以上だ、他に何か質問はあるかい？ とドクターが俺たちを見た。

俺からは特にない……敢えて言うなら、やけに緊張してきたつてことくらいだな、なんて思っていたらおずおずと立香君が手を上げた。

さつきダヴィンチちゃんが言っていた、その、敵領域が一つの生命体ってのはどういうこと？ と。

先輩は分かる？ と言ったように見てくるから、軽く首を横に振る。そうすればドクターが余分な情報だけど……まあ良いか、と呟いた後に口を開いた。

冬木を覚えているだろう？ 一番最初、襲撃を受けた際にレイシフトした場所だ。

あそこでは当然ながら聖杯戦争が起こった、で、その原因となった魔術炉心——要するに大聖杯のことなんだけどね。

アレは元々一人の魔術師の身体を腑分け——まあ解剖して作られたものなんだ。

天才の中の天才。

奇蹟の中の奇蹟。

そう扱われた、たったひとりの魔術師のその魔術回路を取りだし、システムの基盤としたもの。

人体という小宇宙を、実際に宇宙にしてしまった特例<sup>レアケース</sup>。

嘘のようだけど、これはれっきとした事実だ。

そして、今回の特異点はそれと同様のものになる。

ある魔術師の魔術回路を基盤にして作られた小宇宙。

時間軸の外でも存在できる個体、魔力が続く限り存続し続けることを可能とする固有結界。

それがこの特異点——魔術王ソロモンの本拠地の正体だ。

だからボクらは今回の特異点にこう名付けた——否、名付けざるを得なかった。

冠位時間神殿、固有結界ソロモン、と。

ドクターの言葉を最後に、少しの沈黙が訪れた。

冠位時間神殿、固有結界ソロモン。その正体のスケールのでかさに絶句——していた、という訳では正直なかった。

特異点の正体が何であれ、やることは変わらないしな……。

ただ戦って、殺して、生き延びる、それだけだ。

至ってシンプルで、分かりやすい。

まあシンプルであることと、容易さってのはイコールではないのだがそれはそれ。

強固なものではないけれど、張りぼてのようなものだけだ。

それでも覚悟はとづくにできている、だから、大丈夫だ。

何だか見慣れてしまった不安げな表情をしたドクターを目が合ったことで、逆にほっとしたような気持ちになって笑みを返した。

そうすればドクターは、情けない、この期に及んで覚悟が出来ていないのはボクだけだったようだ、と少しだけ笑った。

乾いていて自嘲するような笑みだった。けれども直ぐにそれは引っ込んで、次に現れたのは打って変わって強い表情だった。

でも、それもここまでだ、とドクターが言う。

キミの——キミたちの目に励まされたよ。

カルデア所長代理として、キミたちにコフィンへの搭乗を命じる！残された時間はあと僅かしかない、このカルデアが2017年に達してしまえばその時点で人理修復の手立ては喪失してしまう。

静かに、ドクターが息を吸う。片手をギュツと握りしめて吐き出すように言葉を放る。

——これは、敗北から始まった戦いだった。

人類の誰もが、気付かないまま魔術王に……ソロモンに殺された。

彼が没した931年から、綿密に積み上げられた人類史最大最長の殺人計画。

どうかこの馬鹿げた企みを破り捨てて欲しい、机上の空論は誰の目にも触れることなく燃え尽きるのみののだと！

お願いだ、とドクターは頭を下げた。

それが意外過ぎて思わず立香君と目を合わせて少し笑った。

ダヴィンチちゃんを見れば、彼女はやれやれとでも言いたげに苦笑いする。

この人、抜けてるところ結構あるよなあ、と思ってドクターの前に歩み出た。

顔上げてよ、と言って、もう一度言葉を紡ぐ。

頼むとか、お願いするとかじゃないでしょ。

これまで一緒に旅をしてきた、一緒に戦ってきた。

それは、最後の特異点だって同じだ。

戦う場所が違っても、目指すところは同じで、戦う相手も同じだ。俺達も安心してドクターたちに背中を預けるからさ、しっかり支え

てよね。

じやないと俺達って結構簡単に倒れてしまうから。ドクターは意外そうに眼を見開いて、それからほころぶように笑った。

ああ、そうだね、そうだった。

勝とう、一緒に。この手で未来を掴もう、と。

そう言っつて、パチンと互いの手を叩き合わせた。

では、最後のオーダーを始めよう。

ドクターのその言葉に応じて静かにコフィンへと入れれば、レイシフト・プログラム・スタートと言う声が聞こえた。

コフィンの扉は閉じてても、ドクターの声はしっかりと聞こえてくる。

——敵は魔術王ソロモン。

作戦の成功条件はこれの撃破と、キミたちの生還とする！

その言葉が終わると同時に、アンサモンプログラム・スタート、という聞き慣れた女性型の機械音が響き始めた。

同時に無性に泣きそうになる。

これが最後、そう、これで最後なんだ。

いつもこのコフィンに入る時は、死を覚悟していた。

だがそれも、ようやくと終わるんだ。

この旅が、戦いがどういう結末に至ろうとも。

やっつと、終わるんだ。

レイシフトの仄暗い光が視界を包み、最終グランドオーダー、実行を開始します、という音が耳朶を叩いた。

何だかこの声にも愛着が湧いてきたなあ、とふと抱いた感想を頭の片隅に放り投げる——前に。

何かが、頭の中を蹂躪した。

——声が聞こえる。

それは悲鳴だった、怨嗟だった、驚愕だった、墮落だった、憎悪だった、苦悶だった、絶叫だった、悲壮だった。

過去から未来にわたって繰り返し見せつけられる、人の醜さに、どこかの誰かのため息をつく。

それは想像を絶するほどの、落胆であり、失望であった。そして、そこから生まれる決意の声だった。

「この醜く愚かな生命は、文化はあつてはならないものだ」「最早布で汚れをふき取るように」

「埃を払うようにしても、意味はない」「人はもう、この星に生まれ、こびりつき根を張った穢れである」

「であれば、どうすればいい?」「ああ、そうだ」「やり直す他ないだろう」

「生命あるからこそ生物は間違える」「愚かにも醜く、不愉快に不適合な存在になり果てる」

「だから、無からやり直す」「歴史からではない」「生態系からではない」「大陸からではない」「時間からではない」

「文字通り、無から」「惑星ごと創り直す」

「途方もない時間がかかるだろう」「果てしない労力が必要になるだろう」「膨大な力を必要とするだろう」

「だからわたしが、わたしたちがやる」「未来から過去に渡り惑星を燃やし尽くす」

「一秒」「一分」「一時間」「一月」「一年」

「その瞬間瞬間に発生した莫大な熱量全て——およそ3000年分を回収し、束ね、制御した時初めて偉業は成し遂げられる」

「神殿を築け」「光帯を重ねよ」「人理を滅ぼすために」「焼き尽くすために」「忘れるために」

「わたしたちには、すべての時間が必要なのである」

——その声に、声たちにあつたのはおぞましさだけじゃなかった。そこには慈悲と優しき、それから覚悟があつて。

少しだけ、それが怖かった。

ただの悪意ならどれほどよかったかと、この時初めて、心の底からそう思った。

気味の悪い、ノイズじみたそれが脳から離れていくのを感じた。薄っすらと、乗り物酔いした時のような具合の悪さを無理やりほどく。

何度か揺らぎかける意識を気合で握りしめれば途端に体に風を浴びた。

軽い浮遊感の後に足から着地した感触が伝わってくる。

それに応じて目を開ける、ゆっくりと、静かに。けれども全身の力を込めて、重い瞼をこじあけた。

——あの世だ。

目の前に広がっていた世界を前に、直感的にそう思った。

天国だとか、地獄だとかというのは分からない。

だけど、少なくともここは時代が違う、とかそういったレベルの場所ではない。

ウルクで見た、冥界ともまた別種のどこか。

文字通り世界が違う。

渴いた笑いすら出てこなかった、ただこの光景に目を奪われた。

不思議と怖いとは思わなかった、でもその代わりに「あ、俺多分ここで死ぬな」という確信があった。

今までとは違う感覚。多分、ここまで来れたのはかなり稀有な確率でのことだった。

何度もやり直せるとは思うな、と本能が言っている気がした。

いや、言われないでもそんな慢心したことない……はず、なんだけど。

それでも嫌な予感がする、と思った。

思うと同時に、大音量の通信が飛んできた。

レイシフト時に干渉を受けたのを確認した、異常はないかい!? 大丈夫!? というドクターの声。

まだ若干頭痛がするけど、問題は無い、と同じように頭を抑えながらも立っている立香くんたちを視界に収めながらそう返す。

それよりも……此処は本当に……なんだっけ、冠位時間神殿？ で良いの？ と聞けば問題ない、と返ってくる。

ティアマトを覚えているだろうか？ 七つのクラスに該当しない靈基、人類悪と謳われた災害の獣——クラス：ビースト。

アレと同じ反応がその空間を占拠している、ゆえに間違いなく、ここは時間神殿だ、気を付けてくれ、と。

ドクターがそう言い切った直後のことだった。

——その通りだ、鼻が利くようになったじゃないか、カルデア。その一言が、空から落ちてきた。

見上げたそこにいたのは、モスグリーンのシルクハットを被り、同色のタキシードを纏った一人の男。

ぼさついた髪の毛は赤みがかかっている、常に閉じられている柔らかな目は多少の懐かしさを感じさせる。

レフ・ライノール。

誰かが——もしくは俺だったのかもしれないが——そう言った。

さして大きな声ではなかったと思う、それでも空中にいる彼には聞こえたようだった。

表情を変えることなく、まずは素直に称賛させてもらおう、と。

七つの特異点を超えてきたその強運、見事だった。

これまでの戦いぶりは他の柱を通して知っているからね、あの未熟かつ、落ちこぼれも良いところのマスター共がよくぞ、ここまで来たものだと感心しているよ。

ああまったく、なんて——なんて生き汚いのかと、戦慄すらしている。

いやあ、本当に。特にそう、貴様だ、貴様。カルデアに集った——その来たばかりだった一般人を除いて、48名のマスターの中でも最も無能だった貴様。

ピツ、と伸ばされた指が俺をさす。

ろくな魔術も使えず、運動神経も並み程度、身体をさして鍛えていたわけでもなく、知識も乏しかった貴様がここまで辿り着いたという事実には、そうだな。吐き気すら催すよ。

どうしてこう、行儀よく死ぬなんて赤子にでもできる簡単なことが貴様らにはできないのだ？ なんて、答えは求めては無いのだがね。

その声に起伏は無く、また感情もない。

顔はあるのに能面をしているようで、気味が悪いな、と少し思う。ていうか何？ もしかして今俺デイスられた？ あまりにも自然に貶されたせいで真顔で受け流しちゃったんだけど……

ちよつとやめてよね、そういうのって後々からダメーじぶり返してきたりするんだから……なんて考えながらも必死に頭の外へと放り出していけばマシユが少しだけ前に出た。

警戒を十分に張り巡らせながら静かに、立香くんを護るようにして前に出て、それから言う。

貴方は最初からカルデアを——ひいては、人類を滅ぼすためにオルガマリー所長に近づいたのですか？ と。

どこか期待をするような目で。どこか希望を持つような目で、彼女は言った。

それは恐らくこの先に起こるであろう戦いには一切関係のない問いかけだったと思う。

でも、それでもマシユは聞かざるを得なかったのだ。その気持ちは多分、立香くんとダヴィンチちゃん以外のサーヴァント達を除いたカルデアの全職員であれば分かるだろう。

というか、嫌でも分かってしまう。

レフ・ライノール——レフ教授はカルデアにおいて古参の職員だ。

オルガマリー所長が所長として就任したところには既にカルデアに勤務しており、その所長に一番頼られていたと断言出来てしまうほどの人物だった。

それだけの人物だ、当然他の職員達からの信用も厚かったし、マシユの数少ない理解者でもあった。

それは、まあ俺も同じだ。レフ教授にはそれなりに……というか、かなりお世話になった。

カルデア内の案内をしてくれたのも彼だし、ぼっちしている間に良く話し相手になってくれたのも彼だ。

魔術の練習だって、見てもらったことがある。勉強についてだって、世話になった。



だからこそ、疑問に思ってしまう。完璧に裏切っていることを目の前で証明されているにも関わらず、心のどこかで信じてしまう。

『レフ・ライノールは魔術王に誑かされたのではないか？ もしくは操られているのではないか？』と。

——それは、ボクも聞きたいな、レフ教授。とドクターが口を開いた。

疑似地球環境モデル・カルデアス、1990年に完成されたこの魔術礼装は確かに偉大なる発明だったが、しかしこれだけでは人理定礎の復元は不可能だった。

そう、貴方とオルガマリー所長が協力し合い開発した、近未来観測レンズ・シバが無ければボクらはここに辿り着くことすらできなかった。

その貴方が最初からソロモンの手のものだったとはとても思えない。と。

ドクターの言葉に同調するようにダ・ヴィンチちゃんが頷いた。

それがレフ教授にとっては少しばかり愉快だったのかもしれない。

否、もしくは郷愁を感じたか。

どちらにせよレフ教授は笑みを浮かべた。

これはこれは、懐かしい顔ぶれだ、と。

またこうして話し合える日が来るとはね……君たちもマシユのように、私の名誉——いや、人権かな？ を気遣ってくれているようだ。

ありがたいねえ、でも、その心遣いは不要だ。

そういった声は、徐々に大きくなっていて、また何かを堪えるような音をしていた。

いつから、と言ったかい？

あー、何だか凄く不愉快な感じがするな、と下唇を噛む、それと同じ時に破裂したような勢いで、聞いたことも無いような笑い声が響いた。

キ——キキ、ギャハハハハ！

そんなもの、3000年も前から決まっているだろう!!

この計画が始まった、その瞬間から我々は百年後に柱になる家系、五百年後に柱になる家系、千年後に柱になる家系、といったようにあらゆる伏線を世界にばらまいた！

綿密に、緻密に、正確に、詳細に計画は組み上げられ、それを実行するべく種は撒かれた。

私はその中の2016年担当だった、というだけのことだ。

魔術師の家系に伝わる原初の指令「そうあれかし」と定められた絶対遵守の教え——即ち、冠位指定：グランドオーダー。

これは、魔術の王がこの時の為だけに作り上げたルールである。

人から生まれた魔術師たちは各々の信念、理論を定め次代に託し続けてきたが、私達のような魔術の王から分かれた魔術師たちは正しくこの時、この瞬間の為にあらゆる時代まで生き延びてきた。

遺伝子に魔神柱の依り代となる呪いを刻み、担当の時代まで存続し続ける。

そして2015年、最後の担当になる私が魔神柱である自身を自覚した時点で、諸君らの歴史は終わりを告げたのだ。

何故なら回収する資源は『そこまで』で充分だったからだ。

必要な分まで回収し、人理は終わる——はずだった。

だが、貴様たちカルデアは生き延びてしまった。

何故だ？ なぜ生き延びた？ 私の失態だったか？

否、そうではない。私の仕事は完璧だった。

であれば答えはただ一つ、私の観察眼をすり抜けたものがいたからということに他ならない。

そうだろう？ カルデア医療チームトップ兼、カルデア所長代理——ロロマニ・アーキマン。

レフ教授が、俺たちを見下ろしながら、しかしここにいないドクターを見るようにして、そう言った。

どうやら私は君を、過小評価していたようだ、とレフ教授は続けて言った。

それとも、そうなるように私の前では道化を演じていたのだろうか？  
だとしたら、とても残念だ。

私は——少なくとも、自覚する前までの私は確かに君に友情を感じていたというのに。

医学と魔導、歩んだ道は違えども君の善性と、その無駄な努力というやつには私とて敬意を表していたというのに。

ああ、本当に残念だ、とレフ教授はオーバーに肩を落として言った。どこか芝居じみてはいたが、それでもその言葉がまるつきり嘘という訳ではなかったのだと思う。

敵味方、下種かそうでないかは関係なく、レフ教授は優秀な人間……いや正確には人ではなかったのだが、一先ず優秀な人材ではあった。

人を見る目も確かなものだっただろう。

だからこそその、純粋な疑問だったのだと思う。

俺だってそうだ、というか、俺以外のスタッツたちだって思うのではなからうか？

ロマニ・アーキマンという男は、そんな他人を騙すような、他人の目を欺くようなことができるような人間か？ と。

したがってレフ教授だけでなく、俺まで気になってしまつてゴクリと息を飲めばんっ、というドクターの咳払いする声が聞こえた——のだが、その次に聞こえたのはダ・ヴィンチちゃんの声だった。

そりゃあそうだろうとも、と彼女は喜色に満ちた声音でそう言った。

君がロマニの人間性を見抜けたはずがない……というよりは、そうだね。

正確に言うのであれば、何人たりともロマニの人間性を見抜けたはずがないんだよ。

何しろこの男は、私がカルデアに召喚されるその日まで周囲全ての人間を、だれ一人信用していなかったのだから。

そうさ、君の言う通りロマニは凡人だ、それはもう言うまでもなくね。

だが、この男はある一点において、あらゆる天才をも凌駕する我慢強さを発揮していた。

『理由は分からない』

『誰が敵なのかもわからない』

『そもそも本当に起こるのかどうか保証すらない』

そんな、夢に見た程度の『人類の危機』を信じて、己の人生を投げ出した。

所詮夢であったと切り捨てることだって出来ただろう、というかそうしておけばどれほど楽だったことか。

だがロマニはそうしなかった。きつと起きるのだと信じ、待ち続けた。

自分が気づいていると、顔も名前も知らない敵に知られるわけにはいかない。察せられるわけにもいかないから、誰も信じない、相談しない。否、できない。

その時が来たときに自分に何ができるのか、何をすべきなのかもわからない。

だから、今自分が手を出せるすべての範囲のことを学びつくす。

それが、ロマニ・アーキマンという男の十年間だ。

一分たりとも休息などなかった、自らが許さなかった自由という名の監獄。

そんな男が、たかだか仲が良いくらいの学友に本性を見せるとでも？ という話さ。

なにせ本人ですら、自分のことをゴミとかクズとかいう過小評価している愚か者なんだからね！

……何だか、最終的に微妙な感じのオチになったな、なんて思ったが、直後にえー？ いや、そうかなあ、えへへ、なんて嬉しそうなドクターの声が聞こえてくる。

いくらボクでもそこまで卑屈じゃないと思うんだけどなあ、とやけに嬉しそうに言った。

そんな二人のやり取りが気に食わなかったのか……いや、元より俺たちのことは全体的に気に入らないのだろうが、レフ教授はその表情をゆがめた。

私とて、その男の不審さに注意くらいは払っていたとも、だからこ

そ、管制室の爆破でしつかりと死ぬように動いたのだ。

まあ、それもその未熟なマスターによつて邪魔されたのだが、と彼は立香君を見る。

へえ、そんなことがあったんだ、とひとり思う。

や、当時は俺、気付いたら瓦礫の山に立ち尽くしてたからね、その辺の事情は良く知らないってどうか……。

まあいいや、とレフ教授に向きなおれば彼もまた、まあ良い、と呟いた。

今、我らの王は手を離せない、何せ後数時間で最後の計算が終わる。故に、貴様らなぞ放置していても構わないのだが——まあ、ちようどいい機会だろう。

貴様らカルデアは、認めたくはないがこの私の不手際ゆえの産物だ。

だからこそ、私直々に証明してくれる！ 貴様らが、玉座に辿り着くことは絶対にありえない、と——！

瞬間、魔力が膨れ上がった。そうして肌に感じる感覚を、俺は知っていた。

それはかつてアメリカで、狂王が聖杯を用いて姿を変えた時と同じ感覚。

それはかつての果てなき砂漠で、太陽王が聖杯を用いて姿を変えた時と同じ感覚。

——即ち、魔神柱化。それは、酷く厄介だ。

だから、それが起こるより早く礼装を抜き放った。

既に構えを取った両手に顕れるのは、使い慣れた一丁の狙撃銃。

今更この距離で外すことは無い。スコープを覗いたのは一瞬だけだった、そして一瞬の後に引き金を引いた。

火薬が炸裂して、一発の弾丸が宙を駆ける。

レフ教授はまだ何かを言っている最中だったが、銃声はそれをかき消すように飛び、その眉間を撃ち抜いた。

鮮血が跳ねて、レフ教授の身体が銃の威力に撒けるように反り返った。

思いの外、上手くいったな、と思いつながら警戒を解くことは無かった。まだ何にも終わってない、どころか始まってすらいない、ということが本能的に分かっていた。

落ちてくるレフ教授の身体を刻み倒すくらいのはすべきかな？　と思う。

その、瞬間のことだった。

爆発が起こるようにレフ教授の身体が跳ねた、跳ねると同時に、姿を変えた。

人の姿から、醜い魔神の柱へと。過程をすっ飛ばすように、一瞬で。ほぼ真っ黒の体躯に、血よりも深く紅い目を幾つも付けた化け物が、顕現した。

——は？　何だそれ。今の、回復でもなけりや、再生でもない、よな？

これはひよつとしたら……いや、間違いなくかなりヤバイと頭のことかが叫ぶ。

今までの特異点と比べても、比にならないくらいには序盤からヤバすぎる、と全身が総毛立ち、直後に声が響く。

ハ——ハハ、ハハハハハハハハ！　見事、見事な反応だった、素晴らしい対応だった！

ああ、見てはいたが、そうか、ここまで、ここまでのものになったか、無能のマスター！

だが、足りない、私を、私たちを殺すにはあまりにも無力に過ぎる。聞くがよい、我が名は魔神フラウロス！

七十二柱の魔神が一柱、情報を司るもの！  
ク、ククク、精々楽しませてくれ、カルデアよ！

レフ教授——否、フラウロスの声を塗りつぶすように、光が走る、刀が駆ける、打撃が、斬撃が宙を舞う。

今更、魔神柱一柱くらいであれば敵ではない——とは言わないが、少なくともほぼ完封くらいのことではできる。

伊達に場数は踏んできていないし、そもそも魔神柱なんて何度も

戦ってきた相手だ。

間違いない強敵ではある、だが恐れるほどではない——その、はずだった。

そう、そのはずだったのだ。本当に、慢心を抜きで倒せるような相手だったと、今でも思う。

というか、倒せてはいるのだ。だが、しかし、倒しきれないだけで。何度も、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も殺しても、倒しても、フラウロスは無限に顕れた。

ハハハ、ハハ、ハハハハハハハハ！ 無駄だ、ああ、そう、何もかも！ その決死の抵抗も、なけなしの抵抗も、全てが無駄だ！

という、どこから発せられているのかと思うほどの大音量の笑い声が空間に響いてこだまする。

これ、どうなってんの？ いや本当に、さつきも思ってたけど再生とか復元とか、そういった次元では最早無い。

敢えて言葉にするなら、再誕生、か？ 消したそばから、新しいフラウロスが顕現している、と言うのが個人的に一番しっくりくる。

これの何が厄介なのかと言えば、相手の底が見えないことだ。限界が見えない、削っても削っても減っている気がしない。

ちよつと参ったな、と思う。今回の戦いは基本的に短期決戦を連続で行う形を想定しているだけに、こんなところで時間を喰っている訳にもいかない、という思考が焦りを生んでいた。

それを自覚して、何とか落ち着かせるように深く息を吸って吐く。不幸中の幸いと言うべきか、それとも今までが不幸過ぎたというべきか、少なくとも今の俺はカルデアとの通信手段がある。

下手に俺が頭を回すよりは、ダ・ヴィンチ辺りに頼った方が早いだろう。

これどうしたら良い!? まだ優勢ではあるけど長くは保たないが!! と通信機に向かって叫んだ、その直後のことだった。

轟音が七回、いや八回鳴り響いた。

まるで大地を抉り、湧き出るような爆音が遥か後方で鳴り響く。

——後方？ 俺たちの足元ではなく？ 何故だ？ と思う。

それくらい、直近で鳴った音ではなかった。

後ろに何かあっただろうか、そこまで考えたところでやっと気づいた。

今回、カルデアは敵特異点との接触を行った——それは、つまり。鈴鹿の名を叫ぶ、叫びながら後ろへと振り向いた。

カルデアの外観、その全貌を目にすることができたのは、俺がカルデアに連れてこられたその日の一回だけだ。

だが、それでもこの目にはしっかりと焼き付いている。

常に降り注ぐ雪に擬態化するような白をで染められた、ドーム状の巨大な施設。

それが今、俺たちの真後ろに出現していて——そして。

八本の魔神柱が、粉微塵にせんとばかりに巻き付いていた。声をかけようとした瞬間、通信が途絶する。

当然と言えば当然なのだが、カルデア自体に迎撃システムのようなものは用意されていない。

敢えて言うのであれば、俺たちが迎撃システムだ。

このままでは数分足らずでカルデアは破壊されるだろう、そうなつてしまえば事実上の終わりだ。

あつさりど、情緒もクソもなく、すべてが終わる。

そんなことは、認められない。認められるわけがない。

幾百の刀が空を埋め尽くす、鈴鹿の号令に合わせて切っ先を向ける刀たちは、しかし放たれることはなかった。

代わりに耳を劈くような爆音が響いた。響いたと思った時には既に身体が宙を舞っていた。

——!?

声にならない声飛び出して、背中が焼けるような激痛が駆け抜けた。

ああ、しまった、とそう思う。

完全にカルデアに気を取られて、他への注意を怠った。

何とか受け身を取りながらも落ちて地面を滑る、ふと横を見れば立香くんまで同じように転がっていた。



致命傷ではない、俺も含めてまだ戦えるだろう。だが、それも恐らく時間の問題だ。

言ってしまうえば、数の暴力である。魔神柱はこうしている間にも俺たちを嘲笑うように増え続けていた。

空間を埋め尽くさんとばかりの勢いで増殖を繰り返す、最早俺たちだけでは手が回らないのが目に見えていた。

あれ？ こんなもん？ という思考が脳裏をよぎる。

何度も死地を潜って、幾度も窮地に陥って、それでも這うように進んできた、その結末が、これ？

こんなにも呆気なく、あっさり負けるもんなのか？

諦めてはならない、ということとは分かっている。事実、別に俺は未だ諦めてはない。

それだけを頼りに進んできたようなものだ、今更捨てるような真似はできないだろう。

だが、それでもどうにもならないというものはある、ということもまた、俺は知っていた。

とうかこれはもう、諦める、諦めないの領域の話ではすでにない。これまでの特異点を駆け抜けてきた、俺の理性が言っている。

これは無理だ、と。どうあがいて、どう頭を回しても単純に戦力差をひっくり返せない、と。

そんな思いを肯定するようにフラウロスの声が、嬉しそうな、愉悦に満ちた声が空を震わせた。

無意味、ああ、あまりにも無意味だ、カルデア諸君。

言うまでもなく、分かるだろう？

私は——我々は不死身だ、無尽蔵だ、なぜならこの空間全てが我々——七十二柱の魔神なのだ。

どれだけ私を殺そうと、どれだけ同胞を殺そうとも、そこに意味は無い。

我々は常に七十二柱の魔神だ。この大地が、この領域が、玉座がある限り決して減ることはないのだから！

それでも、どうしても殺したいというのであれば、そうだな。

我ら七十二の同胞、その全てを殺し尽くせばあるいは、といったところか。だが、そんな火力が、軍勢が、戦力がどこにある？

凡百のマスターが二人に、サーヴァントが数騎程度。これでは話にすらならん。

勘違いをしているようだから、教えてやろう。

貴様らは我々を追い詰めたのではない、愚かにも生き永らえ、無駄な努力を重ねてきた挙句——死地に、自ら飛び込んできたのだよ。

諦めが悪いのは重々承知だ、だがそれももう、ここでは通用しない。わかるだろう？ という言葉と共に爆風が吹き抜ける。

ライダーさんに抱えられるようにその場を離脱した、続く爆発から守るように幾つものアイアンメイデンが展開されて、そのたびにゴミクズとなる。

同時に刀が飛来する、目玉を幾つも貫き撃破するが、しかし魔神柱が減ることはない。

最早どれだけ撃破しても気にすることはなく、フラウロスの声は響いた。

人類最後の希望、人類最後のマスター。

私は、私たちはね、心の底から君たちに感謝をしているのだよ。何しろ最高に面白かった！

ああ、そうだ。

第一特異点での反抗を笑い飛ばそう。

爆風が、吹きすさぶ。

第二特異点での情熱を笑い飛ばそう。

マシユが立香くんを守るように盾を振り上げて、マルタの一撃が魔神柱をひるませる。

第三特異点での冒険を笑い飛ばそう。

ライダーさんの鎖が魔神柱を縛り付け、カーミラの連撃が一柱を葬って、その直後にそれは生まれる。

第四特異点での探求を笑い飛ばそう！

カルデアから一際軋んだ音がした、真白の外殻が砕かれつつあって、息を呑む。

第五特異点での進軍を笑い飛ばそう！

鈴鹿の名を叫ぶより早く、彼女の宝具が展開された。一瞬だけ互いの目が合って、刀の嵐は飛翔した。

第六特異点での生存を笑い飛ばそう！

連続して炸裂した爆炎に刀を薙ぎ払われる、直後に立香くんへいつまでも寝てんな、起きろ！ と叫ぶ。

そして、第七特異点——ああ、いや、これはあまり、愉快ではなかったな。

と、そう言うのに合わせて攻撃が止まる。ライダーさんたちと共に立香くんの横へと降り立てば、フラウロスはあからさまに不機嫌そうに言った。

アレは笑えもしない三流の見世物だった、第七のことは忘れてしまおうか、と。

それを切っ掛けに、ああそういういえば第七だけはこいつらが直々に作り出した特異点なんだっけか、と思いつく。

よっぽど自信満々だったということだ、で、それを打ち破られて大層ご立腹って訳だ。

そんななりして、結構人間味あるんだな。

なんて言えば耳障りだな、とフラウロスは言う。

そもそもだ、貴様はなぜここにいる？ 七つの特異点を駆け抜けてきた、そのことを指しているのではない。

貴様はあの時管制室にいたはずだ。コフィンには入らずとも召集はオルガがかけていたのだから、従っていたものだと思っていたのだからな。

それともそれすら回避してみせたのか？ 等と、問いかけても答えなど返ってこないのは分かっているのだが。

何しろ貴様自身が分かっているのだから、話にならない、と。まあお察しの通りである。俺だって俺に何が起こって、ここまで来れたのかは正直な話良く分かっている。

だから、黙って前を見据えた。そりゃあ理由なんて知れるものなら知りたいが、誰かが教えてくれるようなものでもないだろうから。

ぐつと拳を握れば、それを解すように鈴鹿の手が伸びてきた。力みすぎた身体が若干リラックスする。

そんな俺たちを見て、彼は鼻で笑うようにしてから再度口を開いた。

まあいい、どうせもう終わりだ。この先に可能性はない。

さらばだカルデア、貴様らの徒労は、無意味さは、最高に愉快だったよ。

言葉と共に迫ってきたのは先ほどとは比べ物にならないような爆風だ。

逃れようはないだろう、それでも抵抗くらいは——と。

そう思った直後のことだった。

——いえ、無意味だなんて、それこそ笑い話です。

聞き覚えのある声がどこからか響いて、同時に全員の身体が、魔力に包まれた。

爆炎が通り抜けても、痛みの一つすら感じない。

それは見覚えのある魔力だった、虹色に輝く、癒しの光。

即ちそれは——聖女の護り。

は？ という間の抜けた一音しか出せなかった俺の前に、誰かが降り立った。

その手には巨大な白の旗、腰には剣がぶら下げられていて、長く伸ばされた美しい金の髪が戦場の風にたなびいている。

それが誰か、分からないはずがなかった。

ただ、あまりの意味不明さに、思考が止まる。

だって、いるはずがないのだ、この場に彼女が、現れるはずがない。そんな俺たちの混乱をよそに彼女はそつと俺たちに振り向いた。

隣の立香くんまで呆けていて、マッシュが口に手を当てる。

貴方方にしてはずいぶんと弱気ですね、戦いはこれから、そうでしょう？ と、そう言った彼女は。

神の声を聴き、村人でありながら戦場に立ったオルレアンの乙女ラ・ピュセル・ドルレアと名高き救国の聖女——真名：ジャンヌ・ダルク。

第一特異点、フランスにて最も力を貸してくれた大英雄が、そこに

いた。

トン、とジャンヌは軽く旗を突き立てるように地を叩く。

常に慈愛が湛えられていたその瞳は今、確かな熱をもつて俺達を見据えていた。

——諦めも、悲観も、絶望も、一度くらいは抱いたことでしょう。

鈴のような美しく、繊細な声が響く。

もしかしたら、これまでの長い旅路で、何度も抱えてきたのかもしれない。

ですが、貴方は止まることなく歩み続けてきた。無数の出会いを糧に、折れることなく這い上がってきた。

それは恐れに満ちた一歩だったかもしれない、震えながら進めた一歩だったかもしれない、傷つきながらも踏み込んだ一歩だったかもしれない。

ありとあらゆる場所が聖杯戦争という、異常な戦場と化した中でさえも。

この世界のすべてが、とうに失われた廃墟になったとしても。

行く末に無数の強敵が立ちはだかつて。

”結末はまだ誰の手にも渡っていない”と、空を睨んだ。

慣れない拳を握り、震える足に喝を入れ、立ち上がった。

どれだけ涙を零そうとも、戦場を駆け抜けてきた！

今もそれは、変わらないでしょう？

だから——さあ、戦いを始めましょう、マスター。

これは最早貴方だけの戦いではないのです。

だってこれは——貴方と、私たちによる、未来を取り戻す物語なのですから。

ふわりと笑みを浮かべたジャンヌはまた前を見据える。

立ち並ぶ巨大な魔神柱の前に、臆することなく声を上げた。

霊長の世が定まり、栄えて数千年。

彼女の声に呼応するように、空が震えた。

神代は終わり、西暦を経て人類は地上でもっとも栄えた種となつ

た。

魔神柱たちの魔力で埋め尽くされていた空間に、異物がポツリポツリと、されども恐ろしい勢いで増え始める。

我らは星の行く末を定め、星に碑文を刻むもの。

それは温かな魔力だった、懐かしさを覚えるものから最近感じたものまで幅広く無数に増えていく。

そのために多くの知識を育て、多くの資源を作り、多くの生命を流転させた。

誰かの雄叫びが高らかに響いた、それに続くように、大勢の声がした。

人類をより永く、より確かに、より強く繁栄させる理——人類の航海凶。

特異点内のあちこちで、星が、光が駆け抜けた。

これを、魔術世界では人理と呼び。

星々の群れが広がっていく、それこそ無数とすら呼べるほどの数の光が、俺達を護るように広がった。

彼らカルデアは、これを尊命として護り続けた。

ジャンヌがそう言った、その直後。

光が落ちてきた。

いや、違う。光に見えるアレは、魔力の塊だ。

超高濃度、高圧縮された魔力——つまり、宝具。もしくはそれに近い、少なくとも超強力な攻撃。

それが的確に、カルデアへと巻き付いた魔神柱を狙い撃ちして消し飛ばした。

衝撃が走り、風が吹き荒れる。

フラウロスの——否、多くの魔神柱の悲鳴が響き渡った。

——なんだ!?! 今のは、いったい何だというのだ! 何故、貴様らがまだ生きている、なぜカルデアは残っている!?!

なぜ、なぜ、なぜ——何故、我々の身体が崩れているのだ!?

おかしい、狂っている! なぜ、相互理解をついぞすることができなかった貴様らが、今更協力し合っているのか——!?!

その攻撃は、当然……と言い切ってしまうのは悪い気もするが、取り敢えずダ・ヴィンチちゃんの奥の手とか、そういうのではない。では誰なのか、とは問うまでもなかった。

立香君が笑みを浮かべて、ジャンヌの旗がゆらりとひらめいた。

彼女は凜然と、まだ分かりませんか？ とそう言った。

その姿に、心動かされた者たちがいたのです。

その心を、信じた者たちがいたのです。

我ら英霊、人には非ず、されどかつては人であったものたち。

後世の記録に残されたほど立派な人物ではありませんでした、手を取り合い協力し合えて来なかったものも大勢いた。我欲に囚われた者も当然いた。

ですが、そんな私たちを”英雄”であると信じた者がいたのです。

多くの英霊、多くの争いをその目に焼き付け、幾度も殺されそうになり、また命の奪う羽目になってなお、私たちを”英雄”であると信じた者が！

すう、とジャンヌは息を吸う。魔神柱の内の一本が狼狽えたような声を漏らした。

聞け！ この領域に集いし一騎当千、万夫不倒の英霊たちよ！

本来相容れぬ敵同士、本来交わらぬ時代の者であっても、今は互いに背中を預けよ！

人理焼却を防ぐためでなく、我らが契約者達の道を開くため！

我が真名はジャンヌ・ダルク！ 主の御名のもとに、貴公らの盾となろう！

歓声が、幾重にもなつて空を満たす。

星々は——英霊たちは今この瞬間も新たに召喚され続けていた。

チラリと空を見上げれば、誰もかれもが一度は目にしたことのあるようなやつらばかり。

召喚陣も無ければ、誰かが詠唱しているという訳でもない。

カルデアからの魔力供給が行われている訳でもなければ、当然俺達からも魔力の供給してはいない。

それなのに、かつて特異点で何度も助けてくれた英霊から、道を阻んだ恐ろしい英霊までもがこの戦場に顕れていた。

各々の武器を振り上げて、一気呵成にその力を振るっている。なんだよ、それ、と素直にそう思う。

目の前で起きているこの事象は間違いなく理不尽と呼ばれる類のものだった。

いつだつてどこにだつて転がっていて、どれだけ気を付けていても必ず襲い掛かってくるある種の”運命”。

この一年で嫌になるほど味わってきたそれは、しかし今回だけは珍しく、俺達の味方らしい。

ラツキー、つてやつ？ と呟けばジャンヌが少しだけポカンとしたように俺を見て、それから笑みを浮かべた。

何を言われるのです、これは幸運や偶然といった、在るかどうかも分からない不確かなものでは決してありません。

これは、貴方方の旅路の結晶、紡いできた絆の証。そもそも理不尽、運命なんてものは貴方方がその手で、打ち破ってきたものでしょう？

それと同じことです。私たちもまた、貴方方と戦いたくてここに来た、ただそれだけなのですから。

さあ、下を向いている暇はありませんよ？ マスター。ジャンヌはそう言って前を向く、一瞬立香君と目が合つて、彼は不敵に微笑んだ。

その姿に何だか少しだけ励まされて、ふう、と息を吐く。

途絶していたカルデアとの通信が戻り、ドクターたちの声が聞こえてくる。

それを聞き流しながらパチン！ と両頬を手でたたいた。

何だか怒涛の勢いで色んな事が起こり、戦況が二転三転したがやることは変わらない。

ただ進む、倒す、勝つ。そう、それだけだ、目標はシンプルであればあるほどやりやすくなるのだから。

あまりの情報量に混乱していた頭を叩いて戻し、クリアになった視



界で前を見据えた。

いくら英霊たちの助っ人が出来たとは言え魔神柱の脅威がなくなった訳では無いのだ、気を引き締めていこう。

そう言えば、現実においてかれていたのはマスターだけなんだけど……という鈴鹿の声が入ってきたが無視である。

ちよつ、無視すんなし！ とケツを蹴られた。いやごめんて。

『起動せよ、起動せよ。溶鉱炉を司る九柱。』

即ち、ナベリウス、ゼパル、ボデイス、バテイン、サレオス、プルソン、モラクス、イポス、アィム。

我ら九柱、音を知るもの。我ら九柱、歌を編むもの。

七十二柱の魔神の名にかけて、我らこの灯を消すこと能わず』

九つに重なった声が宙に響くと同時、それは姿を現した。

今まで見たことのある柱から、見たことの無い柱まで一から数えて九柱。

まるで無から急に現れたようにして降臨したそれを前に銃を構えた。

ライダーさんが先行し、鈴鹿が刀を握り、カーミラが杖を携える。

俺達がここですべきことは当初の予定通り破壊、もしくは制圧——ではない。

正解は一点突破して駆け抜ける、である。

何せ英霊たちが来てくれたのだ、頼らない理由なんてものはない。

ていうかこの量、この質の敵とまともに相手し続けていたら玉座に辿り着くころにはヘロツヘロである。

そんな状態で魔術王に挑もうとするほど俺も、立香君も愚かではない——愚かでは、なくなつた。

もつと言えば時間が少しでも惜しい、先ほどフラウロスは「あと数時間」と言っていたのだ。

あと、たったの数時間しかない。今は一秒でも時間が惜しい。

立香君と一度だけ手をタッチしてから二手に分かれるように飛び出した。

飛び出した瞬間に、随分懐かしい声が、耳朶を打った。  
ひっさしぶりじゃない！ 来てあげたわよ！ という、やたらやか  
ましい、竜の少女——いや、アイドルの声だ。

っていか今アイツ、歌って言った!? 言ったわよね、つまり歌勝  
負ってことよね!? 良い度胸じゃない、受けて立つわ!

サーヴァント界最大のヒットナンバーを聞かせてあげる!  
という、あまりにも不穏な言葉が続く。

ちよつ、まつ、ストップストップ! ちよつと待て! と叫んだ俺  
の声はしかし、ギリギリで間に合わない。

というか多分無視された。代わりに後ろに下がってなさい! と  
いう声が響いてから彼女は大きく口を開ける。

鋭く吸い込まれた多量の酸素は、彼女の魔力と混じり合い、超攻撃  
的な歌声に生まれ変わる。

それに応じて、彼女——エリザベート・バートリーの立つ大地は無  
機質な土から華やかに彩られた城へと変生した。

ここまで来たらもう誰にも止められないだろう、素早く下がったラ  
イダーさんと鈴鹿に続くように地を蹴ろうとして——その前にカー  
ミラの首根つこを引っ掴んだ。

何ていうか……ご愁傷様、と言ったらカツ! と目を見開いて憐れ  
むのもやめてくれるかしら!? と叫ばれた。情緒不安定か?

いや俺も過去の俺とかが出てきて好き放題し始めたらシヨックで  
立ち直れない気はするが……今は取り敢えずほら、極力視界に収めな  
いとか努力してくれ、と言えばカーミラは苦渋の表情でうなずいた。

まあ、目を塞いでも声は入ってくるのだが、と思つた瞬間それは始  
まった。

彼女の声を、ランス兼マイクであるそれが拡大させる。

飛ばしていくわつ、ブウブウ無様に鳴きなさい!

——鮮血魔嬢 オオオオオオオ!

直後、聞くに堪えない破壊の歌声が魔神柱をぶち抜いた。



撃ち落とす！

——幻想大剣・天魔失墜！

世界を埋め尽くさんばかりの極光が、莫大な衝撃を伴って放たれた。

爆風と轟音、それから閃光と魔力が弾けて吹きすさぶ。

一瞬だけ呆気に取りられて、次の瞬間手を引かれた。

パツと前を見上げれば、そこにいたのはゲオルギウス——つまり聖ジョージ。

かつてのフランスで共に背を預けて戦った、ジークフリートと同じ偉大なる”ドラゴンスレイヤー”。

赤銅色の鎧に身を包んだ彼は不敵に微笑んで、さあ、参りましょう、と言って光を追うように地を駆けた。

それに静かに頷いて、周りの三人を見てから地を蹴り飛ばす。

道が開くのは一瞬——とは言わないが、しかし相当に短い時間であろう。

いくら英霊たちの攻撃が苛烈とは言えあちらも無抵抗なままであるはずがない。

恐らく、もう少しでも長くここで戦えばこちらの勢いのままここを制圧なりできるだろうが、先ほども言った通り今必要なのは速さなのである。

少しでも開けた道を無理矢理こじ開けて、ねじりこむように通り抜ける。

玉座まで向かうにはドクター曰く、七つの拠点を乗り越えなければならぬ。

そしてそこに行くまでのルートは全て、門のようなもので閉ざされている、とのことだった。

とはいえ、その原型もほとんど残っていない。自分たちの再生にリソースを分けすぎてここまで手が回っていないのだ。

少しだけパツと後ろを振り返る、立香君たちも続くように柱の間を抜けこちらへと走ってきていた。

良いタイミングだ、そう思うのと同時、一本の魔神柱が道を阻むように俺たちの前に顕れた。

ように、というか正しくその通りなのだとは思うのだけでも。

ライダーさんと目を合わす、それから指示を出すように息を吸い込めば聖ジョージが手を振り上げた。

何の為に私がここまで来たと思っているのですか、お下がりなさい、と。

その剣を抜き放ち、静かに構えを取った。魔力が丁寧に、しかし迅速に、強烈に練り上げられていく。

聖ジョージが、地を優しく蹴りつけた。同時に謡うように叫びをあげる。

——これこそがアスカロンの真実

それはともすればゆっくりと歩み寄るような一歩でもあり、同時に、目で捉えることすら困難ほどの一歩であった。

瞬き一回の間に、聖ジョージは魔神柱へと肉薄する。

汝は竜！ 罪ありき！

剣が、光を弾く。剣が、光を纏う。

——力屠る祝福の剣！

一撃にすら見える十字の二撃が、魔神柱ごと門をたたき破り——そして。

とどめの一撃が引き絞られて、撃ち放たれた。

原形をとどめてすらいなかった門が魔神柱ごと完全に打ち砕かれる。

それを視界に収めながら聖ジョージがさあ、お行きなさい、と剣で先を指し示した。

ここは必ず我々が押し留め、制圧いたします。

今はただ、前へ、と。

それに一言頼む、と言ってから地を蹴ろうとしてヒョイツと鈴鹿に担がれた。

こつちの方が早いし！ という言葉と共に風を切った。

『起動せよ、起動せよ。情報室を司る九柱。

即ち、フラウロス、オリアス、ウアプラ、ザガン、ウアラク、アンドラス、アンドレアルフス、キマリス、アムドウシアス。

我ら九柱、文字を得る者。我ら九柱、事象を詠むもの。

七十二柱の魔神の名に懸けて、我ら、この研鑽を消すこと能わず』  
『どうやら一拠点につき発生する魔神柱つてのは九柱までらしい。』

先程と同じように、九つの声を重ねて現れたそれらを見て思うう。

あれ？ 把握済みの拠点つて七つだったよな……九×七は六十三  
だと思っんですけど……残りの九柱、どこいった？

玉座で魔術王と一緒にいるのだろうか、そう思いながら概念礼装を  
引き抜こうとして——雷が空を駆け抜けた。

悪寒にも近い寒気が肌を撫でつける、俺はその雷を、身に染みるほ  
ど知っていた。

短く切り揃えられた美しい紅い髪、握られた短剣はいつの日か何度  
もメドゥーサと火花を散らせていたものだ。

——アレキサンダー大王、またの名を”征服王”。かつてローマの  
地にて、何度もこの身を砕きつぶされた末に殺した英霊。

そんな俺が俺たちを護るように目の前に現れた。その傍らにはあ  
の時も彼の傍にいた英霊が一人いる。

黒の長髪に黒のスーツ、ついでに縁の黒い眼鏡。啞えられた煙草か  
らは緩やかに煙が伸びていて、その目つきは見ようによっては悪く見  
えるだろう。

アレキサンダーと同じく、俺達の道を阻んだ軍師。

そっぴい名前聞いてなかったよなあ、と思って聞けば「サーヴァン  
ト、諸葛孔明だ」という一言が飛んできた。

……？ ……孔明!? 諸葛孔明つつたのか今!?

え、ええ……？ ちよつとそれは意外過ぎるというか何というか  
ちよつと言葉にすることができないレベルのショックだな……。

マジ？ 嘘じゃない？ なんて言えば彼は袈裟にため息を吐い  
た。

といつても、諸葛孔明そのものではない、疑似サーヴァントというやつだ。疑似サーヴァントが何かは知っているな？」と。

答えはイエスである、直近ならばウルクで出会ったイシユタルとエレシユキガルがそうであったはずだ。

霊基数値が云々、霊基の作成が困難云々等と細々した説明をすることもできるが、端的に、一言で言うのであればそれは『人間を触媒にした”強引”な英霊召喚により召喚された英霊』である。

要するに人の肉体に英霊をぶち込んでいる、という訳だ。

普通の英霊と違い、現存する肉体をベースにしている為食事や睡眠が必要になるし、ダメージによる消滅は当然そのまま肉体の死に繋がる。

そういう、言ってしまったえばかなりデメリットが多いのが疑似サーヴァントという存在だ。

因みに人格は残念ながら孔明の方ではない、分かりやすく言うならば孔明の力を借りている一般魔術師とも思っておけ、という言葉に素直に頷いておく。

本当ならその辺詳しくお願いできますかね……となるところだが残念ながらどちらも時間に追われる身だ。

聞いている暇は無いだろう、だからただ一言。

信じていいんだな、とだけ聞く。そうすれば愚問だな、と孔明は吐き捨て、アレキサンダーは雷を纏い、笑った。

ただ、見ていたまえ、と言い残した彼は次の瞬間掻き消えた。

直後、上空から馬の嘶きと、大地を鳴らす音が響き渡る。

素早く見上げれば、そこにいたのは一頭の黒馬にまたがるアレキサンダー。

剣を掲げ、彼は叫びをあげる。

いずれ彼方へ至るため——今こそ此処に、一步を刻まん！

掲げられた剣が、落ちてきた雷をそのまま宿す。

雷光が幾度も輝いて、彼の全身を鎧のように覆い尽くした。

——始まりの蹂躪踏破！

雷を迸らせながら、アレキサンダーが魔神柱を文字通り蹂躪して叩きのめしていく。

その絵面は凄惨なものだというのに、どこか輝かしい。

そんな感想を抱いていれば、見惚れている場合ではないぞ、早く先に進め、という孔明の言葉が飛んできた。

ハツとしたように前に向きなおして、助かった、と伝える。

でもローマでの戦いのことについては絶対に謝らない、これで貸し借りゼロだ。

そう言えば孔明は目を丸くしてから声を上げて笑い、それで良い、とだけ言ってくれた。

その言葉に背中を押されるように走り出す、パツと戦場へと目を走らせれば立香君たちもいて、彼らはローマ皇帝、sとでも言うべき集団と共闘をしていた。

左から順にネロ、カリギュラ、カエサル、そして国造りの英雄：ロムルス。

当時、ローマで俺達がアレキサンダーと戦っている間に立香君たちが倒した英霊と言うのがあのロムルスらしいのだ。

データも見せてもらったがよく倒せたものだ、と今でも思う。

何せロムルスと言えば大帝国ローマを築いた建国王にして神祖と呼ばれる存在だ。

ネロもカリギュラもカエサルも、当時の俺は良く知らなかった今では“超凄い人達”であることが分かっているが、その上でロムルスの前ではその名も霞む。

というか生きていながら神の席に祀られた人とかもう比較対象にするべきではないくらいだ。

心の中でならまだしも口に出して呼び捨てするとかちよつと恐れ多すぎてできないレベル。

ある意味会うこと無くて良かったなどと、胸を撫で下ろしていればその安心を吹っ飛ばすような『**圧政!!**』という声はやたら近くで響いた。う、うわー、あんまり見たくねー……と思いつつ視線を向ければそこにいたのはやはりどうか何というか、まあスパルタクスであつ



た。

ローマで見た時と変わり映えのない彼は俺の姿を見るなり満面の笑みで走ってくる。

一度だけ抱きしめ殺されたことのある俺は反射的に構えを取ったが、しかし意味は無かった。

というか普通に肩をポンツてされた。

俺の腕の二倍以上はありそうな筋骨隆々な腕は見た目以上にながしりしている。

どけようとしても微動だにしなさそうだけど……と、取り敢えず何？ と目を合わせれば彼はフツと目を細くして笑った。

そして、彼にしては静かに言う。

苦境である、と。

これこそが絶体絶命の具現である。

さあ戦おう、無限、連綿、戦闘の地平の彼方に光を！

諦めることを知らぬ反逆者よ、傷つこうとも心折れようとも前に進む開拓者よ、今こそ共に並び立とう！

さあ、無限に等しき強者を打倒せし日だ！ と。

徐々に雄叫びのように声を大きくしていった彼は、最後の言葉を放った後に物凄い勢いで駆け抜けていった。

嵐みたいな人だな……でも、言いたいことはまあ、何となく分かった——ような気がする。

多分一緒に戦おう！ いくぜ！ みたいな感じだろう。

ああ見えて悪い人じゃないのは知ってるし、と脳内で解釈しながら突撃を繰り返すスパルタクスを見ながら最短ルートを模索していたら「あはは！」という快活な笑い声と共に背中をバシツと叩かれた。

振り返ってみればそこにいたのは見知った赤髪の女性。

だがその出で立ちの前見は少し違い、頭には金の冠が乗り、その肩には真っ白なマントがかけられている。

感じられる魔力も前とは桁違いで、思わず出てきた驚きを何とか押し込めながらブーディカ……？ と呼べば彼女は少しだけ恥ずかしそうに顔を赤らめながら、ちよつと気合入れちゃった、と笑った。

ここはアタシ達に任せて、早く行きな、というブーデイカの言葉に甘えて走り出す。

魔神柱はあちこちにいたが何度も消えては復活をしているようで既に俺達のことすら見失っているようだった。

良い傾向だ、と思う。同時に長くは続かない、という実感が心を締め付ける。

俺は大丈夫だから、もう少し急ごうか。

そう口にしたような言葉をかき消すように「戦うのね」という言葉が鼓膜を打った。

激しい戦闘音の間を縫うように届いたそれは、小さく可憐な声だった。

あまり良い印象の無い声で、思わず顔を顰めながら周りを見渡せばメドゥーサに抱かれる形で彼女はいつの間にかそこにいた。

かつてローマの地にて、俺達を手の平の上で踊らさせた意地の悪い女神。メドゥーサの姉、神霊：ステンノ。

あの時のように食えない笑顔を浮かべながら、しかし目を細めてステンノは俺を見据えた。

外側の庇護を受けし者、運命を砕かんとする者、勇者にはなりえず、英雄の資質はあれど、一步を踏み出すには躊躇いを持ってしまう者。

勇ましく、この惨たらしさに慣れてしまった者、魂だけは強く保ち続ける者。

折れても立ち直ることができてしまう者。

あの日見た時から、随分と逞しくなってしまったものね。

ヒトは成長するものだけれども、ここまで変わり果ててしまうなんて、ああ、いつそ哀れだわ。

どこかで折れてしまえばまだマシだったのに、あなたの身体と心はもう、取り返しのつかないところまで来てしまったのね。

それなのに進む——いえ、だからこそ進むのかしら。

止まった方が賢明だとは忠告してあげる、まあ聞かないでしょうけれども。

精々この、終わりのない物語を終わらせられるように頑張りなさい。

言うだけ言つてステンはピョンツとメドゥーサから飛び降りた。姉さま!? というメドゥーサの声が響くが、それを無視するステンノと目が合った。

その瞳が、何を映しているのかは分からない。

俺に何を見出しているのか——はたまた、何も見出していないのかも分からない。

でも、それでも。

目が合ったままなのは何か言葉を待っているからだろうと、そう思った。

だから目を逸らさずに言う。

貴方が何を言っているのかは正直、半分も理解できてない。

俺はそこまで強い人間じゃない——でも、それでも、うん。

前には進むよ、道が無いなら、俺が道を作るってそう決めたから。ステンは、不思議そうに薄く笑った。

『起動せよ、起動せよ。観測所を司る九柱。』

即ち、フォルネウス、グラシヤールボラス、ブネ、ロノウエ、ベリト、アスタロス、フォラス、アスマダイ、ガープ。

我ら九柱、時間を嗅ぐもの。我ら九柱、事象を追うもの。

七十二柱の魔神の名に懸けて、我らこの集成を止むこと認めず』

『撃てええええええええ！』

いい加減聞き慣れてきすらした九重の声はしかし、直後の絶叫と銃声によって消し飛ばされた。

銃声——いや、正確に言うのであれば、それは砲声。

巨大な大砲から放たれる、強烈無比な一撃の音。

それは——かつて果てなき海で幾度も聞いた音。

それに混じって耳朶を打つのは、これもまた、酷く聞き慣れたやかましい騒ぎ声。

空を見上げた。

当然、そこに海は無い。あの時記憶に焼き付けるほど見た果てなき青は無い。

あるのはただの宙、あるいは宇宙——星の大海。

星の海を、二つの帆船が泳ぐように光の軌跡を描いていた。

その内の一つに拾い上げられれば、そのど真ん中にいた人物——黒髭がニカリと笑った。

お久しぶりでござるなあ！ 元気にしていたでござるか!? ”あの時”言っていた”次”が今でござるよお！ なんて言いながら彼は的確に船員たちに指示を投げていく。

遠くを見れば、もう一つの帆船はドレイク船長のゴールデンハインドの黄金の鹿号。こちらの砲撃に合わせるように連続して大砲の弾が飛ぶ。

もう飛んで飛んで飛びまくって魔神柱を消し飛ばしていく、正直目を疑うような光景ですらあった。

す、すご……と思いつつも思い出す。

黒髭の宝具であるこの船——女王アンの復讐号は乗船している英霊が多ければ多い程その力を増す船だ。

俺達が乗る前から相当な火力を誇っていた船だ、となれば他にもいるのだろう——と見回そうとしたらクイツと手を引かれた。

メアリー・リード。小さな身体に似つかわしくない二丁のカトラスを携えた、銀髪の美少女が笑みを浮かべていた。

久しぶりだね、マスター。

そう言った彼女と改めて握手しなせばドーン！ と横から柔らかない衝撃がやってくる。

衝撃に対して柔らかいと表現するのは些か不適切な気もするがしかし、そうとしか言いようがない。

お久しぶりですわね！ マスター！ という明るく快活な声。

メアリー・リードのパートナー。

彼女とはある意味対極とも言える、高身長で出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる言わばグラマーな美女——アン・ボニー。

どちらも黒髭と同じようにオケアノスで戦ってくれた英霊だ。

ていうか別に俺、どっちのマスターでも無いんだけど……。まあそれらしきものと言えはそうとも言えるから、決して間違っても言えないのだけれども。

来てくれたんだなあと思えばワシツと頭を誰かに掴まれた。

いや、掴まれたというよりは撫でられたという方が近いだろうか。かなりでかい手だ、と視線を上げればそこにいたのはエイリーク。あの時と同じ物騒な斧を持ち、しかしフツと笑った。

あれから随分と鍛えたのだな、と。

……!?

しや、喋れんのお!?

思わず叫べばエイリークは苦笑して、誰も喋れないとは言っていないだろう、と言う。

いや、そうだけど、そうじゃないじゃん……!

俺、今その言葉聞くまでアンタの声「うおらあああ!」と「ダダダダダッ!」とかししか聞いたこと無いからね?

声って言うか最早奇声オンリーなんだよな……。

そういうものなんだと思ってた……。

そう言えば彼は、手に持つ斧を一瞥し、我が妻——グンヒルドは嫉妬深い妻でな。

話した相手をたまに呪うんだ、と言った。

……こ、こわっ。

船に乗っているからか、比較的安全で和やかな再会をしていたが、そこでようやくと言わんばかりに黒髭の聲が飛ぶ。

ようし野郎ども! 気合入れていくぞお! と叫び、それに呼応しながら前を見据えればそこにはやはり、多くの魔神柱がいた。

アレを乗り越えなければならぬのだ、ゴクリと喉を鳴らしたが、しかしそこであるものを見た。

黄金の鹿号、女王アンの復讐号の二つにも劣らないほどの帆船が何よりも速く宙を駆け——そして。

何かが飛び出した。

見ようによつては射出されたかのようなそれは——いや違う、アレは人——英霊！ 英霊：ヘラクレス！

てことはあの船は、アルゴ号！——つまり、イアソンと、彼が率いるヘクトール、メデアリイ！

基本的には彼らは、当然と言えば当然ではあるが、良い記憶の存在ではない。

特にヘラクレスなんてトラウマものだ。

だけど、それでも。

否、だからこそ。

その強さを、怖さを、恐ろしさを知っているからこそ。

頼もしさが良く分かる。

神代の魔術師、メデアリイのバフを一身に受けたヘラクレスの一撃は正しく天を墜とし地を砕かんばかりであった。

その両手に握られた両刃の斧が振るわれる度に魔神柱が斬り散らかされていく。

そして、そんな彼が縦横無尽に動けるように、アルゴ号は宙を走り、メデアの魔法とヘクトールの槍は飛んでいた。

壮観ともいえるかもしれない。

果ての海での戦いでは苦戦を強いられたがしかし、やはりイアソンは——あの時のイアソンが愚かであったのは間違いではなく。

指揮するものとしては劣っているように見えた（だからこそ勝てたのだろう）が、しかし今の彼はそうではないというのが分かる。

劣勢であればあるほど強さ——あるいは本質を発揮するタイプの人だったんだ……と何となく親近感を覚えれば女王アンの復讐号は急激に速さを上昇させた。

魔力を爆発的に吐き出して、大砲を撃ち出す感覚が短くなっている。

——と、突撃でもするつもりか!? と叫べばニヤリと黒髭は笑う。

拙者たちはマスター殿をお送りせねばならぬでござるからなあ……！ なあに安心するでござるよ！ 魔神だが悪魔だか知らねえ

が——関係ねえ。

この超海賊黒髭様が、全部まとめて地獄で後悔させてやらあ！  
オラオラオラオラア！ と黒髭の魔力がそのまま砲弾へと変換され撃ち放たれていく。

ただでさえこの船そのものが黒髭の宝具そのものだ。

一撃一撃が魔神柱すらも怯ませる怒涛の破壊力。

す、すげー……と思わずポカンとすれば「こら、マスター」と背中を叩かれた。

そろそろなんだから、気合入れてよね、とメアリーが言う。

それに応じるように、アンが道は開きますからご安心くださいませ、と。

と言つても、長い間開けるといふ訳でもなければ、何度でも出来ることではないのであるべく一度に、そして迅速に向かつてくれると助かりますわ、と。

無様なところだけは見せないでよね、と。

彼女らは加速を続ける船の、船首へと向かう。

同時にメドゥーサが俺の身体を掴んだ……というよりは最早抱きしめているとかさういった表現の方が近い気はするが。

取り敢えず抱えられた俺の目の前で、二人の女海賊は軽やかに宙を舞う。

——ここから先の未来も、ここまで経てきた過去も。

——残念ながら、ぜーんぶ、僕たちのものなんだ。

——本当、我がままでごめんなさいね？

——でも、これが海賊つてやつだからさ！

——さあ、海賊のお通りです！

——カリビアン・フリーバード比翼にして連理！

二丁のカトラスが無尽に舞い、マスケット銃から放たれた幾つもの弾丸は不可解なほどの軌跡を作り出して三次元的に魔神に穴をあける。

だが足りない、まだ足りない。

無限に近い有限を保持する魔神柱は今だ壁のように立ちはだかつ

ていて、けれどもそれを突き破るかの如く、彼は跳んだ。

その手にあるのは斧——血を啜る斧、血に濡れた戦斧。

エイリーク・ブラッドアクス、俺の知る限りではバーサーカーのクラスに相応しく、その理性を捨てたかのような大男。

実のところは理性的に振る舞うことのできるノルウエーを支配したバイキングの気高き王。

王として君臨したのはほんの三年ほどでしかなかった彼は、しかしあまりにも凄絶な異名を持つ。

——血斧王。

血に塗れ、血を啜り、血を求め、血を巻き散らかして、血と共にある、非情の王。

ある意味アン・ボニー&メアリー・リードと同じような二人組のサーヴァント——妻であるグンヒルドと共に顕現した彼が、弱いはずがない。

——血塗れの戴冠式。

兄弟姉妹を殺戮した彼に相応しい、血に濡れた王冠が——狂気がエイリークの全てを引き出させる。

理性は消え失せ、絶叫を轟かせた彼が振るう一撃一撃は文字通り一撃必殺。

血を啜れば啜るほど強力に進化するその斧は、魔神柱の血を啜りパフォーマンスを上昇させ続ける。

強力な魔術師——呪術師といっても良いグンヒルドのバックアツプがついた今の彼は、ギリシャにおける大英雄ヘラクレスにさえ手が届く。

黒赤の一撃が、幾重にも重なって道をぶち空けて——そして。

後押しするように女王アンの復讐号から飛び出した砲撃が穴を道にして、女王アンの復讐号は怖ろしい勢いで通り抜ける。

同時に飛び出そうとしたメドゥーサを少しだけ抑え、黒髭とハイタッチする。

ここは任せた。

そう言えば彼は、やはり悪そうに笑っておう、さつさと奪い返して



こい、とそう言った。

『起動せよ、起動せよ。管制塔を司る九柱。

即ち、バルバトス、パイモン、ブエル、グシオン、シトリー、ベレト、レラジエ、エリゴス、カイム。

我ら九柱、統括を補佐するもの。我ら九柱、末端を維持するもの。七十二柱の魔神の名に懸けて、我らこの統合を止むことを認めず』

九重の声はしかし、霧散する。

高らかな、ともすればこの場にはあまりにも似つかわしくない少女の声の元、言葉通り、霧に散る。文字通り、霧に霞む。

ぼやけ、移ろい、曖昧に、ぼやけ、輪郭を喪い、覆われる。

薄く、広く。

濃く、纏うような霧が。

己がどこにいるのか、なぜここにいるのか。

己が誰なのか、仲間是谁なのか。

全てが前後不覚に陥る霧の中で、それは走った。

超高速、振るわれたその軌跡を追うことしか許されない神速の多重連斬。

血のように紅く、美しいそれは霧ごと魔神柱をバラバラに切り裂いた。

ジャック・ザ・リッパー——かつて、魔の霧に落ちたロンドンにて死闘を繰り広げた幻のシリアルキラー。

まあ、本当に存在したのかどうかすら曖昧である彼——もしくは彼女であったそれは、されども伝承に基づいて生まれた、産み落とされた反英雄。

影のような黒の衣を纏い、光を弾く白銀の髪を靡かせるジャック・ザ・リッパーは、幼女である。

そう、幼女。

しかももつと言えば戦いはしたけど全然会話とかしたことないんだよな。

だから……その、ぶつちやけ怖いというか、怖ろしいというか、震えちやうというか、まあそういった感情を持つていたんだけど……。ええ？ マジ？ あんな無邪気そうな笑い声を響かせながら斬りまくってるのがあのジャック・ザ・リッパーなのん？

その実力が変だと言ってるのではなくて、ましてや幼女であることに驚いたとかいうのはもう半年近く前に通り抜けていて、では何なんだと言え、その……初対面の時とのギャップが激しすぎて思わずアホ面を晒してしまっていた。

や、だって俺の中だとあの幼女ガチ殺人鬼だからね？

無表情かつ無言——というかよく聞こえないボリウムで何か眩きながら殺しに来たという印象しかない、言ってしまえばトラウマものの英霊だ。

それが、ええ……？

どういう心変わりなのかしら……それとも何、あの時は反抗期だったとか？

親と口をきかないとかしちやうお年頃だったってこと？ な、なんか嫌だ……。

まあそんな訳はないだろうから——まあ、なんだろうな、もしかしたらあの姿が彼女の素なのかもしれない。

見た目相応に幼女をしていながらも、確実に英霊であるジャック・ザ・リッパーの本質があれという可能性はまあ、大いにある。

ま、兎にも角にも味方であるなら頼もしいの一言でしかないだろう。

はわわ……とか言ってる場合じゃないな、と思えば肩を割としつかりめに叩かれた。

否、叩かれたというよりは掴まれたというべきか、置かれたというべきか。

何はともあれ左へと目を向ければそこにいたのは一人の巨漢。

スマートに筋肉をつけたその男を、更に見上げてようやく誰かを察す。

星の開拓者、神のみが持つとされていた権能、雷を地上に引きずり

おろし、人の手に落とした大天才、大英雄——ニコラ・テスラ。  
かつてあまりにも巨大な敵として立ちはだかり、そしてアメリカでは加勢してくれた英霊が、そこにいた。

安心したまえ、とテスラは言った。

彼女もまた君の手助けとなるためにここに現れたのだ、と。

パチリパチリと嫌な記憶を想起させる雷電をその身から引き起こしながら、そして！ と叫ぶ。

この天才もまた、君たちの助けになるために馳せ参じた！ 無理は禁物だ、私の後に続くとよい！

ふ、ふふ、ふははははは！ 見よ、神鳴る雷霆は此処に在り！ 三相交流電流が冴え渡るわ！

——と、そう言い切った直後に彼は音を超えた。

いや、正確に言うのであれば、俺たちを連れて彼は雷を纏い、音を突き破ったのだ。

一瞬にして、空中へと移動したテスラはかつてのロンドンで、空へと昇る階段を作り上げた時のように、ご丁寧な雷の足場を作り。

そしてその手を掲げ——叫びをあげる。

叫ぶように、魔神柱へと問いを投げかける。

神は、神とは何か知っているかね——そう、雷電だ。

遙か古代より多くの人々がそう信じ、そして実際のところそうだったのだろうか。

ギリシャ神話における主神ゼウスしかり、仏教における守護神帝釈天しかり！ 雷は天上より来る神なる力——ゆえに！

見るがよい、慄くがよい、私が地上へと降ろし、導いたこの輝きこそが、大いなる力そのものだ！

旧き時代、古き神話に別れを告げよ！ 文明は人によって築き上げられた！

其は、人類にもたらされた我が光——人類神話・ケラウノス

雷電降臨！

——それは、その宝具は。

人類における大天才、ニコラ・テスラが成し遂げた「雷電を人類にもたらした」という生前の大偉業であり、

雷電そのものが生み出してきた無数の伝説的神秘そのもの。

神とすら崇められ続けた超膨大な雷が、魔神柱へと一斉に降りかかる。

赤色のようであり、青色のようであり、紫色のようでもある莫大な雷電は正しく神域の一撃。

その手から放たれたそれは、一瞬にして”魔神”を薙ぎ払い、同時に俺の背中へと手を触れる。

さあ行きたまえ、とテスラは言った。

ここはこの天才が引き受けよう、しからは君たちは先へと進むべきだ。

長い道のりだ、しかし、これまでの道に比べればゴールは目前と言っても過言ではあるまい。

それに——先ほども言った通り安心したまえ。

魔王のもとまで君たちのことは少しも消耗させはしない、と。

言葉を切ると同時に背中を押された。反射でメドゥーサたちを掴めば瞬き一回の内に更に先の空中へと押し出された。

もう瞬間移動みたいなもんだ——ってそんなこと考えている場合じゃないが!?

メドゥーサ！ 天馬天馬！ と言うより早く身体はがっしりと誰かに捕まえられた。

というか、順序的には空中にあるまじき足場のようなものに降り立った感覚を味わい、それに動揺する前にぐわつと捕まえ寄せられて、しかも跳んだのだ。

——よっしゃあ！ ついにオレっちの出番が来たようじゃあねーか！ と。

異常に筋肉質なその腕に、俺は覚えがある。

あまりにも英雄然とした、その威勢のいい声に俺は覚えがある。

——天を断ち、地を割り、魔神どもごと宙を裂く！ おおよ、これが電火の宝刀！ 今、必殺のおお！

空気すらも歪ませる、黄金色の雷電を俺は知っている。

振り上げられたその戦斧を俺は知っている——つて、そうじゃねえ

！ ちよつと待って俺抱えたままやっちゃうの!?

そう叫ぼうとした声は、しかし超高速で急降下しているせいで言葉にならない。

彼の口上は、終わりを告げる。

——天下無双、Gooooooooolddeeeenn! Spa  
aaaaaaaaaaaaaaaaark!!

光り、弾け、灼き、渦巻き、壊れ、爆発し、叩き潰す。

黄金の雷電による一閃。何よりも強力な神鳴る一撃。

あらゆるものを粉碎し、道を明るく切り拓く英雄のそれは、正しく魔神を蒸発せしめた。

特徴的な彼のサングラスが、キラリと光って叫ぶ。

おうおうおうおう！ 久しぶりだなあ、大将！

なりふり構わず来たぜ、呼ぶ声が聞こえたからなあ！

アンタの助けを求める声が聞こえた！ 藤丸の力を貸してほし  
いって声が聞こえた！ そして——もつとか細くて、弱い声が聞こえ  
た！

お前らが世界を灼いた瞬間に叫ばれた、悔しくてやりきれないって  
いう、無数の声が聞こえた！

やりたいたいがどんだけあったらどうな、飯をこさえる母がいた、  
明日も遊びたいガキがいた。

ひたすら夢見て努力を重ねてたやつだった、思いを新たにやり  
直そうと思ったやつがいた！

オレにはてんで分からねえ、そういうものがよ、どれだけ大切なも  
のか分からねえやつのことがまつたく分からねえ！

だから大将、オレはよ、人理の為だなんて大袈裟なことを言う前に、  
こいつらの性根を叩きなおす！

人理を、未来を取り戻すのはアンタの役目だ。こいつらが焼き尽く  
しちまった未来の為に、オレはあいつらをぶん殴る！ それでもその

手に未来を掴むのはその手だ！

任せるぜ、と彼は笑って拳を出す。

本当、この人は——坂田金時という男は、英雄すぎるくらい、英雄だ。

聞いてて泣きそうにすらなってくる、これが本物の英雄なのだと、憧れすら覚えた。

もちろん、と答えた拳をぶつけ合わせる。

そうすれば金時はやはり笑ってから、戦斧で魔神柱をなぎ倒し、  
ようしくぜえ！ と雄たけびを上げた。

己を魔神どもに知らしめるように。

英雄は此処にいるのだと宣言するように。

お前らの相手はこのオレだと謳うように。

彼は言葉を紡ぐ。

——オレは金時！ 坂田金時、音に聞こえた頼光四天王！

悪鬼を制し、羅刹を殴り！

時にはゴールデンなマシンを駆ってひた走る——！

雷電一閃！ ゴージャス・ゴールデン・ライダー——変・身!!!

.....

.....変身!!?

ドギャン、と高濃度の魔力が爆発のように展開された。

それはまるで閃光でも弾けたのかと言わんばかりの白光で思わず  
目をつむり、ややしてから目を開ければそこにはライダースーツに身  
を包み、やたらイカすバイクに跨る金時がいた。

ドルルン！ とエンジン音が吹き鳴らされる。

.....か、かかつ、かつけええー！

霊基ごと変化してねえか？ とかいたるところに突っ込みどころ  
はあるが、しかしやはりこの格好良さの前ではそれもどうでもよくな  
るというものだ。

え？ マジ？ やっぱあ.....

ふええ乗りてえ.....と口を抑えてたら金時が乗りな！ と親指で

後ろを指す。

やったぜ！ と飛び乗れば律儀に俺の頭にヘルメットをかぶせてから、金時は言う。

さあて、お立合い——！

電力全開！ クールかつデンジヤーにぶっこみ決めるぜ！ 泣いても笑っても後戻りなんてノーセンキュー——！

ロックン・ロールの準備はOKかい!? それなら行くぜ——  
ゴールドドラゴン  
黄金疾走！

黄金の雷電が地を駆け抜ける。

あらゆる障害を弾き、潰し、焼いて押し通る。

正しく英雄の宝具——ではあるが、いくら何でも現代的すぎる、と笑ってしまう。

これでも俺だって——無免許ではあるが——バイクを運転したことくらいはある。

それだけにこれがただのバイクではなく、バイクを模した何かだとは分かるが、しかし良くやるものだ。

まさかこんな局面で爆笑することになるとは思わなかった、と二人して笑っていれば、ふらりとそれは視界の端に現れた。

それ、というよりはそれら、というべきか。

玉藻の前が、メドウーサたちを連れて宙を飛ぶように現れたのである。

まったく、一人で突っ走られては困ります。

わたくしたち、全員でチームのようなもんなんですし、一人だけ突出したのに付き合っただけのめりに共倒れなんて勘弁ですよ？ と。

悪い悪い、と悪びれることなく謝る金時に張り付きながら、ああ、さっきの足場はやっぱり玉藻の前のだったんだと、思う。

ありがと、と短く言えば玉藻の前は目を細める。

本当であればありがとうございます、と平身低頭で言ってもらいたいところではありますが、いえ、仕方がないので勘弁してさしあげましょう。

それにもう随分と、場慣れしてしまったようですし、と俺の額に手を当てる。

手、というか指、というか。

人差し指と中指を添えて、憐れむように笑んだ。

ボロボロですnee、と玉藻の前は言う。

外も内も、もう酷いくらい。

ですが、そうなるとも思っておりましたとも、ええ。

ですから、私から伝えるのはただ一言のみにしておきます。

——勝ちなさい。

何が何でも勝ちなさい、負けることだけは許されません。

人理の為でもなく、人類の為でもなく、誇りの為でもなく、ただ貴

方の為だけに。

そのための道くらいは、私たちが切り開きましょう。

そのためであれば、魔神くらいは制圧してみせましょう。

さあもう少し、頑張ってくださいまし、と。

指が離れると同時に身体の疲労が抜け落ちる。

ありがとう、と言った俺にええ、はい、とだけ返した玉藻の前はで

は金時さん、と言う。

後はお願いますわね、とメドゥーサたちをドシツと押し付けて彼

女はフワツとどこに行ってしまった。

別に戦線を離脱したという訳ではないのだろうけれど。

まあ玉藻の前は基本的には支援系の英霊だ、こんなところにいるよ

りかは全体を見通せる場所の方が動きやすいのだろう。

流石に五人乗りはクレイジーだぜ!? と金時は言うが、それでもバ

イクのスピードは落ちずに上がり続ける。

仕方nee、しつかり捕まってるよ！ と叫ぶや否や、宵闇を裂くよ

うな黄金が魔神柱時には弾き、時には間を縫うようにして嘶き駆けた。

オレに出来るのはここまでだ、後は大将、アンタ次第だぜ、と胸をドンと叩かれる。



そつちも頼んだ、と叩き返せば彼はニヤリと笑ってまたバイクを駆って消えていく。

そうすれば訪れるのは一瞬の静寂だった。

否、正確に言えばあちらこちらから爆音や戦闘音は響いている。ただ、ここだけはその狭間にいるようで、何だか不思議な感覚ですらあった。

不思議というか、変というか、おかしいというか。

まあいつか、と歩を進めようとすれば「まだこんなところにいたか」というやたら渋い声が通り抜けた。

赤茶の表紙の本をパタンと閉じて、ニヒルに彼は——アンデルセンは笑う。

一つだけ、助言をくれてやる。

もちろん、これは余計な世話となるだろう。無駄な話にすらなるだろう。

だがまあ、聞いておけ。

頭のどこか片隅に留めておくだけで良い、心のどこか端にでも追いつている程度で良い。

目を向けたら視界に入るか入らないかくらいの場所に置いておいてくれれば良いだろう。

いいか、俺は物書きだ。

物書きにとって自分の作り上げた、書き上げた本というのは切り離れた魂とも言えるだろう。

だがな、それにも種類がある。

何かと言えばそれは当然「書きたい話」と「書くべき話」だ。

この二つは別物だ、分かるだろう？ いいや、分かれ。

作者が妄想を自由に羽ばたかせ、なにより作者本人が楽しいものが「書きたいもの」。

作者を思想で磔にし、なにより作者本人が苦しいものが「書くべきもの」。

お前がこれから紡ぐ物語は言われるまでもなく——書くべきもの、作り上げるべきもの、成すべきことなのだろう。

だがな、これだけは憶えておけ。

お前は別に、使命として、義務として、責任として「書くべきものを紡がなくても良い。」

お前は——書きたいものを書いても良い。紡ぎたい物語を紡げば良い。為したいことを、為せば良い。

……フン、少々長くなりすぎたな、これではもう締め切りまであと僅かだ。

もう今までも多くの英霊どもに言われてきただろうが敢えて——そう、敢えて言わせてもらおうか。

さあ——此処は俺達に任せて先へと進め、とな。

『起動せよ、起動せよ。兵装舎を司る九柱。』

即ち、ハルフアス、フルフル、マルコシアス、ストラス、フェニクス、マルファス、フォカロル、ウエパル。

我ら九柱、戦火を悲しむもの。我ら九柱、損害を尊ぶもの。

七十二柱の魔神の名に懸けて、我らこの真実を瞑ること許さず』

——では答えましょうか。

ザリ、と土を踏み、女は言った。

戦場でありながら、しかし切り裂くように、水面に落とした雫のように透き通る声。

朱と灰を混ぜたかのような、それでいてどこまでも美しい髪を長く伸ばした女。

紅の軍服に、純黒のコートを羽織り、血よりも紅い眼をした女。

どこまでも純粹に、突き詰めた狂気に好んで身を浸らせる女。

奉仕と献身を信条とする、クリミアの天使——ナイチンゲール。

彼女は一人、魔神柱の群れの前に立ち、黒の銃口を真っすぐと突き付けて。

静かに、静謐に、言葉を返した。

戦火を悲しみ、損害を尊ぶのは人として当然の常道——ですが、人はその先へと進まねばなりません。

ええ、そう。

ただ茫然と立ち尽くしているのではなく、諦観の下見しているだけのでもなく。

悔しさに奥歯を噛むのでもなく、怒りに打ち震えるのでもなく。燻る戦火をその手で消すように、這い上がる硝煙をその手で払うように。

親を、きょうだいを、友を、恋人を、愛する者たちを失った者たちが、これ以上何も失わないように、失われないように、失われないように。

私が——私たちが、此処に立ち、あなたがたと対峙するのです。

そう言い切ったナイチンゲールは、しかし「ああ、それより先に」とグルリと振り返って俺を見た。

瞬間、やべっ！　と思う。

絶対「治療！　不衛生！」とか何とか言って顔面アイアンクロード！　と短くはあるが、アメリカでの彼女との付き合いを思い出して顔を守るように隠す。

——が、覚悟したような衝撃は来なかった。

あ、あれ？　と拍子抜けしたように手を下ろせばスウツと腕の間を縫うように、ナイチンゲールに襟を掴まれた。

掴まれて、引き寄せられる。

いつそ口同士がぶつかるんじゃないの!?　つてくらい顔を近づけてきたナイチンゲールはまじまじと俺を見る。

見る、というよりは観る、もしくは診る、あるいは見るだったのかもしれない。

白衣の天使：フローレンス・ナイチンゲール。

狂気に全てを委ねるほど治療を追い求めた彼女は、かつてのように俺を治療対象だと宣うのだと思っただが、しかしその予想は大きく外れた。

ナイチンゲールは一つ小さくため息を吐き、相変わらず——いえ、悪化していると言っても良いのでしょうかね、と言った。

私の嫌いなものは「治せない病氣」と「治ろうとしない患者」です。

いかな病であろうとも、治ろうとしてくれなければ、手の出しようがないのですから。

その病はあなたの内に巣食って静かに、大きく、緩やかに広がっていた。

それは治さなければならぬものだ、治らなければならないものだ、思っておりまして。

ですが、あなたに限ってはどうかやら見方を変えなければならなかったようですね。

それもまた、あなた自身であったのだと、そう診るべきだったのやもしれません。

——いいえ、違いますね、言い訳です。

私は何としてもあの時、アメリカの地で出会った時にあなたを治すべきだった。

あなたは治る意思を持つべきだった……患者であることを、自覚するべきだった。

しかし、あなたはそのまま、ここまでひた走ってきた。

そんなあなただからこそ、ここまで来れた。

ですから今は、今だけは、あなたの行く道を阻む障害を打ち払いましょう。

あなたがこれ以上、傷つくことがないように。

一発の銃弾を皮切りに、戦闘は激化する。

ナイチンゲールは確かに英霊だ、狂化のスキルを与えられたバーサーカー。

ヘラクレス等と比べれば戦力としては一歩劣りはしても、しかし一流の英雄——だが、決して彼女の本分は戦闘ではない。

というか、彼女にとって戦闘とは殺し合いではないのである。

飽くまで治療、病原を取り除き、病みを払うのが、彼女の本質——ゆえに、ナイチンゲールの放った銃弾に呼応したのは、魔神柱だけではない。

いつだって前線で戦うのは鍛えられた戦士たちだ。

かつて見た、不滅の刃が闇を祓い翔ける。

それは星のように美しく、それでいて凄絶な、極みの一撃。

輪のように超高速回転しながら引き裂き続けたそれは鋭く彼の王の手元へと戻った。

再度魔力を装填しながら、彼は歩を進める。

夕日を宿したような瞳が前を見る、太陽を融かしたような橙の髪を揺らめかせて、吠えるように言う。

我が名はラーマ、コサラの王ラーマ！

我が戦友ともの助けとなるために、我が戦友が守りたいものを守るために、ここに馳せ参じた！

これより全霊を以て、戦友の盾となろう！

——ブラフマーストラ羅刹ブラフマーストラを穿つ不滅アアアアア！

投擲された刀剣は円環のように回転し、あらゆるものを引き裂くように天を穿ち翔ける。

先ほども見た通りその一撃はほぼ必殺。

そもそも、ラーマ自身が別格とでも言うべき程の大英雄だ。

そんなラーマは、しかし気安く俺の肩を叩いた。

案ずるな、しかし恐れよ。

喪うことを恐れるからこそ、誰かを大切に思うことができる。

喪うことを恐れるからこそ、自分を大切に思うことができる。

余がラーヴァナと戦った時、心中にあったのは恐れであった。

ああ、そうだ、余は恐れた。シータを喪うことを、心の底から恐れたのだ。

だからこそ余は戦い続ける道を選ぶことができ、そして今、ここにいる。

いいか、友よ。

魔神の言葉に絆されるなよ、あれは諦観の末に辿り着いた飾り物にすぎん。

飾り物であるから、まばゆく見える。

取り繕われているから、整って見える。

だが、そうではないだろう、友よ。

おぬしが進む道とは、諦めとは対極の道。

幾度もの苦境を、それでもと前を見据えて上を見上げ進んできた、おぬし自身が作る道だ。

さあ進め、最高のマスター、誇らしき我が戦友よ。

盾というよりは、剣の方が合っていたかもしれぬな、とラーマは笑い、地を蹴った。

その一閃一閃が魔神を薙ぎ倒し行く様を見て、まあ確かにそうかもなあと思った。

盾にしてはいささか凶悪すぎるし、そもそも彼はセイバーだ、と笑みをこぼし——急激に姿勢を落とした。

崩れ落ちるように膝を折りたたむ、瞬間頭の上を何かが通り抜けた。

音もない、神速の突きが押しのかけた風が舞う。

身体を裏返すように反転、そのまま落ちてきたそれを片腕で防ぎ、流しながら身体を跳ね上げた。

礼装を展開しているような隙は無く、振りかぶっている暇もない。だから——こうだっ！　と思いつきり頭突きをかまそうとしたら

足を横から蹴られてすつころんだ。

そのまま槍がガツ！　と顔の真横に突き刺さる。

そこから視線を上げていけばそこにいたのはスカサハだった。

いやまあ、そのやたら光る朱槍と、メドゥーサたちが手出ししない時点で察してたけど……。

本気で振り下ろすのは良くない？　めっちゃ痛いけど……。

そんなことを考えながら大の字になる俺を見て、スカサハは笑った。

ふうむ、及第点だな、と言って。

多少はまともになったとは言ってやろう——いや、この短期間で伸ばしたにしては随分伸びたと言ってもよい、か。

たまには飴もやらんとな、鞭一方では人というのは壊れるらしい。それに——と、そこで言葉を区切り、やはりスカサハはあの時のように俺の目を覗き込んだ。

あの時と違うのは、髪ひつつかまれて引き寄せられてんじやなくて、押し倒されてるみたいになつてることくらいだ。

さっきのナイチンゲールと言ひ顔が近すぎんだわ……等と言える心境ではない。

だが、それでも、間違つた道だけは進んでこなかつたと思つていから、そらすことなく見つめ返した。

とても赤い——朱色の瞳。血のような赤さではなく、どこか神秘さを感じるような不思議な、美しい瞳が俺の眼を通して俺を探っているようだった。

不意に、スカサハは吐息を漏らす。

おぬしは勇者という柄ではないな、と嬉しそうに。

相も変わらずポロポロで、見ようによってはどこまで弱々しそうで、だが、軟弱さが消えた。

蛮勇と勇気を履き違えなくなった。そうだ、おぬしは死兵ではない。

それが分かつたようなら、安心したよわしは。

ただ——そうだな、重荷は分かち合え、抱え込むな。

おぬしにそんな器などない、ましてや、その過大な自己犠牲精神は見ていて酷く不快だ。

くく、課題は多いな？ とスカサハはコンコン俺の額を叩いてから起き上がった。

ついでに力づくでグンツと起こされて、痛めた腕を癒される。

せいぜい、全力を尽くしてこい、不肖の弟子よ。

力くらいなら、ああ、貸してやろうとも。

そう言つて、スカサハは槍を構える。

トラウマになるほど見た朱色の槍、それは赤白く、神々しい光を放

ち——

ガイ・ボルク・オルタナティブ  
貫き穿つ死翔の槍！

一筋の閃光と化した。

そら、さつさと行け！ と蹴りだされるままに走り出す。

つか地味に蹴られた背中がいてえ！ そこくらいは加減してくれても良くない？ と思ったがここで加減されたらされたで気持ち悪いな……と思いなおす。

優しいけど優しくない、そういう人——英雄なのだ、スカサハという女は。

あるいは甘やかしてはくれない、と言つても良いかもしれない——少なくとも俺に限っては、という話ではあるが。

いや、もしかしたらあれはあれで激アマだったりするのかもしれない、比較対象がいないと分かんねえな……とまで至った思考をフルフルと追い払う。

後で考えてもいいことは後回しだ、と前を見る。

前を見れば——そこには、一人の男がいた。

いや、正確に言うのであれば、視覚だけで得られた情報だけであれば、それを男性と断言するには少々難しかったかもしれない。

巨体ではある、だが類を見ない程という訳ではない。2 mにも達していない程だろう。

それに彼はフードを被っていたし、もつと言えば俺たちに背を向けている形だった。

だが、それだけで充分だった。

充分すぎるくらいだ、なにせ忘れようと思つても忘れられないような人なのだから。

一瞬だけ悩んでから、その横を駆け抜けければ低い声が耳朶を打つ。

——形はどうあれ、一度結んだ縁だ。義理は果たす。

あまりにも端的、だがそれ以上は不要だった。

どす黒く染まった朱の槍が、出来上がった道を閉ざさせないように振り乱れる。

魔神柱を貫き固定するように、禍々しくその命を喰らい尽くした。

【狂王】 クー・フリーン・オルタの”支援”とは言い難いような乱撃



はしかし、確実に俺たちを守った。

す、すげー……と語彙を投げ捨ててたら「遅い遅い！　ほうら早くいくわよー！」という声と共にUFOに吸われた。

は？　UFOに吸われたってなに？

——我が手にはドジアンの手書。

光よ此処に、天にハイアラキ、海にレムリア、そして地にはこの私——ってね。

久し振りと言うべきかしら？　随分と遅くなったのね、見違えたわ。

と、このUFOの主——エレナ・ブラヴァツキーはそう言った。

いやそう言った、じゃないが。

え？　これマジUFOなの？　うわすげえ！　と興奮してたら落ち着きなさいな、とデコを弾かれた。

ていうかあんまり暴れないでくれたら嬉しいわ、流石に定員オーバーギリギリだし、と笑う。

まあさつきからフラフラフラしてるしな……と外を覗いたら、でも安心なさい！　とエレナは言った。

トップスピードでぶち抜いてあげるから、と。

それはそれで大丈夫なのん……？　と不安をこぼす前にUFOはギョオン！　と速度を上げる。

思わずぐえつと尻餅をつけば彼女はポン、と俺の頭に手を置いた。

ここまで来るのに色んな英霊から、たくさんのお話を言われて、もう頭いっぱいかもしれないけれど、それでも私からも少しだけ伝えさせてもらおうわね。

といってもそこまで難しいことじゃないのよ。

私達英霊——英雄とされた人、偉人とされた人達つてのはね、当然同じような人は誰一人としていない。

英霊、反英霊だなんて分けられるくらいじゃ全然足りなくらい、千差万別よ。

でも、一つだけ共通点があるとすれば、それは意志の強さだわ。

これだけは守り通す、これだけは貫き通す、これだけは譲れない。そういつた強さ——あるいは、私の強さと言つても良いかもしれない。

ここまで出会つてきた英霊たちから言われた言葉、そしてこの先でも言われるであろう言葉も全ては、私も含めて、彼ら彼女らの私の強さから生み出されてる。

だからね、正解なんてないのよ。

全員の声に答えるのは不可能だわ、でも、貴方は貴方自身の声になら答えることができる。

誰かの声に、耳を貸しても良い。

誰かの言葉に、胸を打たれても良い。

誰かの意志に、共感しても良い。

けれども、誰かの意志に、思考に、ただ従うのだけはやめなさい。

それは時として、貴方の目を見えなくさせてしまうものだから。

誰かの言葉じゃなくて、貴方の言葉で。

誰かの心ではなく、貴方の心で。

貴方はその目で前を見るべきだわ——なんて、言葉遊びみたいだったかしら？

まあ、そうね、一言でまとめるのなら——大いに悩みなさい、若人よ、つてとこかしら。

エレナはニツコリと笑つて、俺の頭をぐしゃぐしゃ撫でた。

『起動せよ、起動せよ。視覚星を司る九柱。』

即ち、アモン、バアル、アガレス、ウアサゴ、ガミジン、マルバス、マレファル、アロケル、オロバス。

我ら九柱、論理を組むもの。我ら九柱、人理を食むもの。

七十二柱の魔神の名に懸けて、我らこの憤怒を却すこと、断じて許さず！』

エレナに送られて、軽く地を蹴った俺達に、降り注ぐように声が降る。

魔神柱にしては珍しい、覇気のような、怒気のようなものが籠った九重の音が響く。

何度聞いても、どこか不安げにさせられるような音であるそれはしかし、突如やってきた轟音によって弾き飛ばされた。

いや、轟音というか、なんとというか——それは、正しく物理であった。

たった一撃、されども慈悲の一撃。

俺より背が低く、しかし神々しい光を纏う女は音もなく地へと降り立って。

迷いの欠片も見せず振り抜いた拳——いや、掌底であるそれは、地面から引き剥がすように魔神柱をぶっ飛ばした。

シャンツと涼やかな、錫杖の音が宙を渡る。

長く伸ばされた、黒の髪が艶やかに光を弾く。

法衣を身に纏ったその女性は、しかし人とは言い難く——いや、英霊なのだから、当然なのだけれど、それでも。

女神のようだった、という表現が似合うと思った。

似合う、あるいは適切と言うべきだったかもしれない。

それくらい、美しく、麗しくて——そしてどこまでも、見慣れた人だった。

暫く暫く！ 間に合ったわよね?! これ私、完全に間に合ったわ

よね——ってああ！ お弟子！ お弟子じゃない！ 良かったあ、キ

ン斗雲まで持ち出した甲斐があったわ！ やっほー！ おっ弟子く

！

——口を開くと途端に近所に住んでる幾つか上のお姉さんみたいになるのは長所か短所か、議論する必要があるそうだな……。

悟りを開いた大偉人、仏教の伝道者——玄奘三蔵、あるいは三蔵法師。

正直なことを言えば彼女は、まあ来てくれるだろうなという半ば確信じみたものがあつた。

俺に自分のことをお師匠と呼ばせる彼女は、しかし本当に、どこま

でも善性に満ちた人、あるいは英雄、英霊だ。

いや、善性に満ちた、というか。

善性でできている、と言った方が適切かもしれない。

彼女の振るう手に宿るのはいつだって慈悲そのものだけだ。

慈悲を以て拳を振るい、愛を以て言葉を紡ぐ。

それは例え、世界を滅ぼそうとしている——もしくは、既に滅ぼしたと言っても過言ではない魔術王が相手だとしても変わりはない。

どちらに着くにせよ、そこには恨みや敵意、殺意なんてものはなごにもない。

それが「律儀」「経蔵」「論蔵」を修めた、名高き高僧——三蔵法師だ。

まあ、だとしても。

もう一度会えたのは素直に嬉しい、と思えばお師匠は、約束したもののね、と言った。

次出会った時は、お弟子のことをもつと助けてあげるって。

そうでなくとも、私はお弟子のお師匠様だから、ピンチには助けてあげないとなんだけれどもね。

よしよし——と、お師匠は俺の頭を撫でた。

それは俺からすれば、少しばかり意外だと思った。

お師匠は、確かに善なる人だ。

弱きを見捨てないどころか、脊髄反射で救いの手を差し伸べるような人。

慈悲と慈愛を持ち、常に優しくあるような人——だけれども、決して人を甘やかすような人ではない。

せいぜい発破をかけられるくらいだろうと思っていただけに、拍子抜けといった感じであった——等という思考は、しかしやはり無駄だったということに気付いたのは、その数秒後のことだった。

——一つ、弱者に優しく。一つ、困っている人を見捨てず。いつでも心がけていたのは分かっているわ。

良い子ね、流石あたしの自慢の弟子……だけど、その過程でまた、随分と強くなってしまうた。

身体、というよりもその心、あるいは魂。

あの日あの時出会った時からまた一段と大きく強くなった。

諦めず、立ち止まらず、下を見ず。

頑張つて頑張つて頑張つて、いっぱいいっぱいになっている。

知ってる？ 強さと孤独さは実は結構近くにあるの。

だからね、お弟子。

自分を見失わないで、周りをちゃんと見て、時には弱音をこぼしてみるのも良いのよ。

その歳でお弟子は重過ぎるくらいのものを背負ってしまった、けれど、それから逃げてもいいとはあたしは言わない。

だけど、それを支えるくらいのこととはするんだから。

だって、ひとりぼっちは寂しいし、怖いものね——と、お師匠はゆつくりと、頭から頬へと流れるように俺を撫でた。

その眼に秘められているのは慈愛か、あるいは慈悲か。

その手をゆつくりと掴んで離れた。

大丈夫、分かっているから。俺だって、一人は嫌いだからさ。

短くそう返す、というよりは長々と語るようなことでもなかったと  
いうのが事実だ。

たくさん言葉を並べて、装飾するようなことではない。

宝石のように透き通る目を見つめ返せばお師匠は笑う。

ごめんね、ついついお弟子のことは心配しすぎちゃうの、と言って  
前を向いた。

そろそろ行きましようか、と錫杖で地を叩く。

悪は叩く！ 善は急ぐ！ そーらいつくわよー！

ドンツと地を蹴り勇猛に、かつ果敢にお師匠は魔神柱の群れへと飛び込んだ。

それを追おうとすれば「待て待て」と肩を掴まれる。

視線を向ければそこにいたのは緑髪の男——俵藤太であった。

忘れるはずもない、キヤメロットにて力を貸してくれた、日本における大英雄。

一つあの時と違ふとすれば、米俵を持ち歩いていないところだろうか。

熱に充てられるのは良いが、主の出番はここではないだろう。

なあに、三蔵のことなら拙者に任せておけ。

吾とてあやつの弟子だ、つまり拙者は主と兄弟弟子ということになる。

うむ、弟弟子の出番はもうちつとだけ先だ、だからここは兄弟子のかっこいいところを目に焼き付けていくと良い。

吾と三蔵で、魔神共に穴を穿いてみせよう。

その片手に担がれるのは、その巨軀よりも大きい五人張りの弓。

それに矢をつがえ、迷いなく彼は弓をしならせ口を開く。

——南無八幡大菩薩、願わくばこの矢を届けたまえ。

それは祈り、あるいは願い——もしくは祝詞。

宝具というのは英雄の伝説や伝承であることがほとんどだ。

であればこの一撃は、つがえられた矢は、神すら喰らった大百足を仕留めた神話の一矢。

美しい流水が、どこからともなく頭れ俺たちごと包み込む。

それはきつと、大百足退治を彼に依頼した、龍神による加護そのもの。

俵藤太はふう、と少しだけ息を吐き、それから俺を見る。

さあ刮目せよ、と笑い鋭く息を吸いなおした。

なむはちまんだいぼさつ・このやにかごを  
——八幡祈願・大妖射貫！

瞬間、空間は悲鳴を上げた。

空間を貫くほどの鋭さで、矢は撃ち放たれる。

俺たちを包み込むほどの莫大な水流が矢を纏い、さながら流星の如く天を翔け抜け——そしてやがて矢は、龍と化し。

魔神柱の群れを、その一撃のみで射貫いた。

行け、敵はまだまだ無限に出てくる。隙をついてでも進め！ と言われるがままに走り出す。

いや、ていうか強すぎないか？

生前の伝説伝承を考えれば納得できなくもないが、それでも規格外がすぎる。

そんなことを言ってしまうえば英霊なんてものは規格外の代名詞みたいなものではあるのだが。

まあなんとも頼りになる兄弟子だよな、とそんなことを思えば俺たちを援護するようにまた矢が飛んだ。

といっても、それは俵藤太のものではないだろう。

彼は今宝具を撃ったばかりだ、どれだけ高名な英雄だろうとあれだけの一矢を撃てば多少のクールタイムが必要になる。

ならば誰なのか——という疑問は、しかし湧いてこなかった。

なぜなら俺はその矢を知っている、見たことがある、随分と助けてもらった記憶がある。

アーラシユ・カマンガ、俺の知る限り”最強”のアーチャーである彼の一撃一撃は、ただの一矢でありながら宝具級。

思わず振り返ろうとした瞬間、ライダーさんにグツと引つ張られた。

な、なに？　と言う間もなく、スレスレの位置を極光が駆け抜けた。

同時、笑い声が聞こえる。それはもう、クスクス笑いでもなければ、談笑時に出るようなものではなく。

敢えて言うのであれば——王の笑い声。

まあ何だ、要するに——

『フフフフ——フハハハハハハハ！　勇者と共に、余、登場である

！　さあ我が威光に灼かれて消え去るが良い！』

——超ご機嫌なアラオ：オジマンディアスの、笑い声である。

めちやくちやご機嫌なオジマンディアス、何か見覚えあるな……と  
少しかだけ考えて気づく。

あああれめちや有名な英霊に遭った時の俺だわ。

言うなればファンみたいなものである、まさかオジマンディアスが  
そうなるとは完全に予想外ではあるが、しかし相手があのアラシユ  
なのだから納得というものだ。

元より、オジマンディアスは勇者を好む人だった——と言うよりは、勇者でもない肩を並べることが許さない人だった。

そう考えれば、アーラシユは完璧にその条件を満たしているといえるだろう。

それこそこの長い人類史を鑑みても、彼ほどの勇者はそうそういない。

た、助かった……という感想が素直に漏れ出した。

いや多分アーラシユクラスの英雄がこの場にいなかったらオジマンディアス帰ってるまであるからね。

予想というか半ば確信である。

最早ここに来てくれたというだけで驚きといったところなのに、戦いまでしてくれるのは本当に幸運としか言いようがないだろう。

本当、アーラシユ様々だな……と思いつきながら思いつき手を振っておく。

そうすればアーラシユもまた大きく手を振り返してくれて、そのまま一矢、引き絞って撃ち放った。

爆発じみた音と共に魔神柱が吹っ飛んでいき、その横を極光が駆け抜ける。

オジマンディアスが「躲せなかったのならそこまで」みたいな思考をしているような気がするのが苦笑いポイントではあるが、それを加味した上でもその頼もしさは異常だ。

まあ最悪当たりそうになったらアーラシユが助けてくれるだろう、と打算を立てていれば不意に彼は——彼らは現れた。

黒の装束に、真っ白な髑髏の仮面。正しく、暗殺者、と言うべき姿の彼らを、見間違えるはずがない。

イスラム教の伝承に残る、「暗殺教団」の教主：ハサン・サツバーハ。その中でも取り分け良く知り合った、呪腕のハサンがお待たせしましたな、と喜色の混じった声でそう言った。

我らハサン、一人一人の力は他の英霊の方々にはいくらか劣りますが、それでも多少の役には立ちましよう。



相手が人ではなくとも、我らは命を奪うことを極めんとしたものにえに。

それに貴方がたを送り届けるのに、我らほどの適任はおりますまい。

山の翁は総じて暗殺者、闇に身を浸し、闇に紛れ、他の目を、耳を、鼻を誤魔化し晦ますのは得意分野ですからな。

さあ、こちらへ。未熟者の身ではありますが何とかお役には立ちましよう。

そう言つて伸ばされた彼の手を掴む。ライダーさんたちも同様に、他のハサンとそうすれば、途端に進行速度が上昇した。

え？ マジ？ こんなスムーズに行けるんだ……すげ……。

無意識的にそう呟けば、呪腕は笑うように言う。

目に留まらなければ邪魔されることもありませんまい。良いですか、こういうことが敵の隙を突くということなのです。

一見では分かりづらい一瞬の気の弛み、物理的に見えている範囲、聞こえる足音、警戒具合。

そういったものを同時に把握しておくのです——と、言葉にするのは何だつて容易いものですか。

しかもこれも長くは続きませぬ、何分敵が多すぎるゆえに、隙そのものが小さく、また少ない。

ですが、若干癩ではありますが、しかし、ううむ、まあご安心はなされよ。

ここに来たのは我々だけではないのはご存知でしょうから、端的に言いますと——彼奴らも来ているのです。

そう、聖地にて好き放題やつてくれたあの——と、言いたく無さそうに呪腕が言葉を濁した直後に、それは響いた。

ポロロンという弦楽器特有の音色。

散々トラウマを刻み込まれた、不可視の矢。

弓兵と名乗るにはいささかおかしすぎるだろ、と文句を言いたくなるような彼はしかし、悠然と音を鳴らす。

音と共に、魔神を切り飛ばす。

見間違いようが無いだろう、当然、忘れるはずもない。

彼の名は——円卓の騎士：サー・トリスタン。

紅い髪を緩やかに風に揺らし、目をつむった彼は、いくらか肩身が狭そうに音を鳴らしていた。

ああそりや言葉を濁すだろうな、と思った。

何せハサンたちは三人がかりで挑み、そして圧倒されたのだ。

それだけでなくとも、元よりハサンたちと円卓は敵対関係にあった。

今すぐ相容れるという方が難しいというものだ。

かくいう俺も若干ビビって手先が震えてる——けれども、助けに来てくれたということは、つまりはそういうことなのだ。

俺たちの為になのかどうかは分からないが、それでも少なくとも『人理を守るため』に彼は此処に来た。

居づらさを感じようが、何だろうが。

戦うために、守るために此処に来た。そんな彼にこっちが一方的に怯えるというのは少々失礼というものだろう。

立ち止まり、呪腕に掴まれている手を軽く引く。

彼は苦々しげに——仮面をつけているから、本当のところは分からないがそんな感じがした——俺を見たのちに、仕方ないですな、と笑った。

そういえば結局、トリスタンとは会話という会話をしたことが無かったように思う。

当時は敵だったのだからそれも仕方のないことではあるのだが、しかしそうなるどイマイチどう声をかけたものかな、と一瞬だけ悩む。

一瞬だけだ、それ以上は必要ない。

まあテキトーに一言二言で良いだろう、と思えば不意に肩を小突かれた。

ガシャンという鎧特有の硬質な音が一緒に響く——って、ケイ！

その鋭い目つきに、開けば毒しか出てこないけどその実滅茶苦茶頼りになる円卓の騎士、ケイ！とまで言ったところで頭をはたかれ

た。

何だその説明口調は、折角来てやったんだから下らないこととしてんじゃないやねえ。

そう言ってからケイは、お前らも言いたいことはあるだろうが——ま、今は前へと進め、と言った。

あいつにはあいつなりの事情があった、当然ながら他の騎士たちもそうだ。

忠義と世界は我らにとっては天秤にかけられるものだ。

それを分かった上で話し合う場としては、ここは些か不適切と言えるだろう。

だから、まあその内、な。

機会があれば呼んでやってくれ、その時に初めて改めて自己紹介し合ってくれ。

今はまだ、お前のピンチに慌てて馳せ参じてきてくれたことを覚えておいてやってくれれば、それだけで充分だ。

そして同時に、それが限界だ。

お前が許せる、許せないの問題でもないのさ、これはな。

ギフトとかいうものを賜ったやつらなりのケジメでもある。

だからそら、行くぞ。障害は俺と——あいつが、消し飛ばす。

そう言っただけが指さしたのは空だった。

ただひたすらに虚空が広がる、ともすれば宇宙にすら見える天空に、彼女はいた。

否、彼女と一括りにしてしまっただけが良いのかは正直なところ分からない。

それは人かもしれないし、英霊かもしれない、あるいは、神霊か。もしくはただの、亡霊か。

アルトリア・ペンドラゴンのIFの姿、槍と共に、人理を守るためにすれ違い戦った、一人の王——獅子王。

その手に携えられたのは、世界を、星を貫く最果ての塔。

世界が崩れないよう、星が壊れないように、現実が離れないように繋ぎとめる一本の槍——聖槍：ロンゴミニアド。

その奇跡を封じ込めたような緑の瞳が、俺達を見る。

縁は光芒に散り、因果は立ち消えた。

されど我が槍は、貴殿らとの戦いを忘却することは無い。

ゆえにこそ、その背中を押すために参った。

行くべき道を、拓くために参った。

長々とした口上は不要であろう、なればこそ、ただ槍を振るうのみ。

さあ進め、カルデアの者。

我が名は嵐の王、ロンゴミアドを預かる者。

最果てより宙の外に星の錨を打ちに来た。

——地に増え、都市を作り、海を渡り、空を割いた。何の為に。聖

槍よ、果てを語れ！

最果てに輝ける槍！

それは——それは、正しく光の柱。

現実を星に貼りつけ、剥がされぬように縫い留める、星の一撃。

およそあらゆるものを呑み込み、砕き、破壊し、滅ぼし、融かし尽くす究極の一撃。

魔神と言えども、耐えられるようなものではない。

最果てより届く、星の秘奥。それだけで全ては一斉に消し飛んだ。

呆けている場合か、とまたしても頭を小突かれる。

際限なく撃てるようなものじゃあない、さっさと行け。

よもや、臆した訳でもないだろう——まあ、臆したのならば、行かなければ良いだけなのだがな。

嫌味っぽく、ケイはそう鼻で笑う。

それを本気で言っているわけでは無いことは直ぐに分かった。

というか、分からない方がおかしいだろうと思えるくらいだ。

彼は俺を信じている、だからこそ、俺はそれに応えようと思うのだから。

それじゃあ無事安全に次の拠点まで送り届けてくれよ、騎士様。

なんて言えば何様だ、とまた頭を叩かれた。

頭を叩きすぎると馬鹿になるって聞いたこと無いのか!? と叫ん

だがもう馬鹿だろと言われてしまった。

ううむ、言い返せない——いや俺はそこまで馬鹿ではないが!?

『起動せよ、起動せよ。生命院を司る九柱。』

即ち、サブナツク、シャツクス、ヴィネ、ビフロンズ、ウヴァル、ハーゲンテイ、クロケル、フルカス、バラム。

我ら九柱、誕生を祝うもの。我ら九柱、接合を讃えるもの。

七十二柱の魔神の名に懸けて、我ら、この賛美を蔑むこと能わず——  
『グアアアアアアアア!?!』

九重の口上を待たずして、極光が雨のように降り注ぐ。

それが誰の放った者なのかはしかし、直ぐに判明した。

夜空のような宙を、煌びやかに翔け抜けるその姿は、今でも目に焼き付いている。

目を焼くほどの黄金、極光、目立ちたがりの、金好き英霊! その名は——。

アーツハツハツハツハツハツハ! 今『美』って言ったのかしら?  
魔神もどきが賛美って!

身の程知らずにもほどがある、黙っておけばよかったもの——  
ざーんねん、見逃すほど私は甘くないのよ!

賛美と聞いたたら、美しさと聞いたたら黙ってはいられないわ!  
我こそは美と戦い、豊穣と金星の化身! 天翔ける女神イシユタル

! 魔術王とやらに、借りを返しに降臨したわ——!  
つてちよつと待ちなさい何よ金好き英霊って!?! 紹介の仕方に悪

意が満ち溢れてるじゃないの——!  
ギューンつと空を回って来たイシユタルにワシヤワシヤワ

シヤーつと髪をごちや混ぜにされる。  
ちよつ、おまつ、やめろやめろ! と言うが彼女はオーホツホツ

ホツホ! と笑いながら暫く手を止めなかった。  
離されたころにはすっかりフラフラである、こいつ、頭ガンガン揺

らしやがつて……。

若干目が回ってる……と軽く睨めばイシユタルはどや顔で俺を見た。

来てあげたわよ、と柔らかく微笑む。

ま、あの時約束しちゃったしね。

約束は即ち契約となる——それを破るのは女神の沽券に関わるし。

女神イシユタル、次があれば力を貸してあげるといふ契約、今果たしに来たわ。

感謝なさい、と。

イシユタルは笑顔で言った。相も変わらず顔だけは本当に良い女神だ。

そういうことされるとドキツとしちゃうからやめてほしいんだよな、という気持ちを隠す。

どっちかっていうと次を無理やり作りに来たみたいな形だと思うんですけど……と呟けば顔真っ赤にしてだまらっしやい！ と叩かれた。

そもそもアンタが死んだらその魂、アタシが貰い受けるって話なんだから来ないなんて選択肢あるわけじゃないでしょ!?

これも契約よ契約！ と真横で喚かれる。

その話まだ続いてたんだ……っていうか何でもかんでも契約って言うっておけば良いと思ってるじゃない？

ズル過ぎんだろ……と思ってるたら槍が落ちてきた。

いや、俺にはではない、真横のイシユタルにである。

なにになになになに!? とイシユタルを引き寄せると同時にそれは地に突き立って、同時に「あれ？」という聞き慣れない声が聞こえた。そうして現れたのは、汚れ一つない純白の布に身を包んだ、薄緑色の髪を長く伸ばした——男性？ いや、女性？ だった。

や、布がぶかぶかで顔以外に性別判断できるところがないんだって、声も中性的だし、滅茶苦茶誰!? って感じ。

だが、イシユタルにとってはそうではなかったらしい。

反射的に彼女の身体を引っ掴んでしまったことを怒られるかもとすら思っていたのだが、しかし彼女はそんなことを露にも思わずピキ

ピキと額に皺を寄せて、叫んだ。

あつぶないじゃないのエルキドゥ——！と。

……エルキドゥ!?

やあ初めましてだね、カルデアのマスター。

二人いるって聞いていたけれど、君はその片割れと見た。

僕の名はエルキドゥ。

単なる兵器に過ぎない僕だけど、この人理の窮地では多少の役には立つだろう。

その為だけに、僕は今この瞬間ここに来た——どうか、存分に遣い潰してくれ。

エルキドゥはそう言つて俺を見た。握手とか何にもなく、ただ真摯に俺を見つめて言った——のは別に良いんだけどイシユタルのこと無視するのやめない？

いやあの、兵器とかなんだとか、そもそもどういった性格なのかとか話したいことは尽きないくらいなんだけどその前に、ね。

イシユタルの殺気がね、とぼちちりのように俺にも刺さってるんだわ。

そう言えばエルキドゥは思い出したように「ああ」と軽く笑つてからイシユタルを見た。

何だ、まだいたんだ女神イシユタル。珍しいね、昔の君ならすぐにも矢なりなんなり放つてきただろうに——どうやら大人しくなつたというのは本当だったらしい。

大人しいという言葉ほど君に似つかわしくない言葉はないね、君はもつと我儘で低俗、それでいて珍妙であるべきだよ。

ほら、ちようどそこにある魔神柱の欠片を拾うが良い、君の髪飾りにするにはお似合いだ。

フ、フフフ——なにせどちらも人の世に仇なす邪神なのだから。このあたりで本性出してみたらどうかかな？

ニツコリと、それこそ見惚れてしまうくらいの笑顔でエルキドゥは言つた。

言い放った、猛烈な毒を言葉に変えて、イシユタルをぶち抜いたのだ。

光が——迸る。

うふふ、やっぱり根っこから壊れちゃってるようね。

本音が駄々洩れすぎだぞ、このポ・ン・コ・ツ♡

こいつの前なんだから、あんまり怒らせないでくれるかしら？

毒には毒を、言葉には言葉を。

完全に俺を挟んで口喧嘩が勃発してしまった。

いや、あの、その……お前ら——なかわつつる仲悪ッ!!! 助けて立香くん!!!

こいつらの仲裁無理!!!

好きにさせておきましょう、相手するだけ時間の無駄です——と後ろからスリと伸びてきた手に引かれて走り出す。

白く、小さな手。けれども俺なんかよりもずっと強い、一人のサーヴァント。

俺はそれを——彼女を知っている、覚えている。

横にいるメドゥーサと見比べて、また会えた、と思った。

——アナ。

そう呼んだが、しかし彼女は少しだけ首を傾けた。

その、申し訳ありませんが、アナという名前に心当たりはありません。

もしかしたら、前に出逢った私がそう呼ばれていたのかもしれないが、しかし、私は——私たちは貴方の知る英霊ではないのです。

そう言うと同時に彼女は現れた。かつて強大な敵として立ちはだかった、もう一柱のメドゥーサともいえる英霊、あるいは神霊——ゴルゴーン。

彼女は不機嫌そうに俺たちを見ながらフン、と息を吐いた。

恐らくは、ゴルゴーンもまた何も知らないのだろう。

英霊は座から呼び出されるものだ、覚えている方が例外だということ、忘れそうになってしまう。

そんな俺にアナ——メドゥーサ……いやもうアナでいいや——は



「ですが」と言葉を付け加えた。

私たちの核は、魂は、霊基は、貴方を覚えています。

貴方からもらった言葉を、貴方が教えてくれた情を、貴方への感謝を。

忘れようにも忘れられない程に、刻み込まれている——だから。

これは恩返しではありません、ただひたすらに、貴方の為にそうしたいと思つて此処に来ました。

我々のような怪物に覚えられていても、迷惑だろうがな——と付け加えようとしたゴルゴーンの言葉を上塗りすように遮る。

迷惑なんかじゃない、失礼なんかじゃない、そんなことは欠片も思わない。

覚えてくれてたら嬉しいに決まつてる、怖ろしかった敵が味方になつてくれたら頼もしいと思つて決まつてる。

それにやつぱり、俺はメドゥーサには惚れ込んでるんだよね。

だからゴルゴーン達のこともつい鼻屑目で見ちやうんだわ、悪いな。

心底からありがとうつて気持ちしか今は無い。

本当に助かるよ、ありがとう——と言えばメドゥーサに担がれた。

いや、担がれたつていかお姫様抱っこつていうか……。

恥ずかしいから嫌だつてだいぶ前に言つたよね?! という言葉当たり前のようにスルーされたしゴルゴーンは先行してしまった。

や、やべー……怒らせちゃった?

だとしたら本当に申し訳ないんだけど……という俺の不安はアナが否定してくれた。

彼女もまた照れているのです、ああなつた私は、そういった言葉に少々弱いので……

まあそれは、私も例外ではありませんが——任せました、私。

と、そう言つてアナもゴルゴーンの後を追うように空を翔け——そして、入れ替わるように炎は揺らめいた。

炎——夕日のような色合いの、全てを焼き嘗め尽くす鬼の業火。

カカ、カカカ、カカカカカ！ 吾の出番が来てしまったようだなあ！

特徴的な笑い声と共に、業火を纏った大骨刀が魔神柱を叩き斬り、彼女は静かに地へと降り立った。

黄色の着物に額から生えた二本の紅い角、ギラリと鋭く光る金の瞳を持ち、美しく伸ばした金の髪を散らかす彼女の名は——茨木童子。うむ、うむ、久しいな、人間。

吾は誇り高き鬼——大江山の首魁たる茨木童子である。

ゆえに、同じ鬼ならまだしも人を助ける道理などはどこにもない、落ちてすらいない。

ましてや吾は人間が嫌いだ——だが、使い道のある生命だとも思っている。

人間がいるからこそ、鬼は鬼たれるということを知っておる——それ。

貴様には借りがあ。

ゆえに、ああこの一時ばかりは吾が力を貸してくれよう。

吾が業火にて、魔神なんてものは焼き尽くしてくれる！

クハハ——なに、言葉は要らぬ。斯様な暇があるのなら、ただ先へと進むがよい。

その為の道を、吾は作りに来たのだから！

——あ、でもちよこれいとがあると吾、超喜ぶぞ、どうだ？ と茨木童子は振り返るようにして俺を見た。

その振る舞いに思わず吹き出すように笑ってしまった。

かっこつけるのかつけないのかどつちかにしろよ、とポケットに手を突っ込む。

流石にチョコレートは無いけれど、ほら、飴ちゃんやるからこれで手を打ってくれ。

イチゴ味の飴玉をひよいツと投げれば茨木童子は「むう、仕方ないのう」と言いながらいそいそと口に含んだ。

言葉とは裏腹にお目目キラキラ！ って感じ。

本当、こういう姿を見てしまうと抱いてた鬼のイメージ、思いつき

り崩れるよなあと思う。

まあ元より原型ないほど崩れてんだけど、甘味で籠絡する鬼とか聞いたことないわ。

ちよろさでいけば黒髭並である、あいつも画像フォルダで一撃だったからな……。

なつかしつ、と思う間もなく茨木童子は「ではやるか」と炎を操った。

ゴオツという熱風と共に炎熱は彼女を取り囲む。

渦のように、竜巻のように、それは回り廻ってやがて形を成す。

それは、彼女の手であった。

かつて、渡辺綱に斬られたという茨木童子の凶悪な鬼の腕。

それが今、鬼火によって再現されていて、煌々と火花は舞い踊り——そして。

——姦計に断たれ、戻りし身の右腕は怪異と成った！ 走れ——叢

原火！ 羅生門大怨起！

号令と共に、それは放たれた。

『不沈なり、不毛なり。』

我ら生命を司る九柱、玉座ある限り尽きること能わず。

神霊の暴威、恐るるに足らず。

旧き人理に屈した者など、我らの敵に非ず！』

鬼の業火に焼き払われて尚、九重の声は響く。

これだけやられていようと、未だ屈することは無く、全ては無駄であるのだと、宙に響かせた。

己は健在であると、何一つ意味を為していないと証明するように。

——だけど、それは多分悪手なんだよな、と思った。

俺だって別にそう長い付き合いという訳じゃない、ましてや神様なんてのは扱いに困るわ付き合い方に悩むわで大変だ。

ただでさえ人間付き合いも下手くそうだろうが、と言われたら否定はできないがそれは取り敢えず置いて、だ。

大変だからこそ、苦勞したからこそ、それだけは言っちゃダメなやつだろう、と思わず笑んだ。

神霊は総じてプライドが高い、それを傷つけられればそりゃキレるだろう。

それこそ——多分、犬猿の仲を共闘させるほどに。

直後、光は落ちた——否、光だけではない。

光と数多の武具が、さながら雨の如く落ちまくり、そして声が轟いた。

ハッアアアアアアアア——!? 屈してなんかいないわよ!

そっちの方が未来があるって認めただけだっつーの!

ああもうあったまきた! 徹底的に排除してやるんだから! と続けて更に輝きを地に落とす。

その隣でエルキドウが、至極嫌そうに——いやもう本当に心底嫌そうな顔をして、けれども「不本意だけど、同意するよ」とそう言った。

——ああ、今の発言は僕の友への侮辱に等しい。

虎の尾を踏んでしまったね、君たちの生まれに思うところはあったが——結論は違ったようだ。

徹底的に、消し飛ばしてやる。

そう言つて、エルキドウはその手を振りかざす。

そうすれば槍に剣、矢に斧と数多の武具が顔を覗かせて——その全てを際限なく撃ち出した。

まるでギルガメツシュウ王のようだ——と思つたところで、ああそういえば二人は親友なんだつつけ、と気付いた。

だから似通つた、あるいは片方が片方を真似したのだろう。

そう考えると何だか可愛いな……と呟けば、あら? あらららら? という困惑したような声が小さく鳴つた。

その声に聞き覚えはあつた……というよりは、まんまイシュタルの声そのものだった。

だがそのイシュタルは今、上空で高笑いしながら光をぶち込みまくっている。

となれば、その声の主は一人しかいないだろう。

女神イシユタル、その裏側の女神。

全く同じ神性であり、イシユタルの依り代となったとされる少女の持つ性質の片側を引き継いだ同一存在といっても良い女神。

は、はわわわわ、呼び声に応じて華麗に参上したと思ったらいきなりデイスられたのかわ!? ど、どうして!? と狼狽える彼女の姿はどこか愛おしくすらあった。

美しい金の髪に、真つ赤に透き通るルビーの瞳を持った彼女は、冥界の女主人——エレシユキガル。

俺は彼女のことをよく知っている——等と口にできるほど何かを知っているという訳ではない。

実際のところ、俺がエレシユキガルと話したのはメソポタミアにいた短い期間の中のたった一晩に過ぎず、むしろほとんど知らないと言った方が良いだろう。

見張り番をしていた間の極短い時間だけが、俺と彼女だけが知る、俺たち二人を特別に繋ぐ縁になるのだから。

弱く、か細く、拙い縁だ。

けれど、言葉で言い表せない程大切な縁でもある。

ただ、まあ……なんなんだろうな。

ぶつちやけエレシユキガルとの距離感が俺は掴めないでいた。

それは多分、エレシユキガルもそうなのだろう。

互いの目が合って数秒の沈黙が流れたのがその証拠である。

いや嫌いとかそういうんじゃないやなくて本当に……こう、言葉が出てこないんだってば。

コミュ障同士が仲良くするのは結構難しいんだよ！ と内心叫んだらエレシユキガルは「ほんの少しだけなら、手を貸すのも吝かではないわ」といった。

けれど、女神の制約に『無償で人を助けるべからず』というものがあります。

善意だけで、情だけで女神は人に救いの手を差し伸べてはならない。

救いを、助力をするのであれば、必ず等価交換という形を取らな

ればならないの。

なぜなら、無償の救いは人を墮落させるから。

だ、だから、ね、その、あ、アナタは私に何をくれるのかしら——と、エレシユキガルは不安そうに瞳を揺らして、そう言った。

それが形式上のものでしかないということは、言われなくても分かるだろう。

というかこの場にいるということそのものが、そういうことだ。

でも、等価交換なあ……。

俺そんな大それたものに差し出せるようなもん持ってきてないし、そもそも持つてないんだよな。

これは無理では？ と考え込む俺を見て、エレシユキガルが何を思ったのかは分からない。

けれども彼女はコホン！ とわざとらしく咳払いをしてからもう一度声を揺らした。

わ、私は——あの日、あの晩、貴方のお陰で”外”を知ったのだわ。貴方を切っ掛けにして、初めて触れられたのだわ。

もっと知りたいと思えたのだわ、だから——また、話の続きを、私は知りたい。

貴方を見てきた世界を、歩んできた道のりを、その物語を、わ、わわ私は、聞きたいのだわ！

で、できればあなたたちの元に召喚も——い、いいいいいえ！それは流石に高望み過ぎ——等と、口早に、しりすぼみするようにエレシユキガルはまくしたてた。

本当に、イシユタルと同一の女神とは思えないくらい、可愛らしい女神ひとだな、と思う。

こんなこと思ってるだなんてイシユタルに知られたら、それこそ殴られそうな気もするが。

それでも、ああ本当に。

そんなことで良いのであれば、いくらでも続きを語ろう。

俺の見てきた世界を、俺の見てきた英雄たちを、立ちはだかった強敵達を、嬉しかったことを、悲しかったことを、楽しかったことを、許

せなかつたことを、胸を打たれたことを。

どれだけ話しても尽きない記憶を、物語を、語ると約束しよう。必要になる時が来たならば、必ず貴方を召還すると約束しよう。

これで等価交換になるか？ と聞けばエレシユキガルは「ほ、ホント!?! 本当に!?!」と思わずといったように言ったがコホンと気を取り直す。

ええ、その約束を、契約をもとにこの一時、この一瞬だけ力を貸し与えましょう——冥界の女主人、エレシユキガル名において命ず!

世界を救う英傑よ、あの悪しき魔神に制裁を!

此処まで歩みぬいてきた、他の誰でもない貴方たちの手で、遙か彼方まで続くはずだった未来を取り戻すのです!

穿て! 冥界の赤雷よ! 我が朋友の道を切り拓くのだわ——つて、私達友達なのよね、そうなのよね!!

急に自分の槍を抱きしめるようにしてエレシユキガルが俺を見る。

友達……うん、まあ、多分?

英霊や神霊相手に友達つて言い方もどうかとは思いますが、しかしただの知人(神?)とするには少々関係が深いようにも思う。

その上で敢えてカテゴライズするのであれば、俺としては恩人だとかその辺が出てくるのだが、しかしエレシユキガルがそう思ってくれるのならば、そう思うことを許してくれるのならば、俺もそう思おう。

そう言えば、エレシユキガルは「そ、それなら良かったのだわ!」と顔を赤らめながらも一度槍を振りかざす。

——冥界を此処に、我こそはエレシユキガル、死の国を統べる山守りの女神なり。

この声が聞こえるのならば応え、従いなさい——冥界の赤雷よ!

天に絶海、地に監獄、我が昂とこそ冥府の怒り! さっさとそこを、どきなさい! 霊峰踏抱く冥府の韃アアアアア!

その光景は、一度見たことのある光景だった——というよりも、あの光景の再現だった、というべきなのだろう。

紀元前2600年メソポタミア、都市ウルクの直下に広がる冥界に

て繰り広げられた、人類悪：ティアマトへと降り注いだ冥界の制裁。  
ある種の災害とも呼べるほどの強力な、激烈な、過剰な紅の雷が魔  
神柱を滅ぼし尽くす。

それを受けて上空のイシュタルが「はあああああ!？」と叫んだ。

エレシユキガル、アンタなんでもこんなところにいんの!? しかも、前  
の姿で——とまで言いかけたイシュタルをわたわたとエレシユキガ  
ルが遮る。

い、色々あつたのだわ! その、なに? レイシフトがどうこうと  
かでこう——なんか締まりの良い感じに!

はい、この話はここでおしまい! 私もこれが終わったら退去する  
から貴方も今のうちに行きなさい! そして必ず助けに来なさい!  
待ってるから! 立香にもちゃんと言えてね!

ほらほらほらと背中を押されて走り出す。

一体何の話してんだよ、と聞きたいところでもあつたが、ゆっくり  
立ち話できるような場所でもなければ状況でもない。

絶対召喚して聞き出してやるからな……! と思いつながら走り出  
せば、降下してきたイシュタルが呆れたようにため息を吐いた。

あの子私の陰気全部持つて行ったからかなあ、わがことながら、め  
んどくさい性質なのよね……

ま、でも今は良いか、驚きはしたけれど、悪い傾向ではないもの。  
さて、と、それじゃあ行きましょうか。

冥界の雷降りしきるような中じゃあ大変でしょうから、特別にこの  
私我先導してあげる。

何よその眼は、安心なさいな、気紛れみたいなものよ……って、誤  
魔化すのはあまり良くないかもね。

——私は、天の女主人イシュタル。

誰よりも自由に空を翔け、何ものにも縛られずに振る舞う、完成さ  
れた美の女神。

だからこそかしら、貴方のような未完成なもの、見てて放っておけ  
ないのよね。

それに、貴方が全力で足掻いて、全霊で藻掻いて、決して諦めずに



前を見据える姿は、あまりにも美しく見える。

美しいものは好きよ、未完成なものも、見ていて飽きないわ——でも見てるだけじゃドキドキしちゃうじゃない。

見守るのが女神の本分、だけどこっそり手を貸しちゃうのもまた女神の本質よ。

契約している以上、遠慮する必要はないしね。

だから——だからね、今は、貴方の戦場に立つ今この瞬間だけは、私は貴方の勝利の女神となりましょう。

さあ刮目しなさい、片時たりとも忘れないよう、その記憶に焼き付けなさい！ そして疾く進みなさい！

ゲート・オープン！ これが私の全力全霊——撃ち砕け！

アンガルタ・キガルシユ  
山脈震撼す明星の薪！

エ大いなる天から大いなる地へ、という意味を冠すその宝具の別名は  
ジュジュベル・ハハムリン・ブブレイカー。

かつて本当にエビフ山をぶち壊した際の逸話が昇華された、対山宝具であるそれは、比喻でも何でもない星のそのもの。

金星という惑星の概念そのものを矢として放つ、何ものをも恐れぬ規格外の所業——ヴァイナスプラスタ金星の一撃。

傲慢に、我儘に、奔放に。しかして凄絶に、圧倒的に闇を砕き、魔を撃ち払う神の一射。

それは冥界の嵐が吹き荒れている戦場に現れたもう一つの災害。避けようはなく、防ぎようはない、唯一無二の星の極光。

それに呆けている場合じゃないと言わんばかりにライダーさんに担がれて進んだ。

ここが七番目の拠点だった——つまり、制圧しなければならぬとされていた最後の拠点であった。

イシュタルの一射が、これまで積み重ねてきた被害も合わせて魔神柱を押し込んだのは間違いないだろう。

だから、次へ——玉座へ。

魔術王が待ち受けているはずの玉座へと早く早くと駆けあがった。

そうして待ち受けていたのは、しかし魔術王でもなければ玉座でもなく。

情報になかった八番目の拠点——そして九種類の魔神柱だった。

少しだけ遅れて追いついてきた立香くんが、嘘でしょ、と言葉を零した。

『起動せよ、起動せよ。廃棄孔をつかさどる九柱。

即ち、アンドロマリウス、ムルムル、グレモリー、オセ、アミー、ベリアル、デカラビア、セーレ、ダンダリオン。

我ら九柱、欠落を埋めるもの、我ら九柱、不和を起こすもの。

無念なりや、無常なりや。

我ら七十二柱の魔神を以てして、この構造を閉じることは叶わず』

八つ目の拠点!? なんてことだ、此処の存在は完全に予測外だ!

名乗りを上げた魔神柱の前に、ドクターの悲鳴にも似た声が耳朶を打つ。

だが、そうなるのも仕方がないだろう。

これまで加勢に来てくれた英霊たちというのは全て、これまで乗り越えてきた七つの特異点によって結んできた縁を辿ってきてくれたものなのだから。

だから、そう、つまるところこの完全に予想外であった八つ目の拠点に関して、加勢は望めない。

そんな俺たちを見て、満足したように九重の声は、嬉し気に言葉を連ねて響かせた。

『そうだ、ここで朽ち滅ぶがよい、最期のマスター。人類最後の希望。貴様らが玉座に辿り着く可能性はここにて潰えた——否、最初からそんなものは無かったのだ。

何故なら此処には何も無い、我等には何も無い。

未来も過去も、因果も希望も、人が神と名付けた奇蹟すらも。

あらゆるものが無価値と成り果て、あらゆるものが不要だと廃棄された。

それがこの、忘れられた領域、八番目に位置する虚無の拠点。

誰一人として人間お前たちを助けない死の孤島。

膝を折り、顔を伏せ、その心さえも屈するが良い。安心せよ、絶望するする必要はない。

ここはあらゆるものが諦観し、投げ捨てる”意思の終わり”。

誰一人としてお前らの名を呼ぶものはいなければ、現れもしないのだから』

笑い声が響く、鼓膜にこびりつくような、下衆な笑い声が空を震わせる。

そうだ、助けは来ない、救いは無い、頼れるような誰かはいない。

俺たちだけで乗り越えなければならぬ———だけどそれって、そんなにおかしなことか？

確かに俺たちはいつだって誰かに頼って進んできた、誰かに支えてもらって、ここまで進んでこれた。

だけど、それでも俺たちは、自分の足で歩んできたんだ。

たくさん傷ついて、たくさん苦しんで、でもその上で前へと進んできた、踏み出してきた。

だから、確かに絶望する必要はないと言えた。

諦めの悪さは、勝利の女神さまのお墨付きなんぞ———と、紫の鞞から赤い短刀を抜いた。

否、抜こうとした。その柄に手をかけて、今まさに引き抜こうとして、しかし止められた。

魔神柱に止められたという訳ではない、ドクターの制止の声が入ったという訳でもなく、また立香くんの手によるものでもない。

メドウーサにカーミラ、鈴鹿なんかは既に臨戦態勢だった。

であれば誰に止められたのか、と言われればそれはこの短刀をくれた張本人だった。

白銀の髪を靡かせて、紅玉の瞳に慈しみを閉じ込めた、一人の武将

———巴御前。

お久しゅうございますね。

この状況でも未だ戦おうとするその意気や良しつ、ですがそれはもう少し後にしてくださいませ。

貴方が戦うべき場所はここではなく、この先なのですから——と言いますと、まるで巴一人に任せてくださいと言っているように聞こえてしまいますね。

ご安心ください、そのようなことは言いません……いえ、そのような状況があるとすれば、よろこんで務めさせていただきますが、此度は違うのです。

あの魔神も、自らの口で言っていたでしょう。此処には何も存在しない、と。

ええ、そうです、此処には何もございません、在るとされているものが無く、また無いということだけが在る。

そういった虚ろの領域、もしくは埒外、あるいは例外の領域。

常識はなく、道理もまたございませぬ——しかし、いいえ、だからこそ。

在つてはならないもの、ことが在つてもおかしくないとは思いませんか？

知らなかったかもしれませんが、道理が引つ込めば、無理は通るものなのです。

直後、声が聞こえた。

誰かの声、というよりは大勢の声がどこか遠くから木霊するように耳朵を打つ。

それが誰のものなのか、はつきりと判別することはできないほどに沢山の、数えきれない数多の声が重なり響いていた。

だけど、それらが何なのか、彼らが何なのかを、俺は知っていた。

——それは、英霊ではない。

決して、歴史に名を刻み込めるような偉大かつ強大な個の存在ではない。

それでも無数に姿を顕現させ、盾のように俺たちの前へと並び始めた彼らを敢えて呼ぶのなら、亡霊と呼ぶべきだろう。

されどもただの亡霊ではない、彼らは——。

——我らウルクを守護せし誇り高き魔獣戦線！

だが今この時だけは、我らが王に未来を託されし朋友の道を押し空けるためここに集った！

魔獣から王を、民を、国を守るのではなく、友の為に、今ここに我々は魔獣戦線を展開す！

雄叫びが何重にもなつて響き渡る。

鎧をまとい、それぞれの武器を掲げた彼らが口々に叫んだ。

——ほんの数か月しか一緒にいなかった。

戦場でしか話さなかったやつだっている、その逆で、休憩中にし二言三言しか話さなかったやつだっている。

正直に言えば、人となりを把握しているって訳でもねえ。

だけど、だけどそれでも、我らは知っている！

見知らぬやつのためにだって必死になれるやつだということ！

本当は戦いなんてしたくないって怯えてるようなやつだということとを！

そんな気持ちをねじ伏せて、堂々と立てるようなやつだということ

を！

我らは知っている、そして共感できる。

何故なら我らがそうだから。

だからこれは、我らなりの恩返しだ。

あの日あの時、我らの為に、我らの時代の為に、歯あ食いしばって、

意地を張って、命を懸けてくれたお前へ借りを返しに来た！

我らの魂を燃やし尽くしてでも、道は作ってみせる！ さあ行くぞおおおおお！

声と声が混ざり合う。

音と音が干渉し合つて、叫びが何重にもなつて、そうして彼らは一斉に前へと突き進んだ。

それを見て、巴御前はそれでは私も参りましょうか、と言った。

なにせ私はむしろ、彼らのおまけのようなものなのです——ですが、全霊を尽くさせてもらいます、では！

と、そう言つて巴御前が鋭く指示を飛ばしながら前線へと向かった。

その後ろ姿を見ながら、ほう、と息を吐いた。

俺、夢でも見てんのか？ と疑う訳ではないがそれでも目の前に広がる現実には、割と信じがたいものだったのだ。

滅茶苦茶すぎるだろ、と笑みがこぼれ出る——が、しかしそれでもまだ足りない、ということが俺には分かっていた。

これまでの拠点ですら、多数の英霊のお陰で何とか制圧できている状態なのだ。

ウルクの兵士たちが弱いと言っているのではない、巴御前の指揮が下手だと言っているのではない、単純に魔神柱が多すぎる。

要するに、戦力が足りていない、制圧するには足りなさすぎる——と、思った。

思うと同時に、そいつは現れた。

否、そいつらは現れた、と言うべきだろう。

黄金に靡く髪に、僅かな光も弾く、金の蠍の尾を持った男女の二人組。

——ギルタブリル。

ちようど今、眼前で戦つてくれている魔獣戦線とぶつかり合つていた魔獣たちを率いていた司令塔。

男の方のギルタブリルが振り返るように俺を見て笑った。

おやおや、少しばかりの手助けに来たのですが、随分と愉快なことになっておりますね。

この宙域の特性を上手く利用して、無理を押し通してる。

さて、カルデアのマスター。かつて私どもを殺した、星見の台のマスター。

あれからまた強くなられたようですね、素晴らしいことです、しかし同時に悲しいことでもあります。

ですが、それもこれで一旦の終わりは訪れるでしょう、そして私共は——その為に、此処に来た。

裏があるという訳ではありません、ただ、敗者は勝者に従うべきと

いうルールに則っただけ。

今は、それで良いでしょう。

ですから——今はただ、ご指示を、ご命令を。

その通りに動き、殲滅いたしましょう——ああ、勿論彼女も一緒に。ただちよつと拗ねてるだけなので放つておいてください。

何テキトー言ってるんですかつ！ と女の方のギルタブリルに男の方が蹴られて苦笑いをする。

……な、なに？ めつちや仲良しじゃん……いきなり目の前で夫婦漫才始めるのはやめろ。

情報量が多すぎんだよ！ 頭がバグる！ と叫んでからんつ、と咳ばらいをすれば二人は同時に俺を見た。

ほんの少しだけ硬直してから、息を吸い直して、見つめ直した。

——俺達の行く道を、作ってくれ。

たった一言、それだけ言えば、二人のギルタブリルは承知いたしました、と言って戦場へと飛び込んだ。

神代の化け物の力が、縦横無尽に振るわれる。

仲間になると頼もしいって一言で済ませたくないくらい、頼もしいな……と思わず独り言ちれば、不意に立香くんが笑った。

どうした？ と問いかけようとして——そして。

突然マジで聞き覚えの無い笑い声が、上空から高らかに響いた。

——ハ、ハハハ！ クハハハハハハハハ！

この世の果てとも言うべき末世、祈るべき神さえいない事象の地平！

確かに此処は何人も希望を求めぬ流刑の地と言えるだろう。

人々より忘れ去られた人理の外だ。だが——だが！ 俺を呼んだな、立香！

ならば俺は虎の如く時空を駆けるのみ！ 我が名は復讐者、巖窟王エドモン・ダンテス！

恩讐の彼方より、わが共犯者を笑いに来たぞ！

立香くんが空を見上げて破顔する。

真似るように俺も見上げれば、そこにいたのは一人の男であった。ポークパイハットを被り、黄金の瞳をキラキラと光らせ、病的なまでに白い肌をした男。

その身を隠すように纏う暗色の布の内側からは、バチバチと蒼白い電流が走っていた。

巖窟王——俺は、その名を知っている。

いや、本で読んだとかそう言った意味での知っているではない。立香くんの口から直接、聞いたことがあるのだ。

あれはちょうど第五特異点であるアメリカにいた時のことだったか。

巖窟王と名乗る英霊と共に、魔術王から仕掛けられた罠を乗り越えたと聞いていた。

まあそれだけだ、それ以上も以下もない。

挨拶の一つくらいはしておきたいが、今は良いだろう。

彼がどれほど強いのかは知らないが、それでもあの立香くんが彼の顔を見た瞬間ほっとしたことから、信用できるほどであるというのに分かる。

ならば心配する必要は無いのだろう……と思っていたら巖窟王の隣にまた一人誰かが現れた。

くすんだ白銀の長髪を風に揺らす女性だった。

黒の鎧を纏い、鋭く目を細める邪悪な女性だった。

確かに見たことのある美女だった。

——ジャンヌ・ダルク・オルタ。

通称：竜の魔女と名乗り、第一特異点で俺達の前に立ちほだかった女が、音もなく現れた。

彼女は興味なさげに俺達を一瞥してから「退屈しのぎに暴れに来たわ」とだけ言った。

……これがツンデレってやつだったりする？ と立香くんに耳打ちしたら「何よそれ!? 違うわよ!」と石ころ投げられた。

シンプルにあぶねえ! 英霊の膂力で全力投石はやめろ!

ほらもう地面めっちゃ抉れてるし投げた石、木っ端微塵になってん



じゃん……

人を何だと思つてやがるんだ、とため息を吐くとポンツと肩に手のせられた。

それから「はい、そして引率役のルーラーです」という聞き覚えのある声が聞こえる。

問題児二人は放つておけませんからね、とそう言ったのは、やはり天草四郎時貞であつた。

この度ルーラーとして現界しました、と笑つた天草さんはお久しぶりです、と言つた。

私は少々、あの二人とは面識がありますので、指揮はお任せください、と地を蹴り二人の元へ行く。

あの人がいるなら安心だなあとホツとして、それからいきなり加勢が増えてきた、ということに気付いた。

繋いだ縁は途切れることなく、また違う縁と結びつき、新しく呼び寄せる。

時には伝えるにはあまりにも細すぎて、頼りない縁を伝つても来てくれる人がいる。

滅茶苦茶強引な方法を使つても来てくれる人がいる。  
俺も、立香くんも、恵まれてるなあと思つた。

あまりにもたくさん縁に恵まれている、支えられている。

嬉しい、と素直に感じていいだろう——なんて、感傷のようなものに浸っている場合でもないかなと頭を振り思考を落とす。

折角来てくれて、戦つてくれている人達の努力を無為にはできないな、と走り出せばシュツとその人はやってきた。

赤い髪に、灰色の装束——忍び装束に身を包んだ英霊。

相変わらず髪で目を隠している彼は、それでも笑顔で「ただいま馳せ参じました」と言つた。

これより先は、この僕——風魔忍軍第五代目頭目：風魔小太郎がお導きいたします、と。

そう言つて俺を担いで走り出す。

あつ、担ぐの!?! と思つたが想像していた揺れは来なかつた。

何だかんだと俺を担ぐのが一番と言えるほど上手くなった鈴鹿よりも上手いレベル。

これ口に出したらめっちゃ不機嫌になられそうだな……と思い言いはしないが事実である。

ていうか真横で走ってるから眩くのも許されない、ていうか最早小太郎に担がれてるってだけで「むっ」としたような視線を浴びせられてるんだよな。

良いじゃん別にこんくらい……という思考を遮るように小太郎は短く言った。

ここ一帯は最速で駆け抜けさせていただきます、どうか舌は噛まぬよう。

そこから先は、主殿に全てを託します。

それだけ言って、小太郎は速度を上げた。

答えを返そうにも、あまり長々と言うのは無理そうだな、と同じように短く言葉を返した。

ああ、分かってる。

勝つよ、と。

八つ目の拠点を潜り抜ける。

数多の英霊に助けられ、数多の亡霊に背中を押され、あらゆる縁に道を作ってもらい。

そうしてようやく、やつとの思いで駆け抜けた。

小太郎が「では、御武運を」とだけ言い残して音もなく消え去り戦場に戻っていく。

それに感謝の念だけ伝え、前を見据えた。

その先にあるのは一つの古びた門だった——いや、正確に言うのであればそれはただの残骸にしかすぎず、重要なのはその先にあるものだった。

言い表すのならそれは空間そのものに入れられた亀裂。

その中からは青の光が吹き出すように漏れ出ていて、何処かにつな

がっているということを示していた。

——何処かではない、か。アレは間違いなく玉座に繋がっている。勘ではあったが、間違いないだろうという確信があった。

ドクターは、それを「空間断層だ」と呼んだ。

俺の勘を裏付けるように、その先が玉座であろうということも。

あの中に飛び込めば、すぐに玉座だ——躊躇う必要はない。

これで最後なのだから、やっとな終わるのだから、すべてが元に戻る戦い。

心臓がおかしいくらいに跳ねている、吐き気がうつすらとする。

要するにベストコンディションって訳だ、さ、行こう——と踏み出そうすれば「ではその前に敢えて、確認するのでしょうか」とダ・ヴィンチちゃんが言った。

最後の戦いの前だが、だからこそ、聞こう、ロマニ。

この人理焼却を完遂させ、この神殿に座するソロモンは——一体、何者なのか。

本物なのか、偽物なのか、英霊なのか、神霊なのか、あるいは、そのどれにも属さない”何か”であるのか。

それが正解であれ、不正解であれ、カルデア現トップであり、司令官である君はその結論を得ているはずだよ。

情報として、彼らに伝えなくても良いのかい？

通信機越しでも笑みを浮かべてるんだろうなあというのが分かる口調で、ダ・ヴィンチちゃんはドクターにそう問いかけた。

その言葉はドクターに問いかけているようで、俺たちに——少なくとも俺に、敵はソロモン王を名乗る偽物である可能性がある、ということに教えてくれていた。

恐らく、ダ・ヴィンチちゃんにはダ・ヴィンチちゃんなりの解答があるのだろう。

だから、その上でカルデアのトップであるドクターロマンに尋ねた。

ドクターは少しだけ逡巡したが、やがて「憶測にすぎないけれど、それでもいいのなら」と諦めたように口を開いた。

まず最初に言っておくけれど、あのソロモンは間違いなく偽物ではない。

突入する前にも説明した通り、この時間神殿という空間そのものが彼の魔術回路だからね。

ソロモン以外に、ソロモンの魔術回路を扱うのは不可能だ——よつて、第三者がソロモンを騙っているという可能性は絶対じゃない。

だけど、だからといってあのソロモンが本物であると決めつけるのは、少しばかり早計だと僕は思うんだ。

だって他の可能性自体はまだあるだろう？

例えば、ソロモンが何者かに操られている可能性。

あるいは、生前とは違う人格になったソロモンとか——と言っても、ジャンヌ・ダルク・オルタヤクー・フリーン・オルタのような所謂オルタ化した、という可能性は低い……いや、無いと考えて良いだろう。

だって、さしたる変化は無いだろうからね。

オルタ化というのはつまるところ性質の反転だ。

善の反対は悪、その逆もまた然り——だとすれば、やはりソロモンには意味をなさない。

ソロモンは善でもなければ悪でもない、ましてや中立でもない、言うなれば無だ。

何故ならソロモン王は生まれた時から王であることを定められた生き物だったから。

羊飼いかから王へと成りあがった、父であるダビデとは別物だ。

優れた王であったダビデが、より優れた王として神にささげた子供がソロモンだ。

ゆえにソロモンは何かを望む、望まない以前に自我を持つこと自体が許されなかった。一人の人間としての生活も思考もあり得なかった。

そんな自由は——人権は無かった。

まあ、代わりとでも言うように、神権、王権は腐るほどあったんだ

けどね。

要するに、ソロモン王には人間としての感性がほとんど存在しなかったんだ。

善人にもなれないが、しかし同様に悪人にもなれない、それがソロモン——だが、どう見たってあの魔術王は悪人だ。

だから、僕も、そうは言ってもソロモンにだって実は人間らしい善悪が多少なりともあって、それが別クラスとして現れたことで悪意を獲得したのでは？”と考えていた。

というよりは、つい先ほどまではこれが一番有力だと思っていた。けれど、いやあアレは違うね。ここまで来て、進んでくれて、やっと分かった、確信できた。

アレはソロモン王だけどソロモン王じゃないんだ。

第七特異点でのキングウと同じ仕組みなのさ——つまり、アレはソロモン王の死体なんだ。

文字通り、肉体のみが蘇ったと言って良いだろう。

そうした後に、人理焼却の為、伏線として己の手足となる魔神柱の種を蒔き、この特異点を作り上げ、そして2016年まで生き続けたんだ。

ここでは時間の概念何てあつてないようなものだけだね。

では、その中身は、正体はと言えば——僕たちはもう、嫌になるほど味わってきたよね。

だから、今わからないのは理由であり、動機だ。

どうして彼——彼らはそんな目的を思いついたのか、考えたのか、成し遂げようとしたのか。

それがボクには、どうしても分からなかった、だから黙ってたんだけど、もう悩む必要はないね。

その答えは、本人に直接聞けばいい——さ、もうじき時空断層だ。

飛び込む覚悟はできたかい……と聞くのは野暮だし失礼かな。

そこを抜ければ、この神殿の中心——至高の王と言われた男の玉座があるだろう。

カルデアからの通信、会話も、これが最後になる。

——だから、今まで口にできなかった質問をするよ。  
マシユ、きみに悔いはなかったかい？ 本当に、この結末で良かった？

不安気な、ドクターの声が響く。

時空断層を前に、少しだけの沈黙が下りて、そして。

はい、私は最後の一秒まで自らの選択を良しとします、とマシユはそう言った。

言い切った、力強く、前を見据えて。

その答えが、やはりドクターは嬉しかったのだろう。

そうか、と一言だけ漏らして、一瞬の間が開いてから言葉を紡ぐ。では、その強さをソロモンに見せてやりたまえ——健闘を祈る。

君たちに、人理の行く末は委ねられた——敵は魔術王ソロモン！  
これまで培ってきたすべての力で、この特異点を撃破してくれ！

自分のした選択を後悔しない——それは、言葉にするだけなら簡単で、でもとても難しいことだと思った。

選択すること自体はいつだって、誰にだって容易なことだ。

何かを選択する上で一番困難なのは、その選択により発生する責任を負うことなのだから。

だから、純粹に凄いな、と思った。

アレはきつと、マシユへの問いかけだったけど同時に俺と立香くんに対する問いかけだったのだとも思う。

そして、マシユの答えと立香くんの答えは同じなのだろう。

この苦難の道を、二人でそろって進んできたのだから。あらゆるものを分かち合って、寄り添い合って進んできたのだから。

——では、俺はどうだ？

俺は、これまでの選択を後悔したことはまったく無いと、本当に言えるだろうか？

言い切れるだろうか、宣言できるだろうか。

心にもないことを、果たして口にできるだろうか。

……無理だ。

後悔しないなんてことは、俺には無理だ、不可能だ。

悔いを重ねてきたような人生だった、後悔ばかりをしてきた旅路だった。

俺は、悔いを積み重ねることでもここまで進んできたのだから。

悔いたからこそ、繰り返し。悔いたからこそ、取り返した。

その末に選んできた道を歩んできた。

俺の足元は、後悔で作られている。

俺は多分、この結末で良かったのだと今言い切ることはいできない。

だから、俺は。

この結末で良かったと言うために、ここまで悔いを積み重ねてきたのだと言おう。

悔いを抱いて、悔いを踏み碎いて、悔いを背負って、悔いを踏みしめてきたことに、ちゃんと意味はあったんだと。

それであれば、俺は言えるだろう。

——ああ、でも、そうだなあ。

メドゥーサに、カーミラに、鈴鹿に似合うようなちゃんとした、かっこいいマスターには結局なれなかったなあ。

いつまでたっても、情けないままだった、という悔いはずっと残りそうさ。

青白い、幻想的な時空断層内を漂いながら、そう思った。

足が、地に着く感触がした。

暫く揺蕩っていたように思えたから、それが何だかとても新鮮なような気がして、それから閉じていた目を開く。

どこか神々しきすら感じる純白の玉座がそこにはあって、空があった。

それはどこまでも美しい青空だった、およそこの場に相応しくないほどの青空で、その中央には巨大な穴があった。

穴——というよりは、これも空間に入った亀裂のようなものと考えても良いのかもしれない。

どちらにせよその穴の先には、宇宙のようななにかがあつて、それを背負うように彼はいた。

白に染まつた長い髪に、真つ赤な瞳。

白と赤の装束に身を包み、その右手の指すべてに金の指輪を、左手の指には四つの金の指輪を付けた、一人の男。

——魔術王ソロモン……いや、お前は、誰だ。

彼は俺を一瞥し、それから忌々し気に口を開く。

またお前か、と。

世界の異物、例外、イレギュラー。

東部観測所——兵装舎、生命院の沈黙。

西部情報室——管制塔、視覚星の沈黙。

それに合わせて時空断層による世界間移動、それが行われる際に発動するよう仕掛けた妨害すらすり抜けてくるとは、予想外だ。

片方は引つかかったようだが、もう片方が来てしまつては意味がない。

まったく、不気味なやつだ、貴様は。

——そこまで聞いて、ようやく俺は気づいた。

本来ならすぐにも気づくべきだったことに今更ながら気付いたのだ、指摘されて、初めて気づいたのだ。

立香くんたちがいない、否、それどころではない。俺しかない。

自分の間抜けさに眩暈すらして、脂汗が流れ落ちた。

メドゥーサ達なら、直ぐに来るだろうという確信はあつた。

だからそれに頼つて、深呼吸をした。

大丈夫、大丈夫だと言ひ聞かせて礼装へと手をかける。

ソロモンはそんな俺を見て、やはり冷ややかに言った。

無意味かつ無駄なことが好きだな。

なあ、世界の異物、哀れな愚か者。

何故お前は戦ってきた？ 何故こんな彼方まで来た？ 何故あと

たった数分間を自重できなかつたのだ？

我らが創り上げた、仮想第一宝具『光帯収束環』アルス・ノヴァはもうすぐで起動したというのに、何故待てなかつた？



——いや、だからそれを止めに来たんだろうが、待てなかったじゃなくて、待たなかったんだ、間に合わせたんだよ。

第二も第三も第四も、あるならあるだけ全部止めに来た。

思わず、反射的にそう言えば、ソロモンの紅い眼が俺を睨んで、浅く笑った。

ロンドンで出会った時のような庄は不思議と感じなかったが、それが逆に不気味だった。

御明察だな、確かに私には三つの宝具がある——が、第二宝具は既に展開している、とソロモンは目を細めて言った。

『戴冠アのときルきたれり、其は全てウを始リめるものナ』はこの空間、この領域、あるいはこの世界そのものだ。

そして第三は——、と言葉を区切り、ソロモンは空を指さした。

そこにあるのは、どの特異点でも必ず見ることになった光の帯。

一本一本がエクスカリバー以上の熱量を持つと観測された、異常なまでのエネルギーの塊。

ドクター曰く、アレを上回る熱量は地球上には存在しないとのことだった。

それがソロモンの宝具だとするならば、やはりアレが人類史を焼いたのだろう。

そのくらいは分かっている、と言えはしかし、彼は顔をゆがめた。

呆れのような、哀れみのような表情をして、それから言った。

節穴が過ぎるな、と。

確かに、これだけの熱量があればこの星の地表くらいは焼き払えるだろう——だが、そんなことをして何の意味がある？ 何の得がある？

何故、私が貴様らを燃やしたのか考えてもみなかったのか？

愚か者が、アレは結果だ。

人理定礎を破壊し、人類史の強度を無に帰し、我らの凝視で火を放った。

火はやがて炎となり、地表を覆い尽くし、そしてあらゆる生命を、文明を燃やし尽くし——その果てで残留霊子としてそれらを摘出した。

何しろ地球は一つしかない、されどたった一回燃やしただけで得られるエネルギーというのはちつぽけだ。

——だが、そこに住まう生命体は別だ。人間は、どれだけ殺してもやがてまた繁栄する。

だから我等は、そこを利用したのだ。

七つの特異点を生成し、歴史の流れを分断し、前後の繋がりを排斥し！

そうして過去から未来へと、ほぼ無尽蔵に焼き払い、絞り、束ね上げた！

アレを上回る熱量は無い？ 当然だ、何せアレは地球という惑星の情熱そのものだ。

貴様らが守らんとした、人類史そのものなのだから。

良いか、一つ勘違いをしているようだから教えてやろう。

我々にとって人理焼却とは通過点でしかない、我々にとってこれは、大いなる目標に達するための手段でしかない。

我々は——至高の座へと辿り着く。誰もが成しえないがゆえに、私が死を克服する。

死が存在する以上、幸福がおとずれることはありえないのだから。あらゆる恐怖は死から生まれる、あらゆる偏見は死から生まれる、

あらゆる差別は死から生まれる。

定められた命から解放され、死の恐怖から解放されなければ、あらゆる不安は取り除けない。

命に限りはなく、世界に果てはなく、明日は衰えず、約束された今日が続く——そういった永遠に、辿り着かねばならぬのだ。

それを貴様は、否定できるのか？

死にたくない死にたくない赤子のように喚いた成れの果てである貴様が！ 我々を否定できるのか！

死にたくないがためにここまで来たような愚者が、我々を否定できるのか！

いいや、いいや！ 貴様には無理だ、不可能だ。

死から逃げ続ける貴様には、我々に賛同するほかない！

——怒号のような声が、鉛のように心に沈み込んでくる。心のあちこちに引つ掛かって、それでも底まで落ち込んでくる。死からの解放——それは、ある意味では人類の夢。

誰しもが求めた、けれども絶対には届かない甘美な妄想。

だけど、だけどやっぱり——それは肯定できないし、賛同もできないな。

口にした言葉は、少しだけ震えていた。

それでも構わなかった、ただ返答だけは真摯に返さなくてはならないとだけ思った。

確かに、死ぬのは痛いし、苦しいし、めっちゃ怖い。

誰だって、好きなやつはいないと思う。

毎日毎日、こわくって、情けないことに震えてるくらいだ。

だから、言ってることは分かる、言いたいことも分かる。

でもやっぱり、俺はそれは認められないって言うしかない。

お前は人の死を嘆き、変わらない、終わらない毎日を尊び、永遠は理想だと語った。

多分、お前は色んな悲しみを見てきたんだろう。

名前は知らない、けれどソロモンと共にあったであろう、誰か。

でもさ、お前の説く、幸せってのは。お前が思う、幸せってのは、何から学んだ幸せなんだ？

何を見て、何を聞いて、何に触れて、知りえた幸せなんだ？

目をそらすなよ、耳を塞ぐなよ、背を向けて逃げるなよ。

お前らの持つ幸せってのもまた、生きたいって思う人たちが教えてくれたものなんじゃねえのかよ。

たくさん苦難をそれでも笑顔で乗り越えて、未知である明日が待ち遠しくて駆け抜けた人たちが、与えてくれたもんじゃねえのかよ。

その幸せは、永遠の中で生まれるのか？

俺は、生まれないと思う。

だから、悪いけど俺は永遠なんかいらない、だって俺は、本当の幸せが欲しいから。

それに——、とまで言いかけて、口を噤んだ。

こいつとはもう、完全に意見が食い違った。それで終わりなのだ。ソロモンは——ソロモンの肉体に潜む誰かは、静かに言った。

それがお前の答えか、と。

見解の相違——いいや、所詮貴様は何も知らないだけだ。

多くの悲しみがあつた。

多くの裏切りがあつた。

多くの略奪があつた。

多くの結末があつた。

貴様の想像を絶するほどに。

——もう十分だ、もう沢山だ、もう見るべきものは無い、もうこの惑星に救いは無い。

未来も希望も、全てが無為だ。

興味は失せた、貴様とは分かり合えないことも理解した。

愚かな異物よ、ここでその骸を晒していくがいい。

言葉と同時に、彼の姿がまるで、ホログラムみたいにブレて、しかしその声は明瞭に聞こえる。

——我々が誰かと問うたな。

その蛮勇に免じ、それだけは答えてやろう。

我々はかつて、魔術王ソロモンと共にあつたもの。

魔術王の分身であり、魔術王の手によつて最初に創り出された機構

であり、魔術師そのものの基盤とされた原初の使い魔。

ソロモンの死を以て置いていかれたはじまりの呪い。

ソロモンの遺体を巣とし、その内部にて受肉を果たした『召喚式』

災害の獣、人類悪が一つ。

我々は、真の叡智に至る者、その為に望まれたもの。

貴様らを糧に極点に旅立ち、新たな星を作るもの。

七十二の呪いを束ね、一切の歴史を燃やす者。

即ち、人理焼却式——魔神王、ゲーティアである。

——魔神王ゲーティア。

そう名乗った彼の姿は、既にあの時見たソロモンのものではなくなっていた。

その身は白と黄金の鱗のようなもので覆われて、胸の中央には眼球のような紫紺の珠が埋められていて、頭部からは複数に枝分かれした角が生えている。

化け物だ、と素直にそう思った。

だけど依然として威圧感を感じなかった、不気味過ぎるくらいに、何も感じない。

ゲーティアの、紅の瞳が怪しく光った。

——この惑星は間違えた。終わりある命を前提としたのは狂気以外のなにものでも無かった。

故に、我々は極点に至る。

四十六億年の過去まで遡り、天体が生まれる瞬間に立ち会い、その膨大なエネルギーを喰らい尽くし——そして。

この我々自らを天体とし、全てを、惑星を創り直す。

あらゆるものを零から始め、『死』という概念が存在しない、生まれない世界を創造する。

それが、我々の成し遂げる大偉業。

人理焼却とは、憎しみより行われたものではない。

過去を遡り、天体の誕生を制御し、調節するための前準備にすぎない。

貴様らの3000年分の繁栄を、積み重ねてきた智慧を、歴史を、文明を以て我々は新たな天体を、創りあげるのだ——と、流星にもう、時間切れか。

ゲーティアがそう言葉を切ると同時に、やはり彼の姿はブレた。

否、違う、世界が丸ごとブレている。

何かがおかしい、と思った、思っていた。

でも気付けなかった、分からなかった、だがゲーティアの時間切れという言葉聞いて、やっと理解した。

——時空断層による世界間移動、それが行われる際に発動するよう

仕掛けた妨害すらすり抜けてくるとは、予想外だ。

そう言った、ゲーティアの言葉を俺は鵜呑みにした。

疑いもしなかった、敵の言葉なんて信じるべきではないということにも関わらず、それが前提だと思ひ込んでしまっていた。

つまり、逆なのだ。

玉座までの道を妨害されていたのは、邪魔されていたのは、俺だったのだ。

——いや、妨害だとか、言うべきではないかもしれない、か。

彼は、ゲーティアは恐らく、俺と話したかったのだ。

俺の出す答えを聞いたかった、それゆえのこの場所だった。

ゲーティアの身体が透けて、ブレて、消えていく。

世界が歪み、元の形に戻っていく。

その中で、ゲーティアは言った。

お前は一体、何を間に合わせられたのだ？ と。

世界は急速に元の姿を取り戻す。

何重にもなった視界は一つに戻り、足裏にあった地の感触は消え、代わりに全身に浮遊感が付与された。

それを理解すると同時に、身体は地面へと落ちた。

派手な音を立てて落下する、しかしそのことに異常を覚えた。

派手と言っても俺だって受け身くらいは取る、だというのにその音がやけに響くほど、ここは静寂に包まれていた。

しかしそんなこと、本来ならありえないはずなのだ。

何故ならば、此処こそが戦場で、真正正銘、本物のゲーティアと立香くんたちは戦っていたはずなのだから。

そして、そのゲーティアが俺の見据える先にいるのだから、激しい戦闘が行われていて然るべきなのだ。

おかしい、と思った。思ってから、足元に落ちているそれに気付いた。

見覚えのあるものだった、一人の少女が常に携えていたものだった。

最初の頃は不慣れで、それに振り回されていた。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、と特異点を乗り越える度に、それが彼女の象徴のようになっていった。

——マシユ・キリエライト。

立香くんと共に、俺を先輩と呼んでくれる親しい後輩。

共に特異点を駆け抜けてきた戦友。

シールドという特殊なクラスの彼女の持っていた、彼女をデミ・サーヴァントであると証明する唯一の装備——盾が。

雪花の盾が、転がり落ちていた。

ゲートイアが不快そうに、しかし愉快そうに笑う。

ああ、もう一度聞こうか？ と。

ああ、それがマシユの答えなんだ、と思った。

ゲートイアに対する返答、死の無い永遠に対する答え。

彼女は、マシユ・キリエライトという少女は、死の地点を駆け抜けたのだ。

立香くんを、みんなを護りきったのだ。

ただ、ひたすらに、未だ見ぬ明日の為に。

過去から現在へと紡がれてきたものを、繋がれてきたものを、彼女もまた繋いだのだ。

次に——カルデアそのものに、あるいは立香くんには、託したのだ。託されたからには、託さなくてはならないだろう。

未来を取り戻さなくてはならないだろう、繋いでいかなければならないだろう。

立ち上がって、ゲートイアを見据えた。

もう一度聞くなってんなら、もう一度答えるよ。

まあ、間に合ったんじゃねえの——というか、マシユが間に合わせてくれた。

見ろよ、マシユの持っていた盾を。

光帯の直撃を受けてなお、傷一つない。

彼女の護りは、精神の護り。誰にも侵すことのできない、雪花の盾。

お前の狂った甘言は、ついでマシユには届かなかった。

マシユの答えは、お前の星すら貫く光を跳ねのけた。

それは決して、無駄なんかじゃなかった。

そのお陰で、俺は未来を取り戻す為の戦いに間に合ったんだから。繋がれたのなら、更に繋ぐのが人つてやつだ。

人は、生命は、歴史は、文明は。

喜びは、楽しみは、幸せは。

そうやって過去から現在へと渡されてきたものなのだから。

ゲーティアはその表情を変えることも無く、また何かを言うまでもなく俺を見据える。

少しの間視線をぶつけ合わせて、それから俺は後ろへと振り向いた。

それにまあ、なんだ——立香くん。

そうやっていつまでも呆けてると、マシユに笑われる……いや、心配されると思わない？

マシユと主従関係だった、相棒だった、君はもう、立ち上がれない？

彼女に託されたものを次に託そうとは、もう思えない？

そう言えば、彼は暫しの間俺を見た。

いや、正確に言うのならそれはほんの数秒だったのだと思う。

その数秒の間、彼は俺を見て、それからマシユの盾を見た。

その瞳に、闘志が灯りなおす。

そうですね、と彼は言っただけで笑った。

俺、これでもマシユの先輩なので、情けないところは見せられないや、と立ち上がった。

それに呼応するようにアルトリアが聖剣を携える。

ライダーさんが「遅いですよ」と俺の背中を叩く。

カーミラが呆れたように笑って「何かツッコつけてんのよ」と言った。

そうして最後に鈴鹿がドツと背中に負ぶさってくる。

いやお前だけ俺の扱いが雑過ぎる……と文句を言おうとして、けれどそれより先に耳元で鈴鹿は口を開いた。



私のマスター、私の守りたい、たった一人のマスター。  
分かってるだろうけど、気を付けて。

貴方の思う『次』はもうどこにもない——いいえ、本当ならば、一  
つたりともあるべきじゃなかった。

もう隣はない、次は無い、取り返しはつかない、だから。  
どうか、貴方も前に進んでね。

そう言っつて、少しだけ頬を寄せてから彼女は離れた。

スツ、と心に冷たい何かが差し込まれたような気分になって、頭が  
少しだけ冷える。

分かっつてる、とだけ返して前を見る。

ゲーティアは、つまらなそうに俺達を見ていた。

——下らない。

無駄で、無意味で、無価値。

我々<sup>わたし</sup>は不滅である、この時間神殿ある限り、およそ我々<sup>わたし</sup>を滅ぼせる  
ものはどこにもいない。

貴様らがどれだけ奮い立とうがそこに意味は無い、幾ら闘志を燃や  
そうが全くの無為である。

マシユ・キリエライトが作り出したその生存は所詮この一時に過ぎ  
ん。

各地で起こっている英霊の抗戦も、時間と共に消え失せる。

### 『第三宝具装填』

精々、貴様らなりの答えとやらを抱え、諸共に死ぬがよい。

——いいや、そうするにはまだ早い。

ゲーティアの言葉に、声を返したのはしかし、俺達の中の誰かでは  
なかった。

いつの間にか、彼はそこにいた。

俺達を守るように、どこからか現れて、立ちはだかるように前に  
立っていた。

その後ろ姿は、酷く見覚えのあるものだった。

その特徴的な橙色の髪をしているのは、たった一人しか心当たりが

無かった。

その声は、ずっと俺達を支え、サポートし続けてくれた人の声だった。

——ドクター？

ほとんど反射的に、そう呼んだ。

そうすれば彼はゆっくりと振り向いて、見慣れた笑顔を浮かべた。やあ、美味しいところを奪うようでごめんね。でも、ここからは少しだけ、ボクの出番とさせてほしい、と。

ボクの名は、ロマニ・アーキマン……いいや、ロマニ・アーキマンであったもの。

聖杯に向けた願いはとうに捨て去った、故に、ここからは元の私としての言動とさせてもらおう。

——おっと、その前に手袋を外しておこうか。

その方が色々と分かりやすいだろう？

そう言つて、彼は見覚えのある真っ白な手袋を両手とも外した。その右手に金の指輪はなく、しかしその左手の薬指——唯一、ゲータニアには嵌められてなかった指に、金の指輪は嵌められていた。

ゲータニアがそれを見て息を呑む。

ありえない、と一言、呆然としたように言う。

それを意に介さず、彼は口を開いた。

少し、昔話をしようか、と。

今から約、十一年前のことだ。

とある場所、とある時期に聖杯戦争が開催され、そこに一人の男が参加した。

名を、マリスビリー・アニムスファイア。カルデア前所長であり、現所長であったオルガマリー・アニムスファイアの父。

当時、カルデア所長であった彼は、その際に最高の聖遺物を用意した。

それがこの指輪だ、私が亡くなる際に、私自身の手で遥かな未来へと送ったもの。

正直なことを言えばあの時、私自身ですらそんなことをしたのかは分かっていなかった。

いつも通り、神さまの気まぐれだろうと思って、さして気にしてもしなかったものさ。

だがマリスビリーはそれを見事発掘し、そして聖杯戦争にて勝利するための英霊を召喚した。

それが魔術王ソロモン、カルデアの召喚英霊第一号。

マリスビリーと共に聖杯を手に入れ、その願いを叶えた英霊の名だ。

——人間になりたい。

口にしたのは、そんなどこにでもある、平々凡々な良くある願いだったけどね。

ありえないと思うかい？ と聞けば、お前はやはりありえないと言うんだろうな。

豊富な語彙を以て、私を罵倒するのだろう。

けどまあ、それは良いさ、どうでも。

兎にも角にも、ソロモンは願いを口にして、そしてそれは叶えられた。

だが、そこで問題は起こってしまった。

私は——ソロモンは、全知全能と言つても良い、未来も過去も見通す千里眼の持ち主だった。

そしてそれは当然、人間になるといふ願いがゆえに失われるはずだった。

それで良いはずだった、何事もなくそうなるはずだった。

けれど、その”無くなる”寸前に、視てしまった——人類の終焉を。どういうことだ、と慌てたよ。けれどどうにかしようにも、それは

本当に刹那のことで、私はとつくに人間になっていた。

誰が、どうやって、何の目的で。

そして、どうすればこれを防ぐことができるのか。

それらを知る術はもう失ってしまったていた、何せ私は普通の人間になつてしまつていたからね。

けれど、無視することもまたできなかつた。

だってこれは、この事件は、どうにも私絡みらしいということくらいは気付けたからね。

だから、私の旅路はここから始まった。

文字通り一から、人間としてあらゆるものを学び直す行程だよ。

誰が敵なのか、何がトリガーになるのか、全くわからない。

分からないから、耐えるしかなかった、備えるしかなかった、そうするので精いっぱいだった。

だけど、その中でもたくさんの偶然と幸運があつて、それに助けられてきたよ。

その最たるものが、私の後ろにいる二人の青年だ。

君たちと出逢えたのは奇跡のようなものだった。

この果てしないグランドオーダーの中、君たちには助けられなかつたことは無かつた。

その事実ことに、心からの感謝を贈る。

マシユと、カルデアのみんなと、そして君たちのお陰で、ボクはこの瞬間に立ち会えた。

だから今度は、ボクに君たちを助けさせてくれ。

——ゲーティア。

改めて名乗らせてもらおう。

そう言うと同時に、ドクターの身体は光に包まれた。

いや、包まれたというよりは、ドクターの身体そのものが光と化しているようだった。

光の粒子となつて、そしてその身は再構成されていく。

白に染まった長い髪に、優しく光る、黄金の瞳。

純白と紅の衣装を纏った彼は、ゲーティアを見据えて口を開く。

「我が名は魔術王ソロモン。ゲーティア、お前に引導を渡す者だ」

——命とは終わるもの。

終わりがあることを定められたもの。

生命とは、苦しみを、辛さを積み上げる巡礼だ。

だがそれは、決して死と断絶の物語ではない。

ゲーティア、我が積年の慚愧。

我が亡骸から生まれた獣よ——今こそ、ボクのこの手で、お前の悪を裁く時だ。

ハ、ハ、ハハハ、ハハハハハハハハハハ！

笑い声が、この場にはあまりにも似つかわしくない嘲笑う声が、高らかに響く。

ゲーティアは本当に愉快そうに、面白そうに、されどもホツとしたように、心底から安心したように笑った。

あまりのことに愕然としたが、いやしかし、なるほどそれは確かに貴様らしい！

何もかもが手遅れになってようやくやく！ 今更のように現れた人類最高の愚者、無能の王！

ヒーロー気取りのつもりならなおさら笑えてくる！ それは恥の上塗りというのだ、ソロモン！

は、ははは！ 分かってないようだから教えてやろう！

英霊としての貴様なぞ我々の敵ではないと！ もしも止められるものがあるとすれば、それは生前の貴様以外にはありえないのだから！

ソロモン王の偉業のみが、我々を止められる！

故に、死後の貴様に出来ることなどは、此処には一つもない！

その甘く腐った脳みそごと、無に帰すがいい！

そう、叫んだゲーティアを、しかしドクターは手を翳すことで牽制した。

話はまだおわってない、と口に指を当て、静かに言葉を紡ぐ。

——伝承に曰く、ソロモン王は万能の指輪を持ちながら、しかしそれを使ったことはただ一度しかなく。

また、ついにはそれも自らの意思で天に還したとされている。

ここからは、全能の神に委ねるのではなく、人が、人自身の意思で生きる時代であるのだと告げるように。

だから、ゲーティア。

お前の手を借りる必要はないんだ。

ボクは、自らの宝具で消滅する——なぜなら、それがソロモン王の結末だからだ。

言葉と同時に、金の魔力が渦巻き始めた。

ドクターを中心にして、神々しい程の黄金の魔力が吹き荒れる。

「ゲートティア、おまえに最後の魔術を教えよう」

”ソロモン王にはもう一つの宝具がある。”そのことは知ってはいたものの、終ぞその真名を知りえなかった——知ることのできなかったお前に。

お前の持つ九つの指輪、そして私の持つ、最後の指輪。

今ここに、全ての指輪が揃った。

ならば必然、あの時の再現ができる。

——ソロモン王の本当の第一宝具。

私唯一の”人間”の英雄らしい、逸話の再現が。

うつすらと笑ったドクターに対して、ゲートティアは啞然としたように口を広げた。

まさか、馬鹿な、ありえない、と言葉を漏らす。

できるはずがない、貴様のような臆病者に、そのような決断が下せるはずもない！

否、やめろ、やめろ、やめろ、やめろのだ！

この指輪は、その指輪は、全能の座は、貴様だけのものでは——！

ゲートティアが必死に手を伸ばす、されどもそれは届かず。

ただドクターを纏う光の奔流が、あらゆるものの接近を赦さない。

第三宝具『誕生の時きたれり、其は全てを修めるもの』

第二宝具『戴冠の時きたれり、其は全てを始めるもの』

そして——神よ、あなたからの天恵をお返しします。

……全能は人には遠すぎる。

私の仕事は、人の範囲で十分だ。

第一宝具、再演。

『訣別の時きたれり、其は、世界を手放すもの』

煌々と輝く光は、ドクターを中心に、爆発するように巻き起こった。それは決して、攻撃用の宝具でも無ければ、防御用の宝具でないのは確かであった。

なぜなら、その光の直撃を浴びてなお俺達には何の異変も起こらなかったから。

支援用という訳でもないそのただひたすらに美しい、濁流のような光はこの領域を丸ごと包み込んだ。

その中で、ただ一人、ゲートティアの声だけが響いた。

だがそれは決して、嘲笑うような声ではなく、されど冷静な声音でもなく、しかして焦りを帯びたものではない。

愕然と絶望、それから苦悶が入り混じった絶叫が、響き渡る。

何故そんな選択が、どうしてそのような真似が貴様に、貴様如きに！

この世全ての倦怠と妥協が凝固したような貴様が、どうしてこのような決断を下せるというのだアアアア！

ゲートティアが手を伸ばそうとする、足を踏み出そうとする。

だがそれはほとんど動きにならず、目に見えるように力が抜け落ちていく。

膝をつき、手で身体を支え、震えながら顔だけ上げて、ドクターを睨む。

それだけで精一杯なのが分かった、それが今のゲートティアにとって最大の努力をした結果であるのが分かった。

もう、叫ぶことすら出来なさそうにしているゲートティアにドクターもまた「ああ、不思議な話だ」と言った。

ソロモン王の姿であったドクターの姿が、解けるように元のドクターの姿に戻っていく。

光の濁流そのものが、ドクターそのものであるように。

あるいは、ソロモンという存在そのものが、光であるように。

ドクターは橙色の髪を緩やかに揺らして言った。

お前とソロモンは、かつて同じ視点を持ち、同じ玉座に座り、同じ

時を過ごした。

なのに、ソロモンとおまえは正反対の結論に達したんだ。だから、もしボクらにとつて違ふところがあつたとするのなら、そうだな。

単純に、ボクには怒る自由が無かつたんだよ。

もしかしたら、それが我々を分けた要因だつたかもだ。

そうして、ドクターは俺達へと振り返つた。

ふにやりといつも通りの情けなさそうな笑顔を浮かべ、それからちよつと説明をしようか、と言う。

ボクは、ボクの持つすべてを今、放り投げた。天へと還した。

この領域そのものがソロモン王の遺体であるというのなら、当然こどももうすぐ崩れ落ちるだろう。

全能の指輪を天へと還すという逸話の、宝具的再現というやつさ。

——だから、この身も、命も、精神も、存在も、ありとあらゆるボクはもういなくなる。

それ、現在から未来へと渡るものだけに限らず、またボクという人間の始まりからというだけには限らず。

本来のボク、即ちソロモン王の存在そのものも消えてなくなるだろう。

ソロモン王が創り上げた、積み上げた、重ねてきたありとあらゆるものは無価値となり、その功績は二度とこの世には現れないだろう。

ゆえに、この時間神殿すらもその存在を喪い、ゲーティアは、七十二柱の魔神達は群体ではなくなり、個々の存在として解けていく。

あまり、格好つけるという訳でもないし、自己犠牲のようで、キミにももう偉そうに説教できなくなつてしまふだけだね。

そう言つてドクターは俺を見る。自己犠牲で俺を連想するのやめませんか……？ とは言えるような空気でも無ければ気持ちでもない。

ドクターは今、いなくなる、と言つた。

それは、多分、死ぬという意味ではないのが何となく分かつて、ただ、ドクターの言葉を待つた。



ドクターは、少しだけ咳払いをしてから再度言った。

存在の放棄、功績の放棄、それはつまり、完全消滅を意味する。

死ではない、座からの消滅だけには留まらない——存在の消滅。

魔術王ソロモンという存在は、そもそも無かったことになる、人類史から、跡形もなく消え去る。

そうすることで、ようやく本当の意味で、神代は終わるんだ。

——正直なことを言えば、怖いし、悲しいさ。けれどもこれは、ボクにできることだったから。

できるのなら、やらないといけない……とはいえ、後悔はしていないよ。

これで良いんだ、この選択は、キミたちが教えてくれたのだから。

そう言ったドクターに、しかし俺は何かを言うことはできなかつた。

立香くんも同様に、ただドクターを見ることしかできない。

何を言えば良いのかさえも、分からなかった。

ただ、もしその行いを止められたのならば、止めたのかと問われれば、やはりそれは不可能だろうということだけが分かった。

物理的に不可能だったとか、そういうことではなく。

俺はドクターが下したドクター自身の決断を、ドクターの選んだ結末を、否定はできないと思ったから。

光の奔流は徐々に落ち着いていき、そして消える。

ごめんね、と小さく俺に言ったドクターはもう一度、ゲートエアへと向き直った。

さあ、これで全ての前提は崩れ去った。

ゲートエア、お前の不死身性もまた、同じことだ。

人々を見守るために編纂されながら、しかし人々の未来を奪う選択をした魔術式よ。

お前は、自らの責務から目を背け、放棄し、あまつさえ消し去ろうとした。

その罪を、今ここで払う時だ。

——確かに、お前の言う通りあらゆるものは永遠ではなく、最後には苦しみが待っているものだ。

だが、それは断じて、絶望なのではないと言わせてもらおう。限られた生を以て、死と断絶に立ち向かうもの。

終わりを知りながら、別れと出会いを繰り返すもの。

……輝かしい、星の瞬きのような刹那の旅路。

これを、愛と希望の物語と云う。

ドクターとゲートティアの視線が絡み合うようにぶつかり合った。

ゲートティアは、その紅い瞳を憎々し気に灯らせた。

愛と、希望の物語——ハッ、笑わせる。

ゲートティアが、ドクターの言葉を反芻するように繰り返してから、馬鹿にしたように笑った。

立ち上がり、前を見据え、ゲートティアはその身体から光が抜けていきながらも、再度魔力を纏わせた。

死ね、ここで死ね、人間ども。

我々の偉業はまだ成し遂げられる、未だ何も終わってはいない。貴様を殺し、カルデアを殺し、英霊どもを殺す。

確かに、貴様のせいで我々の結合は解けていつている——だが、まだ時間は十分にある。

最期の一柱になるまで、我が仮想第一宝具を回し続ければ問題は無い！

命に限りなどはいらない、終わりは必要ない、恐怖も苦しみも！

そんなものを前提とした物語など、我々には不要だ！

失せるがいい、消え去るがいい、塵と化すが良い！

七十二柱の魔神全てを以て、今、貴様らを宇宙の塵にしてくれる！

——いよいよだね。

ドクターは、静かに俺達を見た。

その身体は既にほとんどが光に解けていて、存在そのものが希薄になっっているようで、今すぐにでも、消えてしまいうさだった。

それでもドクターは気にせず、口を開く。

キミたちの見せ場はここからだ、そして、ボクたちが最後に見るものは、キミたちの勝利だ。

カルデアの司令官として、最後の指示を出すよ。

——完膚なきまでの勝利を、キミたちは人間として、あの魔神王を名乗る獣を、ここで討伐しなくてはならない。

さあ、行ってきなさい。

これがマシユとキミたちの辿り着いた、ただ一つの旅の終わりだ。

光に解けながら、薄れながらドクターが手を出した。

迷うことは無かった、躊躇うことはなかった。

その代わり、悲しみがあって、苦しさがあった。

だけどそれも飲み込んで、ハイタツチのように叩いた。

行ってきます、後は、任せてください。

声は震えていたと思う、表情も多分見られたもんじゃなかったと思う。

だけどドクターは、やっぱり笑って、ああ、頼んだよ、と言った。

光が奔る、天は裂け、地が砕け、空間が軋む。

ドクターの宝具のお陰でゲーティアは著しく弱体化を起こしているが、しかしその上でなお格上であることに変わりはない。

時間が経てば経つほど弱くはなるだろうが、いまだ彼の一撃は、サーヴァントが相手だとしても必殺であると断言していいだろう。

短期決着ではなく、およそ初めてと言ってもいい持久戦だ。

一発でも喰らえばその時点で終わる、最後の戦闘だった。

一瞬だった、ほんの瞬き一回分の刹那でゲーティアの蹴撃は走り、アルトリアの聖剣とぶつかり合う。

爆発じみた金属音が響き渡って、アルトリアの体勢がよろめいた。それをゲーティアは見逃さない、異常なまでの速さで身体を捻り拳

は放たれる。

だがそれを黙って見ている訳もなく、カーミラのアイアンメイデンが両者の間に現れた。

ゴシヤリ、とアイアンメイデンはひしゃげ、突き破られる。

だがアルトリアとて一級のサーヴァントだ、作り出された数瞬の間だけで身体を傾ける。

激しい風圧を発生させながら拳を空を切り、直後に鎖がその全身へと絡み付いた。

メドウーサの鎖、それがゲーティアの動きを止められるとは限らない——が、問題は無かった。

その目的は動きを止めることではなく、一瞬だとしても視線を逸らす為であり、意識を拡散させるためだ。

鈴鹿の刀剣が静かに空を切り、ゲーティアの首を浅く断った。

そこから舞ったのは血ではなく黄金の光。

それは魔力というよりは、血液と同じ生命そのもの。

彼を構成する、七十二柱の魔神そのもの。

ゲーティアが薄く呻いて鎖を、瞬間、踏み込んで鈴鹿の襟首を掴んだ。

力づくで抱き寄せて、同時にカーミラの名を叫んで令呪を切った。

何をしてほしいのかまでは言わなくても良い、彼女であれば分かる。

直後、ゲーティアの両腕からは紫の光が弾け、彼女の宝具が——  
幻想の鉄処女ファンタズムメイデンが姿を現した。

閉じ込めるように、噛み砕くようにそれは閉じ、光は内側で爆発を起こした。

ガラガラと宝具は崩れ去る、その中から現れたゲーティアは、やはり健在。

彼の両腕にある、多量の目のような器官がパツと輝いた。

紫の光——光線が空を駆ける。

や、ば——！

避けられない、一瞬そう思えばグツと鈴鹿が俺を掴んで地を踏みしめた。

上手く着地してよね！ という言葉と共に上空へと放り投げられる。

……放り投げちゃうのか!?

いや高い高い高い！ 投げすぎ！ と文句を言いながら礼装を起動した。

現れるのは必中の呪いがかかった一つの弓矢、ゲートイアの直上で矢を引き絞る。

リミテッド・ゼロオーバーは既に展開している、魔術による身体強化も充分——射抜け！

わざわざ大声で叫びながら幾度も矢を撃ち放つ。

刺さることなくそれは弾かれる、だがゲートイアは俺を見た。

ゲートイアにとってマスターは何よりも優先すべき相手だ。

何せマスターが死ねば連動してサーヴァントも消える、だからこそやつは些細なチャンスでも見逃さない。

煩わし気に魔力が渦巻き、俺へと向かって撃ち放たれる。

当たれば一瞬で塵と化すだろう、文字通りの即死攻撃——しかしそれが届くより先に鎖は俺へと絡み付いた。

ギョーンッ！ とメドゥーサに引き寄せられてからポイツと後ろに捨てられる。

アルトリアの聖剣がゲートイアの身体を斜めに斬り裂いた。

左腰から右肩へと駆け抜けるように鋭く閃いて、しかしよろけることもなく足が振り抜かれた。

守るように、カーミラが間へと入る。

彼女は自分の持つ杖と、己の体そのものを盾にして、そして衝撃音が響いた。

杖が砕け、爪先がカーミラの身体へと突き刺さり——そして光が奔る。

彼女の身体に幾つもの穴を空け、しかし、それでもカーミラはアルトリアを突き飛ばした。

紫の光線はアルトリアの半身をズタズタに引き裂いたが、しかしまだ死んではない。

カーミラが鞠のように蹴り飛ばされて光となっていく、それと入れ替わるようにライダーが踏み込んだ。

釘剣が鈍く光ってゲートイアの背中に深く刺さり、同時にメドゥー

サは跳んだ。

追うように頭を上げたゲーティアの目と、メドゥーサの目が合つて、魔眼は黄金に光る。

石化の魔眼、それは刹那にすら劣る瞬間だけゲーティアの動きを止めた。

言葉にするべきではないほどほんの少しだけの停止、だがそうであつたとしても止まるということは流れを遮られるということに他ならない。

隙が、作りあげられる。

血に塗れたアルトリアが魔力を爆発的に練り上げられて、それを防ごうとすることを阻害するように鈴鹿の刀が閃いた。

同時に概念礼装と礼装魔術を起動する、立香くんと目を合わせて同時にガンドを撃った。

がら空きの胴へと当たり、ゲーティアの動きが再度止まり、立香くんが最後の一面になっていた令呪を切った。

聖剣の極光が、撃ち放たれる。

オ、オ——オオオオオオオオオオ！

まだ、まだ、まだだ！

叫びと同時に突き出された両腕から紫の光は放出された。

聖剣の輝きと、魔神の光はぶつかり合つて弾き合い、そして聖剣の輝きが打ち勝った。

黄金の光がゲーティアを巻き込んで、激しい衝撃が走った。

それだけで身体は煽られて自由が利かない、だがその中でアルトリアが崩れ落ちていくのが見えた。

あの一撃が、アルトリアに出来る全てであり、その身体は光に解けていく。

——この数回のやりとりだけでカーミラとアルトリアが落ちた。

残るは鈴鹿とメドゥーサ、それから俺と立香くんだけ。

だが、それがイコールで劣勢だとは限らない。

時間が経てば経つほどゲーティアからは威圧感が減っていた。

身体は光に解け、比例するように力も速さも魔力も、全てが衰えていく。

負けるわけにはいかない、と思った。

同時に死んだら次は無い、という焦りが脳裏を過り、それを無理矢理払い落とした。

死んだら終わりなのが、普通なんだよ。

自分に言い聞かせて令呪を切れれば、上空に数百の刀は顕れた。

雨のように、それらは降り注ぐ。

その幾つかは光に撃ち消されたが、それでもなお数重の刀はその黄金の身体を刺し貫いた。

ゲーティアがガクン、と膝をついた。その身から漏れ出る光は明らかに増えていつていた。

——ここだ。

この一年で培ってきた経験が、そう囁いた。

ここが決め時である、と。

思った時には既にラスト一画の令呪を切っていた。

メドゥーサの魔力が急激に上昇し、天馬は空を駆ける。

その嘶きが空へと走り、流星は天から地へと流れ落ちた。

衝撃と轟音が響いた。

大地は砕け、石と土煙が巻き起こり、そしてメドゥーサの身体が宙を舞った。

——っ、鈴鹿あ！

叫ぶと同時に概念礼装を起動して、先導するように走り出す鈴鹿の後を追う。

メドゥーサの身体が地に落ちて、同時に煙はゲーティアの手によって払われた。

光が全身から零れ落ちている、今にもその身体は崩れ落ちてもおかしくないとする思えるのに、それでも腕を向けた。

そこから放たれたるは、紫紺の極光。

幾十にも分かれて空を翔けたそれを、鈴鹿が弾く。

携えられた幾つもの刀が、完璧な角度で光を受け流し、肉薄した。そつと鈴鹿が足を踏み込みその腕を斬り落とす、ゲーティアが叫ぶと同時に腕を振るった。

フラガラック——！

雄叫びと同時に、蒼光の剣はゲーティアの胸へと叩きこまれた。

その身体は予想外に柔く脆弱になっていて、しかしゲーティアは未だ紅に光る眼差しで俺を見た。

身体を解かしながら、それでも縋るように「まだだ」と言った。

瞬間、身体が引つ張られて後ろへ飛んだ。直後に吹き飛んだ鈴鹿が俺へとぶつかった。

勢いよく肺から空気が抜ける、ゲーティアが手を振るう。

まずい、死ぬ。

ほとんど反射的にそう思う、駄目だと叫び、無理矢理身体を動かした。

紫紺の光が鈴鹿と俺を焼き払い——当たる直前に鈴鹿が俺を押す。彼女の身体が巻き込まれ、俺の半身が勢い良く焼けた。

でも、それでもまだ生きている、まだ戦える。

呼吸がしづらいのも、片目が良く見えないのも、身体が上手く動かないのも、関係ない。

立ち上がれ——と己を鼓舞すれば、立香くんが前に出た。

——は？ 何やってんだよ、逃げろ。

そう言うより早く彼は地を蹴った。

ゲーティアの振るった拳を緊急回避で躲し、そして。

瞬間強化、本当に一瞬のみ力を飛躍的に上昇させる、礼装に備えられた魔術が起動した。

立香くんの拳がゲーティアの顔面を捉え、またゲーティアの拳は彼に突き刺さった。

立香くんはゴボリと血を吐き出したが、それでも拳にグツと力を入れた。

バキリ、と音を立てて彼の顔は崩れ、ゲーティアは力なく仰向けに倒れ込む。



——何故だ。

何故、貴様らは戦うのだ、屈しないのだ、立ち上がるのだ。何故、ここまで戦ってこれたのだ、折れずに駆けてこられたのだ！ゲートティアが掠れた声でそう叫ぶ。

その前に立つ立香くんが腕を抑えながら答えた。そんなの、決まってるだろ。

これから先を『生きる為』だ、と。

少しの間だけ、沈黙が下りる。

……ただ、自分が、生きる為？

そう、か。人理を守ってさえ、いなかったとは。

生存を願いながら、死を恐れ、

死を恐れながら、永遠を目指した我々を打倒した。

なんと——救いようのない愚かさか。

いや、救う必要のない頑なさと言うべきか。

手に負えぬ、とはまさにこのことを言うのだろう。

ゲートティアは一瞬だけ地を握ったが、しかし起き上がることは無く。

あっさりとその身体は解け消えた。

お、終わった……？

自分でも信じられないくらい呆けた声が飛び出せば、それに応じるように通信機から声が鳴った。

——ようし！通信が繋がった。

たった今此方でも玉座の崩壊、魔神王ゲートティアの消滅を確認できた！そしてその二つの要素が示すところはつまり、その領域の崩壊だ。

だが、それ以上に光帯の状態が不安定なんだ。

ゲートティアが束ねていたものだからね、それが無くなったことによる影響だろう。

このままでは形は崩壊し、本来の状態——大気に満ちるマナとして拡散することになる。

そうだったら、崩壊よりも早くその領域は跡形もなくなるだろう。なにせ超新星の如き大爆発になるだろうからね！

ああ安心してくれ、カルデアは無事さ、だって私がいるんだぜ？

時空断層の前にあつた古い門があつただろう？ あそこまで来てくれれば直ぐにでもレイシフトは可能になっている。

分かつたらほら、早く立つ！ 走る！ さっさと帰還してくれたまえ！

そうして通信はブツツと切れた。

少しだけ立香くと目が合つて、二人して少しだけ薄く笑つた。

何かいっつも時間に追われてる気がするな、と思つてからフラフラと走り出した。

走る、走る、走る。

時空断層すらも超えて、門へと駆ける。

俺も立香くんももうギリギリで、怪しい足取りで走っていた。

ただ、それでも何だか間に合いそうだな、とは思っていた。

なにせもうすぐで門だ、何事も無ければこのまま突っ込める——なんて、思ったのがいけなかつたのかもしれない。

フラグ、とでも言うべきだろうか、と思つて反吐がでた。

でも、まあそうなるだろうな、とも思つた。

誰よりも多くの悲しみを見て、誰よりも耐え難い感情を受け続け、そして世界を創り直そうとまで思つたようなやつが。

実現する一歩手前まで持つて行つた執念の塊のようなやつが、アレだけで終わる訳がない。

そうだよな、ゲーティア。

そう、目の前に立つ男へと呼びかけた。

その髪は星のような金になり、身体はあらゆる箇所に傷が入り、右肩から先が消滅している。

傷から煙のように真っ黒な光がこぼれ出ている、人のような姿になつたひとりの男へ。

彼はうつすらと目を開けて、ああ、そうだな、と言つた。

私の夢は潰えた、この神殿に座し、行つた莫大な時間は、労力はすべて無為となつた。

——そうだ、私は、敗北した。

他でもないお前たちに、私は惨敗した。

光帯は消え去り、玉座に意味はなくなり、人理焼却は無効となつた。ソロモン王が消滅した時点で、私の偉業も立ち消えたのだ。

この私も、最早七十二柱の魔神ではなく、その残り滓のようなものにしか過ぎない。

これが、私の結末だ。

これ以上何をしようが、私にとっては何一つ覆ることは無いだろう。

終わつたものには何も成し得ない、変えられない。

意味を与えられるのは、常に過程にある者だけであるがゆえに。

だが、それでも——ああ、以前の私ではありえないだろうが、それでも、意地がある。

限りある命を手に入れて、ようやく手に入れた、理解できた意地だ。決して譲れない、私だけのものだ。

私は——お前たちの生還を一瞬だけだとしても遅くする。

言葉にする敬意は、これで以上だ。

人理焼却をめぐるグランドオーダー。七つの特異点、七つの世界を超えてきたマスターよ。

我が名はゲーティア。人理を以て人理を滅ぼし、その先を目指したもの。

誰もいない極点、誰も望みはしなかつた、虚空の希望を目指し続けたもの。

私はいまこの瞬間にようやく生まれ、そしていま滅びる。

何の成果も、何の報酬もありはしない、だが、そうだとしても。この全霊をかけて、おまえを打ち砕く。

——我が怨敵。我が憎悪。我が運命よ。

どうか見届けて欲しい。この僅かな時間が、私に与えられたたった一つの物語。

この僅かな、されど、あまりにも愛おしい時間が、ゲーティアと名乗ったものに与えられた、本当の人生であるがゆえに。

その身体は押せば砕けるような身体だった。

先ほどまで戦ったゲーティアとはまるで正反対で、俺や立香くんよりもずっと脆い身体。

魔力だって全然感じることができず、威圧感も全くない。

正しく残滓と言うべきだろう。

成し遂げることはできず、夢をかなえることはできず、破れ落ちたものの行く末。

ゲーティアの、結末。

だが、その上で彼は、最後の勝ちだけは譲れないと、そう言った。であるならば、逃げる訳にはいかないだろう。

これがこの旅の、最後の戦いだ。

拳を握り、全身に気合を入れて、立香くんの横に並ぶ。

互いに目を合わせ、そして地を蹴った。

もう全員ボロボロで、傍から見れば笑われるような始まりだったかもしれない。

英霊どころか、その辺の特に鍛えてもない普通の人たちの喧嘩の方がまだマシだったかもしれない。

だから、決着は一瞬だった。

俺達二人の拳がゲーティアを殴り飛ばす。

代わりにゲーティアの拳が立香くんの頬を殴った。

鈍い音が響いて、しかしそれだけでゲーティアは倒れた。

否、倒れるまでもなくその身体は光へと変える。

残滓は残滓として、宙へと消える。

——見事であった。

これが、限りのある生命。

ああ、実に——素晴らしい、いのち生命であった。

いやはや、まったく。

不自然なほどに短く、不思議なほどに面白く、また幸せであるのだ

な。

人の、人生というやつは。

こちらが驚くほど、安らかな笑顔を浮かべ、ゲートイアはその姿を消した。

そうなるのが正解であるように、何一つ残すことなく完璧に、完膚なきまでに消滅した。

これで、やつと全部終わったんだ、と思えば途切れていた通信機から音が響いた。

ああ、良かったやつと繋がった！

突然繋がらなくなって焦ってたんだ——とか言うのは今はいい！

早く、早くするんだ！ カルデアももう、この時間神殿からの離脱を始めた！

レイシフト地点までもうすぐだろう、走れ！ 我々もギリギリまでは君たちを待つ！

ダ・ヴィンチちゃんかそう叫ぶ、立香くんが行きましょう！ と足を踏み出した直後、彼は崩れ落ちた。

最後に放ったゲートイアの一撃。

最期にして最初の戦い、勝ちだけは譲れないと叫び、意地だけで戦った彼のそれは、限界の地点にいた彼の力を余すところなく食い尽くしていた。

一瞬だけ、躊躇った。

ほんの少しの間だけ迷って、そして俺は立香くんを掴んだ。

全身の気力を、体力を振り絞って地を駆ける。

何をしているんですか！ 行ってください！ と泣くように叫んだ彼を引きずるように走って、そして——足場が崩れた。

足から地の感触が無くなり不安になるような浮遊感がやってくる。

一人であったのなら、間に合っていた距離だった。

二人であったとしても、協力し合えば互いに間に合う距離だった。

だが、この状況では間に合わなかった。

分かっていたことだった、だけど、諦めたという訳でもまた無かつ

た。

立香くんを抱える腕にだけ全てを集中する。

「なけなしの全てを振り絞って、届け、届けと叫んで俺は、立香くんを放り投げた。」

残念ながら、投げたというにはあまりにもしょぼすぎたと言えるだろう。

彼の身体はほんの少ししか浮かず、けれども彼はその先の、まだ足場として機能している部分を掴むことに成功した。

慟哭のような悲鳴をあげながら立香くんはそれを這い上った。すげえ、と思った。

限界だっただろうに、それでも登り切った、前に進んだ。

——ああ、悪くないな。

そう思った、良かったと言いつつ切れないのが、やっぱり少しだけ未練があるように思えて笑えたけれども、うん、それでも悪くなかった。

立香くんが手を伸ばす、だけどそれは届くはずもなかった。

「ごめんなあ、と思ったけれど、最後の言葉がそれになるのは気に入らなくて。」

少しだけ考えてから必死に声を張り上げた。

もう全然力の入らない身体に喝を入れて、立香くんを見る。

「ありがとう、頑張れ」

それが無事届いたのかどうかは分からない。

何だか両目ももう霞んできてるし、身体はどんどん落ちていくし彼の表情も良く見えない。

「けどまあ、届いただろう。」

そう思えば自然と身体からは力が抜けた。

まるでずっと張りつめていた糸を切ったかのようにだらしなく、弛んでダレた。

それはある意味では、比喩ではないかもしれないが。

終わったんだなあと思って落ちてきた瞼をそのままにした。

——人は、人に繋がれたものを、次の誰かに繋ぐものだ。

マシユが皆を守ったように、ドクターが皆を守ったように、俺もま

た、誰かを守る役目があったのだ。

もう、やり直せることも無い、という鈴鹿の言葉を思い出す。

正直なことを言えば、俺はそれで良かった。

いいや、それが良かった。

ちよつとだけ、安心してた。

ようやくと終われるんだって、思った。

一回しかないから、一つしかないから、大切にするものだと、できるものだと思うから。

次がありすぎると、大切にできなくなってしまうから。

だから、あの時言えなかったけど、ゲーティア。

俺は終わりが欲しいから、永遠はいらなかったんだよ。

声にすらならない想いを口にして、落ちていた瞼をもう一回開いたが、しかしほとんど何も見えなかった。

そうしてやがて、色んなものが砕け、崩れるような音も聞こえなくなつて。

自分が浮いているのか、落ちているのかも分からない感覚に包まれて。

そして、落ちてきた真っ白な光が俺を——俺の何もかもを、綺麗に解かし尽くした。

——気が付いたら人気のない上、燃え盛る街に一人佇んでいた。

「は……う？」

かつて見た光景だった、見覚えのあり過ぎる光景だった、乗り越え  
たはずの場所だった。

夢だと思うにはあまりに現実的過ぎた、手に触れる瓦礫は確かにそ



ここにあり、猛る炎のせいで酷く暑かった。

呼吸すら上手くできない中で、不意に自分の身体を見た。

全然鍛えられていないヒョロヒョロな身体だった。

概念礼装はどこにもなくて、魔力だつて回し慣れていなかった。  
吐き気が、する。

何かに心が締め付けられているようだった。

視界がグルグルと回り出した中で、いつか見た骨が現れた。

その手にある古びた剣が、雑な軌道を描いて俺の首筋を断った。

——気が付いたら人氣のない上、燃え盛る街に一人佇んでいた。

ああ、ああ、ああ……。

「全部、無駄だったんですか?」

返答は、どこからもなかった。

ただ、悠然と燃ゆる炎と、砕かれた瓦礫だけが、そこにあった。

かつて一人の青年がいた。

特に取り柄は無く、特筆すべき才能はない凡才の青年だった。

けれども、その肉体に持った「レイシフト適性」という類まれなる特徴を持っていたが故に、青年は選ばれた。

世界の救済という大きな使命を背負う人間として、選ばれた。

青年は、それを確りと理解しないまま、少なくともはあるが仲間を作り、出来るだけの努力をして、その日を迎えた。

世界を救う、その第一歩を踏み出す日であった。

不安ではあったが、優秀な仲間がいるから大丈夫だろうと、どこか楽観もしていた青年は笑顔で装置の中に入り、そして。

襲撃は起こった、強力な爆発が一瞬にして広がった。

青年の視界の中で四十八人の仲間たちが次々と巻き込まれ、終ぞ青年の身も爆炎に呑みこまれることとなった。

呑まれると同時に、装置は作動した。

半ば誤作動であったとさえ言ってもいい。

正しく事故であったそれは、四十八人を跳躍させるだけの膨大なエネルギーを、一人の青年に余すところなく注ぎ込んだ。

青年の肉体は既に死んでいたが、しかしその魂と精神はそれによる時間・並行跳躍を行わざるを得なかった。

跳躍の行き先を設定されなかったそれは、ただ虚空へと向かう果て

なき旅路。

レイシフトとは、要するに時間移動と並行移動のミックスである。縦軸の移動も横軸の移動もデタラメとなったその旅は最終的には、青年を”世界の隙間”へと叩きこむ形となった。

世界の隙間、もしくは時の海——あるいは虚数空間。

あてどなく迷い込んだ青年は、偶然にも”それ”と出会った——地球にアクセスする為のアプローチ先を探していた”それ”と出遭った。

青年にそれが何かを理解する知恵も、目も無かったが、しかし自分以外の何かであることだけは分かった。

青年はひたすらに願う、肉体が死ぬ直前からずっと、無限に繰り返して続いていた願いを想う。

——死にたくない。

既に死した身でありながら、ひたすらにそう願った青年に、”それは手を差し伸べた。”

外に在る神とでも呼ぶべきその手を、青年は掴んだ、掴んでしまった。

願いと共に、繋がりを作ってしまった。

”それ”は青年を保護し、加工して、元の世界へと送り出す。

可能性のある内は死なくなるようになり、青年はある意味で、その命を吹き返した。

——人の命に、もう一度はありえない。

人の人生に、もう一度はあり得ない。

時間は有限で、進むべき道は一本だけで、後戻りはできない。

——だが、もしそうすることができるとあるものがあるのなら。

それはきつと、人の道を外れた”何か”でしかないだろう。

”何か”に成り果ててしまったものでしかないだろう。

外れてしまえば、元に戻ることは許されないだろう。

後戻りはできても、前には進めない。

有限から外れた無限の存在。  
無限に繰り返すもの、ゆえに無限ルーパー。  
彼に終わりは、訪れない。

## 無限ルーパー@最終ループ

——気が付いたら人気のない上、燃え盛る街に一人佇んでいた。燃ゆる業火はあの日のそれと変わらない。

崩れ行く都市はあの日のそれと変わらない。

あの日、あの時、あの瞬間。

目に焼き付けて、記憶に刻み込んだ、あの地獄と寸分違わない。

すべてが始まった時の光景と、何一つ変わらなくて、けれども、何もかもが同じという訳じゃなかった。

他の誰でもない、俺自身がもう、別物だった。

立ち上がることにすまなならなくて、その場にへたり込んでしま  
う。

決して、体調が悪いわけでも、怪我をしているわけでもない。

身体的な面だけ見れば、むしろ絶好調と言っても良いほどだった。

それなのに、まるで身体に力が入らない。

いいや、多分もう、入れることが出来なかった。

そうしようと思うことさえ、億劫だった。

立ち上がる理由を探すことさえもう、出来なかった。

だって、何をしても無駄だったのだから。

どう足掻いても、すべて無意味だったのだから。

何度も挫けそうになって、その度に支えてもらって、背中を押して  
もらって、必死になって頑張ってきた。

たった一年。

されども一年。

短いようで、ひどく長い、一年だった。

思い出すことすらしんどくて、苦しくて、泣き出しそうになるほど  
で。

だけど何よりも明るくて、暖かくて、誇らしい旅だった。

それがすべて、無くなった——なかったことになった。

ここまで踏みしめて来た時代も、命も、時間も。

たくさん繋いできた希望も、絆も。

何もかもがゼロになってしまったんだ。

——何かがドンドン内側で膨らんでいく。何かがドンドン内側に積もっていく。

重くなっていく、重くなっていく、重くなっていく！

押し潰される、と思った。

もう、それでも良いか、とも思った。

耐えることに意味はなかったのだから。

グチャリと潰れて、何もかも、全部吐き出してしまえば良い。

どうせ一人なのだから。

どうせこれもまた、消えてしまうのだから。

バタリ、と意識せず横に倒れこんだ。

ちよつとした衝撃が、全身を伝う。

少しだけ痛かった。その痛みが引き金を引いたみたいに、涙がボロボロ零れ始めた。

止められなかった、止めようとも思わなかった。

……痛いのは、嫌だった。

怪我をするのは避けたかった、骨が折れた時の感触は、思い出したくもない。

たくさん血が溢れていくのは、ひどく恐ろしかった。

死ぬのが、怖かった。

生き返るのが、気持ち悪かった。

こんなのはもう、人間じゃないと思った。

怪我をさせることに、慣れたくはなかった。誰かを傷つけたくなかなかかった。

血を流させることを、当たり前にしなくなかった。

戦いなんてごめんだった、殺したくなんてなかった。

苦しかった。辛かった。もう投げ出したかった。やめたかった。

逃げたかった。代わってほしかった。終わりがかった。

どんどん感覚がおかしくなっていくのが、はつきりと自覚できたのが恐ろしかった。

まるで、自分が自分じゃなくなっていくようだった。

知らない自分に、生まれ変わっていくような感覚があつて、ずっと吐きそうだった。

耐えられないと、何度も思った。

もう耐えたくない、何度も思った。

でも、その度に耐えなくちゃって思い直した。

だって、だって俺は！ 人を、人理を、世界を！ 守らなければならなかったのだから！ 救わなければならなかったのだから！

だから、耐えた、踏ん張った。

あとちよつとなんだって、もう少しなんだって。

過ぎていく日数を数えながら、経過していく時間を想いながら。

まだ諦めてはならないのだと、天を睥んだ。

すべてが終わればきつと、いつかのような普通の、平和な明日が待っているのだと信じたから。

誰かに頼る訳には行かなかった。

カルデアの職員はみんな、恐怖と不安を抱いていた。

彼らは誰もがひとかどの天才なれど、レイシフト適性も、マスター適性もない人達なのだ。

才があつて、実力があつて、けれど直接戦うことは出来ない人たち。

俺と、立香くんに全てを託すしかない人達。

彼らはどのような思いだったのだろうか、どれほどまでに思い詰めただろうか。

俺と立香くんという、素人どころか、ただの一般人にすべてを託さなければならなかった彼らは、どれほど苦しんだのだろうか。

けれど、だからこそ、折れる訳にはいかなかった。

少しの不安でも、続けば続くほど、不和を生み出す大きな要因になる。

ただでさえ、閉塞した環境なのだ。

身内で揉めている場合では無かったし——それに、立香くんだって、不安だったに決まっているのだ。

誰かが強くあらなきゃいけなかった。

俺は先輩だった。少なくとも、立香くんの。

だから、せめて上っ面だけでも取り繕おうと思った。

俺の無能さは周知の事実だけれども、それでも、希望にならなければと、そう思ったから。

鍛錬は欠かさず、勉強は絶やさず。

己を磨き上げるのは、純粹に自分の為でもあり、ある種のパフォーマンスでもあった。

——そうやって、特異点を乗り越えれば乗り越えるほど、不安は目に見えて無くなって。

代わりに期待は大きくなった。

もちろんそれは、俺だけに向けられるものではなくて、立香くんにも向けられているものであったが、しかし、それが自分に向けられているという事実そのものが、何より恐ろしかった。

何故なら、それに応えなければならなかったのだから。

そうして、応えれば応えるほど、進めば進むほど、後戻りはできなくなっていくた。

いつの間にか、立派なマスターとして認められるようになった。

確かに喜ばしいことで、嬉しかったことではあったけれど、それはそのまま重圧にもなった。

——戻りたかった。

人理修復の旅なんて、請け負うべきでは無かったのだと、後悔を重ねるようになった。

どうせ何度あの場合に戻ったとしても、断ることなんて出来ないくせに、狂うほどに悔やんだ。

それを、吐露できればどれだけ楽だっただろうかと、今でも思う。けれど、それをした瞬間、俺はもう自分が戦えなくなることが分かっていた。

全部吐き出してしまえばその瞬間、俺は弱音も涙も何もかもを同時に吐き出してしまうから。

一度逃げ場が出来上がると、絶対にそこに逃げ込んでしまってもう出てこれなくなってしまうから。

だから、何度でも、何度でも、言い聞かせた。



誤魔化すように、騙すように。

一年くらいなら、全然平気だと。

希望はまだあるんだと。

未来は奪われた、だから取り返すんだと。

取り返せるのは、俺達しかいないんだと。

だから、止まっている暇なんて全然、どこにもないんだと。走り続けるしか無いんだと。

そうやって走ってきた、走り続けてきた。

その果てに、手が届いたと思った。

ようやく報われたと、素直にそう思っただけ、届いてなかった。

終わらなかつた、終われなかつた。

また始まつた。

俺は、まだ頑張らなきゃならないのか？

もう一度、この長かった旅を、始めなきゃならないのか？

あと一度で終わる保証は、どこにある？

あと何度、繰り返せば良いんだ？

……嫌だ。

違う、もう無理だ、無理なんだ。

不可能だ、俺にはもう、できない。

あの長い戦いに、身を投じることはできない。

果てしない旅を、歩むことはもうできない。

もう俺は、頑張れない。頑張れない、頑張れない、頑張れない、頑張れない、頑張れない！

言葉をかけるくらいなら代わってくれよ、背中を押すくらいなら前に立ってくれよ！

もう、前が見えないんだ。

誰か、助けてくれよ……。

助けて、ください……。

丸くなって、蹲る。

そうすることだけで、精一杯だった。

頭をかきむしることも、叫びをあげることも、周りに当たること、結局何にも出来なくて。

ただ、ひたすらに小さく、縮こまるので限界だった。

都市を満遍なく焼き滅ぼす炎からも逃げるように、一層小さくなれば、不意にザリ、という音が鼓膜を打った。

見るまでもなく、それが誰かは分かっていた。

何度、ここで殺されたと思っっているんだ。

世界は理不尽に象られている。

救いをどれだけ求めても、差し伸べられるようなことは無い。

祈りも願いも、しよせんはただの現実逃避でしかない。

音は少しずつ、少しずつ近づいてきていた。

骨特有の、不安定な歩き方から鳴る、軽い音。

酷く不愉快で、総毛立つような、恐ろしい音。

逃げようとすれば、多分出来る。

今すぐに動き出せば、きつと逃げ切れる。

——でも、動かなかった。

身体の動かし方を忘れたみたいに、震えて蹲ることしかもう、できなかった。

馬鹿みたいに早鐘を打つ鼓動が、鼓膜を揺らす。

漏れる吐息が、どんどん大きく早くなる。

音はドンドンと大きさを増していき——不意に、腹に衝撃が走った。

肺の中の空気が一気に出て、身体が少しだけ宙を舞って、そこでようやく蹴り上げられたことを悟った。

受け身も取れずに仰向けに落ちて、スケルトンと目が合った。

その手の内にあるのは、碌に研がれてもいない、刃毀れのした剣。嫌な懐かしさだった。

一撃で、死ねるのだろうか。

死ねないだろうな。

何度も何度も打ち付けられて、それでようやく死んで——そして、また元通り。

痛いのは嫌だ、怖いのは嫌だ、死ぬのは嫌だ、だけど、戦いたくもない。

我儘ばかりで、弱くなった……いや、これが本当の、俺だった。情けなくって、酷くダサい。

骨はゆったりと、歩き近づいてくる。

あと五歩も進めば、射程圏内だろう。

俺はそれを、何もできずに見つめていた。

一歩。

二歩。

三歩。

四歩。

そして、五歩。

剣は高く掲げられる。天を突くように真つ直ぐに振り上げられて——そして、当たり前のように振り下ろされた。

それはとても、とてもゆっくりとした振り下ろしに見えた。

スローモーションというほどでもないけれど、それでも馬鹿にされているのかと思うくらい遅くって。

ただど確実に俺の脳天を割る軌道ではあって。

どうすれば良いんだろうって、そう思った俺の思考ごと吹き飛ばすように、何かが鋭く空を切った。

——いや、何かではない。

俺はそれを知っている。

俺はそれを見たことがある。

俺はそれを味わったことがある。

俺はその人を——良く、知っている。

振るわれたのは大鎌だった。身の丈ほどもある、巨大な鎌。

剣ごと骨は微塵となって消えていき、その人は俺の前へと降り立った。

全身を覆うように羽織った黒の外套。そこから零れる美しい、紫色の髪。

宵闇の中でも怪しく光る、黄金の瞳。

隙間から覗いて見える、陶器のように白く、綺麗な肌。

忘れるはずがない、忘れられるはずがない。

記憶に刻み込まれて、絶対に消えることは無い、大切な英霊<sup>ひと</sup>。

初めて召喚に応じてくれて、契約してくれた英雄。

いつだって、どんな時だって寄り掛かせてくれた、これ以上ない

相棒——メドゥーサが、そこにいた。

彼女は訝し気に、俺を見る。

一瞬だけ目が合つて、すぐに逸らした。

乾いた笑いが、喉から零れ落ちる。

思い返してみれば確かに、彼女はこの近くにいたのだった。

こうやって蹲つていれば、彼女の方からこつちへと来ていたんだ。

巡り逢わせと言うべきか、それとも、運命と言うべきなのか。

まあ、どっちでも良いか。

殺すなら、早く殺してくれないかな、と思った。

メドゥーサを、見ているだけで苦しかった。

ザワザワと、胸騒ぎが酷かった。

彼女は俺の相棒だ。けれども、今のメドゥーサは、相棒じゃないの

だ。

メドゥーサは、俺を知らない。

俺とメドゥーサはたくさんの時代を、戦場を駆け抜けてきたけれ

ど。

でも、今はまだ、他人同士なんだ。

メドゥーサが俺と契約してくれるのは、これからもう少し先のこと

だから。

俺を知らないメドゥーサと、関わりたくなかった。

何よりもそれが、恐ろしかった。

メドゥーサに、全く見知らぬ誰かだという目で見られるのが怖かつ

た。

その事実を目の当たりにしてしまうのは、絶対に耐えられない自負

があった。

だから、殺してほしい。

次はすぐにもここを離れるから。

決してメドゥーサには見つからないようにするから。

だから、だから、だから。

何も言わずに、殺してくれ。

ボロボロと、際限なく涙を零しながら、掠れた声でそう言った。

視界はもうぐにやりと歪んでいて、きつと、酷く情けない顔になっているだろう。

それでももう、そんなことはどうでも良いから、早く。

せめてもう、これ以上現実を、叩きつけないでくれ。

もう、散々なんだ。

声にすらならない呻き声が、口の端から漏れ落ちて、メドゥーサは半歩俺に近寄った。

白磁のような肌の手が近づいてきて——俺の頬を、撫でた。

伝い続ける涙をメドゥーサはそつと拭って、クシヤリと表情を崩してから。

——どうか、泣かないでください。私がここに、貴方の傍に、いますから。

メドゥーサは、俺を抱きしめた。

どこにも行かせないとばかりにきつく、強く、守るみたいに彼女は俺を抱きしめて。

あやすように、優しく俺の頭を撫でた。

憶えています——忘れられるはずがありません。

夢のように輪郭はあやふやで、この手で掴むことが難しいくらいの臃げな記憶。

それでも私の霊基が、霊核が、魂が、貴方という存在を、マスターという存在を憶えている——焼き付けている。

何度膝を屈しても、立ち上がる姿を私は識っている。

傷だらけの身体でも、歩み続けられる姿を私は識っている。

幾度も投げ出そうとして、それでも何も諦められなかった気高い姿を私は識っている。

何一つ捨てることはできなくて、だから何もかもを背負って戦って

しまう貴方のことを、私は識っている。

長く苦しい旅の中で、数多の出会いと別れを経験し、弱いまま、強くなってしまうた貴方のことを、私は識っている。

だから——だからこそ、私は。

貴方が泣いていると、やりきれない。

貴方が悲しんでいると、見ていられなくなってしまふ。

貴方が戦っている時、必ずそこにいなければと、そう思う。

どうしても駆け寄って、傍にいなければと、支えなければと、そう思ってしまう。

ですから、どうか泣かないで。

私が隣にいますから、私が貴方を支えますから。

貴方をひとりにはさせませんから、と。

メドゥーサは言った。

温かい声音だった。安心させてくれるような、優しく包み込んでくれるような。

何度も、何度も聞いた声だった。

かけられた言葉はスルリと心の奥に滑り落ちてきて、じわりと広がっていく。

何でとか、どうしてだとか、聞きたいことは溢れかえりそうなほどあつて、けれどもそのすべてが今はどうでも良かった。

言葉に出来ない感情があつて、声を出すことすらできなくて、ただメドゥーサにしがみついた。

英霊の座は、時間軸からも、空間からも外れた領域にあるとされている——つまり、過去や未来と言った時間的概念が存在せず、時間も空間も確定していない。

遙か昔から、遠い未来までの全ての時間において、英霊の座に登録された、いわば本体の方には召喚時のあらゆる記録が集積されている。

かといって、それはサーヴァントとして召喚された英霊が何もかも

を知っている、と言う意味にはならない。

サーヴァントが召喚時に持つていける、あるいは付与される記憶や知識と言うのは、生前の記憶とその世界、その時代の常識くらいのもので、これまで召喚された時の記憶、これから召喚された時の記憶は何一つ持つて行くことはできない。

いや、あるいは『記憶』として実感することができない。

英霊の座に集積される記録というのは膨大すぎるほどに膨大だ。

時間という上下の広がりにも、並行世界という横の広がりにも、すべてに一つで対応しているそこにおいては、どのような思い出も夢のように忘れてしまう。

それが、サーヴァントというものだ。

ほとんどの場合において例外はありえない——だから、今のメドゥーサがあるのは、正しく奇跡のようなものだった。

あるいはそれは、この人理焼却されているというイレギュラーな事態が、俺がループしているというイレギュラーな事態が、密接に絡まり合って生んだ限定的なものかもしれないが。

それでも構わなかった。

メドゥーサは何度も頭を撫でてくれて、背中を叩いてくれた。

何でも言うてください、と。

いつでも、どれだけでも頼ってください、と。

私は強いサーヴァントではないかもしれない、貴方が頼るには、脆すぎるかもしれない。

守り切れないことも多かった、いつだって貴方を傷だらけにしてしまった。

だけど、それでも、貴方の傍から離れないことはできるから。

貴方の為に、戦うことはできますから。

私は、貴方のサーヴァントです。

だから、マスター。

ひとりでは立ち上がれないのなら、私と共に立ち上がりましょう。

ひとりでは歩けないのなら、二人で歩きましょう。

貴方はいつだって、諦めない人だった——いいえ、諦められない人。

だった。

私は貴方の輝きを知っています、弱さも、強さも、気高さも、諦めの悪さも、子供っぽいところも、大人っぽいところも。

貴方が貴方であるからこそ、あの旅の果てまで辿り着けたことも。そのすべては——絶対に、無駄なんかではなかったのですから。

無意味でも、無価値でもなかったのですから。

何故なら私の中に、それが残っている。

貴方という存在が焼き付いた者が、ここにいます。

それでは足りませんか？ 私のマスター。

静かに、メドゥーサはそう言った。

まったく、酷い人だな、と思う。

いつだって、傍にいて欲しい時にいてくれて。

どんな時だって、欲しい言葉をかけてくれて。

必要なだけ甘えさせてくれて、必要なだけ厳しくしてくれて。

背中を叩いてくれて、支えてくれて、隣にいてくれる。

それで俺が、もう一度立ち直れるということを知っているから。

今だって、今までと同じで、戦いたくなんかはない。

全部他人に任せたい——だけど、立ち上がろうと、思うことが出来てしまう。

彼女の言葉のひとつひとつが、まるで星のように輝いていて、力を与えてくれる。

心に火を、灯してくれる。

涙はもう出てこなかった。出尽くしてしまったのかもしれない。

まあ、それならそれで良いか。

無理だって思った時に支えてくれる人がいたから、戦ってこられた。

一人では何も出来ない、そういう人間だった。

だから、メドゥーサがいてくれたなら、俺はまた戦える。

頑張れる……頑張りたいって、そう思える。

我ながら簡単な男だ。でも、多分それで良いんだと思う。

ありがとう、メドゥーサ。



出てきたのは、そんな短い一言だけだった。それでもやつぱり、それには全部込めていて、メドゥーサは優しく笑ってくれた。

パチン、と両頬を叩いて立ち上がる。

足は震えていたし、心が怯えているのは、今なお確かだった。けれども立ち上がった。

立ち上がったってことは、もう戦えるということだ。

戦えるってことは、先に進むもうという意味が、明確にあるということだ。

それを失くさない限り、俺はもう少しだけ、頑張れる。

もう一度だけ周りを見渡せば、視界に入るのは揺れる焰と、崩れ落ちた都市のみ。

ここから先に進めば、たくさんのエネミーと英霊と出遭い、殺し合うことになるだろう。

——上等、上等。

あの時とは、何もかもが違うんだ。

一度乗り越えた後、幾度もシミュレーションを利用して経験した。そうでなくとも、何度も死んで、何度も繰り返した戦場だ。

それは、今の身体には蓄積されていないが、頭には残っている。その上、隣には今、メドゥーサがいるんだ。

負けるはずがない——だなんて、調子に乗るような真似はしないけれど。

それでも条件は雲泥の差だった。すべてにおいて、先手を取る。そのくらいの覚悟で臨む。

だから、まずは合流するべきだろう——うん、それが良い。じゃあ行こうか、とメドゥーサの手を繋ぐと同時に、契約を結んだ。

仮ではあるが、それでもメドゥーサとパスが繋がる。

主観的に言えば、久し振りと言うほどでも無いのに、それでも懐かしさが混じる感覚が走り、手の甲に見慣れた紋様が焼き付いた。

アシンメトリーな、赤い令呪。

それを少しだけ眺めていれば、不意にふわっと柔らかく、視界が浮いた。

「というか、抱き上げられた。もちろんメドゥーサに。」

俗に言うお姫様抱っこってやつ。

……は？

「なんで!?」と聞く前にメドゥーサは鋭く地を蹴った。

「この方が速いでしょう？」と薄く笑って。

後ほど、『特異点F』と名付けられるこの特異点は、これから踏破する特異点と比べることが烏滸がましいと思えるほどに、小規模なものだ。

それは重要度という意味ではなく、単純な広さの話で、という意味ではあるが。

何せ第一から、第七まで見てみても、すべてが一国以上の広さを舞台にした特異点だったことに比べ、此処の戦場はたった一つの街なのだから。

かつて冬木と呼ばれた、どこにでもあるような都市。

その全マップが、俺の頭には入っていたし——前回、どのような経路を辿り、聖杯まで辿り着いたかまでも、覚えている。

「というか、否が応でも覚えさせられた、と言うべきか……。」

まあ何だ、ダヴィンチちゃん様々、という訳である。

何でも役に立つもんだ、と独り言ちながら、メドゥーサへと指示を出す——いやまあ、指示というほど上等なものでもないんだが。

そこ右、とか暫く真つすぐ、とかそういう段階の話だ。

情けないことに現在の時間が把握できていなかったが、未だに強力な魔力反応……つまり、聖杯の存在は感じ取れる。

「ということは立香くんたちはまだ、聖杯には辿り着いていないということだ。」

まあ、そもそも俺が此処にレイシフトして来てから、そこまで時間が経っている訳でもない——と言っても、楽観できる状況かと言われる

たら、まったくそうでも無いのだが。

前回は偶々、何もかもが上手くいっただけ、そう考えるのが自然だ。合流する前に、彼らは死んでしまうかもしれない。

あるいは、既にそうなっている可能性だって、当然のようにあるのだ。

立香くんは、マシユは、確かに何者にも代えがたい、稀有な存在で、どこまでも強い子たちではあったが。

それでもあの二人は、何でも無い普通の男の子と、女の子なのだから。

ここは特異点、人理定礎が崩されたことで発生した、最悪なもしもの世界。

どんな「もしも」だってありえるのは、当たり前だ。

だから、その一点だけが気がかりで、一先ずは聖杯とそれを守護するセイバー・オルタが佇む、大空洞の入口へと向かった。

メドゥーサが、滑るように地を駆ける。

先程も言った通り、この特異点はそこまで大きくはない。

英霊にかかれれば、端から端までの移動だとしても、そう時間はかからないだろう。

数多のエネミーを相手にすることは無く、すり抜けるように走ればそれだけで、大空洞は見えてきて——同時に、甲高い金属音が耳朶を叩いた。

目を凝らせば見えてくるのは、一騎のアーチャーと、それに対抗する、二人のサーヴァントと、二人の人間。

炎が飛び交い、剣と盾がぶつかり合って、激しく火花が散って舞う。見たことのあるような光景だ、と思つて安堵した。

まだ生きている、それも随分と元気そうだ——であれば遠慮はいらないだろう。

ここで、一撃で仕留める。

その意思が伝わったのか、音にすら手を伸ばすように、メドゥーサは一步ごとに加速する。

地を蹴る感触が身体を伝う度に景色は流れ行き、そして、令呪を

きった。

手の甲を、熱く燃えるような感覚が駆け抜ける。

瞬間、俺はふわりとその場に置き捨てられて——メドゥーサは更に加速した。

単純な臂力の強化を以て、彼女はアーチャーの懐へと踏み込み、薙ぎ払った。

閃光のような一撃がアーチャーの身体を両断し——そして俺は滑るように地面に墜落した。

ゴロゴロと派手に転がり、ダメージを減らす努力だけして立香くんの足元に落ちる。

……いやね、終局時の俺ならまだしも、今の俺じゃ受け身取ること  
で精一杯なんですよね……。

マジで痛いので反省してほしい、と心の底からそう思った。

立香くんたちの状況は、前回とほとんど——というよりは、まったく変わっていないようだった。

マシユと立香くんは契約を結んでおり、所長とも合流して、キヤスニキとも仮契約を行っている。

サーヴァント二人、人間二人の四人パーティ。

かつて随分と手こずらせてくれた巨躯のサーヴァント——ダレイオス三世も無事突破してきたようで、既に立香くんには頼もしさに近いものが感じられた。

相も変わらず飲み込みの早い……というよりは、適応力の高い少年だ。

羨ましいとはもうとつくに思わなくなっていたが、流石だとは思った。  
残念ながら、俺ではそうはいかないと思うから、なおさらだ。

と、まあそんなことはどうでも良くて、合流した以上はさつさとこの特異点を終わらせたい、というのが本音だ。

——いや、それは少し、語弊があるかもしれない。

確かに早くカルデアには戻りたかった、けれども、本当に戻って良いのだろうか、という思いがあったのも事実だった。

それは、別に俺にとって何か不都合がある、とかそういう訳ではなく。

特異点Fを攻略し終えるということは即ち、カルデア現所長：オルガマリー・アニメスファイアを失うということに他ならない。

いや、正確にはそれも、間違っではいるのか。

既に俺達は彼女を失っている——所長は既に、死人だ。

レフ・ライノールの手によって起こされた管制室の爆破は、確実に所長の命を消し飛ばした。

それにそもそも、所長はマスター適性も、レイシフト適性も無かったと聞いている。

つまり、本来であれば所長は、絶対にレイシフトなど出来ないはずなのだ。

だから、ここにいる所長は、オルガマリー・アニメスファイアであつて、オルガマリー・アニメスファイアではない。

彼女が死する時に、強く思い残した感情、情念、意志が残り、形作つただけの、言わばただの残留思念。

それが、今の所長の正体だ。

現在の彼女にはもう肉体はなく、ある種の霊的存在ですらある。要するに、所長はもう、ここまでなのだ。

あの時の、悲痛な悲鳴はまだ、耳朶にこびりついている。

まだ何も成し得ていない。

まだ誰にも認められていない。

そう叫んで生を願った彼女は、もう死んでいる。

聖杯に近づけば近づくほど、特異点の終わりに歩み寄れば歩み寄るほど、所長の終わりも近づいてくる。

どうすれば良いのだろうか、等と考えるまでもないことなのに、それでも少しだけ、考えてしまった。

今この場で伝えるか？　とも思ったが、しかしそれは幾ら何でもナンセンスだろう。

ただでさえ、皆不安を抱えているのに、そんなことを伝えてみる。雰囲気も士気もガクリと落ちるのが目に見えている。

それに、俺がループしてるなんて事実を受け容れてもらうには、信頼や実績、時間に情報等、とにかく何もかもが足りていない。

今は少しの休憩を挟んでいるが、終わり次第聖杯に向かうことになるだろう。

数十分もかからず、聖杯には辿り着く。

同時に、セイバー・オルタとも、レフ・ライノールとも邂逅を果たす訳だ。

そして所長は死ぬ。それは変えようのない確定事項で、前回のそれは、カルデアスに飲まれるという形での死であった。

……あの時と違って、俺はもう、色々と知っている。

カルデアスに放り込まれる、と言う意味を、理解している。

かつて、レフ・ライノールはそうされることを「永遠に死に続けること」と言った。

それをもう少し噛み砕いて言えば、それは「分子レベルで分解されること」を意味する。

触れた面積から、恐ろしい速さで、しかし目に見えないほど細かく消し去られるのだ。

想像を絶する痛みなのは、それこそ何度も死を経験してる俺だからこそ、少しは分かる。

だから、それだけは避けねばならないだろう——せめて死ぬのであれば、安らかに、痛みも一瞬な方が、絶対に良いに決まっているのだから。

覚悟をゆつくりと積み上げて、ため息を漏らせばパチンツとデコを弾かれた。

眉間にシワが寄ってますよ、なんてメドゥーサに笑われて、それから引つ張り上げられる。

束の間の休息はもう終わりという訳だ。

後はもう、戦って戦って、それでカルデアへと帰還する。

静かに長く息を吐いて、よし、と呟いた。

濃厚な死の匂いが立ち込めていた。

呼吸をすることすら苦しくなるような重圧が空間を支配していた。聖杯とセイバーが待ち受ける此処だけが、まったく別の世界かのような魔力濃度を誇っていて、全身に強化を回す。

思っていたよりも随分と弱い強化で、若干不安になったが、活動するのに問題はない……多分。

いや待って？ マジでしょばい。本当に俺、こんなんじゃ戦ってきたのかよって疑っちゃうレベル。

まあ、文句を言っても仕方がないので黙って進めば、直ぐに彼女は姿を現した。

黒のドレスに身を包み、無機質な黄金の瞳を宿す、反転した騎士王。相對するのと同様、黒の聖剣はゆっくりと構えられた。

——圧が増す。魔力は渦巻き、彼女と聖剣を包み込んだのちに、それは放たれた。

極黒の一撃。

それは、ともすれば第六特異点で見た、聖槍による裁きの光にも似ているかもしれない、と思った。

全てを塵に還すような圧倒的一撃だからそう思ったのか、あるいは、彼女らがその一撃に込める意思が似通ったものだからなのかは分からない。

無論、聖剣と聖槍は別物で、かの獅子王の一撃の方が威力はずっと上だろう。

それは間違いない——しかし、だからこそ防ぐことができる。

大盾を携えたマッシュが前に出た。

立香くんのバックアップを受けた彼女は大盾を前に構え、高らかに叫びをあげる。

——真名、偽装登録。仮想宝具、疑似展開。人理の礎！

顕現するは白亜の城——ではないが、しかし盾の形をした巨大な守護障壁が展開され、騎士王の一撃とぶつかり合った。

光と光が反発し合い、激しい衝撃が空間を揺さぶる。

嵐のような風が巻き起こり、地面は砕け、瓦礫が舞う。

その二つは最期までせめぎ合い——同時に霞の如く消え去った。

振り降ろされた黒の聖剣と、大盾が今度は直接ぶつかり合って、甲高い金属音が響く。

大盾はマシユごと鋭く弾かれて、同時にメドゥーサは地を蹴った。トン、と軽やかに。されども風より速く、鎌は振るわれる。

一合、重々しい金属音が鳴り響く。

そのまま力押しで騎士王を吹き飛ばし、キヤスニキの援護の炎が幾つも飛んだ。

騎士王が炎に吞まれ——打ち払われる。

マシユが体勢を立て直し、地面を駆けるのと同時に、令呪をきつた。燃えるような感覚はメドゥーサの力へと転換され——それを待っていたかのように、彼女の魔眼は発動された。

メドゥーサの美しい瞳は石化の魔眼。無論、問答無用でセイバーを石化させるほど強力ではないが、それでも数秒身体の動きを止めることは可能だ。

ビタリ、と不自然にセイバーは剣を止める。

そこにマシユの一撃がジャストミートして、呆気なくセイバーの小さな体は宙へと浮いた。

刹那、魔力は渦巻いた。

セイバーの全身から、絶大とも言える魔力が吹きだそうとして——胴を、鎌が貫く。

肉厚の刃が音もなく振り払われて、セイバーは半身と泣き別れた。

軽い音と共に、騎士王の上半身は地面へと落下した。

セイバーは何度か剣を握ったまま、それでもと身動きしたが、やがてそつと力を抜いて、視線だけをこちらに寄こしてきた。

見事——とは言ってやろう。されども、こうなつた以上は——こうすることを選んだ以上は、覚悟を決めることだ。

七つの時代を巡る、グランドオーダー聖杯探索は今、これより始まったのだから。それだけ言つて、セイバーはその姿を光へと還した。

焼き増しのような光景に、焼き増しのような言葉。



そういえば、こんなことも言われていたな、というのが抱いた感想だった。

それ以上でも、それ以下でもなくて、あまり感慨深さが無い。

——きつと、これからはずっと、そう感じるようになるのだろうかということ、ぼんやりと察した。

今までのような短い間隔ではなく、本当に一から始まるとは、そういうことなのだ。

少しだけ、寒気が背筋を上り——ギュツと、手を握られた。

横を見れば退去の光に包まれたメドウーサが俺を見ていた。

では、一時のお別れです、マスター、と彼女は言った。

直ぐに呼んでくださいね？ と微笑みを浮かべ、ゆるりと霞のように消える。

言われるまでもない、と一人ごちれば、パチパチと、拍手の音が響いた。

そこにいたのは、緑のシルクハットを被った男。カルデアを裏切った敵。

レフ・ライノール……あるいは、七十二柱の魔神が一柱、フラウロス。

見覚えのある、酷く不愉快そうな目で、彼は俺たちを見下ろしていた。

所長が彼の名を叫ぶ、彼もまた、所長の名を優しく呼んで、そしてあの時のように、所長は走り出した。

否、走り出そうとした所長の手首を、今度こそはつかんだ。

恐ろしい形相で振り返り、離しなさいと叫んだ所長に、それでも首を横に振った。

アレが——あの人が、本当にレフ教授に見えますか？ と、言葉を紡ぐ。

この状況で、あの様相で、あれほどの余裕を見せる人が、本当に、本当に俺たちと同じ、不慮の事故に巻き込まれた人に、見えますか？

俺には見えない——どっちかって言うと、黒幕にすら見える。

信頼関係がどうのという前の話です、所長。

混乱だっただけで、知ってる人に頼りたくなるかもしれない、だけど、貴女はカルデアを代表する所長なんですから。

盲目的に、誰かに縋ろうとするのはやめてください。

そう、言葉を重ねれば重ねるほど、所長からは力が抜け落ちるようだった。

変わらず眉は顰めたままだったが、それでも足を止めて、ゆっくりと彼女はレフを見る。

手を離しても、もう所長は動かなかった。荒い呼吸のまま、けれども確りと、所長は問いを投げる。

貴方——本当に、レフなの？ と。

俺たちのやりとりを面白そうに眺めていた彼は、そこで耐え切れなくなつたのか吹き出すように笑った。

いやあ、見事、見事！

ああそうだよ、オルガ。私は確かにレフ・ライノールさ——だが、そうだな、カルデアを爆破した犯人を黒幕と言うのならば、そう、私が黒幕だ。

そう言つて、俺たちを見る。

そこから語られ始めたのは、当然ではあるが、一度聞いた話だった。

未来——人理の焼却と、所長の生死。

それらを雄弁に語り、所長を殺せなかつたことだけ少しだけ不満そうにして、彼はこの場を去った。

同時に特異点は揺れ動く。

聖杯を回収したことで、形を保てなくなつていたこの世界はついに崩壊を始め——所長は、しかし何も言うことは無かつた。

あの時のように取り乱すことは無く、されども落ち着いているのかと言われればそういう訳でもなく。

ただ、己を見つめているようだった。

そこに、どんな感情が介在していたかは分からないまま、俺達は光に包まれて——レイシフトは、行われた。

最後の瞬間、所長は無線機に何かしら言っていた、ような気がした。

——意識が戻る。

ふわふわとしていた五感が急速に戻り、視界に広がったのは随分と荒らされた管制室であった。

消火はされているものの、あちこち砕けていて、ボロボロだ。懐かしい光景だな、と思った。

確かに最初はこんななんだった。時間をかけて少しずつ片づけたものだ。

チラリと横に視線を送れば、問題なく立香くんもマシユも戻ってきていた——もちろん、所長はいない。

俺と、立香くんと、マシユの三人だけである。当然だ。

がやがやと集まってきた職員やドクターにベッドに連行されそうになるのをスルつと回避する。

多少の疲労はあるが、まだやることが——というよりは、やりたいことがあった。

まあ、何と言うか、アレ……端的に言つて、召喚がしたくて仕方なかった。

もう戻ってきてからかなりソワソワしてしまっていて、個人的には一刻も早く、と言つた気分なのを抑えつけている状態だ。

や、ほら、直ぐに呼ぶとか言つちやつたし。

カルデア式の召喚は、マシユの盾が必須だ。

かといって、マシユが必要なわけでは無いし、それ以外の機材もダメージは受けてないはずだ。

つまり、召喚自体はすぐにも可能なはずなのである。

聖晶石は手元にあるし、こちらの準備も出来ている。

今は休んだ方が——と述べるドクターに何とか頼み込めば、少し考えたのちに彼は仕方ないなあ、と許してくれた。

そうして踏み込んだのは召喚用の、正方形の真っ白な部屋だ。

マシユの巨大な盾を中心に、幾何学模様が刻まれ、薄く発光している。

室内にいるのは俺一人で、大きく深呼吸をした。

かなりの我儘で許してもらったわけなのだが、普通に概念礼装しか出てこない可能性があるんだよな……。

というか、むしろそっちの方の可能性が高い、ということに遅まきながら気付いて、滅茶苦茶でかいたため息を吐いた。

い、いや、ちゃんと約束したし、大丈夫でしょう。……大丈夫だよな？

不安しかないんだけど……と思いつつも、ここでもごまごましているも仕方がない、と聖晶石を放り投げた。

虹色の、トゲトゲとしたデザインのそれは、盾に触れると同時に解けるように消え、召喚の儀式を開始する。

幾何学模様のサークルが青の輝きを巻き起こし、部屋全体を包み——人影が一つ、中心に出来上がった。

随分と見慣れた立ち姿だと、そう思うと同時にバチリと真つ赤な令呪が右手の甲に刻み直されて、光は晴れる——は？

声が、思わず漏れた。

それをかき消すように、カチャリと鯉口を鳴らす音がして。

彼女は元気良く飛びだしてきた。

「サーヴァント、セイバー！ 召喚されて超参上！ みたいなー☆」  
はああああ!? チェンジチェンジチェンジ！

「二回目ともなると流石の私も傷つくんですけどー!?!」

鈴鹿御前という英霊は、俺という個人にとって、最も例外なサーヴァントである。

というのも、俺の召喚に応じてくれたサーヴァントというのは、彼女を除けば、形はどうあれ先に縁を作っている者のみだからだ。

メドゥーサもカーミラも、各特異点で何度も殺し、殺された相手である。

命を奪った、あるいは奪われたという事実は、それだけで強力な縁になる。

だから、二人が召喚されたことは、正直言つて不思議なことではな

い——むしろ、当然とも言って良いだろう。

カーミラに至っては、彼女の幼少期とも呼べる、エリザベートとも縁を結んでいるのである。

だが、そんな中で唯一、鈴鹿御前だけは縁を結んでいないサーヴァントだった。

とはいえ、それ自体もまた、別におかしなことではないのだが。

現状、カルデアの召喚は基本的に『人理修復を成すため』に行われるものであり、その想いに同意したサーヴァントのみが召喚に応じてくれる仕組みである。

ゆえに、『人理修復を成す』という意味さえ合致すれば、どのサーヴァントであろうとも召喚される可能性はある——無論、そこに縁があれば優先度は上がるのだが。

だから、鈴鹿が召喚される可能性と言うのはもちろんあったし、召喚されたこともおかしくはなかった。

それは分かっている。だが、それも含めて、俺にとっての唯一であつたというのもまた事実なのだ。

——そう、唯一の存在。

それは、召喚された経緯だけではなく、俺の事情を知っているということも含めて。

彼女は特別だった……いや、だからといって特別扱いをしていたとかそういうことは一切ないのだが。

むしろ、特別扱い等と言ってしまえばカーミラの方がずっとそうだったのではないだろうか。

カルデア内で、気が付いたら俺の傍にいるランキング、堂々の一位だったからね、あいつ。

何だかんだ人肌恋しがるやつなんだよな。いや、鈴鹿がそうじゃないという訳でもないのだが。

カーミラはいつの間にか傍にいるが、鈴鹿はその逆だ。

俺を見かけ次第飛びついてくる感じ——いやこの話全然関係ないな。

とにかく、そういう様々な要因込みで、鈴鹿は俺の中で少々特別

な位置にいた。

だからこそ、今回の召喚に応じたのが彼女であるという事実には、特段そこまでの驚愕を持ちうることは無かった。

いや、正確には驚愕を引きずるようなことは無かった、とすべきだろうか。

何でお前が!? という気持ちより、まあ鈴鹿だしな……という気持ちの方が勝つたとも言う。

まあ、それはそれとしてメドゥーサを呼ぶつもり満々だったのだが。

流石にそれを露骨に表情に出すのは、勝手知ったる仲と言えども失礼と言うものだった……いや、失礼と言えば一言目からも露見してんだけど。

普通に取り繕うには無理がありすぎて、けれども鈴鹿は力を抜いてふにやりと笑った。

何だ、意外と元気そうじゃん、良かった。

マスターのことだから、今頃泣いてるかと思ってたんだけど——今回もまた出遅れたかな、これは。

出来るだけ早く来たのになあ、こればかりはもう、仕方がない、か。

うん、まあ、良しとしましょう——ねえ、マスター。

まだ戦うの？

俺の手を包み込むように握り、鈴鹿は一言、そう言った。

ごめんね、前にも聞いたことを、もう一度聞くような真似をして——でもね、それでも訊きたかったの。

あの時とはもう、状況が違う。分かっていることも違う。何もかも同じで、けれども何もかもが決定的に違うから。

これから始まる旅は、人理修復という長い戦いは、マスターにとつては二度目に過ぎない。

そして同時に、数あるうちの一つになる旅路でもある。

それくらいは、分かっているでしょう——何をやっても、マスターはまた此処に戻ってくることになる。

何度戦って、何度救って、何度殺して、何度生き残っても、ここに辿り着くんだよ。

そんなの——そんなのってさ、良くないじゃん。

マスターは強いよ、確かに強い。一つでも切っ掛けがあれば立ち上がってしまうる、そういう人。

傷ついて、折れて、屈して、それでも立ち上がるところはかつこいいよ。

眩しくて、心強くて、どうしようもなく惹かれる——けれどもそれは、同時に酷く痛々しい。

もう、見ていられない、黙ってられない。

——戦うって選択肢はさ、決して正しいものじゃないじゃん。

傍から見れば美しい判断に見えるかもしれない、勇気ある選択に見えるかもしれない。

逆境の中でも立ち向かって見せる背中も無く大きく見える。

だけど、絶対にそこに「どちらが正しかった」なんてものは宿らない。

……私は、ずっとマスターのことを覚えていられるよ。

終わらない一年が、どれだけ続いたって構わない。私はその間、ずっと傍にいてあげられる——私はもう、マスターには傷ついて欲しくない。

辛い思いも、苦しい思いもしてほしくない。

重荷ばかりが増えていって、心も体もボロボロになっていくところをもう、ただ見てるだけなんて嫌だよ。

支えるなんて出来ない。守りたい、守りたいんだよ！

だからね、マスター。

お願いだから、もう戦わないって言って。

守って欲しいって、そう言うって。

お願いだから、そうすれば、私はもう貴方が傷つくことが無いように、大切に閉じ込めることくらいは、できるから……と鈴鹿は重ねて言った。

その手は震えていて、彼女の瞳からは涙が溢れるように零れ落ちて

いく。

それは、飽くまでお願いだった。

命令でも無ければ、強制でも無い、俺のことを想って口に出した、彼女の願いだった。

それに、心を揺らされなかったと言えば、嘘になる。

鈴鹿の願いは、心の底から嬉しかった——もつと言えば、それは俺がずっと求めていた言葉でもあったのだから。

もう戦わなくていい、戦わないで欲しい。

そういう言葉が、ずっと欲しかった。

優しく、甘くて、暖かい言葉。

じわりと心に溶け落ちるような鈴鹿の想いを、しかし呑むわけにはいかなかった。

そうはしないのだと、決めたのだから。

戦うのだと、メドゥーサに誓った。

まだ進めるのだと、心に火を灯した。

それを消すのはまだ早いと、他でもない俺自身がそう思うから。

だから——だから、ありがとう、鈴鹿。

そう言っ、鈴鹿の華奢な身体を抱きしめた。

鈴鹿の提案は怖いくらい魅力的だ。思わず頷きそうになるくらいには。

俺のこと、そう思ってくれるサーヴァントはきつとお前だけだよ。

だから、ありがとう。

でも、ごめん。やっぱり俺は戦うよ。

張りぼてでも、何でも良いから、もう少しだけ真つすぐ立っていたい。

何とか頑張って前を見て、進んでいきたいと、そう思った自分を、無かったことにだけはしたくないから。

少しだけの静寂が、ゆるりと広がった。

鈴鹿は俺をかき抱いたまま、小さく言った。

どうしても？ と一言だけ、呟くように囁いて。

俺はそれに、ゆつくりと頷いた。



それが最後の問答だった。

鈴鹿は暫くの間何も言うことは無く、その小さな身体を震わせて泣いていた。

他でもない俺の為に、彼女は泣いてくれたのだった。

どれだけの間、そうしていたのだろうか。

鈴鹿は目を真っ赤にさせたまま、半歩だけ離れて俺を見た。

……本当はね、聞くまでも無く分かってたの。

マスターなら絶対、私の言葉に頷かないって、戦うって言うんだって、分かってた。

これは、私の我儘だった、お願いだった——だから、それはもうおしまい。

人理修復を終えてなお、その先に如何な困難があろうとも。

どれだけ傷つこうとも、前に進むという意味が欠けることは無いのだと信じましょう。

——我こそは、第四天魔王が娘にして、鈴鹿山に降り立ちしせおりつひのかみ瀬織津姫神。

貴方が戦うというのであれば、我が存在すべてを以て支え、救いましょう。

ええ、貴方を蝕む永劫の輪廻からも、解き放つことを約束いたします——なんてね。

ちよっと小難しい言い方になっちゃったけど、ま、つまりはそーゆーこと。

マスターの繰り返し、やり直しはもう、ここまで。

ようやく、ぜんぶ理解ったから——もう、そうする為の算段はついたから。

そう言って、鈴鹿は小さく笑みを浮かべたのだが、しかしその言葉を、俺が呑み込めなかった。

思わず呆然としたまま、思考は停止したままグルグルと回り出す。ループを終わらせる？ どうやって？ 意味分かんないんだけど

——と声に出そうとすれば手を口に当てられる。

何を——と思えば鈴鹿は面白そうに笑って、安心して、と言った。マスターには理解できそうにない複雑なことを、丁寧に積み上げて、組み立ててようやく成り立つことだから。

マスターはただ……そうね、もう一度、あの場所に。

終局特異点——魔神王ゲーティアが座す玉座へ辿り着いて欲しい。

もちろん、ゲーティアを打倒するまでがセットだけだね。

出来る……かどうかはもう、聞かない。マスターならやってみせるって分かっているから。

だから、今はそれだけを考えて欲しいな——あ、でも。

そうね、一人くらいは協力者が欲しいかも……ちようど、私と同じくらい頭が回って、同じくらい優秀な人が一人。

当然、私たちの事情を伝えても問題ないような人……って流石に注文が多すぎね。

あはは、と鈴鹿は笑い、しかし俺は普通に首を傾げた。

いや、本当に色々注文が多いし、理解できなくても何でも良いから説明しろよ、という気持ちはあるのだが、それはまあ……仕方ないから置いといて。

その条件を満たす人、一人だけいるじゃん。

ふえ？ と可愛らしく疑問符を零した鈴鹿に、やれやれ、と肩をすくめた。

という訳でダ・ヴィンチちゃん！ ちょっと聞いてほしい話があるんだけど！ といつももの調子で彼女の工房へと飛び込めば、やはりダ・ヴィンチちゃんはそのこにいたが、しかしまるで見たことのないような不審な目を向けられた。

え、こんな歓迎されないことある？ と思った直後、あつ、と気付く。

そうだ、そうだった。

今の時点の俺はまだ、ダ・ヴィンチちゃんと面識が無いはずなのだ。二度目である云々の話を抜きにして、まずこの時点では名前はおろか、存在すら知らない相手なのだ。

ダ・ヴィンチちゃん、鈴鹿やメドゥーサと同じとは限らない——というかむしろ、そうでない方が普通なのである。

奇跡は何度も起こらないから、奇跡たりえるものなのだから。

これはまずい、と思ったがしかし、ここで取り乱す方がもっと怪しいだろう——いや、もう既に怪しさ満点ではあるのだが。

シユン、と静かに扉が閉じる音が響いて、ダ・ヴィンチちゃんは鋭く俺と鈴鹿……いや、多分、俺を観察し始めた。

普通に参ったな、と思う。続いて恐ろしい失敗をした、とも。

いや、そもそもループしている、だなんて荒唐無稽な話は、少なくとも今の段階で信じてもらうには無理があるのは分かっていた。

だから、怪しさを抱かれるのは承知の上ではあったのだが、この入り方はかなり悪かった。最悪とも言って良いだろう。

何事も第一印象と言うのは大事なものだ。俺だったらこんな不審者、信用しようとは思わない。

内心舌打ちをしながら言い訳を考えていけば、ダ・ヴィンチちゃんはおむ、と顎に手を当て十数秒、思考するそぶりを見せた後に言った。

少年、君の話を書く前に、私から一つ、質問させてもらっても良いだろうか。と。

質問？ 俺に？ と思ったが、しかしまあそりやそうだ、と納得する。

今の俺達、普通に不審者だから……。

仕方ない、と俺が頷けば、ダ・ヴィンチちゃんは椅子を用意して、座りたまえ、と促した。

俺が腰を掛けると、ダ・ヴィンチちゃんは数回自身のこめかみをトントンと叩きながら、今から聞くことが、もしも外的な質問なのだとしたら、直ぐにでもそう言ってくれ、と前置きをしてから、再度口を開く。

君と私は初対面だ、これは間違いないね？ 何せ、私は君のことを

良く知らない。

データバンクの情報を少し閲覧はしたが、挨拶すらした記憶がないのだから、これは当然の前提はずだ。

まあ、私自身の情報はカルデア内に限れば、多少はオープンではあるし、耳に挟んだことあるということとは十分にあり得るだろうけどね。

しかし少年、君は間違いなく私を求め、態々ここまでやってきて、なおかつこの姿の私を見て迷いなく「ダ・ヴィンチちゃん」と呼んだね。無論、それを間違っているとは言わないさ。むしろそう、その通り。如何にも私は万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチだ。

どうやって看破したのか、気になるな。

それに、ダ・ヴィンチちゃんという愛称は私が、親しいものにだけ許しているもので、決して君に教えた覚えはない。

だが、君は随分と親し気だった。それに、この私の工房に驚きの一つすら漏らさない……そう、まるで此処に來慣れているかのように。さて、以上の観点から、君に一つだけ問いたい。

あまり論理的ではなく、いささかぶっ飛びすぎているような問いで、私としても問うのは躊躇うんだけど、何度考えてもこの結論に到達してしまうのでね、はつきりさせておきたい。

少年、君はこの特異点Fと、先ほど名付けられた特異点を乗り越えたのが初めてではない——いや、そもそも、今から始まるうとしている、人理修復の旅そのものを、体験するのが初めてではないのではないだろうか。

少なくとも一度以上は、繰り返している——つまり君は、タイムトラベラーだ。

無論、レイシフト絡みだとか、そういう話では無くてね。

——静寂が、落ちて広がった。

それから不思議と笑いが込み上げてくる。

何というか……凄く『ダ・ヴィンチちゃん』だった。

こちらが説明する前に、もう大体の状況を把握できてしまえる、そういう人……英霊。

俺の先生であり、尊敬すべき相手であり、そしてこの天才のみが集うカルデア内でも、比べるまでも無くトツプに君臨する万能の天才。

こうやって改めて思い知らされると、もう驚き通り越して笑うしか無くなるな……と思えばダ・ヴィンチちゃんは嬉しそうに笑った。

私に不可能はないからね——さて、では話してもらおうか。

何をつて？ そりゃあもちろん、君が歩んできた旅路と、その結末……そして、これからのこと。要するに、君が話したかったことすべて、さ。

俺が各特異点の話——つまるところ、前回の人理修復の旅の話を終えたのは、深夜と呼べるだろう時間に突入した頃だった。

ダ・ヴィンチちゃんお手製の、やけにゴテゴテしい時計がチクタクと音を鳴らしながら、二時過ぎであることを知らせている。

流石に眠くなってきたな、とあくびをしていれば、俺の話を手元の紙にメモしていたダ・ヴィンチちゃんが、ふむ……と唸った。

面白かったよ、うん、創作フィクションとして聞くのならば、正しく良く出来た冒険活劇といったところだね。

小説か、あるいは漫画にしたらウケそうなものだ——ああ、いや、誤解を招いたならすまない、信じてないという訳じゃあないんだ。

むしろ信用性という点においては、高まったと言っても良いだろう。

それだけの情報量と、質だった。それに何より、ロマニのことを分かっているのなら、もう疑いようは無いだろうさ。

ああ、信じるとも——というか、元より疑ってはいなかったんだけどね。

何せこの万能の天才たる私が、そうであると推理したのだから、後は答え合わせのようなものだったのさ。

まあ、それとは別に、荒唐無稽な話であるとも思うけれどもね——もちろん、それを打破することができるということも含めて。

だが、うん、そうだね……良いとも、協力はしてあげよう。全面的なバックアップは任せたまえ。

鈴鹿御前、君も、これで良いんだろう？

そう言つて、ダ・ヴィンチちゃんは鈴鹿を見た。

俺にもたれかかるようにしていた鈴鹿は、ダ・ヴィンチちゃんと目を合わせ、数秒黙つた後に頷いた。

それが、どういった意味のやり取りだったのかは分からない。

けれども、ダ・ヴィンチちゃんが敢えて言葉を濁し、鈴鹿は無言でそれに応えたのだから、わざわざ聞くのも野暮と言うものだろう。

というか、眠くてそれどころでは無かった。

何せ特異点から戻ってきて、今の今まで一睡もしていないのである。

もちろん、言われるまでもなく、一から十まで俺が悪いのだが、それはそれとして普通に疲れていた。

鈴鹿が、そんな俺の頬を幾度か叩き、ふわりと笑う。

お疲れ様、マスター。後は私と、ダ・ヴィンチちゃんて話すから問題ないし、寝ても良いよ。

それともベッドまで連れて行ってあげよっか？

そんな、いつもなら跳ねのけるような軽口に一瞬だけ乗せられそうになつて、ハツとなる。

ゆるゆると首を振つて否定しながら目を覚まし、ダ・ヴィンチちゃんを見た。

まだ、俺に聞きたいこと……つていうか、言いたいことあるでしょ。そう言えば、ダ・ヴィンチちゃんは面白そうに眼を見開いた。

これでも、俺からすれば、ダ・ヴィンチちゃんとは一年もの付き合いなのだ。

それくらいは分かるというものである——いやちよつと待つて？もしかしてこの「分かつてますよ」みたいなムーブ、今のダ・ヴィンチちゃんからしたら相当キモいのでは？

もし俺が逆の立場だったらかなり嫌だな……と思わず顔を顰め、謝つた方が良いかなあ……等と思つていたら不意に、ダ・ヴィンチ

ちゃんは軽く息を吐いた。

どうにも、君が私を師事していたという話も本当らしい。

信憑性がまた高まったよ——ま、それはそれとして気持ち悪いからやめた方が良くもね、それ……というのはいま、冗談としてもだ。

良いのかい？ 君はこれで……いや、この聞き方は少しばかり不親切で、卑怯だね。

いや、何、私が気にしているのはね、君は本当に、彼女の言っている言葉の意味が分かっているのか？ という点なのさ。

ループからの脱却、と言えば確かに口当たりは良いだろう。だが良いのはそれだけだ。

一度経験している——それは確かに、アドバンテージにはなりうるだろう。

けれども、それは同時に、恐怖も知っているとということに他ならない。

私とて英霊に数えられる内の一人である——かつては君と同じ、人間だった。

自らが成し得てきた偉業をもう一度行える、という英雄はそれこそいないと言っても過言じゃあないだろう。

それを、君は本当に分かっているのかい？

そう言つて、ダ・ヴィンチちゃんはジツと俺を見た。

その瞳に、何が込められていたのかは分からない。

ただ、その透き通った海のような眼で、俺の内側まで見透かすようだった。

それに少しだけ緊張して、ついでに少しだけ——いや、かなり躊躇ってから、俺は頷いた。

分かっている……って、言葉にできるほどは多分、その大変さは分かっているんだらうけれど。

それでもやるよ……できないじゃないやなくて、やる、やってみせる。

そう返せば、ダ・ヴィンチちゃんは面白そうに俺を見た後に、小さく笑みをたたえた。

そう、それなら良い——とは、言えないけれど。

うん、君が君自身で選択したことならば、あれこれ言うのも野暮と  
言うものだった。

これは私が悪かったな、すまない。

さて、私から聞きたいことは以上だ——時間も時間だし、存分に休  
むと良い。

協力するとは言ったが、主に動くのは君たちなんだからね。

身体は資本だ、大事にしたまえ。

言われるのと同時に、額を人差し指で押され、途端に身体から力が  
抜けた。

一回振り切ったはずの眠気が急激に鎌首をもたげ始め、そこよう  
やく、あ、やられた、と思う。

間違いなく魔術である。

ただでさえ寝ろと言われれば直ぐにでも寝れる状態だったのに、魔  
術まで使う必要あったのだろうか……？

そう文句を言おうとしたが時すでに遅し。抵抗するまでもなく、俺  
のフラツと意識は闇へと落ちた。

翌日、早朝。

俺と立香くん、マシユは中央管制室へと集められた——あの日  
のように。

運良く生き延びたカルデア職員と、それをまとめるドクターとダ

ヴィンチちゃん。

彼らに問われ、俺達は答えを返す……あるいは、宣言をした。

戦うのだ、と。

世界を救うのだ、と。

そう、誓いを立てた。

——かくして、史上最大規模の聖杯探索は再び幕を開けた。

七つの特異点、七つの聖杯を巡る、人理修復の旅——世界救う物語  
は、もう一度動き出す。



第一特異点：邪龍百年戦争オルレアン——それは、覚悟を問  
直される戦い。

有り得ざる反転が起こった贗作の聖女——竜の魔女と、それを誰よ  
りも願ひ、生み出してしまった愚かな男との殺し合い。

彼ら彼女らが、実際どうであつたのかも、どう思っているのかも関  
係なく。

ただ願われたままに、思われたままに全てを憎み、嫌悪し、荒れ狂  
う者たちを鎮める物語。

第二特異点：永続狂気帝国セプテム——それは、これが間違い  
を否定する為の戦いであるのだと、再認識する戦い。

かつて何よりも繁栄し、そしてなるべくして衰退したローマ帝国。

その正史を覆さんとした——永遠の繁栄を求めたものたちを、滅び  
に追い返す戦争。

その先が、どれだけ華々しくとも。

その先が、如何に幸福に満ち溢れていようとも。

そこに正しさは無いのだと、切り捨てる物語。

第三特異点：封鎖終局四海オケアノス——それは、自由を求め  
た者たちが、それゆえに運命を破壊する戦い。

一人の愚者が、それでも平和を夢見て作り上げた、封鎖された果て  
の海。

そこに自由は無く、されどもそこに閉じ込められたのは、誰よりも  
自由な者達だった。

自らの願ひの為なら英傑すら下し、自由の為であれば神にすら抗  
い、そして。

自分達が信じるものの為であれば、誰の願ひであろうと踏みつづす  
物語。

第四特異点：死界魔霧都市ロンドン——それは、隠された真実  
の一端を知るための戦い。

多くの思惑が潜む、絶死の霧に沈んだ近代ロンドン。

そこで飛び交う必殺の刃を迎え討ち、闇を祓う雷が鳴り響き、嵐の

王すら退けた——その先で対面する最大の敵。

持ち始めていた希望を踏みにじられて。

それでも前に進まなければならぬのだと、思い直すための物語。

第五特異点：北米神話大戦イ・プルーリバス・ウナム——それは、狂気と信念が渦巻く、何も譲れなかった戦い。

一人の女の為に甘んじて狂った王と、一つの国の為にすべてを背負った果てに、使命に溺れて狂った王の殺し合い。

そして、それらすべてを治してみせるのだと立ち上がった、狂った女との戦争。

血と、肉と、鉄の山を築き上げるような殺し合いは果てしないほど続き、神話的一幕のようなぶつかり合いが何度も繰り広げられ。

その果てへと踏み込む物語——狂った女が、それでも誰にも狂うことを許さなかった物語。

第六特異点：神聖円卓領域キャメロット——それは、願いと希望を貫き合う戦い。

神々しく築かれた白亜の城、太陽王の威光と共に広がる砂漠、そして死神の眠る里が鎬を削る、既に焼け落ちる寸前の聖地。

されども誰一人として「悪」はいなかった。

獅子王は人間の善性を。太陽王は己が民草を。暗殺者たちはこの時代に生きる人々を。

守り、生かし、残すために、互いを殺し合っていた。

正解なんてものはどこにもなくて、すべてを決めるのは自らの信念と力のみ。

自分が信じる、最善の未来を押し通す力と想いがすべてを決める戦いで。

一人の死神が戦場を停滞させ。何よりも尊い”善性”が道を開き。思いを託され、繋がれることで騎士達を打倒し。

永らえ続けていたたった一人の男の願いが、獅子王を打ち破った物語。

第七特異点：絶対魔獣戦線バビロニア——それは、誰もが明日を願い駆け抜けた戦い。

そこは獣の形をした終焉に追い詰められていて、けれども輝かしい明日を目指し続けた人々が織りなした時代。

英霊ですら霞むような戦いが起こる毎日で、けれども人々が諦めを抱くことは無かった。

ただひたすらに明日の為に、その手に武器を持って立ち上がった。絶望を前にした時にすべきことは、膝を屈することではないのだと誰もが吠え。

誰一人として、折れることは無く、下を見ることは無かった。

誰かが折れそうなら、誰かがそれを支え。

誰かが諦めそうならば、誰かが隣に立つ。

神々と訣別することを選び、人の意志こそが勝利を掴み取る、そういう物語。

俺にとって二回目になるそれらは、思い出すような旅路であったと言えるだろう。

一度経験した数多の出会いがあつて、同じ数だけ別れがあつた。

見覚えのある人々がいた。

聞き覚えのある声があつた。

言われた覚えのある言葉があつた。

知っている絶望があつた。

忘れられない希望があつた。

——けれど、同じ物語であつたかと言われれば、それは絶対に違つた。

経験したことのない出会いがあつて、同じ数だけ別れがあつた。

見覚えのない人々がいた。

聞き覚えの無い声があつた。

言われた覚えのない言葉があつた。

知らない絶望があつた。

忘れられなくなる希望があつた。

そういう、全く別の旅路だつた。

まるで一度作り終えたアルバムを、一から捲り直して写真を増やす

ような、そういう物語だった。

それに、まあ。

隣にはずっと鈴鹿がいたのだから、こうなることは必然だったのだろう。

かつての自分の背中を追い越すように駆けてきた一年は、やっぱりそれでも、怖いくらい長かった。

不安と恐怖に押し潰されそうで、その度に救われた……まあ、それはこの旅に限った話でもないのだが。

前回でもそうだった。俺はいつも、誰かに支えられている。

時間としては、たったの一年しか使っていないかったのに、やけに長くいたように感じるマイルーム。

ライトを点けるのも何だか面倒で、その上窓もないこの部屋は暗闇に沈んでいる。

そこに備え付けられたベッドの上で、背中合わせにして座っていた鈴鹿へと、少しだけ体重を寄せた。

この一年の間で、すっかり鈴鹿は俺の部屋へと入り浸るようになっていた。

お陰で随分と物が増えた。マジでどっから持ってきたんだよそれ……という気持ちでいっぱいだがまあ、それはそれ。

文句を言うほどではない……いや、たまに散らかりまくっててキレそうにはなるが……良いでしょう！ というアレだった。

それに、決して嫌という訳ではない。鈴鹿が傍にいるのは、どちらかと言えば心地の良い方だ。

というか、心地良くなった、が正解だろうか。  
そりゃ一年も……事実上、二年間も一緒にいたのだ。

その上ここ一年は、四六時中傍にいたのである。  
ここまで来たらもう滅茶苦茶嫌か、そうではないかの二択になると

いうものだった。

まあ、こんなこと絶対に口に出して言うことは無いだろうが……と  
思っていれば不意に、髪を梳かれる感触がして、鈴鹿の声が続いた。

髪、結構伸びたね。

静かに囁かれたそれに、少しだけ間を置いてから、「あー……」と思っただ。

それから、何となくちよつと面白いな、とも。髪の毛、そんなに気になることかな……。

やっぱ似合ってない？　なんて聞けば、鈴鹿は少しだけ考えた後に、可もなく、不可もなく……みたいな？　と曖昧に笑った。

マスターって別にイケメンって訳じゃ無いけど、不細工って訳じゃ無い……敢えて何か言うまでもないような顔してるじゃん？

だから、ショートでもセミロングでも、あんまり印象が変わらないって言うか。

似合う、似合わない以前の話になる的な？

そう、言葉が続けながら向かい合った状態で、鈴鹿は俺の髪の毛を弄ぶ。

ふうん……ちよつと？　鈴鹿さん、流石にそれは言い過ぎでしょう？　泣いちゃいそうなんだけど、と思いつつも、やたらと熱心に俺の髪で三つ編みを作っていく鈴鹿に、二度目のデジャヴを覚えた。

まあ、正確に言えばあの時は膝枕で、彼女は俺の髪の毛を梳いていたんだけど。

結局あの後は寝落ちしたんだっけ、と思い出していたら突然パチンとおでこを弾かれた。

かなり手加減されてるとはいえ、英霊の一撃である。普通に星を飛ばすことになり、苦悶の声で文句を飛ばせば、今、他の女の子のこと考えてたでしょ、とジトツとした目で見られた。

お前は俺の彼女かよ……。

やれやれ、と小さくため息を零しながら言葉を重ねる。

ちよつとデジャヴったんだよ——ついでに、何で性懲りもなく伸ばしちゃったのかな、って我がことながら思ってたんだ。

前にさ、伸ばしてた時は、ちよつとした願掛けみたいなつもりだったんだよ。

どうか万事上手くいきますように——ってさ。

結局、上手くはいかなかった……って言うのはちよつと違う気もす

るけれど。

まあ、こうなつた訳で。

伸ばしても仕方ないのに、一回も切ろうつて思わなかった……どころか、早く伸びろつて思つてたような気もするなつて思つて。

二回目なのに、俺つて何にも変われてないんだな―つて、ちよつと思つたりとかしてたんだよ、と言えば鈴鹿は、それつて別に、悪いことじゃなくない？　と言つた。

こつちを見ることは無く、手元を忙しそうに動かしながら。

人つて何かがあつたからつて、突然がらつと変わるものじやないつしよ。

少しづつ、少しづつ時間をかけて変わつていくことしか出来ないんだよ。少なくとも、人間は。

そしてそれを、人間<sup>あなた</sup>たちは成長と呼び、意外と自分じや気付けない。

マスターはこの二度目の一年間、必死に歩いてきた。旅をしてきた、戦つてきた。

それらはやつぱり、マスターに大きな影響を与えてるよ。

でも、影響を与えられたからつて、直ぐに変化が起こる訳じやないから。

ゆつくり、ゆつくり変わつていつて、そうやつてふと振り返つた時にようやく「ああ、成長できたんだなあ」つて思えるものだから。

だから、そう不安になることも、卑下することも無い――つて言うか、マスターつて自分のこと卑下しすぎじやん？

いや、卑下つていうか、自己評価低めつていうか……自分の優先順位が、いつも少しだけ低い。

本当に、少しだけだけ。

いつも一番大切なところで、自分以外の誰かを優先することができつてしまう。

それは間違いなくマスターの美德だけど、同時に私は、それがとても怖い。

ねえマスター。

マスターは私にとって、一番のマスターだつたよ。

貴方でなければ、ここまで歩いて来れることは無かったと、確信すらしている。

だからね、マスター。

お願いだから、自分を大切にしてくれ。

人が、命を懸けたところで為せることは多くはないし、大きくもないから。

この先、何があったとしても自分自身のことだけは、軽く見ないで。いつの間にか、鈴鹿の手は止まっていた。

その手は俺の服をギュツと握っていて、鈴鹿は俯いている。

彼女の言葉はまるで心の奥まで触れてくるように入ってきて、少しだけ逡巡した。

それから鈴鹿の手に、自分の手を重ねる。

分かっているよ——そりやもう、嫌ってほどに分かっている。

無茶はするけど、無理はしないようにする。

それにまあ、もしそうなったとしても、鈴鹿が守ってくれる。そうだろう？

そう言って笑うのと同時に視界が揺れ動く。

ボフィン、というベッドからの感触が少々乱雑に伝わってきて、そこでようやく押し倒されたのだと理解した。

何をするんだよ、と文句を零そうとして、けれども反射的にそれを飲み込んだ。

鈴鹿の黄金の瞳が、射抜くように見つめてくる。

見慣れたそれは、しかしいつも以上に威厳が込められていて、迂闊に言葉が出せなかった。

そんな俺を見ながら鈴鹿はゆっくりと、優し気に言葉を紡いだ

だから、それが嫌だって言ってるんだよ、マスター。

軽く見ないでって言ったでしょう——貴方はもう、自分を犠牲にするのが当たり前だって言っているから。

本当なら私だって、いつまでも、どこまでも傍にいて、ずっと守ってあげたいよ。

でもそれは出来ないから。いつかは終わりが来てしまうものだから。

ら。

自分を大切にしてい——もつとちゃんと、自分の我儘に耳を貸してあげて。

そう言つて、鈴鹿は笑つた。小さく、儂げに。

それが俺にとつては酷く印象的で、何故だか嫌に目に焼き付いて離れなかった。

何だか鈴鹿がいなくなつてしまふような気がして、思わず彼女の手に触れば、鈴鹿は笑みを深めた後に——そのまま落ちてきた。

言葉通りドスン！ と勢いよく上体を倒してきて、思わずぐえつ、と悲鳴を上げた。

いやマジで痛い、何こいつ？

一瞬抱いた不安をかき消すような衝撃に顔を顰めれば、そのまま頭を抱え込まれた。

当然ながら顔がまるごと彼女の身体で顔を覆われるわけで、普通に息苦しい——ついでに若干の恥ずかしさも混じつて抵抗を試みる。

もがもがと、言葉にならない声を発せば、鈴鹿の面白がるような、軽やかな笑い声が耳朶を叩いた。

——もう、そんな顔しないでよ……未練になつちやうじゃん。

ぼそり、と何かを言われた気がしたが、自分のもがく声で良く聞こえない。

というかそろそろ暑苦しいんだよ！ と反抗する力を増したが当たり前前みたいに余裕で抑え込まれた。

パツと見、女子高生とはいえ、鈴鹿は英霊なのだから当たり前ではあるのだが。

それはそれとして何となくショックを受けてたらグググツ、と抱きしめるには些か強すぎるくらいので抱えられた。

人理修復全然関係ないところで怪我するとか洒落にならないんですけど……！

何とか脱出しようと力めば不意に、鈴鹿は言った。

今言つたこと、ちゃんと忘れないでいてね。

少しでも良いから、マスターのことをこうやって、大切にしていた



人がいたってこと、覚えていてね。

それが多分、マスターには一番”効く”から、と。

効くってなんだよ……と思いつつも、分かった、とだけ返す。

まあ、正確にはもがもががっ、って感じだったのだが鈴鹿には伝わったのだろう。

ゆっくりと身体を離し、俺を見下ろした鈴鹿は小指を立てた右手をずいっと押し付けてきた。

……え、なに？

お前なんか小指一本で倒せるぜっていうジエスチャーか何か？

と思えば「指切り」と鈴鹿は呆れたように言った。

指切り……あつ、そういうこと。

悪いな——と何も考えずに小指を絡めれば、鈴鹿は小さく歌い出した。

ゆーびきーりげーんまんってやつだ。

三行で終わりそうな歌詞を歌い切った彼女は優しく指を切った。

はい、約束ね、なんて言ってから鈴鹿はもう一度倒れ込んでくる——と言っても、先ほどのように急では無かったが。

ゆっくりと、俺の身体に頭を乗せるように横たわり、もう今日は休もつか、と鈴鹿は言った。

その言葉はまるで魔法のようで、緩やかな眠気に瞼を覆われたと思うと同時にストーンと俺の意識は落ちていった。

——そつと、鈴鹿御前は身体を起こす。

自らのマスターたる青年は、それはもう面白いくらい安らかに眠っていて、それが少しだけ嬉しかった。

この青年は基本眠りが浅い上に、魘されているのが常で、しかも本人はそれに気付いていない。

……いいや、あるいはそれは、気付いていないのではなく、敢えて目を背けているのかもしれないが。

そういう悪癖が、この青年にはあった。

だからこそ、今こうしてゆっくりと眠っていることにホツとした。

それが一時のものであったとしても、無いよりはマシなはずだから。

そんなことを思いながら、鈴鹿御前はそつと青年の額へとキスを落としました。

まあ良いでしょ、だってこれが、最期なのだから、と鈴鹿御前は言い訳を並べ立てて、青年の頭を撫でる。

——そう、最期だ。真正正銘、カルデアで過ごせる最後の一日。

明日にはこの青年と共に、一度は降り立ったあの時間神殿へと踏み込むことになっている。

そうしてきつと……いいや、絶対にあの魔神王を打倒するのだから。

何せ自らが認めた、最高のマスターなのだから。それくらいはやってのけて当然だ。

だから問題は、自分自身なのだろう、と鈴鹿御前は思う。

青年をループから解放する——それは言葉にするなら容易く、しかし行うのはこれ以上ない程に困難だ。

だが不可能ではない、というよりは、成功自体はするだろう。それはもう、間違いなく、と断言して良いほどに。

鈴鹿御前には自信どころではない、確信があった——あったからこそその逡巡があった。

決心をした今でも、覚悟を決めた今でも、それは少しでも残っている——それをしかし、切り捨てるようなことはしなかった。

鈴鹿御前は控えめに言っても「重い」女である。ただそのことを彼女は少しでも自覚していたから、敢えて抱え込んだ。

鈴鹿御前はここにいたんだと、これだけ素敵なマスターに出会えたのだと、世界に証明するために。

大事に大事に抱きかかえた鈴鹿御前は、もう一度だけ青年の頭を撫でてから、その傍らへと横たわった。

まるで恋人にでもするように、彼女は慎重に青年を抱きしめて。

本来英霊には必要のない睡眠に、意識を緩やかに解かした。

『人類悪』とは即ち、『人類愛』であるらしい。

人類『を』滅ぼす悪なのでは無く、人類『が』滅ぼす悪、故にそれは『愛』なのだ。

人類への悪意を基に生まれ、滅ぼすための機構では無く、むしろ人類にとってのより善い未来を願ったが故に、今の安寧に牙を剥き、洗い流すかのように滅ぼす。

つまるところ、人類悪とは人類による壮大な自殺とも言えるのだとか。

ゆえに、顕現する七つの人類悪はそれぞれに掲げる願い——理がある。

第一の獣、そう呼称された魔神王ゲーティアの背負うそれは、即ち『憐憫』であった。

かつて、魔術王と呼ばれた男が使役し、構築した魔術式でありながらも、高度な知性体であった彼らは『終わりある命』という前提を嫌悪し——憐れんだ。

故に彼らは人類を滅ぼそうと画策したのだ——何事にも結末がある、という前提をひっくり返すために。

自らが星となり、『死』という概念を抹消する為だけに、彼らは人類を焼却した。

嫌悪からでもなく、憎悪からでもなく、私怨からでもなく。ただ、そうすることが『必要』であったが故に。

だからこそ彼らはビーストIと、そう呼ばれる獣になりえた。

人が人を憐れみ失望するという、人であれば誰しもが持ちうる驕りの体現として。

……それは、その在り方は果たして、悪と呼んで良いものなのだろうか、と少しだけ思った。

そんな話を思い出しながら、二度目の最後のレイシフトは完遂された。

降り立ったのはあの時と変わらない、終局特異点——冠位時間神殿ソロモン。

魔術王の身体に刻まれた魔術回路を基に作り上げられた、時の流れから外れる、彼のみが持ちうる固有結界。

かつて此処を、俺は「あの世」だと思ったことがある。

そんな記憶が呼び起こされて、思わず笑みを浮かべた。

別に失笑したとかそういう訳じゃ無い、ただ、一年経った今でも、不思議とその感想は変わらないな、と思ったのだ。

死ぬのならばここが良い——なんて少しだけ思っただけで、当然死ぬつもりなんかはない。

鈴鹿に怒られるしな……。

だから、死ねない。そう、死ねないんだ。

レフとマシユ、それからドクターたちの問答を聞き流しながら、概念礼装を喚び起こした。

一字一句違わない——のかどうかは分からないけれど、それでも聞き覚えのある会話で、そういうったものを聞き流すのも、もう慣れた。繰り返すというのはそういうことだ、やり直すというのは、そういうことだ。

どれだけ違う出会いがあつたとしても、その根幹は変わらないものだから。

——だから、進めば進むほど、鈴鹿のありがたさが身に染みるようだった。

彼女がいなければ、彼女の言葉が無ければ、ここまで歩いてくることすらできなかつたであろうことが、容易に理解できてしまう。

まあ、その代わりとでも言うように、メドゥーサもカーミラもいないんだけど……。

二度目にあたるこの旅では、何故かは分からないが鈴鹿以外のサーヴァントは誰一人として召喚されなかつた。

要するに第一特異点から、俺の傍にいたのはずっと鈴鹿だけなのである。

もう何か運が悪いとかっていうレベルの話ではなく、一度目よりも苦労が多かつたように思える。

というか普通に落ち込んだ——元より、足手まといどころではない

というのに、戦力増強すら出来ないのはマスターとして致命的だった。

まあ、あんまりにも不安になって鈴鹿に相談したら滅茶苦茶笑い飛ばされて終わったのだが……。

鈴鹿が気にする、気にしないは関係なく俺の問題であった。

それを補うようにやたらと立香くんがサーヴァントを召喚しまくる——今回はアルトリアとマルタに加え、シャルルIIアンリ・サンソンと、アルテラだっただろうか——ので、全体的に見ればバランスは保っていたのだが、お陰で俺の惨めさがヤバかった。

いや、俺の惨めさとかは正直どうでも良いんだけど……。

複数の戦力と言うのは確かに心強いが、その反面、指示を出す側からすれば負担の増加でもある。

俺が召喚出来ない、という単一の事実だけであらゆる方面に負担をかける羽目になるのが酷く心苦しかった。

その分駆けずり回った自覚はあるから何とかイーブンになっていたら良いな、なんてことを思うと同時にレフはその身を魔神柱へと姿を変える。

それを見て、ああ、始まったのだ、と独り言ちた。

二度目であるそれは、ほんの少しだけ、味気ないと思った。

——なんて、そんなことを考えていたから悪かったのだろうか。それとも、ここまでとんとん拍子のように進んで来れたのが悪かったのだろうか。

あるいは、やはり俺には覚悟とかそういうものが足りなかったのか。

いいや、もしかしたら、そんなことは一切関係なかったのかもしれない。

俺はいつだって、自分のあずかり知らぬような大きな意志か、もしくは力によって振り回されているようなやつだったから、こうなることは半ば運命であったと、そう言っても過言ではないのかもしれない。

まあ、なんだ、端的に言うのであれば、俺は失敗した。  
失敗——そう、失敗としか言い様は無いだろう。

俺は、冠位時間神殿ソロモン内で、ゲーティアを打倒することすら  
できずに死亡した。

しかし、考えてみればそれは、極自然なことであつたと、今では思  
うのだ。

一番最初にゲーティアを撃破できたのは、正しく奇跡のようなもの  
だつたのだから。

何度も何度も飽きるほどに死んで、その度に繰り返して、そうして  
やっと進んできたような俺が、たつた一度のチャンスをモノに出来た  
ことが奇跡だつたのだ。

奇跡は何度も起こらない、起こつて良いものじゃない、そういうも  
のだ。

俺は当たり前みたいにゲーティアに殺されて、そうしてまた、気付  
けば炎上した都市のど真ん中に佇んでいた。

それに対して、何も思わなかつたわけでは無い。

当然だ、何の為にあそこまで進んできたか、ここまで歩んできたか  
思っている——けれども、その反面そこまでショックを受けたわけ  
は無かつた。

もしかしたらそれは、失敗したという事実が先にあつたからなのか  
もしれない。

失敗をやり直すのは、もう当たり前とも思えるほどに慣れ切つたこ  
とだつたから。

成功したら次に進める、失敗したらやり直し。馬鹿でも分かる理論  
で、けれども現実に当てはめればどこまでもおかしい理論。

それが、どこかカチリと当て嵌まつてしまった——やり直すという  
概念が、もうどうしようもないほどに、身に沁みついてしまつていた。

瞬間的に、次はどうするべきかを考えることが出来た時点で、歩み  
直す覚悟はとつくに固まつていて——そしてそれらすべてがきつと、  
傲慢でしかなかつた。

繰り返し返せば何とかなる、何とかすることができる。



み重ねてきていようともし!

いつからか、心の芯に据えていた熱が冷めていることに気付いていたとしても!

己が為でも、誰が為でもなくなつて、義務的なものになっていたのだとしても!

それでも、それでも俺はまだ、前に進んでいるのだから。進もうとすることが出来ているのだから!

決してこの在り方は、悪ではないだろう……?

善と呼ぶのは烏滸がましいかもしれないけれど、間違つてなんかはいないはずなんだ。

諦めたら終わりだから、膝を屈したら終わりだから、途中で投げ捨ててしまつては終わりだから——そういう風に教わつてきたはずだから。

だから、何度だつてやつてみせる。

繋がれてきたものは、絶対に誰かに繋いでみせる。

鈴鹿が見せてくれた希望へと、手を伸ばしてみせる。

ダ・ヴィンチちゃん協力をしてくれてようやく見えた未来に触れてみせる。

出来なかつたとしても、やらなきゃならないんだ。やれるまで繰り返さなきゃならないんだ。

差し伸べられた手を取るために、俺は。

駆けて、駆けて、駆け抜けて。

不意にガクンと、膝が折れて突っ伏した。

——あ、え?

あまりにも前触れが無さ過ぎて、受け身も取れずに痛みが走る。

何で倒れたんだろうって思つて、すぐさま立ち上がった。

否、立ち上がろうとして、できなかつた。

もうすぐブリーフィングが始まるつてのに、何をやっているんだ。

もう何度目かも分からない、けれども終局なんだ。次こそは、次こそ

そはどうかしないといけないのに。

そう思つたけれど、自室でたった一人、どうすることもできずに無



様に転がることしかできなくて。

それを理解できた瞬間に、どこからかプツンという音が聞こえた気がして。

あ、これもうダメだ、と唐突にそう思った。

思った、というよりそれは、ようやく素直に受け止められたと言った方が正しいのかもしれない。

何十回、何百回と失敗を繰り返し、馬鹿の一つ覚えみたいに立ち上がって——それで何を得られたのだろうか？

しよせん、俺のやっていたことは英雄の真似事に過ぎなかったのだ。

どれだけ模倣しても、どれだけ縋っても、どれだけ頑張っても、たった一つのチャンスをつかむことができない。

その幸運はもうとうの昔に使い果たしてしまっていて、俺にはもうその資格が無かったのだ。

諦めないのは、もう無理だ——と言うよりは、諦めなかったところで、どうにもならないということを経ワジワと思ひ知らされているようだった。

人理修復を為すというのは、それほどまでの偉業だった。

何度何度も、繰り返し返したから出来るものなんかじゃなかった。

たった一回、そう、たった一回きりの奇跡だった。

甘く見ていたつもりは無いけれど、やっぱりどこかで慢心が生まれていたのは否定できない。

だからと言って、それをすぐさま取り消せるほど俺は出来た人間じゃなかった。

そんなことも全部、全部最初から分かっている、それでも目を背けて来たけれど、それももう限界だった、らしい。

そして、それを受け止めてしまった以上、俺はもう多分、戦えない——だって、戦うことに価値を見出せなくなってしまったのだから。

もう頑張る意味なんて無くないか？

未来なんて、もう投げ出したって良くないか？

英霊のみんなは、こんな俺を見たら失望してしまうだろうか。

期待外れだったって、お前にはがっかりだって、思うだろうか。でもさ、俺にしては、かなり頑張った方だと思っただよ。

結果のついてこない『頑張った』なんて意味ないことくらい分かってるけれど、それでも。

俺、ここまでだ。

本当ならもう一度ゲーティアを倒して、ループからも脱却して、世界を救って、またみんなと笑い合って、日常に帰れたらなって、そう思ってたんだけど。

そう思ってた、はずなんだけど。

やっぱりもう、駄目なんだと思う。

多分、こういう時に立ち上がれるのが英雄って呼ばれる人種で、残念ながら俺はそうではなかったのだ。

真似っ子はしよせん、真似っ子に過ぎなかった、つまりはそういうことなのだ。

だから、ここで折れるのも全く不思議ではないし、むしろ当然のことなのだろう。

まあ何だ、結構粘った方だろ、俺にしては。

そう思えば、少しは気が楽になるような気がして、小さく長く、ため息を吐いた。

吐けば吐くほど、全身から力が抜けていくようだった。

それは酷く気分が悪くなるような行為で、でも同時に安らかさえあった。

這うようにしてベッドへと近づいて、何とか起こした上体をぐつたりと預けて天井を眺める。

幾度となく見た天井だ、最初の頃は全然慣れなかったっけ。

もう戦いたくない——なんて言ったらドクターは怒るだろうか。

多分、怒らないだろうな。それどころか、謝られるかもしれない。

ドクターはそういう人だ、俺や立香くんに無理を強いているという自覚が、誰よりもある人。

……まあ、もしかしたら鈴鹿とダ・ヴィンチちゃんには、失望されてしまうかもしれないけれど。

立香くんには——どうだろう。彼が一番、俺をどう思うのかが分からないな。

立香くんが一番、俺とは同じような立場だったから、もしかしたら誰よりも怒るかもしれないし、あるいは笑って許してくれるかもしれない。

彼はそういう、真つ当に普通の人間だから。

あー……真つ当に普通の人間だから、あまり背負わせてはいけな  
いって思ってたんだっけ？

誰よりも背負ってもらっていた俺が、そんなことを思うのは  
幾ら何でも身の程知らず過ぎるだろう、と少しだけ笑えば急に光がブ  
ワツと部屋に入ってきた。

いや、別に神秘的な光とかそういうアレでは無く、普通に目の前の  
扉が開いたことによるものである。

廊下のやたらと明るい人工的な白の光が、扉が開くことで出来た隙  
間から鋭く差し込んできて、思わず目が眩んだ。

当然、俺が開けたわけでは無いのだから、誰かが入ってきたのだろ  
う。

と言っても、それが誰かであるかは考えるほどのものでもない。十  
中八九、鈴鹿に決まっている。

俺の部屋を好き好んで尋ねるようなのは鈴鹿くらいだ——いや、他  
の人の場合もあるが、ちよつと鈴鹿の場合は頻度が違うのだ。

だから、下手に動揺するようなことでもないし、ついでに言えば  
ちよつと良かったとも言えるだろう。

今なら鈴鹿のあの時の誘いに応えるよ……なんて、もし言ったとし  
たらビンタの一発二発は飛んできそうだけど。

もう何でも良いし、それもアリだろ、と思っていたらかけられた声  
は予想に反して、ずつと低い、男性の声だった。

一般的な高校生男児くらいなの、随分と耳に慣れた声——って、え？  
立香くん？

と言う前に焦ったように俺の名を呼ぶ声が耳朶を叩  
いて、慣れてきた視界にはやはり立香くんがあわあわとしたように俺  
を見ていた。

立香くんが俺の部屋を訪ねるといふことはまず無いことである。それは別に、俺と彼が実のところはかなり不仲である、とかそういうったかなり個人的な理由があるという訳ではない。

どちらかと言えば仲は良好……な方であるはず、である。多分。流石に嫌われるような真似はしていない。

ご飯食べる時も会話くらいはするし、何度か一緒にトレーニングだつてしたことのある仲だ。

であれば何故、そんなことが断言できるのかと言えば、単純に俺がマイルームにいることがほとんどないから、としか言いようがないだろう。

——いや、ほとんどない、という言い方は少し違うな。当然、俺だつてカルデアにいる間はマイルームで毎日就寝して起床している。

ただ、そうするまでの間はほとんど常にシミュレーターに籠つているというだけの話だ。

そういう関係上で、時間を気にすることなく突撃してくるような鈴鹿以外だと、マイルームを訪ねられることが無い。

他のスタッフも含めて、俺に用がある時はまずシミュレーションルームへと直行して来るくらいで、立香くんは俺のマイルームを知らないだろうな、とすら思っていたまでである。

だから、何だか色んな意味で驚きながら、取り敢えず立香くんを宥めることにした。

怪我をしたとか、具合が悪いとか、そう言うのじゃなくて——あれ？ 別にもう、強がる必要もないのか？

いや、確かに不調という訳でも無いんだけど……全然問題はないって訳でもないし。

戦うことをやめるのであれば、いずれ伝わるようなことだ。

誰に先に言っても、特に変わりはないだろう。

——なあ、立香くん。俺がもう戦えないって、戦いたくないって言ったら、立香くん怒る？

そんな風なことを言えば、立香くんは一瞬だけ「え？」といったような顔をした後に、少しだけ笑い、俺の隣に並ぶように腰を落として、そうですねえ、と言った。

怒りはしませんよ、だって先輩がここまでずっと、誰よりも頑張ってきたこと知ってますから。

おれもマシユも、そんな先輩に頼ってここまで来た自覚があるから、怒るなんて烏滸がましいくらいです。

でも、そうですね……どう思ってたかという話になったらおれは、少しだけ寂しいなって思います。

——先輩は、おれに言ってくれたこと、覚えてますか？　って、流石にこの言い方は抽象的過ぎますね。

おれが、もう嫌だって部屋に引き籠った時のことです。

先輩、開口一番に『まあ、気持ちは分かるよ。だから、逃げてても良いんじゃない？』って言ってくれたんですよ。

もう、聞いているこつちが拍子抜けするくらい、軽い調子で。そうするのは別に普通のことだよって言ってるみたいだ。

でもその後続けて、『でももし、まだ頑張ろうって思えるなら、頑張った方が後悔しないって思うなら、そうした方が良いと思う。いや、俺がそうしてくれた方が嬉しいってのもあるんだけどさ。やっぱり重荷って分かち合ってたんなら？』って。

本当に、言ってくれたのはそれだけだった。それだけで、十分だった。

おれだけに背負わせるんじゃないかって、一緒に背負うからって言ってくれた——それは、第五特異点の時もそうでしたね。

いつだって先輩は、一緒に戦おうって、一緒に歩こうって、一緒に背負おうって言ってくれた。

おれ、それが嬉しかったんですよね……まあ、とうの先輩は隣を歩いてくれるって言うか、率先して前を歩いてくれてた感じだったんですよ。

進んで危険に突っ込むし、いつともヒヤツとするような事態の真ん中にいるし。

まあ、それでもおれは、そんな先輩に追いつこうと思って歩いていったつてところもあるんで、やっぱり『寂しい』が一番近い感情ですね。

でも、大丈夫ですよ。

先輩はもう充分戦ってくれたから、前を進んでくれて、道を作ってくれたから。

ここからは、おれが先に行きます。

先輩はちよつとだけ休んでください。その間は、おれが頑張るから。

だから、立てるようになったら、歩けるようになったら、またおれと一緒にこの人理修復おとも背負ってくださいよ。

だってこれ、おれと先輩の物語でもあるでしょう？

そう言つて、立香くんは笑つた。

励ますように、宣言するように。

満面の笑みで、彼はそう言ったのだ。

それは意外にも、強がりから出てくるような表情でも、言葉でもなかった。

ただ、大丈夫ですよ、任せてください、と言いながら、また俺が立ち上がることを信じている。

期待しているのでも、願っているのでもない、どこまでも無垢な信頼。

手を貸さずとも、優しい、甘い言葉をかけずとも、絶対にまた一緒に戦ってくれるのだと信じ切っている。

それは、悔しいくらいに眩しい在り方だった。

一分の疑いも無く、ひたすらに誰かを信じ、託せる人。

俺もいつかは、そういう人になりたいと思つていたのであるか。

というか俺は、こんなにも強い子を守ろうだなんて、そう思つていたのか。

人理修復の旅は、俺だけの旅では無かったというのに。

そんな大切なことを、いつから忘れてしまったのだろうか。

ほとほと傲慢だな、と思つて目を伏せれば、立香くんは、「あ、でも」

ともう少しだけ言葉を重ねた。

もし、助けを必要としているのなら、おれにどうにか出来るようなことなのであれば、いつでも言ってください。

人理修復なんて関係ない、個人的なことでも、何でも良いです。

おれはここまで来るのにたくさん助けられたので、そのお返し……って訳でもないですけど。

仲間って、助け合うものでしょう？ 言えないことがあって、伝えられないことがあるのだとしても、それでも気にせず手を貸す。

仲間ってそういうものじゃないですか。

だから、全部言っただけじゃいいじゃないですか。

事情を詳らかに説明しろだなんて言いません。

助けて欲しかったら、助けて欲しいって言って欲しいです。

今までおれがそうやって助けられてきたように。

今度はおれが、全力で出来る限りのことはしますよ。

何せおれ、先輩の後輩ですからね。

言葉は力だ、と時折思う。

傷つけるためだとしても、心配するのだとしても、誰かの為に発した言葉と言うのは大なり小なり、心に跡を残すような重みを持つ。

そうしてその跡というのは、決まって後々から効力を発揮するものなのだ。

それは心を照らす光かもしれないし、あるいは覆ってしまう闇かもしれない。

受け取り手次第でもそれは大きく変わるだろう——そして、立香くんの言葉は間違いなく前者のものだった。

仄かに輝く言葉のひとつひとつは、柔らかく俺自身の内側を照らしてくれるように。

不快さはない、悪くはない感覚だった。

……助けて欲しい、か。

そういえば、もうずっとそんなことを言ってこなかったような気がする。

いや、特異点修復を為すために何度も口にはしてきたのだけれども。

それでも、俺個人を助けて欲しい、だなんてことを口にしてきたような記憶は数えるほどしかない。

立香くんが相手ならなおさらだ——彼に助けて欲しいだなんて、誰が言えるものかと、そう思っていた。

まあ、今でもそうではないのかと言われれば、それもまた違うのだが。

すぐに思考や思い込みを変えられるほど器用な人間じゃない。

だけど、俺は俺を優先するために助けて欲しいと、そう頼つても良いんだ、と思った。

それは英霊たちにだけ、とかではなく、誰にでも。

全部ひとりでやって、失敗して、勝手に諦める方がよっぽど性質が悪い。

そんなの当たり前のことだって、分かっていたはずなんだけどなあ……。

いつから忘れてしまったのだろう——どれだけのことを、忘れてきてしまったのだろうか。

思い出せないから分からないけれど、きつとたくさんのことを置いてきてしまったんだと思う。

これから思い出すからオーケー、って話でもないんだろうけど……まあ、そうだな。

——俺、もうこの旅何度も繰り返してるんだよね。毎回必ず、最後の最後に失敗してさ、また一度からやり直すんだよ。

それをもう、数えきれないくらいやってるんだけど、まあ今こうやって話してるように、成功したこと無いんだよね。

意味不明だろ？ でも現実なんだよなあ……だからさ、立香くん。助けてくれない？ と、そう言ってみた。

思ったより軽い調子で言ってしまったし、我ながら要点がまったく掴めない語りだった。

流石にこれは頼む立場からの物言いとしては最悪だな、と思った



が、しかし立香くんは少しだけ首を傾げた後に、俺を見た。

何か……思いのほか全然分からなかったですけど、うん、大丈夫です。

任せてください、おれが先輩のこと、ドガンと見事に助けてあげますよ！

世界を救うとかより、誰かを助けるための方がずっと分かりやすいですしね、と立香くんはそう言って笑った。

それはやっぱりどこまでも眩しくて。

同時に俺は、そうはなれないな、とも思った。

前までの俺ならば、あるいは、なんてことは考えるけれど、今の俺はもうダメだ。

今の俺は、今がもう終着点だから——でも、それでも。

あと一回くらいは、立ち上がろうと思った。

助けて欲しいとか言っちゃって、それを了承されちゃったし。

しかもそれを、黙って待つだけなのは、ちよつと流星に情けなさすぎるし。

今回限り、あと一度だけ、背負ってみようと、そう思った。

そうして降り立った冠位時間神殿ソロモンは、しかしだからといって、何か変わったことがあったわけでは無かった。

もうすっかりと見慣れた風景で、記憶と寸分違うことは無い。

緊張は——やっぱりするけれど。

というかここまで来て、逆に緊張しないやつっていないと思う。

なにせ自分の命がかかっているのだ、ついでに言えば、世界の命運も。

幾度も繰り返し返したところで、そういうのは変わらないものだ。

だから、目新しさがもう無い、と思うくらいで、手汗は滲むし、下手したら足は震えそうになる。

もしかしたら、失敗してきた積み重ねが馬鹿みたいにある分、そのプレッシャーは大きいかもしれない。

あー、死にたくないな、やり直したくない。

またここまで来るのは、随分と疲れる——疲れた。

これが俺にとつてのラス一だしな、なんて思った。

弱気とかじゃなくて、純粹にそう思えた。

俺が一番、俺の限界を知っているから。

だからと言って、手を抜くとか、逆に気張り過ぎるなんてことは無いが。

戦闘時におけるメンタルコントロールだけはそれなりに上手くなつたつもりだ、もちろん、英霊ほどじゃないけれど。

レフ・ライノールの、何なら一から俺が喋つてやろうかと思うくらいには覚えてしまったご高説が終わるのと同時に駆け出した。

ここまではいつも通り、ここからも、いつも通りだ。

流れ行く星々の如く、縁を辿つた英霊たちが集い、守り、道を作つてくれる。

第一から第八まで、人理修復の旅路をなぞるように——あるいは、その意義と重みを思いださせるように。

当然ながら驚きはもう無い、何せ分かり切っていることだ。

聖女の守りが外敵から一切を跳ねのけてくれて、皇帝の一撃が道を切り開いてくれる。

海賊の砲撃が宙に花火を咲かせ、並び立つ雷があらゆるものを焼き尽くす。

狂気と鉄の信念を帯びた女の宣言が周りを鼓舞し、円卓の騎士が魔神を打倒しお師匠の一撃が穴を空ける。

神々の気まぐれが、怒りがすべてを光で染め上げて、英霊ですらない、しかし確かに縁を結んだ人たちが道を繋いでくれる。

それは旅先で繋いできた確かな絆、形ある縁の——もう何度も見えてきた奇蹟の証明。

別に、無味に思う訳じゃ無い。今だって助かると思っているし、ありがたいとも思っている。

何せ、彼らは縁を頼りに来てくれている——それは当然ながら、縁がなければ来ないということでもあるが。

来ないことだってあった……もちろん、誰一人として来なかったなんてことは無かったが。

俺がどうあれ、立香くんは何度目であろうとも全力だった。

全力で、全霊で生きる為に駆け抜けていたのだから、そんな事態はありえない。

誰だって力を貸してくれる、という訳だ。

そんな、あまりにも場違いなことを考えながら神殿内を駆け抜けて、気付けば玉座へは辿り着いていた。

意外に思うかもしれないけれど、一度だってここまで来れなかったことは無い。

英霊たちのサポートはそれだけ完璧だった。だからこそ、俺の力不足が目に残ると言った話でもあるのだが……。

コクリ、と鈴鹿が喉を鳴らす。

多分彼女は、俺以上に緊張しているだろう——何せ鈴鹿にとってこれは二回目だ。

英霊の座にある、鈴鹿の本体とも言える存在がどう俺を記憶しているのか、本当のところは分からないが、しかし恐らく、いわゆる一周目の記憶だけが強く刻まれているのだろう。

唯一成功した……もしくは、最も成功に近かった周の記憶のみが強く。

あるいは、二周目以降の旅路は刻み込まれるほど強くはなかった、と言うべきだろうか。

鈴鹿はいつだって一度目の記憶を保持した状態で、それ以降の周回のことはまるで記憶せずに召喚されていた。

だから何だ、という話でもあるのだが。

二度目だろうが、何度目だろうが関係はあまりなかった。

気の持ちようでも何でもなることならば、現状は招かれていないのだから。

かつてのように、今までのように、マシユはゲーティアの一撃からマスターの身を守り、そしてその身を蒸発させた。

その姿に背を押されたドクターが、最期の魔術と共に、全能を手放

した。

——良く出来た物語だよ、まったく、本当に。

脳裏にちらついた、そんな言葉を振り捨ててから礼装を起動した。ここからだ、ここからが俺にとつては本番なんだ。

何度も繰り返してきた一年の中で、唯一俺にとつて意味を為す瞬間。

ゲーティアの咆哮が高らかに響き、最後の戦いは始まった。

光が奔る、天は裂け、地が砕け、空間が軋む。

もう何度も何度も繰り返した最終決戦——一度でもまともに喰らえばその時点で終わりの戦い。

終わり、というよりは終わらせるための、もしくはスタートに戻る戦い、なのだろうか。

ゲーティアの拳が振るわれる度に大気は震え、直接ぶつかり合えば火花と共に一方的に押し飛ばされる。

どれだけの準備を重ねても、ギリギリ蹂躪にならないくらいの戦いにするので精一杯だった。

二度目の時から思ってたんだけど、最初の俺はこれ、どうやって倒したんだろうな。

アルトリアの聖剣が弾かれて、滑り込むようにマルタの十字架が振るわれゲーティアを押し飛ばす——刹那、振るわれた片腕から放たれた熱線が鋭く空を焼き焦がした。

その先にいたサンソンの手を引くと同時に、鈴鹿の刀が形を変える。

切っ先は炎に、水に、こがらし 凧に。

小さな台風のようにゲーティアの目を晦まして、その上で、アルテラの剣は解放された。

虹色の極光がゲーティアの全身を襲う——のと同時に、撃ち放たれた紫紺の熱線が鏝ぜり合った。

光と光が弾き合い、その間にアルトリアとマルタ、サンソンは距離

を詰め。

衝撃が走った。

双方放っていた光が打ち消し合い——正確に言うのであれば、アルテラの半身が削り飛ばされるという形で決着するのと同時に振るわれた刃たちは、アルトリアの聖剣のみが片腕を断ち、それ以外は弾かれた。

金属音が鳴り響き、サンソンとマルタが一緒くたになって薙ぎ払われる。

否、薙ぎ払われるように動いた片足がそのまま胴を消し飛ばした。風圧でアルトリアの動きが一瞬止まり、それを立香くんが緊急回避で離脱させる。

熱線がアルトリアの頬を掠め、射出されるように撃ち出された鈴鹿の刀がゲーティアの足へと並ぶように刺し貫いた。

血のように黄金の光が零れ、鈴鹿が地を蹴った瞬間、ゲーティアは地を踏みしめて。

緊急回避するのと同時にゲーティアの剛腕が俺の肌を掠め、地を穿った。

炸裂音と衝撃がビリビリと空気を揺らし、その隻腕から小さな、けれども星のような輝きを内包した光が飛び出した。

鈴鹿の悲鳴が耳朶を叩き、同時に終わったなあ、と思った。

前回もこれで殺されたのに、全然学習出来てなかった、なんて思いながら、立香くんへと託すことにした。

託すと言っても、まあまた巻き戻されるのだが。

二度目の頃から出来た、習慣のようなものだ。

もし、この世界が続くのであればきつと彼が成し遂げてくれるから——毎度の如くそう思っ立香くんの姿を探し、て、あれ？

どこにもいない、ということに気付くのと。

俺の身体が強引に押されるのは、全くの同時のことであった。

——これが、おれに出来る精一杯です。

笑って言った立香くんは、刹那の後にその全身を穴だらけにされた。

怖いくらいに鮮血を噴き出しながら、立香くんがまるで玩具みたいにその場に崩れ落ちる。

死んだ——わざわざ確認しなくても分かることだ。

彼は死んだ、たつた今、俺を庇ったことで死んだのだ。

——え？ いやいやいやいや、は？

助けるって、そんな、そういうことじゃ、ない。

俺みたいなやつのに、命を張るとか、それだけはダメだろう。

君は、一度しか無いのに。そういうのは、何度でもある俺の役目だろう？

言葉を思わず零し、息を漏らす。

失敗してから、繰り返す度に身に纏わりついてくるようだった倦怠感が剥がれ落ちていく。

まるで、どこか他人事のようにずっと思っていた感覚が剥がれ落ちていく。

どこまでも現実であり、そうであると思うようにしていたにもかかわらず、夢のように感じていた意識が剥がれ落ちていく。

俺の身体はずっと戦場にいたのに、俺の精神はその隣で眺めているようだった、そんな状態が元に戻される。

そして、どこにでもない宙ぶらりんだった自我が、急速に俺の元へと戻って来る。

視界が開けるようだった。

世界に色が戻るようだった。

ようやく夢から覚めたような気分だった。

嫌になるくらいの実感が、身体の輪郭を、魂の輪郭を定めているようだった。

俺という身体に、俺という精神がやっと入り込んできたかのよう  
な。

そんな、吐き気を催すような、今すぐ死にたくなるような、何もかもを投げ捨てて逃げたくなるような絶望的感覚が全身全霊を襲い——  
——やつと、俺は久しぶりに、この足で立ち上がった。

この目で世界を見て、この身体で息をする。

——ああ、そう、そうだったんだよ。

俺はもう、とつくに二度目の途中から諦めていたんだ。

無意識的か、意識的かは自分でも分からないけれど、俺はもうダメだと思つて、自分だけを守るために、自分を逃がした。

心だけを、別に置いた。

別に、特別なことじゃない……いや、やっぱりおかしいことではあるのかな。

俺は、俺自身を俯瞰するような、そういう風に自分自身を隔離した。どれだけ痛くても、どれだけ苦しくても、どれだけ悩んでも、それは俺自身であり、俺自身ではないものとして見ていた。

心を透明にするというよりは、心を別に置く。そういう風に生きるのはもう、一度目の旅で出来ていたから。

だから、何もかもがテキトーだったんだ。

心意気も、覚悟も、信念も、何もかもが半端だった。もしかしたらそもそも、なかったかもしれない。

楽にやり過ぎそう、余裕を多分にもつて進もう、という思いが確かにあった。

そりゃ失敗するわけだよ、だって、全部懸けてないんだから。

そのくせ、そうやって走るのはもう疲れたつて、もうダメだつて、弱音まで吐いて、みっともないことこの上ない。

全然苦しくなんて無かつたくせに、全力で挑戦なんてしてこなかつたくせに、さつさと逃げ隠れてしまつていたくせに、良く言うよ、という話だ。

拳句の果てに、そんな自分自身を助けて欲しいと強請つて、そして立香くんは死んだ。

そう、死んでしまった、死なせたようなものだ。

もう取り返しはつかない、そういうことが起こつてようやく俺の目は醒めた。

いつだって、手から取りこぼしてしまつた瞬間に、多くの間違いに気付く。

色んなことを思い出していく——全部、初めの頃の俺は分かっていた、覚えていたはずのことを。

俺、何やってんだよ。

自分のものとは思えないような絶叫が喉奥から広がっていく。

立香くんが契約していたサーヴァント——アルトリアとのパスは一時的に俺に譲渡されていた。

令呪を一面使用して、アルトリアの魔力を増幅させる。

既に準備を整えていた彼女の宝具は、俺を巻き込むような形で撃ち放たれ——鈴鹿に襟首掴まれる形でその場を脱した。

極光が、ゲートィアを包み込み、破壊する。

光が霞と消えると同時に紫紺の極光は幾度も宙で折れ曲がりながらアルトリアへと殺到し、だけどそうなることは分かっていた。

アルトリアの宝具で倒しきれないことはもう知っている。

間髪無く使用した令呪が一面、熱を遺して鈴鹿の力へと転換され、刀剣の群れは生成された。

紫紺の熱線に蹂躪されるかの如くアルトリアはその姿を消し、けれども鈴鹿の刀剣は寸分変わらずゲートィアを穴だらけにし、その場へと縫い留めた。

それを見るまでも無く、数歩踏み込んだ。

ゲートィアの、憐憫に満ちた紅の瞳と目が合い、その威圧を直に感じながら。

フラガラック——ッ！

あの時と同じように、蒼光の剣を解き放つ。

その上体へと風穴を空けて、押し倒す。

時間が経てば経つほど脆弱になっていた彼の身体は、その衝撃で全身が砕けるように零れ落ちた。

同時に、その横へと這いつくばるように倒れ伏す。

もう指先ほども動かさないであろうゲートィアの声が、少しだけ宙を揺らした。

何故だ——何故貴様らは、貴様は戦うのだ。

何故、屈しないのだ、何故、諦めぬのだ。



そんな問いに、少しだけ答えが詰まって、それから素直に吐き出した。

——何で、なんだろうなあ。

立香くんならきつと、生きる為って言うんじゃない？ だけど俺は、もう分からないや。

生きる為だったのか、終わるためだったのか、あるいは義務だったからなのか。

もしかしたら、その全部だったかもしれないし。

もしかしたら、その内の何でもないかもしれない。

でも、まあ。

多分、そうしたいってちよつとでも思ったから、なんじゃないかな。

眩くように言ったが、しかしちゃんとゲーティアには届いたように、彼は笑った。

何だ、それは。愚かであることを通り越して、最早言葉も見つからぬ。

そんな、そんな曖昧な理由で、我々を打倒したのか、貴様は。

ふ、ふふ、ふはははは——救いようのない、やつだな、と。

身体を光に解かしながら、ゲーティアは笑う。

同調するように、俺まで笑いが込み上げてくるようだった。

俺も、そう思うよ——本当に、俺は愚かなやつだ。

繰り返して、やり直して、何度も、何度もそうやって、結局大切な人をたくさん死なせて、やっと此処まで辿り着いたんだから。

仮に俺が、この輪廻から脱することができたとしても、果たして先に進んで良いのか、果たして自分の好きなように終わって良いのかも、もう分からないんだ。

俺の愚かさとか、考えの足りなさとか、力の足りなさとか、そういうものがいつぱいあったせいで、色々なものが失われたのに。

俺だけが、好きなように生きて、終わっても良いのかなって。

言ったところで意味の無いことくらい分かっていた。

それでも止めることはできずに言葉を垂れ流せば、ゲーティアは少しだけ驚いたように俺を見た後に、本当に貴様は愚かなのだな、とそ

う言った。

——そう言つて、ゆらりとその姿を、光へと還した。

——お疲れ様。

トン、とフラフラしながら俺の隣に降り立った鈴鹿から、ねぎらいの言葉が落ちてくる。

そろそろ声を出すのもしんどくて、何とか鈴鹿を見れば、鈴鹿は今すぐにも泣き出しそうで、けれども笑っていた。

慈愛と慈悲が込められているようだ、と思った。

何でそんな顔してるんだよ、頭でも撫でれば良いのか？ 何て軽い

ことを考えたが、身体を起こすことすらできなかつた。

ただひたすらに見つめ合つていれば、振り切つたように鈴鹿はもう一度笑みを浮かべて言う。

マスターは役目を果たした、だから今度は、私が果たす番、だね。

大丈夫、大丈夫、もう心配はしないで——つて言つても、ここまで隠し通してきたんだから、そりやあ気になるよね。

……うん、どっちにしろ話さないの意味不明だろうから、話さないきやだし。

なるべく手短に話すから、ちゃんと聞くこと。

言いながら、彼女は宝具を展開していた。

鈴鹿の扱う、三つの宝剣の名を明かしていく。

小通連、大通連、そして、顕明連。

一振りずつ丁寧に解放していきながら。

その身に纏う装束を変化させながら。

恐らくは、存在そのものを昇華させながら。

崩れかけていた光帯を、その手で安定させていきながら。

鈴鹿は謳うように語つた。

前提として、貴方のその、いわゆるループは元よりその身体に、魂に備わっていたものではないのでしょうか。

貴方のそれは、何者かに与えられたもの、授けられたもの……植え

付けられたものと言っても良い。

けれども、ここで大事なものは「誰に」与えられたのか、ではなく「いつ」与えられたのか、です。

これは流石に、マスターでも分かるんじゃないでしょうか。ええ、そうです、恐らく、という枕詞は付きますが、それは貴方が初めてレイシフトを行った日でしょう。

カルデアが爆破され、意図せず特異点Fに跳躍した、その瞬間であると私は考えます。

何故ならそこが、貴方が繰り返していることを知覚した、一番最初のタイミングなのですから。

つまり、レイシフトが行われた瞬間から、レイシフトが完了されるその刹那の間に、何かしらがあつたのでしょうか。

貴方がそうなつた出会いか、あるいは出来事か……流石にそこまでは、今はまだ見通せませんが。

少なからず、何かが確かにあつた——だからそれを、問答無用で覆します。

貴方にとつての始まりを、ゼロからやり直します。

より良い前提で、やり直してみせます。

貴方が変わり果てる前に、貴方を戻す。言ってしまうのならば、それだけのこと。

そしてそれこそが、大雑把ではありますが私の構築した理論——その為に、此処という時空が最も曖昧な場所と、集められた光帯……そのすべてとは言いませんが、それでも通常では到底考えられない、時空を貫けるほどの力が必要だった。

これを以て、貴方の意識のみを飛ばします——今からちょうど一年前。

カルデアの爆破が起こる、その手前の貴方自身の元へと。

通常の私では不可能ですが——まあ、ダ・ヴィンチの協力も得て、無理矢理可能に押し上げました。

八つの聖杯は、すべてこの為に。

まあ、何でしょう、つまるところこれが、貴方にとつての最終ル―

プ。

戻った先で、まずはレフ・ライノール……いいえ、魔神フラウロスを討ち倒すと良いでしょう。

2015年、そして2016年担当であったかの魔神は、人類を見定めるといふ役目も担っていた。

それ即ち、人理焼却が行われるか否かは、あの魔神にかかっていたということですよ。

レイシフト直前はまだ、人理の焼却は行われる前だった、であれば行われたのは爆破以降のことなのでしょう。

あるいは同タイミングだったか……ええ、だから貴方は、戻ると同時に魔神フラウロスを打倒するのです。

それだけで、すべては丸く収まる。

人理は焼却されず、故に人理修復の旅も行われることは無く。

マシユはその身を消されることは無く、ドクターロマニはその身を捧げることは無く、藤丸立香が死ぬことは無く、そして誰よりも、貴方自身がもう、傷つかなくても良い。

この旅はもう、行われなくて良い——いいえ、いいえ、そもそも最初から、行われるべきではなかったのです。

貴方が苦しむような、傷つくような、犠牲になるような旅など。

本来であれば、有り得て良いものでは、決して無かったですから。

そっと、陶器のように白い手が、俺の頬を撫でる。

何だかいつにも増して——いつか見た、三千大千世界を使った時よりもずっと、ずっと神秘的に見える鈴鹿は、それでも泣くように笑っていた。

——それは。それは確かに、心から想われている証左で。

彼女の持ちうる慈愛から生まれた判断で、しかし、それでも首肯するわけにはいかなかった。

いいや、本当は頷きたかった。継りついてもお願いしたいって心は、確かにあった。

でも、それでも。

今の俺じゃない——もっと、もっとちゃんと在れた頃の俺ならば、

きつとそうはしないだろうから。

こんな、失敗に失敗を重ねて擦り切れてしまった俺になる前の俺ならば、首を振るだろうと思うから。

せめてガワだけでもそう在りたいと思って、離れて行く鈴鹿の、その手首をそつと握った。

当然ながら、もう全然力は入らなかったから、それは添えるようなものでしかなかったけれど。

それでもちやんと握って、少しだけ引っ張った。

言わなければならぬことが、あると思っただから。

鈴鹿がどうしたの？ とでも言わんばかりに俺を見て、少しだけ笑う。

そんな鈴鹿を見つめながら、絞り出すように言った。

……鈴鹿の言う通り、人理修復の旅は苦しかったよ。辛かったし、逃げ出したかった。

痛いことでいっぱい、何もかもが恐ろしかった。

当然だけど、俺じゃなくても良かったんだと思う。偶々、俺と立香くんだったってだけなんだ、きつと。

——だけど、だけどき、鈴鹿。行われるべきでは無かったってのは、多分少しだけ、違うんだ。

少しだけだけど、それでも絶対に、それは違う。それだけは、断言できる。

だって、この旅が無ければ俺は、鈴鹿に出会うことも無かったんだから。

メドゥーサとも、カーミラとも出会えなかったのだから。

たくさんの人に、英霊に、何も託されることも、繋がれることも無かったのだから。

それらは俺を縛りつける重荷で、呪いでもあったけど、同時にかけがえのない宝物でもあったから。

お前らの魂にまで刻み込まれた俺達の旅は、やっぱり、酷く辛くて、吐きそうになるくらい恐ろしくて、痛いものだったけど。

同時に心を慰めてくれる、誰にだって誇れる思い出でもある……

あつたんだ。そこだけは絶対に、ブレていないはずなんだ。

これは、我がままだつてことは分かつてる。

鈴鹿が誰よりも俺のことを想つて言ってくれていることは分かっている、俺の為に色々と考えてくれたことだつて分かつてる。

でも、その上で、これまでの旅を無かつたことにはしてほしくないつて、そう思う俺が、絶対にいるはずから。

だから、ごめん、鈴鹿。

俺の言葉を聞けば聞くほど、鈴鹿の表情は歪んでいき、不意に「え」という一音だけが鈴鹿の口から零れ落ちて、見開かれた目が俺を見た。

マスター、貴方、これが二度目ではない、の？

もう何度も、何度も繰り返し返してる？

こんな、数えられないくらいに、何度もこの旅を？

——いいえ、聞くまでもない、見えた、見えてしまった、視通せてしまった。

あ、ああ、あああ、あああああああ！ ダメ、ダメ、ダメ

！

やっぱり違う、違います。マスター、貴方の言うことは、やはり違う！

絶対に、この旅は行われるべきではなかった、こんな——こんな仕打ちを、貴方が受けなければいけない道理など無かつた！

無茶苦茶よ、こんなの。

貴方が今も自我を保てていることが、奇跡同然じゃない。

全部、私に任せてください。もう、全部なかつたことにしますから。今すぐにでも、貴方を戻しますから。

人理修復の旅は、確かに貴方にとって……私にとつても！ 大切

な、かけがえのない、輝かしいものだったけれど！

それでもこんなのは、やはり無かつたことにした方が、ずっと良い。釣り合つてない……貴方ばかりが、色々なものを抱え込み過ぎてい

る！

全部背負つてもう、潰れ切つてしまつている、擦り切れてしまつて

いる。

こんなのは、酷すぎるよ。

そう言って、鈴鹿は涙を流した。

何だか鈴鹿のことは泣かせてばかりだなあ、なんて、久し振りにそう思っつて。

良いんだよ、と口にした。

というか、そうだなあ、本当は俺、もう一つ謝らなきゃいけないことがあつてさ。

……俺、もう死にたいんだ。

死にたいというか、終わりたいというか。

全部、全部もう、どうでも良くなつてしまった——というのは、少し違うか。

言葉にするのが苦手だから、要領を得ないとは思うんだけど……俺はさ、多分最初は生きる為とか、またみんなと遊ぶためとか、話すためとか、馬鹿やるためとか、そういうことの為に頑張つてて。

そうしてその果てに辿り着いて、そこそこ満足げに終わった——これで充分なんだつて、自分に言い聞かせて、終わりを受け容れようとした。

悪くはない——つて。

終われるつて感覚は確かに安堵があつたし、ちよつと安らかだつた。

……でも、でもさ、違うんだよ。

本当は大団円で終わりたかつたに決まっている。

たくさんの人に、英霊に繋がれてきたものを、あの瞬間に次に渡すなんて、名残惜しかった。

普通に生きたかつた……夢見た明日へと踏み出したかつた。

もう戦いなんてしなくて良いんだつて、心の底からの安堵を得たかつた。

幸せな終わりに行きついて、そうして緩やかに終わつていきたかつた。

でもまた始まつて、今までのすべてが無駄だつたんだと思つて、瞬

時にあの血生臭い旅が始まるのだと理解して。

突然視界が覆われたような気分だった。多分、あの時点でもう俺はダメだったんだ。

メドウーサにケツを叩かれて、鈴鹿に甘やかされて、そうやって立ち上がってはみたけれど、どうしても頑張り切れなかったのが、その証拠だ。

その状態で走り続けてみたは良いものの、今はもう、あの頃ほど明日が恋しくなくなってしまったんだ。

もし、ループから解放されたなら、俺は自分の命をその場で終わらせる。

そういう確信がある。

でも、そうするのは鈴鹿にとって不義理だつて気持ちもあつて、だから、だから……。

俺はもう、どうすれば良いのか、分からないんだ。

もう、取り返しがつかないところまで来てしまったんだ。

弱くてごめん、情けなくてごめん、でもこれが、今の俺なんだよ。声がどんどん小さくなっていく。

思っていたことすべてを吐露するのは、初めてかもしれない。

こんなに薄汚くて、弱々しくて、ダサイところは見せたくないかったのに。

そうせざるを得なかった自分が、恥ずかしい。

でも、これが今の俺のすべてだったから、嘘は吐けなかった。

——沈黙が落ちる。

鈴鹿はただ、俺の身体を抱きしめて、何も言うことは無かった。

あるいは、何も言えなかったのかもしれない。

ああ、このまま鈴鹿と二人で死ねたのなら、どれだけ良いのだろうか、心底そう思った。

鈴鹿の温もりを感じながら、眠るように逝けたのならばどれだけ幸せだろうか。

そう、素直に思えたから、俺はダメなのだとも思った。

こういうのを、八方塞がりというのだろうか。



もう何も見えない、見たくはない——何も、考えたくない。

——愚かだな、ああ、まったく本当に。このような人間に負けた自分自身に腹が立つほどの、愚か者だ。

聞き覚えのある声が、思考の暗闇を切り裂いた。

僅かな残滓を基に、短い命を得たことで人の視点を手に入れた男——人王ゲーティア。

かつて、俺と立香くんの前に立ちはだかった、魔神王の成れの果て。星々の輝きの如く煌めく金の髪を靡かせ、右肩から先を失い、傷口から流れ出る黒の煙をそのままに、彼は俺達の元へと歩み寄ってきた。

鈴鹿は鋭く刀を抜いたが、不思議と、俺は警戒心を抱くことは無かった。

それほどまでに、ゲーティアからは敵意を感じられなかった。

魔神王であった時と唯一変わらない、紅の瞳をじろりと俺に向けて、彼は言う。

……そうか、貴様、この私ですら、見るのは初めてではないのか。既に私は、少なくとも一度以上は敗北していたという訳だ——

ふん、まったくもって、面白くないな。

我が怨敵、我が運命。そこまでして私の偉業の邪魔をするか……等とは、今は言うまい。

ああ、そうだ——以前の私であれば口にはしないだろうが、しかし、敢えて言おう。

我が運命、正真正銘、カルデア最後にして、最も愚かなマスターよ。私は——貴様の積み上げてきた偉業に対し、敬意を表する。

例え敵対していたのだとしても、数百、数千という回数を繰り返してきた貴様には、憐憫と敬意を。

そうしてそれを以て、この一度限り、口だけは出してやろう。

そう言ったゲーティアの表情からは、しかし何も読み取ることはできなかつた。

というか、敬意と、そう言ったのか？ 今。

ゲーティアが、俺に？

嘘だろ、と言う思いが先行したが、しかしゲーティアは意に介することなく鈴鹿の方を見た。

時空を超える、というのは悪くないアイデアだ——だが、一歩足りんな。

それではこの愚か者は何も変わらない——否、戻らぬのだろう。

これはもう、ある意味では私と同じ、成れの果てなのだから。

元より光帯を用いた『逆行運河／創世光年』は、ゼロに戻って何もかもをやり直す……即ち、因果を覆す偉業である。

その仕組みを、丸ごと使えば良い——理論上は破綻していないはずだ。

何せその男からすれば、ここより先は未来であり、また過去でもあるのだから。

円を描いているようで、しかしそれは直線とも認識できる、ここはそういう場所でもある。

まあ、貴様に星の命を縮める覚悟があるのならば、だがな。

ここまで言えば、鈴鹿御前……いいや、瀬織津せおりつひのかみ姫神、貴様であれば理解するだろう。

——ふん、途中まで私が組み上げていた計算式だ、どうとでも使うが良い。

そう言つて、ゲーティアは鈴鹿の手のひらへと何かを落してから、用は済んだとばかりにもう一度俺を見た。

ここでもう、何を言つても無意味ではあるのだろうか、と前置いて。

私は貴様が嫌いだ、当然だとも。我々の偉業を悉く台無しにしてくれたのだから、憎悪すらある。

だが、それと同時に、多大なる感謝も。

私はいまこの瞬間に生まれ、そしていま滅びる……それがどこか、心地よくすらあるのだから。

我が運命、愚かなる人の子よ。

さらばだ。

ふわりと、風に解けるようにゲーティアはその身を光の粉へと還した。

いきなり現れて、いきなり消える。

本当に何だったのだろうか、とすら思うのと同時に、鈴鹿が俺の手を取った。

不思議にも柔らかく微笑みながら、鈴鹿は俺を見る。

——腹立たしいけれど、あの獣の言う通りなのでしょう。

確かに、そうすれば覆すことは可能——ねえ、マスター。

ごめんなさい、私、貴方のこと全然分かってなかった、でも、それでも。

私、やっぱり貴方を助けます。それはもう、完膚なきまでに。

貴方がそんな思いをせずに済むように、貴方が望んだ明日を手にするように。

だから、少しだけ待っていてください。

直ぐに行きますから。

笑ったままそう言った鈴鹿に、何を言っているんだと、問うことはできなかった。

言葉にする直前で、鈴鹿は俺の手を離し、少しだけ距離を取った。

その頭には金の立烏帽子。身に纏うは天女の如し赤の衣。

その背に背負うはこれまで得てきた八つの聖杯と、どこから、いつから持っていたのか複数の聖晶石。

その全てが、光り輝いていた。

否、それだけでなく、途方もない程の魔力を発していて、まともに動くことすらできず、声が出ない……呼吸すら、意識しなければ難しい。

見るだけでも精一杯の俺に、鈴鹿は一度だけ目を合わせてくれた。

見慣れた黄金の瞳の奥に、見たことの無い幾何学模様があつて。

鈴鹿は小さく、けれども確かに一言、呟いた。

『逆行運河／創世光年』

——と。

光とも、闇とも言えない空間を鈴鹿御前はただ通過している。

その速度は速いのかと言われれば何よりも速く、しかし遅いのかと言われればどこまでも遅いのだろう。

要するに測定不可能、という訳だ——何故なら鈴鹿御前は今、時空を跳躍しているのだから。

”逆行運河／創世光年”とは、魔神王ゲーティアが考案した最大級の過去改竄、因果の操作——まあ、一言で言うのなら、星を作り直すための方策である。

この地球と言う星が誕生する瞬間まで時空跳躍を行い、その場で自らの肉体を基に、人理を焼却したことで束ねたその莫大な魔力を以て『死』という概念の無い星と成す。

否、正確には時空跳躍は付随される過程であり、『死』という概念の無い星が作り上げられたという結果のもとに生まれるものなのだが。ただ言えるのは、言葉にすることすら馬鹿げている大偉業、ということだけだ。

それを成就するまであと一歩、いいや、あと半歩まで近づいたゲーティアの構築した理論に間違いはなく。

発動者がゲーティア自身でなくともそれは、何の問題も無く機能していた。

とはいえ、それはゲーティアが当初想定した運用とは限りなく同じであったが、しかし決定的に違う部分があったのだが。

ゲーティアが目指したのは四十六億年前の星が生まれる瞬間であり、鈴鹿御前が目指したのはある意味では数秒前であり、ある意味では数百、数千年前だった。

要するに鈴鹿御前が目指した場所タイミングは、一度目の人理修復の旅が終

わる、その瞬間。

無かったことされたはずの、始まりの一回目。

そこに辿り着くと同時に鈴鹿御前によって、マスターたる青年のすべては、あらゆる意味で元に正されるように戻るだろう。

その為に、自らのマスターが死に絶えるその数瞬前へと高らかに跳躍を行っていた。

時間が経てば経つほど——正確に言えばこの瞬間、時間などは流れていないのだが——鈴鹿御前の霊基は砕け落ちていく。

聖晶石の特性——あまたの未来を確定させる概念そのものを、時空跳躍の際の道を舗装するものとして扱います。

本来であれば魔力リソースとしてしか運用していなかった、八つの聖杯をほんの少しでも願望器として機能させ己を高めます。

三千大千世界という宝具——正しく言えば『権能』を完全に使いこなすことで、既に英霊の枠から逸脱し神へと成った状態を維持していた彼女でさえ、これは無茶な行いであった。

というところ、そもそも時空跳躍が多大な負荷を与えるものと感じられるかもしれないが、それは少し違う。

ゲーティアが飛んだのなら、負荷は無いに等しかっただろう。だが、英霊たる彼女がそうする場合は無理が先んじることによって過ぎない。

それに加え、三千大千世界という権能は、権能であるがゆえに英霊が長時間使うことは許されていない。

もし長時間の使用が行われればその瞬間、英霊としての資格は剥奪される。

それはつまり、過去、現在、未来において彼女が英霊として召喚される可能性が消えるということに他ならない。

だが、鈴鹿御前はそれでも構わない、悔いはない、未練はない。無事辿り着くことさえ出来るのであれば、それだけで良い。

そこまで身体が、霊基が保てば、マスターを救えるのだから。何の問題もない。

ドンドンと綻んでゆく自分自身を感じながら、鈴鹿御前は静かに目

を閉じる。

穴が空いていく己自身のことを脇に置き、思い返すのはこれまでの旅路。

一度目の旅と、二度目の旅——そこで話し合った、触れ合った、共にあった己がマスターのことを想う。

それだけで、鈴鹿御前が頑張る理由としては充分だった。

何故なら彼女は、鈴鹿御前はそもそも、素敵な出会いを求めて召喚に応じたのだから。

未だに見ることの無い恋を少女らしく夢に見て。

未だ出会うことの無い相手のことを想いながら、呼びかけに応じ——そして出逢ったのだ。

それは正しく鈴鹿御前にとって運命に他ならなかった。

焦がれるほどに憧れ、夢に見た、理想通り——とはいかなかったけれど、それでも鈴鹿御前にとっては何にも代えがたい、素敵な恋だった。

それを守るためならば、それを貫き通すためならば、どんな問題も些事である——そうでしょう？

だってこれは私の、私だけの大切な恋心。

もう会えなくなってしまうけれど、それでも。

何よりも大事な気持ちだから。

だから、だからどうか、速く、迅く、疾く！ あの人のもとへ！

願いは光、想いは力。

夢は彼女の心を守り、恋は彼女の在り方を守る。

そうして、果てしない一瞬が過ぎた頃——鈴鹿御前は不意に宙へと投げ出された。

纏っていた衣はズタズタで、立烏帽子ももうどこかにいつている。

身体だって思うように動かないし、知覚だって恐ろしい程に鈍っている——しかし、それでも鈴鹿御前は辿り着いた。

崩壊してゆく時間神殿ソロモン、その中空に投げ出され緩やかに落下していく青年を、鈴鹿御前は見つけると同時に飛び出した。

——ああ、悪くないな。

そう思った、良かったと言い切れないのが、やっぱり少しだけ未練があるように思えて笑えたけれども、うん、それでも悪くなかった。

……そう、思うことにした。

立香くんが手を伸ばそうとしているのが見えて——

「マスタああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

絶叫と共に、見知った英霊——鈴鹿御前が凄まじい勢いで飛び込んできた。

……は？ 飛び込んできた!?

何で!?! ていうかお前、さつき退去したはずじゃ——。

意味不明過ぎて思わず言葉を一気に並べ立て始めれば、ボフィン!

と中々の重みを持った衝撃と共に鈴鹿に抱きしめられた。

抱きしめられると同時に、何かがガチリと変わったような気がして

一瞬、眩暈がしたが直ぐに意識を取り戻す。

ただでさえ緩やかに落ちていたのに、鈴鹿の勢いが伝わって物凄い勢いで落下することになっていった。

本当に何なんだと声を漏らす前に、鈴鹿が耳元で囁くように言った。

会えた、会えた、良かった、生きてる、生きてるよう。

言葉を重ねるごとに声が涙に滲んで震えていく。そんな鈴鹿の背中を幾度か優しく叩いた。

いや、まあもう終わりなんだけどな——と、言ってる途中で言葉を遮られる。

否、遮られるというか、思わず押し黙ってしまったというか。

両目からボロボロと涙を零して俺を見る鈴鹿はいつになく迫力が

あつて、それに圧されていれば彼女は言った。  
違うでしょう、と。

悪くない、なんかで終わって良い訳がないじゃん。  
変なところで諦めが良いから、最後の最後で後悔する。

マスターはもつと幸せになって、いっぱい楽しいことを味わって、  
そうやって物語を紡いだ最後に終わらなきゃならないんだから。

だって人理を、世界を救ったんだもの——そのくらい求めたって、  
罰なんて当たらないし、私が与えさせない。

だから、帰るよ、マスター。

まずはカルデアに、そしてその後は貴方が救った、貴方の世界に、  
ね。

そんなことを言つて、鈴鹿はグツと、落ちていく神殿の破片を踏み  
しめ跳躍した。

トントントン、と軽やかに。

俺が抱いた諦めとか、ちよつとした満足とか、安らぎとかを全部振  
り落とすかのように鈴鹿は上へと駆けあがる。

先ほどまで立香くんがいた場所に、辿り着くまでは一瞬だった。

もう身体にちつとも力の入らない俺を支えながら鈴鹿は、時空断層  
の手に舞い降りる。

この先を潜れば、多分立香くんと同様にレイシフトが行われるのだ  
ろう。

何だか、夢を見ているような気分だった。

どうにも現実とは思えなくて、ふわふわと浮ついている。

何もかもが急すぎて、頭が追いついて来ない。

ただひたすらに疑問が溢れてきて、ひとつずつ口にしようとするれば  
そつと、人差し指を当てられた。

鈴鹿が笑う。今まで幾度か見てきた、屈託のない、清々しいほどの  
満面の笑みを浮かべて言う。

言つたでしょう、あの時。

貴方の願いの為に、私の全てを貴方に尽くしましょう——と。

……それに、それにね、マスター。



私はマスターのことが好きだから。

この程度は当たり前じゃん？　なんて、そう言っ

鈴鹿は俺の額に唇を落としてから、俺の身体を時空断層の方にそつと押しした。

抵抗しようにも身体に力が入ることは無く、ただ落ちるみたいにして飲み込まれていく。

思わず手を伸ばしたけれど、それが鈴鹿に届くことは無く。

手を取る代わりとでも言うように、鈴鹿は儂げな笑みを浮かべた。

「さようなら。私のこと、忘れないでね」

最後にそう言った、鈴鹿の声が寂し気に耳朶を打って。

俺の身体は、意識は、問答無用で光に解けた。

時空断層は音を立てて砕け、また彼女が立っていた神殿の欠片も同様に崩れ落ち、鈴鹿御前は宙へと放り出された。

これまで気合で保っていた全身が解けるように消えていく。

消えてしまえば、鈴鹿御前は二度と召喚されることは無い。

それを理解した上で、鈴鹿御前は、しかしこれ以上ないほどに満ち足りていた。

満ち足りるのと同時に、己の浅ましさも感じて、それでもどうしても笑みを浮かべてしまう。

美しい思い出として、酷く辛かった思い出として、いつだって思い出してほしい。

もう二度と会えないことを知って、その上で一生覚えていて欲しい。

——ああ、なんて私はズルい女なのでしょう。

でも、それでも私は、それで良いのです。

ああ、私が恋した、たった一人のマスター。

どうか、どうか貴方の生涯における”唯一”に、なれますように。

小さく、そう零すのと同時に、鈴鹿御前は完全に光へと還った。

——気が付いたら人気の無い上、燃え盛る街に一人佇んでいた……  
なんてことは無く。

気が付くのと同時にコフィンから排出された。

受け身も取れずに「ぐえっ」と声を漏らしながらその場に倒れ——  
そうになって受け止められる。

「やあ、お疲れ様」

「あ、ダ・ヴィンチちゃん……ただいま、で良いのかな」

「ああ、おかえり。よく頑張ったね、これにてミツシヨンコンプリート。グラントオーダーは、君たちの尽力によって、全工程を終了した。

立香くとマシユは空を見に行ったよ。何せ今日は素晴らしいくらい  
の晴天だ——とは言え、君の場合はそのザマだ、残念ながら、直  
ぐには行かせられないけどね」

「あんまり実感ないな……あ、でもマシユ、助かったんだ、良かった。  
ま、そういうことなら俺だって別に、邪魔になるだろうから行かない  
よ」

「ふっ、君ならそう言うだろうと思った。なあに、応急処置が済んだら  
連れて行ってあげるさ」

そう言つてウインクしたダ・ヴィンチちゃんは俺を担いだまま医務  
室のベッドへと俺を叩きこんだ。

普通に扱いが乱雑すぎる……というか、わざわざダ・ヴィンチちゃん  
がここまでしてくれなくても良いのに。

……だって、ドクターがもういないのだ。所長代理がダ・ヴィンチ  
ちゃんになったであろうことくらい、言われなくても分かる。

まあそれはそれとして有難いのだが。

キャスターである彼女の魔術は当然だが一級で、身体も幾分か楽に  
なってきた。

ポフン、と柔らかな音を伴って、ダ・ヴィンチちゃんが俺の横たわ  
るベッドへと腰かける。

「さて、君のことだから察しはついていようけれど、一応の報告は

させてもらおう。

我々が協力してもらっていたサーヴァントは全て退去してもらった……ここまでは良い。

退去してもらっただけで、霊基パターンは記録済みだからね、必要があればいつでもまた呼び出せる。

問題は、その内の一騎——君が契約してたサーヴァント、鈴鹿御前についてだ。

彼女のパターンのみが、保管されずに完全に消失したことが確認された——それはつまり、もう二度と召喚出来ない、ということに他ならない。

我々の知っている鈴鹿御前、という括りでは無く、鈴鹿御前という英霊そのものをもう呼び出すことはできない、と言う意味だ、分かるかい？」

「——うん、まあ、分かるよ。分かる……今、ちゃんと分かった。ごめん、ダ・ヴィンチちゃん。ちよつとだけで良いから、一人にさせて欲しい」

ダ・ヴィンチちゃんは無言で頷いて、医務室を出た。

その背中を見ながら、俺は鈴鹿のことを思い出していて、ああ、やっぱりそういうことなんだ、と思った。

だって鈴鹿が「さようなら」とか「忘れないでね」とか言うなんて、おかしいと思ったんだ。

理由は分からない、だって教えてくれなかったのだから。でも、それでも分かる。

まったく、何なんだあいつは。

俺を助けて消えたと思ったらまた現れて、そうしてまた助けてくれた後に、こうやって消えていく。

本当ならば、文句の一つや二つ零したいところで、けれども、あんな笑みを見せられたのでは言える訳も無かった。

ため息が、知らず知らずのうちに溢れ出てきた。

俺は一生鈴鹿のあの、最後の笑みを忘れられないのだろう。

そうして鈴鹿は、それだけで充分だと、そう思ったのだ。

自身の存在と引き換えに、俺みたいなやつを命を選んだのだ。

……好きだったのは、お前だけじゃなかったんだけどな。

さっさと言葉にしておけば良かったのかも……いいや、それはやっぱり無理だな。

何だか視界が滲んできて、熱いものが頬を伝っていく。

こういう時は、何て言えば良いのだろうか。

少しだけ悩んでから、口にした。

「ありがとう、さようなら」

かくして、無限ルーパーの旅は終わりを告げた。

たった一つの恋が、終わりを告げた。

青年はもう繰り返すことは無いだろう。

後悔は取り戻せないし、失ったものを拾い直すこともできない。

けれどもそれで良い——それが良いのである。

それこそが青年が望み、一人の女が見た夢なのだから。

青年は、そんな女がいたことを胸の裡にしまい、求めていた明日へと踏み出して、紡いでいくのだろう。

死と断絶の物語ではなく、青年なりの、愛と希望の物語と云うやつを。

## A f t e r   S t o r y @ たった一夜の恩返し

それは変わり映えの無い、雪の降る日の朝のことであった。いつも通りの朝、いつも通りの日常——何よりも望まれて、しかし失われたはずだった明日。

たくさんの人の尽力があつて、たくさんの人の願いがあつて、たくさんの人の想いがあつて、ようやく掴み取った平和な日常。

もう戦う必要はない、もう死に戻ることも無い。

そう言った意味でも、取り戻した平和とでも呼ぶべき日常に、俺は多分誰よりも全力で浸っていた。

どれくらいかって言えば仕掛けていたアラームを全部無視して、たつた今起きたところである、と言えば伝わるだろうか。

端末が示す時刻は12:30、ちょうどお昼時である。

もしメドゥーサがいたら滅茶苦茶鋭い眼光をぶつけられてるような時間帯だ——まあ、メドゥーサはもういないんだけど。

というか、メドゥーサに限らずサーヴァントがもう、ダ・ヴィンチちゃんしかいない……というところ少し語弊があるか。

一応、マシユはまだデミ・サーヴァントである。

飽くまで俺と立香くんが召喚し、協力してもらっていたサーヴァントたちが退去したという形だ。

否、退去してもらわざるを得なかった、と言うべきなのだろうか。

と言うのも、本来であればサーヴァントを召喚するのも、レイシフトを行うのも、カルデアの更にも上の機関からの許可が必要だったものらしいからである。

人理修復をしていた間はカルデアしかいなかった為、自由にやれていたが、人理を救った今はもうそんなに自由にはいられないという訳だ。

まあ、当然と言えば当然だよな。

だってサーヴァント、一人でも滅茶苦茶強いもん……。

宝具なんて放ってみれば——ものにも寄るが——町のひとつやふたつ、あっという間に壊滅させることができる。だから、別にそこに

は疑問も無いし、反感も無かった。

それはレイシフトも同じだ。

厳密には全然違うが、それでもレイシフトというのはタイムトラベルみたいなものである。

やろうと思えば悪用し放題だろう。

俺は絶対にごめんだが……あまり何度も経験したいことでもないし。

必要に駆られてやっていたに過ぎないのだ、俺は——なんて言えば、如何にも義務的なものだったように見えて、あまり好ましくないけれど。

それでも、そういうことだ。出来るのならば、あまり使用したくない。

あれは凄いい、「これから戦場に向かうんだ」という気持ちに否が応でもさせられるから。

ふるふると、頭を振ってそういう思考を振り落とし、再度端末へと目を戻した。

いや別に、ネットが戻ったからと言って現代っ子よろしく寝起きからスマホいじり倒すような子に戻ったとか、そういう訳じゃ無い。

単純に、俺はこれに起こされたのである——もちろん、前述の通りアラームは無視したので、原因は別だ。

まあ、隠すほどのものでもない、普通のメッセージである……いや、普通と言って良いのかはちよつと分からないんだけど。

何せ通知欄が壊れるくらいの量が溜まっているし、しかも全部同一人物から送られてきているのである。

ダ・ヴィンチちゃん、ここまでするならもういつそ起こしに来いよ……。

やれやれ、と思いつながら『今起きた、ご飯食べてから向かいます』と送ってから端末を放り投げる。

何はともあれ、まずは着替えなければならない。

一年と少ししか着用して無いにも関わらず、やたらとくたびれてしまい、着心地の悪さが目立つようになってしまったカルデアの制服へ

と袖を通していく。

正直言つてあんまり着たくない感じではあるのだが、残念ながら他の服は洗濯中だったり、もつとボロボロでメドゥーサさんに「捨てておいてください」と言われていた服しかない。

参ったものである。というか、仮にも礼装なのだから新しいの一着くれても良くない？ 等と思いつながらベルトを締めた。

——あと何回、これを着ることになるのだろうか。

ふと、そんなことを思った。

近い内に着なくなることは、ほとんど確定しているも同然だから、なおさら。

まあ、元通りの日常に戻れるのかは怪しいところなのだが。何せ、俺だけならまだしも立香くんだつて色々と知ってしまった。

それはカルデアの機密とか、そういうことではなく。単純にこういう世界があるということ。

……ま、そんなこと、今は考えても仕方がないことか。

どうせまだ先のことである——何か査察が入る予定があるのかも聞いたし。

それまではまだここにお世話になることだろう……それにしたつて、せめて家族とくらい連絡させてほしいものだけど。

仕方ない、ともう一度割り切つて端末を拾い上げると、

『ダメだ！ 今すぐ、集合！』

そんな一文が表示されていて、思わずため息を吐いた。

そんなこんなでダ・ヴィンチちゃんの工房にやってきた訳なのだが、入ると同時に服を押し付けられた。

否、服ではなく、礼装と言うべきだろうか。

これまでレイシフト時に着ていたカルデアの制服や、戦闘服と同じ類の礼装。

見た目は——パーティドレス、とでも言えば良いのだろうか。もちろん男性用だ。

女性用のを着用するとか、似合わないを通り越して最早見るに耐えないからな、俺の場合——マシユから聞いた話だが、意外と立香くんは似合うらしい。まあ彼は結構中性的な顔立ちしてるよな。

一度くらいは見てみたいものだ、なんて思いながら礼装を眺めていれば、「君ねえ……」とダ・ヴィンチが眉を顰めた。

「そんな嫌そうな顔するなよ。この天才の私が、君の為にわざわざ編み上げたんだぜ？」

「いや、そんな嫌そうな顔したつもりは無かったんだけどな……何て言うか、今更渡されてもなってると思って」

ぶつちやけもう必要ないだろうに。

何と言ったつてもう、人理修復の旅は完遂されたのだから。

レイシフトはそもそもその為の用途であり、それが為された今、戦うようなことがまずない。

いやまあ、今でもシミュレーションは使わせてもらっているから、正確には礼装は着てるんだけど。

だからと言って、新しいのが必要だと言うほどのことでもない。

続けているのだから別に、高尚な理由があるという訳でもなく、単純に習慣になってしまっているというだけの話だ。

どうにも身体を動かさないと落ち着かないのである。

「それにこれ、あからさまに戦闘用じゃないだろ……魔術が仕込んであるのは分かるけど、こんなの着て戦場に出るやつ、英霊くらいだよ」「良いじゃないか、ちよつとくらいお洒落は必要だよ？ それにね、君のそれ、もうボロボロで見られてられないし。それはこちらで回収するから、着替えていきたまえ」

「ええ……？ これを？ 今？」

「そう、それを、今」

嫌だなあ、という顔を全力でしてみたが、ダ・ヴィンチちゃんの笑みが全く崩れなかったので早々に諦める。

こうなった時のダ・ヴィンチちゃんは超頑なだからな……。

何を言っても聞き入れてもらえない。

ただの生徒でしかない俺は従うしかないという訳だ。



最後の抵抗とばかりに盛大にため息を吐いてから、いそいそと着替え始める——ダ・ヴィンチちゃんの目の前だが知ったことか。

というか、別にこれが初めてという訳でもない。

ダ・ヴィンチちゃんは万能の天才であるが故に、思い付きで結構はいはいと色んなものを作る悪癖——いや、これを悪癖と言って良いのかは分からないが、まあそういう趣味を持っている。

人理修復の旅の間も、彼女が編んだ礼装に着替え、性能をテスト……なんてことも良くやったものだ。

「ん、こんなもんか——ええ？　これ、似合ってる？」

「うーん……思いのほかビシツとは決まらなかったけど、うん、まあ及第点つてところじゃない？　君にしては似合っている方だよ」

「俺、ダ・ヴィンチちゃんからの感想、それしか聞いたこと無いんだけど……」

まあ良いんだけど、と独り言ちてからふと思う。

あれ？　もしかして俺、今日一日これを着て生活しなきゃならないのか？

流星に浮くとか言うレベルの話じゃ無いんだけど……と思ったがまあ、今更なのかもしれない。

シミュレーターに籠つてた時期、今の俺から見ても相当狂人なんだよな。

我がことながらかなり切羽詰まっていたという訳だ。

こうやって上手くいってなかったらどうなっていたことやら、ということを考えると今でも足が震えそうになる。

……本当に、たくさんの感謝をしなきゃいけないな。

そんなことを思えば盛大に腹の虫が鳴り響いた。

この場で腹を空かすようなやつは当然、俺しかいない。

「……という訳だから、そろそろ食堂行っても良い？」

「ふっ、ふふ……凄いい音鳴ったね」

「誰のせいだよ、誰の」

いやまあ、ほとんど自己責任なんだけど。なにせダ・ヴィンチちゃんからのメッセージは09:00くらいには来ていた。

そこから連続で昼に至るまでメッセージが来まくっていたという訳だ。頑張り過ぎだろ。

「他にも頼もうと思っていたことがあったけれど——それなら仕方ない、ということにしてあげよう。」

うん、食堂に行っておいで。また時間が出来たらこつちから呼び出すから。

あ、それと、汚さないようにするんだぞ、絶対だからな」

「子ども扱いするなよな——そう言えば、ダ・ヴィンチちゃんつてもうご飯食べたの？」

「もちろん、君みたいなのと一緒にしないでくれたまえ。そら、行った行った。またお腹が鳴っちゃうぞ」

「揶揄うなよ……ま、それじゃ」

バイバイと、手を振りながらダ・ヴィンチちゃんの工房を出る。

ここから食堂までは大体十分程度だ。

時刻は若干お昼時を過ぎたが、まあ大丈夫だろう。

食堂は大体常にかいてるし、とそう思いながら歩き始めた。

「あれ？ 先輩も今からお昼ですか？」

ウキウキで肉うどんの前で「いただきます」と手を合わせていたら後方から声がかかる。

ふい、と振り返ってみればそこには立香くんだった。

その手にあるのは大盛りのカレー。なるほどな。

「珍しい、立香くんもなんだ」

「ええ、ちよつと寝坊しちゃいました。へへっ、お揃いですね、向かい良いですか？」

「ん、もちろん。どうぞ」

では失礼して、なんて言いながら立香君が真向いに来る。

こうして一緒にご飯を食べるのは久しぶりかもしれない、と思った。

俺はかなり不規則な生活をしているが、立香君はその真逆だからだ。

規則的で、健康的。実に理想的なライフスタイルである。

「それ、新型の礼装ですか？」

「正解、ダ・ヴィンチちゃんに押し付けられた」

「あはは……まあ先輩は新型礼装の試験用要員みたいなどころありませんからね」

「全然否定できないのが困ったところだな……」

ニコニコとしたままカレーを食べ始めた立香くんは、当然ながらカルデアの制服姿である。

ピカピカの新品——ってほどでもないけれど、それでも俺のと比べれば綺麗なほうじゃないだろうか。

とはいえ、それは立香くんが訓練をあまりしていないとか、そういう訳では無い。

単純に俺の物持ちが悪いというのと、立香くんは基本的に戦闘にはカルデアの制服を着用しないから、というのが主な理由になる。

礼装は見た目もそうだが、当然種類ごとに使える魔術も変わる。その辺の兼ね合いだ。

「先輩っていつもこんな時間にお昼食べてるんですか？」

「うーん、まあね。最近は全然早く起きれなくて」

「ふうん……あんまり不規則な生活しているとマシユに怒られちゃいますよ」

「それは君だけだろう……それこそ、今日とかいい顔されなかったんじゃない？」

「はは……その通りです。いや、でもですね、ちよつと事情があつたんですよ！」

聞いてくれますか!?　と言わんばかりに輝いた目を向けられて、思わず目を逸らした。

いやだって……なんか面倒ごことな予感がして……。

だがまあ、仕方があるまい。流石にここで「嫌です」と言い放つほど俺も性格は悪くないつもりである。

黙って頷き促せば、水を得た魚のように立香くんは話し始めた。

「先輩は『ロストルーム』って知ってますか？　”失われたシミュレーションルーム”、あるいは”封鎖されたシミュレーションルーム”って噂されてるんですけど」

「ん、知らないな。初耳だ」

「というか、未だにカルデアは二十数人しかいないのに、噂とか出るものなんだ……。」

「いや、あるいは、カルデアが爆破される前から噂されていたものが、今表出してきたのか？」

「まあ、そうだとしても知らないんだけど。Aチームとの交流だった、そのほとんどが学習だったり訓練だった。」

「オカルトにおいても、サイエンスにおいても超一流しかないカルデアで、噂とかいうあやふやなものが出てくるのが自体が何だかミスマツチな気もするけれど……まあ、良いか。」

「あつて悪いというものでもない。その逆もまた然りではあるが。」

「それが何処にあるかは分からないんですけど、カルデア内にあるらしくて、そこでは”失われたものを見る”ことがある”らしいんですけど」

「”失われたもの”……？　何だそれ、曖昧だなあ」

「そこはまあ、噂なので」

「少しだけ笑って言った立香くんに、そういうものか、と笑う。」

「こういうのって、どこか曖昧で、遊び心があるから惹かれるものだしな。」

「で、それを夜更かししてまで探してたってこと？」

「はい、そういうことです。まあ、結局見つからなかったんですけどね」

「ええ……？」

「最初に教えてくれたムニエルさん——カルデアスタッフの一人——と一緒に探したんですけど、ムニエルさんも詳しくは知らなかったみたいで、と立香くんは浅く笑った。」

「スタッフすら知らないってどういうことなんだよ、とは思ったが所」

詮は噂だ、そういうことだっただけであるだろう。

最初に口にしたのは誰だったのかは、もう誰にも分からない。けれども必ずどこかには残っていて、語り継がれる。

噂というのは、いつだってそういうものだ。

それに、そうでなかったとしても今のカルデアは使っていない部屋が多い。

爆破の影響でダメになった部屋もあるし、節電対策で多くの部屋も封鎖した。

そう考えれば、”失われたシミュレーションルーム”というのも、意外とそういう意味なのかもしれないな、と思った。

まあ今ではその必要もなくなって、一応すべての部屋は開放されているのだが。

とは言え、夜通し探して無かったと立香くんが言うのだから、実際どこにも無いのだろうけれど。

幾らカルデア広しと言っても、回り切れないということはない。一、二時間もあれば充分すぎるくらいだろう。

噂は噂、ということだ……ちよつとだけ、気になりはするけれど。

人理修復の旅は、失ったものが少し多すぎた——カルデア内の人員に限らず、各特異点での協力者も含めて。

だから、そういうことが起こったら良いな、と思った人の気持ちは分からないでもない。

「言い出した人は若干、趣味悪い気もするけどな……」

「あはは……まあそこはそれ、ということだ。ここだと暇潰しも少ないですからね」

「あー……そうだな」

当然だが、カルデア内部の情報はどれだけ些細なことでも外部に漏らすのは禁止されている。

もし破れば怒られる、で済む話ではない。

という訳で個人のスマホとかも使用が滅茶苦茶制限されていた。

気軽にSNSとか出来ないという訳だ。もちろん、俺と立香くんは問答無用で連れてこられたようなものだから、他に暇潰し用のツール

何かは持つてきていない。

要するにクソ暇だった。

今はもう、魔術や戦闘の訓練なんかもする必要はない——どころか、なるべく控えて欲しいとまで言われているほどだし、かつては話し相手になってくれていたサーヴァントたちももう、いないのである。

かといってスタッフさん達に構ってもらわうわけにもいかない。

今、彼らはこの一年の旅の報告書をせかせかと作っていて大忙しなのである。近い内にお偉いさんが査察に来るだとか何とか。

まあ、元より特異点の搜索や、俺達のナビゲートなど、裏方ですつと忙しかったのだから、忙しいというのは今に始まった話でもないのだが。

「ま、文句言っても仕方ないことだしなあ。迷惑かけない範囲で遊びたいところ——ああ、屋上で雪合戦でもする?」

「雪合戦、ですか?」

「うん、今日はちようど吹雪いてないし。マシユでも呼んで……まあ、三人は若干寂しいけど、少しくらいは楽しめるでしょ」

「良いですね、ついでに雪だるまとか作りませんか!? おれ、あんまり雪遊びとかしたことはないんですよ」

「そうと決まれば早速!」と言わんばかりに立香くんは残っていたカレーを一気にかきこんでいく。

「良くそんなに勢いよく食べれるもんだな……と半ば感心しながら、俺もうどんを平らげた。」

ちなみにこの後マシユを呼んだら、どこからか話を聞きつけてやってきたスタッフさん達のせいで大ごとになるのであった。

大の大人が本気でやる雪合戦はかなり白熱したが、結局乱入してきたダヴィンチちゃんの独壇場で閉幕した。

今もやたらでかくて、あちこちに工夫の加えられた高クオリティ雪だるまが、カルデアの屋上には聳え立っている。

そんな大騒ぎをした、その夜のことである。

随分と久し振りに、大人数であんな風に遊んだような気がする、と思いつながらベッドに倒れ込めば、軽やかな通知音が耳朶を叩いた。

時刻的には既に0時前、と言ったところだ。見るのは明日で良いだろう、と思つて目を閉じたが、不意に今朝（正確にはお昼）にダ・ヴィンチちゃんに

『また時間が出来たら、連絡するから！』

と言われたことを思い出す。

英霊というのは基本的に睡眠を必要としない。

それは当然ダ・ヴィンチちゃん自身にもあてはまることで、こうして深夜に連絡してくることも珍しいことではなかった。

流星に緊急の連絡であれば直接通話をかけてくるだろうから、もし気付いたら反応してくれ、程度の内容だろう。

だがまあ、気付いちやったしな……。

ここは素直に見ておくか、と思つて端末を手に取り、そして眉を顰めた。

『今夜、月の舞踏会にお越しく下さい。』

表示されていたメッセージは、そんな一文だった。しかも差出人は不明——そう、不明なのである。

正確に言えば、ユーザー名のところには『Unknown』と書かれている訳だ。

何もかも情報がなくて普通に困ってしまった。

ええ……マジで何なんだよ、これ。

取り敢えず、誰かの悪戯の線は無いと断定しても良いだろう。こんな下らないことをしている暇は誰にだってないはずである。

まあ、立香さんとマシユはそうでもないかもしれないが……。

それでも、あの二人はこんなことをする人間ではない。

かといって、カルデア外部からのメッセージという可能性はもつと無いだろう。

カルデアスタッフと、ダ・ヴィンチちゃんお手製のセキュリティで

ある。この世にこれを突破できる人間は早々いないはずだ。

と、ここまで思考を回したところで判明したことは、本気でこのメッセージが何なのか分からない、ということだけであった。

どうせ起きてるだろうし、ダ・ヴィンチちゃんに相談でもしに行くかな、と思えばもう一件追加でメッセージがやってきた。

否、メッセージというか、画像だろうか。

良く見ればカルデア内のマップであり、その内の一ブロック——つまり一部屋だけ赤く塗りつぶされていた。

これは「ここに来い」ということなのだろうか。

……普通に嫌だな。

いやだって、あからさまに怪しいだろう、これ……と、思ったところで何となく立香くんとのお話を思い出した。

「ロストルーム、ね……」

むくり、と好奇心が起き上がる音がした。

という訳でマップに従って部屋から出ることにした。

何が「という訳」なのかさっぱり分からないとは思いますが、しかしそれは、言葉では説明するのが難しいということをお分かってもらいたい。

決して好奇心に負けたとかではないのである。

なのでこうして若干のワクワクを押し殺しながら廊下を歩いていくのも、別にそれはと全く関係ないのである。そういうことにしておく。

とは言え、俺だって別に無警戒でこんなことをしている訳ではない。

流石に礼装だつて着こんでいるし、いつだってダ・ヴィンチちゃんに連絡できるようにはしていた。

何かしらの罫である、という可能性を捨てきれない以上は当たり前なの備えである。

その上で気が緩んでいる、と言われたら反論のしようはないのであ



るが……。

まあ、特に何も無いだろう、という半ば確信じみたものがあつたのも否定はできなかった。

前述のように、カルデアのセキュリティというのは万全を期している。

ゲートイアがいた頃ならまだしも、人理修復が終わった今はそこまです警戒する必要が無いと思っっているのもまた事実だ。

というか、出来れば警戒なんてしたくないんだけどな。

戦いとか、殺し合いとか、なるべく避けたい訳だし。

そんなことを思いながら辿り着いたのは、いつも使っているシミュレーションルームとは随分と離れた部屋だった。

だから当然、俺のマイルームからもそれなりの距離がある。

何かあつた時、誰かの助けが来るのはどれだけ早くても五分は必要だな、なんてことを思いながら扉へと近づく。

扉は、特に抵抗も無く、障害もなく、緩やかに開いた。

当然ながら電気の一つもついていないそこは、パツと見それなりの広さを誇っているように見えた。

シミュレーションルームの、半分くらいだろうか。

光源は窓から零れてくる月光くらいのそこは、しかし誰の気配も無いように思えた。

……やっぱり誰かの悪戯だったか？ そう思いながら一歩踏み込めば、それに合わせたように室内のライトが連続して点いた。

「なっ——」

同時に、景色が切り替わる——まるで息を吹き返すように、シミュレーションが起動する。

無機質的な、ただ広いだけの何もない部屋が、まるで舞踏会のホールのように彩られていく。

同時に、聞き慣れない音楽まで流れ始めた。

な、なに？ と、素直にそんな疑問を得たのはほんの一瞬のことだった。

刹那の後に、俺の思考はある一点にかつさらわれたのだから。

部屋の中央に、誰かが立っている——多分、女性。

金に近い、橙色の長髪に、見慣れない白のドレス。

髪色よりはずつと澄んでいる黄金の瞳が、静かに俺を見ていた。

まるで誘うように、あるいは、待ちかねていたように。

心臓が、静かに跳ね上がる。

何だか視界が歪み始めて、それを無理矢理戻す。

乱れ始めた呼吸を努めて抑え、深呼吸した。

いや……本当に、お前はさ。

突然現れては消えて、そしてまた、現れるの、やめろよな……。

まあ、正直なところ、期待していなかったと言えば嘘になるんだけど。

ただそれはそれとして、あまりにも衝撃的だったというのもまた本当だ。

これが、奇跡だろうが、幻だろうが、もうそんなものはどうでも良い。

ただ、彼女がそこにいるという事実だけが、すべてだった。

ゆつくりと、彼女に向かって歩み寄る。

多分、今この場に合うセリフはきつとこれなんだろう、と思って。

作法なんて知らないから、見様見真似だけど、なんて内心言い訳をしながら、彼女の前でお辞儀をして、右手を差し出した。

「俺と一曲、踊っていただけますか？」

「ふふ、一曲だけで良いの？」

「お前な……はあ、時間の許す限り、俺と一緒にいてくれますか？」

「ええ、もちろん！ 踊り明かしましょう——私のマスター」

彼女の白磁のような肌色の手がそつと俺の手に乗せられる。

そうして、俺と彼女は不格好な、それでも奇跡のような時間は始まった。

まるで夢のような、幻のような、それでいてどこまでも幸せな、ほんの一時の幸せが。

——それは、在りし日のカルデアで起きた、一夜の夢のような奇跡の時間。

眠っていた時間は、僅かな猶予を得て、煌びやかに踊り出す。

失われたものに、失われるものを。

彼方にいるものに、輝かしいものを。

どうか、この夜が終わるまでに——彼は、彼女は。

あの日伝えきれなかった想いを、二人だけの間で、言葉にするのでしよう。